THE KAIZO

改造

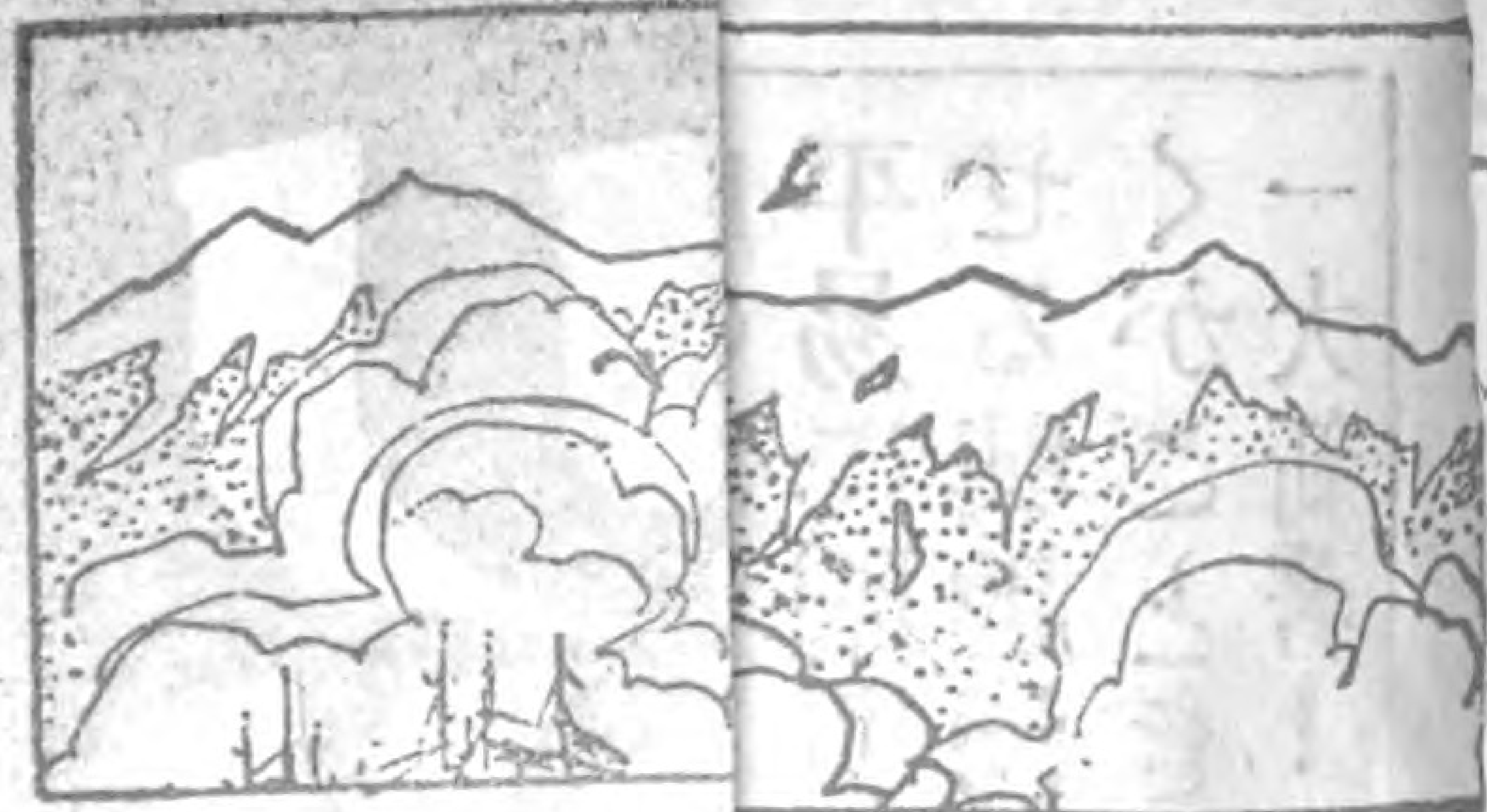
四月特大号

1922


S.S.S
サンエス萬年筆
東京―大阪―福岡
細沼株式會社
名古屋―金澤―札幌



改造 四月特大號目次



豫告

……呈することが出來るのを喜んでいる。

因に日本に於けるリッケルト氏の飜譯權全部は本社が獲得したから玆に御斷りしておく。

京……丁
芝區愛宕下町
……目壹番地

改造社

電話……
芝八四三番
三五〇番
六八三……

理學士 石井重美氏著

宇宙、生物及人類創成

挿畫 原色版、二度刷、別刷寫眞版十葉
附圖五葉、寫眞凸版七拾餘圖

定價貳圓六拾錢
送料拾貳錢

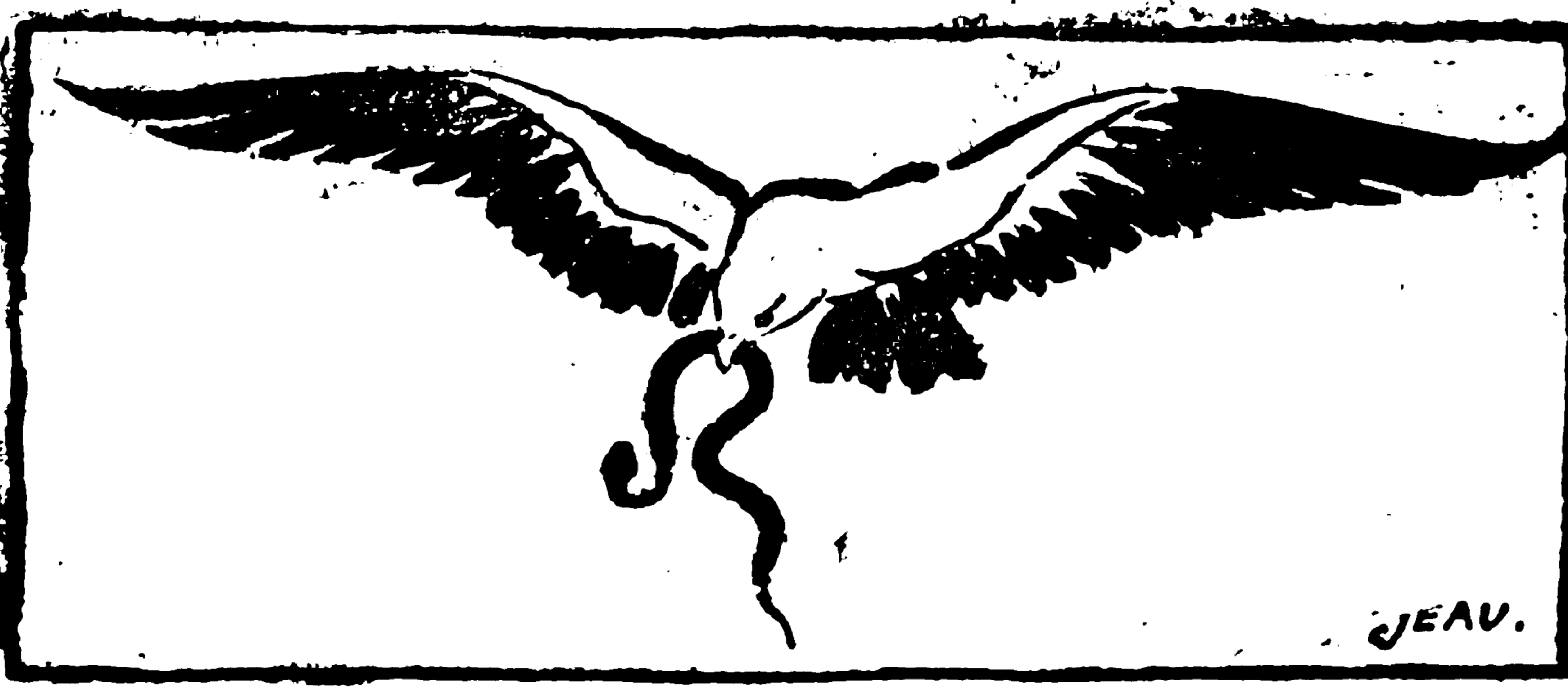
現代科學最新の學說を以て宇宙生物及人類創成の神秘を平易に闡明せる興趣湧くがごとき一大新著！

人類は如何にして生じたるか。生物は何處より其の生を得たるか。虚空茫漠たる大宇宙は如何にして創成せられたるか？

此等の疑問は古來人々が最も知らんとし、しかも永遠不可解の謎語として、神話や、宗教の蔭に一縷慰安の光を認めるに過ぎなかつた。然るに近代科學の進歩は、天文地文、生物學等の異常なる發達となり、此等の神秘は今や漸く其の眞相を明かにせんとしてゐる。本書は著者が、其の專攻の生物學の見地より、廣く近代の名著を涉獵し最近諸學說の眞髓を捉へて、此等の大問題に對して犀利なる科學的解剖を試みたもので、全卷を「宇宙」「地球及生物」「人類」の三篇に分ち、二十六章百八十餘項目に亙り、無數珍奇なる挿圖を附して、嘗て知られざる新事實、嘗て紹介せられざる新學說を、流麗なる文章と、平易なる字句を以て說けるものである。本書の如く難解な科學的知識を述ぶるに趣味溢るゝが如く、恰も物語を讀むが如き盡きざる興味を喚起するものは眞に學界絕無である。實に本書は近代科學の精粹であると共に、永遠を思ひ、無窮を偲ばせる一大哲學書であつて、本書を讀んで、その人生觀に動搖を起さゞる人果してありやを疑ふ。讀書界稀有の名著として、敢て聲を大にして、之を江湖に推薦する。

裝幀 恩地孝四郎氏。好評嘖々拾五版

東京市神田區
中猿樂町十五
アルス
電話九段二一六九番
振替東京二四八八番



＝((改造四月號))＝

權力行使の基調

我々國民は現下の權力行使が適法なりや、又は國民の信頼に背かざるものなりやを當局に質し、國民と共に熱心に、又冷靜に、議せんと欲するものである。

彼の普選日の警官の狀態を見よ、群衆は幾百となく拉致せられながらも、警官の檢擧せられし者あるを聞かない、而も警官の橫暴に對する輿論は囂々たるものあるを檢事總長は知らないか、警官も群衆も均しく我國民であり、國家として甲乙しがたき親愛の同胞ではないか、一を檢擧して一を等閑視するは人道上、許し難き大問題である、若しかゝる片手落をなさば誰とて司法權が政治に壓迫されたりと嘆かぬものがあらう。

檢事總長に尙ぶべきは、その事務的才幹にあらず、探偵的手腕にもあらず、實に人格高邁にして、國民の信頼の絕體に近きものたるを要す。上院に籍を有し、政友會臭味ありとの鈴木君が、よく國民の信望と期待を繼ぐことを得るか、我々は仲小路一派の如き皮相なる形式論と、或る策略を藏して論議するものでは斷じてない。

彼の過激運動取締法案の如き、眞實に國家の前途を愛へたる經綸ある政治家の立案であるか、此法案のあるが爲め、却つて過激社會運動が一層深刻化して行くことは萬人の均しく豫測する所だ、此の如き唯だ當面を糊塗するのみにて百年の大計を考慮せざる案は、それあるが爲め國家を危殆に頻せしむるものであることは識者を俟つまでもない、

國家の權力は坦々たる正道を步め。堂々として人類愛の基調に立て。國民をして眞に依賴すべきものたるを思はしめよ、權力と暴力との差異を瞭然たらしめよ、苛酷なる立法は眞に國家の意思にあらざるべく又永遠に權力に對して國民の信頼を繫ぐ所以ではあるまい。

我等は當局の措置が適當であるかを國民に愬へる。泣いて此事を愬へる。



ゲェテのファウストと理想主義

——雑誌「改造」のために——

ハインリッヒ・リッケルト

詩と哲學

學術研究の方法に關する彼の講演の中で、シェリングは、ゲエテのファウストを以つて、獨逸人の有する最も固有の作詩と稱び、且つ、その藝術、哲學に於いては、苟くも何れか一つの詩歌が哲學的と呼ばれ得るならば、此の資格こそは、たゞ獨りゲエテのファウストにのみ冠せらるべきものであると、彼は想へた。此の偉大なる浪曼思想家、今日も尙ほ多

樣に、殊にベルグソンの述作に、その思想の活き存へてゐる此の偉大なる浪漫思想家が、この事を書き記した其の時には、彼は、ゲエテの此の制作に就いては、たゞわづかに、比較的僅少なるその一部分、即ち一七九〇年に公けにされた其の「斷片」を、識つてゐたゞけである。されば、彼こそは實に、吾がこの世界的詩作の卓越せる意義を看取した第一人者であつた。然かも、吾々は、今日尙ほ、彼が此の詩に賦へた此の刻印のこゝろをば、吾々自らのものとしてゐるであらうか？　ファウストが、獨逸人の有する最も固有の作詩であると云ふ事は、確かに正當である。けれど若し、このファウストが、同時に、哲學的といふ賓辭に値するものであるならば、さらば、此の詩はまた、獨逸人に固有なる哲學に、屬するものと考へられる。そして斯る哲學とは、即ち、カントの、並に、彼の偉大なる後繼者達の、事業に現存するが如き、理想主義でなければならない。その故に、玆に、問題は起る。抑も、ゲエテのファウストは、かの獨逸思潮――夙に動き初めては、一とたび純粹理性批判に於いて其の高頂を見出し、更に、十九世紀の初年代に及ぶまで、未だ嘗て見られざりし豐饒なる哲學體系の賑ひとなつて、自らを展開したる、あの獨逸の思想運動に、如何に關係するか？　けれども、斯る問題は、一般的に、提出さるべきであるか？　カントが、乃至フイヒテが、將たヘーゲルが哲學者であつたと言ふ意味に於いて、ゲエテはまた一個の哲學者であつたのか？　確かにさうではない。然らば、シェリングは、ファウストを、一の哲學的作詩と呼ぶ事に於いて、正當であり得るのか？　此の言ひ方は、實際に、愼重に使用されなければならない。ゲエテは、藝術作品の中で哲學を訓へやうとは――若くは、彼の偉大なる友シルレルが『藝術家たち』や『理想と生命』の中で仕た樣に、哲學的思想を藝術作品の中に表現しようとは、一度も考へはしなかつた。嘗ては、たしかに、人々は多樣に考へもした、ファウストの詩は一の寓意である、だから吾々は、其の本來の意味を抑解するがためには、その靜觀的な樣態の背後に、抽象的の概念を求めなければな

ゲェテのファウストと理想主義



――雜誌「改造」のために――

ハインリッヒ・リッケルト

詩と哲學

學術研究の方法に關する彼の講演の中で、シェリングは、ゲエテのファウストを以つて、獨逸人の有する最も固有の作詩と稱び、且つ、その藝術、哲學に於いては、苟くも何れか一つの詩歌が哲學的と呼ばれ得るならば、此の賓詞こそは、たゞ獨りゲエテのファウストにのみ冠せらるべきものであると、彼は想へた。此の偉大なる浪曼思想家、今日も尚ほ多

様に、殊にベルグソンの述作に、その思想の活き存へてゐる此の偉大なる浪曼思想家が、この事を書き記した其の時には、彼は、ゲエテの此の制作に就いては、たゞわづかに、比較的僅少なるその一部分、即ち一七九〇年に公けにされた其の「斷片」を、識つてゐたゞけである。されば、彼こそは實に、吾がこの世界的詩作の卓越せる意義を看取した第一人者であつた。然かも、吾々は、今日尙ほ、彼が此の詩に賦へた此の刻印のこゝろをば、吾々自らのものとしてゐるであらうか？　フアウストが、獨逸人の有する最も固有の作詩であると云ふ事は、確かに正當である。けれど若し、このフアウストが、同時に、哲學的といふ賓辭に値するものであるならば、さらば、此の詩はまた、獨逸人に固有なる哲學に、屬するものと考へられる。そして斯る哲學とは、即ち、カントの、並に、彼の偉大なる後繼者達の、事業に現存するが如き、理想主義でなければならない。その故に、茲に、問題は起る。抑も、ゲエテのフアウストは、かの獨逸思潮——夙に動き初めては、一とたび純粹理性批判に於いて其の高頂を見出し、更に、十九世紀の初年代に及ぶまで、未だ嘗て見られざりし豐饒なる哲學體系の賑ひとなつて、自らを展開したる、あの獨逸の思想運動に、如何に關係するか？けれども、斯る問題は、一般的に、提出さるべきであるか？　カントが、乃至フイヒテが、將たヘーゲルが哲學者であつたと言ふ意味に於いて、ゲエテはまた一個の哲學者であつたのか？　確かにさうではない。然らば、シエリングは、フアウストを、一の哲學的作詩と呼ぶ事に於いて、正當であり得るのか？　此の言ひ方は、實際に、愼重に使用されなければならない。ゲエテは、藝術作品の中で哲學を訓へやうとは——若くは、彼の偉大なる友シルレルが『藝術家たち』や『理想と生命』の中で仕た樣に、哲學的思想を藝術作品の中に表現しようとは、一度も考へはしなかつた。嘗ては、たしかに、人々は多樣に考へもした、フアウストの詩は一の寓意である、だから吾々は、其の本來の意味を把解するがためには、その詩觀的な樣態の背後に、抽象的の概念を索めなければ

や、人々は漸く、かゝる想へからは愈々離れて來た。さうして、其の代りに、吾々は、古いゲエテの言葉——そこに彼が『これ程までに豐沃な、色彩りこまやかな、か程こよなく多樣なる生命を、全體を貫く唯一つの貧しい理念(イデー)の痩弱な細絲に、差し聯ねてしまはうとする』すべての試みに對して、自らを禦らうとするあの言葉を、喚び起すことが出來るのである。ファウストそのものに關して、ゲエテ自ら、明らかに、『詩人として、何か抽象的のものに態(からだ)を賦へることに努めるといふ風なのは、全體に於いて、私の遣り方ではなかつた』とさへも謂つてゐる。

それにも拘らず、シエリングの言葉は、正當に理解されるならば、極めて善い意味を保持してゐる。蓋し、哲學は、たゞあながちに、抽象的概念のものではなく、學的に成つてはゐない一つの世界觀でもこれを表現してゐるが如き制作をば、吾々はまた「哲學的」と呼ぶ。茲に「世界觀」とは、吾人の世界の全體に關して、また殊に、此の全體に於ける人間生命の位置に關して、吾人の構成したる確信の總體を意味してゐる。吾々の存在の意義を勘へると言ふ意味での哲學は、大概の偉大なる詩想が、是れを包有してゐる。されば、茲に直ちに闡明したい問題は、——凡そ詩人の學的ならざる世界觀が、學的なる哲學諸體系の與に保たれてゐる思想と、如何なる關係に立つてゐるかと云ふことである。

この事はまた、ゲエテのファウストに對しては、次の樣に謂ひ現はすことが出來るであらう。即ち、ファウストは、決して、寓意的(アレゴリッシュ)の意義を有つてはゐないけれども、併し乍ら確かに象徴的(シムボリッシュ)の意義を有つてゐると謂はう。換言するならば、ファウストは、其の靜觀的なる態樣の背後に本來の核髓として祕められてゐる抽象的の思想に、肉體を賦へてゐるものではなくて、寧ろ、其の素材の靜觀的敍述を超えてこの藝術を通して溢れ出づる一つの意味が、此の作品の藝術的形成に、直ちに結合してゐるのである。吾々は、茲に、斯樣に、寓意と象徴とを相互に分別し、且つ、哲學的なるものを、象徴的なるものゝ上に制限するが、此の事はまた、ゲエテ自身の見解に背馳するものではないと、確信して宜いで

あらう。一七九七年六月、シルレルはゲエテに、――ファウストは、如何に詩的個性に滿ちてゐるとはいへ、象徴的意味への要求を、全く拒み切ることは出來ない――と、書いた。そして、ゲエテは、明らかに、これに同意してゐる。シルレルは曰つた。「このファウストへの向求は、同時に、哲學的であり、且つ詩的である。そしてあなたは欲むがまゝに向ふがいゝ。かくて、あなたは、對象の本性は、哲學的の取扱ひ方を强ひるであらう、そして、構想力は、理性理念への奉仕に應合せなければならないだらう」と。ゲエテは直ちにこれに答へて謂つた「此の作品に關する見解に於いては、吾々はたしかに相違しないであらう」。そして彼は附言した「自分は、樂みと愛を以つて、此の象徴の世界――理念（イデー）の世界――そして霧の世界への歸行を準備しておいた」と。

否、よしや若しゲエテが、同意しなかつたとしても、吾々は、シルレルと共に、言ふべきであつた――對象の本性が、此の詩人に、哲學的の處置を命じたと。そして、この故にこそ、茲ファウストの詩想には、一つの世界觀が秘められてゐなければならないと。ファウストは、神と惡魔との中間に立つ人間として、描かれてゐる。此の劇の舞臺は宇宙である。其處に、善が惡と闘はなければならない宇宙である。ファウストの胸には、二つの魂が住むでゐる。その一つが、地上の世界に執着するときに、他の一つは、總ての地上なるものを超越せんとあせる。抑もファウストは、低き力に屬するか、將た、高き力の者か？ これが、此の劇の中心の問題である。抑も「高き」力とは何であるか、「低き」力とは何か？ 凡そ、一人の詩人が、此の種の素材を取扱ふに當つては、必ずや、――世界に對する人間の位置に關して、また殊に、宇宙との聯關に於ける人間生命の意義如何に關して、如何に彼が想へてゐるかと言ふ事を、識らしめずしては、不可能である。かくて、ゲエテは、此のファウストを取つて悲劇の對象と仕た事に由つて、彼の世しなければならなかつた。然かも、此の制作は、獨逸人の有する

やゝ人々は漸く、かゝる想ひからは愈々離れて來た。さうして、其の代りに、吾々は、彼が、『これ程までに豐沃な、色彩りこまやかな、か程こよなく多樣なる生命を、全體を貫く唯一つの貧しい理念(イデー)の痩せな細絲に、差し聯ねてしまはうとする』すべての試みに對して、自らを禦らうとするあの言葉を、喚び起すことが出來るのである。ファウストそのものに關して、ゲエテ自ら、明らかに、『詩人として、何か抽象的のものに體(からだ)を賦へることに努めるといふ風なのは、全體に於いて、私の遣り方ではなかつた』とさへも謂つてゐる。

それにも拘らず、シエリングの言葉は、正當に理解されるならば、極めて善い意味を保持してゐる。蓋し、哲學は、たゞあながちに、抽象的概念のものではなく、學的に成つてはゐない一つの世界觀でもこれを表現してゐるが如き制作をば、吾々はまた、「哲學的」と呼ぶ。茲に「世界觀」とは、吾人の世界の全體に關して、また殊に、此の全體に於ける人間生命の位置に關して、吾人の構成したる確信の總體を意味してゐる。吾々の存在の意義を勘へると言ふ意味での哲學は、大概の偉大なる詩想が、是れを包有してゐる。されば、茲に直ちに闡明したい問題は、——凡そ詩人の學的ならざる世界觀が、學的なる哲學諸體系の奥に保たれてゐる思想と、如何なる關係に立つてゐるかと云ふことである。

この事はまた、ゲエテのファウストに對しては、次の樣に謂ひ現はすことが出來るであらう。即ち、ファウストは、決して、寓意的(アレゴリッシュ)の意義を有つてはゐないけれども、併し乍ら確かに象徴的(シムボリッシュ)の意義を有つてゐると謂はう。換言するならば、ファウストは、其の靜觀的なる態樣の背後に本來の核髓として祕められてゐる抽象的の思想に、肉體を賦へてゐるものではなくて、寧ろ、其の素材の靜觀的叙述を超えてこの藝術を通して溢れ出づる一つの意味が、此の作品の藝術的形成に、直ちに結合してゐるのである。吾々は、茲に、斯樣に、寓意と象徴とを相互に分別し、且つ、哲學的なるものを、象徴的なるものゝ上に制限するが、此の事はまた、ゲエテ自身の見解に背馳するものではないと、確信して宜いで

あらう。一七九七年六月、シルレルはゲエテに、──ファウストは、如何に詩的個性に滿ちてゐるとはいへ、象徴的意味への要求を、全く拒み切ることは出來ない──と、書いた。そして、ゲエテは、顯らかに、これに同意してゐる。シルレルは曰つた。「このファウストへの向求は、同時に、哲學的であり、且つ詩的である。そしてあなたは欲むがまゝに向ふがいゝ。かくて、あなたには、對象の本性は、哲學的の取扱ひ方を強ひるであらう、そして、構想力は、理性理念への奉仕に應合しなければならないだらう」と。ゲエテは直ちにこれに答へて曰つた、「此の作品に關する見解に於いては、吾々はたしかに相違しないであらう」。そして彼は附言した、「自分は、樂みと愛を以つて、此の象徴の世界──理念(イデー)の世界──そして霧の世界への歸行を準備しておいた」と。

否、よしや若しゲエテが、同意しなかつたとしても、吾々は、シルレルと共に、言ふべきであつた──對象の本性が、此の詩人に、哲學的の處置を命じたと。そして、この故にこそ、玆ファウストの詩想には、一つの世界觀が祕められてゐなければならないと。ファウストは、神と惡魔との中間に立つ人間として、描かれてゐる。此の劇の舞臺は宇宙である。其處に、善が惡と鬪はなければならない宇宙である。ファウストの胸には、二つの靈が住むでゐる。その一つが、地上の世界に執着するときに、他の一つは、總ての地上なるものを超越せんとあせる。抑もファウストは、低き力に屬するか、將た、高き力の者か？ これが、此の劇の中心の問題である。抑も「高き」力とは何であるか、「低き」力とは何か？ 凡そ、一人の詩人が、此の種の素材を取扱ふに當つては、必ずや、──世界に對する人間の位置に關して、また殊に、宇宙との聯關に於ける人間生命の意義如何に關して、如何に彼が想(かんが)へてゐるかと言ふ事を、識らしめずしては、不可能である。かくて、ゲエテは、此のファウストを取つて悲劇の對象と仕た事に由つて、彼の世界觀を表明しなければならなかつた。然かも、此の制作は、獨逸人の有する最も固有の作詩

然的に、次の問題が起らなければならない。――こゝに其の確證の展べられてある此の世界觀は、獨逸人に固有なる學、即ちカントと並に彼の後繼者たちの理想主義に對して、如何に關聯するか。

併し乍ら、吾々が、此の問題を、斯樣に一般的に提出する限り、其の解決は容易ではない。ゲエテの世界觀が、その全野を以つて、如何に獨逸理想主義全體に、對立するか、其の關係を闡明する事が必要であらう。されば茲に、吾々は、一つの非常に錯綜せる問題に當面するものと言はねばならない。もとより、たゞ一つの事が――即ち、ゲエテの世界觀は、獨逸理想主義の世界觀を以つて、簡單に蔽ひ盡くされてはゐないと言ふ事だけが、確かである。それどころか、特に、カントとゲエテとを以つて、まさしく對蹠せる二人の人と想へた事にさへも理由がある。けれど、他面に於いて、斯樣な形式の考へ方も、決して、此處に謂はるべき總てを盡くしはしない。殊に、吾々が、ゲエテの世界觀のかの一面――ファウストの詩が吾々に示してゐる其の一面を、考へるならば、そこには、カントの理想主義の特質的思想との、廣汎なる共通性の存してゐる事をも看過する事は許されないのである。此の共通性を闡明する事が、實に、以下の論述の目的である。けれど、それは、顯かに、ゲエテの豐多なる確信の一部分に限られてゐる、且つ、獨逸哲學の一部分へのその關係に限られる。さう仕なければ、獨逸理想主義に對するゲエテのファウストの意義如何と言ふ此の問題に、苟くも一般に、筆を染める事が出來ないからである。吾々は、茲に、學的に洗練完成された二つの體系（システム）を、相互に比較するわけにはいかない。寧ろ、一つの詩想（ディヒツング）の象徴的內實と、極めて多樣にして豐富なる學的思想との、具關關係の考究を通して、この詩の象徴內實を考察しなければならないのである。此の目的のためには、吾々は、此の詩の意味と、並びに、獨逸哲學の意味とを、等しく、簡約しておかなければならない。そして、此の兩者に多くの差別あるにも拘らず、猶ほ兩者に共通なる一の根本傾向を、浮き上らせて置かなければならない。それは、吾々の論述が、その對象を、

遺漏なく論じ盡すと言ふ事が、要點ではない。ファウストの詩と、獨逸理想主義とが、共通に有つて居る本質的面目が、兩者の中で、本質的の役目を勤めてゐると言ふ事だけが、重要なのである。

行の哲學

玆に、獨逸哲學の特性として想へられる思潮傾向を明らかにせんがために、吾々は、先づ、其の最も偉大なる代表者をとつて、カントが、特に、彼以前の歐洲の思想家たちと、區別せらるゝ所以を、尋ねてみよう。然らばそこには、殊に、世界觀にとつての、即ち人間生命の全的意義にとつての、一つの刻印――彼以前の如何なる哲學者も、これ程力强く顯然と、是を刻み付けた者の嘗て無かつたところの、一つの特標が現はれてゐる。即ち、實踐的若くは倫理的契機の優越。

哲學は、學であることを欲する、換言するならば、世界を理論的に考察しやうと欲する。それ故に、哲學者は、――世界と人間生命との純粹認識に導く可きものに、突入せんがためには――學的ならざる生命の力が、彼の思惟に及ぼす影響のすべてを、――例へば、彼の激情、彼の政事的理想、彼の宗教的信念の影響を――能ふかぎり、除去する事を求めなければならない。彼は、哲學的に思考するに際しては、理論省思的態度に、重點を置かなければならない。そして、すべての實踐的活動性を――彼の行爲的本性が、彼を驅つて、其處に逐ひ遣るが如き、すべての世間的動因への干渉を――抑制しなければならない。彼は、實際的活動家の與黨に、超越しなければならない。さう仕なければ、彼は、決して學的客觀性に、到達しないからである。彼にとつて、決定的であるべきものは、意志動機ではなくて、否、唯だ、論理的に現はれて來る原理―動機のみでなければならない。此の事は、學的世界觀

必然的に、固く結びついてゐる。されば、たゞ、斯る傾向が基準を成してゐる場合に於いてのみ、吾々は、學的哲學を語るであらう。

併し乍ら、哲學的思考に於いては、理論的ならざる力の總てから眼を離さなければならないと言ふ此の態度は、往々にして、學的に必然且つ正當である範圍を超えて、遙かに出過ぎてゐる場合が、稀ではない。かゝる思想家にとつては、省思的考察の理想が、直ちに、人間生命一般の理想となり、從つて、夫れが、たゞに、その哲學者の勞作の方法態度を規定するのみでなく、更に、同時に、彼が表現した世界觀の內容までも規定する事になる。此の思想家は、世界を、唯だ理論的にのみ考察す可きであると言ふところから、彼は、世界に對する此の態度こそは、總ての他の生命――殊に、意欲し行爲する人々の生命よりも、價値及び品格に於いて、優るものであると想へる。それどころか、遂には、彼は、宇宙そのものを以つて、理論理性が、本來本質的なる原理として、自ら具現した所のものであるとさへも考へる樣になる。玆に至つては、人間本性の他の側面、即ち、倫理的意欲乃至宗教的信仰に基づいてゐる反合理的側面は、事實として承認はされるけれど、併し乍ら其の固有の價値に於いて評價されてはゐない。尠くとも、斯る側面をば、理論理性を通して、一つの學說の下に包攝し、かくて、總ての實踐的なるものを、能ふ限り、考察的態度に近づける事が、必要であると考へられる。叡智性は、たゞに、學の王國に於いて、司配者たるに止まらず、更にまた、人間的存在一般、否宇宙そのものに於いても、また、本來の司配者でなければならないのである。例へば、アリストテレスとスピノザの如き、非常に異つてゐる思想家に於いても、此の傾向が現れてゐる。そして、吾々は、一つの標語を以つて、彼等を命名することが出來る。即ち、理論理性優越の學說。――

歐洲哲學の經過の途上に於いては、斯る學說は、確かに、論爭せられざるがまゝに、遺されてはゐない。恒に新た

に、吾々は、殊に知性と並んで意志に、其の權能を賦與せんとする試みに逢着する。否更らに、哲學的思考の內部に於いてすらも、理論的考察の獨裁權は、樣々に論議せられ、世界觀の問題に於ける決裁をも、また、意志に委ねんとする傾向が現れて來た。かくて、此の事は、遂には、純粹學としての哲學の止揚(アウフヘーブン)——廢弛に導いた。そして、其の代りに現れたものは、最早や一般に理論的根基を問題としない政事的、藝術的、乃至宗教的確信であつた。此の事は、理論的素質の人々の反對を喚起せざるを得なかつた。斯くて、此の互に相戰ふ兩傾向の調停は、不可能なるものとなつた。偖て、世界觀理論に對するカントの特質的意義は、尠くとも唯だ、彼が、理論理性の優越と原理的に離絕し、然かも斯くした事に依つて、如何樣にも、嚴密なる學としての哲學の性格を、聊かも侵すことがなかつたと言ふ點だけに存するものではない。若しも哲學者が、自分の立つてゐる確固たる地盤を失うまいとするならば、彼は、哲學的に思考するに際しては、唯だ理論的根據にのみ、倚らなければいけないと言ふ事は、彼れカントのもとより知悉する所であつた。併し乍ら、然ればとて、生命の全的意味に對して、此の理論的態度が、他の總ての活動樣式の上位に置かれなければならないとか、或は更に、宇宙さへもが、論理的思考の單なる具現と考へられなければならないとか、かう言ふ必要はないと言ふ事をも、彼れカントは、等しく判明に理解してゐたのである。それのみではない。彼の想到した所に由れば、反對に、人間の並に宇宙の最も深い本質は、論理的態度に執する知性に於いて求めらる可きではなくて、寧ろ自由活動的なる自律的意志に於いて、求めらる可きであると言ふ所以を、反つて理論的叡智そのものが、吾々に、敎へるのである。換言するならば、カントは、理論的哲學者として、省思の上位に活動を置いたのである。考察する人の上位に行爲する人を置いたのである。是を以つて、彼は、實踐理性優越の哲學の、意識的理論的代表者となつたのである。

カントの全哲學は、周知の如く、思惟最後の基礎、即ち認識能力の理論と、最も緊密に

學、若くは所謂「コペルニクス的の立場」は、また、認識と行爲の關係についても、新しい解釋を導くものでなければならない。何故ならば、此の立場は、活動性の原理をば、理論的認識そのものゝ中で、擧示してゐるからである。認識主觀は、決して、單に受動的なる世界の鏡ではない。反對に――カントの謂ふが如くんば――悟性は、自ら、對象たる自然に、其の合法則性を命ずるのである。即ち、悟性は、單に自分に與へられたるに過ぎない所の素材をば、已れ自身の形式(譯者附範疇)に循らして、正に斯くする事に由つて、求められたる客觀性に到達するのである。蓋し、悟性の形式は、すべての認識に、無條件的に妥當するからである。吾々は、此の難しい理論の詳細を、玆にこれ以上追及する必要はない。唯だ、若し此の理論が正しいならば、此の哲學者の理論的態度は、決して、單なる受動的諦觀の態度と見做さる可きではないと言ふ事――寧ろ反對に、その純粋理論的省思の中にさへも、猶ほ、實踐的なる活動性の契機が祕められて居ると言ふ事、夫れだけが問題なのである。此の事は既に、全世界觀にとつて――即ち、宇宙に於ける人間の位置の解釋にとつて、且つ、全體の人間生命の意味にとつて、――甚だ意義あるものでなければならない。是を以つて、此の活動性の原理は第一位を占めんとする

カントの哲學が、獨逸理想主義の其の後の展開に及ぼした第一の偉大なる作用も、また確かに、此の方向に於いてゞあつた。殊にフイヒテは、カントの學説を琢磨して、これを、一つの廣汎なる行(タート)の哲學に大成した。世界の終局の根據をば、彼は、死せる事實(タートザッヘ)に見出さずして、否、活ける「始原的行爲(タートヘンドルング)」に、是を見出した。そして、此處から、彼は同時に、人間の本分を確立した。蓋し、人間の本分を、受動的諦觀に、求むるが如きは、彼の思ひも及ばざる所であつた。否寧ろ、活動的であると言ふこと、玆にこそ眞の人間が在る。そして、哲學の唯一の課題は、窮極原理の認識を通して、吾人は何を爲す可きかと言ふ事を、指示する事である。かくて、學者は、人類の教師となり、かくて、彼の思惟

は、優れて實踐的なる意義を獲得する。茲に到つて、フイヒテは、その行の哲學を、社會文化の諸問題に、結び付けた事に由つて、彼の哲學――行の哲學の、一層の完成を遂げた。文化の不斷の向上と、――並に、人類の資質及び要求の總てが、是れに相應じたる繼續的展開を遂ぐるところと、茲に彼は、人類の本分を見た。かくて、理論的なる人と、行爲する人との間に存する對立に、完全なる橋梁は架せられたのである。此の哲學者は、彼の此の理論を開陳して、自ら活動的に展開しつゝある文化人類の用に奉じ、そして、斯くした事に由つて、同時に、彼れ自らは、自由なる行爲を通して絶えず向上しつゝある全體者の、能動的なる一員となつた。

獨逸理想主義の哲學の中で、吾々の關係する限りに於いて、考察に現れて來る根本特質を、明らかにするが爲めには、以上の略述で足りるであらう。今や、次の疑問が答へられなければならない。――獨逸理想主義に現れて來る實踐理性優越の哲學説を顧慮しつゝ、ファウストの詩の世界觀を睇るならば、抑も、此詩の世界觀は、如何に現れてゐるか？

活動的なる人の悲劇

斯く設問するに際しては、吾々は、唯だ一つの理念の細い絲に、豐富なるファウストの全生命を、差し聯ねやうと想へるのではない。寧ろ全く唯だ、此の生命の根本傾向に就いて、語らうとするだけである。さうして、茲に何が問題であるかと言ふ事を、明瞭に言ひ表はしてゐる樣な、ゲエテ自身の表現を、引き出す事にすれば、夫れだけ愈々一層の確かさを以て、吾々は、此の事を果し得るであらう。一八三一年の夏、即ち、此の詩人が、彼の最大の作品に、最後の

を加へた頃、彼はエッケルマンに、ファウストの不滅の靈を天上に送る天使等の

學、若くは所謂「コペルニクス的の立場」は、また、認識と行爲の關係についても、新しい解釋を導くものでなければならない。何故ならば、此の立場は、活動性の原理をば、理論的認識そのものゝ中で、提示してゐるからである。認識主觀は、決して、單に受動的なる世界の鏡ではない。反對に——カントの謂ふが如くんば——悟性は、自ら、對象たる自然に、其の合法則性を命ずるのである。即ち、悟性は、單に自分に與へられたるに過ぎない所の素材をば、己れ自身の形式(譯者附範疇)に照らして、正に斯くする事に由つて、求められたる客觀性に到達するのである。蓋し、悟性の形式は、すべての認識に、無條件的に妥當するからである。吾々は、此の難しい理論の詳細を、茲にこれ以上追及する必要はない。唯だ、若し此の理論が正しいならば、此の哲學者の理論的態度は、決して、單なる受動的諦觀の態度と見做さる可きではないと言ふ事——寧ろ反對に、その純粹理論的省思の中にさへも、猶ほ、實踐的なる活動性の契機が祕められて居ると言ふ事、夫れだけが問題なのである。此の事は既に、全世界觀にとつて——即ち、宇宙に於ける人間の位置の解釋にとつて、且つ、全體の人間生命の意味にとつて、——甚だ意義あるものでなければならない。是を以つて、此の活動性の原理は第一位を占めんとする

カントの哲學が、獨逸理想主義の其の後の展開に及ぼした第一の偉大なる作用も、また確かに、此の方向に於いてゞあつた。殊にフイヒテは、カントの學說を琢磨して、これを、一つの廣汎なる行(タート)の哲學に大成した。世界の終局の根據をば、彼は、死せる事實(タートザッヘ)に見出さずして、否、活ける「始原的行爲(タートハンドルング)」に、是を見出した。そして、此處から、彼は同時に、人間の本分を確立した。蓋し、人間の本分を、受動的諦觀に、求むるが如きは、彼の思ひも及ばざる所であつた。否寧ろ、活動的であると言ふこと、茲にこそ眞の人間が在る。そして、哲學の唯一の課題は、窮極原理の認識を通して、吾人は何を爲す可きかと言ふ事を、指示する事である。かくて、學者は、人類の教師となり、かくて、彼の思惟

は、優れて實踐的なる意義を獲得する。茲に到つて、フイヒテは、その行の哲學を、社會文化の諸問題に、結び付けた事に由つて、彼の哲學——行の哲學の、一層の完成を遂げた。文化の不斷の向上と、——並に、人類の資質及び要求の總てが、是れに相應じたる繼續的展開を遂ぐるところと、茲に彼は、人類の本分を見た。かくて、理論的なる人と、行爲する人との間に存する對立に、完全なる橋梁は架せられたのである。此の哲學者は、彼の此の理論を開陳して、自ら活動的に展開しつゝある文化人類の用に奉じ、そして、斯くした事に由つて、同時に、彼れ自らは、自由なる行爲を通して絕えず向上しつゝある全體者の、能動的なる一員となつた。」

獨逸理想主義の哲學の中で、吾々の關係する限りに於いて、「考察に現れて來る根本特質を、明らかにするが爲めには、以上の略述で足りるであらう。今や、次の疑問が答へられなければならない。——獨逸理想主義に現れて來る實踐理性優越の哲學說を顧慮しつゝ、フアウストの詩の世界觀を眺るならば、抑も、此詩の世界觀は、如何に現れてゐるか？

活動的なる人の悲劇

斯く設問するに際しては、吾々は、唯だ一つの理念の細い絲に、豐富なるフアウストの全生命を、差し聯ねやうと想へるのではない。寧ろ全く唯だ、此の生命の根本傾向に就いて、語らうとするだけである。さうして、茲に何が問題であるかと言ふ事を、明瞭に言ひ表はしてゐる樣な、ゲエテ自身の表現を、引き出す事にすれば、夫れだけ愈々一層の確かさを以て、吾々は、此の事を果し得るであらう。一八三一年の夏、即ち、此の詩人が、彼の最大の作品に、最後の筆を加へた頃、彼はエッケルマンに、フアウストの不滅の靈を天上に送る天使等の

學、若くは所謂「コペルニクス的の立場」は、また、認識と行爲の關係についても、新しい解釋を導くものでなければならない。何故ならば、此の立場は、活動性の原理をば、理論的認識そのもの丶中で、擧示してゐるからである。認識主觀は、決して、單に受動的なる世界の鏡ではない。反對に――カントの謂ふが如くんば――悟性は、自ら、對象たる自然に、其の合法則性を命ずるのである。即ち、悟性は、單に自分に與へられたるに過ぎない所の素材をば、已れ自身の形式（譯者附範疇）に齎らして、正に斯くする事に由つて、求められたる客觀性に到達するのである。蓋し、悟性の形式は、すべての認識に、無條件的に妥當するからである。吾々は、此の難しい理論の詳細を、玆にこれ以上追及する必要はない。唯だ、若し此の理論が正しいならば、此の哲學者の理論的態度は、決して、單なる受動的諦觀の態度と見做さる可きではないと言ふ事――寧ろ反對に、その純粹理論的省思の中にさへも、猶ほ、實踐的なる活動性の契機が祕められて居ると言ふ事、夫れだけが問題なのである。此の事は既に、全世界觀にとつて――即ち、宇宙に於ける人間の位置の解釋にとつて、且つ、全體の人間生命の意味にとつて、――甚だ意義あるものでなければならない。是を以つて、此の活動性の原理は第一位を占めんとする

カントの哲學が、獨逸理想主義の其の後の展開に及ぼした第一の偉大なる作用も、また確かに、此の方向に於いてゞあつた。殊にフイヒテは、カントの學說を瞭解して、これを、一つの廣汎なる行（タート）の哲學に大成した。世界の終局の根據をば、彼は、死せる事實（タートザツヘ）に見出さずして、否、活ける「始原的行爲（タートハンドルング）」に、是を見出した。そして、此處から、彼は同時に、人間の本分を確立した。蓋し、人間の本分を、受動的諦觀に、求むるが如きは、彼の思ひも及ばざる所であつた。否寧ろ、活動的であると言ふこと、玆にこそ眞の人間が在る。そして、哲學の唯一の課題は、窮極原理の認識を通して、吾人は何を爲す可きかと言ふ事を、指示する事である。かくて、學者は、人類の教師となり、かくて、彼の思惟

は、優れて實踐的なる意義を獲得する。玆に到つて、フイヒテは、その行の哲學を、社會文化の諸問題に、結び付けた事に由つて、彼の哲學——行の哲學の、一層の完成を遂げた。文化の不斷の向上と、——並に、人類の資質及び要求の總てが、是れに相應じたる繼續的展開を遂ぐるところと、玆に彼は、人類の本分を見た。かくて、理論的なる人と、行爲する人との間に存する對立に、完全なる橋梁は架せられたのである。此の哲學者は、彼の此の理論を開陳して、自ら活動的に展開しつゝある文化人類の用に奉じ、そして、斯くした事に由つて、同時に、彼れ自らは、自由なる行爲を通して絕えず向上しつゝある全體者の、能動的なる一員となつた。」

獨逸理想主義の哲學の中で、吾々の關係する限りに於いて、「考察に現れて來る根本特質を、明らかにするが爲めには、以上の略述で足りるであらう。今や、次の疑問が答へられなければならない。——獨逸理想主義に現れて來る實踐理性優越の哲學說を顧慮しつゝ、フアウストの詩の世界觀を睇るならば、抑も、此詩の世界觀は、如何に現れてゐるか？

活動的なる人の悲劇

斯く設問するに際しては、吾々は、唯だ一つの理念の細い絲に、豐富なるフアウストの全生命を、差し聯ねやうと想へるのではない。寧ろ全く唯だ、此の生命の根本傾向に就いて、語らうとするだけである。さうして、玆に何が問題であるかと言ふ事を、明瞭に言ひ表はしてゐる樣な、ゲエテ自身の表現を、引き出す事にすれば、夫れだけ愈々一層の確かさを以て、吾々は、此の事を果し得るであらう。一八三一年の夏、即ち、此の詩人が、彼の最大の作品に、最後のを加へた頃、彼はエッケルマンに、フアウストの不滅の靈を天上に送る天使

ストの救はれの鍵が、「含まれてゐる」と言つた。「ファウスト自身の中には、絶えずより高き、そしてより純潔なる、最後迄の活動性、そして、上の方からは、彼を救はうとして來る永遠の愛」。此の愛は、此の劇の終りに到つて、甫めて、明白に現はれて來るが、併し「斷えず努力し骨折つてゐる人、そして其の故にこそ、救はれる事の出來る人」の愈々高く且つ愈々純粹なる活動性は、此の劇の終始全體に關係してゐなければならない。夫れ故に、吾々が、茲に、ファウストの生命を、始めから終りまで、活動性と言ふ着眼點の下に持ち來たすとしても、夫れは、また、ゲエテ自身のこゝろでなければならない。

吾々は、先づ、天上の序言から始めやう。此の部分は、ゲエテが、割合に後で、此の詩の首めに附け加へたものであつて、そして、吾々にとつては、此の劇の主題(テーマ)に就いての解說となつてゐる。其處では、神と惡魔(トイフエル)が、ファウストに就いて話してゐる。神は、ファウストを自分の子分と呼んでゐるのに、惡魔は、彼を自分の所に引き貶す事が出來ると信じてゐる。そして、此の事を試みてみる許諾を、神に求める。神はそれを許す。蓋し、神は、「ファウストが自分に唯だ「夢中で」仕へてゐるのだと言ふ事を、知つてはゐるけれども、猶ほ彼は、「自己の創造物に信賴してゐるからである。神はファウストを、安んじて、此の誘惑者の手に委ねる事が出來る。否、彼は、此の試みを望みさへも爲るに相違ない。何故ならば、試みを通してこそ、人間の本質は、最も善く、確證されるであらうから——

「人間の活動性は余りに容易に弛み勝ちになる。
彼は自分ですぐに無條件の休息を好む。」
そこで俺は、刺戟したり動きかけたりそして惡魔として働かなければならない奴を、

好むで人間の道連れに附けて置くのだ。

此處に直ちに、活動と休息の對立がある。神は、また、人間の裡なる「暗い衝動」として、此の活動性を肯定する。然るに、否定の靈としての惡魔は、反對に、フアウストの努力を破挫して、彼を感能の快樂に耽らせる事に由つて、フアウストを自分の所に引き貶さうと望む。かくて、フアウストは、二つの靈を懷いて、神と惡魔の中間に立つ。宛かも、大地が、晝と夜との交替につれて、光と闇との中間に踏み迷ふが如く。フアウストが活動的である限り、彼は神の光明に面を向けて居る。そして、一と度び、地上なるものへの沈湎に、その活動性の弛むときは、彼は闇の力に陷ちてゆく。斯くて、此の悲劇の中心は、フアウストの本質の内なる兩側面のうち、結局、凱歌を擧げるものは、其の孰れかと言ふ問題でなければならない。活動性か、將た、休息か。

次の場面は、——吾々が序言から豫期するに相違ない様に——フアウストを、二重本性者として描き出してゐる。

彼は自己の運命に滿足してゐない。蓋し、彼は、學の人として、此の世界をその深奥に於いて統べてゐるものゝ何であるかを、認識する事も出來なければ、また、彼には、世間の榮譽に到達して、生活を享樂する事も出來ない。さればこそ、彼は魔法に身を委ねた。彼は、世界の秘密の解説を、魔法に希ふ。魔法は、同時に、狹い書齋から彼を連れ出して、自由なる自然へと導いて行く。省思と活動性の對立、それから、單なる省思に執着してゐる事の不可能、これが、また、フアウストの精靈世界との交通の際に、顯らかになる。大宇宙の符の中では、萬有の諧調が、彼の力と協働して、先づ省思的に、彼に向つて其の扉を開いて來る。そして、彼は、此の形象を眺めて、歡喜に醉はされる。けれど、忽ちにして、彼は、面をそむけて謂ふ「何たる壯觀だ、だが、惜むらくは觀物に

ない單なる認識に滿足しない。彼は、自然を「掴み」たいのだ。直接に、自然の生命に觸れたいのだ。そこで彼は、自分により近い大地の精靈に向ふ。そして此處に、彼は、單なる觀物以上のものを求める。生の流れに、事業の嵐に、此の精靈は、降りては登る。げにや、ゲエテは、此の精靈をば、明らかに「行業の鬼(タート)」と呼んでゐた。されば、活動と省思と、創造と諦觀とを、互に對立させやうとする見解に就いては、何ら疑ふの餘地はないのである。

偖て、ファウストは、此の行業(タート)の鬼神から突き離され、「超人先生」と嘲弄されるに到つて、彼は途方に暮れる。彼にとつて、地上の生命は、悉くの意味を失つて了つた。自分の學僕――靜思的な學業に滿足してゐる學僕と話したあとでは、彼にはしみじみと、自分の狀態の堪まらなさが身にしみる。そこで、彼は自殺を思ひ立つ。蓋し、未だ惡魔の試みが始まらない前に、ファウストの活動性は、既に、弛廢してしまつたらしいのだ。自殺も仕たからう。けれど、吾々は、ファウストの動機を注意したい。夫れは斯うだ。彼は、たゞ、地上の死に憧れるのである。何故ならば、此の生命は、彼の行業(かうぎやう)の衝動を滿たして呉れない。そこで彼れは、彼岸に於いて、『純淨なる活動性の新しい境界へ』はいらうと欲ふからだ。斯様に、茲にも――如何なる場合にも――同じ「行業の人」が息づいてゐる。そして、地上の死を通して至高の活動性に突入せんとする大膽なる決心を取つて、此の行業に置き換へやうとする所から、彼を阻むものは、實に唯だ彼の二重本性である。復活祭の朝、近くの寺から彼に響いて來る鐘の響と合唱の歌、夫れは彼に何ら宗教的のことを語りはしないけれど、――彼は自分の耳に聞える使命の詞語を信仰してはゐないのだ――けれど、彼は、復活祭に由つて、こよなく美はしい地上の時、若さの時を思ひ出す。そして、此の事が、彼を自殺から連れ戻す。彼が下界に求めるものは、メフイストフエレスの知つてゐる樣に、すべての至高の快樂であるが、その下界は、彼を取り戻した。下界に於いて、いまや彼は、自分の暗い活動性の衝動に、遠く追從してゆかなければならない。

此の劇の中の出來事で、惡魔が仕事を始めるに先つて、吾々の問題に深い關係のあるのは、尙ほ、有名なるロゴスの翻譯である。ファウストの心情は、二重本性者にとつてはどうにもする事の出來ない執拗な逡巡に踏み迷ふ。時折々は、烈しい生命慾が、裡に歸つて來る。『躁暴な行動を伴ふて來る粗野な欲望はいま寢入つた』と彼自ら謂ふ、そして、この樣な氣分の中で、彼は、ヨヘネ福音書の翻譯を思ひ立つ。「太初にロゴスありき」と其處には書いてある。ルーテルの獨逸語譯の樣に、「太初に言葉ありき」これでは、ファウストが其の儘にして置く事は出來ない。ロゴスは、先づ最初、意味として、即ち思考として、彼に顯現れる。そして、若しも彼が、——アリストテレスとスピノザが爲した樣に、——自己の認識態度を萬有そのものに嵌め込んで、斯くて、理論理性を以つて、宇宙の原理と爲すが如き、知性主義者の類に屬する單なる省思的の人、乃至單なる哲學者であつたならば、その時には、ファウストにとつてもまた、確かに、「意味」が總ての太初であり、確かに、總ての根柢であつたに相違ない。併し乍ら、ファウストに於いては、學者の事業の底にさへも、能動性が、食ひ込んでゐる。さればこそ、彼は、此の譯語を捨てゝ、そして、自由なる解釋を思ひ立つ。『まさにかうある可きだ。太初に力ありき。』と彼は言ふ。されど、是れさへも尙ほ、彼には不滿足である。けれど遂に、彼の奥の奥なる本質が、完く、顯現れて出る。彼は安んじて書く、『太初に行爲ありき』されば、吾々は理解する、行の人は、遂に、行の哲學に來なければならない。ファウストは、フイヒテの樣に思惟する。カントの實踐理性優越説を、其の極地にまで推し進め、斯くて——事實をではなく、否な——始原的行爲を以つて、彼の世界觀の原理たらしめたるフイヒテの如く。

偖て吾々は、ファウストが行爲をば「太初」として定立した時に、惡魔が仕事に着手すると言ふ事を、會得しなければならない。ファウストの內なる活動性、これこそは、惡魔が此の神の子分を自分の所へ引き込

と希ふ所のものである。けれども彼は、靜かに考慮し且つ能動的に整へられてゐる人フアウストを以つてしては、何にも着手するわけにいかない。そこで彼は、先づ初めには唯だ理論的に、自分の唯物的虚無的なる否定の形而上學を提げて、『永遠に旺盛なる、効驗いやちこに創造する威力』に對するフアウストの信念に、對峙する。併し、悪魔は、更にその先きの奥の手を心得てゐる。彼は、二つの靈を有つてゐる人として、フアウストを識つてゐる。だから、今こそ、暫しの間寢入つてゐたあの粗暴なる欲望を、揺り醒ます可き時なのだ。メフイストフエレスが、彼の精靈共の手を借りて、フアウストの上に、富沃なる感能生活の豐けさを、灌ぎこむと、直ぐに、滿たされざる願望は再び蘇へり、そして、第一幕目のあの絶望が、また新たに、現れて來る。實に、フアウストは、今や、總ての地上の生命を呪ふ。すると、そこで彼は、存立するものは總て滅びていゝのだと言ふ悪魔の主張に、行き當る。茲に、メフイストフエレスは、自分の時が來た事を認める。そして、フアウストへの奉公を申し出る。

此のチタンと悪魔の間の契約が、どう言ふ形式で結ばれるかと言ふ事を、精細に注意しなければならない。メフイストフエレスが先づ最初申し出る形式は、是れをゲエテがフアウスト傳説の傳統から採る事の出來たものである。彼は、地上の生活に於いては、下僕として意の儘に使はれやう、その代り、死しての後あの世に於いては、フアウストが彼の下僕となると言ふ條件で。けれど、超人は、斯様な契約に、承認を與へる事は出來ない。彼岸の生命は、彼の關する所でない。此世の悦びも、彼にとつては、何らの價値もない。けれど、メフイストフエレスも、さうた易く引つ込みはしない。「ゆつくりと氣を休めて、何か旨い物を食つてゐたいと言ふ時が、近づいて來る」と彼は想へる。そして、其の事で、配慮しやうとする。「ゆつくりと休んで」、——茲に決定的の要點がある。蓋し、此の事はまさしく、フアウストの最も烈しい反對を刺戟する——

俺がかりにも氣樂になつて惰眠の床にねそべるなら
その時こそはわが身の果てだ。

否、ファウストは、自分の大きい呪咀に懸けて、言ひ切る――自分が、一度でも、何物かに執着して、そのために、刹那のまゝの生命を肯定し得やうとは、そんな事は不可能だ。――

「まあ待て、お前はいかにも美しい！」
俺がある「刹那」といふ奴にかう言つたら、
その時こそは貴樣は俺を縛り上げてもいゝ。
その時こそは俺は快く滅びて行かう。

何時でも、斯樣に思惟し、斯樣に行動するだらうと言ふ心で、ファウストは、惡魔と賭けを結ぶ。

斯くて、此の賭けから、甫めて一つの契約が生れて來る。若しもファウストが、一度でも或る瞬間に、「待つて貰ひたい」――ためらつてゐたいと望むだら、その時こそは、惡魔は、ファウストの靈を、好きな樣に仕ていゝと言ふ約條である。斯る契約はまた、メフイストフエレスの重大なる關心の存する所でなければならない。蓋し、ファウストを休息に腐らし、依つて以つて、其の活動性の衝動を破挫する事に、彼が成功したとすれば、彼は何時で、神に

である。ファウストとの賭けに勝つと言ふ事は、世界の主である者の面前に於ける、彼自らの勝利を意味してゐる。されば玆に再び、吾々は、此の劇の核心に立つて、そして、ゲエテが、昔のファウスト傳說から、此の行爲する人の悲劇を作り出すがために、此の傳說の傳統を、如何に改造したかと言ふ事を、注意しなければならない。文藝復興時代（ルチッサンスツァイト）のファウストは、地上の享樂のために、彼の不死の靈を惡魔に渡してゐる。それ故に、彼は、最初から、地獄に落とされてゐる。彼が、惡の助けを借りて、感能の快樂を克ち獲た報いには、あの世には、永遠の懲罰が彼を待ちうけてゐる。勿論、玆にも、或る一つの世界觀が見えてゐる。けれど夫れは、是れ以上詳論する必要がないであらう。蓋し、此のファウスト傳說の世界觀が、何故に、ゲエテの世界觀に一致しないかと言ふ事は、今や既に明らかである。それ故に、此の詩人は、彼自身のファウストを書き得んがためには、此の傳統を變改しなければならなかつたのである。傳說の姿の中で、彼を引きつけたものは、そのチタン的なるところ、超人的なるところ、——宇宙的認識を克ち得んとする苦鬪、——人間的個體性の限界を超出して宇宙の生命に參ぜんとする衝動であつた。併乍ら、地上の享樂のために其の靈を賣ると言ふ事は、彼の採用する能はざる所であつた。既に天上の序言が示してゐる樣に、ゲエテにとつてのファウストは、活動的の人である。下界の悅樂に由つては心の滿たされる事なしに、然かも尙ほ下界の悅びに心引かれる行爲の人である。從つて、ファウストの惡魔との契約もまた、たゞ活動性と休息との對立を中心に、旋回してゐる筈である。ファウストは、メフイストフエレスと事を共にすればとて、最初から失はれた人ではない。反對に、問題は、——彼が、惡魔との交際に於いて、休息に誘惑されて、斯くて、彼の本源の泉から、即ち、神の信賴の懸るところたる彼の休みなき活動性衝動から、退去し果てゝしまうかどうかと言ふ點に在る。

ファウストは自ら偉大なる理想の上に居る氣持ノ——斯る心持の中に在つて、彼は、たゞ、果しもなくまた目途なき動き

の中に、彼の努力を猶ほも實現してゆくことが出來る。されはこそ、痛苦と享樂と、成功と失意と、抵抗力に對して牙るべき事を、彼は欲する。暫らくも休みなく働いてゐてこそ眞の男兒だと言ふ事を、今にしてまた、彼は悟る。大自然は彼の認識に對して其の門戸を閉し、行業の鬼もまた彼を蔑如する時にも、尚ほ唯だ一つの事が、彼には殘つてゐる――

物を識りたい欲を擲つた俺れの胸は、
これからはどんな痛苦をも厭ふてはならない、
さうして人性全體に賦與されてあるものを、
俺はわが内なる自我みづからで受け味つてみたい。

もとより、此の自我の擴大と雖も、決して、その動きの外にある他の目的と言ふ樣なものを有つてゐるのではない。フアウストは唯だ「人性そのものと同じく、遂には滅びてみたい」のに外ならない。然らば、此の悲劇の問題は、次の點に存立する。抑も、フアウストは、此の果しのない行爲の爲めの行爲をば、決して、踏み超える事はないであらうか。即ち、彼は、本當に何物にも執着することなくして、たゞ絶えず努力を續けてゆくのであらうか。――或は、彼は、結局それでも、彼にとつて永續的の價値を有する何物かを、從つて彼をして或る「刹那」に向つて『待つて呉れ』と呼びかけざるを得ざらしむる何物かを、見出すといふ事はないであらうか。フアウストが恒に自己に忠實であるならば、明らかに、彼の幸福は、たゞ活動性そのもの丶中に存立してゐる筈である――即ち、無意味なるものに非ずして、反つて、己が價値を己れ自らの内に包有し、從つて、是を實行する者に滿足を與へずにはゐない樣な、勞作そのものゝ中に、幸福が見出される筈である。さらば、如何なる種類の活動に、フアウストは、結局、到達するか

の點に、此の詩の世界觀が、見えてゐる。

悲劇の終末が、此の事に關する決定を爲すに先だつて、吾々は、數多の所業を通して導かれる。此等の所業はすべて、ファウストの活動性が弛廢するか否かと言ふ問題を中心に、旋回してゐるのである。メフィストフェレスは、先づ、先きに彼が、精靈共の力を借りて、省思的に積極的に整へられた人ファウストの面前に、豐饒なる官能的生命の相を現出したに際して、開始したところを、繼續して遂行しやうとする。彼はファウストを魔女の厨（くりや）に曳き込んで、そして此處で、女の美しい姿を見させる。ファウストはグレエトヘンと戀におち、彼女の愛をも見出す。けれど彼は、超人として、彼女との恒久の結合を想ふことが出來ない。その時、彼は、彼の善き本性に導かれて、暫しの時を、「森と洞」の冥想に遁れる。そこでは、あの大宇宙の符に於けると同じ樣に、彼の心眼は、一と度び、大自然の諧調の底を眺める。けれどもメフィストフェレスは、ファウストをば、再びグレエトヘンへと連れ戻すことが出來る。そしてファウストは、段々と深みへ陷ちこんで、遂に戀人を破滅へと導いてゆく。いまやファウストは、戀の情熱の消え去るときは、感能の陶醉に執着して、そして賭けに負けるかも知れない。惡魔は、それを希望してゐて宜いかも知れない。ワルプルギスの夜の行動に、最後の決着がある。此處でもまた、ファウストは、休むことなき怪物（ウンメンシュ）である。放逸な所業に、彼は深い罪を作るけれど、併し乍ら、魔女の踊りの最中に、自分の状態の無價値である事に、氣が附く。グレエトヘンの思ひ出は、メフィストフェレスの目論見を、挫いてしまふ。けれどファウストは、結局たゞ自分の醸（か）した禍が實現されてゆくのを目撃して居る事を得るだけである。とは言へ、其の深い罪にも拘らず、彼は賭けに破れては了はなかつた。蓋し、彼の休むことなき精進不斷の努力が、少しも弱められずに、繼續してゐるからである。

この事が第二部の發端を指し示す。戀の悲劇の深い衝動から、再びファウストを自己に目覺ましめる氣運が生じた事を言ひつゝあ

とて　彼の最後の言葉が、[illegible]たる足取りで立ち上つてゐる大地は、彼の内奥に、『絶えず至高なる存在へと精進せんと志さす力強き決心』を、刺戟し動かす。されば、フアウストは、彼の嘗めてきた重壓の運命にも拘らず、彼の本質の根本的面目に於いては、尙ほ破れたる者ではない。併し乍ら、同時に、彼の願望の内容は全く改まつてゐる。最初の試みの體驗は、彼の胸奥に、消え去ることのない痕跡を殘したに相違ない。重い責めを負ふにも拘らず、彼は内的に育つてきた。彼の元行的(エレメンタール)の威力に於ける直接の生命に即して、最早何らの危險も彼を脅しはしない。彼は太陽にまともに立つて眺めようとはしない。寧ろ、彼は、太陽を背後にして、諸々の事象が日の光りを投げ返してゐる有様を——その戯れを嬉ぶ。『人生は彩られた照影の上にある。』とフアウストは言ふ。そして此のこゝろは、今や世界の美が彼の悦びである事を意味してゐる。彼の精進の志は審美的に淨められた。藝術が彼を力強く引きつける。そして昔の希臘のこゝろに住む其の最高の化身へと、彼は慕ひよる。

されど茲でもまた、このチタンは、——彼は何時までもチタンである——單なる美はしきものゝ外觀に、心滿たされてある事は出來ない。されば、希臘の女ヘレナの姿も、決して彼に足らへるものではない。彼はこゝに、彼女との結合を以つて、生ける現實との婚姻たらしめんがために、唯一無比の象(かたち)に生命を與へやうと欲する。メフイストフエレスは、其の事のために、彼れフアウストに力を捧げなければならない。メフイストフエレスは、今はたゞ、心ならず仕へてゐるのである。フアウストに及ぼす彼の影響は衰へてゐる。たゞ、新しい狀態に己れを適合させる事より他に、何物も彼には殘されてゐない。そして唯だ、ヘレナに對立して、彼が希臘の世界に見出した最も醜い姿を採る事によつてのみ、惡魔は自己を保有し得るにすぎない。

の點に、此の詩の世界觀が、見えてゐる。

悲劇の終末が、此の事に關する決定を爲すに先だつて、吾々は、數多の所業を通して導かれる。此等の所業はすべて、ファウストの活動性が弛緩するか否かと言ふ問題を中心に、旋回してゐるのである。メフィストフエレスは、先づ先きに彼が、精靈共の力を借りて、省思的に積極的に整へられた人ファウストの面前に、豐饒なる官能的生命の相を現出したに際して、開始したところを、繼續して遂行しやうとする。彼はファウストを魔女の厨(くりや)に曳き込んで、そして此處で、女の美しい姿を見させる。ファウストはグレエトヘンと戀におち、彼女の愛をも見出す。けれど彼は、超人として、彼女との恒久の結合を想ふことが出來ない。その時、彼は、彼の善き本性に導かれて、暫しの時を、「森と洞」の冥想に遁れる。そこでは、あの大宇宙の符に於けると同じ樣に、彼の心眼は、一と度び、大自然の諧調の底を眺める。けれどもメフィストフエレスは、ファウストをば、再びグレエトヘンへと連れ戻すことが出來る。そしてファウストは、段々と深みへ陷ちこんで、遂に戀人を破滅へと導いてゆく。いまやファウストは、戀の情熱の消え去るときは、感能の陶醉に執着して、そして賭けに負けるかも知れない。惡魔は、それを希望してゐて宜いかも知れない。ワルプルギスの夜の行動に、最後の決着がある。此處でもまた、ファウストは、休むことなき怪物(ウンメンシュ)である。放逸な所業に、彼は深い罪を作るけれど、併し乍ら、魔女の踊りの最中に、自分の狀態の無價値である事に、氣が附く。グレエトヘンの思ひ出は、メフィストフエレスの目論見を、挫いてしまふ。けれどファウストは、結局たゞ自分の醸(か)した禍が實現されてゆくのを目擊して居る事を得るだけである。とは言へ、其の深い罪にも拘らず、彼は賭けに破れてはゐなかつた。蓋し、彼の休むことなき精進不斷の努力が、些しも弱められずに、繼續してゐるからである。

この事は第二部の發端を指し示す。罪の意識の深い[illegible]から、再びファウストを[illegible]

とて、彼の最初の言葉が響く [illegible]たる足取りで立ち上つてゐる大地は、彼の内奥に、『絶えず至高なる存在へと精進せんと志さす力強き決心』を、刺戟し動かす。されば、ファウストは、彼の嘗めてきた重壓の運命にも拘らず、彼の本質の根本的面目に於いては、尙ほ破れたる者ではない。併し乍ら、同時に、彼の願望の内容は全く改まつてゐる。最初の試みの體驗は、彼の胸奥に、消え去ることのない痕跡を殘したに相違ない。重い責めを負ふにも拘らず、彼は内的に育つてきた。彼の元行的（エレメンタール）の威力に於ける直接の生命に即して、最早何らの危險も彼を脅しはしない。彼は太陽にまともに立つて眺めようとはしない。寧ろ、彼は、太陽を背後にして、諸々の事象が日の光りを投げ返してゐる有様を——その戯れを嬉ぶ。『人生は彩られた照影の上にある。』とファウストは言ふ。そして此のこゝろは、今や世界の美が彼の悦びである事を意味してゐる。彼の精進の志は審美的に淨められた。藝術が彼を力強く引きつける。そして昔の希臘のこゝろに住む其の最高の化身へと、彼は慕ひよる。

されど茲でもまた、このチタンは、——彼は何時までもチタンである——單なる美はしきものゝ外觀に、心滿たされてある事は出來ない。されば、希臘の女ヘレナの姿も、決して彼に足らへるものではない。彼はこゝに、彼女との結合を以つて、生ける現實との婚姻たらしめんがために、唯一無比の象（かたち）に生命を與へやうと欲する。メフイストフエレスは、其の事のために、彼れファウストに力を捧げなければならない。メフイストフエレスは、今はたゞ、心ならず仕へてゐるのである。ファウストに及ぼす彼の影響は衰へてゐる。たゞ、新しい狀態に己れを適合させる事より他に、何物も彼には殘されてゐない。そして唯だ、「ヘレナに對立して、」彼が希臘の世界に見出した最も醜い姿を採る事によつてのみ、「惡魔は自己を保有し得るにすぎない。」

今や問題は次の如くである。ファウストにとつては、ヘレナとの結合から、恆久の幸福が成立するであらうか。これとも彼はまた、審美的に淨められたる人にとつて甚だ危險なる誘惑――美はしきものに執着せんとする此の誘惑に打ち勝つであらうか。吾々の詩人は、最も獨特な仕方で、此の問題の決定を與へてゐる。即ち、一つの別な問題――ファウストとヘレナとの結婚から何が育つて行くか？と言ふ問題に與へられた答へが夫れである。其の結婚からは、一人の息子、オイフォリオンが生れて來る。されば、ファウストが、ヘレナとの合一に執着して、斯くて本來のファウストたる事に終りを告げるか否かの問題は、一つにオイフォリオンに懸つてゐる。彼は、其の兩親の眞正の子供である。美をば、彼は母から承け繼いだけれど、同時に父からは、超人、チタン――息むことなく總ゆる現前なるものを超越せんと志ざすファウスト的なるものをば受け有つてゐる。それ故に、此の息子は、己れ自らの内に靜かに息ふ古典的なるヘレナの美は、これを所持してはゐない。此の父の血を繼いだ者として、彼は斯る美をば有つことが出來ないのである。この事は則ち、彼自らの運命のみでなく、また同時に其の父の運命をも決定するものである。

吾々は、此の象徴の特性を、必然的なるものとして理解する。ファウストは、全く同一なる靜止の狀態にあつて、古代の美と靜かに結合するものであり、然かも同時に、斷えず向上の努力にいそしむ近代の超人であると言ふ風には、彼は表現され得なかつた。それ故に、彼の二重本性の兩側面は、二人の異つた人に分賦される。審美的に省思的なるファウストは、ヘレナと共に、控え目である。そして、彼女と同樣に、オイフォリオンの躁暴を制しさへもする。併し乍ら、彼の昔の放逸の性は、同時に、尠しも制肘されずに、其の息子の中に生き殘つてゐる。そして、且つて感能の快樂に固執するを許さなかつたと同樣に、美のほとりにもまた、彼の駐るを許さない。オイフォリオンは、現れて來た瞬間から、兩親の心を苦しめる。ヘーゲルが謂つた樣に、子供だけが甫めて結婚に對象性（目的）を與へるものであるなら

は、ファウストとヘレナとの結婚は、必然的に、眞の存立を缺いてゐる。そして、その責めはファウストに在る。併し乍ら、此の責めこそは、彼の大いさから、即ち彼の決して弛廢することのない活動性から、由來したものであつて、彼がヘレナとの結合に於いて自己を失ひ且つ賭けに破れんとする危險の前に、彼を救ふものである。痛苦のかぎりを嘗めて、ファウストは、此の度びも持ちこたへる――彼にとつて、執着なるものはない、最も高貴なる美の受用(ゲヌス)に於いてさへもない。

けれどヘレナは、グレエトヘンと同樣に、ファウストの生命から、痕跡(あとかた)もなく消え果てゝは了はない。彼女の衣裳が彼の手に殘る。そしてそれは、『あらゆる卑しきものゝ境を脱して、速かに、灝氣遥かに』彼を携へ登る。新たに淨められて、新たなる實行へと、ファウストは進み出る事が出來る。ヘレナとの結合の結果が、直ぐに顯はれて來る。受用の愚かしさを洞見しながらも、尙ほ、あの樣に切なる心に、受用(ゲヌス)のあとを逐ひ求めてゐたファウストから、『受用(ゲニーセン)は人を陋しくする』と言ふ言葉を吾々は耳に聞く。併し乍ら、同時に此の事はまた新たなる試みの發端である。ファウストが斯く受用を賤しむ所以は、即ちいま、彼は俗衆と共に何ら『陋しきもの』をば有つてゐないが故のみである。彼は『最高者』たらんと欲するが故である。されば茲に、ヘレナの悲劇の後に、主權者の悲劇が始まる。

ファウストの最奥の本質は、いまや、且て明かに言はんよりは寧ろ愈々確固として、活動性そのものを目指す限り、最も純粹に茲に貫き現はれてゐる――

此の大地球の上には
まだ偉大なる行業(タート)のための余地が殘されてゐる。

俺は偉大なる拮据活動への力を感じてゐる。

メフィストフエレスは、何時も乍ら、ファウストの窮極の動機を理解してゐない。彼は茲に、女英雄ヘレナの影響によつて、今やファウストは名聞を希ふものであると想(かんが)へる。併乍ら、此の主權者は、明瞭に是れを排拒して、彼の眼中に在るものゝ何であるかを、はつきりと言ひ切る――

俺は主權を取るのだ、占有するのだ。
行業(ダート)がすべてだ。名聞は無だ。

それにも干らず、ファウストは、尚ほ未だ彼の「超人」に囚はれて、爲めにまた新たに、重い咎を自らに荷ふ。彼の限り知らぬ願望の前に、未知の事象が現れて彼の關心を引くときには、彼は、主權者として、「公正である事が出來ない。それ故に、彼は、權利をば威力の下に屈し、かくて、罪もなく平和に生きる人々の存在を顚へす。かゝる行業の歸結が來ない譯はない。そして今や直ちに、決定的の轉向が行はれる。ファウストの犯した不當の所業からは、『憂(うれひ)』が育つて來る。そして新たなる危險として彼に近づいて來る。蓋し、憂は、彼の決斷の力を萎へさせて、ファウスト的なる努力を鈍らせるものである。かくて、憂は最後の試みとなる。けれども彼の外的なる力の衰頽にも拘らず、然かも尚ほファウストは、憂に對してもまた勝利者である。彼が高慢なる「超人」の我慾をも征服するときに、まことゝ彼の活動性はゝ遂に完全に淨化される。自分の既往の生命は、ゝ自分の使用した道具の數に、ゝ邪路であつたと言

[illegible]を、いまファウストは洞察する。彼のチタン的本性に充足するものだと想へられてゐた魔法をば、彼は自分の道途から取り除けたい――

自然よ、俺がお前の面前に男一匹で立つたなら、
その時こそは、人間である事は骨折り甲斐があるだらうに。

ファウストが此の洞察に到達して、然る後に、甫めて彼の運命は充たされる。彼の遂に挫折することのない活動性は、最後に茲に、人類への奉仕に於ける文化勞作へと向ふ。彼は自ら活動的であると共に、是れを以つて、他の人々の自由活動を確保し得るものたらしめたい。茲に、彼は、自ら活動的なる一員として、活動的なる全體者に、融合する――

俺は數百萬の民に土地を開いてやる、
安全とまではゆかんでも、けれど活動的に自由に住まれるやうに。

此の意味に於いて、ファウストは、彼の「個人」を以つてして、然かも尚ほ彼は、斷えず向上成長しつゝある超個人的人類性の、必然的なる一構成要素であると言ふ事を悟る。是に於いてか、個性の限界を超越する彼の働きは、いま迄とは全く異つた仕方で、永遠に確保された。この事は、遂に彼に、不可能と想はれてゐた滿足を與へるに相違ない――

俺の地上に生きた日の痕跡は、
永却に亘つて滅びは得ない。

此の最高の淨化は、もとより同時に、ファウストの息むことなき活動的生命の悲壯を意味してゐる。彼は、惡魔との賭けに際しては、惰眠の床の享樂は言はずもあれ、あらゆる滿足に至るまで、誓つて是れを棄絕した筈だつた。一と度びたりとも、「刹那」と言ふ奴に、『待つてゝ吳れ』と呼びかけやうものならば、彼は滅びて了ひたかつた筈だつた。それ故に、今――彼には及び難きものに見えてゐた幸福をば、自由なる人々のための自由なる活動に、彼が見出し得た今こそは、（譯者付。ファウストは今甫めて、「まあ待て、お前は本當に美しい」と「刹那」に向つて言ひたいと言つてゐる）彼は死なゝければならない。夫れは惡魔との契約に定められてゐた所であつた。けれど、茲に彼の失つたものは、唯だ彼の地上の生命のみである。彼の永遠の靈の救ひは、恐らくは嘗て、亂されない。惡魔に對しては、ファウストは、持久し盡し勝ち盡してはゐないけれども、併し乍ら、然ればとて未だ、メフイストフエレスはまた神に對して凱歌を奏するの位置にはゐない。ファウストを自己の傍に引き貶さうとする彼の企ては、寧ろ、全く失敗に終つてゐる。否、ファウストは、彼が超人間的の大膽さに於いて惡魔と結んだ賭けに、斯樣にして敗れたと言ふ事――まさに其の事によつて、神が彼に置いた信賴を、最も確かに、擁護したのである。彼の活動性は、決して弛廢してはゐない。寧ろ、ゲエテが言ふ樣に、『斷えずより高くそしてより純粹に』なつてゐる。それ故に、彼の深い過誤にも拘らず――その過ちは、天の愛が慈悲深く彼に赦して吳れる。――彼は天へと昇る。そして惡魔は、彼が率直であつたならば、茲でもまた、――神が豫知してゐた通りに――善き人は、彼の闇い衝動の最中にあつて、猶りかりと正しい路を知つてゐたと言ふ事を、憐憫の心に、承認しなければならなかつたであらう。[illegible]

ファウストの詩全體を貫く意思傾向と、實踐理性の優越を說く獨逸理想主義の哲學と、兩者の要點に關しては、今や既に、何らの疑ひも存立し得ない。別してフイヒテの行の哲學——其の完成的展開に於いて、社會的文化生命の哲學たらんとする行の哲學は、ファウストが『智慧の最後の斷案』として服膺する所のものと、嚴密に、相呼應するものである。殊に、個體者は、自ら、活動的なる人類全體者の必然的構成肢(グリード)と成り得るならば、彼は玆に、己が「個人」を超出して無限者に參し、斯くて感覺的存在として然かも『永遠を把握する』事が出來る、と言ふ思想をば、フイヒテは、一七九四年學者の本分に關する彼のエナでの講演に、熱烈なる言葉を以て語つてゐる。加之、吾々は更に進んで謂ふことが出來る。「ゲエテが、ファウストの詩の結末を作るに當つては、此の詩を以て、他の如何なる獨逸の事業にも勝つて、最高なる生命原理としての能動性の原理に、表現を賦ふるものたらしめたのである。即ち、ファウストの赴く天は、人々の所謂天國なるものとは、本質的に異つてゐる。」ファウストは、斷えず努力し骨折つた故にこそ、彼は救はれ得る、さらば、彼は、何處に救はれて行くか? 彼は、死しての後を、休息の場(には)に歩み入るか? 斯くて遂に、其處に、あの息むことなき努力の意氣は、靜觀的なる存在の惠まれたる平和の中に、消え失せてしまふのか? 苟くも實踐理性優越の哲學が嚴肅に保持されるならば、即ち「行」其物が全生命の原理たり得るが如く、行を以つて太始(はじめ)に定立するならば、然らば、行はまたその終局に立つものでなければならない。そして此處ではまさしくさうなつてゐる。ファウストの詩が吾々に示す所によれば、其の主人公の靈は、天そのものゝ內にあつて、斷えず更により高き境界へと志し努めてゐる。淨められて純淨なる活動性は、即ち、地上の實存を超出して、永遠の奧深く、持續してゆく。

此の見解が、如何に眞實に、ゲエテの世界觀を語るものであるかと言ふ事は、尙ほいま一つの證據から、知得する事が出來る。彼の八十歲の時に、「吾が詩人は、不滅に關する談話の中で、エッケルマンに言つた。『吾々の永生と言ふ確信

は、私に於いては、活動性と言ふ概念から生起する。蓋し、若しも私が、私の最後の時に到るまで、不斷に作業してゐるならば、自然は、若し現在の存在の形式が最早私の精神を支持し續ける事が出來ないときには、他の新たなる存在の形式を、私に指示すべき義務を負ふのである。』これこそは――吾々は言ひ得るだらう――これこそは、カント自身の不滅説よりも、一層カント的である。換言するならば、それよりも更に一層、實踐理性優越の哲學の眞精神に於いて思惟せられたるものである。尠くとも、此處には、カントが、德福（合致）の（純粹實踐理性的）絶對要請（ポスチュラート）を把持して靈魂の不滅に到達せんがために、彼の使用したる、『最高善』の概念に關する迂路がない。死後の存續、永生の確信は、ゲエテに於いては、――カントに於ける自律の道德的自由の如く――實踐的なる人の倫理的要求として、全く直接なるものである。汝は不滅であり得る、そして汝は、汝がまさしくさうである事を信じて可い。何となれば、汝は斷えず活動的である可きであり、そして汝は必然的にさうであるから。蓋し、實に行業こそは、汝が眞の存在の最奥不磨の本質なるが故である。ファウストは、斷えず自ら努力し骨折つてきた。夫れ故にこそ、彼にはまた、永遠の向上努力の持續と言ふ形式に於いて、地上的存在を超出しての不斷の行爲と言ふ形式に於いて、不滅が保證されてゐる。是を以つて、「ファウスト」の詩の終りの詞語（ことば）は、全く、獨逸理想主義の思想に契合する。すべての人間生命の最初にして而して最後の意味は、自由活動的なる自律的人格にある。此の確信からこそ、『獨逸人に最も固有なる詩』は、獨逸人に固有なる學的哲學と同じく、其の確證を得るのである。（ハイデルベルヒに於て）

理想主義と現實生活

阿部次郎

この一篇は去年十二月號に書いた拙論「理想主義のために」の續稿である。私はあの文章の最後に約束したところに背いて、この論文にも「學術的」な形を與へようとはしなかつた。理想主義の精神を現在の社會に對して主張するといふ實踐的欲求が、依然として私の心を支配してゐるからである。固より私はこの主張を有効にするために、觀念を明かにするといふ武器を用ゐむとする者である。從つて私はこの論述に於ても出來るだけ意義を明晰にする必要を感ずる。併しそれ以上の學術的要求を滿すことは、これを他日に期せなければならない。

一

理想主義は如何にして發生するか。更に嚴密に云へば、なくてならぬ一大事として吾々の生活の集中を求める理想の觀念は、如何なる順序を經て吾々の心裡に構成されるか。このやうな心理的發生的な方面から理想主義の問題を見るとき、吾々は理想發生の地盤として現實生活の意義を——特に現實生活に於ける破綻の意義を重視せずにはゐられない。それが如何なる方面であれ、兎に角一つの現實的體驗に深入りすることは、吾々の中に潛める最も深き必然性を（換言すれば理想を）ひき出すための、殆んど缺く可からざる門戶である。その限りに於いて、理想主義は、現實を重んぜよといふリアリズムと何の矛盾するところもなきのみならず、寧ろそれは、この意味のリアリズムを一要素とすることなしには、單純な理論を超えて深く人心に徹する內容を得て來ることが出來ないであらう。然らば「現實」とは一體何であるか。この問題を解釋するために理想主義的認識論の體系とその紛爭の問題とを茲に

繰返すことは無用であるが、吾々が吾々の主觀的構成から全然獨立せる「物自體」としての現實について何の表象をも持ち得ぬことは、固より云ふまでもないであらう。私が此處にいふ現實とは、吾々が與へられたものとして意識するところの一切である。これを認識論的にいへば「所與」の範疇によつて——縱令それが認識の與件と併せられるにせよ、又自我によつて創造せられた非我であるにせよ——認識するところの一切である。具體的にいへば、山や川や草や木や衣服や食物や金錢や、朋友や妻子や仇敵や、心理學的現象として意識作用などは、凡てこの意味の現實に屬してゐる。さうして吾々の現實生活は、此等の與へられたものに對するに、吾々の精神の要求を以てする處に——此等の所與を要求實現の材料として取扱つて行くところに、始めて成立する。この意味に於いて、人間生活の特色は、それが物理的必然に從はずに、廣義に於ける意欲を原動力として發展して行くところにあるといふことが出來るであらう。吾々の本能や衝動や若くは狹義に於ける意志の目的活動を除外して、現實生活は何處にも成立し得ない。現實的に生きるとは、吾々が石や木や風のやうに物理的必然に從つて存在を續けて行くことではなくて、意欲する主體として與へられたものに衝當つて行くこと、意欲と所與との交渉の間に自己の生活を構成し開展して行くことである。從つて理想主義の哲學は既に現實生活の成立に於いて何等かの價値意識を豫想せずにはゐられない。但しこの場合の價値意識は、必ずしも明瞭な自覺と徹底せる把握とを伴ふものではなく、寧ろ。多くの場合、それは瞬間的であり、偶然的であり、動搖と矛盾との間に漂ふことを常態とする。併し吾々が動搖を動搖として、矛盾を矛盾として意識するとき、その間に不易と徹底との要求はおのづから包含されてゐるのである。さうして吾々が不易にして徹底せる意欲の原理若くは對象を追求するとき、吾々は當然に理想の觀念に到達せずにはゐられないであらう。

例へば茲に一人の青年が一人の少女に深き愛を感ずると假定する。若し彼が聊かの障碍にも逢はずにその戀愛の對象と交り續けて行くことが出來るならば、恐らく彼はその衝動のままに動いて戀愛の自覺さへ容易には持ち得ないであらう。併し逢はずにゐなければならぬ若干の時間や、彼の馴々しさを拒まむとする少女の素振や、その他些細な偶然な障碍が、彼をしてその戀愛を自覺させる。その時彼は此等の障碍と戰つて勝つために努力するであらう。さうしてこの努

力は、目的と手段との區別の意識に彼を導く。目的の意識は理想の觀念の第一歩である。而もこの目的が種々の妨害によつて容易に實現し難いことを感ずるとき、彼の心の中には、自己の事業と戀愛との關係や、父母の希望と自己の結婚との矛盾や、その自己の情熱に任せて他人に働きかける權利如何の問題や、その他種々の問題が頭を擡げて、戀愛の主義に對する反省を彼に課するであらう。彼が若しその事業のために戀愛を斷念する決心に落ちて行くならば、そのとき彼の事業は從來以上に深き理由を以て彼の生活を支配すべき權利を承認されるのである。若し又彼が、此等の障碍を排してさへその戀愛の追求に身を委ねむとする自信を獲得するならば、それは、反省によつて强められ自覺を以て支持される主張として、一層深くその根を彼の生活の中に張つて行くであらう。かくてそれは益々生活の全體を支配すべき力として――換言すれば理想として彼の中に作用して行く。

又從來衝動の誘ふがまゝに動いて來た生活經驗が次第に吾々の中に集積するとき、さうして多樣な經驗內容が深さと全一とに對する吾々の欲求を刺戟するとき、自己の生活を一體として把握せむとする衝動は早晩吾々の心に湧いて來るであらう。自己の生活を一體として把握するとは、その中に一貫の理念(イデー)を發見せむとすることである。さうしてこの理念は當然に將來の生活を指導する理想(イデー)として吾々を動かして行かずにはゐられない。

又吾々が人生の行路に於いて無數に與へられる岐路に踏み迷ふとき、さうして本能も衝動もその決定を吾々に與へるほどの力を持つてゐないとき、人はこれが解決を生活全體の方向に求めなければならない。抑も自分の行く可き道は何處にあるか、自分の生活を全體として導きつゝあるものは如何なる力であるか。此等の反省は吾々の眼を當然に生活全體の基礎に向はしめるであらう。さうして、人生に於いては、基礎に向ふとは目標に向ふことである。玆に於いて吾々は又理想を明かにせむとする欲求に驅られる。

固より理想の觀念は事實上このやうな順序を經てのみ吾々の中に構成されるのではない。特に所謂文明人(クルツールメンシユ)に於いては人は自ら理想に對する欲求を感ずる前に、師父や書籍や社會によつて、先づ理想と名づくべきものを數へ込まれる。吾々は、子供が玩具や繪本を持たされるやうに、自ら選擇することなしに理想を摑ませられる。又ある場合に

繰返すことは無用であるが、吾々が吾々の主觀的構成から全然獨立せる「物自體」としての現實について何の表象をも持ち得ぬことは、固より云ふまでもないであらう。私が此處にいふ現實とは、吾々が與へられたものとして意識するところの一切である。これを認識論的にいへば「所與」の範疇によつて——縱令それが認識の與件と解せられるにせよ、又自我によつて創造せられた非我であるにせよ——認識するところの一切である。具體的にいへば、山や川や草や木や衣服や食物や金錢や、朋友や妻子や仇敵や、心理學的現象として意識作用などは、凡てこの意味の現實に屬してゐる。さうして吾々の現實生活は、此等の與へられたものに對するに、吾々の精神の要求を以てする處に——此等の所與を要求實現の材料として取扱つて行くところに、始めて成立する。この意味に於いて、人間生活の特色は、それが物理的必然に從はずに、廣義に於ける意欲を原動力として發展して行くところにあるといふことが出來るであらう。吾々の本能や衝動や若くは狹義に於ける意志の目的活動を除外して、現實生活は何處にも成立し得ない。現實的に生きるとは、吾々が石や木や風のやうに物理的必然に從つて存在を續けて行くことではなくて、意欲する主體として與へられたものに衝當つて行くこと、意欲と所與との交渉の間に自己の生活を構成し開展して行くことである。從つて理想主義の哲學は既に現實生活の成立に於いて何等かの價値意識を豫想せずにはゐられない。但しこの場合の價値意識は、必ずしも明瞭な自覺と徹底せる把握とを伴ふものではなく、寧ろ。多くの場合、それは瞬間的であり、偶然的であり、動搖と矛盾との間に漂ふことを常態とする。併し吾々が動搖を動搖として、矛盾を矛盾として意識するとき、その間に不易と徹底との要求はおのづから包含されてゐるのである。さうして吾々が不易にして徹底せる意欲の原理若くは對象を追求するとき、吾々は當然に理想の觀念に到達せずにはゐられないであらう。

例へば茲に一人の青年が一人の少女に深き愛を感ずると假定する。若し彼が聊かの障碍にも逢はずにその戀愛の對象と交り續けて行くことが出來るならば、恐らく彼はその衝動のままに動いて戀愛の自覺さへ容易には持ち得ないであらう。併し逢はずにゐなければならぬ若干の時間や、彼の馴々しさを拒まむとする少女の素振や、その他些細な偶然な障碍が、彼をしてその戀愛を自覺させる。その時彼は此等の障碍と戰つて勝つために努力するであらう。さうしてこの努

力は、目的と手段との區別の意識に彼を導く。目的の意識は理想の觀念の第一歩である。而もこの目的が種々の妨害によつて容易に實現し難いことを感ずるとき、彼も心の中には、自己の事業と戀愛との關係や、父母の希望と自己の熱情との矛盾や、その自己の情熱に任せて他人に働きかける權利如何の問題や、その他種々の問題に頭を擡げて、戀愛の意義に對する反省を彼に課するであらう。彼が若しその事業のために戀愛を斷念する決心に落ちて行くならば、そのとき彼の事業は從來以上に深き理由を以て彼の生活を支配すべき權利を承認されるのである。若し又彼が、此等の障碍を排してさへその戀愛の追求に身を委ねむとする自信を獲得するならば、それは、反省によつて强められ自覺を以て支持される主張として、一層深くその根を彼の生活の中に張つて行くであらう。かくてそれは益々生活の全體を支配すべき力として――換言すれば理想として彼の中に作用して行く。

又從來衝動の誘ふがまゝに動いて來た生活經驗が次第に吾々の中に集積するとき、さうして多様な經驗内容が深さと全一とに對する吾々の欲求を刺戟するとき、自己の生活を一體として把握せむとする衝動は早晩吾々の心に湧いて來るであらう。自己の生活を一體として把握するとは、その中に一貫の理念(イデー)を發見せむとすることである。さうしてこの理念は當然に將來の生活を指導する理想(イデアール)として吾々を動かして行かずにはゐられない。

又吾々が人生の行路に於いて無數に與へられる岐路に踏み迷ふとき、さうして本能も衝動もその決定を吾々に與へるほどの力を持つてゐないとき、人はこれが解決を生活全體の方向に求めなければならない。抑も自分の行く可き道は何處にあるか、自分の生活を全體として導きつゝあるものは如何なる力であるか。此等の反省は吾々の眼を當然に生活全體の基礎に向はしめるであらう。さうして、人生に於いては、基礎に向ふとは目標に向ふことである。茲に於いて吾々は又理想を明かにせむとする欲求に驅られる。

固より理想の觀念は事實上このやうな順序を經てのみ吾々の中に構成されるのではない。特に所謂文明人(クルツールメンシュ)に於いては人は自ら理想に對する欲求を感ずる前に、師父や書籍や社會によつて、先づ理想と名づくべきものを數へ込まれる。吾々は、子供が玩具や繪本を持たされるやうに、自ら選擇することなしに理想を握ませられる。又ある場合に

繰返すことは無用であるが、吾々が吾々の主觀的構成から全然獨立せる「物自體」としての現實について何の表象をも持ち得ぬことは、固より云ふまでもないであらう。私が此處にいふ現實とは、吾々が與へられたものとして意識するところの一切である。これを認識論的にいへば「所與(ゲゲーベンハイト)」の範疇によつて──縱令それが認識の與件(ダータ)と解せられるにせよ、又自我によつて創造せられた非我であるにせよ──認識するところの一切である。具體的にいへば、山や川や草や木や衣服や食物や金錢や、朋友や妻子や仇敵や、心理學的現象として意識作用などは、凡てこの意味の現實に屬してゐる。

さうして吾々の現實生活は、此等の與へられたものに對するに、吾々の精神の要求を以てする處に──此等の所與を要求實現の材料として取扱つて行くところに、始めて成立する。この意味に於いて、人間生活の特色は、それが物理的必然に從はずに、廣義に於ける意欲を原動力として發展して行くところにあるといふことが出來るであらう。吾々の本能や衝動や若くは狹義に於ける意志の目的活動を除外して、現實生活は何處にも成立し得ない。現實的に生きるとは、吾々が石や木や風のやうに物理的必然に從つて存在を續けて行くことではなくて、意欲する主體として與へられたものに衝當つて行くこと、意欲と所與との交渉の間に自己の生活を構成し開展して行くことである。從つて理想主義の哲學は既に現實生活の成立に於いて何等かの價値意識を豫想せずにはゐられない。但しこの場合の價値意識は、必ずしも明瞭な自覺と徹底せる把握とを伴ふものではなく、寧ろ。多くの場合、それは瞬間的であり、偶然的であり、動搖と矛盾との間に漂ふことを常態とする。併し吾々が動搖を動搖として、矛盾を矛盾として意識するとき、その間に不易と徹底(コンセクエンツ)との要求はおのづから包含されてゐるのである。さうして吾々が不易にして徹底せる意欲の原理若くは對象を追求するとき、吾々は當然に理想の觀念に到達せずにはゐられないであらう。

例へば玆に一人の青年が一人の少女に深き愛を感ずると假定する。若し彼が聊かの障碍にも逢はずにその戀愛の對象と交り續けて行くことが出來るならば、恐らく彼はその衝動のままに動いて戀愛の自覺さへ容易には持ち得ないであらう。併し逢はずにゐなければならぬ若干の時間や、彼の馴々しさを拒まむとする少女の素振や、その他些細な偶然な障碍が、彼をしてその戀愛を自覺させる。その時彼は此等の障碍と戰つて勝つために努力するであらう。さうしてこの努

力は、目的と手段との區別の意識に彼を導く。目的の意識は理想の觀念の第一歩である。而もこの目的が種々の妨害によつて容易に實現し難いことを感ずるとき、彼の心の中には、自己の事業と戀愛との關係や、父母の希望と自己の熱情との矛盾や、その自己の情熱に任せて他人に働きかける權利如何の問題や、その他種々の問題が頭を擡げて、戀愛の意義に對する反省を彼に課するであらう。彼が若しその事業のために戀愛を斷念する決心に落ちて行くならば、そのとき彼の事業は從來以上に深き理由を以て彼の生活を支配すべき權利を承認されるのである。若し又彼が、此等の障碍を排してさへその戀愛の追求に身を委ねむとする自信を獲得するならば、それは、反省によつて强められ自覺を以て支持される主張として、一層深くその根を彼の生活の中に張つて行くであらう。かくてそれは益々生活の全體を支配すべき力として――換言すれば理想として彼の中に作用して行く。

又從來衝動の誘ふがまゝに動いて來た生活經驗が次第に吾々の中に集積するとき、さうして多樣な經驗內容が深さと全一とに對する吾々の欲求を刺戟するとき、自己の生活を一體として把握せむとする衝動は早晩吾々の心に湧いて來るであらう。自己の生活を一體として把握するとは、その中に一貫の理念（イデー）を發見せむとすることである。さうしてこの理念は當然に將來の生活を指導する理想（イデアール）として吾々を動かして行かずにはゐられない。

又吾々が人生の行路において無數に與へられる岐路に踏み迷ふとき、さうして本能も衝動もその決定を吾々に與へるほどの力を持つてゐないとき、人はこれが解決を生活全體の方向に求めなければならない。抑も自分の行く可き道は何處にあるか、自分の生活を全體として導きつゝあるものは如何なる力であるか。此等の反省は吾々の眼を當然に生活全體の基礎に向はしめるであらう。さうして、人生においては、基礎に向ふとは目標に向ふことである。茲において吾々は又理想を明かにせむとする欲求に驅られる。

固より理想の觀念は事實上このやうな順序を經てのみ吾々の中に構成されるのではない。特に所謂文明人（クルツールメンシュ）においては人は自ら理想に對する欲求を感ずる前に、師父や書籍や社會によつて、先づ理想と名づくべきものを教へ込まれる。吾々は、子供が玩具や繪本を持たされるやうに、自ら選擇することなしに理想を握ませられる。又ある場合

運用に馴らされた頭腦の習慣が、その智識の體系を穴填めするために、「人生の理想」を思索の題目とすることも亦決して少くないであらう。併し此等の觀念は、その實、理想の制服を着せられた藁人形の兵隊である。後者は生活の全體と交渉するところの少い單純な思想として、前者は、その上に、樣々の傳統を持ち種々の源泉から流れ出た思想の寄せ集めとして、彼等は共に、吾々の生活の中心を占領して其處から四方を號令する實力を持つことが出來ないであらう。然るに、此の實力を持つことこそ本當の理想にとつて缺くべからざる資格であるとすれば、吾々は此等の觀念を本質的な意味で理想と呼ぶことが出來ない。本質的に理想の權威を持つためには、此等の觀念は、常に現實生活の試金石にかけられて、自分自身の中から湧き出したものと等しき心熱を得て來なければならぬ。故に吾々のやうな文明人は、不斷に體驗に回顧しつゝ、自分の理想を構成（ウマビルデン）しなほし、創造（ウムシャッフェン）しなほし、學びなほす必要がある。この意味に於いて、現實生活は、この場合にも眞正な理想の地盤として重要な意義を持つてゐるのである。

二

理想發生の地盤として、現實生活の意義が上述のやうに重大であるとすれば、理想の權利は結局現實に適合することによつて證明されるのではないであらうか。理想と空想とは畢竟現實に適合するとせぬとによつて區別されるのではないであらうか。常識的の意味に於ける實證論者（ポジティヴィスト）は、躊躇なく「さうだ」と答へるであらう。さうして吾々も、上來の事實を承認する以上は、否應なしにこれを肯定せなければならぬやうに見える。併し少しく詳しくこれを考察すれば、それは必ずしもさうではないのである。

此處で問題になるものは「現實に適合する」といふ言葉の意味である。若し吾々が前に說明したやうに、現實とは吾々の意欲に對する所與の意味であると解釋して、この所與が有する自然の傾向に抵抗せぬことを——換言すればあらゆる意味に於いて所與を否定せぬことを、現實に適合する所以であると考へるならば、現實に適合せよとは結局理想を持つなといふことの別名に過ぎなくなるであらう。朽屋は倒れむと欲する。洪水は氾濫せむと欲する。害蟲は樹を蝕ばむ

と欲する。故に朽屋に支柱を與へ、河川に堤防を築き、樹木を害蟲から保護しようとするのは、現實に於ける自然的傾向に抵抗するのである。併し此の如き自然的傾向が、——厚生利用の活動を——厚生利用の基礎として豫想せられてゐる所與否定の權利を——否定することが出來ないことは、ポジテイヴイスト自身が誰より最もよく知つてゐるであらう。

又「現實に適合する」とは所與に抵抗せぬといふ意味ではなくて、現實生活を形成する吾々の意欲をそのまゝに肯定するといふ意味であるとすれば、吾々は現實生活に於ける個々の意欲が相互に矛盾撞着するといふ事實を——この爭ひ難き事實を、どう仕末すべきかに迷はずにはゐられない。例へば一方に於いて吾々は無制限に享樂の慾を恣にしたいと思ふ。併し吾々は一方に於いて、他人の窮乏を見るに忍びぬこゝろ、他人の窮乏を援けたいこゝろを持つてゐる。さうして物質は消費することによつて減ずるものであるといふ事實を勘定に入れるとき、この二つの意慾は相互に制限することなしに兩立することが出來ない。吾々はこの場合に孰れを否定して孰れを肯定すべきであるか。若くは兩者をどれ位の程度に制限してこれを肯定すべきであるか。この問題は凡そ意欲を意欲なるが故に肯定する立場からは解決し得ない。意欲と意欲との撞着は、その上に立つてこれを審くに足るほどのより高き立場を要求する。さうしてこの要求からこそ理想の觀念は生じて來るのである。故に意欲を意欲なるが故に肯定する立場は、結局凡そ理想の權利を否定することによつて終結せずにはゐられないであらう。この意味に於いて「現實に適合する」ことを理想の權利の基礎とせむとする者は、單に木に緣つて魚を求むるといふ譬喩に該當するのみではない、彼は寧ろ、浪費することによつて蓄財せむとする愚者の類に數へらるべきである。

或人は云ふであらう、そんな簡單な不合理な意味で、理想が「現實に適合する」ことを求める者は何處にもゐないに極つてゐると。併し事實は必ずしもさうではないやうである。人は性欲と享樂欲との塊である、故に吾々はこれに抵抗せずにその權利を是認しなければならぬといふやうな主張は、嚴密な倫理的反省を缺くとき、吾々を前に述べた二つの意味の誤謬に導かむとする危險を含んでゐる。それがたゞ、人間は性欲と享樂欲との深い生物として取扱はれなければならぬ、といふ主張を意味するに過ぎないならば、其處には固より何の誤謬もないであらう。併しその故を以て、性欲

者以上に立つてこれを制限すべき理想の權利を否定しようとするとき、吾々は既にこの一箇簡單な一謬誤に陷つてゐるのである。他人を一つの所與と見て、彼等に自然な傾向として無條件にこれを是認するとき、吾々の誤謬は第一の部類に屬する。又これを凡そ人間の意欲なるが故に是認すべしと主張すれば、吾々は第二の意味に於いて過たざるを得ないであらう。孰れにしても、存在の事實から直ちに存在の權利をひき出さうとするとき、さうしてこの條件に當嵌らぬ理想を「現實に適合せぬ」故を以て排斥せむとするとき、吾々は知らず識らずこの不合理を犯す者となるのである。現代に於ける性慾萬能物慾萬能の思想が、この意味に於ける「現實主義」の誤謬によつて支持されてゐることは餘りに明かである。故に吾々はこの簡單な不合理をも多少の强調を以て指摘して置かなければならぬ。性欲と享樂欲とが人生の病であるかどうかは別問題であるが、少くとも吾々がその病的亢進の徴候を現代の社會に於いて認めるならば、この病める現實を、若くは、この病める意志によつて營まれてゐる現實生活を、より以上の立場から批評する理想の權利は、恐るゝところなく主張する必要がある。

併し理想の權利を現實に適合するところに置く主張の眞意は、必ずしも上述の二つの場合に限る必要がない。それは現實を一歩一歩より善くするに有効な理想を是認して、あまりに高遠にして歩々の實現を輕視させるやうな理想や、直ちに現實に適用せむとすれば却つて目前の混亂を來すやうな理想を排斥せむとするものと見れば、一應合理的な意味を持ち得るであらう。併し嚴密に云へば、それは理想實現の手段に關する問題であつて、理想そのものの權利に關する問題ではない。凡そ現實を「より善く」するとは何事を意味するか、昨日から今日、今日から明日と「より善く」なつて行くといふことは如何にして云ひ得るか。此等の言葉は「善」の理想を豫想しなければ固より無意味である。さうして絕對の善は縱令無限の遠くにあつても、それはなほその日その日の一善に意義を與へるものとして、理想としての權利を失ふ必要は少しもないのである。寧ろこの意味に於いて、現實をよりよくするものとして理想の意義を承認することは、理想の權利が現實によつて保證されるのではなくて、現實の權利が却つて理想によつて保證されてゐることを證明する。理想實現の階段として始めて意義を獲得するものが、その目標となる者の權利をこれによつて保證することが出

來ないとは云ふまでもないであらう。現實が理想の權利を保證することが出來ないのは、と同樣である。權利の問題であつて、意義の問題に於いては理想が現實の親であるからである。

凡そ吾々が理想を求めるとは何事を求めるのであるか。それは吾々の生活を全體として支配するに足る權威ある觀念を求めるのである。從つて理想が理想である限り、理想が「求めて與へられた」ものである限り、それは當然に吾々の現在の生活に命令する權利を持つものでなければならぬ。さうして現在の生活に命令することは將來の生活を指導するといふと同義である。而も吾々は單に理想を現在及び將來の規制原理とするのみならず、吾々は又これによつて過去の生活を批判せずにはゐられない。理想は過去の生活に對して、或ひは是認を與へ、或ひは痛悔を命ずる。故に理想は先づ、これを懷抱する人の過去現在未來に渡つて普遍的妥當性を要求するものであるといふことが出來るであらう。

併し理想は、これを懷抱する人に與へられる世界の全體に妥當することなしに、その人の全生活を支配するとが出來ない。この意味に於いて、それは、個人の素質と性格とを越えて、萬人に普遍的に妥當するところにその權利の根據を築かなければならぬ。個性と使命とによつて、理想の適用が無限にモディファイされなければならぬことは云ふまでもないが、それは理想が具體化せらるべき段階に關する問題であつて、理想の根據となるものは、原理上あらゆる個性とあらゆる使命とに妥當して、その個性と使命との基礎となるものでなければならぬ。先驗的に普遍的に萬人に通じて妥當する價値意識――これこそ樣々の段階に於ける理想にそれぞれの權利を賦與する最後の根據である。吾々が若しその先驗的な、普遍的に妥當する價値意識を「現實」と呼ぶならば、理想が現實に適合することによつてその權利を保證されるといふ主張は、この意味に於いてのみ可能である。さうしてこの意味に於いて「現實」若くは「人性」に適合せぬ理想は、確かに空想といはれなければならない。併しこの意味の價値意識を現實と呼ぶことは、吾々の從來用ゐて來た用語例に反する。それは吾々に對する所與ではなくて、一つの理念でなければならないからである。

吾々が前に主張したのは、此如き價値意識の發見若くは發動も、發生的心理的に云へば、各個人の現實生活を重要な地盤としてゐるといふ意味である。それは、現實生活が始めて理想を可能にするといふ意味でもなく、

理想の權利

活によつて保證されるといふ意味でもないことは、繰返して云ふまでもないであらう。吾々は時として土を掘ることによつて小判を發見する。併しそれは土がなければ小判がないといふことを證明するものでなくて、土の底には小判が隱されてゐることを證明するに過ぎない。吾々は又建物を分解し行くことによつてその基礎工事を發見することが出來る。併しこれも亦、木組が始めにあつて後に基礎工事が出來たといふことを證明するに足らぬことは勿論である。さうして意義若くは價値の問題に於ける現實と理想との關係も、亦略々これと同樣に考へることが出來るであらう。吾々はたゞ先驗的價値意識とその力とを發見するためには、深く現實生活を掘つて行く必要があるのである。

三

併し現實が理想に對して重要な意義を有するのは、單に理想發生の地盤としてのみではない。理想實現の場處としてそれは再び重き意義を獲得する。さうして「現實に適合する」ことはこの方面から、新しく、理想主義にとつて缺くべからざる一つの見地となつて來るのである。

それは何故であるか。現實は理想に對立するが故に。この對立をどれだけ根本的なものと考ふべきかは問題であるが兎に角吾々は現實の非合理性を極めて深刻なものと思惟すべき理由を持つ。人間はエホバのやうに、「光あれ」と云つて直ちに光あらしめる譯に行かない。吾々の理想は現實との辛抱強い戰に於いて、本當に徐々として漸く實現の途に就くことが出來る。さうして最高可能の程度に於いてその實現を早くするためには、吾々は與へられた現實の性質に從つて──「現實に適合し」つゝ聰明にこれを支配して行かなければならない。理想は現實と無限の距離を保ちつゝも猶理想としての權利を失はずに行くことが出來るが、併し豫めこれに對して現實を教育することなしに、一足飛びにその實現に向つて焦慮するとき、吾々は太陽に向つて飛ばうとしたイカルスのやうに、地上に墜落することを免れないであらう。觀念によつて飛び越えることが出來るものとして現實を輕視せぬこと、現實をその充分の「重さ」に於いて理解すること──この意味に於いてリアリズムは再び理想主義の缺くべからざる一要素とならなければならぬ。

このリアリズムを缺くために、どれほどのユートピアが失敗に歸しなければならなかつたか。それは今玆に數へ上げる必要を見ないが、私はたゞ一例として別樣の理想主義を一考して置きたい。それはパリサイ人の理想主義である。自分の現實に對する反省を缺いて、他人を責める點に於いてのみ勇敢な似而非理想主義である。To err is human（過誤は人間の常である）といふ言葉は、決して誤謬を是認する理由となることは出來ないが、併しそれは猶パリサイ人を戒める言葉として充分の重みを持つことが出來るであらう。自分の現實を——自分の罪深さの意識を樂々と跳び越えて、他人の現實は實際以上に黑く塗りつぶさうとするところに、パリサイ人の一種特別な矛盾がある。さうして彼等はこの矛盾によつて、世界に於ける理想の實現を少からず妨害する。思ふに人間と人間との結合は、單に最上の價値に對する愛を共有することによつて深くされるのみならず、又過失多き者として相互に寬容し合ふことによつても亦深められる。然るに彼等は後のものを破壞して、理想に向ふ人類の歩みを重く苦いものとしようとするのである。吾々は此等の輩に對しては、特に充分の權利を以てリアリズム——を自己に對するリアリスティックな反省を、要求する理由を持つてゐる。

私は、一般に、理想實現の途に關するリアリズムの要求を、リップスの言葉を藉りて Zweck massigkeit（目的適合性）の要求と名けようと思ふ。今日の一善は目的に適ふものとして是認される。明日に於ける以上の善は、より多く目的に適合するものとして更に嘉納に價する。さうして對象の素質と個性と位置とを無視する抽象的な理想主義は目的に適合せぬが故に空想と呼ばれる。理想主義は此の如き目的適合性の觀念を通して現實と現實生活とに接觸するのである。それは如何なる意味に於いても理想の讓歩若くは制限を意味するものではない。普遍的妥當性を有する價値の意識は、讓歩することなく妥協することなしに、その要求すべきところを現實に要求する。併しそれは最高可能の實現を現實に要求するが故に、個々の現實が最もその性質にふさはしき途を通して自分に接近して來ることを求めずにはゐられない。個人性や國民性や其他千差萬別の事情に應じて、理想を實現するために無數に異れる道を探るの權利は、此處に始めて是認せられる。あらゆる現實生活はそれ〲に彼自身の道を發見しなければならない。吾々はツアラ

「これこそ、自分の道である、汝の道は何處にあるか」と問はなければならない。さうして他人を取扱ふに彼自身の道を以てしなければならない、個性を顧慮すること、歷史を顧慮すること、凡そ對象となる現實の組織を顧みて抽象的普遍と劃一とを排すること――此等のことは皆目的適合性(合目的性)の問題として、理想主義が無視することを許されぬ重要な一視點である。

私は現實生活に對する理想主義の態度を例示するために、經濟生活の考察と理想主義との關係を一言して置きたい。經濟生活は如何なる理法に從つて營まれつゝあるか、これは經濟生活といふ現實の理解を目的とする問題である。從つて吾々は事實上吾々の經濟生活の基礎となつてゐる欲望若しくは衝動を捉へて來ることを主要な仕事としなければならぬ。この問題に對する解答として、「自利」と答へるのは、恐らく「同情」と答へるよりも遙かに正鵠を得てゐるであらう。その限りに於いて「自利」を經濟學の基礎とする思想は斯學に於ける一進步である。又吾々が最大の生產を得るためには如何なる條件が必要であるかを考察するとき、その主要な條件として、欲望の增進と答へることも決して不合理ではないであらう。生產者の所有欲と需要者の享樂欲とが、相俟つて生產量の增大を刺戟することは、否定し難い事實であるであらう。吾々は現實生活の理法として、此等の眞理を無視することが出來ない。併しこれと同時に吾々は、經濟生活の權利に關する問題は――人生の全體に於ける經濟生活の意義に關する問題は、上來の理法によつては未だ何の答へられるところもないことを牢記して置かなければならぬ、假に經濟學者が、自利は經濟學の原理なるが故に、又無制限な欲望は最大の生產を保證する條件なるが故に、共に正當であると主張するならば、彼は明かに專門學者の陷り易き越權に陷つてゐるのである。これは普通の經濟學を以ては答へ得ぬ問題である。さうして又答へる權利のない問題である。この問題は、豫め人生全體の理想は何ぞといふ問題に答へることによつて、始めて解決の端緒に就くであらう。經濟生活はこの理想に照されることによつて、その權利と制限とを同時に享けて來る必要がある。さうして經濟生活の理想として、自利を否認し同情を立てることは、經濟生活說明の重要な一原理として同情を否定し自利を立てることゝ何の矛盾するところもないであらう。前者は倫理的意義の問題として、後者は現實の理解に關する問題としてこれぞ

れに異れる範圍を持つてゐるからである。但し吾々は、人生の理想を經濟生活に適用するためには、經濟生活の理法を充分に顧慮する必要がある。經濟生活そのものゝ性質に從つて、これを人生に奉仕させる必要がある。この點に於いて、目的適合性の問題は、此處にも亦重要な役目を演ぜなければならないのである。

四

以上吾々の考察は主として、倫理的理想主義に向けられて來た。理想は意志と努力とに對する規範として理解されて來た。併し吾々は、この意味に於ける理想主義がそのまゝには適用し難い範圍があることを忘るべきではない。それは主として藝術と宗教との世界である。此等の價値範圍に於いては、現實を理想に近けむとする努力は背景に退くか、若くはその根柢に獨得の觀照を豫想する。此等の文化は、現實の中に永遠の相を觀取する Vita contemplativa(觀照生活)なしには成立することが出來ない。吾々は此の如き價値の範圍に理想主義の觀念を如何に適用すべきであるか。例へばゲーテやシラーの所謂「美しき魂」(Die schone Seele) に於いて、理想主義は如何なる意味に於いて行はれてゐるか。美しき魂の生活は、傾向性と義務とが矛盾なしに調和してゐる生活である。欲するところがそのまゝに義務に叶ふ生活である。故に、それが淨化(フィニラング)と明化(フェアクレールング)との極致に達するとき、其處には最早、指導原理としての理想の觀念を必要とないであらう。併しこの生活に理想の觀念を必要としないのは、それがおのづから理想に叶つてゐるからである。この生活を統一するものは、目的觀念としての理想ではないが、理想の根據としての理念である。美しき魂がそれを自覺すると否とを問はず、イデアの——必ずしも認識論の意味に於ける極限概念としてではなく、生活の基礎として根抵として本質としてのイデアの——自由な實現なしに美しき魂の生活は成立つことが出來ない。故に吾々は、Ideal-ism ではなくて Idea-lism が、此處に最も純粹に行はれてゐると見ることが出來るであらう。理想主義の概念は、この意味に於いて明かに美しき魂に適用する。さうして理想主義をこの意味に解釋するとき、それは又藝術や宗教の範圍に用ゐても何等の支障なき概念となつて來るのである。

藝術上の理想主義とは何であるか。吾々は固よりこの言葉を色々の意味に用ゐることが出來る。理想生活の描寫を目的とする藝術も、理想追求の生活を題材とする藝術も、又理想の見地に立つて現實の世界を觀察批判する藝術も、それぐの意味に於いて理想主義の藝術と呼ぶことは出來るであらう。併しこの意味の理想主義はたゞ藝術上の一流派であるに止つて、これを凡そ藝術の價値を構成する原理と見ることは出來ない。この意味の理想主義的傾向を缺いても、「魂の深みを示す」ことによつてあらゆる藝術は價値を持つことが出來るからである。さうして傾向に於いて明かに理想主義的でありながら、「魂の深み」を缺く點に於いて藝術的價値のない作品もいくらもあり得るからである。凡そ藝術にとつて必要なのは、「魂の深み」を示すこと、單に作者の魂の深みを示すのみならず、ゲーテの言葉を用ゐれば個物の中から「類型」(Typus)を發見し來つてゐる永遠の姿を示すこと、この意味に於いてあるがまゝの「現在」(Gegenwart)を對象の中から刻み出してこれを表現することである。さうして「類型」を發見するといふ言葉は、又「イデアを發見する」と云ひなほすことも出來るであらう。あらゆる藝術はこの意味に於いて理想主義に適はなければならない、換言すればそれはあらゆる對象の中からそれぐの點で永遠の價値を發見して來なければならない。さうしてこの價値を無限の將來に於いて實現せらるべきものではなくて、現實の對象そのものゝ中に與へられてあると見るところに、藝術の藝術たる所以がある。この意味に於いて理想主義はリアリズムの極度と完全に一致すると云ひ得るであらう。

吾々は宗教に就いても亦略々これと同樣のことを云ふことが出來る。宗教には神との距離の意識——少くともこの意味に於いて罪惡の意識がなければならないであらう。そしてその意識は吾々の倫理的生活に根抵の深い衝動を提供するであらう。併しこの罪惡の中にありながら猶神の接近を味ひ得るといふ自覺や、一切を神の攝理と恩寵との中にあると見る法悅の心を缺くとき、吾々の宗教的體驗は恐らく最も本質的なものを失つてゐるのである。さうして一切のものを神に於いて見、一切のものを通じて神を見る點に於いて、宗教は極めて藝術に接近する。宗教に於いては一切の物象や運命のイデアは神である。世界の一切は、恩寵若くば攝理としての神のイデアの象徵である。從つて此處にも亦理想主義は、宗教的體驗の價値を測る原理として、適用の地を發見することが出來るのである。思ふにパリサイ人の根本的

缺陷は、この意味に於ける理想主義の精神を理解する力を缺くところにある。」

併し理想主義の概念を此處まで擴張するとき、吾々は結局「一切はこのまゝにてよし」「一切は許される」といふ立場に歸着しはしないであらうか。從つて吾々は、倫理的理想主義を否定して、如何なる意味に於いても所與に抵抗するなといふ立場に復歸するやうなことはないであらうか。これが吾々を待つてゐる最後の問題である。併し少しく詳しく考へれば、これはどう〳〵廻りによつて眩暈した思索の幻影に過ぎないことを吾々は發見するであらう。一切がこのまゝにてよいならば、轉成しつゝある萬物はこの轉成を續けて行くがよいのである。この轉成に於ける一つの強大な動機として、理想主義は惡との戰ひを續けて行くがよいのである。一切がこのまゝにてよしといふ理由によつて、轉成の機關を一時に停止して、世界を現在の瞬間のまゝに化石させやうとするのは、一切に對する最大の強制である。さうして「一切は許される」ならば、普通的妥當性を持つ價値意識も亦固より許されなければならない。その價値意識に從つて否定せねばならぬものを否定し、強調せねばならぬものを強調することも亦固より許されなければならない。倫理的理想主義も亦「このまゝにてよい」のである。倫理的理想主義も亦「許される」のである。

人はヘーゲルの「一切の現實なものは合理的である」といふ言葉をモットーとして、一切はこのまゝにてよしといふ最も大仕掛な保守主義を辯護しようとする。併し一切の現實的なものは合理的であるといふ言葉は、凡てが現狀を維持したまゝで永遠に繼續しなければならぬといふ意味でないことは、云ふまでもないであらう。「一切の現實なものは合理である」故に朽廢した家を建てなほさうとする意志も合理である。惡と戰つてこれを征服しようとする努力も合理である、腐れたものの滅びるのも合理である、新しき芽が伸びるのも合理である――約言すればディアレクティクの進行は凡て悉く合理である。從つてこのディアレクテ イクの進行を理想の力によつて實現せむとする人間精神の活動も亦固より合理でなければならぬ。ヘーゲルのこの言葉は、恐らく、あらゆるものゝ歴史的意義に對する最も壯大な信仰告白と解せらるべきである。生成するものには生成するところに歴史的意義がある。覆滅するものは覆滅するところに歴史的意義がある。或物は否定さるべきものとして意義を持ち、或物は戰つて征服さるべきものとして意義

味に於いて世界には無意義と呼ばるべきものは一つもない——ヘーゲルは恐らくこの眞理を表現したかつたのであらう。從つてそれは、助成せらるべきか否定せらるべきか、肯定せらるべきか破壞せらるべきかの問題については何の答へるところもない。倫理的理想主義は正にこの問題に答へむとするものとして、充分に存在の權利を保證されなければならぬ。ヘーゲルの言葉によつて倫理的理想主義の否定を支持しようとするものは、理想の觀念がヘーゲルの意味に於いて極めて力強い「現實」であることを體驗し得ぬ者にのみ限られてゐる。

さうして藝術上宗教上の Idea-lism はそれ自身の中から根抵の深い倫理的理想主義を產出せずにはゐられない。それは、あらゆる物の中にそれぐ\永遠の價値を見ることは永遠の立場に立たなければ畢竟不可能であるからである。さうして神の立場に接近することは吾々に課せられた永遠の使命——吾々が無限の努力によつて實現せなければならぬ。理想に外ならないからである。かくて觀照の生活はそれ自身の中に Vita activa（實行の生活）を孕んで來なければならない。愛の實行が神の立場に接近するための不可缺の條件であるならば、吾々にとつて愛の實行は一つの理想である。叡智の開發が神の立場を求むる者にとつて必須の準備であるならば、叡智の教育は吾々にとつて一つの理想である。凡て神と共に働き神と共に生きる人格となるに必要なことは、この意味に於いて悉く吾々の理想と——吾々の倫理的理想とならなければならぬ。故に倫理的理想主義は、充分の力強さを以て、此處に蘇生して來るのである。

農村法律問題

法學博士 末弘嚴太郎

一 はしがき

「農は國の大本である」。其理は昔も今も同じである。吾々人間の食物は多少の海産物を除く外一として農村から來ないものはない。現在の科學進步の程度に於ては、農業以外の何ものも吾々の爲めに食物を作ることが出來ない。それは言ふまでもない明かな事實なるに拘らず、人は兎角それを忘れ易い。健康な胃の持主が稍もすれば胃の存在を忘れ易いと同じやうに。

假りに工業が衰へたとする。それは人類の物質文化の爲め極めて悲しむべきことに違ひない。併し、それでも何人は其生命を保つことが出來る。反之、農業の盛衰は實に吾々の生命の問題である。今假りに農民のすべてが其土地を見捨てたとせよ。若しくは彼等が單に彼等自らの口腹を滿すに足る以外の何物をも生産しなかつたと假定せよ。都會に住み都會に慣れ都會生活を誇る人々、其所に花々しき物質文化の甘酒に醉ふて太平樂を唱へつゝある人々、其所に産を抱き權勢を擁して氣驕れる人々、彼等は果して一週日の生命を保ち得るであらうか。吾々都會人の生命は實は彼等農村の人々殊に其所に直接働きつゝ農夫の手に依つて保障せられつゝあるのである。

所が今の政治家も學者も兎角自己生活の環境たる都會を基礎として政策を樹て學理を考へ勝ちである。其結果農

特殊な經濟的乃至社會的事情、農民に特有な物質的乃至精神的需要は無視――又は少くとも輕視――せられ易い。而かも其誤つた政策を實施した爲めに起る各種の現象を見て、或は農村浮華に流れたりと非難し、或は農民の無智迂愚を笑ふ。そして自己の政策自己の學說の誤りたるを覺らない。

けれども農村のことは先づ農民自らに聽かねばならぬのである。

二

農業の興廢は國民の生命に關する大問題である。限りある土地を如何に利用せば其能率最も大なるべきか。此問題は土地瘦せ土地に乏しく而かも人口の增殖世界に比類なき吾國にとつては、朝野上下力を協せて研究せねばならぬ大問題である。

之を自由主義個人主義の經濟學者に問へば、彼等は答へる。各人をして自由に其土地を有せしめ、自由に其土地を利用せしめよ。各人は必ずや自己の利己心に依り自己の全力を盡して自己の最善の爲めに努力するであらう。かくして獲たる各人努力の結果を總合すれば、それが國の富であり、それが國民全般の幸福を形作る基礎になる。

彼等の答は極めて樂觀的である。そして我國明治維新以來の農業政策は實に此樂觀的な思想に依つて導かれて來たのである。

所が、吾々は今や、各人が自己の利己心に依つて其最善を追ふことは其結果必ずしも公益と合致するものにあらざることを知つた。殊に各人をして自由に其最善を追はしむることは、頓て「分配」の不公平を惹起す原因になることを知つた。而して「分配」の不公平は頓て又直接農業に從事する人々の不平を呼び起し、引いては農村の平和を害し田園荒廢の原因となることをも知つた。玆に於て吾々は一には農村夫れ自身の幸福の爲めに、二には又吾々一般國民の生活物資の源泉を養はむが爲めに、吾國政府が明治維新以來執り來つた農業政策の適否を考へなほさねばならぬ。それは國家全體の福祉に關する大問題である。

三

此問題は、土地瘠せ土地に乏しき吾國に於ては、古來爲政家の最も頭を惱した所である。かの孝德天皇の朝大化改新の一大眼目として斷行された班田制は、實に土地國有と其公平なる分配とに依つて、國民の富の平均を計り一部豪族に依る土地の獨占を防がむとするものであつた。所がそれを愈々實施して見ると、分配すべき土地が足りない。政府は色々とそれに對する對策を考へ又實行したが、其中最も主なるものは「墾田」即ち荒蕪地開墾の奬勵であつた。其れは元正天皇の朝以來歷代の政策として行はれた所であるが、開墾を奬勵する爲めにはどうしても開墾者の開墾地に對する權利を充分に保障せねばならぬ。其土地をして開墾者の永久的私有地たらしめねばならない。其結果墾田政策それ自身としては大に成功したけれども、今度は又土地兼併の弊が盛になつた。即ち富豪乃至權勢者は盛に人民を使役して開墾を爲し競つて土地の兼併を計つたのである。其所で稱德天皇以降は從來と反對に墾田を禁止乃至制限する政策をとるに至り、又屢々「山川藪澤之利公私共之」との勅を下されて、農民共同の天產物收穫地たる林野藪澤が濫りに少數富豪の手中に獨占されないやうにと努力された。けれども、それすら充分に成功せずして貧富の懸隔は益々甚しくなつたのである。此等の事實は實に今を去ること千數百年前の事柄である。併し限りある土地を如何に利用せば、生產及び分配の政策上最も適當なるべきかの問題が古今其軌を一にして我國の爲政者を苦しめたことは此一事を以ても容易に之を推察することが出來る。

四

かくの如く、限りある國土を如何に利用すべきかの問題は、古來我國爲政家の最も苦心した所である。而して歷史上彼等の執り來つた各種の政策中には極めて思切つた大變革を實行したものさへある。而し

のものであつた。

明治維新の土地制度改革は、先づ明治五年二月十五日の太政官布告第五十號「地所永代賣買ノ儀從來禁制ノ處自今四民共賣買致所持候儀被差許候事」に始まり、次いで同年同月二十四日大藏省達第二十號「地所賣買讓渡ニ付地券渡方規則」以下の諸令及び翌六年七月二十八日太政官布告第二百七十二號「地租改正條例」以下の諸法令に依つて實行されたものである。其目的は主として地租賦課の爲め擔税者たる土地所有者を確定するにあつたのであるが、其結果は事實上――歐洲に於て第十八世紀以降に實現された土地解放 Affranchissement du sol と同様――舊幕時代に確立した封建的土地制の崩壊と羅馬法流の個人主義的排他的土地制度の樹立とを呼び起した。

其結果、從來「村持」乃至「一村總持」なりし林野の如きも「町村」なる法人の獨占的排他的所有物となつて仕舞ひ今までは部落有の土地林野等は即ち部落民全體の財産なるが故に部落民共同して之を利用し得べきものとされて居たのに、明治以來の法制に依れば「町村」は之を組織する町村民とは別個の存在を有する法人だと考へられ、從つて町村民と雖も町村財産に對して直接何等の權利をも有すべきものでないと考へられるやうになつた。又舊幕時代の法律に依ると、一村内の田地を村民各自の個人有となさず彼等として輪番に耕地を轉替せしめた所謂「割地制度」が各地方に認められて居たが明治政府は明治五年八月晦日に大藏省第百十八號を以て「不定地年季ヲ定メ割替致シ來候向ハ向後持主相定可申立事」と定めて此制度を廢止した。又從來は各地方に於て田地が――今日の如く地主之を所有し小作人之を借用するのではなく地主と作主との分割所有 Geteiltes Eigentum に屬する制度を認めて居たのに、明治政府は斷然之を廢止して例へば「土地を小作人に買受候歟永小作の權利を地主に買受候歟双方熟議の上私有の分界可相立」き旨を指令し、力めて土地の私有化、個人主義化を計つたのである。

當時新政府樹立の際、當局者が財政の基礎を固める爲めに地租改正從つて土地制度の改革に力を盡したことは當時として正に執るべかりし緊要の政策であつたに違ひない。けれども、之が爲め突如舊來土地制度を廢止して之を極端な羅馬法流・個人主義的・排他的の土地制度に變へて仕舞つたことは、實に今日の險惡なる借地問題小作問題を惹起した遠因

だと謂はねばならない。無論當時を境として我國一般を風靡するに至つた個人主義的・資本主義的・利己的な思想が、一般人の所有權思想を排他的のものたらしめ惡化せしめたることは素より之を認めねばならないけれども、制度として土地の權利關係を今日の如きものたらしむる抑もの端を啓いたものは實に明治初年の地租改正だと謂はねばならぬ。

歐洲に於ける土地解放が農業の發展上多大の効果を齎したと同じやうに、吾國明治以來の土地制度も亦生産政策上確かに成功のものであつた。けれども、現在の極端な個人主義的私有財産制度が當然に分配の不公平を伴ひ惹いては社會の不安を惹超する原因になると同樣、農村に於ける耕地其他林野の個人主義化は既に々々其缺陷を暴露しつゝある。農村は今や全國に亘つて小作爭議の巷となり、甚しきに至つては爭議數年に亘つて解けず、良田化して遂に荒蕪の地となり了つたものさへあると傳へられて居る。而かも現在の極端な個人主義的法制に依れば、かゝる土地の耕作利用を國家公衆の利益の爲めに强制することも出來ないのである。而してかくの如きは實に獨り農村の地主及び小作人にとつて不幸なるのみならず、國家全體の食料政策に關する重大問題である。殊に現在の吾國に於けるが如く、全國の米穀收穫を以てするも能く國民全體を養ひ得ざるが如き狀況の下に於ては、農村の荒廢は即ち國民全體の福祉と極めて密接な關係のある事柄であつて、一日も之を等閑に附することを得ないのである。

五

農村のことは之を農村の人に聽かねばならぬ。都會的な工業的な考を以て農村問題に望むことは極めて危險である。其意味に於て、都會人たる私には此論文を書く資格がないやうに思はれる。而かも敢て此稿を起すに至つた理由は別に存在する。それを簡短に記して置きだ。

明治以來政府當局者の施し來た政策は多く輸入的飜譯的であつた、換言すれば現實的にあらずして理論的であつた。それは維新大改革後の指導的政策としては是認せらるべきものであつたかも知れない。併し一國には各々其國の獨自性がある、ローカルカラーがある。濫りに輸入的な空理的な理論や政策に依つて改廢せらるべ

都市並に工業の方面は比較的容易に之を普遍化乃至理論化し得るけれども、經濟的にも又思想的に

ることの出來ない農村の生活は、一國の內部ですら濫りに之を普遍化し得ない。況んや輸入的な容理的な普遍的理論を以て統一規律し得るものではない。然るに明治以來の吾國政府の執り來つた理論的且指導的な態度は農村並に農業にまで及むで、各地農村の特殊性、否農業其ものの特殊性を無視しつゝある。

學者及び學者の中には法制の力に依つて國民及び國民生活を如何様にも變改し得るやうに考へ、それが出來ないのは國民の覺悟が足りないのである、爲政者はよろしく之を敎育し鞭達せねばならぬ、と說いてる人が少くない。成程それは或る程度まで眞理である。文化的にも經濟的にも遙かに後れて居た吾國をして歐米の先進國と伍することを得しむるが爲に、一大躍進を遂げねばならなかつた明治時代には、かゝる指導的な政策が必要でもあり又實際に成功した。けれども、內容を充實せずして誤りに躍進するは事之よりも危きはない。明治初年以來躍進を續けて今日に進むだ吾々は、今や吾々自らの內省によつて自己の獨自性特殊性を考へ、以て自發的に內容を充實すべき時期に到着したのである。此現象は、舊思想の持主たる爲政者學者の眼には、國民志氣の廢頹として映るかも知れない。さればこそ彼等は只管所謂「民力の涵養」に熱中するのであらう。けれども、吾々を以て見れば今こそ眞に國民生活の上に强固な根底を有する充實した日本文明の樹立せらるべき「曙光」が認められるのだと思ふ。然らば其の「曙光」とは何か。理論・學問・理智に對する「人間性」の反抗が卽ちそれである。此反抗が起つて眞の文化が初まる。徒らに外來の文化を吸收して之に同化し終るが如きは未だ以て文化と稱するに足りない。各人は各其獨自性を發揮して人類文化の發展に貢献せねばならないのである。

此私の言葉を聽いて「反動的」「退歩的」な思想だと擯してはならぬ。事は全く反對である。吾々の文化は外來の文化を吸收するに依つて外形上花々しい躍進を遂げることもある。成程それも或る意味に於て文化の進化と謂ひ得やう。けれども世界人類の文化史的見地より見れば、かくの如き躍進は「無」に均しい。エッチ・ジー・ウエルスが其名著「歷史大系」に於て「從來日本は文化史上僅小な役を勤めてるに過ぎぬ。其鎖國的文明は人類運命の一般的形成に多く貢献する所がなかつた。彼は多くを受取つたけれども、與へた所は少ない」と評して居る通り、人類文化の發展に貢献した

點から見れば、但遺憾吾國は遠く支那に及ばないのである。吾が同胞は稍もすれば明治以來の文化發展を誇る。けれども、其大部分はウエルスの所謂「受取つた」のに過ぎぬ。何所に自ら誇り得る獨自の文化があるか。明治以來吾々は多くを受取つた。而して今や漸次に之を消化しつゝある。今後吾々の力むべきは實に吾々自らの獨自性によつて內發的に眞の文明を創造することでなければならぬ。而して私は實に其「曙光」を近時の我國に認め初めたことを喜ぶと共に、今後益々此傾向を助長したいと思ふのである。

今や吾々の爲めに、深く內省すべき時期が來た。「創造」すべき時期が來た。之を法制に付いて言へば、眞に國民生活と合致した——眞正の意義に於て——「社會化」された法と法學とを「創造」すべき時期が來た。明治以來輸入された西洋法制と吾國の民族的經濟的社會的獨自性との調和融合點を發見して新に文化史的意義ある日本の法制を樹立すべき時が來た。而して其運動は、先づ最も獨自性に富んだ農村の法制から初まらねばならぬと謂ふのが、私が本文を起稿した學問的動機である。」

明治以來吾國の農村は無理解な輸入的政策と理論との爲めに抑壓された。而かも、其獨自性は——都會や工業の場合と異なつて——今日も尙儼として存して居る。其存する所を基礎として、農村の法制を考へ直したい。それが私の希望である。而してそれは獨り農村の爲めのみならず、我國全體の爲めに必要だと私は確信して居る。

此問題は農村の人々自らの深く考ふべき事柄である。而かも抑壓久しきに慣れたる彼等は自ら其獨自性を忘れて居る。又現在彼等を抑壓して居る「理論」「法制」の何物たるかを理解し自覺して居ない。彼等は——現在工業勞働者の多數が先覺者の熱心な敎育指導にも拘らず今日尙何故に自らが貧乏であるかの根本的理由を理解して居ないやうに——何故に彼等の生活が眞に晴々した愉快なものにならないか、其原因を知らず又之を救ふべき道をも知つて居ない。私が今此文を草する實際的動機の一は實に彼等農村の人々に、彼等を上から抑え脅けて居る「理論」や「法制」の何物たるかを、告げたいにある。そうして彼等の自發を促し、同時に彼等から貴重なる現實的の敎を受けたいと思ふのである。

又政府當局者も今や明治以來の農村政策に多大の缺陷あることを認むるに至つた、と私は思ふ。而か

都市並に工業の方面は比較的容易に之を普遍化乃至理論化し得るけれども、經濟的にも又思想的にも四圍の自然と離ることの出來ない農村の生活は、一國の内部ですら濫りに之を普遍化し得ない。況んや輸入的な空理的な普遍的理論を以て統一規律し得るものではない。然るに明治以來の吾國政府の執り來つた理論的且指導的な態度は農村並に農業にまで及むで、各地農村の特殊性、否農業其ものの特殊性を無視しつゝある。

學者及び學者の中には法制の力に依つて國民及び國民生活を如何樣にも變改し得るやうに考へ、それが出來ないのは國民の覺悟が足りないのである、爲政者はよろしく之を教育し鞭達せねばならぬ、と說いてる人が少くない。成程それは或る程度まで眞理である。文化的にも經濟的にも遙かに後れて居た吾國をして歐米の先進國と伍することを得しむるが爲に、一大躍進を遂げねばならなかつた明治時代には、かゝる指導的な政策が必要でもあり又實際に成功した。けれども、内容を充實せずして誤りに躍進するは事之よりも危きはない。明治初年以來躍進を續けて今日に進むだ吾々は、今や吾々自らの内省によつて自己の獨自性特殊性を考へ、以て自發的に内容を充實すべき時期に到着したのである。此現象は、舊思想の持主たる爲政者學者の眼には、國民志氣の廢頽として映るかも知れない。さればこそ彼等は只管所謂「民力の涵養」に熱中するのであらう。けれども、吾々を以て見れば今こそ眞に國民生活の上に強固な根底を有する充實した日本文明の樹立せらるべき「曙光」が認められるのだと思ふ。然らば其の「曙光」とは何か。理論・學問・理智に對する「人間性」の反抗が即ちそれである。此反抗が起つて眞の文化が初まる。徒らに外來の文化を吸收して之に同化し終るが如きは未だ以て文化と稱するに足りない。各人は各其獨自性を發揮して人類文化の發展に貢献せねばならないのである。

此私の言葉を聽いて「反動的」「退歩的」な思想だと解してはならぬ。事は全く反對である。吾々の文化は外來の文化を吸收するに依つて外形上花々しい躍進を遂げることもある。成程それも或る意味に於て文化の進化と謂ひ得やう。けれども世界人類の文化史的見地より見れば、かくの如き躍進は「無」に均しい。エッチ・ジー・ウエルスが其名著「歷史大系」に於て「從來日本は文化史上僅小な役を勤めてるに過ぎぬ。其鎖國的文明は人類運命の一般的形成に多く貢献する所がなかつた。彼は多くを受取つたけれども、與へた所は少ない」と評して居る通り、人類文化の發展に貢献した

點から見れば、尚遺憾吾國は遠く支那に及ばないのである。吾が同胞は稍もすれば明治以來の文化發展を誇る。けれども、其大部分はウエルスの所謂「受取つた」のに過ぎぬ。何所に自ら誇り得る獨自の文化があるか。明治以來吾々は多くを受取つた。而して今や漸次に之を消化しつゝある。今後吾々の力むべきは實に吾々自らの獨自性によつて内發的に眞の文明を創造することでなければならぬ。而して私は實に其「曙光」を近時の我國に認め初めたことを喜ぶと共に、今後益々此傾向を助長したいと思ふのである。

今や吾々の爲めに、深く内省すべき時期が來た。「創造」すべき時期が來た。之を法制に付いて言へば、眞に國民生活と合致した——眞正の意義に於て——「社會化」された法と法學とを「創造」すべき時期が來た。明治以來輸入された西洋法制と吾國の民族的經濟的社會的獨自性との調和融合點を發見して新に文化史的意義ある日本の法制を樹立すべき時が來た。而して其運動は、先づ最も獨自性に富むだ農村の法制から初まらねばならぬと謂ふのが、私が本文を起稿した學問的動機である。」

明治以來吾國の農村は無理解な輸入的政策と理論との爲めに抑壓された。而かも、其獨自性は——都會や工業の場合と異なつて——今日も尚嚴として存して居る。其存する所を基礎として、農村の法制を考へ直したい。それが私の希望である。而してそれは獨り農村の爲めのみならず、我國全體の爲めに必要だと私は確信して居る。

此問題は農村の人々自らの深く考ふべき事柄である。而かも抑壓久しきに慣れたる彼等は自ら其獨自性を忘れて居る。又現在彼等を抑壓して居る「理論」「法制」の何物たるかを理解し自覺して居ない。彼等は——現在工業勞働者の多數が先覺者の熱心な敎育指導にも拘らず今日尚何故に自らが貧乏であるかの根本的理由を理解して居ないやうに——何故に彼等の生活が眞に晴々した愉快なものにならないか、其原因を知らず又之を救ふべき道をも知つて居ない。私が今此文を草する實際的動機の一は實に彼等農村の人々に、彼等を上から抑え着けて居る「理論」や「法制」の何物たるかを、告げたいにある。そうして彼等の自發を促し、同時に彼等から貴重なる現實的の敎を受けたいと思ふのである。

又政府當局者も今や明治以來の農村政策に多大の缺陷あることを認むるに至つた、と私は思ふ。而

と考へてる人々——殊に其中の舊い思想の持主——の中には從來自らの執り來つた「政策」や又其抱いて居る「思想」や「理論」などに根本的の缺陷あることを悟らずして、片々たる眼前の小救治策を弄することにのみ熱中して居るものが少くない。それ等の人々は此際須らく謙虚なる態度を以て農村の獨自性を觀察し眞に農民の要求する所を聽くべきである。私が本稿を草する實際的動機の二は、それ等の人々が深く内省される多少の手引にもなれかしとのさゝやかな希望からである。

通俗を主とした此論文が、學術的に多くの價値を有せざることは自ら充分に之を承知して居る。而して自らも亦都會人の悲しさに深く農村の事情に通せざることを耻ぢて居る。けれども、若しも之がきつかけになつて、多少なりとも農村の法律問題に興味を持つて呉れる人があらば、私にとつて此上ない喜びである。

第一　部落有林野と農村生活

一

都會生活の經濟的特色は財貨經濟にある。都會人はすべて先づ金錢を得た上、それと各種の生活資料とを交換して生活を營む。之に反し、農村の生活には今日尙實物經濟的の色彩が濃厚である。無論農民と雖も其收穫物を賣つたり各種の農業材料や生活資料を買つたりする。けれども、彼等は其食物のかなり大部分を自らの耕作に依つて作り出すのみならず、炊事用の薪炭、屋根を葺き、田を培ひ、家畜を飼ふべき秣草芝草の類を直接近隣の林野から採取して、一家の生計を立てる。彼等の多數が極めて狹小な田畑を耕作するに過ぎず、從つて其收穫總額を金にして見ると、都會人の賃銀生活者の年收總額に比して極めて少額なるに拘らず、兎も角も落付いて一家を支へてゆくことが出來るのは實にこれが爲めである。それが農民生活の特色でもあり又强味でもある。

所で、農村生活者の中でも、自己の收穫物又は小作米を賣つて充分に餘裕のある生活を營み得る者ならば、若しも必要があれば、其生活を全然貨幣經濟化して仕舞ふことも出來やう。けれども、切りつめた最小限度の生活を營むで居る農村の貧民にとつては、彼等が林野から採用する薪炭芝草の類は其生活の必需品である。若し突如として之を得るの途を失へば、彼等がさゝやかな耕作に依つて得る所の收穫物を金にしただけでは到底其生計を支へることが出來ない。極めて手近から例を引いて見ても、海岸地方の農民漁夫の家庭にあつては、其子女が朝夕掻き集めて來る落松葉や松毬を以て主たる燃料として居る。然るに從來其等の子女が松葉掻きに行つて居た松原が都人の別莊地になつて嚴重な垣根の中に圍ひ込まれると、彼等は忽ち燃料の採集に困難を感ずるに至る。彼等が從來松葉を掻きに來た松原は初めから他人のものであつた。彼等は今日の法律に所謂權利として松葉を採集し得たのではなかつた。從つて、其松原が突然都會人の爲めに圍ひ込まれて松葉掻きが禁止されても無論彼等に於て何等の苦情を言ひ得べき限りでないことは現行法上明かである。けれども、法律上の正否は別として、彼等が燃料の採集に苦しみ生活上少からざる困難を感ずるに至ることは明かである。其結果——一つは法律思想の不充分な爲めでもあらうが——生活の必要上彼等は都會人の目を盜みつゝ別莊に入り込むで密かに松葉を掻いてゆく。それを發見した都會人は彼等を罵つて、「盜人」と言ひ、「田舍者はずるい」と謂ふ。成程現行法を八釜しく解すれば彼等の行爲は竊盜に違ひない。併し彼等の爲す所は古來の慣行であり、又生活上の必需に基く行爲である。公平に見て、吾々は何とかして彼等を行爲の適法をしてやる途はないものかと考へさるを得ない。

次にも一つ例を引かう。ある村の住民は古來裏山の豐富な天然林から木材を採取して、或は燃料となし或は木細工物の原料にして居た。所が明治維新の際政府は地租賦課の目的を以て土地調査を爲すに際し、「口碑ト雖何村持ト唱ヘ樹木草茅等其村ニテ自由ニシ來リタルガ如キ山野ノ類ハ舊慣ニ依リ其持持ト定メ民有地ニ編入」し又「從來村山林ト唱ヘ樹木植付或ハ燒拂等其村所有地ノ如ク進退シ他ノ普通其地ヲ利用シテ天生ノ草木等伐採シ來リタルモノト異ル類ハ從前租税ノ有無ト簿冊ノ記否トニ拘ラズ前顯ノ成績ヲ視認シ民有地ト定メ」たれども、「從前秣永山永下草錢冥加永等ヲ納ム

ルモ會テ培養ノ勞費ナク全ク自然生ノ草木ヲ採伐シ來リタルノミナルモノハ官有地ト定ム」ることゝした（明治九年一月地租改正事務局議定山林原野等官民所有區分處分方法參照）、而かも明治以來の法律思想に依ると、「官有地」は即ち國家乃至皇室の私有地であつて、一般人民は絶對に之を犯し得ない。其結果かゝる處分に依つて「官有地」と制定されたが最後、——古來の慣習如何に關係なく——以後絶對に木材の採取を爲し得ないことになつた。併し此場合山林から採取する木材が既に村民生活の必須的要素になつて居たとすれば、彼等古來の慣行は到底一片の法令を以て容易に改廢し得る譯がない。其所で彼等は法律の禁止を犯してまでも材木の採取を續ける。其結果は無論山林盜伐罪として屢々刑法の問ふ所となるに拘らず、古來の慣習と生活の必要とは彼等をかつて其犯行を繰返さしめる。そうして都會人は彼等を罵つて盜伐の惡習ありと云ふけれど、靜かに公平に考へるとき、吾はそう安々と彼等を非難することが出來ないやうに思ふ。成程彼等の爲す所は犯罪に違ひない。けれども彼等として已むなく犯罪を犯さしめて居る國家自らも反省せねばならぬ。私は彼等のために何とか法律を變へてやりたいと希望する。

かくの如く、農村の生活殊に其貧民の生活にとつては、林野其他から採取される天然資源は極めて重要の價値を有する。否、時には絶對的に必要である。此故に彼等をして農村の生活を斷念せしめるか、又は少くとも其生活の形式を變へしむるだけの覺悟があらば格別。然らざる限り學者や政治家が空に考へた理論を當てはめて彼等から實物採取の權利を奪ひ去ることは農村維持の爲め極めて危險である。

二

農村の富豪は耕すべき田畑を有すると同時に、薪炭を採り秣草を刈るべき山林原野をも私有して居る。自家の需用は此等に田畑山林原野の收穫物を以て充分に之を充たすことが出來る。のみならず、必要あらば夫等のものを購ふべき金錢をも持つて居る。所が、僅かに一家を支ふるに足るべき耕地を有するに過ぎない小地主、他人の土地を借りて耕作に從事してる小作人等農民の大多數は、耕作に使用する以外何等餘分の土地を有せざるを通例とする。彼等は炊事用の薪

炭、屋根を葺き、田を培ひ、家畜を飼ふべき秣草類其他農民日常生活の必要品を自己の所有地から採取することが出來ない。而かも貧困な彼等が金錢を以てこれを買ふことの出來ないのは明かである。然らば彼等は何所にそれを得べきであらうか。彼等が權利なしに濫りに富豪の山林原野を犯し得ざるは素よりである。

幸ひにも、現在田舍には到る所に、入會地とか入會山とか其他立合山・入付場・入稼場・稼山・請山・野山・共同山等色々の名稱を持つた原野がある。そうして、村民は、或は時を定め或は隨時に、其土地に來て木を伐るとか草を刈るとか葛根山蕨を掘るとか色々と天產物の共同收益をやる。彼等の一人々々がそれに依つて穫る所の收益額は、絕對的に見れば極めて僅少なものであらう。けれども、それは彼等の生活必需品である。貧困な彼等は、それなしには生活することが出來ないのである。從つて、此種の收益を爲し得る權利の良否及び態樣は彼等にとつて實に生計上の大問題である。濫りに之を無視するは實に彼等の「生存」を無視するものに外ならない。

三

村民は誰彼の區別なく共同して入會山を利用する。無論彼等が共同收益を行ふに付いては舊慣又は特別の規約に依つて、收益權者を部落民中式に資格を備ふるのみに限るとか、人々に依つて權利に差等を設けるとか、一時に入會地に入り得る人員を限るとか、他村よりの雇人をして收益せしむることを禁ずるとか、採取し得る樹木の種類を限るとか、採取器具運搬具を制限するとか、其他色々の制限を設けて居る。そうして濫伐濫穫に因る入會地の荒廢防止を計つては居る。けれども、今日の如く世智辛い世の中になれば、かくして共同的に利用される山林は兎角荒れ易い。明日の生活に追はれた人々に向つて天然資源の涵養に因る永遠の計を求むることは極めて困難である。その結果多數共同的に利用する入會林野の荒廢するのは當然である。而して現在入會地の多數が樹木のない荒れた土地になつて居るのは事實である。山野を荒れたるまゝに放置するのは、生產政策上極めて不利なるのみならず、惹いては洪水の原因ともなる。從つて專ら土地の使用能率發揮・生產の增殖のみを念とする個人主義自由主義的の經濟思想より謂へば、「入會權」は厄介な

ものはない。一日も早く「入會權」を廢止して林野を個人有乃至町村有に移し、さうして之に秩序ある造林を施せば、一方には林産物の増加を來し、他方には洪水を防止し得て一擧兩得である。獨逸に於て第十八世紀の中葉以來漸次に村落共有の林野を分割し、英國に於ても第十七世紀以降同樣の事を實行したのは、實に此思想の實現に外ならぬ。

我國に於ても、明治維新以來政府は一方に於ては森林政策・洪水政策の見地から入會の整理に苦心すると同時に町村自治團體の基本財産として森林を所有することを奬勵した爲め、各地方に於て入會地が廢止又は整理されたことは決して其例に乏しくない。而して其政策は今日も尚其まゝ續行せられつゝある。此目的の爲め從來政府は、町村に向つて、公有林野造林補助金を交付するとか、大字其他の部落有林野を町村に寄附其他讓渡させるやう仲介勸誘の勞を執るとか色々な策を講じて居たが、一昨年から更に公有林野官行造林法を制定して一層公有林野の造林を奬勵するに至つた。即ち從來は唯補助金を與へる等間接的な方法で町村自らの造林を奬勵するに過ぎなかつたのに反し、此法律では國家自らが町村其他公共團體の林野を借りて造林を爲したる上其利益を兩者の間に分收する制度を設けたのである。

かくの如く、林野の利用を合理的ならしめて其能率を增進せしむることは、林産物の增收を計り、河川の荒廢を防止する等の點から見て極めて喜ぶべきことである。殊に從來單なる草地乃至收益少き雜木林に過ぎざりし公有林野に造林を施せば、其林産物の收益に依つて町村の收入が增える。其結果、旨くゆけば町村稅を全廢することすら出來る。けれども、此種の造林政策が眞に村治上喜ぶべきことであるかどうか、又——現在多數の人々が無雜作に考へて居るやうに——將來も益々之を奬勵すべきものなりや否やは、さう易々と論定し得る事柄ではない。

四

町村有林野の收入增加に依る町村稅の減少乃至全廢、一見其名は極めて麗しい。けれども吾々其の麗しき名を讃美する前に、尚大に楯の裏面をも看なければならぬ。

先にも述べた通り、林野から採取する薪芝秣草の類は農村の細民にとつては生活の必需品である。彼等は古來の慣行

に依つて部落有林野の上に入會權を有する。其お蔭で彼等は縦令其耕作を圖る收穫物は僅かでも、兎も角活いて生活が出來るのである。然るに、若しも此等細民の生活需要を全く度外視して、突然入會權を廢止したならば、果して如何なる結果が生ずるであらうか。耕作に困る收穫物の外には、僅かに入會林野の收益を得て漸く生活を營むで居る——謂はゞ自足經濟實物經濟を營むで居る——彼等には、到底金を出して薪炭其他を買ふだけの餘裕がない。然らば、彼等は如何にして此補ひを附けるであらうか？

場合に依つて、彼等は大地主に屬する私有林の山掃除を請負つて多少の收益を許して貰ふやうなことを初める。けれども、かくの如きは、さなきだに苦しい農村細民の生活をして更に、一層苦しくさせるものである。のみならず、之を廣く行き亘らせることは事實上到底不可能である。果してさうだとすれば、入會の廢止は當然に、農村人口の減少を誘發乃至助長するに違ひない。又少くとも、從來の小農制度小作制度等漸次に衰へて農業の企業化惹いては農村生活の貨幣經濟化を惹起すに違ひない。何ぜなれば、入會の廢止は當然に農村細民の生活を困難ならしめるから、彼等は自づから其業を棄てゝ都會に走るに違ひない、又は其業を棄てないまでも從來の如く小自作農若くは小作人として獨立の經營者たることが困難になる當然の結果として、自然大農場の賃銀勞働者になつて普通工業勞働者と同じく貨幣經濟を營むものにならねばならないから。

農業の企業化、小作制度の廢滅、農村の貨幣經濟化、それは吾國に於ても或は將來當然に到達すべき運命であるかも知れない。又或は必ずしも悲しむべき結果ではないかも知れない。けれども、それが農業政策上の大問題たることは言ふまでもないのみならずかくの如きは少くとも從來爲政者の最も恐れ來りたる結果であるに違ひない。從來當局者は一方に於て農村人口の維持に苦心すると同時に、自作農の維持創定に努力して居る。少くとも農業が企業的工業的に經營されて現在の小作人が賃銀勞働者に變はることを欲して居ないのは明かである。然るに其同じ當局者が、林野の合理的利用町村自治團體の收入增加と言ふが如きことだけに專念して、無暗に公有林野の統一、入會の廢止を奬勵し、それが爲め多大の國費——例へば大正九年農商務省は公有林野造林奬勵金として四十五萬七千餘圓を支出して居る——を支出し

るが如きは、明かに大きな矛盾だと言はねばならぬ。

殊に林野統一、入會廢止の爲めに損害を蒙るものは主として農村の細民なるに反し公有林野の開發に依る町村税の廢止乃至減少に因つて主たる利益を受ける者は――從來最も重い税を負擔した――富豪其他有産者であることを考へ合はせると、濫りに入會を廢止することは、近時當局者が實行し又は少くとも實行せむと揚言しつゝある社會政策・貧富緩和の策と全く相容れない矛盾の政策だと謂はねばならぬ。何故それは、主として細民の生活必需品を供給する入會制度を廢止して、貧富の別なく平等に免税の恩惠を與へるのは、言ふまでもなく貧者の財を奪つて富者の懐を肥すものでなければならないから。公有林野の統一に熱中する當局者は果してかゝる結果を欲するのであらうか。

五

無論、私と雖も、入會に依る濫伐濫穫の結果として、林野の荒廢甚しきに至りたる幾多の事例を知る。故に之を整理して入會地の面積縮少を計り且其收益の方法を整理改良するの必要は大に之を認める。けれども、之が爲め農村細民の生活が如何なる影響を受けるか、又惹いては農業組織の上に如何なる影響を及ぼすであらうか等の諸點を充分考慮せずに、唯單純なる個人主義經濟理論のみに盲從し、又は町村の收入増加と言ふが如き眼前の小策のみに捉はれて、濫りに入會の廢止を策するが如きは、極めて危險な政策だと謂はねばならぬ。

殊に入會の廢止は農村の貧民に不利にして富者が利なるに拘らず、其廢止は或は法律上農村有産者の代表者たる――町村會の決議に依つて爲され、又或は農村細民の無智を利用し又は有産者の之に對する經濟的壓力に依つて事實上決行される。例へば、縣當局が或る大字に屬する入會林野を町村に寄附せしめて造林を爲さしめむとするに當つては、先づ町村の有力者と計つて當該大字の有力者を說く。すると元來經濟に餘裕があり且從來の主たる擔税者である彼等は容易に之を承諾する。さうして或は細民の無智に乘じ或は彼等に對する經濟的威力を利用して、彼等の同意連判を強要する。かくして大字の住民にとつては祖父傳來の共同的寶庫であり、且生活の必要品である入會林野が安々と町村の所有に

歸局して仕舞ふのである。而かも其結果細民の生活が脅さるゝに至るのは見易き事實であつて、入會廢止の問題に關聯して屢々百姓一揆的の爭擾が起るのは、實にそれが爲めである。

將來我國の農業が大組織的に且企業的に經營されるやうになるとすれば格別、今日の如き小農制小作制を維持する限り入會の存續――從つて之に因る林野の荒廢――は農業政策の大局から見て必要已むを得さる事柄だと謂はねばならぬ。徒に生産增加の一點にのみ捉はれて濫りに入會を廢止せむとするが如きは、資本主義の工業組織に依つて只管生産の增加をのみ追つた結果反つて大仕掛な工業不安を惹起したと同樣、極めて近眼的に考へる方だと謂はねばならぬ。

此故に入會地整理の必要なることは私も亦大に之を認めるけれども、現在の農村組織を維持しつゝ入會を全廢せむとするが如き政策を以て極めて無謀なりとする。又現在の如く法律上乃至事實上町村有產者の手に依つて殆ど入會を廢止し得る制度を以て絕對的に不可なりとする。整理は必要である併しそれは計算の問題である其實行は組織的でなければならぬ。それは實に「如何程の油を差せば機械の運轉上最も經濟的なるべきか」と同じ問題である。油を差すのは不經濟だからと云ふて、全く油を差さずに機械を圓滑に運轉せしめむとする事は全く不可能である。

然らば入會地の整理は如何にして之を實行すべきであらうか。それは結局技術的計算の問題であつて本稿の直接目的とする所ではない。けれども、其整理を實施せむとする者は先づ必ず現行法上入會權の法律的性質如何を知らねばならぬ。之を知らずして其改廢を論ずるは、現行法を知らずして其改革を說くものに外ならぬ。事之れよりも無謀なるはない。今や筆は自然の順序として入會權の法律的性質の敍述に移り行かねばならぬ。（此項未完）

レニンの國家理論（其三・完結）

福田德三



(十六)

誤傳と曲解とから洗ひ淨められたりと稱するレニンの國家理論は、レニン自らの結構によれば、之を四ケ條に分つ可きものである。『國家と革命』の第一章『階級社會と國家』は之れに相應す可く四節に分けてある。乍併理論上之を適當に按排するときは、右四ケ條は實は二ケ條に大別せらる可きものである。即ち、右章の第一節より第三節迄は、國家の成立と本質とに關する一貫の理論を述べたもので、第四章は問題を全く異にして國家の消滅と其過程とを述べたものである。換言すれば、レニン着題の如何に拘らず、其國家理論の內容は(一)國家の成立と本質(二)國家の消滅と其過程の二ケ條に分れ、此二者は其々に異なる一貫の理論から成立して居るものである。此點は多くレニン評論家——此頃著しく

攻撃を加へて來たところの――が明瞭にするを怠つて居るので、私を以て見れば其爲めに著しい混淆が存するやうである。私が此く嚴密に二大別を劃する所以は、此二ケ條は其々に獨立の價値を有するものであつて、兩者必ずしも有機的に不可斷の連絡を有するものでなく、從つて、タトへ其一破るゝも他は其の爲めに累を蒙ることなきものであるからである。少くとも、私の見解に從へば其一の國家の成立と本質とに關するレニンの國家理論なるものは、前段隨處に於て指摘した通り又た曾つて私の未完論文『マルキシズムとしてのボルシエヴヰズム』に於ても粗々明にして置いた通り、大體に於て眞正にして純粹なるマルキシズムの理論を其儘に傳へたもので、之れに反するカウツキー以下の解釋は、レニンが之を誤傳なり曲解なりとして斥くることは、必ずしも誣言ではないのである。ボルシエヴヰズム研究者中出色を以て稱す可きマウトナーの此點に關する主張は、私を以て見れば、誤傳曲解の上塗りとして、之を排斥せねばならぬものである。マウトナーは、エンゲルスが『主として』"wesentlich"なる語を挿入して居る一事――而も殆んど唯だ此一事のみ――を以て、エンゲルス而して並にマルクスは、壓迫權力以外の性質を種々國家に於て認めるものであると主張して居る。私は此れを甚だ無理なる解釋と認めざるを得ぬのである。之を要するに國家の成立及本質に關しては、レニンはマルクス及エンゲルスの理論の眞意を大體に於て正しく傳へて居るもので、此く正しく傳へたことは、多くの誤傳と曲解とが行はれて居る現在に於て、確かに文獻考證上の――而して又同時に學問上の――一大功績として承認せねばならぬことである。これは、他の關係に於てハンス・ケルゼンが、明かにレニンに對して許容して居る所である。彼曰く。

Wenn Lenin.....die „Wiederherstellung der wahren Marxschen Lehre vom Staat" sich zur Aufgabe gesetzt hat, so muss die im Vorigen an der Hand dnr zumeist auch von Lenin angeführten Aeusserungen Marx' und Engels' versuchte Nachprüfung bestätigen, dass Lenin in theoretioch entscheidenher Punkte die von der offizieller Sozialdemokratischen Parteidoktrin meist ignorierte oder doch sehr vernachlässigte These der materialistischen Geschichtsauffassung über das Verhältni

Staat restituirt hat. Das ist ein unzweifelbares litterarhistorisches Verdienst Lenins. Hans Kels…… Sozialismus und Staat: eine Untersuchung der politischen Theorie des Marxismus. Leipzig. 1920 SS. 69–70.『レーニンは……「國家に關する眞正なるマルクスの理論を回復することを其業としたもので、彼が主としてマルクス及エンゲルスの公言を引照して居るところを精く吟味するときは、理論上決定的な點に於て、レーニンは、公式的社會民主黨の教義が多くは無視し又は然らざる迄も甚だ閑却して居る國家に對する社會主義の關係に關する唯物史觀の教條を回復したものであることを認めざるを得ない。此れ實にレーニンの疑ふ可からざる文献的功績である』

ケルゼンが、斯く云ふは、獨り國家の成立及本質の理論のみに就てゞなく、其の消滅と消滅の經過に關する理論も共に含めて居るのである。ケルゼンは唯だ社會發展の最高最終の階段に關するレーニンの解釋の妥當を否認するのである。

私はマウトナーに與し能はざると共に、此點に於て亦たケルゼンに同ずることが出來ないものである。マウトナーが國家の本質に關するレーニンの解釋を以て言葉にのみ囚はれたりと爲し乍らエンゲルスの『主として』なる一語に甚しく重きを置くことは、私は斷じて不當なりと認むるものであつて、國家の成立と本質とに關しては、レーニンは克くマルクス及エンゲルスの眞意を拉らへたものなりとすることは、ケルゼンと全く同一見解を取ると共に、國家の消滅と其經過とに關するレーニンの解釋までも、マルキシズムの眞意を其儘に正傳して些の遺漏なきものなりとするケルゼンの見解を斥けざる可からずと認むるものである。而してケルゼンが玆に其妥當を否認せんとする社會發展の最高最終階段に關するレーニンの理論は其の『國家と革命』の第五章『國家死滅の經濟的基礎』なる章に載せてあるのである。此問題の考究は私が今試みんとするレーニン國家理論の吟味とは、引離して之を成すのが適當と思ふから本論に於ては論及しないで置く。何れ別論を試むる折もあらうと思ふ。兎に角國家の成立と本質とに就ては、前段の考察に於て粗ぼ盡きて居るが以下其二の國家の消滅と其の經過に就て少し詳しく考へて見ようと思ふのである。

（十七）

國家の消滅と消滅の經過に關するレニンの主張は次の五項から成立つものである。

(一)エンゲルスは、プロレタリアが國家權力を引受けるによつて『國家を國家として』廢止するものであると云ふ、然るに此點全く看過されて居る、此の短い發言の中に、エンゲルスは一八七一年巴里コムミユーンのプロレタリア的革命の經驗を語つて居るのである。エンゲルスの眞意は、プロレタリア革命に依つて、ブルヂオア國家が『廢止』せられると云ふので彼が『死滅』すると云つたのは、此事を指すのではない、社會革命の後に於けるプロレタリア國家の殘物に就て云つたのである。換言すれば、社會革命の後には、プロレタリア的半國家が死滅すると云ふ意である。

(二)エンゲルスは『國家は一の特殊的壓抑權力である』と云つて居る。此れは極めて鮮明な斷言である。而して此から生ずる結論は、プロレタリアを壓迫するブルヂオアジーの特殊權力に代ふるに、ブルヂオアジーを押へ付ける爲めのプロレタリアの一の特殊壓迫權力を以てす可しと云ふこと此れである(即ちプロレタリアの獨裁政治)。其れが即ち國家を國家として廢止する所以である。其れが即ち『社會の名に於て生産用具の所持を獲得する』行爲である此くの如き交迭は、決して『死滅』すると云ふような方法で行はれ得るものでないことは言ふまでもないところである。

(三)エンゲルスは『死滅』すと云ひ、更らに婉曲に、『眠に落つ』と云つて居る。これは明かに、『社會の名に於て、(國家が)生産要具の所持を獲得』した後の時期に就て云つたのである。我々は此くの如き時代に於ける『國家』の政體は、完全なるデモクラシーたる可きことを知る。併しエンゲルスが『眠りに落つ』と云ひ『死滅』すると云つたのは、此のデモクラシーに就てゞあることは・マルキシズムを變造する御都合論者の考へ及ばざる處である。これは一見甚だ不思議のようであるが、其れを理解し得ないのは、デモクラシーも亦た一の國家であつた、從て、國家が

消滅するや否やデモクラシーも亦た消滅す可きものであると云ふことに考へ及ばない人々に取てのみのことである。ブルヂオア國家は、革命によつてのみ廢止せられ得るのである。國家其れ自ら、即ち完全なるデモクラシーは唯だ『死滅』し得るのみである。

(四)エンゲルスは、國家は自ら『死滅』すると云つた後、直ちに、御都合主義者と無政府主義者とに對して具體的宣言を與へて居る。エンゲルスは此條に於て殊更らに無政府主義者に矛を向く可く其の結論を下したものなる事は、右文を讀む一萬人中九千九百人までが看破し得ないのである。エンゲルスは『自由庶民國家』てふ套語を排斥する。我々は資本主義の下に居るからこそプロレタリアに對する最善の國家形態として民主共和國家を主張するのである併し忘れてはならぬ、民主的、ブルヂオア的共和國に於ても、賃銀奴隷制度は庶民の免る可からざる運命であることを。一切の國家は被壓抑階級に對する一の特殊的權力である。國家とし云ふ國家は、皆不自由なもので、決して『庶民國家』たるものではない。マルクスとエンゲルスは千八百七十年代に於て繰返して此點を明言して居る。

(五)エンゲルスは又た實力革命の重要を詳かに說いて居る。彼の眞意は疑を容る可くもない。然るに國家の『死滅』てふ一句のみを重視して、實力革命に關する彼の言を度外に置くは、現狀妥協主義者等の爲す心なき業である。

(以上『國家と革命一五頁より一七頁』に至る)

而してレニンは其主張を要約して云ふよう『マルクスとエンゲルスの實力革命の不可避性に關する理論は、ブルヂオア國家に關するものである。ブルヂオア國家の地位をプロレタリア國家(プロレタリアの獨裁政治)が取つて代はる事は、『死滅』と云ふ道行による能はざるものであつて、普遍妥當則に從つて、實力革命によつてのみ起り得るのである。エンゲルスの實力革命に對する謳歌並に之と相應するマルクスの屢々繰返してゐた宣言は……此等の讃美歌は決して一時的感興の結果でもなく、單なる宣言に止るものでなく、又た論爭上の失言でもないのである。……ブルヂオア國家

に代ふるにプロレタリア國家を以てする事は、實力革命なしには不可能である。之れに反し、プロレタリア國家の廢止、換言すれば單なる國家の廢止は『死滅』てふ行程に於てのみ可能である』と。

以上に引用したレニンの主張が正しいとすれば、國家の消滅と其經過とに就ても、レニンの理論はマルキシズムの理論を其儘正しく傳へたものなること、國家の成立と本質とに關する理論に於けると全く同じかる可きである。果して然るか否か、此れ私が玆に吟味しようと思ふ題目である。

私は嘗て『マルキシズムとしてのボルシエヴヰズム』なる論文の終りに於て言つた『エンゲルスの言には、矛盾ありとは云へないが著しく透明を缺くものあることは爭へない。是れレニンの解釋の起る所以である。我々は、レニンの此の、解釋を單に言葉の上に就てのみならず、エンゲルスの眞意の上に就て吟味せねばならぬ。然らざれば、單に言葉の爭、若くは言語の遊戲に墮するものと云はれても、之を辯ずることは出來ないであらう』と。抑もエンゲルスが『プロレタリアは、『國家を國家として』として廢止する』と云つたのは、一の特定なる國家形態に就て云つたものと解することは、文理解釋上首肯し得られない所である。彼が殊更に『國家を國家として』"Staat als Staat" と語を重ねた眞意は、前後の關係と文理の上からは凡ゆる形態に於ける國家、一切の國家を意味したものと解するものが妥當である。其れをブルヂオア國家てふ一の特殊形態にのみ限るは、言葉の使用法を強ゐて枉げるものである。而してエンゲルスの右の發言の前後のコンテキストは我々をして此く狹く解釋することを許さぬのである。即ち曰く『プロレタリアは國家權力を獲得し而して生産要具を先づ國家所有に化する。併し乍ら其れと同時にプロレタリアは自らをプロレタリアとして廢止する、其れと同時に又た一切の階級差別と階級對抗をも廢止する、而して其れと同時に亦た國家を國家として廢止する』と。（『排デューリング論』三〇二頁）語を改めて云へば、『生産要具を國家所有に化するによつて、階級對抗は廢止せられ、而して此れと共に、其上に築かれてあり、而して其産物たり、其廢止と共にのみ、廢止せられ得る所の國家が廢止せられる。國家廢止實現の第一着手にして其手段たるものは、プロレタリアによる國家權力の獲得であつて、此獲得は取りも直さずブルヂオア國家のプロレタリア國家化を意味するのである。乍去、其れは未だ國家

ち國家なる制度の一切の廢止を意味するものではない。ブルヂオア國家をプロレタリア國家とするには『死滅』てふ道行では不可能なりとすることは、誠にレニンの解釋する通りである。又た其『死滅』すとせらるゝものは、プロレタリア國家のみであることも、レニンの解釋する通りである。乍併、『廢止する』と云ふとは、廣く云つたので『死滅』は、廢止の一階段——最後の——であつて、當然其中に含まるゝものである。エンゲルスが『國家が生産要具の所持を獲得する』と云つたのは、國家を其獲得の主體と認めるの意なることは明白である。左樣すれば、國家が其形態をブルヂオア國家からプロレタリア國家に改めることは、國家の死滅でないは勿論のこと國家其ものゝ即時的廢止ではあり得ぬのである。何となれば、廢止せられた國家は所持獲得の主體とはなり得ぬは言ふまでもないことである。乃ちレニンがエンゲルスは、プロレタリアが國家權力を引受けるによつて國家を國家として廢止すると云つたとするのは、國家を國家として廢止する爲めの第一着手と云ふ意味に解す可きである。エンゲルスは『排デューリング論』(三〇一頁至三〇三頁)に於て云つて居る『國家が眞に全社會の代表者として現はれる第一の行爲卽ち社會の名に於て生産要具の所持を獲得すること——は、同時に又た國家としての獨立的行爲の最後のものである、社會關係に一の國家權力が干涉することは一範圍より次の範圍へと漸次に無用となり終には自ら眠りに落つるのである。人格に對する支配の代りに物の管理と生産行程の監理とが來る國家は廢せられるのでなく死滅するのである。と、マルクスも亦た言つて居る、『生産要具所持の獲得は、一の國家によつて、卽ち支配階級として組織せられたるプロレタリアによつて行はれる』と。言ひ換へて見れば、生産要具を國家の所持に獲得することは、國家消滅の第一着歩であり、最始の經過であつて、國家の死滅は其最終の經過であるので、其第一着歩から最終の經過に見るまでの一切を總括して、始めて國家を國家として廢止すると云ふのである。レニンは其を一部のみに强ゐて限局して廢止と死滅とを全然別事と解釋す可きものとしたのであつて、其責任は勿論第一には、エンゲルスの言ひ表はし方が透明を缺くことに歸さねばならぬのであるが、其小瑕を矯正することが眞正のマルキシズム回復である可きであるのに、レニンは屋上更らに屋を架して、其不透明から二つの異なる經過を產み出さしめて、小瑕を變じて醫す可からさる大疵として仕舞つたものと云はねばならぬのである。レニンは此の無理なる解釋を擁護する爲

めに、エンゲルスが巴里のコムミユーンは『本來の意味に於ける國家ではない』（前掲ベーベル宛書簡第二卷三二三頁）と云つた一句を典據として居るが、前に掲げた『共產宣言』中の一句『國家即ち支配階級として組織されたプロレタリア階級』云々は明かに其樣な解釋の許す可からざるものなることを示して居ることを全く無視して居るのである。エンゲルスが巴里コムミユーンを以て『本來の意味に於ける國家ではない』と言つた眞意は、右の如く理解す可きものでなく、巴里コムミユーンの如く、意識的に其れ自身の滅亡を目的とする國家は、今日現在の國家とは根本的に差違のあるものであることを力強く言表さはんとしたものである。即ち現在の國家は自己肯定——否自己伸張——を以て其生命とし其存在の理由として居るものであるに反し、巴里コムミユーンは、自己否定——將來に於ける消滅——を以て其精神ともし其存在の理由ともして居るものであるから、此意味ではコムミユーンは「本來の意味に於ける國家ではない」と云ふことは極めて妥當なことである、エンゲルスの眞意は取りも直さず此に存するのである。然るにレニンは唯だ言葉丈けを捉らへ來つて『本來の意味に於ける國家ではない』と云ふことは、即ちコムミユーンは國家でないと云ふことである』と極めて無造作にナイーヴに——但しそれは有意であるか無意であるかは別に考究を要する。問題である——斷定して仕舞つたのである。エンゲルスの右の一句は、獨り巴里コムミユーンに就てのみでなく、プロレタリア國家にも適用し得ることは無論レニンが主張する通りである。唯だ其意味の解釋に於てレニンは無理をして居るのである。即ちレニンはプロレタリア國家は、エンゲルスの言ふ如く『本來の意味に於ける國家でなく半國家——又は風袋のみの國家——である』と極めて無造作に言放つて居るのであるが、正當に解決したエンゲルスの右の一句の意味では、プロレタリア國家は、巴里コムミユーンと同じく、自己否定の根據の上に立つものであると云ふ點に於て、本來の意味に於ける國家ではないと云ふ意味であつて、其他の點に於ては、プロレタリア國家は儼然として一の國家たること巴里コムミユーンに同じきものであるとするのが、エンゲルスの眞意であるのである。否、エンゲルスは、更らに其眞意をより明かに示す可き發言を他の所に於て爲して居るのである。即ちエンゲルスは其『家族、國家、私有財產起源論』（前掲一八〇頁）に對し、プロレタリア國家は凡ての他の形に於ける國家と同じく、最强權力者の國家たることを明かに認めて居る、唯だ其最强權力よ

上に強きが如く經濟上にも強きことブルヂオアの如きものでなく、政權上に於ては支配階級ではあるが、經濟上に就ては決して支配階級でなく、其政治上の支配は總て他の經濟上の支配の滅亡を持來すために行使せらるゝものであると云つて居るのである。卽ち政治上に於ては、プロレタリア國家は、如何なる意味に於ても一の權力關係に基くもので、然る限り假然たる一の國家たるものであることを、エンゲルスは一の疑を容れる餘地なきまでに明言して居るのである。されば、マルクス及エンゲルスの眞意によれば、ブルヂオア國家に代つてプロレタリア國家起ると云ふことは、生産要具の所持獲得と共に、一切の國家が廢止せられるとするときは、到底考へ得べからざる所であつて、其廢止と云ふのは、ブルヂオア國家のみに就て云ふことで、其れは決して國家を國家として廢止することではない。從つてエンゲルスが國家を國家として廢止すると云つたのは、ブルヂオア國家の廢止斗りのことでなく、プロレタリア國家の消滅に至るまでの一切を總括して言つて居るものである。ブルヂオア國家の廢止は、國家の國家としての廢止の第一幕たるに過ぎないものであつて、決して其れと同一事と認む可きものではないのである。私有財産の國家化は遠き將來に於ける國家消滅の序幕を形づくるものと認められて居るのである。國家一切の消滅 Aufliebung des "Staates als Staat" は、プロレタリア國家の『死滅』を待つて始めて實現せられるので、決して其以前其以下ではあり得ぬものとされて居るのである。是れがマルクスとエンゲルスとの眞意である。不幸にして兩人とも殊にエンゲルスは此れに就て幾多の發言を爲して居り乍ら、此點に關して稍難解晦澁な言表はし方を爲した爲めに、其眞意は屢々誤解せられ又は曲用せられたのであつて、而してレニンの此點に關する解釋は誤解の最大なるものと斷ずるの外はないものである。此れが言語の遊戯を離れて、文理に就て吟味して得た私の結論であつて、ケルゼンの解釋は餘りに、レニンに同じ過ぎたものと私が斷ずる所以は茲に存するのである。

然らば、此く廣く又た長きに亘つて理解せらるゝ國家の廢止、消滅は如何にして行はるゝか、社會發展の自然的經過によるか、又は實力革命によるか、若しくは兩者の協働によるかは、次に吟味を要する重要な題目である。其れが卽ち國家消滅の經過に關するレニン理論の主題とする所である。以下其考察を試みよう。

(十八)

國家消滅の經過の第一段はマルキシズムの理論に於ては必ず實力革命によらねばならぬとのレニンの解釋は、前に掲げた通りエンゲルスの發言を以て十二分に裏書せられて居るようであつて、此點に關するレニンの理論は直ちに以つて「マルキシズムの理論其ものなりと認むるに一の疑を容れないが如くである。即ち『排デューリング論』に於て、エンゲルスが口を極めて實力を讃美したとレニンの言ふのは決して誤謬でないのみならず、レニンの引いて居る他の箇所即ち『哲學の貧困』並に『共產宣言』中の數句も亦同一筆法に出て居るものであり、又た其他にもマルクスが新ライン新聞に寄せた文章中に、二行缺

の一節がある。從つてレニンの解釋は十分以上に裏書せられて居るように見へる。果して然りや否や。此吟味は唯だ好に從つて斷片的發言を漁り來る丈けでは事足りない。我々は、マルクスとエンゲルスとのあらゆる機會に於ける發言の全體に涉つて考察して、其眞意の那邊に存するかを確めなければならぬのである。ソコデ、先づ第一に問題となるのは、マルクスの「佛蘭西に於ける階級鬪爭」(一八〇年新ライン新聞掲載)を單行本として刊行したとき、エンゲルスが之に書添へた一八九五年三月六日付の序文中の一節である。其の文言は左の通りである。

Die Ironie der Weltgeschichte stell talles auf den Kopf. Wir, die "Revolutionäre," die "Umstürzler," wir gedeihen weit besser bei den gesetzlichen Mitteln als bei den ungesetzlichen und dem Umsturz. Die Ordnungsparteien, wie sie sich nennen, gehen zugrunde an dem von ihnen selbst geschaffenen gesetzlihen Zustand. Sie rufen verzweifelt mit Odilon Barrot: la legalite nous tue, die Gesetzlichkeit ist unser Tod, während wir bei dieser Gesetzlichkeit pralle Muskeln und rote Backen bekommen und aussehen wie das ewige Leben. Und wenn wir nicht so wahnsinnig sind, ihnen zu Gefallen uns in den

Strassenkampf treiben zu lassen, dann bleibt ihnen zuletzt nichts anderes, Gesetzlichkeit zu durchbrechen. Die Klassenkämpfe in Frankreich 1848 bis 1850 von Karl Marx. Einleitung von F. Engels. Berlin 1895. SS. 17-18.

『世界歴史の皮肉は一切の物を顚倒する。『革命黨』であり、『破壞黨』である我々は、反法律的手段並に破壞によつてよりも、却つて合法的手段によつて、遙かにより善く榮へる、之れに反し自ら秩序黨なりと稱する人々は、彼等自らの作り出した合法的狀態の爲めに衰滅に陷る。故に彼等はオヂヨン・バローの口吻に倣つて『合法性は我々を殺す』と自暴的に絶叫するのである。然るに我々は此の合法性によつて逞しい筋骨と血色好き頰とを與へられ、永久の生命を持てるものゝ如く見へる。而して若しも我々が、彼等の機嫌を取る爲めに街頭の喧騷に仲間入するやうな愚を敢てしない限りは、彼等に取つて爲す可く殘される事は、彼等自身に取つて此く迄致命的な此の合法性を打破する外はなかる可きである』。

レニンの語を轉用して評すれば、右の一句は平和手段の極端なる謳歌と云はなければならぬ。實力の讃美者なりとせらるゝエンゲルスとしては全く口にすべからざる言とせられねばならぬ。否エンゲルスは一八七〇年九月四日マルクスに寄せた手紙の中にも更らに左の通り言つて居るのである。(マルクス、エンゲルス書簡集第四巻三二九頁より)

Wie verstehen unter Schreckensherrschaft die Herrschaft von Leuten, die Schrecken einflössen; umgekehrt, es ist die Herrschaft von Leuten, die selbst erschrocken sind. La terreur das sind grossenteils nutzlose Grausamkeiten, begangen von Leuten, die selbst Angst haben, zu ihrer Selbstberuhigung.

『我々は普通恐怖の支配と云ふ語の下に他人に恐怖を與へる人々の支配を意味する、處が事實は其反對である。恐怖の支配は、自ら恐怖しつゝある人々の支配である。所謂恐怖なるものゝ大部分は自ら恐れを懷く人々が自己安心の爲めに行ふ慘虐事の謂である。』

此く全く矛盾した發言の併存することは、從來とても、甚からずマルキシズム研究者を惱ませた難問であつた。而して種々試みられた解釋の中最も普通に認められて居たのは、マルクス及エンゲルスの兩人——殊に前者——には、革命者たる面目と、進化主義者たる面目と二つあつて、少壯時代に於ては、兩人とも著しく革命的急進的であつたが、後年に至り見識の圓熟すると共に進化的、漸進的傾向が強くなつたと云ふにある。從つて或學者はマルクスには Marx, der Revolutionar（革命者マルクス）、とMarx, der Evolutionar（進化論者マルクス）とを區別せねばならぬと主張し此論に贊和する人も斯からず存するのである。成程此れは一應都合の宜い解釋であるに相違ない。併乍都合の好いと云ふことと、兩人の眞意を正しく理解することとは、必ずしも一致しては居らぬのを如何せんやである。マルクス及エンゲルスに革命家たる面目と漸進主義者たる面目とあると云ふことは、私も決して之を否定するものではない、併し其れを以て單に年齢の少老による識見の熟否、若くは善意に解釋した一種のオポルチュニズム又は氣紛れの類と認むることは、斷じて當を得て居らぬと信ずるものである。年代の前後によつて革命家たる傾向の多少を立證しようとする試みは、彼等の共同の出立點である『共産宣言』の成立に關する文獻考證が輙く之を覆へすのである。其は他事でもない。成文となつて發表せられた『共産宣言』に於ては、實力の謳歌を極めた前掲レニン引用の一節のあることは、屢々言つた如く、であるが、其起草の原案の一たるエンゲルスの稿本に於ては、著しく異つた調子の一節が見出されるのである。即ちベルンシュタインが後年（一九一四年）『共産主義綱領』Grundsatze des Kommunismus なる題を附してエンゲルスの遺稿中から公けにした稿本の第十六問の下には左の通り記してあるのである。

Wird die Aufhebung des Privateigentum auf friedlichem Wege möglich sein?

Es wäre zu wünschen, dass dies geschehen könnte, und die Kommunisten wären gewiss die letzten, die sich dagegen auflehnen würden. Die Kommunisten wissen zu gut, dass alle Verschwörungen nicht nur nutzlos, sondern sogar schädlich sind. Sie wissen zu gut, dass Revolutionen nicht absichtlich gemacht werden, sondern dass sie überall und zu jeder Zeit die notwendige Folge von Umständen

welche von den Willen und der Leitung einzelner Parteien und ganzer Klassen durchaus unabhängig sind.（五行缺）

問。『私有財產の廢止は平和的道行に於て可能なりや。』

答。『其が實現し得ることは希はしき事であつて、共產主義者は、之れに對して反對す可き最後の者である可きである。共產主義者は、一切の謀叛が啻に無用なるのみならず却つて目的を達するに有害なることを熟知して居る。彼等は又た、革命なるものは、故意に爲され得るものでないのみならず、革命は何れの場合に於ても、又た何れの時に於ても、時勢の必然的結果として來るものであつて、決して個々の人間又は一階級の意思や指導によつて起り得るものでないことを、熟知して居る。（四行缺）』

此一節は明かに、レニンが『エンゲルスは一八七八年から一八九四年に至るまで始終一貫して頑強に Lartnack 實力革命の讚美歌を社會民主々義者に說つて聞かせて居た』（『國家と革命』二〇頁）と斷言したことの、事實に相違するものなることを立證する外はないのである。右の綱領を起草したときエンゲルスは未だ二十七歲の青年であつた、而して其言ふ所は七十五歲の老齡に至つて公言した所と全く同一であるではないか。年齡の進むと共に見識が圓熟して漸進穩和の傾向を加へたと云ふ通說は、ベルンシュタインが我々の爲めに故紙中から拾綴して呉れた右の一節によつて眞向微塵に粉碎せられて仕舞つたのである。されはレニンも通說も共に此點に於ては、エンゲルスを誣ゐて居るものと斷ずるの外はないのである。

（十九）

以上の吟味によつて、レニンがマルキシズムの理論は、唯一實力革命のみを主張するものであると解釋するは、當を得て居らぬことと一の疑を容れない事となつたと信ずる。併し誤解してはならぬ。此の吟味は、レニンの主張の反對を些も立證して居るものではない。實力革命のみと主張することがマルクス及エンゲルスの眞意でないと云ふことは、決し

て實力革命を否認し又は輕視したことと同一ではないのである。されば、我々は更らに以上の吟味を繼續して行かねばならぬ。其れにはマルクス及エンゲルスの所謂革命、社會に關する理論の吟味に進むことを必要とする。

マルクスは其の『經濟學批評』の序文（一九一九年刊第五版序文五五頁）に於て稍々詳しく自己思索の綱括を敍して社會革命に關する見解を披瀝して居る。曰く

Auf einer gewissen Stufe ihrer Entwickelung geraten die materiellen Produktionkräfte der Gesellschaft **in Widerspruch mit den vorhandenen Produktionsverhältnissen**, oder was nur ein juristischer Ausdruck **dafür ist, mit den Eigentumsverhältnissen, innerhalb deren** sie sich bisher bewegt hatten. Aus Entwickelungsformen der Produktiokräfte schlagen diese Verhältnisse in Fesseln derselben um. Es tritt dann **eine Epoche sozialer Revolution ein.** Mit der Veränderung der ökonomischen Grandlage wälzt sich der ganze **ungeheure** Ueberbau langsamer oder rascher um. In der Betrachtung solcher Umwälzungen muss **man stets** unterschiden zwischen der materiellen naturwissenschaftlich treu zu konstatierender Umwalzung in den ökonomischen Produktionsbedingungen und den juristischen, politischen, religiösen, künstlerischen oder philosophischen, kurz ideologischen Formen, **worin sich** die Memschen dieses Konflikts bewusst werden und ihn **ausfechten**, So wenig man das, **was ein** Individunm ist, nach dem urteilt, was er sich selbst dünkt, ebensowenig **kann man eine solche Umwäl**ungsepoche aus ihrem Bewusstsein beurteilen, sondern muss vielmehr **dies Bewusstsein** aus den Widersprüchen les materiellen Lebens, aus dem vorhandenen Konflikt **zwischen** gesellschaftlichen Produktivkräften und Produktionsverhältnissen **erklären.** Eine Gesellschaftoformation **geht nie unter**, bevor alle Produktivkräfte entwickelt sind, für **die sie wieng genug** ist, und **neue** höhere Produktionsverhältnisse treten nie an die Stelle, bevor die **materiellen** Existenbedingungen derselben im Schoss der alten Gesellschaft selbst au...

sind.

『社會の發展が一定の階段に達すると社會の物質的生產力は、現在の生產事情と撞着するやうになる、之を法理的に言表はして見れば、物質的生產力は今迄其範圍内に運動して居た處の所有事情と矛盾するようになる。生產力の發展形態から此事情は其の束縛に變化する。其時に於て卽ち社會革命が起るのである。經濟的基礎の變化に伴つて、全體の巨大なる上部構造が或は徐に或は急に變化する。我々は此くの如き變化を考察するに當つては、常に經濟的生產條件に於て自然科學的に忠實に認承せられ得る物質的變化と、人間が此の衝突を認識し之れが爲めに戰ふに當て取る理想的の形態──法理的、政治的、宗教的、藝術的、又は哲學的の──とを區別せねばならぬのである。人は抑も個人とは何であるかを判定するに方つて自分が斯く考へるところのみに從ふ可きでないが如くに以上の變革時期を考察するに就ても自己の意識に基いて判斷を下してはならない。我々は此意識を物質生活の矛盾、社會的生產力と生產事情との間に現存する衝突からして說明しなくてはならないのである。一の社會形態は、之れに十分適するやうに一切の生產力が發達し盡くす迄は決して滅びるものではない。新らしいより高い生產事情は其の物質的生存條件が舊社會の懷に於て十分成熟した後に非れば決して起り來るものではない』。

レニンの論敵たるカウツキーは一九〇二年に公けにした其の『社會革命論』に於て、マルクスの此一節に次の如き解說を下して居る。

Kein Wunder, dass dieses Wort, das Jeder gebraucht, fast von Jedem in einem anderen Sinne, von Demselben zu verschiedenen Zeiten in verschiedenem Sinne gebraucht wird. Die Einen verstehen darunter Barrikaden, Niederbrennen von Schlössern, Guillotinen, Septembermorde, die Vereinigung aller denkbaren Scheusslichkeiten. Andere möchten dem Wort jeden Stachel nehmen und es nur im Sinne grosser, aber unmerkbarer, friedlicher Umgestaltungen der Gesellschaft betrachten, wie etwa jene, welche durch

die Entdeckung Amerikas oder durch die Erfindung der Dampfmaschine erzeugt wurden. Zwischen diesen beiden Extremen giebt es noch mannigfache Zwischenstufen.

Marx bezeichnet.........als Soziale Revolution die langsamere oder raschere Umwälzung des ganzen ungeheueren juristischen und politischen Ueberbaues der Gesellschaft, die aus der Veränderung ihrer ökonomischen Grundlagen hervorgeht.

....

Aber bei dieser Definition der Sozialen Revolution möchte ich nicht stehen bleiben. Man kann die Revolution auch in einem engeren Sinne fassen. Dann bedeutet nicht jede Umwälzung des juristischen und politischen Ueberbaues der Gesellschaft eine Revolution, sondern es ist eine besondere Form oder eine besondere Methode der Umwälzung, die man darunter versteht.

Jeder Sozialist strebt die soziale Bevolution in weiterem Sinne an, und doch giebt es Sozialisten welche die Revolution verwerfen und die Soziale Umwälzung nur durch die Reform erreichen wollen. Man setzt die Sozialen Revolution die Soziale Reform entgegen............

Der Gegensatz zwischen Reform und Revolution liegt nicht darin, dass in dem einen Falle Gewalt angewendet wird, in dem anderen nicht............Zwischen beiden lag die Eroberung der politischen Macht durch eine neue Klasse. Darin liegt der wesentliche Unterschied zwischen Revolition und Reform Massregeln, die dahin streben, den juristischen und politischen Ueberbau der Geselischaft den veränderten ökonomischen Bedingungen anzupassen, sind Reformen, wenn sie von Klassen durchgeführt werden, die die Gesellschaft bisher politisch und ökonomisch beherrschten; sie sind Reformen, auch wenn sie nicht freiwillig gegeben, sondern durch das Andrangen der beherrschten Klassen oder durch die Macht

Umstände abgerungen werden. Dagegen sind derartige Massregeln Ausflüsse einer Revolution, wenn sie von einer Klasse ausgehen, die bisher ökonomisch und politisch unterdrückt gewesen und die nun die politische Macht erobert hat, welche sie in ihrem eigenen Interesse notwendigerweise daszubenutzen muss, den ganzen politischen und juristischen Ueberbau langsamer oder schneller umzuwalzen und neue Formen des gesellschaftlichen Zusammenwirkens zu schaffen.

Die Eroberung der Staatsgewalt durch eine bis dahin unterdrückte Klasse, also die politische Revolution, ist demnach ein wesentliches Merkmal der sozialen Revolution in engerem Sinne, im Gegensatz zur sozialen Reform. ——Kautsky, Die Soziale Revolution. 2. A. Berlin 1907. SS. 7-9.

『革命てふ語は誰も皆使用する處であるのに、之を用ゐる人毎に異なつた意味を有し同一の人でも時を異にすると共意味も亦違ふことは實は不思議はないのである。或人々は革命と云へば、包圍戰や、城砦の燒打ちや、ギヨチンや、九月鏖殺や、考へ得る限りの殘虐行爲の結合を理解するかと思へば、他の人々は此語から一切のとげを拔き去り、之れを單に大なる暗々裡に行はるゝ社會の平和的變化と云ふ意味に解釋すること米國發見や蒸氣機械の發見發明と同樣にする、此の兩極端の解釋の間に又た幾多の中間階段がある。

マルクスは社會革命を以て經濟的基礎の變化から起る社會の巨大なる全法律的及政治的上部構造の徐々たる又は急速なる變化なりと云つて居る。

……

私は革命を以て發見發明と同樣に解する定義を墨守しようとは思はない。革命は又た狹い意味にも解釋せられ得る。然る場合には社會の法律的並政治的上部構造の變化は必ずしも皆革命たるのではない。革命は斯くの如き變化の一の特殊形態又は特殊方法と見る可きものである。

凡ての社會主義者は、廣い意味に於ての社會革命の實現を勉むるものである、乍去中には、革命と云ふ方法を取ることを排斥するものもある、彼等は此の社會の變化を『社會改良』によつて實現しやうとする。かくて革命か改良かの對立が生ずるのである。……

改良と革命との對立は、一は實力を用ゐる、一は然るずと云ふことに存するのではない。……

……兩者を別つものは一の新階級が政治上の權力を獲得するか否かの一事である。此れが革命と改良とを區別す可き根本的遠差である。 社會の法律的政治上部構造を變化したる經濟的條件に應す可く勉むる方策でも、其れが從來社會を政治的並に經濟的に支配して居た其の階級によつて遂行せらるるときは、其の社會改良であつて革命ではない、(實力を此場合用ゐても猶且つ左様である)。此れが任意に行はれるのでなく、被支配階級の强請により又は事情の勢力の强要によつて行はれた場合と雖も(其實行者が從來の支配階級なる限りは)、改良であつて革命ではない。其の反同に同一の方策が從來經濟的並に政治的に壓迫せられて居つた階級が、新たに政權を獲得して之を實行するときは、其れは革命である。 此新階級は此獲得した政權を行使するには自己の利益から打算して全政治的並に法律的上部構造の變革從つて社會協動の新形態の創造を急速に實行することもあらう又は徐々に實行することもあらう。 何れの場合でも其は革命である。 卽ち從來壓迫せられて居た一階級が國家權力を獲得するてふ一事――卽ち政治的革命――が狹義に於ける社會革命の根本的特徴であつて、此特徴につて革命は社會改良と區別せられるのである』

從つてカウツキーは『社會革命は先づ政治革命を以て始まる』と斷言して居るのである。 カウツキーの如上の解釋はウイスキーの立場――レニンが裏切者と罵る所の――を正當と認めしむる爲めには甚だ有効有力であるが、其れが果してマックス及エンゲルスの眞意を十分に傳へたものであるかと問はるゝならば、レニンが彼を責むる如く僞造變造の語を以てすることは元より當らないが、決して忠實正確なものと認むることは出來ないのである。 殊に其巧妙な改良革命異同論は、之を評するにオポルチユニズムを以てするも過たりと云ふことは出來まい。 偶々カウツキーの

クチックの巧さを證明するには足りるけれども、マルキシズム解釋論としては詭辯に墮するものと云はねばならぬと思ふ。無論マルクスもエンゲルスも政治革命は多くは短期間に終るもので、社會革命は長期の經過を要するものであることを說いては居るが、併し彼等は政治革命と社會革命とを爾く全く別々なものとしては取扱つて居らぬのである。否凡ての社會革命は同時に政治革命であらねばならぬことを認めて居るのである。其れは『社會全法律的並に政治的上部構造の變革』と云ふことに重きを置いに居るに徵して知る可きである。其反對に彼等は政治革命は必ずしも社會革命――共序幕としても――であるとは認めて居らぬのである。カウツキーは右の解說に於て『社會全體の巨大なる法律的並に政治的上部構造の變革』なる一句を殆んど無視して居る。否之を度外に置くのでなければ、彼の巧妙なデイアレクチックは成立しないのである。法律的上部構造と云へば卽ち私有財產が其最重要の範疇を成すものなることは言ふまでもない處である。從つて社會革命の實現には、私有財產制度の根本的變革を必須とする。其れの伴はない政治革命は之を社會革命と呼ぶ可きではないのである。此意味に於てこそ佛蘭西革命は社會革命でないと言はれるのである。卽ち『共產宣言』は『共產的革命は傳來的所有關係の最根本的打破である(四十四)』と明言して居る。然し玆に最根本的 radicalste と云ふのは必ずしもレニンの解釋する如き實力的と云ふことは同一でないのは勿論である。乍去、『宣言』は更らに云ふ『共產主義の最も手近なる目的は、凡ての他のプロレタリア黨の其れと同じく、プロレタリアを階級とすること、ブルヂオア支配を廢すること、プロレタリアの手に政治的權力を獲得すること』であるとし、其政權獲得の道はデモクラシーを得る爲めに戰ふこと是れであるとして居る。(同上所)而して此の『デモクラシーを得る爲めの戰とは決して修辭上の戰でなく眞正なる實戰を意味するのである。其れは『宣言』の右の所に於て、明かに gewaltsamer Umstur と云つて居るので疑を容れぬし、またエンゲルスが gewaltsame, demokratische Revolution (マルクスエンゲルス書簡集第一卷四十二頁)と云つて居るに徵して知り得る處である。而してエンゲルスは前に引いた『共產主義綱領』の第十八問に於て『此の革命は如何なる發展行程を取るか』の問を設け之に答へて『其れは先づ以て民主的國家憲法、而して其れと共に直接又は間接にプロレタリアの政治的支配を現出するであらう』と云つて居る。卽ちマルクスもエンゲルスも『デモク

ラシーを得る爲めの戰』の具體形態を民主的共和體なりとし此の政治革命の實現は實力を以て其方法とするものとして居るのである。但し此く云ふも、一切の場合に於て、實力革命のみを認めるものでもなく、又た其を以て平和的方法を疏外するものともして居るものでないことは、前段に示して置いた通りである。マルクスもエンゲルスも實際の事情に深く考慮を拂つたもので、從來多くの場合に於て民主的國家形態の實現が實力の行使なくしては行はれなかつた事實に甚だ重きを置いて居るのである（前掲エンゲルス綱領十六を見よ）。乍去、其れはデモクラシーを持ち來たすまでの方法に就て丈けの事で其存續期間の全部に就てゞはない。マルクスもエンゲルスも此の革命の進行に伴ひ其存續期間の全部に亙つて絕へず實力の行使が必要であると主張して居る のではない。言葉を換へて云へば、マルクス（並にエンゲルス）は、革命は實力的にも平和的にも遂行し得られるとするもので、唯だ其の政治的の側面（即ち政治革命）たる『デモクラシーを得る爲めの戰は、Erkampfung der Demokratie 多くは實力的に行はるべきものとしたのであるが、此のデモクラシーの完成、デモクラシーから新社會への推移、即ち政治革命の社會革命化は實力を行使せずして十分に可能であつて、殊に、民主的政體を有する國（第一に英國を考慮に置いて）に於ては然りとして居るものである。レニンは之に反して、一切の革命を實力革命と解し、政治革命も、社會革命も、思ひ切つたる實力の行使を待つて始めて可能なりとし、其國々の現在政體が民主的であらうがあるまいが其れは全く無關係であるとして居るのである。從つて『プロレタリアの獨裁政治』と云ふ語に下す解釋も、マルクス及エンゲルスの其れとは必ずしも一致して居らぬのである。カウツキーはレニンとの論戰に於て即ち此弱點を衝いたものである。要言すれば、國家消滅の經過に關するレニンの理論は、如何樣に見ても決して眞正なるマルキシズムの理論を正しく其儘に回復したものとは到底言ひ得ないである。而して此相違が、實に他方實際政治に於けるレニンの——ボルシエヴヰズムの——態度に對してマルキシズムの立場からの嚴正批判を急要とする所以である。其れは、此論文に於て殘念乍ら未だ考究し殘してある幾多の問題同樣に、他日論述する機會もあらうと思ふ。本論文は一先づ以上の考察を以て終りとして置く。

（終）

共產主義の農民政策

室伏高信

一

レニンにいはせると、……………………………………………て、それは中央では數日、全國に亘つても數週間で目的を達することも可能であるが、社會主義的改造は、ロシアのやうな農民國では非常に困難な事業であつて、どのやうな事情のもとであつても、…………………………。

レニンのこの一言は、彼が政權を掌握してから間もなくその所謂共產的農民政策を提げて立つた時の演說の一節であるが、ロシア革命は、共產革命となつてからも既に四年半に垂んとしてゐる間に、そはこのレニンの演說の一節を、文字通りに辿つてきてゐるやうに思はれる。十一月七日午後一時、トロツキーがペトログラードの勞兵會席上で、假政府は既に消滅したと宣言した瞬間に、ロシア共產革命は、レニンの所謂數日にして成立したのを見るのであるが、これとともに、過去四ケ年半の歲月は、社會主義的改造が、特に農民問題において、レニンの所謂一朝一夕にしては解決することのできないものであることを敎へてきたのである。

顧みればロシアの共產革命は、多くの內憂外患のために、長い苦るしい戰を戰つてきた。內には資本家階級の抵抗と鬪はねばならなかつたとともに、外にも英佛の資本主義、若しくは極東においては日本の×××の攻擊と不斷の戰を戰はねばならなかつたのである。そして彼を東西南に包圍する資本主義の總攻擊のために、彼は人命のうちへにも經濟上にも、どれだけの損害を蒙つてゐるか分らないし、またある時は諸外國に對して屈辱的な退讓をもしなければならなか

つたのであるが、しかしこうした損害なり、退讓なりは、決して…………………………………………。それは却つて資本主義そのものの弱點と、弱點から、る恐怖心と貧慾とを意味してゐたものといふことができようし、それにロシアの共產主義は、プレスト・リトウスクの條約以來、周圍の資本主義に退讓をしてきたことが少くないにしても、それと同時に、周圍の資本主義をまた屢々彼に退讓しなければならなかつたうへに、この共產主義と資本主義との國際的抗爭の結果は、ロシア共產主義だけが經濟上なり、その他において損失をうけたのではなくして、周圍の資本主義の諸國も、また等しく大なる傷手を負ふてきたのである。今日の中部及西部ヨオロツパの經濟的破產の狀態は、少くともその原因の一つが、對露政策の誤謬からきたものといふことができるからである。特に對外關係からくる共產主義の苦境は、主もなる諸國における資本主義の倒壞によつて脫却することのできるものであるし、その資本主義の倒壞は、社會主義者の間では等しく信んぜられてゐる進化の過程であるから、縱令ロシアの共產主義が、外部的資本主義の……………………………………とによつて壞滅するやうなことが起るにしても、……。

しかし世界の資本主義が倒れても、……………………………………………………………………………………、至難な一つの大問題が横はつてゐる。農民問題がこれである。

ロシアの農民問題は、ある程度まで、ロシア獨特の問題であるが、縱令それがロシア獨特の問題であつても、ロシア革命の成敗が、世界の社會革命のうへに、少くとも一時は、殆んど致命的にも近い影響をもつてゐるものだとすれば、そのロシア獨特の問題は、また等しく世界の無產者階級の共通問題でなくてはならぬ。特に、程度の違ひはあるにしても、ある種の、例へば英國のやうな工業萬能國を除く時は、佛蘭西でも、獨逸でも、米國でも、殆んど世界の各國を通じて農民が人口の重要な部分を占めてゐる以上、農民問題は、獨りロシア共產革命の前の大問題であるば、

そ
に、また同時に世界の共通問題として、世界のあらゆる無產者によつて考究されなければならない、當面の大問題として、恐らくは最大問題であらねばならぬ。匈牙利の共產革命が失敗に終つた後に、その革命の指導者の一人であつたオイゲン・ファルガは、共產革命について次のような意見を述べてゐる。曰く、無產者階級の獨裁政治にとつて、最も至難な問題は、政治的にも經濟的にも、農民問題であると。(Dr. Eugen Varga, Die wirtschaftspolitischen Probleme der proletarischen Diktatur, S. 10.)

二、

ロシアの人口は一九一三年に約一億五千萬人であつたものが、今日ではブレスト・リトプスク條約以來減少して一億二百萬ばかりになつてゐるのであるが、都市對農村の人口率は今も昔も同樣であつて、總人口の八割乃至八割五分は農民であるから、農業は、ロシアでは國民經濟の基礎であり、また從つて農民問題はこの國での政治上の最重要問題となつてくるわけである。しかもロシアの農民は長い間無知の狀態に置かれてきたし、耕作の方法も幼稚であつて、從つて廣漠なる土地を前にしながら、常に窮迫の生活に苦しむできたことは、トルストイや、ツルゲネフや、若しくはドストエフスキーなどの小說を讀むでゐるものの皆承知してゐるところである。また從つて農民問題はロマノフ王朝の政治家が多年手を燒いてきたところで、一八六一年に有名な農奴解放が行はれたのであるけれども、またその結果は地主の土地が幾分減少して農民の土地が多少增加してはゐるのであるが（一八六三年から一八九二年の間に貴族は八億二千百万留の土地を買つて却つて十四億五千九百万留の土地を賣つてゐるに對し農民は三億三千五百万留の土地を買つて九千三百万留の土地を賣つてゐるに過ぎない）人口の增加はそれ以上に激しかつたために土地の分配の不平等もまた少しも改善された跡を見ないのであつた。一九〇五年に三萬の大地主のもつてゐる土地總面積が約七千萬デシアチーネであるのに對し、一千萬の農場のもつてゐた土地の總面積が矢張り七千萬乃至七千五百萬デシアチーネであつたことによつて見ても、土地の分配がロシアの農民の間に甚だしい不平等の懸隔を見せてゐたことを知ることができるのである。(N. Lenin, Zur Agrarpolitik der Bolschewiki, S. 18) また從つて農民の生活狀態は少しも改善されないで、貧困からくる整

訴、土地の不平等からくる不滿、またその不滿愁訴からくる騷動一揆の類が絕ゆることがなく、ロシアの農民は、陰鬱な革命的精神に鼓舞されながら、その傳來的欲求である「土地と自由」を見つめながら、更に大なる改革または革命のきたるのを待つてゐたのである。

一九〇五年の革命の後にストリッピンの改革が行はれたが、それは後に述べるとほりたゞロシアの農民問題を一層困難に導いたに過ぎなかつた。かゝる間に一九一七年の革命が始まつたのであるから、時の假政府は第一に農民問題を解決しなくてはならなかつたのであるが、妥協と日和見とを得色としてゐた假政府は、「土地と自由」を口にしながらも、たゞ三月十五日の布告でもつて、從來ザールの皇室領であつた約四百萬デシアチーネの土地を國有に移すことを宣告しただけで、土地政策の大綱についてはたゞ四月二十一日になつて土地委員を任命しただけに止まり、一般農民の要求、農民の熾烈たる階級意識、土地に對する農民の傳來的の慾望に對しては、たゞ「自由諒解」(freiwillige Verständigung)といふ、彼一流の日和見主義の無能を發揮して、凡てを國民憲法會議によつて決定しやうとする、一時逃れの政策しか實行することのできなかつたことを暴露した。この間にあつてレニン一派の共產黨(この當時は社會民主勞働黨と稱した)が常に銳敏な注意を農民問題に拂つて、假政府の「自由諒解」の政策を抨擊しながら、一方「土地を農民へ」(Der Boden den Bauern)のデマゴギッシではあるけれども、また同時に農民の心胸に訴へる大標語を掲げて立つたことは、啻にロシアに於ける共產黨革命の門出において成功した最大の原因であつたに相違ないのである。繰返していへばケレンスキー一派の假政府は「土地と自由」を口にしながらも、尙ほそれがロシア革命の前に如何に偉大な役割を演ずべきかを確實に把握することができないで仆れ、レニン一派の共產黨は、ロシア革命の前に於ける「土地と自由」との意義を銳敏に、或はデマゴギッシに墮するまでに銳敏に把握したために、ロシアの農民國に於いて、共產革命のために、政權を獲得することができたといひえられるのである。この意味でロシア共產黨の農民政策は、その門出においては、即ち共產黨宣言にいふところの、無產者階級の手に政權を掌握するといふ、共產革命の第一歩においては、その農民政策に成功したといふことができるのである。

三

ブハアリンに從へばロシア共産黨の經濟政策の基礎は生産手段の國民化（Nationalisierung）である。國民化とは生産手段を國家の掌中に歸せしめることであるが、それは資本主義の諸國における國有事業のような國家資本主義ではなくして、國家社會主義の實行なのである。即ち國家としてのブルジョア階級の手に資本を集中することではなくて、國家としての無産者階級の手に資本を集中するとである。…………………………。（N. Bucharin und E Preobraschensky, Das A B C des Kommunismus, S. 258-9）土地政策の理論的基礎をなしてゐるものも一般經濟政策のそれと同樣にまたこの國家的集産主義であるといふことができよう。即ち第一に土地におけるブルジョアヂイを公奪して、それを無産者階級としての國家に集中することが第一義であつて、それがために、土地の私有制度を廢して所有權を國家に移し、第二に土地における農民的並に小規模經濟を廢して集産的大經濟組織に轉ぜしめることを理想としてゐるとされてゐるのである。（Ebenda S. 298）從つてロシア共産黨の農業政策の理想は、農業の社會化、國民化または國家集産化であることとされてゐるのである。

先づ第一の方から見るに、土地の私有權を廢して國民有、人民有若しくは國有とするといふことはロシアの共産黨が政權を掌握しなかつた時でも、またその後においても、こうした理想の持主であることは、社會主義若しくはマルクス主義を奉ずる一團として當然過ぎるほど當然なことであつて、このことが最も明瞭に説かれてゐるのは一九一七年四月に行はれた共産黨全露大會の農民問題についての決議である。この決議の全文はレニンの前掲の小冊子「ボルシエヴヰキの農政」のうちに收錄されてゐるが、それによると、凡ての土地は「直に且つ絶對的に」、無賠償で沒收をされること、そしてその沒收された土地は國有とされることを規定してゐるうへに、その[illegible]有といふことの意味は凡ての土地のうへに存する財産權が國家の掌中に歸することである（Die Nationalierung bedeutet die Übergabe der Eigentumsrechte an

den gesamter Grund und Boden in die Hände des Staates) と解釋まで附けてゐるのである。この決議文によつて見るとロシア共產黨の土地政策は、先づ社會主義若しくはマルクス主義の原則(共產黨宣言には土地所有權を公廢して地代を國庫に移すことを宣言してゐる)に則つて、土地の私有制度を廢止し且つそれを國家の掌中に移すことを目的としてゐることが明瞭である。そしてこの場合に彼が「國家」といつてゐるのは、階級としての國家、即ちレニンを初めとして共產黨の理論家の繰返して論じてゐるとほり、國家としての無產者階級、若しくは無產者階級の獨裁政治の意味であると見なければならないのであるから、この決議の意味は、土地における一切の私有財產權が廢止して、それを無產者階級の獨裁權の掌中に集中することであつて、その決議に現はれたロシア共產黨の土地政策はその第一步において共產黨としては徹底的なものであると見ることができるのである。またこの決議によつて見てもロシア共產黨の土地政策の根本理想の存在するところを知ることができるのである。

しかしこの理想がどれだけの程度において具體化され、若しくは實現されてゐるかといふ點になると、彼の理想と實行とが甚だ遠いこと、――その政權掌握の最初から甚だ遠いことを見るのである。即ちロシア共產黨が冬宮を占領した翌日(一九一七年十一月八日)全露勞農兵會議第二回會議の決定として發表された「土地布告」を見ると、土地に關する地主の所有權(Das Eigentumsrecht der Grundbesitzer)は廢止されることを宣言してゐるのであるが。それは單に地主の所有權を廢止してゐるだけであつて土地に關する一切の所有權の廢止となつてはゐない。無論この場合でも、土地問題は將來國民憲法會議を召集して、それによつて決定するといふことになつており、その國民經濟會議に對するレニン政府の土地政策の大方針をも同時に發表してゐるのであつて、それによると土地に關する所有權は、國家に屬してゐるものと、前皇室、前露帝、寺院、教會に屬してゐるとを問はず、または公領財產であると、相續財產であると、私有地であると、公有地であると、若しくは農民有であるとを問はず、みな一樣に廢止されることとなつてゐる。その後約束された國民憲法會議は召集されなかつたけれども、同年二月(一九一八年二月十九日)になつて全露勞農兵會議の中央執行委員會の名によつて所に「土地社會化の布告」が發表されて、それによつても土地に關する凡ての私有財產權を

（土地社會化布告第一條）またその後發布された憲法によつても同様の規定が挿入されてゐるから（一九一八年七月十日ロシア憲法第二章第三條第一項）私有權の廢止の原則は大體において、ロシア共産政府の方針として聲明されてきたといふことができるのである。しかしその土地に關する私有財産權の廢止の方針がどれだけ事實に行はれてゐるかといふ點になると、それが甚だ曖昧である。

といふのは、ロシア共産黨またはその政府は上述のとほり屢々土地私有權廢止を聲明してきながら、その財産が國家の掌中に歸するのだと聲明したことは。前述の共産黨の農業問題に關する決議（一九一七年四月二十四―九日）だけであつて、その他の場合には例へばそれが「人民財産（フォルクス・アイゲンツゥム）」に轉するとか（一九一七年十一月八日土地布告の訓令）または「國民財産（ナシナル・プロパァティ）」となるとか（憲法第三條）いつてゐるし、また政權獲得前であつても、「全人民の財産（アイゲンツーム・デス・ガンツェン・フォルケス）」となるか（一九一七年五月二十二日レニンの演説）若しくは「人民の全體（ゲザムトハイト・デス・フォルケス）」に屬するものであるとか（一九一七年五月全露農民代表者會議へ提出されたレニンの決議案）といふような言葉を使つてゐるに過ぎない。若しそれ等の言葉が所謂（Demokratie Uberhaupt）を信奉する一派の人たちによつて使用されたとすれば、こうしたぼんやりした言葉にも明確な意味を捕捉することは必ずしも困難ではないのであるが、レニン一派の共産主義の理論家または政治家の諸君のようにこの（Demokratie Uberhaupt）を冷笑して、無産者階級の獨裁政治を主張し、そして生産手段がこの無産者の獨裁權に掌握されることを理想とするものにとつては、この「全人民の財産」だとか、または「人民全體」の財産だとかいふ言葉だけではあまりに漠然としてゐて、その財産權の主體がどこにあるのか明瞭に觀取されないのである。またこれだけでは、共産黨が常に半ブルヂョアであるとか、或は日和見主義であるといつて非難を續けてゐる社會革命黨若しくはメンシエヴヰキの土地政策として國民憲法會議を通過したもの（一九一八年一月五日）に比べて何の相違してゐるところをも見ないのである。（M. K. Eroshkin, The Soviet in Russia, pp. 31-2參照）つまりそれはロシアの諺にあるように、「土地は何人にも屬しない、土地は神に屬する、土地は人民に屬する」といつたような、極めてぼんやりした意味しかもつてゐないものといはなくてはならない。このことは後に述べる土地の分配または使用權の説明の場合において、それが一層社會化、國民化または國家集産化の理想から遠ざかつてゐることを見る。

四、

次には土地經濟の方面であるが、この方面からいつても共産ロシヤの農業または土地政策の理想とするところが、個人經濟でなくて、共同經濟（Kollektive Wirtschaft）または共同大經濟（Kollektive Grosswirtschaft）にあることはその標榜するところから見て疑の餘地がない。この共産主義の理想は既に土地社會化の布告（前掲一九一八年二月十九日）のうちに示されてゐる。それによれば土地の分配をうけるもののうちに國家があり、公共團體があり、農業用の土地についても、農業自治體、農業協同組合、及び農村自治體があるのであつて、これ等のものは何れも個人的農業經營に對する團體的經營を意味してゐるものにほかならないからである。またこの布告では共産ロシヤの農業社會化の理想を明らかにしてロシア國家が、社會主義の最急の實現を期するために「耕作の集團組織」にあらゆる物質的及道德的奬勵を與へる旨を宣言としてゐるのを見るのである。その翌年の土地布告（一九一九年二月十四日）はこの方針に更に一歩を進めてゐる。即ち前述の協同經濟團體のほかに、更に「ソヴヰエット農場」を設けることになつてゐるのであるが、何故にこの「ソヴヰエット農場」が前者に一歩を進めてゐるかといふに、前者即ち一九一八年の土地社會化の布告によつて創定された三種の協同經營體は、その農業上の協同經營體であることにおいて「ソヴヰエット農場」と異るところがないが、前者は單なる自由任意的の團體であるに對し、後者は國家に屬し、且つ國家によつて直接經營を行ふものであるからである。そしてこの布告によると、農業團體としての地方自治體のほかに、「大規模なソヴヰエット農場」を設けることが、社會主義經濟の實現のために必要であること、並にこうして協同經營體を設けることが「農業の個人的收取の樣式から協同的樣式へ」の變化を意味してゐるものであることが宣言されてゐる。且つその第八條のうちでは、農業基金が、第一にこれ等の協同經營體に使用されることを規定してゐるから、農業の協同的經營、若しくは集産主義の理想は、共産政府の方針のうちに、充分これを觀取することができるのである。レニンの演說に從へば、（第一回の全露土地局、貧民委員會及自治體會議席上）かくして共産ロシアは「組織的に協同農耕の方へ」と動いているとされたのである。（Lenin, Land Bevolutionin Russ

產ロシアは、理想だけでなしに、實際上「組織的に協同農耕の方へ」と動いてゐたであらうか。

このことを明らかにするためには先づ、土地分配のことから述べなくてはならない。無論土地の分配といつても共產ロシアで土地私有權の廢止されたことは前に述べたとほりであるが、しかしその代りに土地の使用權(das Recht der Nutzung des Landes)が創定され且つ或程度の果實の收益權が與へられてゐる。從つてこゝに土地の分配といふ場合に土地の所有權を分配することの意味ではないが、土地の使用權并に或る程度においての果實の收益權を分配することの意味となるのである。

共產ロシアでは土地の使用權の基礎的の規定としては憲法第三條を擧ぐべきである。それによれば土地の私有權が廢止されて、それが國民財產となり、そして前の持主に何の補償なしに、各人の耕作能力に應じて農業者の間に分配されることになつてゐる。このことの一層具體的に定められてゐるのは「土地社會化の布告」(一九一八年二月十九日)であつて、それによると土地は使用の目的のために何等の補償もなしに凡ての勞働する人民に與へられることになつてゐる。そしてこの規定に基いて實際に土地の分配をうけるのは一、文化的または敎育的目的のためにする國家と、それからソヴヰエット管理下にある公共團體二、農業の目的のためにする農業コムムーン、農業協同組合、村落コムムーン及び個人または家族三、建築上の目的のためにするソヴヰエット官憲、公共團體、家族、個人、及び特別商工業及運輸の事業四、交通上の目的からくるソヴヰエット共他である。そして個人に對する土地の分配の割合は、土地の生產力によつても、氣候の關係によつても同一でなく、それはロシア內における各農業地帶によつて相違するのであるが、その大原則とするところは、「食物及勞働平準單位」を超えない範圍において(土地社會化法第二十五條)且つ勞働量に應じて分配するといふことである。(勞働力の單位は十八歲から六十歲までの間の男子を一單位として、十八歲から五十歲までの女が〇・八、十二歲から十六歲までの男女が〇・五、十六から十八までの男が〇・七五、同上の女が〇・六と定められてゐる)即ち土地の使用權(ある程度の收益權を合せて)は、個人としての農夫と、協同經營體との二種類の經濟組織にと分割されるものであることを知るのである。だからこの形のうへからいへば、共產ロシアでは、事實上、農業上の經濟政策として二つの方針、即ち個人主義的經濟と集產的經濟との二つの方針が並び行はれてきたといはなければならないのである。

ところで、この土地の分配が個人經濟と協同經濟と二種の經濟組織に對して、どのやうな割合で分配されたかを知ることが必要になつてくるが、ロシアの土地面積は、ブレスト・ブスク條約以前には、國有地一億三千八百萬デシアチーネ餘、農民有がこれまた一億三千八百萬デシアーチネ餘、個人有またはインスチツユト有が合せて一億一千八百萬デシアチーネであるが、そのうち耕作に適する土地の面積は、一九一六年の計算では七千百四十三萬デシアーチネであるに過ぎない。(Bucharin and Preobraschensky, Das A B C des Kommunismus, S. 209-305)そしてそのうちのどれだけのものが農民に屬してゐるかは精確に知ることのできる統計は存在しないが、ブハアリンに從へばその大部分は農民に屬するものであつて、農民によつて獲得された土地は四千萬デシアチケーネであるとされてゐるのである。(ebenda, S. 301-2)

(註一) ヴアシリエフの計算に從へば一九一八年にロシアの二十二州內で、基本準備地即ち地主、貴族、教會其他から公奪した土地から成立してゐる土地の面積一千五百八十萬デシアチーネであるが、其中一千二百八十萬デシアチーネは個々の農民に分配されてゐると(Soviet Russia, May 15, 1921, p. 495)

これに對し、「ソヴヰエツト農場」または地方農業自治體にどれだけ分配されてゐるかといふに、一九一九年秋にこの「ソヴヰエツト農場」の組織された數は三千五百三十六團體、それに屬する土地の面積が二百十七萬デシアチーネ市邑經濟體に屬するもの約二百萬デシアーチネ、それからコムムーンの數が一九〇一で使用地面積が十五萬デシアチーネであり、アーテルと協同組合とに屬する土地面積が合せて四十八萬デシアチーネであるから、これ等の協同經濟體の全部を合せても、その使用地總面積が四百八十萬デシアチーネであるに過ぎない。(A B C des Kommunismus, S. 309-310) 更に、一九二〇年一月農務大臣セルダの報告によると、共產ロシアの三十二州內で公沒された土地面積が二千四百十五萬一千デシアチーネであつて、そのうち二千〇七十九萬八千デシアチーネ即ち全體の公沒地の八割六分が個人經營の農民に分割され、そしてその他の一割四分が協同經濟體に分割されてゐるのである。(Leo Pasvolsky, The Economics of Communisms, p. 83)

こういふわけで共產ロシアでは土地の分配、土地の使用、從つて農業の經營は、その大部分が個人

るのであつて、且つこの個人農場においてはその土地の使用は農民各自が自由任意に行ひ、その農業經營は各個人がいその各人の責任と管理とにおいて行つてきたのであるから、各個人はそれ〴〵その經營體または農場においての主人公であつて、決して、國家のもとに働く賃銀勞働者でもなく、また集産主義のもとに働く農民でもない。從つて共産ロシアには集産主義の理想のもとに、集産主義と個人主義との二つの經濟制が行はれてきたといふにしても、事實上にはその大部分に亘つて個人主義的農業制度が行はれてきたものであるといはなくてはならぬ。

無論、この個人主義には大なる制限が置かれてゐた。或は個人主義を殆んど不可能に終らしめるほどの一大制限が置かれてきた。即ちこの土地の分割は所有權の分割でなくて使用權の分割であるとされてゐるだけに、それには所有權の成立に必要な處分が禁んじてあり、且つ收益權が大きな制限をうけてきたのである。即ち土地の賣買は禁んぜられてゐるうへに一定條件の成立とともに土地の使用權または占有權も停止されてゐる（前掲社會化布告）且つ土地から生ずる果實は、一九一八年五月十四日の穀物管理令によつて、一切自由處分を禁止されてゐる。即ちこの法令によると凡ての農民は、その土地から生産された穀物のうちで、自分の手許に保有しておくことのできるのは、たゞ自分及其家族の次の收獲期まで、即ち一ケ年間の食料に相當する一定標準量と並に土地の耕作上必要な種子を除くと、一切これを手許に置くことはできない。そしてその餘剩穀物は官憲に對して、官定の代償で引渡さなくてはならないこととなつてゐる。且つこれ等の農民が自分の農耕上から如上の餘剩穀物を生じた場合にはこれをその地の官憲の手に引渡す義務を負はされてゐるのであつて、この義務を怠つたものは「人民の敵」であると宣告され、革命裁判に廻されて、十年以下の禁獄に處せられその全財産を沒收され、そして自治體から放逐されるといふ、極刑をうけなければならないことになつてゐるのである。だからこの制限は、個人主義經濟への嚴重な束縛であつて、個人主義をして法律上は手も足も出ないものとなしてゐるのである。或は個人主義の禁止的制限とも見ることができるのである。

しかしどういふ制限があるにしても、農業が個人的責任において行はれ、生産過程が個人的自己統制のもとに行はれてゐる以上、それはたゞ個人主義經濟への制限であつて、それ自身集産主義ではありえない。それは個人主義を許容しつ

い、集産主義の理想によつて干渉を加へてゐる制度である。つまりレニンなぞが繰返していつてゐるとほり、集産的若しくはマルクス派集産主義を實行することは一朝一夕にしてできえられるものではないから、先づ個人主義經濟の現狀を承認しておいて、それに集產主義的立場からの政策を加味しようとしたものであつて、そはレニン一派の共產主義とロシア農民との妥協的產物であると見るべきである。

五、

一體こうした政策、即ち一方に個人經濟を承認しながら他方その成立を不可能ならしめるような制度が可能なのであらうか。或はまたカウツキーなぞが夙に豫言したようにそはたゞ生產の破滅へと導くに過ぎないものであるだらうか。(K. Kautsky, Die Diktatur des Proletariats, S. 48-9) 或はまたレニンのいふとほり、カウツキーやマスロフなぞの批評の方が却てブルヂア的な、日和見的な、若しくは「マルクス主義の變節漢」的な批評であるであらうか。(Lenin Die Diktatur des Proletariats und der Renegat K. Kautsky,S. 60-80)

私はこゝでこの政策の實行されてきた三ケ年間の實蹟を見ることが必要である。元來この徵發政策は、餘剩穀物に對して、無補償で徵發するのでなしに、一定の官定相場を與へて徵發するものであるが、徵發の性質上、その標準は無論非常に低いものであつて、市場相場とはもとよりその價格に隔りがあるべきであるが、ロシアで實際行はれたところを見るのに、一九一八年五月にはペトログラードで一封度の麵麭の價が、官定相場三十コペックに對し、自由相場は五留乃至八留であつたから、官定相場は市場相場の十七分の一乃至二十七分の一であつたのである。(Pasvolsky, op. cit. p. 251) こういふ狀態のもとで、農民が果してよく勞働し、そして農業生產を維持し、若しくは發展させてゆくであらうか。或は生產減退と否とにかゝわらず、その餘剩穀物を、政府の要求通り、提供するであらうか。また農民がこれに應じなかつた時に、ロシアのような人口の大部分が農民である場合に、政府の權力をもつて、この徵發を强行することができるであらうか。この制度が行はれた三ケ年間の經驗は、政府の期待に裏切つて、こうした

であるといふことを明らかにした。特にこの狀態は一九二〇年の春になつて極度に達し、同年一月衞生大臣セマスコウ博士の報告したところによると、都市の食料は必要額の半分しか手に入れることができなかつたとのことである。(Report by British Labour Delegation to Russia 1920, p. 7) この狀態に應ずるために同年秋にロシア共產黨の大會(第九回)では新に食料軍の制度を設けて徵發不應者を强制し、且食物割當額及び賞與制と相俟つてその徵發政策の實行を期することとなつたのであるが、その結果は決して良好ではなく、徵發額は一九二〇年には豫定の六割にしか達せず、(Die Neue Zeit, 29. April, 1921, S. 108) 特に西伯利地方ではこの年秋に徵發した穀物の徵額は割當額の二割八分にしか過ぎなかつた。(The Russian Economist, January 1921, pp. 380-3) そのうへに食料軍その他の官權の强制は各地における農民の抵抗を惹き起して、騷動一揆の類が絕ゆることなく、そして投機賣買(Spekuljatsia)が到るところに行はれて、商賣の禁止は事實上空文となり、且つ物價が益々騰貴する一方で、一九二〇年十月に、モスコウでの勞働者の賃銀は一人一ケ月最高一萬二千留であるのに、一封度の黑麵麭の相場が四百留、牛酪一封度が五千留もするといふ有樣(Der Sozialist, Nr. 15, S. 314) であつたから、ペトログラードは死の都となり、(H. N. Brailsford, The Russian Worker's Rebuplic, p. 28) モスコウの生活は沈倫し (Bertrand Russell, Bolsherism: Practice and Theory, p. 99) こゝにロシアの都會生活は一九二〇年から翌年春にかけて全く行き詰まりの狀態にと陷つたのである。このことは共產黨の指導者自身もまた承認しなくてはならないほどに顯著であつた。即ちトロツキーは一九二〇年において、農民が穀物の徵發を「不利益な取引」として反對し、……ソヴヰエットの權力に對して敵對的地位に立つようになつたことを認めてゐる (L. Trozki, Terrorismus und Kommunismus: Anti-Kautsky, S. 92-3) ブハアリンはそのモスコウで發行される第三インタナショナルの機關紙「モスコウ」のうちに曰く、都市と地方との間の信用制度が破壞され、その間の交換が停止し、……農民は政府の强制的社會主義制度に反對して、西伯利、トムボウその他の各地において發動を起したと。(Moskow, June 14, 21) 一九二一年五月レニンの認めてゐるところによると、この年早々、農民の狀態は益々惡化して行つて、農民對勞働者階級との關係から、最初に、ロシアの內政が動搖を來すに至つて、農民經濟の驚くべき

危機は、最早や在來の食料政策を維持することを不可能ならしめたと。(Russische Korrespondenz, Juni 1921, Zur Frage der Naturalsteuer Von Lenin, S 426) レニンは同年十月になつてこの狀態を一層詳細に述べてゐる。彼曰く、われ〳〵は徵發の方法によつて必要な食料を工場に分配し、そしてかくして共產主義の生產及分配に到達することができるものと信じてゐた。……しかし不幸にして過去の長からぬ經驗はこの經濟組成の誤謬であることを信ぜしめた。一九二一年春にわれ〳〵はコルチヤクや、デニキンや、ピルストスキーによつてよりは一層激しい敗戰に苦しむだ。……われ〳〵の經濟組織は確乎たる基礎のうへに立つてゐないことを示した……村落においての徵發と、都市においての即坐の共產的組織の企は、生產力の發展を阻害し、そして一九二一年春における政治的及經濟的危機の根本的原因となるに至つたと。(Labour Monthly, No. 6, The New Economic Policy and the Task of Political Enlightenment by Lenin, pp. 506-8)

六、

こうして、共產ロシアの農民政策は、その最初の試みにおいて全く行詰まりの狀態へと陷つた。それは無產者階級の手に政治上の權力を掌握することにおいて、世界における最初の成功者ではあつたが、またそれは革命のこの楷段において、一般農民をすらも、その對ブルヂョアヂーへの戰のために、無產者階級の側へと引きよせることに成功したにもかゝわらず、古るきロシアの支配階級が脆くも仆れた時に、そして新ロシアの支配者が舞臺へと登つた時に、彼は農民政策において、傷ましいほどの無能を暴露した。それは新ロシアを、カウツキーの所謂「生產の破滅」へと、また從つて「食物の破滅」へと導いた。クレムリン宮殿の新支配者は、手に權力を獨占しながら、飢餓の力が、權力よりも偉大であることを思はないではならゐれかつた。

一九二一年を迎えるとともに、共產ロシアは、その農民政策を根本的に變更しないではゐられなかつた。この年三月の第十回全露共產黨會議は、レニンの勸告に基いて、彼の新農民政策の基礎を定めた。同年春か

ることとなつた農民税の政策がそれであつた。

七

農民税の設定は、共産ロシアの農民政策を根本的に更新したものとして、この共産革命の記錄中で、恐らく最大の事件であるといふことができるであらう。農民税といふのは、一九二一年三月卅一日の「租税法」によつて新に定められた農民税（Naturalsteuer Agricultural Tax）をいふのであつて、その目的とするところは、一九一八年の穀物管理令による餘剰穀物の徴發制度を廢して、これに代えるに租税制度をもつてしようとするものである。この法律の第一條（この法律は全文十一ヶ條であつてライプチッヒ發行の「ルシッシエ・コレスポンデンツ」第六號所載）には、法律の目的を定めて次のように述べてある。この法律の目的は、農民をしてその勞働の結果について自由處分をすることを許るし、農民の經濟手段を保障し、農民經濟を確立しそこで生産力を増加することであつて、その目的のために在來の强制引渡の制度を廢して、農業税制度とするものであると。この農業税は强制引渡よりも輕いものであり、且つ租税を完了したものは、その生産の果實を自由に處分することができるとなつてゐるのである（第八條）そこでこの新農業税制度の要點は、舊農民政策の税だとしての强制引渡（Zwangs-ablieferung）を廢して勞働の果實の自由處分（freie Verfügung）をもつてすることである。從つてまたレニンの所謂「武斷的共産主義（ミリタリッシエ・コムムニズムス）」の代りに、個人的自由經濟の制度をもつてしようとすることである。

この點については、私はレニン自身をして語らしめる方が便宜であると思ふが、レニンは既にこの新政策を決してから間もなく（一九二一年四月二十一日）彼の共産的强制農民政策彼自身の言葉でいへば「武斷的共産主義」の失敗を是認した後に、必要なる第一の仕事が、農民の生産力を増大することであつて、このことは、在來の共産的食料政策を大に變更しなくては不可能であること、そして徴發制度に代ゆるに、農業税をもつてし、且つこの農業税を收めた以上、少くとも地方的に自由商業（フライハンデル）を許容することでなくてはならないこと、それから彼の武斷的共産主義は戰爭中の破壞に應ずるための一時的手段であつたが、それは無産者的政策に適應することができなかつたこと。そこで小農民國においての正當な無産者階級的政

策は、穀物と工業上の生産品との「交換(オウスタウシ)」を行ふことの政策であること、農業税とはこの政策への過渡期を意味するものであること、且つこの農業税とは、租税の形式で、勞働者階級に必要な最小限の穀物を徴收して、その殘餘の穀物を工業上の生産品と交換することの意味であることを述べてゐる。(Die Kommunistische Internationale, Nr. 17, Zur Naturalsteuer von Lenin, S. 94–5)

そこで問題になつてくることは何故にこの武斷的共産主義に代ゆるに自由交換または自由賣買をもつてするかの理論的根據であるか、それはレニンに從へば、共産主義へ一足飛びに到達することはできないから、「われ〳〵は農民の個人的利益のうへに政策を築かねばならぬ。……凡ての國民的産業を個人的利益のうへに樹てることが必要である。考量は社會的でなければならぬが、責任は個人的でなければならぬ。……新政策はこの區別を絶對的明晰と鋭敏とをもつて遂行されることを要求すると。(The Labour Monthly, No. 6, pp. 513–4)ブハアリンもまた徴發政策は農民をして生産への刺激をなくし、從つて農民は自己に必要なだけ生産して、他人のためには何ものをも生産しないこととなつた。われ〳〵は内亂の陣頭で勝利を占めたが、その結果は生産への刺激の破滅をもたらしたのであると。(Moskow, June 14, 1921, The New Economic Policy of Soviet Russia by Bucharin)即ちレニンもブハアリンも、ロシアの農業が個人的利益のうへに立つことが必要であり、且つ個人的利益のうへに立たない經濟制度は生産の減退を來たすものであると主張するものであつて、この經濟的原理のうへに、彼等の新農民政策としての農業税(或は食料税)制度が設けられるに至つたと説明してゐるのである。ところでこの強制的干渉政策を廢して、自由交換または自由賣買を認めそして個人的利益と責任との上に經濟制度を組織しようとすることの經濟史的意義如何の問題であるが、これもレニンをして自ら語らしめることが一番便利である。レニン曰く、この交換の自由從つて賣買の自由は「資本主義への復歸(リユツクケーレ、ツーム、カピタリスムス)」を意味するにほかならないと。(Der Sozialist, Nr. 14, S. 327)何人もこれ以上に附け加へる必要はない。また何人もこの點に反對するものはないであらう。

たゞこゝに問題とすべき點が二つある。この「資本主義への復歸」が、果してレニンのいつ

「退却」であり、またはその資本主義が「國家資本主義」であるであらうかといふのである。何となればレニンに從へばこの「退却」または「退譲」もまた爭鬪の一手段であり、且つそれは資本主義は資本主義であつても、單なる資本主義ではなくて新形の資本主義即ち國家資本主義であるとなしてゐるからである。(The Communist Review, Oct. 1921, Tactics of Russian Communist Party by N. Lenin, p. 13)

共産ロシアのこの新政策は果して「新形の資本主義」即ち國家資本主義であるだらうか。國家資本主義とは、一般に生産手段を國有にし、國家によつて生産過程を統制し、餘剩價値を國家に收奪する制度をいふものとされてゐるのであるが、今日のロシアのやうに、土地の大部分が個人としての農民に分配され農業が各農民の「個人的利益と責任」のうへに行はれてゐる場合に、また從つて農業上の生産手段が國家の手に集中されもせず、生産過程が國家によつて統制されもせず、且つこの新經濟政策としての農業税制度を施行することによつて、その土地から生ずる果實の自由處分、自由交換、從つて賣買の個人的自由を承認するによつて、どこに國家資本主義がありうるであらうか。それは國家資本主義ではなくて純然たる個人主義、從つて「新型」ではなくて、ありふれたる舊型の資本主義ではないであらうか。また或はクノウなぞの指摘してゐるとほり、「原始的資本主義」への復歸ではないであらうか。(Neue Zeit, 29. April, 1921, S. 111) 特にブハアリンのやうな共産主義の理論家は、國家資本主義とは資本家階級を支配階級とする國家においてのみ存在するものであるといつてゐるのであるが、(ABC des Kommunismus, S. 295) 若し國家資本主義がブハアリンのいふやうなものだとすれば、無産者階級の獨裁政治としてこの共産ロシアに國家資本主義の存在する余地は到底ありえないのである。またレニンに從へば、この「資本主義への復歸」は、たゞ一時の退却であるにすぎないといつてゐるのであるが、そしてその理由とするところは、封建主義よりは資本主義が進歩したものであつて、ロシアの農業制度が封建主義から資本主義へと動いてきたことは寧ろそれだけ社會主義に一歩近づいてゐるものであるといふ意味のことを述べてゐるのであるが、(Kommunistische Internationale, Nr. 17, S. 103) しかしもしレニンのいふ通りだとすれば、ロシアは尙ほ今日社會主義若しくは共産主義に適するまでに經濟的進化を遂げてゐないといふことの意味であ

り、またマルクスの所謂、「新社會の要素」が解放されるまでに社會の進化が熟してゐないといふことになつて、無産者階級——無産者階級といふよりは寧ろその前衛としての共産黨の獨裁政治によつて、共産主義の實現を期するといふことが誤謬であるといふことを裏書きすることとなり、クノウのいふとほり、レーニン一派の共産主義の破産を意味することとなるではあるまいか。(Neue Zeit, 22-9. April, 21, H. Cunow, Der Bankrott des Bolschewismus)

八

共産ロシアの農民政策は、始終動搖をつゞけてきた。それは前に述べたやうに、彼の政策の根本において動搖してきたばかりではなしに、その政策を實現する方法、卽ち革命戰術において、常に一定の方針を缺いてきた。また從つてそれがために失敗をも續けてきた。といふのはレーニン等の共産主義者は、最初から貧困農民を結合して地主との階級鬪爭を指導してきたのであつて、この點は既に政權獲得前の彼等の態度によつて明瞭である。全露農民代表者會議(一九一七年五月)へのレーニンの公開狀によると、彼は先づ「都會の無産者階級と農村の貧困農民との間の同盟」を主張してゐるし (Lenin, Zur Agrarpolitik der Bolschewiki, S. 10) また同じ會議へのレーニンの決議案を見ると、農民ソヴヰエットの内部に貧困農民」の團體を組織することを提唱してゐるのであつて、(ebenda, S. 43) このことは共産黨が政權を掌握して後直に實行される運びとなつた。貧民委員(アルメンコムミテー)の組織がこれであつて、それは一九一八年六月から十二月までの六ケ月間存續したのである。いふまでもなくそれは階級鬪爭の前衛的組織であつて、その目的とするところは地主の權力を轉覆して農村における無産階級の獨裁權を確立することであり、またその理論的基礎が、マルクス主義の階級分析、從つてその階級鬪爭觀にあることも勿論である。

彼等のこの戰術は最初の過程においては必ずしも失敗ではなかつた。卽ち農村における地主の權力を破壞するの一點においては、彼等の階級鬪爭の理論は必ずしも失敗の事實によつて報いられてゐたのではなかつた。しかし地主の權力が剝奪された時に、更に大なる階級の存在が鮮やかになつてきた。中産農民の一階級としての意識及び存在の

事實がこれであつた。

共產政府の農民政策は、この中產農民をして益々膨脹させて行つた。即ち共產政府の土地分配の政策の結果、從來大地主のもつてゐた土地の大部分（ブハリンはこれを八割二分と計算してゐる）は農民の手に分割され、そしてレニンの述べてゐるところによると、かくして在來の農村貧民の多數のものが中產農民に變じ、その結果、小所有權及び小ブルヂョア運動が增大することとなつたのである。（Kommunistische Internationale, Nr. 17, S. 93）そしてその中產農民は、今日では、ロシア人口中の最も多數を占めることになつてゐるのである。（A B C des Kommunismus, S. 323）ロシア農民の騷動一揆若しくは一九一九—二〇年の內亂といはれたものはこの中產農民の騷動であつたのである。彼等は彼等自身の階級自覺に到達するとともに、共產政府の諸機關特に地方ソヴヰエット及び貧民委員の武斷的共產主義に反對して、彼等自身の階級的利益を擁護するために結合したのであつて、この人口の多數を占める農民の抵抗に對しては、共產政府の權力もまた如何ともすることができなかつたのである。就中貧民委員は權力を濫用して種々惡事を働いたため（Trotzki, Terrorismus und Kommunismus, S. 93）に却つて中產農民の抵抗を挑發し、結局共產政府も中產農民に對するその政策を變更しなければならなくなつたのである。

中產農民とは、地代小作料に依てのみ生活する地主ではないが、また同時に賃銀または小作の方法をもつて唯一の生活手段とする賃銀勞働者または小作人でもなく、つまり財產の持主であるとともに勞働者でもある。從つて自己の財產から生ずる果實を收益するけれども他人の勞働を絞取する所謂絞取階級ではない。それは財產を所有する點において半ブルジョアではあるけれども自己の勞働に依據するの點において、資本家階級と區別されなければならない。だからそれは無產者（プロレタリアート）階級でもなく、ブルジョアでもないといふことになつてくるのであつて、その結果は、レニンのいつてゐるとほり、この階級は、無產者階級が社會主義に贊成し、ブルジョア階級がこれに反對すると決まつてゐるように、簡單な階級分析によつて處分することはできない、別種の階級であるといふことになるのである。（Lenin, Das Verhältnis der Kommunisten zum mitteren Bauerntum, S. 12–3）

マルクス主義の階級分析は極めて簡単明瞭であつて、彼等に從へば階級は、資本主義社會のもとでは、全社會は二つの相敵對する階級、即ちブルヂョア階級とプロレタリア階級の二つに分裂するのであつて、從つて資本家的社會の歷史はこの二つの相敵對する階級間の鬪爭の歷史であるとされるのである。(Das kommunistische Manifest) マルクスが後年この階級觀について筆をとつたのが、資本論の卷末の一章であるが、この論文は不幸にして未完結のまゝでマルクスは世を去つてしまつたから、晩年における彼の階級觀は充分これを知ることができない。この資本論の卷末の論文によると、マルクスは社會を二つの階級でなく、三つの大階級に分けてゐる。賃銀勞働者、資本家及び地主の三階級がこれである。(Karl Marx, Das Kapital, DritterBand,' Zweiter Teil, S. 421) しかしマルクス主義の信奉者であるレニンは、その革命の經驗の結果。これ等の相敵對する階級のほかに、更に他の有力なる階級の存在することを發見した。否資本家階級が轉覆された後に、更に他の新らしい階級が、無產者階級の獨裁權の前に立つてゐるのを見出した。中產農民階級がこれであつた。彼は次のやうに述べた「歷史上において最初にソヴヰエット國が存在する。そのうちにはたゞ二つの階級、無產者と農民との二つの階級が存在するのみである。そして後者は人口の大多數である」と(The CommunistReview, Oct., 19, P. 21 12)

中產農民の、大階級としての地位が自意識されてくるとともに、共產政府の農民政策は重要な變更を見なければならないこととなつた。即ち階級鬪爭一點張りでは、農民問題は解決されるものでなくなつてきた。第一に階級鬪爭の前衞的機關としての貧民委員は早く(一九一八年十二月)廢止されなければならなかつたのであるが、そはいふまでもなく、共產政府の農民政策、即ち對中產農民政策の動搖を紀念する最初の記錄であつた。一九一九年になつてからはこの傾向は一層顯著になつてきた。この年の二月、レニンとトロツキーとの間に意見の衝突のあるといふ噂の立つた時に、レニンもトロツキーもともに公開狀を發表して、この風說の虛僞であることを述べるとともに、中產農民に對しては、決してこれに強壓を加へるものでないといふ意味のことを陳述した。即ちレニンは、中產農民が決してソヴヰエト政府の敵でないといふことを、またトロツキーは、政府が中產農民を強制して共產的產業を行はしめるような者はない、といふ旨を明ら

した。しかしそれにもかゝわらず、中産農民の基本的要求としての穀物の自由賣買を許容するには至らなかった。レニンはその同じ公開状の中で、穀物の自由賣買は、多數の犧牲において小數のものを富ましめるに過ぎないといふ理由で斷乎としてこれに反對したのである。一九一九年五月のロシア共産黨大會（五月十八日より五月廿五日まで）はこの問題を中心として討議されたといつてもいゝほどであつた。この會議では中産農民に對する共産政府の態度は一層妥協的となつて現はれた。彼は「中産農民との平和」をもちきたすことに、彼の政策の中心を置いた。しかしこの平和のために、共産政府は尚ほ中産農民の最大の要求した穀物の自由賣買を許そうとはしなかつた。そしてその代りに、十萬の農業機關を農民のために與へることを約束した。この約束によつて、少くとも中産農民の抵抗を緩和しようと考へた。レニンの言葉でいへば、中産農民の中立を求めたのである。即ちこゝに共産政府の革命戰術としての對中産農民政策が始まつたのであつて「中立政策」(Neutralisierungpolitik) と稱せられるものがこれである。

十萬の農業機關の約束は中産農民への一種の「賄賂」であつた。しかし彼等の求めるものは「賄賂」でなかつた。「土地と自由」との傳統のうちに養はれてきたロシア八千萬の農民は、永い間土地への飢餓にもだえてきた。革命がきた時に、ロシアの農民は、この飢餓が醫やされるの時であると考へた。ロシア共産黨は、革命の劈頭に、この人心のうへに、彼の革命戰術の基礎を置いてゐた。「土地を農民へ」の政策は、見事に農民の心に投じたのであつた。しかし彼等が土地を求めた時に、彼等は彼等の自身の土地を求めてゐたのであつた。「地主の土地」に抵抗した彼等は、「國家の土地」への抵抗者であつた。彼等の求めてゐたものは土地における彼等の財産、私有財産であつた。共産黨がいよく〳〵政權を掌握した時に、「土地を農民へ」の政策は、益々この彼等の私有慾への油としての役割を演ずるのほかの、何ものゝ意味をも、農民の間に與へてはゐなかつた。だから「共産ロシア」と、農民の私有慾との間には、「共通な何もの」もないことが明らかとなつてきた。また從つて中立政策は、共産ロシアと私有的農民との間に、存在するの餘地がありえなかつた。彼等の間には勝利か屈服かの、一路が與へられてゐるに過ぎないのであつた。

一九二一年春の農業税は、最早中立政策ではありえなかつた。それは強制政策の破綻であることゝもに、また中立政策の

破綻であつた。それは中産農民に對する、共産政府の屈服であつた。何となれば、それは農民の私有慾への、法律的承認であり、共産經濟の撤退であり、個人主義經濟への保障であるにほかならないからである。

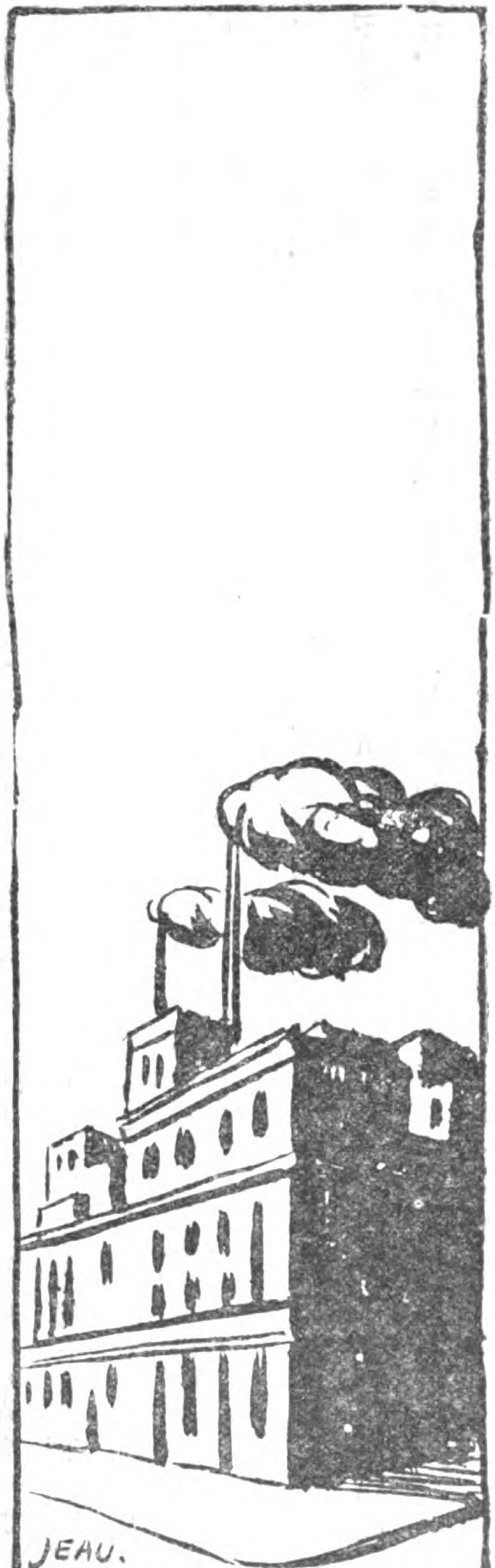
新農業税制度は、カウツキーの豫言の、ありのまゝの裏書者であつた。カウツキー曰く、ロシア革命の効果は、以前に大地主の私有權の轉覆に興味を感じてゐた農民をして、新に土地のうへに創設された私有財産の、最も有力な擁護者と化せしめるに至つたと。(Diktatur des Proletariats, S. 50)

九

ロシア革命は、一つの新階級を發見した。新階級としての「中産農民」の發見がそれであつた。そはレーニンの卒直に認めてゐるとほり、疑もなく一つの階級であつた。(Lenin, Das Verhältnis der Kommunisten zum mitteren Bauerntum, s. 13) ロシアの共産主義は、最初はこの階級の存在を計算しないで躓き、次にはその階級への中立政策によつて再び躓き、そして最後にこの階級への屈服によつて、彼の農民政策の無能を遺憾なく暴露した。

マルクス主義は農民問題についての、確乎たる政策をもつてはゐなかつた。カウツキーは夙に社會革命においての「農民中立」を唱へた。(K. Kautsky, Agrarfrage, 1899) 第三インタナショナルは、ロシア革命の最初の經驗に基いて、これまた中産農民の中立を求めた。(Die kapitalistische Welt und die Kommunistische Internationale: Manifest des II. Kongresses der Kommunistischen Internationale) しかしその中立政策もまた世界におけるマルクス主義の最初の經驗における失敗の記録であつた。

ロシア革命の經驗は、レーニンのいつてゐるとほり、革命の最大問題が農民問題であることを明らかにした。(Communist Review, op. cit.) そしてその農民問題は、また單なる農民問題ではなくして、マルクス主義の根本問題であつた。私は、マルクス主義の階級分析が、再び考究されるの必要に迫られてゐるのではないかと思ふ。



支那の國際的地位を論ず

バートランド・ラッセル

支那はその人口と、潜在力との點に於て世界最大の國民でありながら、現在、實力の點に於て最小國の一であるので世界の國民の間に特殊の地位を占めてゐる。本論の主題は此形勢から起つた國際問題であるが、それは華府會議によつて、世界の政治界の第一線に持ち出された。その解決は、多少なりとも効果を收めようとする以上、賢明なる解決には必ずつきものゝ或る廣汎な事實と原則とを考慮に加へねばならぬ。第一に支那人は、未だ政治的には無能であり、經濟的には發達が後れて居るとしても、他の方面に於ては、世界が大いに要求し、それを亡すことが吾々に危險を及ぼす結果となるような要素を包含する、少くとも吾々の文明と同じ位優れた文明をもつてゐる。第二に列強は支那に對し

て幾多の屈辱を與へ權利の剝奪を行うた。それに對しては支那の非行といふことが口實にされて居る、が唯一の眞の理由は、支那の陸海軍の微力なことである。第三に現在に於て列强中、支那と最も良好な關係にあるのは、亞米利加で最も仲の惡いのが日本である。英國が、今暫く、日本を援助することを已め、米國が日本の自由を脅かさずに、支那の自由を尊重する限り、米國の肩をもつのは、支那の利益でもあると同時に、英國自身の、より大なる利益でもあるのである。第四に、資本制度は、內國的にも國際的にも、弱者に對する强者の掠奪的關係をその本質とするが故に、支那が武斷的となるか、又は列强が××××とならざる限り、久しい間に、支那は列强の經濟的支配を免れることは出來ない。最後には、亞米利加も日本と同程度に暴虐なものとならう。强大な、武斷的な支那は呪ふべきものである。故に歐羅巴及び亞米利加に於ける××××が唯一の究極の解決である。

誰しも知つてゐる通り、支那は四千年間皇帝を奉じて居つた後に、ツイ十年前、近代的な民主的共和國となることに決めた。此結果を來すには多くの原因があつた。支那の歷史の最初の三千七百年間を通り越すと、一六四四年の滿洲の征服に達する。此時北方から與つた好戰的な侵略者が首尾よく玉座を占有したのである。彼は支那の男子に豚尾を着けさせ、支那婦人の足は大きくさせて置かうとする仕事に取り掛つた。暫く後に政治家的な妥協が行はれた。即ち豚尾は採用されたが、足を大きくして置くことは不可とされた。そこで古い弊習は保存して、更に新しい弊習が受容れられたのである。此特徵的な妥協は、英國と支那とがどれほどよく似て居るかを示す者である。滿朝の歷代皇帝は程なく全然支那化してしまつた。けれども服裝や風俗の點に於て、彼等はその征服し

な民衆と異つて居り、支那人は内心彼等に對して敵意を抱いて居つた。一八四〇年より一九〇〇年にかけて幾多の的な對外戰爭があり、それは義和團事件の屈辱をまで招いたので、皇室の威光を亡くし、總ての思慮ある人々に、歐羅巴人から學ぶことの必要を示した。十五年間（一八四九——六四年）續いた大平亂は、人口を一億五千萬ほど減したとブツトナム・ウイールは述べて居り、（The Truth about China and Japan, Allen & Unwin, 1921. p.14 ）殆ど大戰に匹敵するほどの慘禍だつたのである（註）滿洲人が是を鎭壓し得るや否やは久しい間疑問とされてゐたが、彼等が遂に是を鎭壓し得た時には、國力は疲弊し切つてしまつた。日清戰爭の敗北（一八九四——五年）及び義和團事件（一九〇〇年）後の列國の報復は、遂に總ての思慮ある支那人の眼を開いて、××よりも優れた、より近代的な政府の必要を看取せしめた。けれども支那では萬事が悠長なので、義和團事件後十一年を經るまで革命は起らなかつた。（註）シー・グン・チエンは『近代支那』の十三頁に、「大平亂は二億萬人を殺した」と云つてゐるが、普通にはかう推定されてゐる。"Chona of the Chinese"（ウエルナー著）二十四頁參照。

一九一一年の支那革命は、一六八八年の英國革命と性質を同じくする、穩健なものであつた。此首領孫逸仙——目下廣東政府の長たる——は、南方に依て援助せられ、假大總統に選擧された。けれども北方の軍隊は清朝に對する忠節を擲たず、革命軍を討伐し得たかも知れなかつた、が、その司令官たる袁世凱はもつと氣の利いたことを考へた。彼は革命側と和睦して、孫逸仙の代りに彼を最初の大總統とする條件で共和國を承認した。勿論袁世凱はデモクラシーとか自由とかいふ言葉によつて惑はされぬ鐵血政策の信者で、所謂『强い人』であつたが、ために、列國公使の後援を得て居つた。支那に於ては、北方は常に南方よりも武斷的で、南方ほどに自由的でなかつた。袁世凱は北方の軍勢の中から、支那がもつてゐる限りの近代的な軍隊を作り出した。彼はまた野心家で權謀家であつたから、外交團の信用を博するに

必要な、あらゆる資格を備へて居つた。私の知つてゐる限りでは、袁のために起つた支那の紛爭は、一向外國を從援させた模樣がない。

憲法會議は假憲法を制定した後、一九一三年四月に召集された、正當に選出された國會に、永久的憲法制定の任を託つた。袁は程なく、國會が制限しようとした大總統の權力について、國會と爭ひ始めた。國會の大多數は南方側についたが、北方は武力に於て到底南方の敵ではなかつた。かような事情の下に於て、豫想通り憲政は程なく顚覆せられた。袁は憲法を無視して外國銀行と借款の約を結び經濟的に國會が（當然に財政上の權力を握つてゐた）から獨立した。此ために南方の叛逆が起つたが、袁は直ちに是を鎭壓した。是より後、種々の段階を經て、彼は事實上支那の專制君主となるに至つた、彼は彼の軍隊の副官を各省の都督に任じ、北方の軍隊を南方に送つた。一九一五年に彼が皇帝とならんことを欲して叛逆に出會ひさへしなかつたなら（その叛逆は成功した）、彼の統治は續いた處であつた。一九一六年に彼は死んだが、是は失望のためだと傳へられて居る。

其時以來、支那には混亂の外何ものもなかつた。袁によつて任命せられた將軍は、彼の強い手が除かるゝや、中央政府に從ふことを拒んだ。そして彼等の軍勢はその駐屯地方の人民を怯掠した。其時以來、通則として一定の目的のためではなく、競爭的地位にある多くの將軍のうち、何人が或地方を統治すべきかといふだけのことを決定するために、內亂が續いてゐる。今なほ南方對北方の問題が殘つてはゐるが、もはや憲法上の意義は大半喪失して居るのである。省又は數省の集團の將軍と呼ばれてゐる軍事的省長は、北京に反抗して專制的な統治を行ひ、その配下にある地方の住民を怯掠する。彼等は、例へば鹽税のように、外國人が徴收し監督するものゝ外、歲入を着服する。彼等は名義上北京から任命せられたるもの、實際はその省に於ける兵士の人氣如何に據つて居るのである。中央政府に

通例兵士に給料を拂ふことが出來ないので、兵士は掠奪や、督軍がその獲た不義の富の中から、兵士に頒けた方が良いと考へる部分を頒けて貰ふことによつて生活して居る。私が北京に居た間、三人の最も重要な督軍が、戰利品の分配方を議するために、北京で會議を開いた。彼等は、尚ほ列强に對しては公式に支那を代表してゐる大總統や總理に對して、殆ど禮節を守らなかつた。不幸な、名のみの政府は、此三名の大人物に對して、首府を去つて貰ふ許りに、新聞では九百萬弗と推定せられた金額を、破産に瀕した國庫の中から支拂ふことを餘儀なくされた。最大の頒前を貰つたのは滿洲の總督で日本の手足である張作霖であつた。彼の頒前の中には叛逆を起した蒙古への遠征の費用も含まれてゐたのであるが、彼がさういふ遠征をしようとは何人も夢想だもせず、事實彼はその當時以來、奉天を動かずに居るのである。

けれども最南方に於ては、多少の尊敬を拂ふ價値ある、別種の政府が確立せられた。常に支那の急進主義の樞府であつた廣東は、一九二〇年の秋に首尾よく北方守備隊の專制を顚覆して、孫逸仙を總統として、進步的な能率の高い政府を建設した。此政府は今や二省即ち廣東省（廣東はその省城である）と廣西省とを包有してゐる。一寸の間、此政府は南方全體を征服しそうな模樣であつたが、隣接せる湖南省の北軍の將軍吳佩孚によつて喰ひ止められた。不幸にもこれは征服の計畫を捨てず、支那全土をその勢力下に統一しようと望んでゐる。他の總ての點に於ては、此政府は總ての進步的な民族の援助を得る價値がある。デュウイは『ニウ・レパブリック』誌上の論文の中に、此の政府の功績と香港及び他の一般英國人の、これに對する激烈な反對とを述べた。此反對は、吾々英國人は、急進的な改革を嫌ふので、一般的な主義のためでもあると同時に、又はカッセル協約のためでもある。此協約――支那にはよくある流儀の――は、廣東省の鐵道及び鑛山の事實上の獨占權を英國に與へる筈であつた。これは前政府との間に協定せられ、たゞ批准を待つ許

りとなつて居つた處が、政府の變更は批准を不可能にしたのである。新政府は當然にも米國の後援を受け、シャンク氏てふ一米人は、英國が前政府と締結したのに酷似した協約を、新政府との間に結んだのである。英國政府がカッセル協約を援助したに引換へ、米國政府はシャンク氏を後援しなかつたことは事實である。けれども、それが廣東の人民に何ほどの相異を及ぼすかは疑問である。そして此間に、米國人でなく英國人が優勢な、正直なものより、古い、腐敗した者を最負したがために、甚だ兇惡ではあるが、甚だ貴重な利權を、失つた間に、米國人がそれを獲得したのである。

支那の無政府狀態は勿論甚だ悲しむべきことには相異なく、支那の友人はすべてその終りを告げることを希望するに相違ない、けれどもその害惡を誇張し、又はその害惡は歐羅巴が經たほど絕大なものであると想像することは誤つて居る。支那は歐羅巴中の一國とでなく、全歐羅巴と比較せねばならぬ。一九二一年十一月十一日のタイムスには『支那の危險、十二の競爭的政府』と題する悲觀的な論文が出てゐた。けれども歐羅巴には政府が十二どころかもつと澤山あり、それらの間の敵意は支那の政府同士の間のそれよりも、遙かに激烈である。歐羅巴の軍隊の數は支那より遙かに多く、その有する破壞的武器の精銳も支那とは比較にならぬ。休戰以來の歐羅巴の戰爭の量も、同じ期間に於ける支那の量とは比べものにならぬ。諸君は支那を端から端へ旅行しても、十中九の場合まで、戰爭の徵候を見出さぬであらう。支那の戰爭で血を流すことは滅多にない。これは兵士が傭兵で、自分らがそのために戰つてゐると想はれてゐる主義主張について、何等の興味もないからである。私は、現在に於ては、支那の住民は、歐羅巴の住民よりも、平均から云つて幸福だと考へたい。

支那の政治的改革が可能になつた曉、それは聯邦的制度を採り、各省に大部分の自治を活すことにならうと、私には考へられる。地方を省に分けたことは極めて古いことで、省的感情は强烈である。革命後、英國の憲法によほど似て、たゞ國王の代りに大總統を置くだけの相異しかない憲法が作られた。けれども非聯邦的憲法が運用

は、英國が愛蘭で經驗して居る通り、あまり地方的感情のない、同一民族が必要である。私の判じ得る限りでは、の進歩的な支那人は、軍備、外交、及び風俗の問題だけを中央政府に一任して、あとは聯邦的憲法を採用することにいてゐた。けれども現在の軍事的無政府の狀態を一掃する困難は多大である。中央政府は、軍人に金を支拂ふことが出來ないので、これを解散することが出來ぬ。軍人に金を拂つて、是を新しい仕事に就けるに足るだけの金を外國から借りる必要がある。けれども列強又は、列強中の一國でも、支那の獨立の最後の殘りを敢て犧牲とせしめずに、斯の如き借款に應ずるや否やは疑問である。故に支那がどうにかかうにか、餘りに多く外國の援けを藉らずに、その困難を切り拔けることを望まねばならぬ。

督軍の一人が最も優勢になつて、その勢力を固める改良の道として、立憲論者と和睦することは決して不可能でない。支那は輿論が非常に重きを爲す國で、他によく思はれたい一心で、成功せる軍國主義者も平和主義を採り兼ねないのである。目下最も重きを爲してゐる督軍が二人ある。それは二人とも前に名を擧げた張作霖と呉佩孚とである。張作霖は滿洲に於て最も優勢で、日本の後援を得て勢力を固めてゐる。彼は支那に於けるあらゆる反動的なものを代表してゐる。一方、呉佩孚は自由主義的傾向をもつと認められてゐる。彼は有能な將軍である。久しからぬ以前、彼は名義上北京の命を受けて、揚子江と湖南とに勢力を扶植し、それによつて廣東の希望を挫折せしめた。彼がどうして廣東政府と仲直りしたかは容易に分らぬけれども、支那の他の部分に彼がその勢力を扶植して、立憲的なることによつてその勢力を永久的にすることも不可能ではない。もしさうなれば支那は息をつくことが出來ようし、支那にとつて必要なのは、たゞ其一事だけである。

開港場と、鑛山のある少數の地方を除くの外、支那の經濟的生活は未だ全然工業以前の時代に留まつてゐる。北京は

約一百萬の人口を有し、廣大な面積に亘つて居るが、これは總ての家が一階建てゞ、周圍に庭を持つてゐるからである。然も北京には未だ電車も乘合馬車も地方的鐵道もない。私の見た限りでは、全市を通じて工場の煙突は二本か三本きりしか立つて居らぬ。乞食、商賈、盜賊、及び官廳に傭はれる外は、人民は手工業によつて生活してゐる。その産物は優れて居り、機械製品よりも單一でないが、時間は長く、賃銀は話にならぬ少額である。

支那の人口の七割乃至八割は農業に從事してゐる。米と茶とは南方の主要産物であり、(註)大麥其他の穀類は北方の重要な收穫である。南方には降雨が極めて多いが、北方では土地が荒野とならぬ程度に降雨を見るにすぎない。一九二〇年八月に私が北京に着いた時、北方の廣大な地域は旱魃のために、恐らく一九二一年の露西亞と同じ位激しい飢饉に惱まされてゐた。ボリセヰキが關係した問題でなかつたので、外國人は時を移さず救助に努めた。支那人の方はこれを天災として拱手して見過す有樣で、飢餓で死んだ人々さへもかような意見を抱いてゐた。

(註、大豆は急速に重要生産物の地位を占めつゝある)。

土地の大部分は自作農の手にあり、彼等はその所有地を息子らに分配する、そこで各々の頒け前は辛うじて自己と家族とを養ふに足るにすぎぬ。隨つて雨量が例年より少い時は、澤山の者が餓死する。より科學的な農業方法を採用して飢饉を防ぎ、植林によつて旱魃と洪水とを防止することも勿論暫くの間は出來よう。鐵道の發達と道路の改良とは市場を遙かに多くし、約一代位の間、農民を大に富ますことも出來よう。けれどもあれほどの大家族が續く間は、彼等の貧困を永久的に救治する方法はあるまい。支那に於てはマルサスの人口論は十分あてはまる餘地がある。生産方法の進歩によつて生じた効果は、一層多くの子供の生存を助け、土地を更に一層細分することゝなり、結局元と同じ貧乏人に返るのである。是等の害惡を除き得るものは、たゞ教育と、より高き生活程度より外にはない。より良き政府と相當な歲入

とがない限り、大仕掛けの民衆教育は、不可能である。是等の難關とは別に、一般的義務教育を施すにも、目下支那人の好い教師の供給が足りない。

　支那の傳統的生活に對する歐洲文明の接觸の結果は、戰爭の外に、二つの形式をとつてゐる、その一は商業的方面で、他の一は智的方面である。兩者は共に、軍備の力による。吾々が彼等を戰爭で敗かしさへしなかつたなら、支那人は決してその港を吾々に開きもせず、その心を吾々の思想に對して開きもしなかつたに相異ない。けれども中華と吾々との、戰爭に端を開いた交際のことはもはや昔のこととなり、どの階級を通じても、特に外國人に對する敵意は見出されぬ。白人種との交際が支那にとつて禍であるといふ意見を說破することは困難でないが、かういふ意見は、最も無茶な保守的偏見が他の一切の考慮を壓倒して居る所の外、支那の何人にも抱かれて居らぬ。支那人は商業に對する極めて强い本能をもち、多量の知的好奇心をもつてゐるが、此孰れにも吾々は共鳴する。私的にも政治的にも、ホンの僅かの、普通の禮節を守りさへすれば、彼等の友情をかち得るに十分である。そして私は、彼等の商業が吾々のポケットを富ますと等しく、彼らの思想が吾々の文化を富ますことも出來るものだと考へる。開港では歐米人は各々その居留地に住み、其處では街は舖道となつて居り、電燈も灯つて居れば、家は歐羅巴風で店は英米の商品に滿たされて居る。開港場には通例支那人町もある。其處は街が狹く、華美に飾られた店があり、支那の特色であるさま〴〵な臭氣の混合した空氣がある。ウツカリしてゐる間に、門を一つ通つて一方の町から他方の町へ急に出ることがある。古い町の陽氣な、混沌たる美を見た後に、歐羅巴の醜い淸潔と他所行き然たる禮節とは、愛と憎みの相半ばした、複雜な印象を與へる。歐羅巴の町には安全と、廣濶と、衞生とが見出され、支那人町にはローマンスと、雜沓と、疾病とが見出される。私は支那を愛するにも拘らず、支那人町から歐羅巴町へ移ると、自分がやはり歐羅巴人であることを感じた。私には、支那流の生活

か幸福を齎らすとは思へない。けれども貧困と疾病とに對する、あらゆる必要な割引をした後、私は支那流の生活は、歐羅巴流の生活が歐羅巴人に齎らすより以上の幸福を、支那人には齎らすものだと考へる。とにかく男子の場合は左樣だと私には思はれた、が婦人の場合は左樣であるとは思はれない。

上海と天津とは白人の都會である。上海を一目見ると、今まで見慣れて來た處と殆ど違はないので、何のために旅をしたかと思はれるほどである。歐羅巴の勢力の根據地である諸開港場は、ひとり海岸に留まらず、事實上、全國至る所に存在する。極めて重要な開港場である漢口は、殆ど精確に支那の中心に位してゐる。支那の南北は揚子江によつて分たれ、東西は北京より廣東へ至る往還によつて分たれてゐる。此二つの分界線は、久しい間、支那史上の重要な戰術上の地點であつた漢口に於て出會する。揚子江の南岸にある漢口の對岸なる武昌から廣東へは汽車が通じてゐるが、目下は途中即ち長沙（同じ開港場）までしか通じてゐない。鐵道の完成は船渠の改良と相俟つて大に廣東の重要さを加へ、香港の重要さを減ずるであらう。

開港場に於ては貿易が主たる仕事となつてゐる。けれども揚子江下流及び或鑛山地方に於ては、工業時代が始まりかけて居る。支那は原綿を多量に生產する。是は大部分原始的な手工業で扱かはれてゐるが、近代的な紡績工場も多少出來てゐる。若し低廉な賃銀が傭主にとつての低廉な勞働を意味するものだとしたならば、ランカシヤーの前途は餘り有望ではない。何故ならば南部支那に於ては、綿はその地方で產出され、氣候は濕潤であり、その上英國の勞働者が文字通り生きることの出來ぬほどの賃銀で、極めて長い間働くことを辭せぬ工業的苦力の無限の供給があるからである。それにも拘らず、ランカシヤーが恐れねばならぬのは、賃銀の廉い支那の苦力ではない。そして支那は、生產方法の改良と教育の改善の結果、支那の勞働者がよい賃銀を取るようになるまでは、恐るべき競爭者とはなり得ない。

於ても他の總ての國に於けると等しく、工業の始まりは頑強で殘酷である。知識分子は彼等の國が工業化される上に、それほど悲慘でない方法を知りたがつてゐる、けれども今までの處、他にはさうした方法が見當らぬ。

支那の知識分子は、他のどの國とも違つた、甚だ特殊の地位を占めてゐる。支那に於ては世襲的貴族は二千年來、事實上無くなつてゐた。そして國は競爭試驗に及第した人々によつて支配されて居つた。此結果、他國では支配的貴族階級のもつ權威が、教育ある人々に與へられて居つた。古い傳統的教育は急速に亡び、高等教育は近代的な科目を教へてはゐるが、教育の特權は殘存し、輿論は猶ほ智的特質のある人々の意見に聽從しようとしてゐる。張作霖を始め、多くの督軍は山賊上りなので、この態度を採るには餘りに愚鈍で、餘りに無智であるが、それがために彼等の統治は微力な、不安なものになつてゐる。青年支那、即ち外國か內國の近代的な專門學校で教育された人々の勢力は、それほど學問を尊重せぬ國では見ることの出來ぬほどのものである。近代的な學生の數は急速に增加し、彼等の人生觀も目的も推奬するに足るものであるから、此處が最も有望な點だと思はれる。次の十年內外に、彼等は──もし列強にして何等かの強壓的な政策を採ることなしに、次の十年間を過させさへしたたら──支那を革新するだけの力をもつことにならう。

青年支那の思想と可能性とを理解することに努めることは重要である。私は近代的教育を受けた其等の支那人と大抵の時を過した、そして私は彼等の心持を多少紹介したいと思つてゐる。私は既に二つの時代を見分けることが出來るやうに感じた。即ち非常な困難を以て鬪ひながら、殆ど孤獨の中に儒教的偏見を脫したものと、家族との避け難い爭鬪に於て同情と奬勵とを與ふることを辭せぬ、近代的な精神の人々の充ち滿ちた學校や專門學校にチヤンと待ち受けられてゐた青年との二種である。より古い人々──三十乃至五十歲の人々──は、ダーウインやミルの時代の合理主義者のそれ

に似た內外の戰ひを經て來た。彼等は、幼時に注ぎ込まれた信仰から自分を解き放ち、新しい科學や新しい倫理にその考へを向けるために、苦しみ〳〵、無限の困難を經て來たのである。(例へば)プロテイヌスが幽界から呼び戻されて、ヘンリームードを尊敬すべく、奇蹟的に命ぜられたと想つて見るが好い。是等の人々が何百年を一跨ぎにして歐羅巴人にならうとしてゐる所は、丁度さう云つたようなものである。彼等の中にはその努力に倦んだ者もある。彼等の精力は多かれ少かれ消耗せられ、彼等の獨創力は、もはや創造的ではなくなつてゐる。

能力ある支那人が吾々の文化を咀嚼した時、全然模倣的になるものと想像してはならぬ。これは第二流の支那人に、特に其等の人々が基督信者になつた時に起り得ることであるが、最も優秀な人々の場合には起り得ぬことである。彼等はやはりどこまでも支那人で、歐洲文明を同化した後でも、それに對して批評的に留まるであらう。彼等は或透明な淡白さと、道德的力の効果に對する、眞摯なる信仰をもつて居る。產業革命は未だ彼等の心的過程に影響して居らぬ。彼等は或意見の重要なことを悟ると、それにとつて有利な理由を說くことによつて、それを擴めようとする。彼等は廣告の爲に新聞の第一面を買收したり、又は鐵道線路に沿うて『某々の意見は最善である』などと書いた廣告板を立てたりしない。すべて是等の點に於いては、彼等は著しく先進諸國殊に亞米利加と相異してゐる。恰かも石鹼の如くに意見を取扱ふと云ふようなことは彼等には決してない。そして彼等は無慈悲や、又は其目的を考へないで好んで騷ぎまはることなどを賞讃しない。彼等は舊い偏見を投げ棄てたまゝで、未だ新しい衣を着けてゐないが、思想上、純粹に自由な狀態にあり、且つ如何なる提議でも之を其の眞價のまゝに考察することが出來る。

然し青年は、初代の近世知識階級より以上のものを有してゐる。過去に於ける鬪爭の經驗も少く、彼等はより多くの精力と自信とを保持してゐる。先驅者の率直と正直とに加ふるに、社會的に効果ある決斷力とをもつてゐる。

に青年の天性かも知れないが、然し私は之には更により以上の意味があると思ふ。三十歳以下の青年は屢々、大なる爭なくして之を同化する若い時代に西洋思想に接觸したので、彼等は思想上の衝突によつて分裂せられることなくして知識を獲ることが出來た。そして彼等は初歩だけは支那人教師から西洋の知識を學ぶことが出來たので、これが過程を一層容易くした。勿論最も若い學生でも未だ反動的な家庭を持つてはゐるけれども、彼等は家庭の要求に抵抗し、且つ理論上のみでなく、實際的に、古いものに對する支那の傳統的尊敬を極端に行はされると云ふ點に於いては、彼等の先輩ほどの苦勞をしない。これらの青年のうちに私は支那の希望を見るのである。少しの經驗で彼等が實際的の智慧を學んだならば、彼等は支那人の意見を、其當然動くべき方向に導くことが出來ることゝ私は信じてゐる。

支那人には容易に死滅しない一つの傳統的信念がある。そしてこれは、正しい倫理的情緒は、微細な科學的知識より以上に大切だといふ信念である。勿論この見解は儒教から出たものであつて、産業革命前の社會に於いては幾分眞理であつた。それはルツソー又はジヨンソン博士等の言ひさうなことであり、且つベンサム時代以前の人々は誰れでも廣くさう言つたものである。西洋に於いては、吾々は今や反對の極致の方へ廻つてゐる。吾々は技術的能率が一切で、道德上の目的は無だと考へ易い。戰鬪艦はこの見解の具體化したものと考へることが出來よう、例へば、吾々が之を使用すれば飛行機からの一彈を以てよく一都會全體を滅盡させることが出來る、或る毒瓦斯に關する記事を讀む時には、吾々が心から恐ろしいと信じてゐるものに對する戰慄を感ずるが、科學的技術といふ點に於いてはそれは眞實の喜びである。科學は吾々の神である、吾々はそれに向つて『爾予を殺すとも、而も予は爾を信ぜむ』と言ふ。そして實際それは吾々を殺す。支那人にはこの缺點はないが、その反對即ち善意のみが眞に必要な唯一物であると信ずる缺點がある。一例を擧げて見よう。支那政府の林業顧問フオルサイス・シエルフエシーは、一九一九年一月英國公使館に於いて『支那に

於ける林業の國民的性質』に關する講演をした。(註)この講演で彼が證明した（林業の知識のない者の判斷し得る限りに於いて）所によれば、現在荒蕪地のまゝに殘されてゐる支那の大部分は、殖林に適し、現在行はれてゐる材木の輸入（鐵道線路の枕木用の如き）は、全く不必要であり、そして若し水源地の山の傾斜面が再び森林と化せられたならば、屢々全國各地を荒らす洪水を完全に防ぐことが出來るといふことである。然し支那人は倫理熱に凝つた國民であるから、最も進歩的の支那人でも之に殖林の興味を與へるのは容易なことではない。墳墓の周圍に樹木が植えてあるのは、孔子がさうすべきものだと言つたからであつて、若し儒教が滅びようものなら、樹木も切り倒されるだらう。また社會的精神を有する支那學生は英國の大學で教へられてゐるが如くに政治學說を學び、そして樹木の効用と云ふような小問題を侮蔑する。例へば、上下兩院の固有の關係に就いてすべてのことを學んだ後、彼等は歸省して、督軍が兩院を無視して、教科書の中には書いてなかつた樣式の政治を行つてゐるのを發見するようなものである。吾々の政治學說は西洋に於いてのみ眞實であり、吾々の林業學說は等しく各所に於いて眞實である。然し支那學生が最も熱心に學ばうとするのは吾々の政治學說である。之と同樣に經濟的過程の實際的研究こそ極めて有益でありさうなのに、支那人は、工業以前の國に殆んど適用することの出來ない、吾々の理論的經濟學を好んで學ばうとする。然しすべてこれらの點に就いて、著しい進歩が始りかけてゐる。

（註）Printed in "China in 1918," published by the Peking Leader

吾々の知識階級と支那の知識階級との思想の分岐點は、科學である。支那人は、最も近代的な人々でも、白色民族殊に米國人は、孔子のそれに取つて代るだけの道德の極致に達してゐると目做すのである。彼等は未だ人間の道德上のものは、大體に於いては何處も同じであり、敢て何かやればそれだけ害悪を醸

事はするものであることを會得して居ない。吾々と支那人との間に道德の差別が存する限りに於いては、
つてゐる。何故なれば、吾々はより多く精力的であり、從つて日々より多くの罪惡を犯すからである。吾々が支那人に教へなければならないのは、道德や、政府に關する倫理の極致ではなくて、科學と工藝的技術である。支那の知識階級が、機械的な物の見方を學ばずに、西洋の知識を學ぶことである。

私の『機械的の見方』といふ言葉が何を意味するものであるかといふことが、恐らく明瞭でなからう。それは帝國主義、ボリセキズム及び基督教青年會に等しく存在する或物、すべて支那人の見方と異なり、且つ私自身から見て大なる弊害であると考へられる或物を意味するのである。私の意味する所は、人間は吾々の科學的手術によつて思ふが儘に如何ような形態にでも鑄造せられる原料であると考へるが如き風習である。斯ような立場にある人々から見れば、問題の中心は、知覺を犧牲にして意志を修養すること、吾々の世界觀を實現する爲に他人を强制することは吾々の義務であると云ふ熱烈な道德的信念にある。支那の知識階級は餘り信條としての帝國主義に煩はされることはないが、ボリセキズムと基督教青年會とによつて烈しく攻め立てられてゐる。前者からは階級戰爭と共産主義者の獨裁についての信念を、後者からは冷水浴と啞鈴體操の神秘的效能についての信念を學んで、彼等は今にもこの何れかの犧牲にならうとしてゐる。

此二つの信條は、其西洋の達人に於いては、改宗の見込のある者以外の一切の人類に對する侮蔑と、教義の宣傳即ち進歩だといふ信念とを含んでゐる。それは孰れも政府と自然に反した生活とに對する信念を含んでゐる。私は此見解を機械的と呼んだが、また機械組織は之に新しくしてより多く害毒ある形態を附與はしたが、それは宗教に劣らず舊いものである。支那哲學者の第一人者たる老子は、之に對して反抗する爲に其書を著し、そして彼の門弟莊子は寓話に事よ

せて其批評を書いた。

註：Musings of a Chinese Mystic" by Lionel Giles (Murray), P. 66.

『馬は霜雪を踏まんが爲に蹄を持ち、寒風に耐へんが爲に毛を持つてゐる。彼等は草を食み水を飲んで、戰場を馳驅する。これが馬の本然である。金殿玉樓の住居は彼等に無用である。』

『ある時博労が現はれて、かう言つた、「自分は馬の取扱方を知つてゐる」と。そこで彼は馬に烙印し、刈込みをなし、其蹄を削り、手綱を附け、頭を縛り、足に足枷して、之を厩に繋いだので、其の結果十中の二三は死んで了つた。それから彼は彼等を飢ゑさせ渇えさせ、だくを踏ませ、そくをかゝせ、様々の手入を加へ、其上に前に備へるに纓のついた鞍の苦痛を以てし、後を脅かすに節のある鞭の恐怖を以てしたので、到頭其半數以上は死んで了つた。』

『陶人は曰く、「自分は思ふが儘に土塊を扱ふことが出來る。若し之を圓くしようと思へばコムパスを用ゐ、四角にしようと思へば定規を用ゐる」と。』

『大工は曰く、「自分は思ふが儘に木材を扱ふことが出來る。若し之を歪めようと思へば弧を用ゐ、眞直にしようと思へば直線を用ゐる」と』

『然し如何なる根據があつて吾々は、土塊及び木材の本然が斯ようなコムパスや定規や弧や直線の適用を欲してゐると考へることが出來よう。それにも拘らず、何時の世でも、馬を取扱ふ技倆の爲に博労を賞め、土塊と木材とを細工する技倆の爲に陶人と大工とを賞めてゐる。國を治める者も亦同じ過誤を犯してゐる。』

老子を其教祖とし莊子を其主な使徒とする道教は、儒教に取つて代はられたが、

の生活を貫き、西洋のより殘忍な生活に比して、之を一層温雅にし寛大にし、一層瞑想的にし柔順にした、支那人は外國人を見るに恰かも吾々が動物園の動物を見るが如くにし、外國人が『水を飲んで戰場を馳驅する』か否かを見、且つ一般に其珍奇な風習を見て面白がるといふ有樣である。基督教青年會とは異り、彼等は、吾々が動物園の猿にズボンとシヤツとを着せるより以上に、外國人の風習を變へようとは考へない。そして相互に對する彼等の態度は、一般に等しく寛大である。支那が共和國となつた時には、他の國民のやうに皇帝の頭を馘ねる代りに、彼等は皇帝の稱號、其宮殿、及び一ケ年四百萬兩を其儘與へて置いたので、彼は今日に至るまで其官吏、宦官、及び格式を保ち、其の威嚴の一片をも失つてゐない。支那人との談話中人々は彼が相手を理解しようと努めてゐるばかりで、相手の態度を變へさせようとも又は相手に干渉しようともしてゐないことも感ずるであらう。彼の企圖の結果は戯畫であり又は頌詞であるかも知れないが、何れにしても、それは微妙な知覺と精細なユーモアとに滿ちてゐるであらう。北京の一友人が私に幾枚かの繪畫を見せたが、その中で特に私は色々の鳥を記憶してゐる。雀を摑んでゐる鷹、樹木の大きな枝を爪で握つてゐる鷲、片足で寂しさうに雪の中に立つてゐる水禽。すべてこれらの繪畫は、彼等の人間に對する取扱ひ方に於いて感ぜられると同種類の同情的理解——ニイチエの正反對だと云へば恐らく最も當つてゐるかと思はれる何物かを示してゐた。此性質は、不幸にして、戰爭には無用であつて、諸外國は全力を盡して之を踏み躙らうとしてゐる。然しながら此性質は、無限の價値を有する性質であつて、吾が西洋諸國は既に之を殆ど失つてしまつてゐる。彼等の微妙な美の意識と共に、これは支那國民を極めて愛すべきものにするのである。吾々が支那に對して行ひつゝある傷害は不法にして殘忍であり、野蠻な百萬長者の野卑な快樂の爲にする、微妙にして可憐なる事物の破壞である。ウオーレー氏によつて支那語から譯された詩の一つは『商人』と題し、そしてそれは恐らく私が到底及ばない位正確に、支那人が吾々より優れてゐる點を表

はしてゐる——

『商人は彼等の技倆と狡猾とを誇るが、哲學に於いては、彼等は小兒同然だ、互ひに掠奪の功名を誇りながら、
彼等は肉體の窮極の運命を考へようとはせぬ。
廣き世界を硬玉の杯の中に
天と地とを超越した明智によつて見、
變化の馭車に乘つて不變の門に入る、
暗き眞理の主人公を
彼等が何うして知らうぞ。』

(Waley. 170 Chinese Poem, P. 85)

『暗き眞理の主人公』に對する尊敬の念が、少しは吾が西洋文化の使徒の心に這入つてもよさゝうなものだと、私は思はぬでもない。然しそれは餘事であつて、極東問題を解決するには、他の方法を求めることが必要である。

（註）プットナム・ウイールの著には太平亂（長髮賊）で人口一億五千萬を減したと書いてあるが、一千五百萬の間違ではないかと思はる（改造記者）

婦人の力と産兒制限

マガレット・ザンガー

現在に於て世界が當面してゐる最も重大な問題は、住民の數と質とに在ると云つても過言ではない。人口過剩が既に慢性になつて居り、剩餘の數だけ、自然的飢饉や疾病によつて時々掃蕩せられる民族がある。支那、露西亞、及び印度は、人間が此最も重大な問題を偶然に任せて置く時には、自然的法則がどういふ作用をするかを示して居る。他の國民も亦その充溢する人口のために十分の土地を得られぬ時の來ることを恐れて居る。その結果は戰爭と戰爭の準備とである。即ち或國民は『擴張』のために準備し、或國民は、自國より一層急激に人口の增加する他國の侵略に對する防禦のために準備する。最近まで、合衆國は世界にとつての大きな擴張の餘地を提供してゐた。合衆國は歐羅巴諸國の過剩人口の引取り場所であつた。けれども今や亞米利加はこの門を閉ぢ始めた。そして兩半球の空虛は孰れも急速に塞がりかけてゐる。

吾々は又生存競爭が種族改善の上に貢獻をすること、即ち強い有爲な、そして聰明な者が殘存して、心身共に劣弱な者が淘汰されるといふ考へを以て自ら慰めることは出來ない。文明と法律との人爲的な抑制の結果、生存競爭は、野獸の間では今なほ行はれてゐるやうな、體力と持久力との公平な試煉ではなくなつてゐる。富者はその所有物の蔭に保護せられ、各國の警察は强者が弱者から劫掠することを防止する。

過剩人口は貧者の屈從を常に益々甚しくする。大家族を扶養する貧乏人は、どんな賃銀でも、先方の申出通りの額に甘んぜねばならぬ。彼は若い獨身の同僚より餘計取らねばならぬのに、餘計金が入ることのために、一文も取れなくて

はといふ恐れに驅られて、若い獨身者より一層廉い賃銀に甘んぜねばならぬ。彼の家族は營養も不足、着物も不足、教育も不足で、酷い家に住んでゐる。過度の勞働に疲勞し切つた彼の妻は、子を生むに適せぬにも拘らず、のべつに子を生んで居る。子供の中には生き存らへるのも死ぬのもある。此戰爭の中で死んでしまふ子供一人づゝに對して、育ちはしても馬鹿な、役に立たない者が三人乃至四人位づゝ出來る。饑饉や疫病の場合も同じことである。饑饉や疫病は火事のように碓りした處は殘して腐つた部分だけ燒いてしまひ、新しい擴張の餘地を餘すものでない。それは男と云はず女と云はず、子供と云はず、最良の者をも拔惡の者と等しく襲ふのである。それに殺される者は多いが、其人には必ずしも最も弱い、最も望ましからぬ者とは限らず、却つて多くの場合跡に殘された者の方が殺された者より、國民にとつて災の原因となることが多い。墺太利又は露西亞の饑饉の寫眞は饑饉や疫病を凌いで永らへはしたが、社會に對して貢獻するよりも、却て一生涯その重荷となるような何十千萬何百萬の人々をどう仕末せねばならぬかを語つて居る。

戰爭もこれを救ふことは出來ない。國民の精鋭は戰爭に狩出されて、弱い不適者ばかりが次代を生み出すために殘される。世界大戰の結果を前にして、誰かその結果が佛蘭西、獨逸、墺太利、英國其他何れの參戰國にとつても優生學的であつたと主張し得よう?との見地から見ても吾々は、人は種族の改善を、盲目的な自然力に任せておくべきでなく、彼にして改善を望む以上は、自己の智能と意力とを用ゐて、自らそれをかち得なければならぬのである。

是等の事實は既に數代以前から完全に知られて居つた。その間に科學は進歩し、種族改善の一事を除くの外、殆ど他の總ての方面に於て人間は自然の主人公となつた。彼は物理學や光線や電氣の法則を發見した。彼は重力を征服し、空中を往來するに至つた。彼は距離を亡して世界の端と端との一瞬間に交通することを可能にした。彼は疾病をも大に減少せしめ、嬰兒時代に死なずに濟んだ男女の平均壽齡を延長した。けれども過剰人口の問題の前には絶望的に手を拱むばかりで、恰も人間は自然の主人でなく、その召使でもあるかのように不適者が殖えて行くのである。

文明は人知の力では到底養ひ切れず、母國では收容し切れぬほどに人間が殖えて行く恐ろしい傾向を如何とも……が出來ぬであらうか。總ての國民は、殘つた者を養ふためには、その最良の住民の一部、

か。そして總ての國民は、他國を溢れ出た大人口が、自國の岸に押しよせて、自分らが自己保存のために戰ふことなくされはすまいかといふ恐れを抱かされずには居られぬものだらうか。人類は時を經るまゝに、より完全になる[illegible]に、より不適當なものとならねばならぬのだらうか。この吾々の地球上に於ける男や女や子供の半分は、十分の部屋がなかつたり、十分の食物がなかつたり、彼等に十分の發達を遂げさせるだけの機會がなかつたりするために、一生悲苦しまねばならぬのであらうか。此問題に對する答は如何？

此問題は注意を惹かずにはゐなかつた。新しい科學——優生學——が生れて、吾々の人口の中に重大な部分を占める精神薄弱者や不適者の問題に深く愛を抱く男女は、此危險を處置する方案を提出した。是等の優生學者は問題の一部分を解することが出來た。彼等は不適者の蕃殖について、社會に警告し、人口を一層よく平均させるために、種々の提案を出した。彼等は病人や精神薄弱者に對しては子供を生ましめず、社會は、自己の生活を自ら支配することの出來るものを保護する責任のあることを正當にも要求した。けれども彼等は問題の全面に亘つて公平な觀察を下してゐない。彼等は人口の質的方面を見て量的方面を見落してゐる。彼等は何等かの形に於ける政府を取締によつて、適者の蕃殖が奬勵せられ、不適者のそれは防止せられ得るものと信じてゐるらしい。彼等は適者を保存するには、各々の新來者に對して食物、住宅、教育、及び機會が與へられねばならず、優良種も、もし壓迫が激し過ぎれば、頹廢と不適者への退化を免れ得ぬ事實を見落してゐる。法律を殖し、政府の取締りを加へた處で、これを免がれる道はない。男子の見地からこれを考へる科學や政治家には、此問題は到底解決不可能な問題ではない。一見これが解決不可能に見へるのは、男子がこれを自分だけで解決せねばならぬ、自分ら特有のものだと考へたがためである。けれども生殖は第一に男子の問題の問題ではない。それは婦人の問題である。子供を生むのは婦人である。子供を生み、それを養ひ育て、且つ人生に出してやることは婦人の職分である。子供を、自分が生みたいと思ふだけの數に制限し、其數を自分の力の及ぶ範圍に留め、且つその夫の賃銀や、彼等が居住し得る家、彼等のために費し得る食物、衣服、教育及び榮養の範圍以內に留めることも亦婦人の職分である。

然るに婦人は此義務を盡して居ない。彼等はそれをするに必要な自由を得ぬうちは、これを遂行することが出來ぬ。彼等は全然男子の意思に屈從してゐるので、過剰人口によつて世界を脅かしてゐる害惡に對する責任を殆ど悟らずにゐる。然も婦人が熱心に人口の制限を望むことは事實である。婦人の魂は、自己の力以上に子供——彼女に自己發展の時間を與へぬほどに多い子供、望みもせず、歡迎もせぬに生れて來る子供、子供自身にとつても家族にとつても災であり、國民にとつての脅威である子供——を生むことによつて加へられる重荷に對して叛逆を起す。

曾ては一般に子供は單に父親のみのものであると信ぜられてゐた。それは父親の『胤』で、母親が貢獻したのは、此種子が育て熟して、生れ出る用意が出來るまで、豐饒な土地を提供するに過ぎない。子供に對する父親の權利のみを認める法律は、此古い思想を反映してゐる。そして母親が家族の中で全然屈從的な他位を與へられたのも、多少此信念に基いて居るのである。近代科學は父と母とが子供に對して平等の遺傳を與へること、且つ母親は子供の誕生前及び誕生後の親密な關係によつて、父親よりも遙かに大きな感化を子供の上に與へたことが立證せられた。

子供に對する母親の此優越な力は、新しい生命が出來るまでには、卵子と抱合せねばならぬ精子を父親が與へるにせよ、九ケ月の間、母親はその胎内に發育中の卵子を蓄へてゐるのである。その九ケ月の間。子供を養ふものは母親の血である。若し母親が過度の勞働をしたり、不健康であつたり。病氣に感染して居たりすれば、其等の狀態はすべて子供の上に影響する。父方の遺傳も母方の遺傳も優良であり、精子も卵子も共に善良な血統から出、健全なよい體質と聰明な精神とを受けて居るにもせよ、若し姙娠九ケ月間に婦人が適當な榮養を得ることが出來ず、もし其血が過度の疲勞や、又は生れて來る子供が自分や他の子供らのパンを減ずることを知る姙娠中の母親に恐ろしい影響を與へるかの心配のために毒せられたならば、誰か强壯な、健全な子供を期待することが出來よう。家畜の飼養者はその牝牛や牝馬が姙娠してゐる時には、コキ使つたり虐待したりすることを許さぬ。さういふ待遇が殆ど必ず齎らす惡結果を避けんがために、極力母子の幸福を圖るに相異ない。然るに男子は、總てのよい農夫や馬の持主が子羊や犢を懷姙中の母に對の注意を、婦人に與へたことはないように思はれる。

婦人は過剰人口によつて世界を苦しめる害惡に對する責任を自覺はせぬが、餘りに多くの子供が生れることは
で、彼等の意思ではない。婦人は眞の優生學者である、彼女をして、生きる餘地もなく機會もない子供を續々と生むことに對して反逆の聲を擧げさせるものは、單に自己の生活欲——男子にあつては疾に正當な當然の事と思はれながら婦人に對しては屢々認められぬ欲望——のみでなく、實に母愛から出た情熱である。

いつの時代でも、婦人は常に餘りに多くの子供を生むことに反對して居つた。種々の時代に此反逆は、子殺し——父親の仕事ではなく、母親の仕事であつた子殺しとなつて現はれた。他の時代には婦人が不本意な子供を除く手段として墮胎に訴へた。此二つの行爲を禁ずる法律は幾つも發布せられたが、子殺しと墮胎とを亡すことは出來ず、それを大に防止し得たか否かすら疑問である。けれども過剰人口に對する此二つの救治策は共に、それを採つた婦人にとつては嫌惡に堪へぬものであつて、これを採ることは實に切迫詰まつた餘儀ない場合、二つの大きな害惡の中で一方が他の一方より。幾らかましだと思はれるので採るにすぎないのである。

或條件の下に於ては婦人は子供を生むではならぬ。その條件は婦人自身の裡に在るかも知れず、又はその結婚した相手の裡にあるかも知れぬ。夫なり妻なりが結核、微毒、淋疾、癲癇、癌腫、發狂、何等かの精神的疾病、若くは酒癖又は何等かの劇藥を服用する習慣のある場合はさういふ條件に適合する。是等の病氣は大抵遺傳性のものでないと信ぜられて居るが、病氣の罹り易い體質が親から子供に傳はることは知られて居る。結核患者の増加は、以前なれば親とならぬうちに死んだやうな多くの男女が蕃殖する年頃まで、醫者が彼等を生かしておくようになつた結果だと云はれて居る彼等は結核を直接子供らに譲りはせぬが、その子供らは、健全な兩親の子供らよりも、結核に感染し易いのである。

徽毒は三代四代の後までも遺傳する。花柳病中の此恐るべき一種ほど嬰兒に對して有害な胎内の力はない。小兒科病院の徽毒科にゐる嬰兒達は實に慘澹たる光景を呈し、それだけで理性ある人々に、徽毒の親が子を生むことは、氣狂ひじみてゐるほど愚劣であると同時に罪深いものであることを確信せしむるに十分である。上掲の他の疾病、及び酒癖や服藥の習慣についても、何人かそうした習癖のあるものが、國家の負擔とならぬ子供を生み且つ育てることが出來

ると信じのやう？

かういふ病氣のある時は父親も母親も子を生むことを控えねばならぬが、他にも婦人が姙娠する以前に考慮に入れねばならぬ婦人特有の條件が澤山ある。まづ婦人は相當の年に達して十分に發達して居らねばならぬ。彼女は病み上りや疲れ過ぎたりして居らず、健康でなければならぬ。心臟病や腎臟病にかゝつて居たり、骨盤に異狀があつたりすると子供を生めば一命に關はることがあるかも知れず、斯樣な危險は本人が前以つて知つて居り、その自由な承諾があつた上でなければ冒さるべきでない。

一見健全な、普通な人に見える男女に缺陷のある子供の生れることがある。こういふ場合には、夫婦がどれほど子供を欲しようとしても、さういふ缺陷ある人間を社會の負擔に加へる權利もなく、又さういふ子供達が親となつて再び缺陷ある子供を作る危險を冒す權利もないのである。マサチユセツツ州で或一人の精神薄弱の婦人の家族系統を周密に調べて見た處が、それから出た數百の子孫の中の犯罪人や缺陷ある者のために社會が費した裁判、監獄、養育院等の費用が總計數百萬弗に達してゐたのである。

何等かの病氣のために兩親が子供を生むことを控えた方が賢く、又生めば國民全體に對して非社會的な行動となる場合をさし措いても、普通の健全な婦人の場合をも考へて、さういふ婦人の場合にも子を生むことを偶然の機會に任せておいてよいかどうかを決めねばならぬ。場合にも亦、婦人自身の立場から見ると、社會の立場から見るとの二つの見方がある。幸にも此二つの見地からの得られる決定は、緊密に一致して居る。何故なら婦人にとつて惡いことは通例社會にとつても惡く、社會は只だその成員の中に、健康な、榮養佳良の、よく育てられた子供を加へられることによつてのみ利益を得るからである。

極く若い母親が子供を生むことは望ましくない。姙娠するや否や、母親自身の發達は停止する。故に子供で母親となる者は心身共に成長を遂げずに終る。彼女は子供の狀態に留まつて、その生來の才能や天賦の可能性が達し得る
で達せずに終る。總ての牧畜家は此自然的法則を理解し、自分の若い牝牛や牝馬が成長し

になるまで、番はせずにおく。婦人は男子よりも早熟であり、東洋諸國の婦人は合衆國の婦人よりもズット若

が出來ると普通に斷言されて居る。けれども男兒の場合にも女兒の場合にも或種の成熟は發達の中止を伴ふことを記憶せねばならぬ。そして東洋の少年少女の長い間教育せられ、責任にも煩はされずに居る米國の少年少女の、少女時代の長いことゝ成熟の晩いことは、長い間かゝつて婦人を、未成熟の少女たる狀態から脫せしむる上に有利な影響を與へたのである。

娘は自己の內にある一切のものを發達させるため、且つ子供のために、二十二才以下で母親となつてはならぬ。米國では娘は二十五才以下では母となるに足る用意が十分に備はらぬ。生殖し始める前に成熟する時間を十分に與へられた婦人の子供らは、極く若い娘達の子供よりも丈夫で、恐らくどの點に於ても後者を凌いで居るに相異ない。さういふ母親は、高度の精神的發達を遂げる機會を得、隨つて一層よく子供等を養育し訓練することが出來る。

いかなる婦人も休息に必要な間隔をおかずに子供を生むではならぬ。婦人が自己の血と肉とを以て、その生み出す小さな生命を作る時の婦人の肉體上の勞苦は非常なものである。分娩後の數ケ月間は、母が子供に榮養を與へねばならぬ。多くの婦人は授乳期が終らぬ中に、又はそれが終ると直ぐに次の子を懷胎する。隨つて母親の體內に何等の豫備的力をも蓄へる暇がなく、これを屢々繰返す中には、婦人は年齡よりも早く老け込み、その健康と力と物事を樂しむ能力とを全然失はせてしまひ、ウジヤ〳〵とゐる子供に對して何等の感化をも與へることの出來ぬ奴隷にしてしまふのである。かような必然に無能力な母親の大家族は、社會にとつての負擔どころか重荷となるので、犯罪人や賣笑婦はかういふ家庭から供給されるのである。

此處まで吾々は只だ健康の點からだけ考へてみたが、なほ子供の生れて來る家族の經濟的狀態といふ、極めて重大な問題が殘つて居る。一國の過剩人口といふことは、その根本に於て一般的なものでも國家的なものでもない。それはA夫婦の家には子供が多すぎるとかB夫婦の處には多すぎるとかいふことの決定的な結果である。そして人民の總ての子供を國內で養ふだけの餘裕がもうないといふことを看取する政治家にとつて問題となるのは、僅かな「多過ぎること」

の總計である。

若し各々の夫婦が自分らの力で育て、食はせ、着せ、自分らが間代を拂ひ得る部屋に相當に生活させ、子供らが一人前として世間に出られる程度に教育し得る範圍に子供の數を制限したならば、さういふ問題は起らないのである。かようにして養育せられた子供の數は、一國の人口を維持することが出來る。若し機會が多くなり、富が増加し、發明なり發見なりがより大なる人口を維持することを可能にしたならば、機會が多くなるだけ兩親はそれを利用することが出來る。母愛と父愛とは、男女の負はねばならぬ負擔が重すぎぬ限り、子を育てる骨折るは甘んずるものであると思惟せられて居る。

最も多く經濟問題に煩はされるのは賃銀勞働者としての父親だと思はれよう。後から〳〵殖える家族の負擔のために押し潰される男子が多く、それを知れることは彼には可能なる限りの最大の祝福と思はれよう。幸福に浮き〳〵と結婚生活に入り、生の喜びと、自分自身及び世間が彼に與ふべき機會に對する希望と信念に充たされた青年が、十年後自分の賃銀が増すより以上の速度を以て殖えた家一杯の子供をもつた時分、昔の其人と比べて見るがよい。恐らく彼の妻は餘りに多くの子供を生みすぎたのと、そのお世話をする勞苦とのために衰へ切つた病人となつて居りもしよう。彼は負債に苦しめられ、それほどの大家族を養ふ費用を作ることが出來ぬ。家族が八人になりながら——十年間に六人子供が出來るのは普通いくらもあることである——大きい家へ引越す代りに、彼は家賃を減すことを餘儀なくされ、二番目の子供が生れるまで棲んでゐられた狹い小さな家庭の代りに、長屋町のごちや〳〵した見すぼらしい住居に移らされる。

男子にとつてこれほどの苦勞があるにも拘らず、經濟的負擔のために最も苦む者は婦人である。不潔な長屋をどうやらかうやら家庭らしくし、家族の全員が住むで眠るだけの場所を作り出すのは婦人の仕事である。乏しい賃銀を遣繰りして殖えて行く一方の家族の必要に應ずるやうにせねばならぬのも婦人である。その間中、彼女は常に今一つの新しい生命を胎内に抱いて居るにせよ、まづ第一に飢餓の苦痛を味ふものは彼女である。姙婦は榮養をよくせねばならぬ、さもなければ母子共に惡影響を蒙る。けれども一家の母は、夫や子供が飢えてゐる間に、

出來もせず、欲しもしない。男子の勞働時間は組合の規則やその職業の一般の習慣によつて保護せられども小さな子供のある大家族の母親の勞働時間には制限がなく、食物の不足や他の衛生上の缺陷に伴ふ子供らの頻繁な病氣は、此勞働時間を終日終夜に亘るまで延長する。

經濟的問題は個々の家族よりも遙かに廣大なもので、全世界の勞働者に觸れてゐる問題である。總ての國家に於ける勞働者の屈從の程度は、通例人口増加率に正比例するものである。勞働者は勞働問題に當面する時には、數の上の競爭の有害な結果を或程度まで認めて居るが、出生率を賃銀率との間の關係は未だ十分解し得ずに居る。勞働者はその困難の唯一の解決は家族制限にあり、それが行はれぬうちは——そして勞働者自身によつて行はれぬうちは——低い賃銀、長い勞働時間、及び酷い狀態に對する救治策は、畢意緩和劑にすぎぬことを、未だ認めようとせぬ。其等はかなり効果もありはしようが、後から〳〵と殖える勞働者の群はその安定を脅かし、勞働者が自分自身の子供との此益々増加する競爭を一掃せぬ限り、決してその勝利を確保することは出來まい。

社會主義者の理論と資本主義に對する攻擊とは勞働指導者連の推服する處となつて、彼等に、その生産する富に比して彼等が貧困であることとの基礎的原因に對する注意を拂はしめなかつた。彼等は産業組織の變更によつていかなる利益を得ようとも、殖えて行く一方の成員とそれを頒け合ふならば、其等一切の利益は一點の跡をも殘さずに、綺麗に消滅してしまふ事實を見落してゐる。

勞働組合、特に高級な熟練工の組合は、高い賃銀と勞働者の數の少いこととの間に存する關係を認めてゐる。彼等は徒弟數を制限し、ために總會加入條件を困難によることのために常に戰つて來た。けれどもその同じ人々は、勞働者の一般的團結を認めもせず、子供達が無制限に勞働者の仲間入りをすることが、彼等が自己のために獲得した利權の維持を益々困難にすることを一向認めない。若し彼等の政策が彼等自身の生計の道を保障するとしても、それは勞働界に自己の地位を見出さねばならぬ彼等の子供のために、何等の機會を作るものでもない。

一般に所謂『自由』勞働に關しては、吾々はたゞ大戰終了後の世界の狀態を一瞥すれば足る。總ての交戰國の最も有

僞た最も聰明な青年達、肉體的に最も完全な何百萬人は大戰爭の間に殺されたり、又は全然勞働不能にならしめられた

戰時中には、世界は勞働者の不足に苦しむだらうといふ氣までされ、生き殘つた者は一人について以前より多く働かせねばなるまいと思はれてゐた。然かも三年以内に失業は勞働者の遭遇した最も顯著な問題となり、一九二一年—二二年の冬には、世界第一の富國であり、戰爭のために何等の慘害を蒙らなかつた亞米利加に於て、不熟練勞働の一つの仕事に對して百人からの希望者があり、何等かの職業に高度に熟練した人々が、自分で犯した過ちからではなく、街路の雪掻をして僅か許りの收入を得る機會を乞ふた例があるまでとなつた。

互に競爭し合ひ、互に相手の鬪爭を益々困難ならしめてゐるのは男子ばかりではない。大家族は幼年勞働を意味し、子供はその親達の賃銀を引下げる手段となる。子供が二人か三人しかない、チヤンとした勞働者は子供の教育を高等の學校まで續けることが出來、時には專門學校に入れることさへ出來る。然るに子供が六人乃至八人もあると、總領の子は勞働許可證を得ることが出來るや否や、どうでも働きに出ねばならず、兄弟姉妹が相並いで働けるようになり次第、勞働市場に押しかけることになる。

婦人は子供が多ければ多いだけ、そして家庭の負擔が重ければ重いだけ、外へ出かけて一家の收入を殖す工夫をする必要に迫られる。彼女は家にゐなければならぬ人物である。彼女が働きに出れば子供達は放つておかれる。けれども家族は食べて行かなければならず、背に腹は代へられぬ仕儀になる。もし彼女がなほ子を生む年齡ならば——そしてなほ子供を生む年頃の婦人の家族こそは、上の子供達が小さいので、餘計母親の稼ぐことを必要とするのである——彼女の健康は餘りの過勞のために破壞されてしまふであらう。けれども彼女はそんな考慮に煩はされてはゐられない。

彼女は絶對的必要の笞に驅たれて働きに行くのである。

勞働市場に於ける是等の競爭者——婦人と子供——は不熟練で且つ團結組織がない。彼等は廉い賃銀——大抵の場合傭主の申出のまゝのどんな賃銀でも——受けることを餘儀なくされ、斯して彼等の競爭は不熟練勞働の一般的水準を下げる。斯様に大家族が勞働市場に多くの勞働者を送り出し、多くの勞働者が[illegible]

場に追ふことによつて勞働者の數を増加するといふ、忌はしい循環が行はれるのである。

此上此問題の重大さを力說することは必要でなく、たゞその解決を見出すだけが問題である。近代文明は嬰兒殺しや墮胎による、亂暴な人口制限の方法を超越した。是等の方法は今なほ用ひられて居る。たとへ大抵の文明國で父母が剩餘の子供らを溺死させたり捨てたりすることは廢れたにせよ、適當な世話や食餌を缺くために子供らを死なすといふ、一層容易な方法がある。

墮胎は嬰兒殺よりも遙かに普通である。合衆國に於ける墮胎數は一年に一百萬を越えてゐる。さうした手術は皆な法律を潜つて行はれ、法律を潜つて行はるゝが故に、名聲あり、熟練ある醫師の行ふ所とならぬ。無用の子供を除からうとする婦人は　斯うして山師や下手な醫者の手にかゝり、この方法が、手術の惡結果と危險とを甚しく増大するのである。姙娠の初期に於て巧妙に行はれる墮胎は、胎兒を月滿つるまで留めて措き、順當に出產するよりも、母親の力を費すことが遙かに少い。けれども通例行はれるやうに、無智な、非衞生的な醫師が貧困な母親に試みるやうな墮胎は、單に姙婦に自然の產と同樣の苦痛を與へるのみならず、健康と生命その物に對する無數の危險をさへ伴ふものである。

孰れにせよ、道德問題と引放しても、墮胎は無駄の多い方法である。受胎の瞬間から母親はその生命と力とを新しい生命のため頒ち與へる。姙娠の續く間、日每に母親はその力を殺がれねばならぬ。墮胎は既に生存する生命の破壞であり、それを行ふ婦人の健康と生命との浪費であるが故に斥けねばならぬ。故に此問題に對する解答は、墮胎、嬰兒殺しの中にも見出すことは出來ぬ。

產兒調節運動の主張する解決方法は、姙孕の豫防であつて、豫防には殺兒や墮胎の無駄を少しも伴はぬ。自然は新生命の可能を、甚しく餘分に準備する。自然は男に、精液のうちに無數の活きたる細胞を與へて居る。そしてすぐに是等の細胞は、適當な狀況の下に置かれゝば、それ〴〵一つの卵に授胎することが出來る。また自然は女には、幾千の卵を與へて居るが、其大部分は必然に、新しい人間に發達することが出來ずに終る可きものである。如何に多產な男女でも、自然が彼等に賦與した細胞のうちの、ほんの僅かな部分を生殖に用ひ得るに過ぎない。

そこで今千の卵が、自然に無駄になるのは何處までも正しいが、千一番目の卵の受胎を故意に防止することは宜しくないと主張することは、全く取るにも足らぬ愚論である。男性の生殖要素と女性の生殖要素とが出會はすことを防止し、斯くて姙娠を避けるといふ事柄は、寡婦や未婚者や、または遠方に離れてゐて而かも忠實な夫婦によつて、不斷に行はれて居る事である。此作用を今一歩おし進め、既婚者が同棲して居る場合に姙娠を防止すること、之が今科學の解決しつゝある問題である。そして科學は此問題を解決することによつて、人間をして――既に、其他の殆んど有ゆる自然力の主人となつて居るやうに――自己の運命の主人たらしめつゝあるのである。

近世科學が、生活力を與へる精液と女性の卵との性質を、正確に知らせて與れるまでは、姙娠を豫防する方法は、唯だ一つしかないらしい。卽ちそれは自制である。卽ち子供を産むことの望ましい極く僅かな場合だけに、嚴密に性交を制限することである。そして自制を以て、眞に道德的な唯一の産兒調節方法であると主張する人が、今尙ほ澤山ある。斯やうな人々は、幸福な結婚をして同棲生活をしてゐる普通の男女の力の、到底及ばぬことを人性に要求して居るのである。そしてそれは亦た、若し道德に適つて居るかどうかといふことは、人類の福祉の上に及ぼす行動の結果が、善いか惡いかによつて定められるものとしたならば、斯やうな人には、積極的に不道德な要求をして居るのである。

男女間の性的關係は、家族生活の基礎である。そこで若し幸福の結婚であればある程、そして夫婦間の愛情と同情とが濃やかであればある程、多くの子供を持つことを避ける爲に止むを得ずしなければならぬ自制の苦痛は、一層堪へ難いものとなるも此種の自制の結果は、恐らく男子が最も甚しく苦痛を感じる。そして普通に強い性的感情も備へた男子は、可なりの時期の間この種の自制に堪へ、しかも能く神經系の疾病や、進んでは精神上の疾病に陷入られぬのは稀である。自制は極めて少數な例外的の男子と、少數の婦人を除いては迚も望まれず、また健康と兩立せぬ。そしてそれは餘りに多人數の家族といふ、大問題に解決を與へない。何故ならば、それは到底實行の出來ない筋道の行爲であり、また若し徹底的に實行したならば、健康と幸福とに大害のある行爲だからである。

既婚者をして、能く其子供の數を調節せしめる爲には、斯やうな難事を無理強ひする

生活力を與へる男子の精と卵との遭遇を防止する一事である。そして之は聰明な人類に取つて不可能なことではない。今までのところ、此問題に就いては周到な科學的研究が幾何も行はれて居らぬ。從つて今日まで用ひられてゐる方法は久しからずして雜粗な極劣なものとなるだらう。そこで産兒調節を主張する者の目的は、好ましくない子供の受胎を防止する、或る一定の方法を教へることに重きを置くものではなく、それよりも寧ろ、人口過多の問題に注意を呼び起し之が制限を必要とする輿論を造ることにある。

強制的に、いや／＼ながら母にされること、これぞ婦人の隷屬の根本である。そして婦人の隷屬は、人口過多より起る一切の弊害の根本である。出産は婦人の問題である。從つて婦人は、自ら此問題を解决する地位に立たされねばならぬ。女は彼女自身の身體に對する權利、從つて何時子供を持つかを選ぶの權利を持たねばならぬ。若し此權利を絕對に婦人に與へられたなら、世界のうちに生存する餘地をも機會をも有せぬ子供を持つことは、無くなるであらう。そして病弱な片輪の子供を持つことも無くなるであらう。何故ならば如何に愚かな母親でも、喜びとならずに自分の悲みとなり、眞實にして幸福な母たる光榮とはならずに、人間としての最大の屈辱を自分に齎らすやうな子供を此世に産み落すことを欲するには、餘りに多くの母親の愛を持つてゐるからである。

クラルテの運動

歐羅巴の知識階級と其の新思想

アンリイ・バルビュス

私は此の雜誌の主幹が其の仲介によつて私を日本の思想的選良に紹介しようと云つて來たのを喜ぶ。種々なる會議や儀式でいろんな希望が述べられ、又いろんな美くしい勸告があつたのにも拘はらず、そして恐らくはそれが餘りに美くしすぎたからであらうが、國際的の了解や直接の接觸は今日ではまだ幼稚なものである。地球の遠い國々の間の有らゆる交通路の上では、それは商業上や金融上の取引や、又は外交上の靈妙微細な掛引のまはりをぐるぐる廻つてゐるのに過ぎない。そして各國民の思想や生活はまだめいめい別々に進んで行つてゐる。いろんな思潮が到る處に調和して行けると云ふ事が、極く直接な利益のためにも又全體の正しい平衡のためにも根本的の必要でないかのやうに。新しい國民の中にはいり、それを觀察し、それを研究するたびに、吾々はいつも今まで餘りにそれを知らなさすぎた事を悔ひ且つ恥ぢるのである。ヨオロツパ諸國に於ける國民的精神や智能の歴史的關係に就いてさうだとすれば、遠い諸大陸には猶更さうである。私達の國の家にばかり引つこんでゐる多くの人によつては、他の大陸などと云ふ事は一種の裝飾的作り話か、地理學上の單なる言葉にすぎない。

しかし、フランスの年老いたそして怠けもの丶人心は、フランス以外のそして又殊にヨオロツ

如何に考へないと云つても、太平洋の中に古い東方世界のいと高い境界を建てゝゐる此の壯麗な半圓形の島が、旭日其者と同じやうに其の性質が極く年老つてゐると同時に極く若く、極く古いと同時に極く新しい此の日の出の國が、人類の現在及び將來の歴史に何事に於ても現はす重要さを思はないのではない。比類のないそして抑へる事の出來ない活力を持つて此の國が、今後列強の組織の中に取るであらう重要さに就いては知つてゐるのだ。お役人外交は此の國をそつと窃み見して、おづおづと認めて、そして手前勝手なお追從でもつて遇らつてゐる。國際的發展の習慣に其の心を慣らして、地理學的寄木細工の其の國民的部分の境界線などに其の目を止める癖を失つた吾々には、太古の神聖な征服者神武天皇が創設した此の帝國に、今或る重大な思想運動が起つてゐる事を知つてゐる。

求めてそして望んでゐる此の人々に。有らゆる舊い權威を批評し、又他の人々を解放する事の出來るように、此のフランスに於けると同じくそして又それと同じ形の下に自分の思想を自由にした此の人々に。私は知識階級の或者等が舊大陸に創設し、組織し、そして廣大な利益のために必要だと信ずる目的の下に堅固な國際的團體を成すように組みたてたところの、社會事業に就いて話さうと思ふのである。

フランスでは、どこでも又いつでもさうである如く、『公認』知識階級が思想生産者の最も大部分のものである。現在の制度に對する此の從順な態度は、要するに何れの時に於ても、知識的選良と稱せられるものゝ特性である。大文豪や大藝術家や大科學者は、現に彼等を支配してゐる事物の狀態を批評し批難する事に加はるのを注意して避けるか、或はたゞそれを讃めるためにそれに就いて語る。かくして彼等は彼等が其の下に生活して來た制度のおきまりの御機嫌取りであつた。彼等自身が其の構成部分であつたのだ。そして彼等の文章は一種の立派な裝飾として其の時代にくつ着いてゐ

るやうなものなのだ。

著作家の役目と云ふ事の、極く單純でそして極く腹藏のない、第一の意味はかうだ。即ち其の時代を描いてそれを讃めたてる事である。事物の進行を指導する有力な人物を賞めそやして、確定した權力の大きな證據を黄金のやうな言葉や忘れる事の出來ない一文句で云ひ現はす事である。だんだんに批評的精神が詩人や作家の心の中にはいつて行つた。が、極く稀れな例外を除いては、此の批評も現在の法律に對しては行はれない。其の目標とするところは、人間の惡い癖だとか、缺點だとか、弱點だとか、又は其の滑稽さとかである。風習は巧妙に若しくは猛烈に痛擊した。が、制度は攻擊しない。其の周圍の社會的慣例を明らさまに攻擊して、それによつて科學者のやるやうな動かす事の出來ない修正を事物の描寫の上に施した作家は、めつたにない例外であつた。我がフランスの古い諺に據れば、例外は規則を證明するだけのものである。

あの狂ひまはつた戰爭は少しく此の情勢を變へた。此の反對黨の作家の僅かな數を急に可なり增した。それによつて文學の世界を廣くすると同時にそれを深め且つ重くした。作家は、事物の或る狀態に組みして讚んでそれを受け入れる事が、多くの場合に彼れを淺薄にして了つた事が分つた。そしてそれ以來、社會生活のドラマの云はばまあ有らゆる隅々に立つてゐるところの、思想上の或る大問題を看過する事が益々困難になつた。其の見た事を若しくは見たと信じた事を、たゞ描くだけでもう滿足しないで、それを批評しなければならない。吾々の多くは、それ程多くの門戶が彼等に閉されて居るとは認めないで何處にでもはいつて行く權利があると主張してゐる。

戰爭中の文學は、其の記錄であるところの作物によつて、著しい進步の第一步を示した。其の進化は、作家に、其の從來滿足して受けいれてゐた役目よりも更に餘程重大でそして莊重な役目を與へた。勿論將來の文學

して來たばかりの此の數年間に、從來全く模倣的でそして敍述的であつた文學的生産の領域の中に、かくして沈着的に批評的精神即ち哲學的若しくは科學的精神を引き入れた事を認めるすであらう。

私が先きに云つた外國文學に對する吾々の先天的無知と云ふ事のあとに、こんな說を立てるのは可なり困難な事であらうが、私の思ふには、其の作物が一九一四年の戰爭に關係してゐるフランスの作家等は、他の如何なる文學も及ばなかつたと思はれるところの、批難と修正との作物を出した。これは今日吾々の國が世界に見せてゐる悲しむべき態度を多少償ふものである。尤もそれは吾々の國と云ふよりも寧ろ吾々の國を支配してゐるもの等であつて、そして實際に於ては彼等は權利や正義を代表してゐない如くに吾々の國をも代表するものではない。

しかし著名な文學の作物は、決して、一時代の知的財産の全體を成すものでない。たかゞそれは此の財産の意味と價値とを測る事の出來るものである。

學生や青年や教師や怜悧な筋肉勞働者等は、有名な著作家等よりも以上に、一環境又は一世代の知的生命を支へる衆團を成すものである。此の衆團の中に、フランス及びヨオロツパに、一思想運動が生れた。其の運動の全體が云はゞ一つの實現である。何故ならそれは思想の進行と進歩とのために缺くべからざるものである。それが『クラルテ』の運動だ。

此の反抗力は日に日に大きくなる。そしてそれは近い將來に知識界の多數者の中に根をはるだらう。實を云へば、思想生産者等の此の革命的波濤は猶いろいろと違つた要素から出來てゐる。

そこには平和主義的要素がある。これは戰爭以前にもあつた。しかも根強く頑ばつてゐた。そしてそれは其の理論も政策も大して變へなかつた。善意ある人達は戰爭の悲慘を說いて、結社をしたり會議を催したりして、帝國主義的諸政

府をして其の間に決定的な平和を確めさせるやうな方法を求めて來た。平和主義は、氣高い心の人々や感動的でそして實際的な心の人々には、多少風土病的にいつでもあつたものなのだ。いつの時代にでも、或る人々は發展を止して、正義に任せるよう希願して來た。今日の平和主義者等が主張する方法は歴史上の博愛主義者の複雜なそして移氣なユトピアよりも大して餘り實際的ではない。其の方法は强制的仲裁や諸國聯盟の思想を說くとか、人類が平安と友愛との中に生活するために行はなければならない事に就いていろんな希望を述べるとか、それに就いて全權大使や總理大臣等の注意を呼ぶとか云ふ事にある。

戰爭の悲慘な馬鹿馬鹿しさと或る先輩等の叫びとで眼を開いた若い知識階級の群は、もう久しい以前から平和主義の古い萬能藥を棄てゝ了つた。彼等は正しくもかう考へてゐる。戰爭は、其の支配の法式の利益のために、其の階級の利益のために、又其の特殊の利益のために、それを創め又それを續けて行く者等の同意によつて、此の世界から消えるものでないと。そして平和主義の老人等よりも賢い此の青年等は、戰爭の廢止と云ふやうな大きな改革が、猶他の大きな改革が其の周圍に行はれる事なくして、今日の人類に行はれようとは認めない。或る文書や儀式によつて戰爭が今日の社會から無くなるなどゝ思ふ人達の美くしいがしかしもう厭き厭きした望みを倒すのには、少しばかりの常識か科學的精神があればいゝ。若し實際に戰爭と鬪はうと思ふなら、其の原因を看破して、それを攻擊しなければ駄目だ。

知識階級の新しい青年は此の實證的領域の中に斷乎として立つものである。彼れは應用科學の改革者等が其の仕事を始める時、其の周圍に既に受けいれられ神聖視されてゐる科學を形づくるところの、迷信と作事と作話との混沌を見るやうに、其の問題を見てゐる。

斯くして、實證的推理の方法と深い現實感とによつて、惡に對する永遠の反逆的精神が

つて、そして社會主義的實現に近づいて行くのだ。

今日の社會秩序の批判は、武裝的闘爭の起原にまで指を觸れさせて、其の原因が人による人の搾取を生じさせる原因と同じである事を、即ち特權の不正なる濫用である事を敎へる。特權の制度は之れを獲得した力によつて維持され、そして此の制度を握つてゐるものは同時に又それを繼續させて行く方法をも握つてゐる。されば本當の實際的改革者と既成權力との間には、原則上如何なる妥協も成立すべきものでない。其の權力が持主を變へて、個性の尊敬と一般的利益との上に基づく社會組織を主張する人達によつて握られる事が必要なのだ。そして猶、此の社會組織は全く國際的のものとして考へらなければならない。人類の連帶責任は、今日では、かうした重大な改革は一つ一つ孤立しては何事も行はれ得ない程になつてゐる。孤立した努力は墮胎か妥協のほかはない。そして論理は、宇宙の息であり魂である人間をそんな風に氣まぐれに區別し、又此の世界の上に何物も決して變はる事のないやうに有らゆる迷信を利用して養ひ且つ無理強ひして來たそんな分離をする事を許さない。

此の一般的原則の全體は、全く合理的な精神から出たもので、そして其の大膽なのはたゞ一切の偏見や傳統を通じて矛盾がないと云ふところから來たもので、クラルテ團がそれを中心として結合した原則の全體を成すものである。猶クラルテは、此の廣大なそして、本質的な理論の思ひきつて實現的建設的な方面を明かにするために、特に社會改良主義の傾向と闘ふ。

社會改良主義は、其の一段一段が此の社會的文法學者等の思想の中で一つの進歩となつて、他の進歩の上に重なつて行くであらうところの相續く小さな階級によつて、現實と理想とを隔てる道を超えようと主張する。かくして彼等は其の考への中から、急激な改革と云ふ考へ、即ち革命の惡夢を斥けようとする。

新知識運動の考深いそして確實な性質の一證據は、それが社會改良主義の諸綱を斥ける其の猛烈さである。今日の社會狀態では、何れの進歩も一つ一つの既成制度の活力の中に吸ひ取られて了ふ。そしてこんな進歩は進歩の見せかけに過ぎない。出鱈目に過ぎない。漫畫に過ぎない。同じ不幸の原因が底の方に殘つてゐて、機會のある每に、そして皮相の若しくはなんでもない利益を得させながらも、同じ不幸の結果を生じさせてゐる。

日本の同志が直ぐそれに結びつくだらう事を吾々皆んなが望んでゐるところの、此のクラルテ團は、思想の綱領を持つだけで滿足してゐるのではない。何にかする事を求めてゐる。一世代の精神的資力を人類の幸福と眞理とのために役立てたいと思つてゐる。

其のために、彼れは先づヨオロツパの大中心地に支部を組織した。クラルテの支部はヨオロツパの有らゆる大都市に存在し、又は設けられつゝある。そしてラテン種族の住んでゐるアメリカやイタリイのやうに、此の花の盛んに開きつゝある地方もある。此の世界的組織は、各個人や各小團體の潜勢力を組織立つた一つの協力、秩序立つた一つの結束として用ひて、かくしてクラルテをして堅固なそして權威ある仕方で百科全書學者的一大事業を實現させる事を目的とするものである。此の事業は、一雜誌により、幾多の講演により、又幾多の小冊子及び書籍によつて、クラルテの首要思想を傳播し、有らゆる時事を此の意味に研究し矯正して行く事にある。事實と思想とを捉へる曲げる事の出來ない明斷な判斷の篩によつて、新しい思想が鍛へられ、猶吾々を支配してゐる社會組織の受けなければならない、批難が生れて來るのである。各小團體は原則上特殊の一點を研究し、そして其の各々の仕事が團體から團體に廻つて行つて、やがてそれが總ての團體の仕事になるやうでなければならない。これが、既に吾々の時代の上に其のしるしを刻んで、そして既に其の使命を著しく果した運動の根本的條件である。無知な若しくは瞞されてゐる輿論を新しい方向に向け

して莊嚴な正義の理想をもつと明かにそしてもつと近くする事が、其の使命なのだ。

或る點では、人の見る如く、クラルテは社會主義の或る政治的團體、殊に此の政黨の最も論理的な黨派の傾向と宣傳とに一致する。

しかし、クラルテが政黨であるとか、或は其の御用をするものであるとか、信じてはいけない。クラルテは明白に諸原則の概論と、今日では其の當事者の集團にすらも餘りに甚だしく閑却されてゐる本質的な大きな眞理との中にとゞまるものである。そして、不幸にも新しい眞理と呼ぶ事を餘儀なくされてゐる此の古い眞理を、若しまだ採用してゐなかつたら、それを大膽に採用しなければならないところの、眞摯篤實な人達を集めようとするものである。

クラルテは有らゆる勢力のそとに行動する。其の大きな引力は事物に對する自由な批評からのみ出る一つの理想を持つてゐる事にある。クラルテを組織する自由人は、何等豫斷的傾向のない虛心平氣な誠意が他の誠實を喜ばしたやうに、他の自由人を喜ばした。

總ての正直な人々が望んでゐる社會的變革を他日實際に行ふであらう社會主義諸黨は、今日まだ世界に於て餘りに僅かな黨員を持つてゐるに過ぎない。悲しむべき、しかし其の事實である事は十分認めなければならない或る事情のために。社會主義諸黨は今日自分自身から出て、そして廣く發展すると云ふ事の非常な困難を感じてゐる。彼等はまだ十分に理解されてゐない。そして討論もしない前から、たゞ其の社會主義と云ふ名を云つただけで、既成權力の多年の自働人形であり、其の運命が白痴に似てゐる盲目の犧牲であるところの、多數の無知のものを根本的にいやがらして了ふ。

されば、始めから始めて、人々に新しい精神の方向に向ふ最初の選擇をさせ、又まだ深い中毒とみじめな暗黑の中にある一切のものゝ破壞に向う最初の選擇をさせるのが、賢くしてそして實際的だ。人類が將來取らなければならない社

會様式を取るよう助けなければならない。今日の諸世代の人々が引きづつて行くところの、そして其のために麻痺されてゐるところの、そして又其のために互に倒れ合つてゐるところの、此の死重、此の恐ろしい抵抗は打ち倒して了はなければならない。眼を開かせ心を熱させる事に疲れてはならない。

勿論、現代文明の恐ろしいやうな完成、金融や工業や商業の發達の非常な複雜と增大、及び特權の法則に從つて無數の人々の利益に反してそこから起きて來る一切の其の歸結、勿論これ等の事は皆な必然にひとりでに行はれて行くであらう。そしてそんな馬鹿々々しさが現實の世の中に行はれる事を止めなければならない時が來るであらう。戰爭の脅威、生活の困難、止むを得ず大きくなつて行く重荷、一言で云へば、今國民の運命を日に日に年毎に其の中へ深入りさせて行く此の不可能の狀態は、數學的に舊制度の破産と失墜とに終るものでなければならない。

しかし、思想の生産者等は、此の際其の性質上彼等に歸せられてゐる役目を勤めるがいゝ。吾々が始終云つてゐるやうに、正義と衡平と社會組織は思想の仕事である。何故ならそれは現實に反對して思想によつて創られたものである。新しい社會組織は、知識階級が自己の財産として擁護しなければならないところの、そして其の到來を急がすやう努力しなければならないところの、偉大さと美とを持つてゐる。それをするためには、知識階級は、有らゆる精神的及び物質的征服の原則であるところの、組織の大法則を模倣するほかはないであらう。各人に其の分前を與へるであらう規則の下に人類を社會的整頓する事は、思想の仕事の整頓によつて準備されなければならない。そして此の思想の仕事は又、吾々が引き入れられてゐる此の悲劇的危機の間は、意志の仕事である。

私は、日本の考察し思想してゐる人々に、吾々が此の大きな群島の中に持つてゐる既知及び未知の友人等に、彼等が吾々と事を共にするよう、敢て誘へるのである。

l'encontre de la réalité. L'ordre nouveau a une grandeur et une beauté que les intellectuels doivent défendre comme leur bien propre et dont ils doivent s'efforcer de hâter l'avènement. Ils ne le feront qu'en imitant la grande règle d'organisation qui est le principe de toutes les conquêtes morales et matérielles. L'ordonnance collective des vivants, sous des règlements qui donneront sa part à chacun, doit se préparer par l'ordonnance des oeuvres de la pensée qui sont aussi, pendant cette crise tragique où nous sommes entraînés, les oeuvres de la volonté.

Je fais appel à tous ceux qui au Japon, réfléchissent et pensent, aux amis connus et unconnus que nous comptons dans l'énorme archipel, pour qu'ils se joignent à nous.

en faire office. Elle se maintient expréssément dans des généralités de principes, dans de grandes vérités essentielles qui sont aujourd'hui trop outrageusement méconnues même par la masse des intéressés et elle cherche à recruter les esprits loyaux et probes qui *doivent*, s'ils ne l'ont pas déjà fait, adopter audacieusement cette vieille vérité qu'on est malheureusement forcé d'appeler vérité nouvelle.

Clarté agit en dehors de toute espèce d'influence. Sa grande force d'attraction est d'avoir un idéal qui ne sorte que de la libre critique de l'esprit à l'égard des choses. Les hommes libres qui la composent ont prise sur les autres hommes libres comme la sincérité, sans parti pris et sans tendance préconçue, a prise sur la sincérité.

Les partis socialistes qui réaliseront un jour effectivement la transformation sociale que tous les honnêtes gens espèrent, ne sont encore dans le monde qu'un trop faible contingent. Par suite des circonstances que l'on peut déplorer mais qu'on est bien obligé de constater, ces partis éprouvent en ce moment une difficulté extrême à sortir d'eux-mêmes et à s'étendre largement. Ils ne sont pas encore suffisamment compris pour ne pas rebuter en principe, avant même toute discussion, par leur étiquette seule, un grand nombre d'ignorants—les séculaires automates des puis a ces consacrées, victimes aveugles, ce dont la destinée ressemble à de la folie.

Il est donc sage, il est donc pratique de commencer par le commencement, d'opérer dans la foule humaine une première sélection tendant à la nouvelle orientation des esprits, à la destruction de tout ce qu'il y a encore d'intoxication profonde et de ténèbres funestes. Il faut aider l'humanité à prendre le forme qu'elle doit avoir vers l'avenir. Il faut faire tomber cette opposition terrible, ce poids mort que les générations présentes traînent avec elles, qui les paralyse et qui les fait retomber contre elles-mêmes. Il ne faut pas se lasser d'obliger les yeux à s'ouvrir et les esprits à mûrir.

Sans doute le perfectionnement formidable de la civilisation contemporaine, la complexité prodigieuse et la multiplication des développements financiers, industriels, commerciaux avec toutes les conséquences qui en découlent, selon les lois du privilège, contre l'immense matière humaine, sans doute toute cela s'écroulera fatalement de soi-même. Il arrive un moment où l'absurdité doit cesser de se réaliser dans la réalité temporelle. Les menaces de guerre, les difficultés de la vie, les charges forcément grandissantes, en un mot les conditions impossibles dans lesquelles jour par jour, année par année, s'engagent en ce moment les destinées des peuples, doivent aboutir mathématiquement à la faillite et à la déchéance des vieux régimes.

Mais il convient que les travailleurs de l'esprit jouent en ce moment le rôle qui leur est dévolu par leur caractère même. Ainsi que nous l'avons dit bien souvent l'organisation sociale de justice et d'équité est une oeuvre de l'esprit puisqu'elle a été créée par l'esprit, à

large et essentielle doctrine, Clarté combat particulièrement la tendance du réformisme.

Le réformisme prétend franchir le chemin qui sépare la réalité de l'idéal par petites étapes successives constituant chacune un progrès qui s'ajoutera aux autres, dans l'idée de ces grammairiens sociaux. Ils ont surtout en vue d'éliminer de la sorte de leur conception, l'idée d'une modification brusque, c'est-à-dire le cauchemar de la révolution.

Une des preuves du caractère profondément réfléchi et précis du nouveau mouvement intellectuel, est l'acharnement avec lequel il dénonce le sophisme du réformisme. Dans l'état actuel des choses chaque progrès est absorbé à mesure dans le dynamisme vital des institutions établies et ce progrès là n'est qu'un semblant, qu'un fantôme, qu'une caricature de progrès. Les mêmes causes de malheurs subsistent au fond, produisant chaque fois que l'occasion s'en présente et malgré les avantages apparents ou insignifiants qui ont été acquis, les mêmes conséquences calamiteuses.

Le Groupe Clarté auquel nous espérons tous que des éléments japonais se joindront d'ici peu, ne se contente pas d'avoir un programme d'idées. Il cherche à faire quelque chose, à utiliser dans le sens du bien être humain et de la vérité les ressources spirituelles d'une génération.

Pour cela, il a d'abord organisé des ramifications dans les grands centres européens. Des sections de Clarté existent ou sont en formation dans toutes les grandes villes d'Europe et il est des régions comme l'Amérique latine et l'Italie où cette efflorescence se multiplie puissamment. Cette structure universelle a pour but d'employer par une collaboration méthodique, par un faisceau coordonné la force latente de chaque individualité et de chaque groupement et de permettre ainsi à Clarté de réaliser d'une façon solide et autorisée une grande oeuvre encyclopédique. Cette oeuvre consiste à diffuser, par le moyen d'une revue, par le moyen de séries de conférences, par le moyen de brochures et de livres, les idées directrices de Clarté; d'étudier et de rectifier dans ce sens tous les faits d'actualité. Au cribe d'un jugement inflexible et net qui s'empare des faits et des idées, s'échafaude l'élaboration de l'idée nouvelle et le réquisitoire que mérite l'ordre des choses qui nous régit encore. Chaque Groupe doit en principe étudier un point particulier et le travail de chacun doit circuler de groupe en groupe de façon à devenir le travail de tous. Telles sont les données fondamentales d'un mouvement qui imprime déjà sa marque sur notre époque et qui a accompli déjà d'un façon notable sa mission qui est d'orienter l'opinion publique ignorante ou trompée dans un sens nouveau et faire plus net et plus proche le vrai et solennel idéal de justice.

Par certains points, on le voit, Clarté se rencontre avec les tendances et la propagande de certaines organisations politiques socialistes, notamment avec les fractions les plus logiques de ces partis.

Mais il faut se garder de croire que Clarté soit un parti politique ou p

l'appel de quelques aînés ont ouvert les yeux, ont depuis longtemps abandonné l'antique panacée du pacifisme. Ils considèrent avec raison que la guerre ne disparaîtra pas du monde de par la bonne volonté de ceux qui l'ont créée et qui la maintiennent au bénéfice de leur formule de règne et en vue de leurs intérêts de classe, ou de leurs profits particuliers. Plus sages que les vieillards du pacifisme ces jeunes gens se refusent à admettre que l'on puisse apporter dans l'humanité actuelle une modification aussi profonde que la suppression de la guerre sans que d'autres modifications profondes ne soient imposées à l'entour. Il suffit d'un peu de bon sens et d'esprit scientifique pour faire tomber les belles mais endormantes espérances de ceux qui s'imaginent que la guerre peut se retirer de la société moderne à la suite de quelques écritures ou de quelques cérémonies. Si l'on veut lutter efficacement contre la guerre il faut en attaquer les causes, après les avoir démêlées.

C'est dans ce domaine positif que la nouvelle jeunesse intellectuelle s'est résolument placée. Elle considère le problème comme les rénovateurs des sciences appliquées considéraient le chaos des superstitions, des fictions et des légendes qui formaient autour d'eux la science acceptée et consacrée, lorsqu'ils se sont mis au travail.

C'est ainsi, par la voie du raisonnement positif et le sens profond des réalités, que l'éternel esprit de révolte contre le mal devient calculé et organisé et tend à se rapprocher de la réalisation socialiste :

La critique de l'ordre de choses contemporain fait toucher du doigt les origines des conflits armés et montre que ses causes sont les mêmes que celles qui produisent l'exploitation de l'homme par l'homme : l'abus inique du privilège.

Le régime du privilège se maintient par la force acquise et ceux qui le détiennent en même temps de le faire durer. Aucune compromission ne peut donc être établie en principe entre les vrais rénovateurs pratiques et l'autorité constituée. Il est nécessaire que l'autorité change de mains et soit saisie par les théoriciens d'un ordre basé sur le respect des individualités et sur l'intérêt général. De plus, cet ordre doit être conçu comme intégralement international. La solidarité des masses humaines est telle aujourd'hui que rien ne peut se faire isolément lorsqu'il s'agit de modifications de cette importance. Un effort isolé est condamné à l'avortement, ou à la compromission, et la logique n'admet pas les distinctions fantaisistes entre les hommes, souffles et âmes de l'univers, ces séparations que l'on a cultivées et que l'on a imposées en perfectionnant toutes les superstitions, précisément pour que rien ne soit jamais changé à la face du monde.

Cet ensemble de principes généraux imbus d'un esprit éminemment rationnel et dont la hardiesse consiste simplement à être conséquents avec eux-mêmes à travers tous les préjugés et toutes les traditions, forme l'ensemble des principes autour desquels s'est uni le Groupe Clarté. Pour préciser encore le côté énergiquement réalisateur et constructeur de cette

qu'il se contentait d'accepter jusqu'ici. Sans aucun doute les histoires littéraires de l'avenir marqueront pendant les années que nous venons de traverser cette intervention définitive de l'esprit critique, c'est-à-dire de l'esprit philosophique ou scientifique dans le domaine jusqu'ici purement imitatif et descriptif de la production littéraire.

Quoi qu'il soit assez délicat par suite de cette sorte d'ignorance congénitale que j'ai signalée plus haut, où nous nous trouvons vis-à-vis de la littérature étrangère, de formuler une pareille opinion, il semble que les écrivains français dont les oeuvres se rapportent à la guerre de 1914, ont fourni un ensemble d'oeuvres réprobatrices et rectificatrices, qu'aucune autre littérature ne me paraît avoir égalé. Cela compense en quelque manière la triste attitude que présente actuellement dans le monde notre pays ou plutôt ceux qui dirigent notre pays et qui en réalité ne le représentent pas plus qu'ils ne représentent le droit et la justice.

Les oeuvres marquantes de la littérature ne constituent pas, tant s'en faut, l'ensemble de l'apport intellectuel d'une époque. Tout au plus peuvent-elles mesurer le sens et l'importance de cet apport.

Les étudiants, les jeunes gens, les professeurs, les instituteurs, les travailleurs manuels intelligents forment une masse qui soutient la vitalité intellectuelle d'un milieu et d'une génération plus encore que les écrivains connus. Dans cette masse est né en France et en Europe un mouvement d'idées dont l'ensemble constitue, pourrait-on dire, une réalisation car il est capital pour la marche et le progrès des idées. C'est le mouvement de **Clarté.**

Cette force protestataire prend de jour en jour de l'extension et il n'est pas hasardeux de prétendre qu'elle s'enracinera un jour prochain dans la majorité des milieux intellectuels. A vrai dire, cette vague révolutionnaire des travailleurs de l'esprit est formée d'éléments encore très divers.

Il y a l'élément pacifiste. Celui-là existait et persistait même avant la guerre et il n'a guère changé de théorie et de tactique. Des personnes bien intentionnées prêchent l'horreur des massacres et font des associations et des congrès pour chercher les moyens d'obliger les gouvernements impérialistes à sceller entre eux une paix définitive : le pacifisme a toujours existé d'une façon plus ou moins endémique dans de nobles âmes et dans des coeurs émotifs et affectueux. A toutes les époques des hommes ont supplié la barbarie de désarmer et de s'en remettre à la justice. Les procédés que les pacifistes contemporains préconisent ne sont pas beaucoup plus pratiques que les complexes et inconsistantes utopies des philanthropes historiques. Ils consistent à imposer l'idée de l'arbitrage obligatoire ou de la ligue des nations, d'émettre des voeux, d'appeler l'attention des plénipotentiaires ou des premiers ministres sur ce qu'il faudrait faire pour que l'humanité vive dans la tranquilité et la fraternité.

La jeune multitude des intellectuels à qui la sanglante absurdité de la guerre et

A cette phalange de ceux qui cherchent et espèrent, à ceux qui comme ici et dans les mêmes formes qu'ici, ont libéré leur pensée pour pouvoir juger tous les commandements et pour libérer les hommes, je veux parler du rôle social qu'un certain nombre d'intellectuels ont créé dans le vieux continent, qu'ils ont organisé, qu'ils ont charpenté de façon à lui constituer une structure internationale solide, dans un but qu'ils prétendent utile à une vaste cause.

En France, comme partout et comme toujours, les intellectuels "officiels" constituent l'effectif le plus important des travailleurs de la pensée, Cette attitude de docilité envers les institutions a du reste de tous temps caractérisé ce qu'il est convenu d'appeler l'élite intellectuelle. Les grands écrivains, les grands artistes et les grands savants ou bien se sont gardés soigneusement d'intervenir pour critiquer ou censurer l'état de choses qui les régissait ou bien n'en ont parlé que pour en faire le panégyrique. Ils ont été ainsi les flatteurs attitrés des régimes sous lesquels ils ont vécu. Ils en font partie constitutive. Et leur mémoire apparait attachée à leur temps comme une sorte d'ornement magnifique.

C'est là la conception première, très simpliste, très candide du rôle de l'écrivain; peindre son temps et le célébrer; faire valoir les personnages puissants qui conduisent la marche des choses et traduire en paroles dorées et en stylo inoubliable les grandes évidences du pouvoir établi. Peu à peu l'esprit critique s'est insinué dans la mentalité des poètes et des écrivains mais à de très rares exceptions près cette critique ne s'est pas exercée contre les lois existantes. Elle a pris pour cible les travers des hommes, leurs vices ou leurs tares, ou bien leurs ridicules. Elle a fustigé spirituellement ou terriblement les moeurs, non les institutions. On peut dire que les écrivains qui se sont nettement attaqués aux formules sociales qui les entouraient et qui ont par là introduit dans la peinture des choses des rectifications péremptoires de savants, ont été de rares anomalies. Selon notre vieux proverbe français, ici, l'exception ne fait que confirmer la règle.

La guerre qui vient de se déchainer a modifié un peu cette situation et elle a enrichi assez brusquement la mince lignée des écrivains d'opposition. Elle a par là agrandi en même temps qu'approfondi et aggravé le champs de la littérature. L'écrivain s'est aperçu que l'acceptation béate et de parti pris d'un état de choses l'obligeait dans beaucoup de cas à rester superficiel. Il est devenu bien plus difficile désormais de laisser de côté certains grands problèmes d'idées qui se posent pour ainsi dire à tous les coins du drame de la vie collective. Il faut juger et no plus se contenter de peindre ce qu'on voyait ou ce qu'on croyait voir. Beaucoup de nous prétendent avoir le droit de pénétrer partout, en n'admettant pas que tant de portes leur soient fermées.

La littérature de guerre a marqué par des oeuvres qui sont des actes la première étape de cette évolution considérable qui donne à l'écrivain un rôle bien plus important et bien plus solennel que celui

Les intellectuels européens et les idées nouvelles.

Le mouvement de Clarté.

Par *Henri Barbusse*.

Je sais gré au directeur de cette publication de m'avoir demandé de me mettre en rapports, par son intermédiaire, avec l'élite pensante du peuple japonais.

Malgré tant de voeux émis dans des congrès ou dans des cérémonies, malgré tant de belles exhortations, et peut-être parce qu'elles sont trop belles, les pénétrations internationales, les contacts directs sont encore à notre époque dans l'enfance. Sur les voies de communication du globe, de pays à pays lointains, elles ne tournent qu'autour des transactions commerciales et financières et des délicats et subtils ajustements diplomatiques. Mais les pensées et les vies des peuples se développent encore à l'écart les unes des autres—comme si ce n'était pas de primordiale nécessité pour les intérêts les plus immédiats et pour les justes équilibres d'ensemble, que les courants d'idées pussent s'harmoniser partout. Toutes les fois que l'on pénètre dans un milieu national nouveau, qu'on l'étudie et qu'on l'approfondit, on éprouve le regret, et la honte de l'avoir trop ignoré jusque là. Si cela est vrai en ce qui concerne les rapports historiques des esprits et des intelligences dans les pays européens, cela l'est à plus forte raison pour les grandes terres distantes, dont l'image n'est pour beaucoup de sédentaires de nos régions qu'une espèce de légende ornementale, qu'une expression géographique.

Et pourtant si peu que la vieille et paresseuse mentalité française se préoccupe des réalités extra-françaises et surtout extra-européennes, elle n'est pas sans soupçonner l'importance que présente à tous égards dans l'histoire présente et future de l'humanité, ce magnifique hémicycle insulaire qui élève dans le Pacifique la suprême limite du vieux monde oriental, ce pays du Soleil Levant qui a pour caractère d'être à la fois très ancien et très jeune, très archaïque et très neuf—comme le soleil levant lui-même, On se rend compte de l'importance que va prendre désormais dans l'organisation des puissances, cette nation à la vitalité incomparable et irrésistible, que les diplomaties officielles regardent par en dessous, considèrent avec appréhension et traitent avec une obséquiosité intéressée.

Ceux d'entre nous qui ont plié leur esprit à l'habitude de l'extension internationale et ont perdu la manie d'arrêter leurs regards aux lignes frontières de leur parcelle nationale de mosaïque géographique, savent qu'un important mouvement d'idées travaille en ce moment l'empire que fonda l'immémorial Jimmu Tenno, le divin conquérant.

was desired. There are still many advocates of continence as the only really moral method of birth control. Such advocates are making a demand of human nature which is beyond the power of average man and woman living together in happy marriage. It is also making a demand which is positively immoral, if morality is tested by the good or bad effect of conduct on human welfare.

Sexual relations between men and women are the basis of family life. The more happy the marriage and the closer the affection and sympathy between husband and wife, the more intolerable the strain of continence, enforced in order to avoid the bearing of too many children. The restraint which is necessary for such continence produces the most markedly evil effects on both the man and woman. The man probably suffers from such continence most severely, and there are few men of normally strong sexual emotions who can stand it for any length of time without developing nervous or even mental disorders. Continence may be possible and consistent with health for a very few abnormal men, and a small proportion of women. But it offers no solution for the great problem of the too-large family, because it is a course of conduct utterly impossible to enforce, and highly detrimental to health and happiness if it could be consistently adhered to.

Nor is it necessary to impose this hardship on married people in order that they may be enabled to control the number of their children. The only thing necessary is to prevent the coming together of the vitalising male principle and the ovum, and means for preventing this are not beyond the reach of intelligent human beings. As yet there has been little careful scientific research into the subject and it may be that the methods hitherto used will soon appear crude and clumsy. The object of the advocates of Birth Control is not so much to teach any particular method of preventing the conception of the undesired child, as to arouse interest in the subject of over-population and to create public opinion in favor of restriction.

Compulsory motherhood is the corner stone of the subjection of women, and the subjection of women is the basis of all the evils of over-population. Birth is the woman's problem, and she must be put in a position to solve it for herself. She must have the right to her own body, and the right to choose when she will bear a child. If this right be made absolutely hers there will be an end to the bearing children for whom the world has no room and no opportunities; there will be an end to the bearing of diseased and defective children, for even the most inferior mother has too much mother-love to desire to bring into the world a child who will cause her grief instead of joy, and be to her the deepest humiliation that a human being can know instead of the crown of glory of true and happy maternity.

undertaken by reputable and well-trained physicians. Women, desiring to rid themselves of unwanted children, are therefore driven to quacks and ignorant practitioners whose methods aggravate enormously the ill-effects and the danger of the operation. Abortion skilfully performed at an early stage of pregnancy is much less drain on the strength of the mother than the normal birth of the baby. But abortion as usually performed on the poorer mother, by the ignorant and unsanitary practitioner, is not only almost equivalent in its demand on the patient to natural birth, but also carries with it innumerable dangers to health and even to life itself.

In any case—apart from the question of its morality—abortion is a wasteful procedure. From the moment conception takes place the mother begins to give of her life and strength to the coming infant. Every day that pregnancy continues means just so much more of a drain on the mother. Even the most skilful abortion requires time and rest in order that the patient may recover, and all this represents sheer waste of time and life and strength. Abortion is condemned, because it is a destruction of human life already in existence and because it a waste of the health and strength of the woman submitting to it. The answer to the problem is not to be found either in infanticide or in abortion.

The solution advocated through the birth control movement lies in the prevention of conception. Prevention carries with it none of the waste of infanticide and abortion. Nature provides in vast super-abundance the possibilities of new life. She gives the man, in his semen, countless millions of living cells, each of which under fit circumstances could fertilize an ovum. She gives the woman thousands of ova, the greater part of which must necessarily fail to develop into new human beings. The most prolific of men and women could use for reproduction only a tiny percentage of the cells with which nature has provided them.

To claim that it is perfectly right to allow a thousand ova to go to waste naturally, but wrong to prevent designedly the fertilization of the one thousand and first, is a proposition too absured for serious consideration. To avoid child-bearing by preventing the coming together of the male and female reproductive elements is what is done continually by the unmarried and widowed, and by faithful husbands and wives absent from each other. To carry this process further and prevent conception when married people are living together is the problem that science is now solving, and with the solution she is making man master of his own fate, as he is already the master of almost every other natural force.

Until modern science made known the exact nature of the vitalizing seminal fluid and of the ova of the female, there seemed only one way in which the prevention of conception could be carried out. That was by continence—strict limitations of sexual relations to the very few occasions when procreation of a child

three years unemployment was the most striking fact that faced the workers, and in the winter of 1921-22, in America, the richest country in the world, and a country which had suffered nothing from the ravages of war, there were instances of more than a hundred men applying for a single job of unskilled labor, and other instances of men, highly skilled in some trade, who from no fault of their own were begging the opportunity to earn a little by shoveling snow in the city streets.

It is not only men who are competing against each other, and making more difficult the struggle for each of them. Large families mean child-labor, and the children become the means of forcing down the wages of their parents. With a family of two or three children, the self-respecting working man can often afford to continue their education into the high school, and even sometimes to send them to college. When the children number six or eight, the eldest must necessarily go to work as soon as they can get their working papers, and sisters and brothers follow each other into the labor market at the earliest possible moment.

The more children a woman has, and the greater the burden upon her at home, the greater is also the necessity for her to go out and earn something to take out the family income. She is needed at home. The children will suffer from neglect if she goes to work. But the family must eat, and the greater need takes precedence. If she is still of child bearing age—and it is the woman still bearing children, whose family, on account of the youth of the elder children, most needs the earning power of the mother. Her health will probably break under the strain. Such a consideration cannot deter her. She goes to work under the lash of absolute necessity.

These competitors in the labor market—the women and the children—are unskilled and unorganized. They are obliged to take low wages, in most cases any wage that the employer may offer, and thus their competition, brings down the general level of unskilled labor. So runs the vicious circle—large families forcing more workers into the labor market, and more workers causing lower wages, which again increase the number of workers, through the forcing of women and children into the labor market.

It is hardly necessary to emphasize further the importance of the problem; it remains to find the solution of it. Modern civilization has outgrown the crude checks on population offered by the customs of infanticide or abortion. These methods are still in use. If, in most civilized countries, parents have ceased to drown or expose their superfluous children, there are easy methods of allowing them to die for want of proper care of feeding.

Abortion is far more common than infanticide. It has been estimated that the number of abortions in the United States every year amounts to not less than one million. Every such operation is illegal, and, being illegal, is not

husband and children go hungry. The man's hours of labor are probably protected by his union rules, or by the general custom of the trade. But the hours of labor of the mother with a large family of little children know no limit, and the frequent illnesses of children, brought up with insufficient food and other hygienic deficiencies, lengthen out these hours of labor until the day hold no more.

The economic problem is much wider than the individual family. It touches all the workers of the world. The servitude of labor in every nation is usually in direct proportion to the rate of increase of the population. In facing its own problems, labor has to some degree recognized the evil due to the competition of numbers; but it has never fully grasped the connection between the birth rate and the wage rate. It has never been willing to acknowledge that the only solution of its difficulties lies in the limitation of families, and that until this is done, and done by the workers themselves, other remedies for low wages, long hours, and oppressive conditions are palliatives. They may do considerable good, but the incoming horde of workers is ever threatening their stability and labor can never be secure in its victories, until it is safe from this ever-increasing competition from its own children.

The theories of Socialists and the attacks upon capitalism have served to absorb the minds of the Labor leaders and to distract their attention from the basal cause of their poverty, as compared with the wealth that they produce; and they seem to have overlooked the fact that no matter what benefits they could secure by a change in the industrial system all such benefits would disappear, leaving scarcely a trace behind, if they had to share them with ever-increasing numbers.

The trade unions, especially those of highly skilled workers, recognize the relation between high wages and small numbers. They have steadily fought for the limitation of the number of apprentices, and for making conditions of entrance into their unions difficult. But these same men have apparently not recognized the general solidarity of labor, nor the fact that the uncontrolled entry into the ranks of labor of the younger generation makes ever more difficult the maintenance of the advantages they have secured for themselves. Even if their policy secures their own livelihood, it does nothing to open up opportunities for their children who must find places for themselves in the working world.

As for "free" labor generally—we have only look at the state of the world after the state of the close of the great war. Millions of the most perfect physically, the most capable and most intelligent of the young of all the belligerent countries were killed or entirely disable during the titanic struggle. There was a feeling during the war that the world would short of workers, and that it would be necessary for those who remained to produce more per man than ever before. Yet within

important question of the economic status of the family into which the child is to be born. Over-population of a country is not at the base general or national question. It is the definite result of too many children in the family of Mr. and Mrs. A and too many in the family of Mr. and Mrs B. It is the sum of these little "too manies" that make the problem for the statesmen who see that there is no longer room in a country for all the progeny of its people.

There would be no such problem if each Mr. and Mrs. X had limited the number of their children to the few that they could afford to rear—to feed and clothe, to accommodate decently in the home of which they could pay the rent, and to educate to the point where the children would be able to make a good start in life for themselves. The number of children so reared would keep up the population of a country. If opportunities widened, if more wealth offered, if discoveries or inventions made possible the support of greater populations, the enlarged opportunities would induce parents to take advantage of them. Mother-love and father-love can always be counted upon to be willing to undertake the labor of rearing children, if the burden is not greater than men or women ought to bear.

It might seem that the father, as wage earner, would be the one most concerned with the economic problem. Many a man is crushed under the weight of his ever-increasing family, and relief would be to him the greatest possible blessing. One has only to compare the young man, entering happily and buoyantly on married life, full of joy in living, of hope and belief in himself and in the opportunities that the world will offer him, with the same man after ten years, with a houseful of children, who have arrived far more rapidly than his wages have increased. Probably his wife has become an invalid—worn out with over-much bearing of children and with the labor of caring for them. He is hampered by debts, and unable to meet the expenses of so large a family. Instead of moving into a larger house, now that he has a family of eight—six children in ten years is a common occurrence—he is obliged to reduce the expense for rent, and the pleasant little home that he could maintain until after the second child was born has been relinquished for a crowded and shabby dwelling in the tenement regions.

In spite of all this hardship for the man, it is the woman upon whom the economic burden weighs most heavily. It is she who has to make a home out of the sordid tenement, and to find room for the living and sleeping of all the members of the family. It is she who has to make the scanty wages cover the ever-increasing needs of the family. It is she who first feels the pangs of hunger—even though she may all the time be carrying another new life under her heart. The pregnant woman should be well fed, or both she and the infant will suffer. But the mother will not and cannot feed herself sufficiently while

point of view of the woman herself. Fortunately the decision from both points of view is usually in close agreement; because what is bad for the woman is usually bad for society; and society is only benefited by the addition to its members of healthy, well nourished and well reared children.

The bearing of children by very young mothers is not desirable. As soon as pregnancy begins, the mother's own development has arrested. The child-mother is therefore stunted in growth both in mind and body. She remains a child and never attains to the level to which her innate powers and inherited possibilities would have tended. Every breeder of animals understands this natural law, and keeps his young heifers or mares from breeding until they are grown and developed and ready for the strain. It is commonly asserted that women mature earlier than men, and that in oriental countries they are ready for marriage at a much younger age than in the United States. But it should be remembered that maturity of a kind comes with arrested development for either boy or girl, and the longer girlhood and later maturity of the American boys and girls who are given longer education and freedom from responsibility shed considerable light on the forcing process which for so long has made women out of really immature girls.

For the sake of the children, as well as for the sake of her own possibility of developing all that is in her, a girl should not become a mother before she is twenty-two years old. In America, girls are not fully ready for motherhood before they are twenty-five. The children of a woman who has been given time to mature fully before she commences to reproduce will be better fitted for life and probably in every way better equipped than the children of very young girls. The mother will also have had the chance of developing to a higher level mentally and will therefore be better able to rear and train her children.

No woman should bear children without adequate intervals for recuperation. It is a tremendous strain to which the female body is subjected when it form out of its own material the little life to which it gives birth. Following the birth are the months during which the nourishment of the child must be provided by the mother. Many women begin another pregnancy before the nursing period is ended, or at any rate immediately on its conclusion. There has been no time to lay up any reserve of strength in the mother's own body and this process, repeated time after time, makes a woman old long before her years, drains her of health and strength and all capacity for enjoyment and reduces her to the drudge who loses all her influence over her swarming brood of children. The large family of such necessarily incompetent mothers are more likely to be a burden to society than an asset, and it is out of such homes that we get our supply of criminals and prostitutes.

So far we have considered only the health aspects. There remains the very

they have been adopted.

There are conditions in which a woman should not bear children at all, These conditions may exist either in herself or in the man to whom she is married. Such conditions are present when either man or wife is suffering from such diseases as turberculosis, syphilis, gonorrhea, cancer, epilepsy, insanity or any mental disorder, or is addicted to drunkenness or to some drug habit. While it is not believed that most of these diseases can be inherited, it is known that a tendency to disease can be handed down from parent to child. The increase in tuberculosis cases is attributed to the fact that the doctors keep alive to propagate their kind many men and women who formerly would have died before parenthood. They do not bequeath tuberculosis to their children directly, but the children probably inherit a greater liability to the disease than the children of normal parents.

Syphilis can be inherited—"unto the third and fourth generation." There is no prenatal force which is so murderous for infants as this dread form of venereal disease. The babies in any syphilitic ward of a children's hospital for a heart-rending spectacle—quite sufficient to convince any reasonable creature that breeding from a syphilitic stock is criminal as well as insanely foolish. As for the other diseases mentioned, and as regards also drunkenness and drug habits who can believe that parents so afflicted can produce and rear children who will be anything but a liability to the nation.

Besides these diseases which ought to debar both parents from reproducing their stock, there are many conditions peculiar to the woman which ought to be taken into consideration before she enters upon pregnancy. She ought to be old enough for full development. She ought to be healthy and not suffering from recent illness or over fatigue. If she is affected with heart disease, kidney trouble or pelvic deformity, she risks her life if she bears a child, and no such risk should be imposed upon her without her knowledge and without her giving her free consent.

It happens sometimes that a man and woman, both apparently healthy and sane, have defective children. In cases like this, however much they may desire parenthood, they have no right to impose the burden of such defectives on society, or to risk the injury that such children may do to the race if they in their turn become parents of defectives. The descendants of a single feebleminded woman whose family has been carefully traced in Massachusetts, have been reckoned up into the hundreds with an expenditure of dollars by society on court trials, prisons, and asylums for the army of criminals and defectives among them.

Leaving aside these cases where some form of disease makes child-bearing unwise for the parents and anti-social for the nation, we still to consider the normal healthy woman, and to decide whether in her case child-bearing should be left to chance. There are again two points of view from which to judge the matter—the point of view of society, and the

point of view of the woman herself. Fortunately the decision from both points of view is usually in close agreement; because what is bad for the woman is usually bad for society; and society is only benefited by the addition to its members of healthy, well nourished and well reared children.

The bearing of children by very young mothers is not desirable. As soon as pregnancy begins, the mother's own development has arrested. The child-mother is therefore stunted in growth both in mind and body. She remains a child and never attains to the level to which her innate powers and inherited possibilities would have tended. Every breeder of animals understands this natural law, and keeps his young heifers or mares from breeding until they are grown and developed and ready for the strain. It is commonly asserted that women mature earlier than men, and that in oriental countries they are really for marriage at a much younger age than in the United States. But it should be remembered that maturity of a kind comes with arrested development for either boy or girl, and the longer girlhood and later maturity of the American boys and girls who are given longer education and freedom from responsibility shed considerable light on the forcing process which for so long has made women out of really immature girls.

For the sake of the children, as well as for the sake of her own possibility of developing all that is in her, a girl should not become a mother before she is twenty-two years old. In America, girls are not fully ready for motherhood before they are twenty-five. The children of a woman who has been given time to mature fully before she commences to reproduce will be better fitted for life and probably in every way better equipped than the children of very young girls. The mother will also have had the chance of developing to a higher level mentally and will therefore be better able to rear and train her children.

No woman should bear children without adequate intervals for recuperation. It is a tremendous strain to which the female body is subjected when it form out of its own material the little life to which it gives birth. Following the birth are the months during which the nourishment of the child must be provided by the mother. Many women begin another pregnancy before the nursing period is ended, or at any rate immediately on its conclusion. There has been no time to lay up any reserve of strength in the mother's own body and this process, repeated time after time, makes a woman old long before her years, drains her of health and strength and all capacity for enjoyment and reduces her to the drudge who loses all her influence over her swarming brood of children. The large family of such necessarily incompetent mothers are more likely to be a burden to society than an asset, and it is out of such homes that we get our supply of criminals and prostitutes.

So far we have considered only the health aspects. There remains the very

they have been adopted.

There are conditions in which a woman should not bear children at all. These conditions may exist either in herself or in the man to whom she is married. Such conditions are present when either man or wife is suffering from such diseases as turberculosis, syphilis, gonorrhea, cancer, epilepsy, insanity or any mental disorder, or is addicted to drunkenness or to some drug habit. While it is not believed that most of these diseases can be inherited, it is known that a tendency to disease can be handed down from parent to child. The increase in tuberculosis cases is attributed to the fact that the doctors keep alive to propagate their kind many men and women who formerly would have died before parenthood. They do not bequeath tuberculosis to their children directly, but the children probably inherit a greater liability to the disease than the children of normal parents.

Syphilis can be inherited—"unto the third and fourth generation." There is no prenatal force which is so murderous for infants as this dread form of venereal disease. The babies in any syphilitic ward of a children's hospital for a heart-rending spectacle—quite sufficient to convince any reasonable creature that breeding from a syphilitic stock is criminal as well as insanely foolish. As for the other diseases mentioned, and as regards also drunkenness and drug habits who can believe that parents so afflicted can produce and rear children who will be anything but a liability to the nation.

Besides these diseases which ought to debar both parents from reproducing their stock, there are many conditions peculiar to the woman which ought to be taken into consideration before she enters upon pregnancy. She ought to be old enough for full development. She ought to be healthy and not suffering from recent illness or over fatigue. If she is affected with heart disease, kidney trouble or pelvic deformity, she risks her life if she bears a child, and no such risk should be imposed upon her without her knowledge and without her giving her free consent.

It happens sometimes that a man and woman, both apparently healthy and sane, have defective children. In cases like this, however much they may desire parenthood, they have no right to impose the burden of such defectives on society, or to risk the injury that such children may do to the race if they in their turn become parents of defectives. The descendants of a single feebleminded woman whose family has been carefully traced in Massachusetts, have been reckoned up into the hundreds with an expenditure of dollars by society on court trials, prisons, and asylums for the army of criminals and defectives among them.

Leaving aside these cases where some form of disease makes child-bearing unwise for the parents and anti-social for the nation, we still to consider the normal healthy woman, and to decide whether in her case child-bearing should be left to chance. There are again two points of view from which to judge the matter—the point of view of society, and the

and it partly due to this belief that the mother has been given so subordinate a position in the family. Modern science has proved that father and mother contribute equally to the inheritance of the child, and that the mother from her closer relation to the child both before and after birth exercises an influence over it far exceeding that of the father.

This superior power of the mother over the child is easily realized when it is remembered that, although the father gives the fertilizing element which must unite with the ovum, or egg cell of the mother before a new life comes into being, the mother carries the developing cell for nine months in her own body. During these months it is the blood of the mother that feed the child. If the mother is over-worked, is out of health, or is infected with disease, all these conditions are bound to have their influence on the child. The inheritance on both sides might be excellent. Both sperm cell and ovum might be from good wholesome stock, from parents and grand-parents of sound and healthy bodies and intelligent minds. But if during the nine months of pregnancy, the woman is unable to give the child due nourishmen, if her blood is poisoned from over-fatigue, from the worry that rests so heavily upon the expectant mother who knows that the coming infant will steal the bread from her other children, who can expect a strong and healthy child? The breeder of animals would not allow his cows or his mares to be overworked and harrassed when they were carrying their young. He would care too much for the welfare of both mother and progeny to risk the almost certainty of band results from such treatment. It would seem that men have never given to women the consideration that is give by every good farmer or horse owner to the prospective mothers of their calves and foals.

While women have not realized their responsibility for the evils that afflict the world through over-population, it has never been their will that too many children should be born. Woman is the true eugenist, and it is not only her desire for her own life—a desire which has long seemed right and proper for men, but which is often denied to women—but also her passion of mother love that makes her cry out in rebellion against the bearing of child after child for whom there is no room and no opportunity.

Always through the ages women have been in rebellion against too much child bearing. At various epochs this rebellion has been shown in infanticide—infanticide which has been the act of the mother even more than of the father.

At other times abortion has been called into service to rid the woman of the undersired child. Laws have been passed against both these practices, but they have never been abolished, and one wonders whether they have been greatly checked. Yet both these remedies for over-population are abhorrent to the women who have resorted to them, and it is only in desperation, because they seem the lesser of two great evils, that

of feeble-minded and unfit have put forward propositions for dealing with the danger. These Eugenists have grasped part of the problem. They are calling public attention to the multiplication of the unfit. They have held international congresses, and have put forward various proposals for securing a better balance in the population. They would put a ban on the breeding of children by diseased and feeble-minded parents, and they rightly demand that society undertake the responsibility of caring for those of its members who are not capable of guiding their own lives. But they do face fairly the whole problem. Looking to the quality of population they leave out the factor of quantity. They seem to believe that by some form of government regulation, the multiplication of the fit could be encouraged, and that of the unfit prevent. They overlook the fact that to keep fit, there must be food, housing education and opportunity for each new comer, and that good stock cannot prevent deterioration and unfitness if the pressure be excessive.

The way out will not be found through the making and enforcing of more laws and more government restrictions. The problem is not so insoluble as it appears to those scientists and statesmen who consider it from the point of view of men. The reason for the apparent impasse is that men have considered the problem a problem of their own—one that they alone must solve. But reproduction is not primarily a man's problem. It is the woman's problem. The woman bears the child. It is her function to bring it into the world, to nourish and care for it, and to give it its start in life. It should also be her function to restrict the number of children to which she will give birth; to keep this number within the limits of her own strength and power, and within the limits set by the wages earned by her husband, the home in which they are able to dwell and food, clothing, education and nurture which are available for them.

Women are not performing this duty. They are not able to perform it until they are given the liberty which is necessary before they can do it. They have been subjected so completely to the will of men that they scarcely realize their responsibility for the evils threatening the world through over-population. And yet it is true that women passionately desire the limitation of population. The spirit of woman rises up in revolt against the burden laid upon her of bearing children beyond her strength, children who are too numerous to allow her time for her own development, children who come into the world undesired and unwelcomed, a detriment to themselves, an oppression to the family and a menace to the nation.

It was formerly a commonly held belief that the child belonged solely to the father. It was his "seed" and all that the mother contributed was the fertile soil in which this seed could grow and ripen until it was ready for birth. The law which gives the child into the sole power of the father reflects this old idea;

away the rotten members and leaving the sound untouched, with new room for expansion. They attack men, women and children, the best as well as the worst. Many they kill, and these are not always the weakest and the least desirable. But those they leave behind are in many cases a worse liability for the nation than those that were slain. A glance at the famine pictures of Austria or Russia tells what these nations have to cope with in the case of hundreds of thousands of human beings who have survived famine and pestilence, but who will all their lives be a burden rather than an asset to society.

Nor is war any remedy. The pick of the men of the nation are taken for war, leaving the infirm and unfit to breed the new generation. With the results of the world-war before our eyes, who can claim that the result has been eugenic for France, for Germany, for Austria, for England or for any country that took part in it. From any and every point of view we find that men cannot trust to the blind forces of nature for the improvement of his race; but that if he desires improvement, he must use his intelligence and his will power and win it for himself.

All these facts have been perfectly well known for generations. In the meantime, science has advanced and in almost every other field except that of the improvement of his own race, man has become the master of nature. He has discovered the laws of physics, of light and electricity. He has overcome the force of gravitation and made the air his highway. He has annihilated distance and made possible instantaneous communication with the ends of the world. He has even to a great extent conquered disease, and lengthened the lifetime of the average man or woman who survives infancy. But before the problem of overpopulation he has wrung his hands in helplessness, and the multiplication of the unfit goes on as though man were the subject, not the master of nature.

What is the answer to the problem? Is civilization to be at the mercy of the terrible tendency of human beings to multiply beyond the power of human intelligence to provide for them—beyond the possibility of the motherland to contain them? Must every nation look forward to exiling a proportion of its best inhabitants, if those who remain are to be fed? And must every nation be kept in dread lest the over-flowing multitudes of another country descend upon its shores and force it to fight for its very existence? Must the human race grow less fit, as time goes on, rather than more perfect? Must more than half of the men, women and children on this globe of ours suffer throughout their whole lives because there is not room enough, not food enough, not opportunity enough to allow them their full development?

The problem has not gone without attention. A new science—the science of Eugenics—is coming into being, and men and women who are deeply concerned over the large proportion in our population

Woman's Power and Birth Control.

By

Mrs. Margaret H. Sanger.

It is not asserting too much to say that the gravest question the world faces at the present moment is the numbers and quality of its inhabitants. There are nations in which over-population is already chronic, and in which the surplus numbers are swept away from time to time by the cruel natural forces of nature—famine and pestilence. China, Russia and India show the workings of natural law when man leaves this most important question to chance. Other nations look forward with fear to the time when more space must be found for their teeming populations, and the result is wars and preparations for wars—some nations preparing for "expansion," whilst others prepare to defend themselves against the aggressions of those with more rapidly expanding numbers. Until recently the United States was the greatest expansion ground for the world. Relief could be found there for the pressure of numbers in European countries. But America is shutting her gates, and the empty places of the world in both hemispheres are now rapidly filling up.

Nor we can comfort ourselves with the reflection that the struggle for existence will serve to improve the race—that the strong, the capable and the intelligent will survive and that the weaklings and those of inferior mind and body will be eliminated. The struggle for existence does not have these results in human society. Artificial restraints of civilization and law prevent the struggle from being a fair trial of strength and endurance, such as it still may be among wild animals. The wealthy are sheltered behind their possessions, and the police of every country prevent the strong from snatching from the weak.

Overpopulation means a continually increasing degradation of the poor. The poor man with a large family to support must accept any wage that is offered. His very need for more than his fellow work-man who is young and single, compels him to accept less—in the fear that he get nothing. His family is underfed, underclothed, undereducated and not decently housed. His wife, worn out with excessive labour, is unfit for child bearing; yet continues to bear children. Some children die, some survive. For every child that dies in the struggle, there are three or four who grow up stunted, and unfit.

So it is in the case of famine and pestilence. Such visitations do not sweep through the community like a fire, carrying

the monkeys at the Zoo into trousers and stiff shirts. And their attitude towards each other is as a rule equally tolerant. When they became a republic, instead of cutting off the Emperor's head, as other nations do, they left him his title, his palace, and four million taels a year (about £ 600,000), and he remains to this moment with his officials, his eunuchs, and his etiquette, but without one shred of power or influence. In talking with a Chinaman, you feel that he is trying to understand you, not to alter you and interfere with you. The result of his attempt may be a caricature or a panegyric, but in either case it will be full of delicate perception and subtle humour. A friend in Peking showed me a number of pictures, among which I specially remember various birds: a hawk swooping on a sparrow, an eagle clasping a big bough of a tree in his claws, water fowl standing on one leg disconsolate in the snow. All these pictures showed that kind of sympathetic understanding which one feels also in their dealings with human beings—something which I can perhaps best describe as the antithesis of Nietzsche. This quality, unfortunately, is useless in warfare, and foreign nations are doing their best to stamp it out. But it is an infinitely valuable quality, of which our western world has far too little. Together with their exquisite sense of beauty, it makes the Chinese nation quite extraordinarily lovable. The injury that we are doing to China is wanton and cruel, the destruction of something delicate and lovely for the sake of the gross pleasures of barbarous millionaires. One of the poems translated from the Chinese by Mr. Waley is called "Business men," and it expresses perhaps more accurately than I could do the respects in which the Chinese are our superiors:

"Business men boast of their skill and cunning
But in philosophy they are like little children.
Bragging to each other of successful depredations
They neglect to consider the ultimate fate of the body.
What should they know of the Master of Dark Truth
Who saw the wide world in a jade cup,
By illumined conception got clear of Heaven and earth:
On the chariot of Mutation entered the gate of Immutability?"

(Waley, 170 Chinese Poems, p. 95.)

I wish I could hope that some respect for "the master of dark truth" would enter into the hearts of our apostles of western culture. But as that is out of the question it is necessary to seek other ways of solving the Far Eastern question.

is our duty to force other people to realize our conception of the world. The Chinese intellectual is not much troubled by imperialism as a creed, but is vigorously assailed by Bolshevism and the Y.M.C.A., to one or other of which he is too apt to fall a victim, learning a belief from the one in the class-war and the dictatorship of the communists, from the other in the mystic efficacy of cold baths and dumb-bells. Both these creeds, in their western adepts, involve a contempt for the rest of mankind except as potential converts, and the belief that progress consists in the spread of a doctrine. They both involve a belief in government and a life against nature. This view, though I have called it mechanistic, is as old as religion, though mechanism has given it new and more virulent forms. The first of Chinese philosophers, Lao-Tze, wrote his book to protest against it, and his disciple Chuang-Tze put his criticism into a fable: #

"Horses have hoofs to carry them over frost and snow; hair, to protect them from wind and cold. They eat grass and drink water, and fling up their heels over the champaign. Such is the real nature of horses. Palantial dwellings are of no use to them.

"One day Po Lo appeared, saying. 'I understand the management of horses.'

"So he branded them, and clipped them, and pared their hoofs, and put halters on them, tying them up by the head and shackling them by the feet, and disposing them in stables, with the result that two or three in every ten died. Then he kept them hungry and thirsty, trotting them and galloping them, and grooming, and trimming, with the misery of the tasselled bridle before and the fear of the knotted whip behind, until more than half of them were dead.

"The potter says: 'I can do what I will with clay. If I want it round, I use compasses; if rectangular, a square.'

"The carpenter says: "I can do what I will with wood. If I want it curved, I use an arc; if straight, a line.'

"But on what ground can we think that the natures of clay and wood desire this application of compasses and square, of arc and line? Nevertheless, every age extols Po Lo for his skill in managing horses, and potters and carpenters for their skill will clay and wood. Those who *govern* the empire make the same mistake."

Although Taoism, of which Lao-Tze was the founder and Chuang-Tze the chief apostle, was displaced by Confucianism, yet the spirit of this fable has penetrated deeply into Chinese life, making it more urbane and tolerant, more contemplative and observant, than the fiercer life of the west. The Chinese watch foreigners as we watch animals in the Zoo, to see whether they "drink water and fling up their heels over the champaign," generally to derive amusement from their curious habits. Unlike the Y.M.C.A., they have no wish to alter the habits of the foreigners, any more than we wish to put

"Musings of a Chinese Mystic" by Lionel Giles (Murray.), p. 66.

1919 on "Some national aspects of forestry in China."* In this address he proves (so far as a person ignorant of forestry can judge) that large parts of China which now lie waste are suitable forestry, that the importation of timber (e.g. railway sleepers) which now takes place is wholly unnecessary, and that the floods which often sweep away whole districts whould be entirely prevented if the slopes of the mountains from which the rivers come were reafforested. Yet it would very difficult to interest even the most reforming Chinese in afforestation, because it is not an easy subject for ethical enthusiasm. Trees are planted round graves, because Confucius said they should be; if Confucianism dies out, even these will be cut down. But public-spirited Chinese students learn political theory as it is taught in our universities, and despise such humble questions as the utility of trees. After learning all about (say) the proper relations of the two House of Parliament, they go home to find that some Tuchun has dismissed both houses, and is governing in a fashion not considered in our text-books. Our theories of politics are only true in the west; our theories of forestry are equally true everywhere. Yet it is our theories of politics that Chinese students are most eager to learn. Similarly the practical study of industrial processes might be very useful, but the Chinese prefer the study of our theoretical economics, which is hardly applicable except where industry is already developed. In all these respects, however, there is beginning to be a marked improvement.

It is science that makes the difference between our intellectual outlook that of Chinese intelligentsia. The Chinese, even the most modern, look to the white nations, especially America, for moral maxims to replace those of Confucius. They have not yet grasped that men's morals in the mass, are the same everywhere: they do as much harm as they dare, and as much goods as they must. In so far as there is a differece of morals between us and the Chinese, we differ for the worse, because we are more energetic, and can therefore commit more crimes *per diem*. What we have to teach the Chinese is not morals, or ethical maxims about government, but science and technical skill. The real problem for the Chinese intellectuals is to acquire western knowledge without acquiring the mechanistic outlook.

Perhaps it is not clear what I mean by "the mechanistic outlook." I mean something which exists equally in Imperialism, Bolshevism, and the Y.M.C.A., something which distinguishes all these from the Chinese outlook, and which I for my part consider every evil. What I mean is the habit of regarding mankind as raw material, to be moulded by our scientific manipulation into whatever form may happen to suit our fancy. The essence of the matter, from the point of view of the individual who has this of view, is the cultivation of will at the expense of perception, the fervent moral belief that it

* Printed in "China in 1918," published by the Peking Leader.

When they become persuaded of the importance of some opinion, they try to spread it by setting forth the reasons in its favour; they do not hire the front pages of newspapers for advertising, or put up on hoardings along the railways: "So-and-so's opinion is the best." In all this they differ greatly from more advanced nations, and particularly from America; it never occurs to them to treat opinions as if they were soaps. And they have no admiration for ruthlessness, or love of bustling activity without regard to its purpose. Having thrown over the prejudices in which they were brought up, they have not taken on a new set, but have remained genuinely free in their thoughts, able to consider any proposition honestly on its merits.

The younger men, however, have something more than the first generation of modern intellectuals. Having had less of a struggle, they retained more energy and self-confidence. The candour and honesty of the pioneers survive. This may be merely the natural character of youth, but I think it is more than that. Young men under 30 have often come in contact with western ideas at a sufficiently early age to have assimilated them without a great struggle, so that they can acquire knowledge without being torn by spiritual conflicts. And they have been able to learn western knowledge from Chinese teachers to begin with, which has made the process less difficult. Even the youngest students, of course, still have reactionary families, but they find less difficulty than their predecessors in resisting the claims of the family, and in realizing practical not only, theoretically, that the traditional Chinese reverence for the old may well be carried too far. In these young men I see the hope of China. When a little experience has taught them practical wisdom, I believe they will be able to lead Chinese opinion in the directions in which it ought to move.

There is one traditional Chinese belief which dies very hard, and that is the belief that correct ethical sentiments are more important than detailed scientific knowledge. This view is, of course, derived from the Confucian tradition, and is more or less true in a pre-industrial society. It would have been upheld by Rousseau or Dr. Johnson, and broadly speaking by everybody before the Benthamites. We in the west have now swung to the opposite extreme: we tend to think that technical efficiency is everything and moral purpose nothing. A battleship may be taken as the concrete embodiment of this view. When we read, say, of some new poison gas by means of which one bomb from an aeroplane can exterminate a whole town, we have a thrill of what we fondly believe to be horror, but it is really delight in scientific skill. Science is our God; we say to it, "Though thou slay me, yet will I trust in thee." And so it slays us. The Chinaman has not this defect, but he has the opposite one, of believing that good intentions are the only thing really necessary. I will give an illustration. Forsythe Sherfesee, Forestry Adviser to the Chinese Government, gave an address at the British Legation in January

China for about 2000 years, and the country has been governed by the successful candidates in competitive examinations. This has given to the educated the kind of prestige elsewhere belonging to a governing aristocracy. Although the old traditional education is fast dying out, and higher education now teaches modern subjects, the prestige of education has survived, and public opinion is still ready to be influenced by those who have intellectual qualifications. The Tuchuns, many of whom, including Chang Tso-lin, have begun by being brigands, are of course too stupid and ignorant to share this attitude, but that in itself makes their regime weak and unstable. The influence of Young China—i. e. of those who have been educated either abroad or in modern colleges at home—is far greater than it would be in a country with less respect for learning. This is perhaps the most hopeful feature in the situation, because the number of modern students is rapidly increasing, and their outlook and aims are admirable. In another ten years or so they will probably be strong enough to regenerate China—if only the Powers will allow ten years to elapse without taking any drastic action.

It is important to try to understand the outlook and potentialities of young China. Most of my time was spent among those Chinese who had had a modern education, and I should like to give some idea of their mentality. It seemed to me that one could already distinguish two generations: the older men, who had fought their way with great difficulty and almost in solitude out of the traditional Confucian prejudices; and the younger men who had found modern schools and colleges waiting for them, containing a whole world of modern-minded people ready to give sympathy and encouragement in the inevitable fight against the family. The older men—men varying in age from 30 to 50—have gone through and inward and outward struggle resembling that of the rationalists of Darwin's and Mill's generation. They have had, painfully and with infinite difficulty, to free their minds from the beliefs instilled in youth, and to turn their thoughts to a new science and a new ethic. Imagine (say) Plotinus recalled from the shades and miraculously compelled to respect Mr. Henry Ford; this will give you some idea of the centuries across which these men have had to travel in becoming European. Some of them are a little weary with the effort, their forces somewhat spent and their originality no longer creative. But this can astonish no one who realizes the internal revolution they have achieved in their own minds.

It must not be supposed that an able Chinaman, when he masters our culture, becomes purely imitative. This may happen among the second-rate Chinese, especially when they turn Christian; but it does not happen among the best. They remain Chinese, critical of European civilization even when they have assimilated it. They retain certain crystal candour, and a touching belief in the efficacy of moral forces; the industrial revolution has not yet affected their mental processes.

and Sunday-go-to-meeting decency make a strange complex impression, half-love and half-hate. In the European town one finds safety, spaciousness and hygiene; in the Chinese town, romance, overcrowding and disease. In spite of my affection for China, these transactions always made me realize that I am a European; for me, the Chinese manner of life would not mean happiness. But after making all necessary deductions for the poverty and the disease, I am inclined to think that Chinese life brings more happiness to the Chinese than European life to us. At any rate this seemed to me to be true for the men; for the women I do not think it would be true.

Shanghai and Tientsin are white men's cities; the first sight of Shanghai makes one wonder what is the use of travelling, because there is so little change from what one is used to. Treaty ports, each of which is a centre of European influence, exist practically all over China, not only on the sea coast. Hankow, a very important treaty port, is almost exactly in the centre of China. North and South China are divided by the Yangtse; east and west China are divided by the route from Peking to Canton. These two dividing lines meet at Hankow, which has long been an important strategical point in Chinese history. From Peking to Hankow there is a railway, formerly Franco-Belgian, now owned by the Chinese Government. From Wuchang, opposite Hankow on the southern bank of the river, there is to be a railway to Canton, but at present it only runs half way, to Changsha (also a treaty port). The completion of the railway, together with improved docks, will presently increase the importance of Canton, and diminish that of Hongkong.

In the treaty ports, commerce is the principal business; but in the lower Yangtse and in central mining districts there are beginnings of industrialism. China produces large amounts of raw cotton, which are mostly manipulated by primitive methods; but there are a certain number of cotton-mills on modern lines. If low wages meant cheap labour for the employer there would be little hope for Lancashire, because in southern China the cotton is grown on the spot, the climate is damp, and there is an inexhaustible supply of industrious coolies ready to work very long hours for wages upon which an English working-man would find it literally impossible to keep body and soul together. Nevertheless it is not the underpaid Chinese coolie whom Lancashire has to fear, and China will not become a formidable competitor until improvement in method and education enables the Chinese workers to earn good wages. Meanwhile, in China as in every other country, the beginnings of industry are sordid and cruel. The intellectuals wish to be told of some less horrible method by which their country may be industrialized, but so far none is in sight.

The intelligentsia in China has a very peculiar position, unlike that which it has in any other country. Hereditary aristocracy has been practically extinct in

Bolsheviks were not concerned, foreigners had no hesitation in trying to bring relief. As for the Chinese, they regarded it passively as a stroke of fate, and even those who died of it shared this view.

Most of the land is in the hands of peasant proprietors, who divide their holdings among their sons, so that each man's share becomes barely sufficient to support himself and his family. Consequently, when the rainfall is less than usual, immense numbers perish of starvation. It would of course be possible, for a time, to prevent famines by more scientific methods of agriculture, and to prevent droughts and floods by afforestation. More railways and better roads would give a vastly improved market, and might greatly enrich the peasants for a generation. But in the long run no permanent cure for their poverty is possible while their families continue to be so large. In China Malthus's theory of population finds full scope. The good done by any improvement of methods will lead to the survival of more children, involving a greater subdivision of the land, and in the end a return to the same degree of poverty. Only education and a higher standard of life can remove the fundamental cause of these evils. And popular education on a large scale is of course impossible until there is a better government and an adequate revenue. Apart even from these difficulties, there does not exist as yet a sufficient supply of competent Chinese teachers for a system of universal elementary education.

Apart from war, the impact of European civilization upon the traditional life of China takes two forms, one commercial, the other intellectual. Both depend upon prestige of armaments: the Chinese would never have opened either their ports to our trade or their minds to our ideas if we had not defeated them in war. But the military beginning of our intercourse with the Middle Kingdom has now receded into the background; one is not conscious, in any class, of a strong hostility to foreigners as such. It would not be difficult to make out a case for the view that intercourse of the white races is proving a misfortune to China, but apparently this view is not taken by any one in China except where unreasoning conservative prejudice outweighs all other considerations. The Chinese have a very strong instinct for trade, and a considerable intellectual curiosity, to both of which we appeal. Only a bare minimum of common decency is required to secure their friendship, whether privately or politically. And I think their thought is as capable of enriching our culture as their commerce of enriching our pockets.

In the treaty ports, Europeans and Americans live in their own quarters with streets well paved and lighted, houses in European style, and shops full of American and English goods. There is generally also a Chinese part of the town, with narrow streets, gaily decorated shops, and the rich mixture of smells characteristic of China. Often one passes through a gate, suddenly, from one to the other; after the cheerful disordered beauty of the old town, Europe's ugly cleanliness

military anarchy is very great. The central government cannot disband the troops, because it cannot find the money to pay them. It would be necessary to borrow from abroad enough money to pay off the troops and establish them in new jobs. But it is doubtful whether any Power or Powers would make such a loan without exacting the sacrifice of the last remnants of Chinese independence. One must therefore hope that somehow the Chinese will find a way of escaping from their troubles without too much foreign assistance.

It may by no means impossible that one of the Tuchuns may become supreme, and may then make friends with the constitutionalists as the best way of consolidating his influence. China is a country where public opinion has great weight, and where the desire to be thought well of may quite possibly lead a successul militarist into patriotic courses. There are at the moment two Tuchuns who are important than any of the others. These are Chang Tso-lin and Wu Pei-fu, both of whom have been already mentioned. Chang Tso-lin is supreme in Manchuria, and strong in Japanese support; he represents all that is most reactionary in China. Wu Pei-fu, on the other hand, is credited with liberal tendencies. He is an able general; not long ago, nominally at the bidding of Peking, he established his authority on the Yangtse and in Hunan, thereby dealing a blow to the hopes of Canton. It is not easy to see how he could come to terms with the Canton government, but in the rest of China he might establish his authority and seek to make it permanent by being constitutional. If so, China might have a breathing-space, and a breathing-space is all that is needed.

The economic life of China, except in the treaty ports and in a few regions where there are mines, is still wholly pre-industrial. Peking has about a million inhabitants, and covers an enormous area, owing to the fact that all the house shave only a ground floor and are built round a courtyard. Yet it has no trams or buses or local trains. So far as I could see, there are not more than two or three factory chimneies in the whole town. Apart from begging, trading, thieving, and government employment, people live by handicrafts. The products are exquisite and the work less monotonous than machine-winding, but the hours are long and the pay infinitesimal.

Seventy or eighty per cent of the population of China are engaged in agriculture. Rice and tea are the chief products of the south,# while wheat and other kinds of grain form the staple crops in the north. The rainfall is very great in the south, but in the north it is only just sufficient to prevent the land from being a desert. When I arrived in China, in the autumn of 1920, a large area in the north, owing to drought, was afflicted with a terrible famine, nearly as bad, probably, as the famine in Russia in 1921. As the

The Soya bean is rapidly becoming an important product

dislike radical reform, partly because of the Cassel agreement. This agreement—of a common type in China—would have given us a virtual monopoly of the railways and mines in the province of Kangtung. It had been concluded with the former government, and only awaited ratification, but the change of government has made ratification impossible. The new government, very properly, is befriended by the Americans, and one of them, Mr. Shank, has concluded an agreement with the new government closely similar to that which we had concluded with the old one. It is true that the American government is not supporting Mr. Shank, whereas the British Government did support the Cassel agreement, but how much difference that will make to the inhabitants of Kwangtung may be doubted. Meanwhile we have lost, and certain Americans have gained, a very valuable though very iniquitous concession, merely because we. but not they, prefer what is old and corrupt to what is vigorous and honest.

The anarchy in China is of course very regrettable, and every friend of China must hope that it will be brought to an end. But it would be a mistake to exaggerate the evil, or to suppose that it is comparable in magnitude to the evils endured in Europe. China must not be compared to a single European country, but to Europe as a whole. In the *Times* of November 11, 1921, I notice a pessimistic article headed: "The peril of China. A dozen rival governments." But in Europe there are much more than a dozen governments, and their enmities are much fiercer than those of China. The number of troops in Europe is enormously greater than in China, and they are infinitely better provided with weapons of destruction. The amount of fighting in Europe since the Armistice has been incomparably more than the amount in China during the same period. You may travel through China from end to end, and it is ten to one that you will seen no signs of war. Chinese battles are seldom bloody, being fought by mercenary soldiers who take no interest in the cause for which they are supposed to be fighting I am inclined to think that the inhabitants of China, at the present moment, are happier, on the average, than the inhabitants of Europe taken as a whole.

It is clear, I think, that political reform in China, when it becomes possible, will have to take the form of a federal constitution, allowing a very large measure of autonomy to the provinces. The division into provinces is very ancient, and provincial feeling is strong. After the revolution, a constitution more or less resembling our own was attempted, only with a President instead of a King. But the successful working of a non-federal constitution requires a homogeneous population without much local feeling, as may be seen from our own experience in Ireland. Most progressive Chinese, as far as I was able to judge, now favour a federal constitution, leaving to the central government not much except armaments, foreign affairs, and customs. But the difficulty of getting rid of the existing

heart, it was said.

Since then, there has been nothing but confusion in China. The military governors appointed by Yuan refused to submit to the central government when his strong hand was removed, and their troops terrorized the population upon whom they were quartered. Ever since, there has been civil war, not as a rule for any definite principle, but simply to determine which of various rival generals should govern various groups of provinces. There still remains the issue of north versus south, but this has lost most of its constitutional significance.

The military governors of provinces or groups of provinces, who are called Tuchuns, govern despotically in defiance of Peking, and commit depredations on the inhabitants of the districts over which they rule. They intercept the revenue, except the portions collected and ministered by foreigners, such as the salt tax. They are nominally appointed by Peking, but in practice depend only upon the favour of the soldiers in their provinces. The central government is nearly bankrupt, and is usually unable to pay the soldiers, who live by loot and by such portions of the Tuchun's ill-gotten wealth as he finds it prudent to surrender to them. While I was in Peking, the three most important Tuchuns met there for a conference on the division of the spoils. They were barely civil to the President and the Prime Minister, who still officially represent China in the eyes of foreign Powers. The unfortunate nominal government was obliged to pay to these three worthies, out of a bankrupt treasury, a sum which the newspapers estimated at nine million dollars, to secure their departure from the capital. The largest share went to Chang-tso-lin, the viceroy of Manchuria and a tool of Japan. His share was paid to cover the expenses of an expedition to Mongolia, which had revolted; but no one for a moment supposed that he would undertake such an expedition, and in fact he has remained at Mukden ever since.

In the extreme south, however, there has been established a government of a different sort, for which it is possible to have some respect. Canton, which has always been the centre of Chinese radicalism, succeeded, in the autumn of 1920, in throwing off the tyranny of its northern garrison and establishing a progressive efficient government under the presidency of Sun Yat-sen. This government now embraces two provinces, Kwangtung (of which Canton is the capital) and Kwangsi. For a moment it seemed likely to conquer the whole of the south, but it has been checked by the victories of the northern General Wu-Pei-Fu in the neighbouring province of Hunan. Unfortunately it cherishes designs of conquest, and wishes to unite all China under its sway. In all other respects, it is a government which deserves the support of all progressive people. Professor Dewey, in articles in the New Republic, has set forth its merits, as well as the bitter enmity which it has encountered from Hong Kong and the British generally. This opposition is partly on general principles, because we

diminished the population by 150 millions* (The Truth about China and Japan, Allen & Unwin, 1921, p. 14), and was almost as terrible a business as the Great War. For a long time it seemed doubtful whether the Manchus could suppress it, and when at last they succeeded their energy was exhausted. The defeat of China by Japan (1894-5) and the vengeance of the Powers after the Boxer rising (1900) finally opened the eyes of all thoughtful Chinese to the need for a better and more modern government than that of..................... .... But things move slowly in China, and it was not till 11 years after the Boxer movement that the revolution broke out.

The revolution of 1911 in China was a moderate one, similar in spirit to ours of 1688. Its chief promoter, Sun Yat-sen, now at the head of the Canton government, was supported by the south, and was elected provisional President. But the northern army remained faithful to the dynasty, and could probably have defeated the revolutionaries. Its Commander-in-chief, Yuan Shih-k'ai, however, hit upon a better scheme. He made peace with the revolutionaries and acknowledged the Republic, on condition that he should be the first President instead of Sun-Yat-sen. Yuan Shih-k'ai was of course called a "strong man," i.e. a believer in blood and iron, not likely to be led astray by talk about democracy or freedom. In China, the north has always been more military and less liberal than the south, and Yuan Shih-k'ai had created out of northern troops whatever China possessed in the way of a modern army. As he was also ambitious and treacherous, he had every quality needed for inspiring confidence in the diplomatic corps. So far as I know, the troubles which he brought upon China have never caused them to repent.

A Constituent Assembly, after enacting a provisional constitution gave place to a duly elected Parliament, which met in April 1913 to determine the permanent constitution. Yuan soon began to quarrel with the Parliament as to the powers of the President, which the Parliament wished to restrict. The majority in Parliament was on the side of the south, but the north had the preponderance in military strength. Under these circumstances, as was to be expected, constitutionalism was soon overthrown. Yuan made himself financially independent of Parliament (which had been duly endowed with the power of the purse) by unconstitutionally concluding a loan with the foreign banks. This led to a revolt of the south, which, however, Yuan quickly suppressed. After this, by various stages, he made himself virtually absolute ruler of China. He appointed his army lieutenants military governors of provinces, and sent northern troops into the south. His regime might have lasted but for the fact that in 1915 he tried to become Emperor, and was met by a successful revolt. He died in 1916—of a broken

* On the other hand Sih-Gun Cheng (Modern China, p. 13) says that it "killed twenty million people," which is the more usual estimate: cf., "China of the Chinese" by E.T.C. Werner, p. 24.

INTERNATIONAL CONDITION OF CHINA.

By Bertrand Russell.

The position of China among the nations of the world is quite peculiar, because in population and potential strength China is the greatest nation in the world, while in actual strength at the moment it is one of the least. The international problems raised by this situation, whitch form the subject of these lectures, have been brought into the forefront of world-politics by the Washington Conference. The settlement arrived at, if it is to do any good, must take account of certain broad facts and principles which no wise solution can ignore. First, the Chinese, though as yet incompetent in politics and backward in economic development, have, in other respects, a civilization at least as good as our own, containing elements which the world greatly needs, and which we shall destroy at our peril. Secondly, the Powers have inflicted upon China a multitude of humiliations and disabilities, for which excuses have been found in China's misdeeds, but for which the sole real reason has been China's military and naval weakness. Thirdly, the best of the Great Powers at present, in relation to China, is America, and the worst is Japan; in the interests of China, as well as in our own larger interest, it is vitally important that we should for the moment cease to support Japan and range ourselves on the side of America in so far as America stands for Chinese freedom, but not when Japanese freedom is threatened. Fourthly, in the long run, the Chinese cannot escape economic domination by foreign Powers unless China becomes military or the foreign Powers become........... because the capitalist system involves in its very essence a predatory relation of the strong towards the weak, internationally as well as nationally. In the end America will be at least as oppressive as Japan. A strong military China would be a disaster; therefore...........in Europe and America affords the only ultimate solution.

As everyone knows, China, after having an emperor for forty centuries, decided, ten years ago, to become a modern democratic republic. Many causes led up to this result. Passing over the first 3,700 years of Chinese history, we arrive at the Manchu conquest in 1644, when a warlike invader from the north succeeded in establishing himself upon the Dragon Throne. He set to work to induce Chinese men to wear pigtails and Chinese women to have big feet. After a time a statesmanlike compromise was arranged; pigtails were adopted but big feet were rejected; the new absurdity was accepted and the old one retained. This characteristic compromise shows how much England and China have in common.

The Manchu Emperors soon became almost completely Chinese, but differences of dress and manners kept the Manchus distinct from the more civilized people whom they had conquered, and the Chinese remained inwardly hostile to them. From 1840 to 1900, a series of disastrous foreign wars, culminating in the humiliation of the Boxer time, destroyed the prestige of the Imperial family and showed all thoughtful people the need of learning from Europeans. The Taiping rebellion, which lasted for 15 years (1849–64), is said by Putnam Weale to have

plie des sozialen Kulturlebens entspricht genau dem, was sich für Faust als „der Weisheit letzter Schluss" ergibt. Besonders für den Gedanken, dass der Einzelne, wenn es ihm gelingt, sich zum notwendigen Gliede des tätigen Ganzen der Menschheit so machen, damit über seine Person hinauswirkt ins Unendliche und so als Sinnenwesen „die Ewigkeit an sich zu reissen" vermag, hat Fichte in seinen Jenaer Vorlesungen über die Bestimmung des Gelehrten im Jahre 1794 eindrucksvolle Worte gefunden. Aber wir können sogar noch mehr sagen. Goethe hat den Schluss der Faustdichtung so gestaltet, dass sie besser als irgend ein anderes deutsches Werk dem Prinzip der Aktivität als dem höchsten Lebensprinzip Ausdruck verleiht. Der Himmel nämlich, in den Faust kommt, weicht von dem, was man sonst unter einem Himmel versteht, wesentlich ab. Faust kann erlöst werden, weil er immer strebend sich bemüht hat. Wozu aber wird er erlöst? Geht er nach dem Tode in einen Ort der Ruhe ein, so dass endlich dort das rastlose Streben in dem seligen Frieden eines beschaulichen Daseins erlischt? Sobald man Ernst macht mit der Lehre vom Primat der praktischen Vernunft, d. h. die Tat in der Weise an den Anfang setzt, dass sie das **Prinzip** alles Lebens bedeutet, dann muss sie auch an seinem Ende stehen. Und so liegt es hier. Die Faustdichtung führt uns die Seele des Helden im Himmel selbst so vor, dass sie dort weiter immer höheren Sphären zustrebt. Die geläuterte reine Tätigkeit dauert also über die irdische Existenz hinaus ins Ewige fort.

Wie sehr dies Goethes Weltanschauung entsprach, ersehen wir noch aus einem andern Zeugnis. In seinem 80. Lebensjahre sagte der Dichter in einem Gespräch über **Unsterblichkeit** zu Eckermann: „Die Ueberzeugung unserer Fortdauer entspringt mir aus dem Begriff der **Tätigkeit**. Denn wenn ich bis an mein Ende rastlos wirkte, so ist die Natur **verpflichtet**, mir eine andere Form des Daseins anzuweisen, wenn die jetzige meinen Geist nicht ferner auszuhalten vermag." Das ist, dürfen wir sagen, noch Kantischer, d. h. noch mehr im Sinne der Lehre vom Primat der praktischen Vernunft gedacht als Kants eigene Unsterblichkeitslehre, insofern hier der Umweg über den Begriff des „höchsten Gutes" wegfällt, den Kant brauchte, um zur Unsterblichkeit als zu einem Postulat der Glückswürdigkeit zu kommen. Das Fortleben nach dem Tode tritt bei Goethe ebenso unmittelbar als ethische Forderung des praktischen Menschen auf wie bei Kant die sittliche Freiheit der Autonomie. Du kannst unsterblich sein, und du darfst darauf vertrauen, dass du es bist, denn du **sollst** immer tätig sein, und du bist das notwendig, da die Tat das innerste, unzerstörbare Wesen deines wahren Seins ausmacht. Faust hat immer strebend sich bemüht. Deshalb ist ihm auch die Unsterblichkeit in der Form des ewigen Weiterstrebens, des rastlosen Tuns über das irdische Dasein hinaus gesichert. Damit fügt sich das letzte Wort der Faustdichtung vollends in die Gedanken des deutschen Idealismus ein: Der erste und der letzte Sinn alles menschlichen Lebens liegt in der frei tätigen, autonomen Persönlichkeit. Von dieser Ueberzeugung legt „das eigentümlichste Gedicht der Deutschen" ebenso Zeugnis ab wie die den Deutschen eigentümliche wissenschaftliche Philosophie.

sogar wie sie dem Ungestüm Euphorions. Aber seine alte Masslosigkeit lebt gleichzeitig im Sohne ungebändigt fort und lässt ihn bei der Schönheit ebensowenig verweilen wie früher beim Sinnengenuss. Euphorion ängstigt seine Eltern von dem Augenblick an, wo er erscheint. Gibt erst das Kind, wie Hegel gesagt hat, der Ehe die Gegenständlichkeit, so fehlt es der Ehe von Faust und Helena notwendig an dem wahren Bestande, und die Schuld dafür liegt bei Faust. Diese Schuld aber, die aus seiner Grösse, nämlich aus seiner nie erschlaffenden Tätigkeit stammt, rettet ihn vor der Gefahr, in der Verbindung mit Helena sich und seine Wette zu verlieren. Zu seinem tiefsten Schmerz behält Faust diesmal recht: es gibt für ihn kein Beharren, auch im edelsten Genuss der Schönheit nicht.

Doch Helena verschwindet ebensowenig wie Gretchen spurlos aus Fausts Leben. Ihr Gewand bleibt ihm, und das trägt ihn „über alles Gemeine rasch am Äther hin." Von neuem geläutert kann Faust zu neuen Taten schreiten. Die Wirkung der Vereinigung mit Helena zeigt sich bald. Von Faust, der so leidenschaftlich den Genuss gesucht, obwohl er seine Sinnlosigkeit durchschaute, hören wir die Worte: geniessen macht gemein. Zugleich ist das jedoch der Anfang einer neuen Versuchung. Faust verachtet den Genuss nämlich jetzt nur deshalb, weil er mit der Menge nichts „gemein" haben, weil er „der Allerhöchste" sein will. Damit beginnt nach der Helenatragödie die Tragödie des Herrschers.

Faust innerstes Wesen bricht nun insofern am reinsten durch, als es sich zielbewusster denn je ausdrücklich auf Tätigkeit richtet:

Dieser Erdenkreis
Gewährt noch Raum zu grossen Taten.
Ich fühle Kraft zu grossem Fleiss.

Mephistopheles, der wie gewöhnlich Fausts letztes Motiv nicht versteht, sieht den Einfluss der Heroine Helena darin, dass Faust jetzt Ruhm verdienen wolle. Aber der Herrscher weist das ausdrücklich zurück und sagt unzweideutig, was er im Auge hat:

Herrschaft gewinn ich, Eigentum.
Die Tat ist alles, nichts der Ruhm.

Trotzdem bleibt Faust noch immer in seinem Uebermenschentum befangen und ladet daher von neuem schwere Schuld auf sich. Er kann als Herrscher nicht gerecht sein, wo fremde Interessen sich seinen masslosen Wünschen entgegenstellen. Deshalb beugt er das Recht unter die Gewalt und vernichtet damit die Existenz schuldloser, friedlich lebender Menschen.

Die Folgen solcher Taten bleiben nicht aus, und nun vollzieht sich bald die entscheidende Wendung. Aus dem Unrecht, das Faust begangen hat, wächst die „Sorge" hervor und naht ihm als neue Gefahr, da sie geeignet ist, seine Entschlussfähigkeit zu lähmen und dadurch das Faustische Streben zu hemmen. So wird sie zur letzten Versuchung. Trotz des Verfalls seiner äusseren Kräfte bleibt Faust jedoch auch der Sorge gegenüber siegreich. Ja seine Tätigkeit wird endlich völlig geläutert, indem er auch die Eigensucht des herri-

schen Uebermenschentums überwindet. Faust sieht ein, dass sein bisheriges Leben wegen der Mittel, die er gebraucht hat, ein Irrweg war. Er wünscht die Magie, die seinem Titanentum Genüge tun sollte, von seinem Wege zu entfernen:

Stünd ich Natur vor Dir ein Mann allein,
Dann wärs der Mühe wert, ein Mensch zu sein!

Nachdem Faust zu dieser Einsicht gekommen ist, kann sein Schicksal sich erfüllen. Seine ungebrochene Tätigkeit richtet sich zuletzt auf Kulturarbeit im Dienste der Menschheit. Er will tätig sein, damit andere Menschen frei tätig sein können. So fügt er sich als tätiges Glied dem tätigen Ganzen ein:

Eröffnen ich Räume viel Millionen,
Nicht sicher zwar, doch tätig frei zu wohnen.

In diesem Sinne weiss Faust seine Person als einen notwendigen Bestandteil in dem immer weiter wachsenden überpersönlichen Menschentum und ist damit seiner Fortwirkung über die Schranken der Individualität in einer ganz anderen Weise ewig sicher geworden als bisher. Das muss ihm endlich die für unmöglich gehaltene Befriedigung geben:

Es kann die Spur von meinem Erdetagen,
Nicht in Aeonen untergehn.

Die höchste Läuterung bedeutet freilich zugleich die Tragik von Fausts rastlos tätigem Leben. Er hatte bei der Wette mit dem Teufel ja nicht nur den Genuss des Faulbetts, sondern jede Befriedigung verschworen. Er wollte zu Grund gehen, wenn er jemals dem Augenblick ein „Verweile" zurufen würde. Daher muss er jetzt, nachdem er in der freien Tätigkeit für andere freie Menschen das Glück gefunden hat, das ihm unerreichbar schien, sterben, wie es in dem Vertrag mit dem Teufel ausgemacht war. Doch hat er damit nur sein irdisches Leben und nicht etwa auch sein ewiges Seelenheil verwirkt. Dem Teufel gegenüber behält Faust zwar unrecht, aber Mephistopheles ist darum noch nicht in der Lage, auch Gott gegenüber zu triumphieren. Sein Versuch, Faust zu sich herabzuziehen, ist vielmehr gänzlich misslungen. Hat doch Faust gerade dadurch am sichersten das von Gott in ihn gesetzte Vertrauen gerechtfertigt, dass er die in übermenschlicher Vermessenheit geschlossene Wette mit dem Teufel in solcher Weise verlor. Seine Tätigkeit ist nie erschlafft, sondern, wie Goethe sagt, „immer höher und reiner" geworden. Deshalb kommt er trotz seiner schweren Verfehlungen, die die himmlische Liebe ihm gnädig verzeiht, in den Himmel, und der Teufel müsste, wenn er aufrichtig wäre, beschämt bekennen, dass wieder einmal, wie Gott es vorausgewusst hat, ein guter Mensch in seinem dunkeln Drange sich des rechten Weges wohl bewusst gewesen ist.

Schon jetzt kann über die Harmonie einer die ganze Faustdichtung durchziehenden Tendenz mit der Lehre des deutschen Idealismus vom Primat der praktischen Vernunft kein Zweifel bestehen. Zumal Fichtes Philosophie der Tat in ihrer Ausgestaltung zur Philoso-

geniessen.

Natürlich hat auch diese Erweiterung des Ich keinen ausserhalb der Bewegung liegenden Zweck. Faust will nichts anderes, als wie die Menschheit selbst am Ende zerscheitern. Das Problem der Tragödie besteht nun darin, ob Faust über das ziellose Tun um des Tuns willen niemals hinauskommen, d. h. in Wahrheit bei nichts beharren und immer weiter streben, oder ob er nicht schliesslich doch etwas finden wird, was dauernden Wert für ihn besitzt, und was ihn daher veranlasst, dem Augenblicke ein "Verweile"! zuzurufen. Soll Faust sich treu bleiben, so darf selbstverständlich sein Glück nur in einer Tätigkeit bestehen, d. h. in einer Arbeit, die nicht sinnlos ist, sondern ihren Wert in sich trägt, und die daher den befriedigen muss, der sie ausübt. Zu welcher Art von Tätigkeit kommt Faust schliesslich? Darin vor allem wird die Weltanschauung der Dichtung sich spiegeln.

Bevor das Ende der Tragödie hierüber die Entscheidung bringt, werden wir durch mehrere Handlungen hindurchgeführt, die sich alle darum drehen, ob Fausts Tätigkeit erschlafft oder nicht. Mephistopheles versucht zuerst, das fortzusetzen, was er begonnen hatte, als er durch seine Geister dem kontemplativ und positiv gerichteten Faust die Fülle des sinnlichen Lebens vor die Augen führte. Er schleppt ihn in die Hexenküche und lässt ihn hier das schöne Bild einer Frau sehen. Faust verliebt sich dann in Gretchen und findet Gegenliebe. Da er an eine dauernde Verbindung mit ihr als Uebermensch nicht denken kann, bringt seine gute Natur ihn dazu, sich vorübergehend in die Kontemplation von Wald und Höhle zu retten, wo sich ihm ähnlich wie beim Makrokosmos-zeichen ein Blick in die Harmonie der Natur eröffnet. Es gelingt jedoch Mephistopheles, Faust zu Gretchen zurückzuführen, und dieser richtet die Geliebte zu Grunde, indem er dabei von Stufe zu Stufe tiefer sinkt, so dass der Teufel hoffen darf, Faust werde, nachdem sein Liebesrausch verflogen ist, im Taumel der Sinne beharren und so seine Wette verlieren. Die Entscheidung erfolgt im Treiben der Walpurgisnacht. Faust bleibt auch hier der Unmensch ohne Rast und Ruh. In seiner Masslosigkeit ist er zwar schwer schuldig geworden, aber mitten im Tanz der Hexen kommt ihm die Unwürdigkeit seiner Situation zum Bewusstsein. Die Erinnerung an Gretchen lässt die Pläne des Mephistopheles scheitern. Faust vermag schliesslich nur noch zuzusehen, wie das Unheil, das er angerichtet hat, sich vollzieht, doch trotz seiner schweren Verschuldung hat er seine Wette nicht verloren, denn sein rastloses Streben dauert unvermindert fort.

Das zeigt der Anfang des zweiten Teiles. Nach einer symbolischen Scene, in der Faust sich von den tiefen Erschütterungen seiner Liebestragödie wieder zum Leben hin findet, lauten seine ersten Worte: „des Lebens Pulse schlagen frisch lebendig." Dem entspricht: die Erde, auf der er wieder mit festen Füssen steht, regt und rührt in ihm „ein kräftiges Beschliessen, zum höchsten Dasein im-

merfort zu streben." So zeigt sich Faust trotz des schweren Schicksals, dass er durchgemacht hat, in dem Grundzug seines Wesens ungebrochen. Zugleich jedoch hat sich der Inhalt seiner Wünsche völlig gewandelt. Die Erlebnisse der ersten Versuchung mussten unauslöschliche Spuren in ihm hinterlassen. Trotz seiner schweren Schuld ist er innerlich gewachsen. Vom unmittelbaren Leben in seiner elementaren Gewalt droht ihm keine Gefahr mehr. Er will die Sonne nicht ins Auge sehen, sondern indem er sie im Rücken lässt, sich an dem Spiel erfreuen, in welchem die Dinge die Sonnenstrahlen zurückwerfen. „Am farbigen Abglanz haben wir das Leben," sagt Faust, und das bedeutet: ihn freut jetzt die **Schönheit** der Welt. Sein Streben ist ästhetisch geläutert. Die Kunst zieht ihn mächtig an, und ihrer höchsten Verkörperung im klassischen Griechentum wendet er sich zu.

Doch wieder kann der Titan, der er geblieben ist, bei dem blossen Schauspiel des Schönen sich nicht zufrieden geben. Daher genügt das Bild der Griechin Helena ihm in keiner Weise. Er will die einzigste Gestalt ins Leben ziehen, um sich dann mit ihr als mit einer lebendigen Wirklichkeit zu verbinden. Dazu soll ihm Mephistopheles helfen, der jetzt nur widerwillig gehorcht, und dessen Einfluss auf Faust gering geworden ist. Es bleibt ihm nichts anderes übrig, als sich der neuen Situation anzupassen, und dadurch allein kann der Teufel sich treu bleiben, dass er im Gegensatz zu Helena die hässlichste Gestalt annimmt, die er in Griechenland findet.

Die Frage ist nun, ob für Faust aus der Verbindung mit Helena ein dauerndes Glück entsteht, oder ob er auch die für den ästhetisch geläuterten Menschen sehr gefährliche Versuchung, beim Schönen zu beharren, überwinden wird. Die Entscheidung hat der Dichter in höchst eigenartiger Weise durch die Antwort auf eine andere Frage gegeben: was erwächst aus der Vermählung von Faust und Helena? Ihr entspringt ein Sohn, Euphorion, und von ihm hängt es ab, ob Faust in seiner Vereinigung mit Helena beharren und dadurch aufhören kann, Faust zu sein. Euphorion ist das echte Kind seiner beiden Eltern. Die Schönheit hat er von der Mutter geerbt, aber zugleich besitzt er vom Vater das Uebermenschliche, Titanische, Faustische, das rastlos über alles Gegenwärtige hinwegstrebt. Die in sich ruhende, klassische Schönheit der Helena hat der Sohn also nicht, und er kann sie bei seiner Abstammung von diesem Vater nicht haben. Dadurch entscheidet sich nicht nur sein eigenes, sondern zugleich auch seines Vaters Geschick.

Wir verstehen die Eigenart dieses Symbols als notwendig. Faust konnte nicht dargestellt werden wie er in ein und derselben Situation sich mit der antiken Schönheit in Ruhe verbindet und zugleich der immer weiter strebende moderne Uebermensch bleibt. Daher werden die beiden Seiten seiner Doppelnatur auf zwei verschiedene Personen verteilt. Der ästhetisch kontemplative Faust ist mit Helena massvoll und wehrt

macht sich an eine freie Interpretation. „Es sollte stehen, am Anfang war die Kraft, sagt er. Ja sogar das genügt ihm nicht, sondern schliesslich kommt sein innerstes Wesen ganz zum Ausdruck, wenn er getrost schreibt: im Anfang war die Tat. So sehen wir: der Mann der Tat muss zu einer Philosophie der Tat kommen. Faust denkt wie Fichte, der Kants Lehre vom Primat der praktischen Vernunft auf die Spitze trieb und nicht die Tatsache, sondern die Tathandlung zum Prinzip seiner Weltanschauung machte.

Wir verstehen, dass der Teufel in die Handlung eingreift, als Faust die Tat an den „Anfang" setzt. Die Tätigkeit in Faust ist das, was er zu brechen hofft, um den Knecht Gottes zu sich herabzuziehen Doch kann er mit dem ruhig betrachtenden und positiv gerichteten Faust nichts anfangen, und er stellt daher zunächst nur theoretisch seine materialistisch-nihilistische Metaphysik der Verneinung dem Glauben Faust's an die „ewig rege, die heilsam schaffende Gewalt" entgegen. Aber er weiss sich auch weiter zu helfen. Er kennt Faust als den Mann mit den zwei Seelen, und es gilt nun, die wilden Triebe, die vorübergehend entschlafen waren, zu wecken. Sobald Mephistopheles durch seine Geister an Faust die Fülle des sinnlichen Lebens heranführt, werden die unbefriedigten Wünsche wieder lebendig, und die Verzweiflung der ersten Scene stellt sich von neuem ein. Ja Faust verflucht jetzt das ganze irdische Leben und kommt damit auf die Behauptung des Teufels hinaus, nach der alles, was besteht, wert ist, dass es zu Grunde geht. Da merkt Mephistopheles, dass seine Stunde gekommen ist, und er bietet Faust seine Dienste an.

Man muss genau beachten, in welcher Form es zu einem Vertrag zwischen dem Titanen und dem Teufel kommt. Mephistopheles schlägt dafür zunächst die Form vor, die Goethe der Tradition der Faust-Sage entnehmen konnte. Er stellt sich für das irdische Leben als Diener zur Verfügung mit der Bedingung, dass Faust nach dem Tode im Jenseits ihm dienen solle. Doch der Uebermensch kann sich auf einen solchen Vertrag nicht einlassen. Das Leben im Jenseits kümmert ihn nicht, und die Freuden des Diesseits haben für ihn keinen Wert. Mephistopheles aber lässt sich so leicht nicht abweisen. Es komme, meint er, die Zeit, wo wir was Guts in Ruhe schmaussen mögen, und dafür wolle er sorgen. In Ruhe, das ist der entscheidende Punkt, denn gerade das erregt Fausts heftigsten Widerspruch:

> Werd ich beruhigt je mich auf ein Faulbett legen,
> So sei es gleich um mich getan.

Ja Faust erklärt es in Uebereinstimmung mit seinem grossen Fluch für ausgeschlossen, dass er jemals bei etwas beharren und damit das Leben so, wie es im Augenblick sich gestaltet hat, bejahen könne:

> Werd ich zum Augenblicke sagen,
> Verweile doch, du bist so schön!
> Dann magst Du mich in Fesseln schlagen,
> Dann will ich gern zu Grunde gehn.

Darauf, dass er stets so denken und handeln werde, schliesst Faust mit dem Teufel eine **Wette**.

Erst aus der Wette ergibt sich dann ein Vertrag, der bestimmt, dass wenn Faust jemals beim Augenblick zu verweilen wünscht, der Teufel mit seiner Seele machen kann, was ihm beliebt. Mephistopheles hat auch an einem solchen Vertrag ein Interesse, denn falls es ihm gelingen sollte, Faust zur Ruhe zu bringen und damit seinen Tätigkeitsdrang zu brechen, behält er zugleich Gott gegenüber recht, so dass der Gewinn der Wette mit Faust seinen Triumph vor dem Herrn der Welt bedeutet. Damit sind wir wieder bei dem Kernpunkt des Dramas, und wir müssen darauf achten, wie Goethe die Tradition der Sage umgestaltet hat, um aus ihr die Tragödie des handelnden Menschen zu machen. Der Faust der Renaissancezeit verschreibt dem Teufel für irdische Genüsse seine unsterbliche Seele. Damit ist er von vorneherein zur Hölle verdammt. Dafür, dass er sich mit Hilfe des Bösen sinnliche Freuden verschafft, erwarten ihn im Jenseits ewige Strafen. Auch hierin spiegelt sich eine bestimmte Weltanschauung, wie nicht näher ausgeführt zu werden braucht, denn schon jetzt ist klar, weshalb die Weltanschauung der Faust Sage nicht der Weltanschauung Goethes entspricht. Der Dichter musste daher die Tradition verändern, um **seinen** Faust-schreiben zu können. In der Figur der Sage zog ihn das Titanische, Uebermenschliche, das Ringen nach universaler Erkenntnis und der Drang zum Leben des Universums an, der über alle Schranken der menschlichen Individualität hinausstrebt. Aber das Verkaufen der Seele für irdische Genüsse konnte er nicht brauchen. Wie schon der Prolog im Himmel zeigt, ist Faust für Goethe der tätige Mensch, der an den Freuden der Erde hängt, ohne durch sie befriedigt zu werden. Daher darf sich auch Fausts Vertrag mit dem Teufel nur um den Gegensatz von Tätigkeit und Ruhe drehen. Faust ist nicht von vorneherein verloren, wenn er sich mit Mephistopheles einlässt, sondern darauf kommt es an, ob er in dem Verkehr mit dem Teufel sich zur Ruhe verleiten und damit von seinem Urquell, d. h. von seinem rastlosen Tätigkeitstriebe, auf den Gott vertraut, abziehen lassen wird.

In der Stimmung, in der Faust sich nach dem grossen Fluch befindet, kann er lediglich in einer ziel-und zwecklosen Bewegung sein Streben noch zum Ausdruck bringen. Er will daher, dass Schmerz und Genuss, Gelingen und Verdruss miteinander wechseln sollen. Auch jetzt weiss er, dass nur rastlos sich der Mann betätigt. Aber da sich seiner Erkenntnis die Natur verschliesst, und auch der Tatengenius ihn verschmäht, bleibt ihm nur noch das Eine übrig:

Mein Busen der vom Wissensdrang geheilt ist,
Soll keinen Schmerzen künftig sich verschliessen,
Und was der ganzen Menschheit zugeteilt ist,
Will ich in meinem innern Selbst

höhere und reinere Tätigkeit dessen, der immer strebend sich bemüht und darum erlöst werden kann, muss sich auf den Gesamtverlauf des Dramas beziehen. Es ist daher auch im Sinne von Goethe, wenn wir Fausts Leben von Anfang bis zu Ende unter den Gesichtspunkt der Tätigkeit bringen.

Wir beginnen mit dem Prolog im Himmel, den Goethe verhältnismässig spät der Dichtung vorangestellt hat, und der uns Aufschluss über das Thema des Dramas gibt. Gott und der Teufel unterhalten sich darin über Faust. Während Gott ihn seinen Knecht nennt, glaubt der Teufel, ihn zu sich herabziehen zu können, und bittet Gott um die Erlaubnis, das zu versuchen. Gott gestattet es, denn er vertraut seinem Geschöpf, obwohl er weiss, dass Faust ihm nur verworren dient. Er kann ihn ruhig dem Versucher überlassen, ja er muss die Versuchung sogar wünschen, weil durch sie hindurch das menschliche Wesen sich am besten bewähren wird:

> Des Menschen Tätigkeit kann allzuleicht erschlaffen,
> Er liebt sich bald die unbedingte Ruh.
> Drum geb ich gern ihm den Gesellen zu,
> Der reizt und wirkt und muss als Teufel schaffen.

Da haben wir sogleich den Gegensatz von Tätigkeit und Ruhe. Gott bejaht die Tätigkeit auch als dunkeln Drang im Menschen. Der Teufel als Geist der Verneinung hofft dagegen, Faust dadurch zu sich herabzuziehen, dass er sein Streben bricht und ihn im Sinnengenuss beharren lässt. So steht Faust mit seinen zwei Seelen zwischen Gott und dem Teufel wie die Erde mit ihrem Wechsel von Tag und Nacht zwischen Licht und Finsternis. Solange Faust tätig ist, bleibt er dem göttlichen Lichte zugewandt, und erst wenn in dem Hang zum Irdischen seine Tätigkeit erschlafft, kann er den Mächten der Finsternis verfallen. Die Tragödie muss sich also darum drehen, welche von beiden Seiten in Fausts Wesen schliesslich den Sieg davonträgt, die Tätigkeit oder die Ruhe.

Die nächstan Scenen schildern Faust als Doppelnatur so, wie wir ihn nach dem Prolog erwarten müssen. Er ist unzufrieden mit seinem Schicksal, denn weder vermag er als Mann der Wissenschaft zu erkennen, was die Welt im Innersten zusammenhält, noch ist es ihm gelungen, äussere Ehren zu erreichen und das Leben zu geniessen. Deshalb hat er sich der Magie ergeben, von der er Aufschluss über das Weltgeheimnis erhofft, und die ihn zugleich hinausführen soll aus der engen Studierstube in die freie Natur. Der Gegensatz von Kontemplation und Aktivität und die Unmöglichkeit, bei der blossen Kontemplation zu bleiben, tritt auch bei dem Verkehr Fausts mit der Geisterwelt zu Tage. Im Makrokosmoszeichen erschliesst sich ihm zuerst kontemplativ die Harmonie des Weltalls im Zusammenwirken seiner Kräfte, und er ist entzückt von dem Anblick dieses Bildes. Bald jedoch wendet er sich davon mit den Worten ab: Welch Schauspiel aber ach, ein Schauspiel nur! Dem Tatendurstigen genügt also die blosse

Erkenntnis nicht. Er möchte die Natur „fassen." d. h. unmittelbar mit ihrem Leben in Berührung kommen. Daher wendet er sich dem Erdgeist zu, der ihm näher liegt, und von dem er mehr als ein blosses Schauspiel erhofft. In Lebensfluten, im Tatensturm wallt dieser Geist auf und ab, ja Goethe hat ihn selbst ausdrücklich als „Tatengenius" bezeichnet, sodass über die Absicht, Aktivität und Kontemplation, Schaffen und Schauen einander gegenüberzustellen, kein Zweifel besteht.

Als Faust dann von dem Genius der Tat zurückgestossen und als „Uebermensch" verhöhnt ist, bleibt er ratlos. Das irdische Leben hat für ihn jeden Sinn verloren. Ein Gespräch mit seinem Famulus, der mit beschaulicher Gelehrsamkeit zufrieden ist, bringt ihm vollends die Unerträglichkeit seiner Lage zum Bewusstsein, so dass er an Selbstmord denkt. Das kann auffallen, denn es sieht so aus, als sei Fausts Tätigkeit schon erschlafft, bevor noch die Versuchungen des Teufels begonnen haben. Achten wir jedoch auf Fausts Motive, so zeigt sich: er ersehnt den irdischen Tod nur, weil das Leben seinem Tatendrang nicht genügt und er im Jenseits hofft, „zu neuen Sphären reiner Tätigkeit" zu kommen. So finden wir überall denselben Mann der Tat, und allein die Doppelnatur hindert ihn daran, seinen kühnen Entschluss, durch den irdischen Tod zur höchsten Aktivität vorzudringen, in die Tat umzusetzen. Glockenklang und Chorgesang, die am Ostermorgen aus der nahen Kirche zu ihm herübertönen, sagen ihm zwar religiös nichts, denn ihm fehlt der Glaube an die Botschaft, die er hört, aber er wird durch das Osterfest an die schönste irdische Zeit der Jugend erinnert, und das hält ihn vom Selbstmord zurück. Die Erde, von der er, wie Mephistopheles weiss, jede höchste Lust fordert, hat ihn wieder. Auf ihr muss er seinen dunklen Drang zur Tätigkeit weiter nachgehen.

Von dem, was im Drama geschieht, bevor der Teufel in die Handlung eingreift, sei für unseren Zusammenhang nur noch die berühmte Logosübersetzung hervorgehoben. Fausts Stimmung wechselt dauernd, wie es bei einer Doppelnatur nicht anders sein kann. Bisweilen tritt der heftige Lebensdrang in ihm zurück. „Entschlafen sind nun wilde Triebe mit ihrem ungestümen Tun," sagt er selbst, und in solcher Verfassung macht er sich an die Uebersetzung des Johannes-Evangeliums. Im Anfang war der Logos, heisst es dort. So wie Luther es verdeutscht hat, am Anfang war das **Wort**, kann Faust es nicht stehen lassen. Der Logos erscheint ihm zuerst als der **Sinn**, also als Gedanke, und wäre er nur kontemplativer Mensch oder nur Philosoph in der Art jener Intellektualisten, die ihr erkennendes Verhalten in das Weltall selbst hineinverlegen, um damit die theoretische Vernunft zum Prinzip des Universums zu machen, wie Aristoteles und Spinoza es getan haben, dann müsste es auch für Faust dabei bleiben, dass der „Sinn" Anfang und Grund von allem ist. Aber sogar in der Gelehrten Tätigkeit bricht bei Faust die Aktivität durch. Deshalb hört er mit dem Uebersetzten auf und

phie ist diese Lehre gewiss nicht unangefochten geblieben. Immer von neuem stossen wir auf Versuche, besonders dem Willen neben dem Intellekt sein Recht zu verschaffen. Ja, es kam vielfach dazu, dass man der theoretischen Betrachtung ihre Alleinherrschaft sogar innerhalb des Philosophierens bestritt und dem Willen auch die Entscheidung in Weltanschauungsfragen zuschob. Das führte dann zu einer Aufhebung der Philosophie als reiner Wissenschaft. An deren Stelle traten politische, künstlerische oder religiöse Ueberzeugungen, die nach einem theoretischen Fundament überhaupt nicht mehr fragten, und das musste den Widerspruch der theoretisch veranlagten Menschen erregen, so dass eine Versöhnung der miteinander kämpfenden Tendenzen unmöglich wurde.

Kants eigenartige Bedeutung für die Weltanschauungslehre besteht nun nicht zum mindesten nur darin, dass er mit dem Primat der theoretischen Vernunft grundsätzlich gebrochen hat, ohne dadurch irgendwie den Charakter der Philosophie als einer strengen Wissenschaft anzutasten. Er wusste, dass der Philosoph sich beim Philosophieren nur auf theoretische Gründe stützen darf, wenn er nicht jeden festen Boden unter den Füssen verlieren will. Aber er sah ebenso deutlich, dass man darum das theoretische Verhalten für den Gesamtsinn des Lebens nicht jeder anderen Art der Betätigung überzuordnen oder gar das Weltall zur blossen Verkörperung logischer Gedanken zu machen braucht. Ja, er fand, dass gerade die theoretische Einsicht uns lehre, weshalb das tiefste Wesen des Menschen und des Universums nicht im logisch verfahrenden Intellekt, sondern im frei tätigen, autonomen Willen zu suchen sei. Er stellte, mit anderen Worten, als theoretischer Philosoph die Aktivität über die Kontemplation, den handelnden über den betrachtenden Menschen, und er wurde damit zum bewussten theoretischen Vertreter der Lehre vom Primat der praktischen Vernunft.

Kants ganze Philosophie ist bekanntlich mit den letzten Grundlagen des Denkens, d. h. mit der Lehre vom Erkennen aufs Engste verknüpft. Die Transcendentalphilosophie oder der sogenannte „Kopernikanische Standpunkt" muss zu einer neuen Auffassung auch des Verhältnisses vom Erkennen zum Handeln führen, weil er das Prinzip der Aktivität im theoretischen Erkennen selbst aufzeigt. Das erkennende Subjekt ist kein passiver Spiegel der Welt, sondern der Verstand schreibt, wie Kant sagt, von sich aus der Natur ihre Gesetzmässigkeit vor, d. h. er bringt den ihm bloss gegebenen Stoff in seine eigenen Formen, und erreicht gerade dadurch die gesuchte Objektivität, weil die Formen des Verstandes für alle Erkenntnis unbedingt gelten müssen. Wir brauchen diese schwierige Lehre im Einzelnen nicht weiter zu verfolgen. Nur darauf kommt es an, dass, falls sie richtig ist, nicht einmal das theoretische Verhalten des Philosophen als ein bloss passives Schauen angesehen werden darf, sondern dass sogar in der rein theoretischen Kontemplation ein praktisches Moment der Aktivität steckt. Schon das muss von

Erkenntnis nicht. Er möchte die Natur „fassen," d. h. unmittelbar mit ihrem Leben in Berührung kommen. Daher wendet er sich dem Erdgeist zu, der ihm näher liegt, und von dem er mehr als ein blosses Schauspiel erhofft. In Lebensfluten, im Tatensturm wallt dieser Geist auf und ab, ja Goethe hat ihn selbst ausdrücklich als „Tatengenius" bezeichnet, sodass über die Absicht, Aktivität und Kontemplation, Schaffen und Schauen einander gegenüberzustellen, kein Zweifel besteht.

Als Faust dann von dem Genius der Tat zurückgestossen und als „Uebermensch" verhöhnt ist, bleibt er ratlos. Das irdische Leben hat für ihn jeden Sinn verloren. Ein Gespräch mit seinem Famulus, der mit beschaulicher Gelehrsamkeit zufrieden ist, bringt ihm vollends die Unerträglichkeit seiner Lage zum Bewusstsein, so dass er an Selbstmord denkt. Das kann auffallen, denn es sieht so aus, als sei Fausts Tätigkeit schon erschlafft, bevor noch die Versuchungen des Teufels begonnen haben. Achten wir jedoch auf Fausts Motive, so zeigt sich: er ersehnt den irdischen Tod nur, weil das Leben seinem Tatendrang nicht genügt und er im Jenseits hofft, „zu neuen Sphären reiner Tätigkeit" zu kommen. So finden wir überall denselben Mann der Tat, und allein die Doppelnatur hindert ihn daran, seinen kühnen Entschluss, durch den irdischen Tod zur höchsten Aktivität vorzudringen, in die Tat umzusetzen. Glockenklang und Chorgesang, die am Ostermorgen aus der nahen Kirche zu ihm herübertönen, sagen ihm zwar religiös nichts, denn ihm fehlt der Glaube an die Botschaft, die er hört, aber er wird durch das Osterfest an die schönste irdische Zeit der Jugend erinnert, und das hält ihn vom Selbstmord zurück. Die Erde, von der er, wie Mephistopheles weiss, jede höchste Lust fordert, hat ihn wieder. Auf ihr muss er seinen dunklen Drang zur Tätigkeit weiter nachgehen.

Von dem, was im Drama geschieht, bevor der Teufel in die Handlung eingreift, sei für unseren Zusammenhang nur noch die berühmte Logosübersetzung hervorgehoben. Fausts Stimmung wechselt dauernd, wie es bei einer Doppelnatur nicht anders sein kann. Bisweilen tritt der heftige Lebensdrang in ihm zurück. „Entschlafen sind nun wilde Triebe mit ihrem ungestümen Tun," sagt er selbst, und in solcher Verfassung macht er sich an die Uebersetzung des Johannes-Evangeliums. Im Anfang war der Logos, heisst es dort. So wie Luther es verdeutscht hat, am Anfang war das Wort, kann Faust es nicht stehen lassen. Der Logos erscheint ihm zuerst als der Sinn, also als Gedanke, und wäre er nur kontemplativer Mensch oder nur Philosoph in der Art jener Intellektualisten, die ihr erkennendes Verhalten in das Weltall selbst hineinverlegen, um damit die theoretische Vernunft zum Prinzip des Universums zu machen, wie Aristoteles und Spinoza es getan haben, dann müsste es auch für Faust dabei bleiben, dass der „Sinn" Anfang und Grund von allem ist. Aber sogar in der Gelehrten Tätigkeit bricht bei Faust die Aktivität durch. Deshalb hört er mit dem Uebersetzen auf und

phie ist diese Lehre gewiss nicht unangefochten geblieben. Immer von neuem stossen wir auf Versuche, besonders dem Willen neben dem Intellekt sein Recht zu verschaffen. Ja, es kam vielfach dazu, dass man der theoretischen Betrachtung ihre Alleinherrschaft sogar innerhalb des Philosophierens bestritt und dem Willen auch die Entscheidung in Weltanschauungsfragen zuschob. Das führte dann zu einer Aufhebung der Philosophie als reiner Wissenschaft. An deren Stelle traten politische, künstlerische oder religiöse Ueberzeugungen, die nach einem theoretischen Fundament überhaupt nicht mehr fragten, und das musste den Widerspruch der theoretisch veranlagten Menschen erregen, so dass eine Versöhnung der miteinander kämpfenden Tendenzen unmöglich wurde.

Kants eigenartige Bedeutung für die Weltanschauungslehre besteht nun nicht zum mindesten nur darin, dass er mit dem Primat der theoretischen Vernunft grundsätzlich gebrochen hat, ohne dadurch irgendwie den Charakter der Philosophie als einer strengen Wissenschaft anzutasten. Er wusste, dass der Philosoph sich beim Philosophieren nur auf theoretische Gründe stützen darf, wenn er nicht jeden festen Boden unter den Füssen verlieren will. Aber er sah ebenso deutlich, dass man darum das theoretische Verhalten für den Gesamtsinn des Lebens nicht jeder anderen Art der Betätigung überzuordnen oder gar das Weltall zur blossen Verkörperung logischer Gedanken zu machen braucht. Ja, er fand, dass gerade die theoretische Einsicht uns lehre, weshalb das tiefste Wesen des Menschen und des Universums nicht im logisch verfahrenden Intellekt, sondern im frei tätigen, autonomen Willen zu suchen sei. Er stellte, mit anderen Worten, als theoretischer Philosoph die Aktivität über die Kontemplation, den handelnden über den betrachtenden Menschen, und er wurde damit zum bewussten theoretischen Vertreter der Lehre vom Primat der praktischen Vernunft.

Kants ganze Philosophie ist bekanntlich mit den letzten Grundlagen des Denkens, d. h. mit der Lehre vom Erkennen aufs Engste verknüpft. Die Transcendentalphilosophie oder der sogenannte „Kopernikanische Standpunkt“ muss zu einer neuen Auffassung auch des Verhältnisses vom Erkennen zum Handeln führen, weil er das Prinzip der Aktivität im theoretischen Erkennen selbst aufzeigt. Das erkennende Subjekt ist kein passiver Spiegel der Welt, sondern der Verstand schreibt, wie Kant sagt, von sich aus der Natur ihre Gesetzmässigkeit vor, d. h. er bringt den ihm bloss gegebenen Stoff in seine eigenen Formen, und erreicht gerade dadurch die gesuchte Objektivität, weil die Formen des Verstandes für alle Erkenntnis unbedingt gelten müssen. Wir brauchen diese schwierige Lehre im Einzelnen nicht weiter zu verfolgen. Nur darauf kommt es an, dass, falls sie richtig ist, nicht einmal das theoretische Verhalten des Philosophen als ein bloss passives Schauen angesehen werden darf, sondern dass sogar in der rein theoretischen Kontemplation ein praktisches Moment der Aktivität steckt. Schon das muss von

Bedeutung für die ganze Weltanschauung, d. h. für die Auffassung der Stellung des Menschen zum Universum und für den Sinn des gesamten menschlichen Lebens sein. Das Prinzip der Aktivität rückt damit an die erste Stelle.

In dieser Richtung lag denn auch die erste grosse Wirkung der Kantischen Philosophie auf die weitere Entwicklung des deutschen Idealismus. Besonders Fichte bildete Kants Lehre zu einer umfassenden Philosophie der Tat aus. Den letzten Grund der Welt fand er nicht in einer toten Tatsache, sondern in einer lebendigen „Tathandlung," und von hier aus stellte er zugleich die Bestimmung des Menschen fest. Er konnte nicht daran denken, sie in ein passives Schauen zu setzen. Der Mensch ist vielmehr dazu da, tätig zu sein, und die Philosophie hat keine andere Aufgabe, als durch die Erkenntnis der letzten Prinzipien zu zeigen, was wir zu tun haben. So wird der Gelehrte zum Lehrer des Menschengeschlechts, und sein Denken bekommt eine eminent praktische Bedeutung. Fichte gestaltete seine Philosophie der Tat dann dadurch aus, dass er sie auf die verschiedenen Probleme der sozialen Kultur bezog. Die Bestimmung der Menschheit wurde von ihm in dem beständigen Fortgang der Kultur und in der gleichmässig fortgesetzten Entwicklung aller ihrer Anlagen und Bedürfnisse gesehen. Damit war der Gegensatz zwischen dem theoretischen und dem handelnden Menschen vollends überbrückt. Der Philosoph stellte auch seine Theorie in den Dienst der sich tätig entwickelnden Kulturmenschheit und machte sich damit zugleich selbst zu einem aktiven Gliede des durch sein freies Handeln ständig fortschreitenden Ganzen.

Diese Andeutungen genügen, um den Grundzug klarzustellen, der in der Philosophie des deutschen Idealismus für unseren Zusammenhang in Betracht kommt. Jetzt muss sich die Frage beantworten lassen: Wie stellt sich die Weltanschauung der Faustdichtung dar, wenn wir sie mit Rücksicht auf die im deutschen Idealismus zum Ausdruck kommende Lehre vom Primat der praktischen Vernunft ansehen?

Die Tragödie des tätigen Menschen.

Bei einer solchen Problemstellung denken wir nicht daran, das reiche Leben Faust's auf die magere Schnur einer einzigen Idee zu reihen, sondern wir sprechen lediglich von einer Grundtendenz dieses Lebens, und wir dürfen das mit um so grösserer Sicherheit, als wir von Goethe selbst eine Aeusserung besitzen, die unzweideutig das bezeichnet, worauf es ankommt. Im Sommer 1831, in der Zeit also, in welcher der Dichter die letzte Hand an sein grösstes Werk legte, wies er Eckermann auf die Verse der Engel hin, die Faust's unsterbliche Seele in den Himmel tragen, und sagte, dass in ihnen der Schlüssel zu Faust's Rettung enthalten sei. „In Faust selber eine immer höhere und reinere Tätigkeit bis ans Ende und von oben die ihm zu Hilfe kommende ewige Liebe." Die Liebe tritt erst am Schluss des Dramas ausdrücklich in die Erscheinung, aber die

hinausstrebt. Gehört Faust den niederen oder den höheren Mächten an? Das ist die Frage, um welche das Drama sich dreht. Was sind die „höheren," was sind die „niederen" Mächte? Es ist nicht möglich, dass ein Dichter einen solchen Stoff behandelt, ohne merken zu lassen, wie er über die Stellung des Menschen zur Welt und besonders über den Sinn des menschlichen Lebens im Zusammenhang mit dem Universum denkt. So musste Goethe seine Weltanschauung kund tun, indem er den Faust zum Gegenstand einer Tragödie machte, und wenn dieses Werk das eigentümlichste Gedicht der Deutschen ist, drängt sich also mit Notwendigkeit die Frage auf, wie die Weltanschauung, von der es Zeugnis gibt, sich zu der den Deutschen eigentümlichen Philosophie, d. h. zu dem Idealismus Kants und seiner Nachfolger verhält.

Solange wir jedoch das Problem so allgemein stellen, ist es nicht leicht zu lösen. Es scheint erforderlich, dass wir über die Beziehungen von Goethes Weltanschauung in ihrem ganzen Umfange zur Totalität des deutschen Idealismus Klarheit gewinnen, und damit stehen wir vor einer sehr komplizierten Frage. Von vorneherein ist nur das Eine sicher, dass Goethes Weltanschauung sich mit der des deutschen Idealismus nicht einfach deckt. Ja mit Recht hat man besonders in Kant und Goethe geradezu Antipoden gesehen. Doch erschöpft andererseits eine solche Formel in keiner Weise das, was hier zu sagen ist. Zumal, wenn wir an jene Seite von Goethes Weltanschauung denken, welche die Faustdichtung uns zeigt, lässt sich auch eine weitgehende Gemeinsamkeit mit einem für den Kantischen Idealismus charakteristischen Gedanken nicht verkennen. Diese Gemeinsamkeit klarzustellen, ist der Zweck der folgenden Ausführungen. Sie beschränken sich ausdrücklich auf einen Teil von Goethes Ueberzeugungen und auf dessen Verhältnis zu einem Teil der deutschen Philosophie. In anderer Weise kann man das Problem, wie Goethes Faust zum deutschen Idealismus steht, wohl überhaupt nicht in Angriff nehmen. Wir haben nicht zwei wissenschaftlich durchgearbeitete Systeme miteinander zu vergleichen, sondern den symbolischen Gehalt einer Dichtung auf die Beziehungen hin zu betrachten, die er zu einer sehr mannigfaltigen und reichen wissenschaftlichen Bewegung besitzt. Zu diesem Zweck müssen wir sowohl den Sinn der Dichtung als auch den der deutschen Philosophie vereinfachen und eine Grundtendenz herausarbeiten, die ihnen trotz vieler Unterschiede gemeinsam ist. Es kommt nicht darauf an, dass unsere Darstellung den Gegenstand erschöpft. Das allein ist wichtig, dass der Zug, den die Faustdichtung und der deutsche Idealismus gemeinsam besitzen, in beiden eine wesentliche Rolle spielt.

Die Philosophie der Tat.

Um die Tendenz zum Bewusstsein zu bringen, die hier als charakteristisch für die deutsche Philosophie in Betracht kommt, knüpfen wir an ihren grössten Vertreter an und fragen, wodurch Kant sich vor allem von den europäischen

Denkern vor ihm unterscheidet. Dann tritt besonders für die Weltanschauung, d. h. für den Gesamtsinn des menschlichen Lebens, ein Kennzeichen hervor, das so stark ausgeprägt kein Philosoph vorher zeigt: das Vorwiegen des praktischen oder ethischen Momentes.

Philosophie will Wissenschaft sein oder die Welt theoretisch betrachten. Der Philosoph muss daher jeden Einfluss ausser-wissenschaftlicher Lebensmächte auf sein Denken, wie z. B. den seiner Leidenschaften oder seiner politischen Ideale oder seiner religiösen Ueberzeugung, nach Möglichkeit auszuschalten suchen, um zu dem vorzudringen, was sich dem reinen Erkennen von der Welt und dem menschlichen Leben erschliesst. Er hat beim Philosophieren den Schwerpunkt in ein theoretisch kontemplatives Verhalten zu legen und alle praktische Aktivität, alles Eingreifen in das Weltgetriebe wie alles, wozu seine handelnde Natur ihn drängt, zu unterdrücken. Er muss sich über die Parteien der tätigen Menschen stellen, denn sonst kommt er zu keiner wissenschaftlichen Objektivität. Nicht Willensmotive dürfen für ihn entscheidend sein, sondern allein Gründe, die sich logisch aufzeigen lassen. Das hängt mit dem Wesen der Philosophie als einer wissenschaftlichen Weltanschauungslehre notwendig zusammen, und nur dort werden wir von wissenschaftlicher Philosophie sprechen, wo diese Tendenz massgebend ist.

Nicht selten aber nimmt das Absehen von allen aussertheoretischen Mächten beim Philosophieren eine Form an, in der es weit über das hinausgeht, was wissenschaftlich notwendig und gerechtfertigt ist. Das Ideal einer kontemplativen Betrachtung wird für den Denker zum Ideal des menschlichen Lebens überhaupt, und es bestimmt dann nicht allein das Verfahren des Philosophen bei seiner Arbeit, sondern zugleich den Inhalt der von ihm zum Ausdruck gebrachten Weltanschauung. Weil der Denker die Welt nur theoretisch betrachten darf, meint er, dass dieses Verhalten zur Welt allem anderen Leben, besonders dem des wollenden und handelnden Menschen, an Wert und Würde überlegen sei. Ja er kommt eventuell dazu, im Universum selbst ein Gebilde zu sehen, in dem die theoretische Vernunft als das eigentlich wesentliche Prinzip sich verkörpert. Die anderen Seiten der menschlichen Natur, d. h. die irrationalen, die auf dem sittlichen Wollen oder dem religiösen Glauben beruhen, werden dann zwar als Tatsachen anerkannt, aber in ihrem Eigenwert nicht gewürdigt. Es scheint notwendig, sie zum mindesten einer Disziplin durch die theoretische Vernunft zu unterwerfen und so alles Praktische dem betrachtenden Verhalten möglichst weit anzunähern. Der Intellekt soll nicht nur in der Wissenschaft, sondern auch in dem menschlichen Dasein überhaupt, ja in dem Weltall, der eigentliche Herrscher sein. Bei so verschiedenen Denkern wie Aristoteles und Spinoza zeigt sich eine solche Tendenz, und man kann sie mit einem Schlagwort die Lehre vom Primat der theoretischen Vernunft nennen.

Im Verlauf der europäischen Philoso-

so höchst mannigfaltiges Leben auf die magere Schnur einer einzigen durchgehenden Idee reihen zu wollen." Mit Bezug auf den Faust hat Goethe sogar ausdrücklich gesagt: „es war im ganzen nicht meine Art, als Poet nach Verkörperung von etwas Abstraktem zu streben."

Trotzdem behält Schellings Wort einen guten Sinn, sobald man es richtig versteht. Es gibt nicht nur Philosophie in abstrakten Begriffen, sondern „philosophisch" nennen wir auch solche Werke, in denen eine ausserwissenschaftliche Weltanschauung zum Ausdruck kommt, wobei unter „Weltanschauung" der Inbegriff der Ueberzeugungen zu verstehen ist, die ein Mensch sich von dem Ganzen seiner Welt und besonders von der Stellung des menschlichen Lebens in diesem Ganzen gebildet hat. Philosophie in der Bedeutung, dass sie vom Sinn unseres Daseins sich Rechenschaft gibt, enthalten die meisten grossen Dichtungen, und es liegt daher nahe, zu fragen, in welchem Verhältnis die ausserwissenschaftlichen Weltanschauungen der Dichter zu den Gedanken stehen, die in den wissenschaftlichen Systemen der Philosophie niedergelegt sind.

Für Goethes Faust können wir das auch so zum Ausdruck bringen, dass wir sagen, er habe zwar keine allegorische, wohl aber eine symbolische Bedeutung, d. h. er verkörpere nicht abstrakte Gedanken, die als eigentlicher Kern hinter den anschaulichen Gestalten stecken, sondern mit dem künstlerischen Gebilde sei unmittelbar ein Sinn verknüpft, der über die anschauliche Darstellung des Stoffes durch die Kunst hinausgeht. Wenn wir so Allegorie und Symbol voneinander trennen und das Philosophische auf das Symbolische einschränken, dürfen wir auch sicher sein, nicht gegen Goethes Absicht zu verstossen. Im Juni 1797 schrieb ihm Schiller, dass der Faust bei aller seiner dichterischen Individualität die Forderung an eine symbolische Bedeutsamkeit nicht ganz von sich weisen könne, und Goethe stimmte dem ausdrücklich zu. Schiller sagte: die Anforderungen an den Faust sind zugleich philosophisch und poëtisch, und Sie mögen sich wenden, wie Sie wollen, so wird Ihnen die Natur des Gegenstandes eine philosophische Behandlung auflegen, und die Einbildungskraft wird sich zum Dienst einer Vernunftsidee bequemen müssen. Goethe antwortete unmittelbar darauf: Wir werden wohl in der Ansicht dieses Werkes nicht variieren, und er fügte hinzu, er bereite sich einen Rückzug in diese Symbol- Ideen- und Nebelwelt mit Lust und Liebe vor.

Ja, selbst wenn Goethe nicht zugestimmt hätte, dürften wir mit Schiller sagen, dass die Natur des Gegenstandes dem Dichter eine philosophische Behandlung auferlegt habe, und dass daher in der Faustdichtung eine Weltanschauung stecken müsse. Faust wird dargestellt als Mensch, der zwischen Gott und dem Teufel steht. Der Schauplatz des Dramas ist das Weltall, in dem das Gute mit dem Bösen zu kämpfen hat. In Fausts Brust wohnen zwei Seelen, von denen die eine sich an die irdische Welt klammert, während die andere über alles Irdische

Goethes Faust und der deutsche Idealismus.

Für die Zeitschrift „Kaizo"

Von Heinrich Rickert

Dichtung und Philosophie.

In seinen Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums nannte Schelling Goethes Faust das eigentümlichste Gedicht der Deutschen, und in seiner Philosophie der Kunst meinte er, dass, wenn irgend ein Poem philosophisch heissen könne, dieses Prädikat Goethes Faust allein zugelegt werden müsse. Der grosse Romantiker, dessen Gedanken heute noch vielfach, besonders in Bergsons Schriften, lebendig sind, schrieb das zu einer Zeit, in der er von Goethes Werk nur einen verhältnismässig kleinen Teil, das 1790 veröffentliche „Fragment" kannte. Er hat damit als einer der ersten die überragende Bedeutung unserer Weltdichtung gesehen. Werden wir uns jedoch heute noch seine Kennzeichnung zu eigen machen? Dass Faust das eigentümlichste Gedicht der Deutschen ist, bleibt gewiss richtig. Wenn er aber zugleich das Prädikat philosophisch verdient, dann scheint er auch zu der den Deutschen eigentümlichen Philosophie zu gehören, und das ist der Idealismus, wie er in den Werken Kants und seiner grossen Nachfolger vorliegt. Daher drängt sich die Frage auf: wie verhält sich Goethes Faust zu jener deutschen Gedankenbewegung, die früh beginnend in der Kritik der reinen Vernunft ihren Höhepunkt fand und sich bis in die ersten Jahrzehnte des 19. Jahrhunderts in einem nie vorher gesehenen Reichtum von philosophischen Systemen entfaltete?

Doch darf man solche Frage überhaupt stellen? War Goethe ein Philosoph in dem Sinne, wie Kant oder Fichte oder Hegel es gewesen sind? Gewiss nicht. Kann also Schelling recht haben, wenn er Faust ein philosophisches Gedicht nennt? Der Ausdruck ist in der Tat mit Vorsicht zu gebrauchen. Goethe hat niemals daran gedacht, in Kunstwerken Philosophie zu lehren oder philosophische Gedanken in der Weise darzustellen, wie sein grosser Freund Schiller in den „Künstlern" oder im „Ideal und Leben." Früher freilich meinte man vielfach, die Faustdichtung sei eine Allegorie, und man müsse, um ihren eigentlichen Sinn zu verstehen, hinter ihren anschaulichen Gestalten abstrakte Begriffe suchen. Davon ist man jedoch immer mehr zurückgekommen, und man kann sich dafür auf ein Wort des alten Goethe berufen, worin er sich gegen jeden Versuch wehrt „ein so reiches, buntes u

オビテル・スクリプタ

厨川白村

學問とか文筆とかの業に從事してゐる者は、からだは動かさず、言ふ事も呑氣な事ばかりを云つてるから、わきからは暇人のやうに思はれる。雜誌や著述の原稿でも書けば、それは仕事をしたやうにも云はれるが、本を讀むと云ふ事は他人(ひと)からは全く暇つぶしの閑事業か何かのやうに見えるのだらう。書物と云つても古臭い昔の書物や、さもなくば戲曲小說の類を繙いてゐるのは、是が職務だとも義務だとも、他人(ひと)は思つて與れないらしい。

事務やら周旋やらで東奔西走して居る、さも忙しさうな人が、義太夫を稽古したり、盆栽をいぢつたり、謠曲をうなつたり碁や玉突に熱中して居るのを見ると、羨ましいと思ふ。あれが卽ち忙中おのづから閑ありとでも云ふのか。そして學徒や文人の業は、まことに閑中忙あるものであらう。日曜もなければ、土曜もない。晝もなく夜もなく、謠ひもうたらず碁も打たず、毎日々々八時間勞働はをろか、十幾時間の勞働をして、まだ足りない。われに時間と精力とを與へよ然らずんば死を與へよ。しまひには、そんな事まで云ひたくなる。この忙しい人間をつかまへて、原稿を書けだの、講演に出ろなどと責め立てゐるのは、云ふ方が無理である。

忙中の閑か、閑中の忙か、われ之を知らず。要するに恁くの如き文字を聯ねるのは、私たちに取つては obiter dicta である。否な obiter scripta と云つた方が當つてゐるだらう。

運動會の競走なぞに、卑怯な人間を見る事がある。到底相手に勝てないと思ふと、自分は走る事を中止して了つてさきに走つてずん〳〵勝つて行く者に向つてけちをつける。かれこれと文句をつけて、勝負を誤魔化さうとする。まことに良くない事だ。

非常な急激な速さで時代は進轉する。自分の頭腦が鈍くて、とても是では追付いて行けないと思ふと、今度は自分よりも前に進まうとする者に向つてけちを附けたがる。さう云ふ者に限つて犬の遠吠えのやうな事を云つて、同じ仲間を呼ばうとする。何事にも同類といふ者は出來る。

さう云ふ人たちに限つて、自分で、もつと早く走れる練習をしようとか、もつと深く物を考へようとか云ふ努力を決してしない。自分は其儘にして置いて、競技の相手や時代思潮の方が間違つてゐるのだと強辯する。

彼等は他を欺くに先だつて、まづ自らを欺く。今の如き時代に於て固陋頑冥の言をなす者には、多かれ少かれ自己欺瞞のあとが見られる。從つて其生活は虚僞に始まり、虚僞に終つてゐる。

×

冷然として傍観者の態度をとる事は、人生に於て、むつかしい事である。

運動會の競走に、うしろの方から變挺な走り方をして、ぶつ〳〵云ひながら隨いて行く者がある。超然として圏外に立つ事も出來ず、さりとて眞先きに走る事も出來ないから、仕方なしにまあ尻から隨いて行く。しかしぶつ〳〵言ふ事だけはやめない。それをやめれば、實は、も少し早く走れる筈なのである。

今の日本人の多數は、世界思潮のなかを、ぶつ〳〵云ひながら、尻から隨いて行く方の仲間だ。

再びいふ、ぶつ〳〵云ふ事をやめて、高速度を出せ。

×

頑冥無理解な人たちと、その反對の人たちとを比較せよ。凡ての場合に於て、どちらに正直な無邪氣な人が多いか。勇氣のある好人物が多いか。また、どちらに姦猾巧智の徒が多いか。狸親爺が多いか。陰險なずるい奴が多いか。悧巧者が多いか。

そこを考へて見よ、personal equation の問題として。

×

或人が云ふ、四五日新聞を見なかつたので、世間に後れたやうな氣がすると。

新聞を見るから、世間に後れるのである。世間よりも進むと云ふ事は、世間を離れる事である。大いに進んでゐる事は、大いに離れてゐる事だ。

四五日世間とつきあはず、新聞も讀まないで、唯だじつと自己の内面を反省し、周圍を凝視せよ。また何か讀まうと云ふならば、むしろ古人の書を讀め。それは自分が世間よりも遙かに離れ、遙かに進み得る最良の法である。

×

あたまは散髮にしたが、ちよん髷だけは頭蓋骨の下に藏しまつてあるやうな說を吐いて、一生懸命になつてゐる人を見る。わたくしは首をうなだれて其人の言を謹聽する。その說に感心するのではない。その熱誠に動かされるのだ。敬すべしとも思ひ、貴いとも思ふ。其人は腹からさう信じてゐるからだ。半點の虛僞が無いからだ。私は古社寺を訪ねて、國寶を拜する時のやうな難有味を覺える。

×

英語獨逸語佛蘭語、さてはまた、片假名の固有名詞や流行の新熟語などを混ぜて、女大學式の賢母良妻論をした形式道德の説法をしたりするものがある。明かに虚僞であり詐僞である。

腐れかけた古肴に鹽をふりまき、てんぷらをかけて賣付ける小賣商人の奸謀を學ぶ事だけは止して貰ひたい。その鹽燒き、そのてんぷらにも拘はらず、古肴から發する惡臭は鼻を突くからだ。

全く頭腦の働かない固陋の徒か、或は思索と努力との價を拂ふに吝なる精神的安價生活者は、その古肴をも、値段が安いからと云つて珍重するであらう。唯だ識者の笑ひを如何にかすべき。

古酒新甕に盛る可からざるを知らないとは、世智に長けたる悧巧者にも似合はぬ愚かさではないか。

×

封建時代の賢母良妻論に、怪しげなてんぷらをかける者の一二の例を語らう。女の母性を説くのも、エレン・カイのやうな筋の通つた説き方ならば結構だが、新しい假面を使ふ賢母良妻論者は、馬鹿々々しい譬へ話なぞを持出す。西洋の話や片假名をさへならべて置けば、何も知らない者は、感心して聽くとでも思つてるのだらう。聽衆や讀者を侮辱すること甚しきものだ。

女は子を產み、子を育てるのが何よりも大切だと云ふ解り切つた事を説教したさに、或る西洋人の云つた言葉を引く即ち、女が一番美しく見えるのは、子供をあやして居る時だと。

なるほどさうかも知れない。そして、女が臨月になつて大きなお腹をして居る時は、女性美の極致だと、この講演者は何故云はないのだらう。そして舞姿や、媚びるやうな嬌態や、美しい聲で歌ふ時なぞよりも、男の按摩をしてゐる時の方が、ずつと美しく、女らしく、けだかく見えると、なぜ云はないのだらう。

また賢母良妻先生は、頑冥な家長制度で固まつてゐた羅馬時代の有名な女、コルネリアの話を持ち出す。客が自分の寶石を誇つて見せ、あなたのは、と訊いたとき、賢母コルネリアは、自分の子供を引ぱり出して、『私の寶石は是でございます』と答へた。その二人の子供はテイベリウスとカイウスとで、共に羅馬の執政官にまでなつた。グラッカス家の賢母良妻コルネリアの名は、千載のもと青史に傳はつてゐると講釋する。聽く方でも、さすが學者の云ふ話だと思つて感服したやうな顏をしてゐる。

自分が所有する寶石を誇るのと同じ意味に於て、自分の子供を誇る親は、たしかに愚物である。子供は親の所有物でも何でもない。また如何なる品物にせよ、自分の所有物を誇ると云ふ事からして既に間違つた話だが、同じ間違つてゐるのなら、子供を誇るよりは、まだ寶石を誇つてゐる方が、罪がなく無邪氣で、どれだけ好いかわからない。氣障さ加減が少いだけでも好い。殊に母親の私有物であり裝飾品である寶石と、子供とを比較した其根本思想に於て、賢母良妻コルネリアは、おのが愛兒に向つて大なる侮辱を加へた者である。

子供が立派な人間になつて、執政官になつた。なるほど結構な事には相違ないが、それは、たま〳〵子が偉かつたのである。子には子としての個性もあり人格もあるからだ。必ずしも親が偉いからでもなく、また賢母良妻と稱する者の育兒教育の力のみによるとは、決して云はれない。馬鹿な母親でも立派な子供を持つてゐる。もし子供が偉いからと云つて、母親が誇りとすべき者ならば、子供が惡事を働いた場合、封建時代のやうに、兩親も一緒に罪に服しなければならぬ。子が人殺しをしても親が罰せらる可きでない以上、子が偉くなつたからとて親が誇りとすべき理由は斷じてあり得ない筈だ。(子供の立派になつたのを、情愛の上から、親が喜ぶと云ふ様な事とは、全く別問題である)。

親は親である、子は子である。子は親の製造品でもなく、所有物でもない事は解り切つた話だ。コルネリアの話なぞ

は、個人々々の人格を認めなかつた家長制度の羅馬時代か、或は封建時代にだてのみ通用したであらうが、二十世紀に於ては斷じてお座に出せる話ではないのである。美談でも何でもない、單に古人の蒙昧を語る一笑柄に過ぎない。昔の「子寶思想」の一例として觀過すべきものだ。

ワイニンゲルの言ひ草ではないが、婦人には母型と娼婦型との二種の型がある。着物の柄の擇り好みすら出來ない母型と、美貌や裝飾をのみ誇とする娼婦型と、二種の女が出喰はせば、此コルネリアのやうな逸話は昔も今もさらにある話だ。わざ〳〵公開講演なぞに持出す程の珍談でも何でもない。

又コルネリアの話は、少しでも西洋の書物を讀んだ者の誰でも知つてゐる陳腐極まる話である。同じく陳腐な教訓談でも、虚言を戒める爲の、華盛頓が父の木を切つた話や、イソツプ譬喩談にある狼と呼んで助けを求めた子供の話なぞは、千古萬古に通用する話だ。賢母良妻コルネリアの話なぞよりは遙に貴ぶべき訓話である。

あんな陳腐平凡談を、語る者も語る者なら、聽く者も聽くものだと思ふ。世間は廣い。

×

話は違ふが、自分の子を誇ると云ふ事から思ひ出した。わが子の自慢話を、人前で誇り顏に聞かす樣になつたら、既うその人も老ひ込んだ。末路だと見て可い。

また、よく學校の先生などにある事だが、以前に教へた生徒が一人前になると、なが〳〵と昔からの來歷を他人に話して聞かす。あれもわしが教へたのだと云ふ樣な事を云ふ。眞の師弟間の情愛あつて之を云ふのならば、美しい。唯だ自分が教へた事を誇るのならば、その先生みづからは、十中八九まで、既う脈の上がつた人だ。氣の毒である。

何事にもあれ、過去を語るやうになつたら、既う駄目だ。わか〳〵しい心は唯だ未來に向つてのみ趨く。

×

教育家といふものは、朝に夕べに、あの元氣のよい少年や青年を相手にして居ながら、たゞ早く老いるのだらう、と或人訊く。

教育家は老人の眞似をする事を商賣にする。嘘から出たまことで、やがて自分も老人に出來上るのだ。さうも考へられる。

他の會社員などは、老人の重役などを相手にしてゐるから、自分の若さを守らうとする自衛の心持が自然と働く。その反對に、學校の先生は少年青年に對して、常に自分の偉さを見せ、先輩ぶりを誇り、常識ぶりと謹嚴ぶりとを見せようとする。相手の逆に行かうとする心状は兩方とも同じだが、結果からすれば、老人を相手の前者は若く、少年を相手の後者は老ひ込む。

×

あれは好人物だ、正直物だと云ふ時、それを褒めるのではなくて、輕蔑してゐるのだ。

あの男は詩人だ、と云ふとき輕蔑するばかりではない。敵視してゐるのだ。

拉典語では Vates といふ言葉が、詩人にもまた豫言者の意味にも用ゐられた。

×

聖書の「豚に眞珠」といふ言葉は、「猫に小判」と云ふよりも、巧みな言ひかただ。

或る美しい人が、ダイヤやエメラルドやルビイやオパルやガアネットや、色々の寶石を入れた手函のうちから、眞珠をいくつか地上に撒いてやつた。そこに居た獅子だの虎だの豹だの、また孔雀白鳥などは、喜んで、その眞珠を呑み込

んで了つた。犬だの猿だの狸だのは、自分に用の無い物だと思つたか見向きもしなかつた。

そこへ五六匹の豚が出て來た。いつもの醜惡な聲を出してぶつぶつ云ひながら、前足で眞珠をかいて、糞土の中に落さうとした。

美しい人は眉をひそめながら云つた。『おゝ可憐の豚よ。』

その眞珠は『詩』であつたかも知れない。豚は何と云つたか、讀者は記憶してゐられるだらう。

×

話は更に、さきの陳腐平凡談に歸る。

常識即ち平々凡々識で十分にわかり切つてゐる事を、長々と書いたり喋舌つたりしてゐる者の氣が知れない。何の爲にあんな事をするのだらう。さう思つて見てゐると、人をして苦笑を禁ぜざらしめる樣な色々の理由が其背後に潛む事を考へさせられる。

陳套で、平々凡々で、淺薄な言葉の二三の例を云ふと。

『何でも極端な事を云ふのは、よくない。』

『新思想も惡くはない。時勢が變化するのだから已むを得ない。しかし、昔からの習慣も一概にわるいとは云へない。』

『戀愛は結構だ。しかし外の事も大切だ。戀の爲には、どんな惡い事をしてもよいと云ふ法はない。』

『も少し理性に富んだ議論でなければならぬ。』

『流行にかぶれるのはよくない。』

『あなた方は聰明な理智に訴へて、正當な批判をなし、自らよしとする道に進むがよい。』

『それも結構だ。しかしまた斯らいふ事も考へて見ねばらぬ。世の中はさう單純には行かない。』

『家庭生活なるものには、學術的に、充分なる理由の存するを見るのである。人類あつてこの方幾萬年を經たか知れぬのであるが、その文野はこれを問はず悉く何等かの、家庭生活を營み來つた事を見れば、この種の生活にはたしかに一つの必然的意義が存するに相違ない。家庭は夫婦を以て始まるものである事は、改めていふを要せぬのであるが、そこに何時しか親子關係、兄弟關係、姉妹關係等が成立つのである。家庭はこれ等の人人を訓練して單に家庭の一人たるばかりでなく、又社會、國家の一人たるばかりでなく、人其ものとして必要なる資格を備へさせるのである。第一、家庭は道德上、缺くべからざる訓練機關たるのである。家庭は之を小規模の社會と云ふべく、また小規模の國家といふべきである。』（此文の終に小さく「文資任記者」の文字があつた。）

『吾々は一夫一婦主義者であり、賢母良妻主義者であり、賢父良夫主義者であり、人類愛護主義者である。』

『衣服を左り前にして電車に乘つて行く事が出來たら、私はその人に勇者であると云はう。しかし、なか〳〵出來まい。』

『思想の動搖し易い、そして物の眞相を明かに判別する事の出來がたい若い人たちは、よく、かうした議論などに迷はされる。』

『一時は、日よけになる樣な庇髮と云ふのが流行つた。此頃は髷を首筋のずつと後の方で結つて、前髮を眞中で割つたり、七分三分にわけたりするのが流行る。』

あまりに馬鹿々々しいから、引例はこれ位で切り上げるが、どれも皆お說教として、一々御尤もだ。誰しも異存はない。こんな平々凡々の「ただ言」を二度も三度も講演なぞで喋舌つて、なほそのうへに同じ事を同じ文句で色々の雜誌などに寄稿して居る者の氣が知れない。否な氣が知れてゐるから、苦笑させられる。

もとより『眞理は平凡である。』だから、たとひ平凡であつても、世人が若し誰も氣附いて居ないやうな事ならば、千語萬語をつらねても之を說くの要がある。しかし右の例のやうな「たゞ言」は、今日中學校や女學校の二年三年の生徒の

耳にでも、陳腐常套だとしきや聞こえないのだ。彼等と雖も輕侮嘲笑なしには聞くを得ず讀むを得ない程までに平凡なのである。それも、辯舌として巧いと云ふでもなく、また文章と云へば、いつも恁んな平板な事を云ふ者どもに限つて先づ第一行目から、既う調子が外れてゐる。乾燥無味、蠟を嚼む位なら辛抱もする。まるで刃の缺けた鰹かきで、鰹節を掻いてゐるやうな文章だから堪らない。いつたい、あんな拙惡な文字を臚ねて、自分で夫れを恥だとも思はないのだらうか。

かのやうな解り切つた平凡陳套の內容を、かのやうな書きなぐりの出鱈目な文字で綴つて、之を世に公けにしても平氣なほど迄に、人は厚顏無恥になれる者だらうか。もし成れるものならば、私も、たとひ劇務の餘暇を以てしても、原稿や講演を多く引受けるであらう。十中の九までは之を謝絶したり、或は心ならずも違約したりして、他人に迷惑を掛けないで濟むであらう。「自明の理(トルイズム)」を事々しく、ならべ立てる事によつて、お茶を濁す事は決して難事ではないからだ。

×

深き痛ましき人間味、人生味に、透徹せず、唯だわづかの生學問や常識論や實利說だけで、人間の生きた事實を批判しようとする人々が、現代の悪い意味のジャアナリズムと野合するとき、そこに出來るものは、西人が謂ふところのlatitude(平凡のお談義)である。その手ぢかな例として、さきに戀愛事件が世を騷がした時に出た多くの識者と稱する者の言說を見よ。

×

人がみな俐巧になつて、上手になつて、賢くなつて、妥協したり折合つたり、理屈を附けたり、誤魔化したりする者ばかりの多いとき、そして人間生活を、常識的に、散文的に、利害打算的にしようとする者ばかりの殖えるとき、「トル

イズム」を說くやうな必要は毫も存しない。眞に說くの必要あるものは、超常識の說である。反抗の論議である。建設と創造との爲にする破壞說である。それは drastic な「詩」であらねばならぬ。眞に吾等が聽かんと欲する者は凡庸の說法ではなくして、天才の聲だ、豫言者の聲だ。

×

玆に超常識と云ふ言葉を使つたから、一言して置く。これは私の假の造詞(コイネエヂ)だ。常識といふ平々凡々な所から、更に超越してそれ以上に出た目識を云ふのである。

日本には「常識(コンモンセンス)」といふ言葉を、時々飛んでもない意味に使つて、平氣な人がある。たとへば、「中學を卒業して常識を得る」、などと云つてる者がある。思ふに常識の語を、「普通の智識」と云ふやうな意味に誤解してゐる者らしい。滑稽だ。その滑稽が立派な英語の先生によつてなされてゐるのだから、なほさら可笑しい。昔のアリストテレスより、ハミルトンの哲學を經て、今日に到るまで、常識(コンモンセンス)と云ふ言葉に、そんな意味に解釋した例は斷じて無い。日常の用語例から考へても常識(コンモンセンス)とは、論理や想像によらない普通のふんべつとか判斷力とか云ふだけの意味だ。

常識に迄すらも達し得ない非常識、沒常識に至つては論外である。しかし常識だけはあつて、それ以上にまた一歩も進めず、動けもしない輩(やから)は、平々凡々の徒、共に語るに足りない。われ等は超常識を詩人に求め、天才に待つ。その聲を以賽亞に聽き、エレミアに求め、親鸞に聞き、空海に聞くと共に、また、シエリイに、イプセンに、北村透谷に、ラスキンに、ホイツトマンに、ブラウニングに、ニイチエにこれを聽く事を得るであらう。

沈默せよ、常識の徒。平々凡々の輩。なんぢ等は、卑しき logic-chopper にだも及ばざる事遠き者なるを知れ。常

×

識の徒が天才を嘲る慣用語がある、曰く crank 偏癡氣とでも譯すべきか）。
やりかたが下手だと云ふ。下手でも結構だ。自己を欺き他人を欺く事の最も少ないやりかたが、最も貴いのだ。成功と失敗とのみが問題ではない。

たとひ失敗を豫期しつつも、たとひ破滅を覺悟しつつも、ことさらに拙劣に、正直に、直線的に、横紙を破り横車を押すことは、今日の如き世の中に於て、自己の正義と自由とを全うせんが爲には、避け難き場合が多い。それが「失敗に於ける成功」success in failure を得る爲めの唯一の道である。

目的のためには手段を擇ばない事の不可なのは、誰しも知つてゐる。知つて居りながら、目的のためには、自己を欺き他を欺くやうな「上手」な悧巧な手段を取つてゐる。そして人生の五十年は過ぎ行く。

人生の最後は死だ、滅亡だ。いくら「上手」な手段を取つても、『死』は、避けられまい。

そこで此五十年を如何にして送るかが問題である。それは虚僞や誤魔化しのない眞面目な眞劍な努力をすると云ふ外に、道はないのである。努力は苦みであり、惱みである。この苦みを味ひ、この惱みを享樂する所に、人生の生き甲斐はある。生の喜びもある。唯だ最小抵抗の線を通つて、御都合主義、事なかれ主義、折合ひ主義で誤魔化して行く事ではない。人生の表面を、唯だ氷辷りのやうに、滑らかに辷つて行く事は「成功に於ける最大失敗」であつて、「失敗における成功」ではあるまい。成功とか失敗とかと云ふ言葉は、これを金錢や事業や名利なぞを標準にして云ふべきではなく、純眞な第一義的な人間生活といふ事を土臺として考へねばならぬ。若し夫れでなければ、『死』を面前に控えて、すべての人の生活は結局失敗に終ると云ふ事になる。

内から迫る自己の慾求を誤魔化してゐるやうな虚僞の生活には、力がない、充實がない。自己その者の生活の充實をはからないやうな事で、どうして眞に社會のため人類の爲に盡す事が出來るだらう。それでも猶ほ盡して居ると云ふならば、その言葉からして既に虚僞である。誤魔化しである。僞善者の隣である。少くとも自己欺瞞であらねばならぬ。

唯だ「仕事を上手にやる」、うまく繕めて行く。そんな事は、今の多くの俗物が考へてゐるほど迄に、人間として立派な事ではあるまい。

×

或人は死後の天國を説き、淨土を云ふ。しかし現在五十年の生に於てすら、自己を充實せず深化せざる虚僞或は無自覺の徒が、高き天國に到り、彌陀の淨土に達し得るとは、わたくしには信じ得られないのだ。私は從つて總ての禁慾主義（節慾ではない）や消極主義を、宗教としても排斥すべき者だと思つてゐる。

×

世の中の人事には、決して褒めるべき事でないと共に、また惡く云ふ事も出來ない樣な事件がいくらもある。ちやうど爛熟した果物（くだもの）が枝から地上に落ちるやうに、やむを得ない自然の事なのだ。わきから嚴正批判だの何だのと、したり顏に言ふ者どもこそ間違つてゐるのだらう。枝から落ちるのを、默つて見て考へてゐれば可いではないか。そしたらばニウトンの萬有引力説もわかるだらう。更に二百年を經て相對性原理も考へられるだらう。

×

『青春の光榮、何の時にか歸らむ、
再び歸らず――ああ、遂にまた。』

When will return the glory of your prime?
No more—oh, never more!

歳三十ならずして、伊太利の海に溺れて死んだシエリイでさへ、こんな嘆きを繰返した。碌々として四十いくつかの生を貪つて、なほまご〳〵してゐる此身は恥かしい。革命詩人シエリイは、あの若さで世を去つた。しかもその遺した抒情の大詩篇は全歐を動かし、彼が激越の調と幻想の詩美とは、英吉利語と共に恐らくは不朽なるべき世界の至寶だ。天才を享けずして空しく生を貪ぼる者の悲しさを、歳四十にして、しみ〴〵と味はせられる。いかに我が身に呵責を加へて見ても、強く烈しく自ら鞭韃を加へて見ても、泥細工のやうな、張ぼてのやうな此鈍根、――駄目だ、火のなかにくべても更に惜しくないのは此身だ。燒殺して見たつて、切り刻んで見たつて肥料にもならないのが此身だ。天才なくして徒に、うすぼんやりと、唯だ此世に生れ出た我身を呪ふ外に、何の仕樣もない。

思へば、ことしはシエリイの百年祭だ。矯激の無神論を叫び、ゴドキンに共鳴し、社會改造を夢み、美の幻影を追うては遂に詩神の天國に去つたわかき抒情詩人の最後の日は、今から百年前の七月四日であつたのだ。新しき理想主義が赫奕たる光輝を放てる現代に於て、更に百年の昔に溯ぼつて舊時代のロマンティシズムを憶ふとき、電波の如き感動に觸れて胸を躍らす者は、獨り西人のみではなからう。

×

涅槃經の作者は人間に生老病死の四苦を數へた。他の三つはしばらく別として、老は今現に私たちの眼前に迫れる苦みである。

肉體の秋が來る。鬢髮霜をおき、近視が遠視になり、頭が禿げる位は、何でもない。「心」に老境が來て、騎士の硬化

のやうに人としての己れが硬化し、反撥性を失ひ感受性を鈍らし、情熱と感激を失ひ、自分で自分が造つた殻の中におさまり、勇猛の氣衰へては遂に諦めの人となつて、事なかれ主義の靜居安住を求むるやうになつたら、もう往生だ。私なぞのやうに四十を越した者には、生きんとするの努力は即ち老ひざらんとするの努力だと云ふ事を、しみ〴〵と考へさせられる。

世間には貧乏を恥辱だと心得て居る俗物がある。また無智は罪惡なりと云つた人もある。しかし心が老ひて行く事は、貧乏よりも無智よりも、なほ更に大なる恥辱であり罪惡である。とこしへに心の若さを――内なる「青春」を、失はざらんとするの努力、それがなければ老人だ。二十歳三十歳の若い老人さへ世には珍らしくない。

×

稚氣とか幼稚とかは俗衆や老人が侮蔑する程に惡い者ではあるまい。その半面には心の若さといふ貴いものがあるからだ。老熟、老成、老猾、老巧、そんな者よりか、稚氣滿幅の方が、どれだけか貴い。「老」がいけないのだ。寔に「老」といふ者は取り得のないものである。そこで老いた奴の處置に困つたところから、人間は悧巧な一策を案じた。即ち、愚物でも廢物でも無能者でも低能者でも、何でも好いから、老いたる者は先づ尊敬して置けと決めた。これは東西古今に通じて行はれる一種の殘忍なる敬遠策だ。老朽淘汰だ。外に禮儀を粧ふ平和的な人爲淘汰の便法だ。そして、死んだら立派な葬式をして置く。

×

六十七十になつて、肉體が丈夫だ、この通り風一つ引かない、白髮一本ない。今の若い奴が……なぞと云つて誇つて

ゐる老人がある。みじめだ。肉體は、云ふまでもなく人間の動物的な部分である。ほかに誇るべき何物をも持たない老人が、肉體といふ物質を誇るのは、無智な富豪が私有財産といふ物質だけを誇りにするのと同じ卑しさ、醜さである。運命はいたずら者だ。そんな事を誇りにしてゐた男が、かりそめの病氣か何かでころりと逝く。皮肉なところが面白い。あちらを向いて惡魔が會心の笑みを洩らしてゐるだらう。

×

さきに云つたシエリイで思ひだしたのは、多くの革新思想家が貴族名門の出である事だ。シエリイ、バイロンを筆頭に、後のラツセル、クロポトキン、トルストイを見、更に日本の貴族の學校から『白樺』が出た事なぞを考へて見る。一見甚だ矛盾した現象のやうで、而かもそこには極めて當然な理由が存するのではなからうか。私は之を讀者の考察に任せる。

×

シエリイの百年祭といへば、ことしは近松の二百年祭（正確に云へば明年か）のほかに、正月がモリエルの誕生二百年に當つてゐる。佛蘭西の梨園は非常に盛んな紀念興行をしたさうだが、モリエエルの風俗喜劇は唯だ佛蘭西に於てのみ生れ得べき大藝術である。歐羅巴でも他の國には、とても出さうもないものだ。すぐれた「笑ひ」の文學を持たない日本で、モリエエルの喜劇に最も近い物と云へば、さて何だらうか。博多にわか。いゝ。それでは比較にも何にもならない。しかし其外に似た物は無ささうに思ふ。

日本政府が、佛蘭西の最大國賓である『モリエエル全集』の邦譯に發賣禁止を命じてから、もう十年餘を過ぎた。月日の經つのは早い。今は浪花節が流行つてゐる。

賀川豐彦氏の『死線を越えて』と『太陽を射るもの』を讀む。藝術品といふよりは、むしろ藝術品のBasisであり素材であると云ふ感じがする。眞の藝術品とするには、まだあの上に滿身の力をこめた磨きをかけ、精錬を加へねばならぬ。しかし私はあの書物が數百版を重ねて、多くの人々の心に、情熱と感激とを傳へ得た事を深く喜ぶべきだと思ふ。酒を飲んでぶら／＼して遊惰の日を送つてゐる小說家が、小手先きの器用で書きあげた作品よりも、生活そのものを眞劍な藝術としてゐる人の提供した素材やメトリクスの方が、より多く人の心を動かすのは當然なことだ。唯だあの『死線を越えて』に、今一息きの磨きを掛け精錬を加へたならば、そこにドストエフスキイが出來、イプセンが出來るのである。しかし今日の日本人の內生活は、まださう云ふ者を產み出すところまで行かないのかも知れない。或はまた、さう云ふ物を鑑賞し得るまでに、深化されて居ないのかも知れない。夫れはいづれにせよ、この現在の日本人の生活に一種の感激を傳へ得た『死線を越えて』の作者の勞は十分に報ゐられた。たとひ其感激は、まだ眞に全生命の昂揚飛躍にまでは到らないセンテイメンタリズムであらうとも、それは必ずしも著者の罪ではないと思ふ。

感激と情熱と憧憬と歡喜とを失つた生活は、『詩』のない生活だ。『詩』の無い生活は、人間として最も下等な生活だ。墮落した生活だ。生き甲斐のない生活だ。首を縊つて死んで了つても惜しくない生活だ。

『死線を越えて』を讀んだ人は、もう一度それを自分の胸の奥の精錬場で磨き上げねばならぬ。白熱の高度に燃ゆる「生命の藝術」の烈火によつて、あのなかから、尠く寶玉を取り出すだけの努力を怠つてはならない。藝術としての『死線を越えて』は既成品ではなく、未成品であるからだ。

歴史講談 十一月七日

堺利彦

—（十一月七日）—

▲ロシヤのボリシエヰキ革命は一九一七年(大正六年)十一月七日に成し遂げられた。私は今、その時の光景を『歴史講談』として書いて見る。『十一月七日』とは題したが、七日を中心として、その前後の事を書いて見る。『歴史講談』だから、議論もなく、主張もない。只だ歴史上の事實を興味の爲、研究の爲、ありの儘に書いて見る。

▲昨年、本誌の夏季臨時號に、五十年前のフランスの騷動、『パリコンミユン』の昔話を書いた。今度も全くそれと同じ趣意であり、同じ立場である。此の次には『明治維新の話』若しくは『大政奉還の日』といふのを書いて見たいと思つてゐる。

一

十一月七日(水曜日)全露ソヴイエツト第二回大會の第一日がペトログラードのスモルニー館に開かれる。ボリシエヰキは愈々その日を以て事を擧げる計畫を立てた。五日の夜、久しく姿を隱してゐたレーニンが初めて此スモルニーに現はれた。スモルニーはいよ／＼革命の策源地として、有らゆる原動力の集中點として確立した。

スモルニー館といふのは、帝政時代に於いて皇后陛下から直接の保護を賜はつた、有名な華族女學校で、それが今は勞働者や兵士等の革命的諸團體の本據になつてゐた。横幅が二百間もあらうといふ宏壯な三階建で、其の正面の入口の上には、今でも大きな帝室の御紋章が儼然として、石に彫りつけられて殘つてゐた。其の建物の傍らには、別にスモルニー修道院といふ尼寺があつて、其の溫雅な、にぶ色の、圓い高い五つの塔が、艷消しの黃金に緣を取られて、美しく空に輝いて聳えてゐた。館内には純白に塗つた大きな室が百以上もあつて、其のドアーには、『第三教室』『教員室』などと、エナメルで華奢に書いた昔しの掛札が殘つてゐるが、更に其の上の方には、荒つぽい太い字で、新組織の溌溂たる元氣を示しつゝ、『ペトログラード・ソヴイエツト中央委員會』『全露ソヴイエツト中央委員會』『軍事革命委員會』『ボリシエヰキ部室』『社會革命黨部室』などいふ張札が掲げられてゐた。

一體、ペトログラードの市街は大きなネヴア川に貫かれてゐ

るが、ケレンスキーの假政府の置かれてあつた『冬宮』は、其のネヴア川を後ろに控へて、ちようど市街の中央に在る。そしてそこからネヴスキーの大通りと、スヴオロウスキーの大通りとを經て、これもネヴア川の上流を後ろに控へて、東の町はづれにスモルニーがある。ボリシエヰキのスモルニーと、假政府の冬宮とが、約一里ばかりを隔てゝ東西相對峙してゐたわけである。

　レーニンは七月の大示威運動の失敗でフインランドに逃亡しそこから絶えず通信を發してボリシエヰキの同志を激勵してゐたが、十月頃には窃かにペトログラードに忍びこみ、ネヴア川の向ふ岸の郊外に潜伏して、いよ／＼『全權をソヴイエットに』奪取する畫策を回らしてゐた。十月廿三日の夜、同志カリニンの宅に開かれた秘密會には、ボリシエヰキの主なる首領達と、ペトログラードの勞働者と兵士との代表者が二十人ばかり集まつたが、レーニンはあの禿げた頭に鬘をかぶつて、スツカリ變裝してやつて來た。

　其の時にはまだ、一擧の決行を躊躇する者が多くて、智識階級の首領の中では、レーニンとトロツキーの二人だけが斷乎たる決行論者であつた。軍人すらも反對してゐた。そこで決議の投票をやつて見ると、決行論者が負になつた。すると一人の荒くれた勞働者が憤然と立ちあがつて、額中の筋肉を引きつらせながら叫んだ。『俺はペトログラードの勞働者の意見を吐く。俺達は此の一擧に贊成だ。君等は勝手にしろ。其の代り、若しこれでソヴイエットがこわされたら、俺達は君等を許しやしない！』或る軍人がそれに贊成した。そこで再投票をやると、今度は決行論者が多數になつた。

　けれども、ボリシエヰキ中の右翼に屬する、リヤザノフ、カメネフ、ジノヴイエフ等は、猶ほ武裝一揆に反對する運動を續けてゐた。或る日、ジノヴイエフは軍事革命委員のアントノフに向つて斯う云つた。若し、少なくとも二週間、權力を保ち得るといふ證明が出來るなら、僕も君の武裝一揆說に贊成するのだが』と。

　十月三十一日、『ロバチ・プート』といふボリシエヰキの機關新聞に、『同志に告ぐ』と題したレーニンの績き物の論文が現はれた。それは實に古今未曾有の大膽な政論だと云はれてゐるので、カメネフやリヤザノフの反對論を猛烈に駁擊した叛亂主張說であつた。曰く、之まで我々が「ソヴイエットに全權を」と主張した其の間の聲を放棄するか。さもなくば叛亂をやるか。中間の道は斷じてない。』それから決行說がいよ／＼勝利を得て、五人の最高幹部が選ばれた。レーニン、トロツキー、スタリン、ジエルジンスキー、カメネフがそれであつた。そして彼等は歷

々ヴイボルグの勞働者の家で會合してゐた。

十一月三日、更に重大な首領會議が同志スカロヴアの宅に開かれた。其の席上でレーニンは斯ういふ演説をした。『十一月六日は早すぎる。我々は此の一擧に對して全露的基礎を持たねばならぬ。然るに、六日にはまだ、全露ソヴイエット大會の代議員が十分に來そろはない。と云つて、十一月八日では遲すぎる。其の日にはモウ大會が成立してゐる。多人數の結合體が敏速な行動を取る事は困難である。我々は是非とも、大會の初めて開ける其の日、卽ち七日に於いて事を擧げねばならぬ。そして我々は大會に向つて「サアこゝに權力がある！諸君は之をどうする積りか」とヤルのだ。』

そして其の時、其の家の二階の一室では、髮の長い、顏の細い、痩せた男が、ペトログラードを占領する、詳密な戰略地圖を作つてゐた。此の男は元ツアールの軍隊の士官で、後に革命家となつて追放されたアヴセーンコ通稱アントノフであつた。彼は數學者であり、又將棋の名人であつた。

之と同時に、一方には軍事革命委員會といふ重大な新權力が發生した。

それは最初レーニンの發案で、ボリシエヰキの軍事部と左翼社會革命黨の軍事部と、ペトログラード・ソヴイエットの軍人部との代表者を集めて、政府の參謀部に附屬する一委員會を作つたと云ふのであつたが、それが更に一歩を進めて政府の參謀部と對立する革命的參謀部を作るといふ、ペトログラード・ソヴイエットの決議となり、十月廿九日、遂に軍事革命委員會として發表されたものである。勿論、政府側はそれに反對して、二つの參謀部を置く事は不合理だと論じ、或は之こそボリシエヰキが政權を奪取する爲の參謀部だと攻擊したが、それに拘はらず、軍事革命委員は其の日から權力を確立して、スモルニー館の一室に陣取つた。それと云ふのも、政府の參謀部が、ペトログラードの守備隊の中に革命的の兵士が非常に多くなつたのを怖がつて、今の守備隊を戰線に送り、他の部隊を以てそれに代へるといふ考案を立て、ペトログラード・ソヴイエットに其の承認を求めたけれども、ソヴイエットがそれを承認しないで參謀部に對する不信と不安を增大した結果であつた。そしてボリシエヰキの策士等が、その氣勢を利用して、半ば意外にも革命的動力の重大な中心を作り得たわけであつた。

斯くて軍事革命委員會はスモンニー館に陣取り、十一月三日には、政府の參謀部に七名の代表者を送り、同五日には各兵營に專屬する委員を任命し、軍事革命委員會の副署のない參謀部の命令には、一切從はない事を約束した。參謀部は勿論それに

—（十一月七日）—

反對したが、少しも反對の効果が無かつた。然し左翼社會革命黨と、ボリシエヰキの右翼たるリヤザノフ等の調停で、メンシエヰキ派との間に妥協が成立し、軍事革命委員會は政權奪取の爲の機關でなく、只ペトログラード兵士の利益を擁護し、及び反革命派に對してペトログラードの民主々義を擁護するものだといふ決議をした。けれども實際上には、既に其の以後から、軍事革命委員會は七日の一擧に對する軍事的準備を整へ、全市を數區に分つて受持の委員を定め、漸次にソヴィエツトの獨裁を實行しかけてゐた。殊にペーテル・ポールの要塞は、冬宮の直ぐ後ろのネヴァ川の向ふ岸に在つて、ペトログラード占領の爲には第一の要害であり、又その兵器廠が重大な意義を有してゐるので、十一月四日の夜、軍事革命委員會の特別會議で、アントノフは一説を提出し、パヴロフスク聯隊から同志の數隊を連れて來て此の要塞を占領しようと主張した。然し多數の意見は要塞内に集會を開いて要塞その者を說き落さうと云ふのであつた。それで其の翌日(即ち五日)要塞内に兵士の集合が開かれ、トロツキーとレシエヴイツウとが演說した結果各隊一致で軍事革命委員會を擁護する決議を爲し、ペーテル・ポール要塞は一戰を經ずして『我黨』の有に歸した。そして早速、ペトログラードの勞働者に武器が配布された。而も要塞内に於ける法律上の軍事官憲は手の出し樣がなく、ジツトこれを傍觀してゐる形であつた。

そこで政府も此の形勢に對して、それぞれ對抗の策は立てかけてゐたが、英國大使ブカナンが首相ケレンスキーに向ひ、ボリシエヰキが着々として軍事的準備を進めて居るのを判つてゐるかと聞いた時、ケレンスキーは傲然として、假政府には如何なる叛亂をも鎭壓する實力があると答へた。又ペトログラードの司令官ポコルニコフ大佐は、部下の軍隊に對して、叛徒に加擔してはならぬといふノンキな禁令を下して、濟まして居た。そして十一月五日の晝、政府の諸大臣は英國大使と共に食事をしながら、叛亂の噂話をして笑ひ興じてゐた。

所が一方スモルニー館では、軍事革命委員が中心となり、殊に其の中の特別委員たるアントノフ、ポトヴオイスキー、レシエヴイツウの三人が軍事計畫の首腦となり、それにペトログラードのソヴイエツトの會長たるトロツキーが、あの大きな目玉をむき出して頑張つて居り、五日の夜には(前に話した通り)遂にレーニンも乘込んで來るし、いよいよこの昔しの修道院女學校が、革命の策源地として有らゆる原動力の集中點となり、それぞれ防禦の手順も整ひ、その嚴重な警戒ぶりは殆んど要塞の觀を呈してゐた。(メ

其の頃にはもうスモルニーを立ちのいて、假議會の開かれてゐるマリイ宮殿に移つてゐた。)

或る日の事、トロツキーが細君と二人づれでスモルニー館の玄關にやつて來ると、番兵がそれを遮ぎりとめた。トロツキーはポケツトを探つたが、通行劵が見つからなかつた。『好いぢやないか。君、僕を知つてるだらう。僕はトロツキーだ。』『名前なんぞ役に立たない。通行劵のない者は斷じて入れない。』番兵は頑固に拒絶した。『だつて僕はペトログラード・ソヴイエットの會長だよ。』『フーン。それほどエライ人なら通行劵の一枚ぐらゐ持つて居そうなもんだ。』トロツキーはどこまでもおとなしく、『では仕方がない、隊長に會はしてくれ』と頼んだ。番兵はそんな事で一々隊長を煩はすわけに行かないと、ブツクサ云つてゐたが、それでも結局、隊長を呼んで來た。そこでトロツキーが隊長に譯を話して、『僕はトロツキーだ』と再び名乘をあげると、『トロツキー?』と隊長は少し頭をかしげて、『其の名前はどこかで聞いたようだ。ぢや宜しい。はいつて宜しい、コムレード。』(此『コムレード』は同志とか同僚とか云ふ意味で、誰に向つても親愛の意を表する、革命以來の流行言葉であつた。)

今一つトロツキーについて面白い話がある。當時スモルニーでボリシエキキの首領達が如何に緊張して働いてゐたかが、此の話でよく分る。六日の夜、トロツキーは一分間も電話を離れず諸方面からの報告を聞いたり、諸方面に報告を發したり、不眠不休でやつて居たが、突然、顏の色が眞靑になつて、深い息を一つ吸つたきりで床の上にバタリと倒れた。人々は驚いて、飛び寄つて抱き起したが、其の卒倒の原因は何んでもなかつた。トロツキーは丸二日間少しも、食事をしなかつたのだ。する暇がなかつたのだ。

二

十一月四日は『ペトログラード・ソヴイエット・デー』として、大示威運動が行はれた。これは元來、ペトログラード・ソヴイエットの機關紙を作る爲に、其の費用を集める目的で計畫されたもので、二週間も前から十一月四日と極まつてゐたのだが、今となつて見ると、丁度それが一揆の直ぐ前に於ける、勞働軍の閲兵式となつたわけだ。

四日には何か起る。ボリシエキキが何かやりだす。世間の取沙汰は只その事ばかりであつた。政府側の新聞紙などは殊さらそれを誇大にして、ボリシエキキが今にもペトログラードの全市を血の海にするかのように云ひふらした。所が、示威運動は只だ粛々として行はれ、到る處の町の辻や集合場で、ボリシエキ

キや、左翼社會革命黨や、無政府主義者の雄辯が數時間も繼續した。そして『ケレンスキー政府を倒せ！』『戰爭を止めろ！』『ソヴィエットに全權を與へよ！』斯ういふ種々の合言葉が、電流の如く全市の空氣中に漲りわたつた。右翼諸黨派の代表者で、一人として反對の聲を擧げ得る者がなかつた。

五日は（前に話した通り）、スモルニー側では各兵團との聯絡を取り、着々として味方の勢力を增大してゐた、そして六日には既にペトログラードの占領計畫が完成してゐた。即ち其の大方針は、味方の全勢力を三隊に分ち、一隊は、政府側の兵力が戰線からペトログラードに召集されるのを遮斷する任務を帶び、一隊はスモルニーの防禦に充てられ、殘る一隊は三方面から冬宮を半圓形に包圍し、そしてネヴァ川の水上からは、ペーテル・ポールの要塞と巡洋艦オーロラ及び水雷艇二隻とが冬宮に向つて砲擊すると云ふのであつた。

所が六日の朝、ボリシエヰキの機關新聞たる『ラボチ・プート』と『ソーダート』とが出なかつた。それは前日の夜、カデツト（士官候補生）の一隊が襲來して印刷所を封鎖した爲で、假政府は六日の朝、右二新聞の禁止と、其の記者の捕縛とを布告した。然るにスモルニーでは、軍事革命委員が其の報告に接して直ちに衛兵を派遣し言論自由の爲に其の禁止を解除し、政府の封印を破棄してしまつた。二新聞はそれで難なく發行され印刷所は衞兵に護衞された。

同じく六日に今一つ難儀な事件が起つた。中央電話交換局の交換手共が、矢張りカデットの使嗾を受けて、ソヴィエットに反對して電話の接續を拒絕した。これが政府の官吏や使用人のやつた第一のサボタージュであつた。そこで軍事革命委員は、直ちに又一隊の兵を交換局に送り、其の門前に二個の小砲を据ゑつけた。

それから諸官衙の占領が始まり、水兵や赤衞軍の小隊が諸方面に分遣されて、停車場も、電信局も、電氣局も、電話局も悉く占領され、更に最も肝腎な中央國立銀行も占領された。

政府は之に對し、軍事革命委員の解散、ボリシエヰキ首領の捕縛等を布告したが、今となつてそれは何の効果もなかつた。其の夜、ケレンスキーは假議會に臨んで一場の演説を試み、盛んにボリシエヰキの惡狀を攻擊し、此の危急の際に於ける斷乎たる鎭壓政策の必要を、殆んど泣かんばかり力說したが、各黨派とも躊躇逡巡の有樣で立憲民主黨が右翼社會革命黨を突ついて贊成を求むれば、右翼社會革命黨は中央黨たるメンシエヰキに凭れかゝるが、凭れかゝられたメンシエヰキは左翼社會革命黨に遠慮して何事も決する事が出來ない。そこで結局、左翼社

會革命黨の決議が通過したが、それは、ソヴイエットの亂暴な行動を非難すると同時に、然し其の原因は政府の反デモクラチックな政策に在ると云ふのであつた。そこでケレンスキーは、左翼の首領アヴクセンチエフを冬宮に招いて、若し此の決議が現內閣に對する不信任を意味するならば、自分に代つて新內閣を組織してくれと要求したが、アヴクセンチエフにはそれだけの勇氣がなかつた。要するに政府と假議會とは、只だ躊躇と逡巡と不決斷と狼狽とを以て此の危急に處してゐた。（ボリシエヰキは、此の時にはモウ假議會を無視して一人も出席しなかつた。）

然し政府は防戰の準備をした。コサツク兵は少數の部隊の外ケレンズキーの命に應ぜず、肝腎の賴みの綱のセメノフ聯隊も躊躇の形であつたが、それでも冬宮には、カデツトの數隊と、女子決死隊とが立てこもり、ミカエル砲兵學校から運んで來た四門の大砲が据ゑつけられ、外に武裝自動車の數個が置かれてあつた。これが六日の夜までの形勢であつた。（カデツトは士官學校の生徒だから、勿論貴族及び上流階級の靑年であり、女子決死隊も同じく上流階級の愛國婦人から組織されたものであつた。）

斯ういふ形勢の間に、文豪ゴルキーは、其の機關新聞『新生命』の紙上で、露國の文化生活が全く破壊されると嘆き、曾て自分の作つた有名な革命詩『鷹の歌』の事は全く忘れて、頻りに世の末を悲しんでゐた。（此の一節は、トロツキーの皮肉な罵倒を借用した。）

三

十一月七日（水曜日）はいよ〱ケレンスキー假政府の倒れた日だ。

一體、革命などと云へば、全社會がどんな混亂狀態に陷つてゐる事だらうと、誰でも先づ想像するが、實は存外、平靜なものである。三月の革命以後、ペトログラードでは、總ての劇場が毎晩續いて開演されてゐた。マリンスキー劇場に於ける女優カルサヴイナの新舞踊などは、相變らず評判になつてゐた。女優のインテリゲンチヤは、文學、美術、及び通俗哲學の講演に群れ集まり、救世軍は此の國への新輸入の事とて其の福音此の說教を珍しがられてゐた。詩人は詩を作るが、革命の事は知らん顏をしてゐる。畫家は超然として、中世の歷史畫ばかりをかいてゐる。田舍の若い貴婦人は依然としてフランス語の稽古に上京して來る、といふ有樣であつた。勿論、カフエーで賭博をやつてゐる連中もあり、夜の街をさまよひあるく寶石澤山の淫賣婦もあつた。

愛國心の功過

バート

我國にて怒濤の如き歡呼を受けたる一代の巨人が直接我國民と語り、若くは本誌を通じて我國民に與へたる彼の理想、哲學

忽六版

ラッセル著
ドラ・ラッセル著

の鋭き迸りてある。本書にて論じたる所は總て我國民性、我國是を基礎として嚴密に批判されたもので他の群書とは全然類を異にす。殊に彼の「愛國心の功過」の如き我國民に空前の感激と自省とを與へ、官僚軍閥の徒をして顏色なからしめし一大論策であつたことは今尙世人の記憶に新たなる所である。我社は玆に此世界的大思想家の來朝を記念せんがために敢て此一書を江湖に薦む。

現代 文化人の心理

百般の文化的事象、文化的概念を尤も平易に解説した快著、つまり現代文化を研究せんとする人の第一に手にすべき文化哲學の手引のやうな有益な著書だ。

拾壹版

文學博士 米田庄太郎著

◇◇定價金貳圓七拾錢◇◇送料金拾九錢◇◇

東京芝愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

それで此の十一月七日にも、ネヴスキーの大通りには矢張り平生の通り電車が走つてゐた。店々も平生の通り開いてゐた。昨日に比べると、町の様子は寧ろ不安の氣が少なく見えた。そして何程の騷動も混雜もなく、市民の多數の知らぬ間に、ケレンスキー政府は倒れてしまつた。トロツキーは其の日の事を斯う書いてゐる。『スモルニー館の三階の小いさな一室から發せられる緻密な電話の訓令に從つて、…………、…………、…………、……………、…………、…………、…………、…………………、…………………。』

カメネフの談話館には、同じ日の事が斯う書いてある。『ソヴイエツト大會の開かれる其の日、我々の兵隊とケレンスキーの擁護者との間に、幾多の衝突が街上に起された。然し我々に取つては、ペトログラードの勞働民が味方であるばかりでなく、ペトログラードの守備兵の全部が同じく味方である事が、絕對に明白であつた。又、既に到着してゐる全國ソヴイエツト代表者の大多數が、同じく我々の味方である事が、同じ程度に於いて明白であつた。そこで我々としては、早く此の新權力の實際的組織を作りはじめる事が必要になつた。

『スモルニーの三階では、スヴエルドロフ、ウリツキー、ヨツフエ、ジエルジンスキー等の軍事革命委員が、市内に於ける有らゆる要處を占領すべく、指揮命令を發して居り、アントノフ、ポドヴオイスキー、チユドノウスキノ等は、それぞれの持場から冬宮の攻擊を準備してゐる時、スモルニーの二階の第三十六號室では、レーニンを議長として、「人民委員」(分り易く云へば、新政府の內閣員)の役割を定めてゐた。此の新權力を「勞農政府」と呼ぶ事にしたのは、レーニンの發案であつた。土地の處分と、講和とに關する法令案も、レーニンが自ら書いた。從來の大臣といふ名稱を廢して、「人民委員」といふ名稱を用ゐる事もこゝで極まつた。其の新政府は、たしか私の發案で、(正式には)「人民委員會」と呼ばれる事になつた。

『それから同じく此の會議で、左翼社會革命黨との提携の計畫が行はれた。同黨は其の代表者として、カムコフ、カリエリン、コレガエフ(だつたと思ふ)の三人を我々の處に送つて、之からどうする積りかと我々に質問した。我々は彼等に答へた。我々としては、問題は既に解決されてゐる。我々は權力をソヴイエツト大會に移す。そして我が黨員を以て政府を組織する。けれども、若し彼等が全然我々に與するならば、政府の椅子の幾つかを彼等に與へる積りであると。然るに彼等は、黨の分裂を來す恐れがあると云つて、我々の申出を拒絕した。

『此の會議を終つて、我々は大會を開いた。大會では私が議長

になつた。大會は丁度、冬宮攻撃の最中に開かれた。右翼社會革命黨とメンシエヰキ派との、退場の宣言を讀みあげるのに數分間を費した後、レーニンが壇上に登つて、土地と講和とに關する法令を讀みあげた。

…………。…………。…………。…………。』

そこで今度は冬宮攻撃の方面がどんな工合に進行したか、それを少し聞いて見たい。それにはポドヴオイスキーの談話がある。『午後三時、總ての首領がスモルニーに集まつた。自分と、アントノフと、チユドノウスキーと、エレメエフとは、大急ぎの會議を開いて軍事上の形勢を測定した。諸種の報告に依れば政府はペトログラード附近に少しの援兵をも持つてゐなかつた。戰線の部隊は政府の招きに應じなかつた。

『日は段々暗くなりかけた。兵士等は寒さと餓とが増して來るので、攻撃開始の遲延に對して、ブツブツ不平を云ひだした。首領等はスモルニーから歸ると直ぐ、冬宮の包圍に取りかゝつた。冬宮の區域は間もなく包圍されて、總ての出入口が閉鎖された。六時になつて、我々は電話を冬宮に掛け、假政府を呼び出して降伏を勸告した。然し政府はそれも拒絶した。そこでペーテル・ポールの要塞と、巡洋艦オーロラとに、發砲開始の準備をした。

『其の指揮をする爲に、アントノフはオーロラに行き、自分はペーテル・ポールに行つた。夜の八時になつて、チユドノウスキーは辯士數人と共に、使者として冬宮に送られた。

『チユドノウスキーは政府員に對して、軍事革命委員會に降伏すべき事を勸告した。すると、總督代理パルチンスキーは、それには答へないで、自分の兵隊に向つて演說した。明朝まで我慢せよ、そうすれば戰線から援兵が到着すると。兵隊は少し躊躇しだした。そこでパルチンスキーは勢ひを得て辯士等を抑留せよと命令し、更に彼等を射殺せよとさへ威嚇した。

『けれども、チユドノウスキーの短かい演說で、此うえの抵抗が無益だと云ふ事が、直ぐに兵士等に分つて來た。それでも一部分の兵隊は猶ほ防戰を主張して政府員を喜ばせたが、他の一部分は早くも降伏しはじめた。婦人決死隊も自ら武裝を解きすてた。

『政府側に殘つたのは殆んどカデツトばかりで、其の一部は冬宮の門に近いバリケード（柵塞）に陣取り、他の一部は地下室に戰つて飽くまで冬宮を守らうとした。

『其の時、政府の砲兵隊が我が軍を砲撃すべく準備したが、ルスカヤの我が兵士がそれを攻撃して其の砲門を奪取したので

彼等は直ぐに再び冬宮に追ひこめられてしまつた。これが他の防衛隊の上に決定的の影響を及ぼした。

『我々は、使者が戻つて來ないので、いよ〳〵冬宮の包圍を進める命令を下した。……我々が第二陸戰隊のバラツクに達した時、二人の將官が引張られて來た。エレメーフが其の顔を知つてゐた。一人はペトログラードの司令官バグラチに、今一人は軍務次官ツマノフ公であつた。水兵はそれを撃ちたがつたが我々が強いて押しとめて要塞に送つた。後に聞けば、ツマノフ公は矢張り街上で誰かに殺された』

それから多少の抵抗があつて、冬宮内から機關砲を發射したりしたので、こちらも直ぐにペーテル・ポールの司令官ブラゴンノヴオフに命令して、いよ〳〵發砲を開始した。『其の砲聲が響きわたり、彈丸が冬宮の上にバラ〳〵と落ちはじめると、彼等の最後の躊躇がやんだ。カデツト等はバリケードの後ろから飛びだして、「降伏、降伏」と呼びだした。我が諸隊は大群を成して冬宮内に進入した。…………………………。ケレンスキーだけは逃走してゐた。我が兵士の或者は彼等に暴行を加へようとしたが、勞働者等は私刑に反對した。政府員は兵士に圍まれてペーテル・ポールに護送された。宮中の貴重品を我先に奪はうとする兵士等もあつたが赤衛隊が斷乎としてそれを禁止した。』

更にアントノフの話を少し聞いて見る。冬宮包圍の諸隊は七日の正午頃に出て來る豫定であり。クロンスタツトの水兵一千人は午後の二時ごろ到着の豫定であつた。彼は十一時ごろペーテル・ポール要塞に行き、冬宮を砲撃する手順について司令官ブラゴンラヴオフと打合せをした。彼は又そこで、假政府に降伏を勸告する軍事革命委員會の最後通牒を立案した。それに對する考慮期間は二十分で、それが過ぎたら直ぐにオーロラと要塞とから發砲する手順であつた。それから彼はオーロラに行つて發砲開始についての信號の打合せをした。

然るにクロンスタツトの水兵は夜の七時になつてヤツト到着し、九時になつて要塞とオーロラから砲撃が始まつた。彼はチユドノウスキーと共に諸隊を率ゐて冬宮に進入し、先づ總督パルチンスキーを生捕り、次に十六人の大臣を捕縛した。ケレンスキーは午前の十一時に逃走したのであつた。

要するに冬宮攻撃は意外にも雜作なく片づいた。之についてトロツキーは云つてゐる。『十一月の時に、非常に用心深い態度を取り、即時決行說に對して或る懷疑をさへ持つたのは、實に我黨の軍事部の人々であつた。彼等は其の專門的の立場からして、一揆の純器械的方面を過大視したのであつた。其の方面に

於いては、實際我々は貧弱であつた。…………………………………………。彼等が直ちに起つて我黨の旗幟の下に戰ふ其の精神に在つた。『レーニン等も矢張り其の……………………に信頼しきつてゐた。だから（前のカメネフの談話にある通り）彼等は冬宮の攻撃を餘所にして、落ちつきはらつて新政府の組織を研究してゐたのであつた。つまり此の革命は、軍事方面に於いては、讀んでゐても張合のないほど詰らないものだつた、然し其の詰らないだけ犧牲が少なくて濟んだ〃だ。其の夜、ペトログラード・ソヴイエットの臨時大會に於ける決議文の劈頭には斯う書いてある。『……………………………………………………、……………………………………、……………、……………………………、……………………、…………………………、…………………………………………、………………………………………………。』

（十一月七日）

四

アメリカの新聞記者として有名なジョン・リードは、『世界を震撼した十日間』と題して、此の革命の印象記を書いてゐる。こゝには又その前の話にも其の中から借用した所が澤山ある。其の中から、七日の光景をあちこち摘録する。

× × × × × ×

十一月七日、水曜日、私は非常に晩[illegible]大道を降つてゐると、正午のドンがペーテル・ポールから響いて來た。隨分寒い日であつた。中央國立銀行の前まで來ると、數人の兵士が銃を組んで、閉めきつた門の前に立つてゐた。

『君達はどちら側に屬してゐるのか。政府側か』と私は聞いた。

『モウ政府なんてありやしない。神は讃むべきかな！』と一人の兵士が笑みを含んで答へた。

× × × × × × ×

冬宮の門前に兵士と水夫の一群がゐた。一人の水夫は假議會の終末の話をしてゐた。『俺達はあそこに（假議會の會場マリー宮殿に）はいつて行つた。そして總てのドアーに我々が張番した、俺は議長の席に坐つてゐた反革命の野郎の處に押しかけて行つた。そして云つてやつた。『オイもう議會は無くなつたよ。サア早く歸れ歸れ。』

（假議會は其の時もまだ左右兩派に別れて、あちこちの砲聲を聞きながら討論を續けてゐた。議長席にはアヴクセンチエフが坐つてゐた。そして實際、其の時にはモウ議會は無くなつてゐたのであつた。）

× × × × × ×

ケレンスキーの部屋の前に、一人の若い[illegible]

ら行つたり來たりしてゐた。我々は總理大臣に會見を求めた。士官は立ちどまつてフランス語で答へた。『アレキサンデル・フエドルキツチは今非常に御多忙です。……』彼は暫らく我々の顔を見つめてゐたが、『實は居ないのです。』

『何處に居るのです。』

『戰線に行つたのです。所がね、自動車のガソリンが足りないで、實は英吉利病院で少しばかり借りて來たのです。』

『外の大臣達は？』

『どこかの部屋に集まつてゐるでせう。僕は知らない。』

『ボリシエキキはやつて來るんですか。』

『勿論、來る。今にも電話が掛かるかと待つてゐる所です。……』

×　×　×　×　×　×　×

先を爭ふ人波に浚はれて、我々は（冬宮の）右手の入口から大きな、廣い、天井の高い一室に押しこまれた。そこには大きな箱が幾つも轉がつてゐて、赤衞隊や兵士等が烈しい勢でそれに襲ひかゝり、鐵砲の臺尻で其の蓋を叩きこわし、敷物だの窓掛だの、陶器だの、硝子器だの、種々雜多な物を引きずりだした。或者は靑銅製の鷄を自分の肩に乘せて歩いてゐた。或者は駝鳥の羽を取つて自分の帽子にさしてゐた。斯樣にして掠奪は始まりかけた所に、『コムレード！同志よ！こゝの物を取つてはいけない！之は人民の財産だ！』といふ誰かの叫び聲が聞えた。續いて幾つも幾つもの聲が叫んだ。『返せ、返せ！』『一物も取るな！』『人民の財産だ！人民の財産だ！』それから直ぐに總ての箱が元の通りに形づけられて、自選の番兵が其の側に突つ立つた。之は全く自然的の行動であつた。『革命の紀律！』『人民の財産！』などいふ聲が猶ほ暫らく廊下や梯子段から聞えてゐた。

我々は左の入口の方に廻つて行つた。そこでも今、秩序が立てられつゝあつた。『サア皆な出た〳〵』と、一人の赤衞兵が內側の戶を覗きこんで云つた。『タワリーシユ！（同志よ！）我々が泥棒や追剝でない事を示してやらうぢやないか。サア、番兵の出來るまで、コミサール（委員）の外は皆な出た〳〵。』

二人の赤衞兵（一人は士官、一人は兵卒）が、手にピストルを持つて立つてゐた。今一人の兵士は其の後ろにテーブルを控へて、ペンと紙を持つて腰かけてゐた。『皆な出た〳〵』といふ叫びが、遠く或は近く、奥の方から聞えて、兵隊が押しあひへしあひ戶の中から出はじめた。自選の檢査委員は其の一人づゝを捕へて、ポケツトや上着の內側を捜索した。本人の所有品でないと認めた物は皆な取りあげて、テーブルの兵士がそれを紙に書きつけた。取りあげた品は次の小さな室に運ばれた。斯樣に

於いては、實際我々は貧弱であつた。…………………………。彼等が直ちに起つて我黨の旗幟の下に馳ふ其の精神に在つた。『レーニン等も矢張り其の…………に信頼しきつてゐた。だから(前のカメネフの談話にある通り)、彼等は冬宮の攻撃を餘所にして、落ちつきはらつて新政府の組織を研究してゐたのであつた。つまり此の革命は、軍事方面に於いては、讀んでゐても張合のないほど詰らないものだつた、然し其の詰らないだけ犠牲が少なくて濟んだ〃だ。其の夜、ペトログラード・ソヴイエツトの臨時大會に於ける決議文の劈頭には斯う書いてある。『…………

一十一月七日一

……………、……………、……、…………、……、……………。』

四

アメリカの新聞記者として有名なジョン・リードは、『世界を震撼した十日間』と題して、此の革命の印象記を書いてゐる。前の話にも其の中から借用した所が澤山ある。こゝには又その中から、七日の光景をあちこち摘錄する。

× × × × × ×

十一月七日、水曜日、私は非常に晩く起きた。ネヴ…大通を降つてゐると、正午のドンがペーテル・ポールから響いて來た。隨分寒い日であつた。中央國立銀行の前まで來ると、數人の兵士が銃を組んで、閉めきつた門の前に立つてゐた。『君達はどちら側に屬してゐるのか。政府側か』と私は聞いた『モウ政府なんてありやしない。神は讃むべきかな!』と一人の兵士が笑みを含んで答へた。

× × × × × ×

冬宮の門前に兵士と水夫の一群がゐた。一人の水夫は假議會の終末の話をしてゐた。『俺達はあそこに(假議會の會場マリー宮殿に)はいつて行つた。そして總てのドアーに我々が張番した。俺は議長の席に坐つてゐた反革命の野郎の處に押しかけて行つた。そして云つてやつた。『オイもう議會は無くなつたよ。サア早く歸れ歸れ。』

(假議會は其の時もまだ左右兩派に別れて、あちこちの砲擊を聞きながら討論を續けてゐた。議長席にはアヴクセンチエフが坐つてゐた。そして實際、此の時にはモウ議會は無くなつてゐたのであつた。)

× × × × × ×

ケレンスキーの部屋の前に、一人の若い士官が新聞を讀みながら

ら行つたり來たりしてゐた。我々は總理大臣に會見を求めた。士官は立ちどまつてフランス語で答へた。『アレキサンデル・フエドルキッチは今非常に御多忙です。……』彼は暫らく我々の顔を見つめてゐたが、『實は居ないのです。』

『何處に居るのです。』

『戰線に行つたのです。所がね、自動車のガソリンが足りないで、實は英吉利病院で少しばかり借りて來たのです。』

『外の大臣達は？』

『どこかの部屋に集まつてゐるでせう。僕は知らない。』

『ボリシエヰキはやつて來るんですか。』

『勿論、來る。今にも電話が掛かるかと待つてゐる所です。……』

× × × × × × ×

先を爭ふ人波に淺はれて、我々は（冬宮の）右手の入口から大きな、廣い、天井の高い一室に押しこまれた。そこには大きな箱が幾つも轉がつてゐて、赤衞隊や兵士等が烈しい勢でそれに襲ひかゝり、鐵砲の臺尻で其の蓋を叩きこわし、敷物だの窓掛だの、陶器だの、硝子器だの、種々雜多な物を引きずりだした。或者は青銅製の鷄を自分の肩に乘せて歩いてゐた。或者は駝鳥の羽を取つて自分の帽子にさしてゐた。斯樣にして掠奪は始まりかけた所に、『コムレード！同志よ！こゝの物を取つてはいけない！之は人民の財産だ！』といふ誰かの叫び聲が聞えた。續いて幾つも幾つもの聲が叫んだ。『返せ、返せ！』『一物も取るな！』『人民の財産だ！人民の財産だ！』それから直ぐに總ての箱が元の通りに形づけられて、自選の番兵が其の側に突つ立つた。之は全く自然的の行動であつた。『革命の紀律！』『人民の財産！』などいふ聲が猶ほ暫らく廊下や梯子段から聞えてゐた。

我々は左の入口の方に廻つて行つた。そこでも今、秩序が立てられつゝあつた。『サア皆な出た〱』と、一人の赤衞兵が內側の戶を覗きこんで云つた。『タワリーシュ！（同志よ！）我々が泥棒や追剝でない事を示してやらうぢやないか。サア、番兵の出來るまで、コミサール（委員）の外は皆な出た〱。』

二人の赤衞兵（一人は士官、一人は兵卒）が、手にピストルを持つて立つてゐた。今一人の兵士は其の後ろにテーブルを控へて、ペンと紙を持つて腰かけてゐた。『皆な出た〱』といふ叫びが、遠く或は近く、奥の方から聞えて、兵隊が押しあひへしあひ戶の中から出はじめた。自選の檢査委員は其の一人づゝを捕へて、ポケットや上着の內側を捜索した。本人の所有品でないと認めた物は皆な取りあげて、テーブルの兵士がそれを紙に書きつけた。取りあげた品は次の小さな室に運ばれた。斯樣に

して、小石像、インキ壺、皇室の組合せ文字の刺繍された寢床掛、燭臺、小さい油囊、吸取器、金の柄のついた劍、石鹸、色々の着物、ブランケットなど、種々樣々の品物が沒收された。或る赤衞兵は三挺の銃を持つてゐたが、其の二つはユンケル(士官候補生)から奪つたのであつた。又今一人は書類の一杯はいつた折カバンを四つかゝえてゐた。犯人等は怨めしそうに品物を差出すか、或は子供のようにそれをネダつてゐた。檢査委員は忽ち言葉を發して、一體、物を盜むなどゝいふ事は、人民のチャンピオンたる者にふさわしからぬ事だと說明した。すると今取りあげられた連中が、今度は直ぐに向き直つて、跡から來る連中の搜索をやつたりしてゐた。

——(十一月七日)——

ユンケルが三四人づゝ群になつて出て來た。檢査委員は躍起となつてそれを捕へ、『ヤイ煽動者!コルニロフイスト!反革命者!人民の虐殺者!』などゝいふ罵聲を浴せつゝ、搜索を行つた。ユンケル等は恐怖してゐたが、別に暴行は加へられなかつた。彼等もポッケットの中に小さい掠奪物を一ぱい詰めこんでゐた。それらは一々書きとめられて、小さい部屋に運ばれた。……彼等は武裝も解かれた。『サア、貴樣等は人民に向つて再び武器を取るか』と、烈しい聲が問ひつめた。『ノー。』ユンケル等は一人々々に答へた。それで彼等は釋放された。

× × × × × ×

『タヴリーシユ!道をあけた!道をあけた!』一人の兵士と赤衞兵とが、群集を押し分けながら戶の中から現はれた。劍つき銃を持つた他の數人の衞兵も續いて現はれた。其あとから文官服の六七人が一群れになつて現はれた。それは卽ち假政府の內閣員であつた。第一にキシユキンが悄げた靑い顏をしてやつて來た。次にルーテンベルグは、怨しそうに床を見つめてゐた。次にレテスチエンコは、ギヨロ〳〵とあたりを見まわしてゐた彼は落ちつきはらつて我々を見つめた。……彼等は無言のまゝで通過した。勝ちほこつた叛亂者等は其の周圍に群がつた。然し怒聲を發する者は極少數であつた。後に聞けば、人民は彼等に死刑を加へようとして、街上で發砲した。けれども水兵等は無事に彼等をペーテル・ポールに送りつけた

× × × × ×

我々は二階にあがつて、室から室へと步きまわつた。……靑と赤と金との制服を着た、昔しの宮仕への下部が、ぴく〳〵してそこに立つてゐた。彼は今でも習慣の惰力で、『パアリン!(御禁止です!)これから先は御禁止です』と繰返してゐた。我々は遂に、深紅の錦の窓掛のある、黄金と孔雀との室に進

入した。そこは即ち大臣等が、終日終夜、集會してゐた處である。綠色の羅紗で蔽はれた長いテーヴルには、大臣等が捕へられて行つた時の其の儘になつてゐた。各個の空席の前には、ペンとインキと紙とがあつた。其の紙には、戰略の圖案や宣言の文案などが書きつけられてあつた。それらの多くは、其の無効が立證されたので、皆な滅茶々々に消されてあつた。そして殘りの紙には、色々の幾何學的構圖が無駄書きされてあつた。思ふに、其の筆蹟等は、他の諸大臣が次から次へと、夢のような計畫を提案する時、意氣沮喪してそれを聞いてゐたのであらう。私は其の一枚を取りあげて見ると、それはコノヴアロフの筆跡で、『假政府は、總ての階級に訴へて此の假政府を支持せんことを……』と書いてあつた。

× × × × × × ×

然るに此の時、冬宮は包圍されて居たけれども、政府は猶ほ絕えず戰線及び地方と通信を保つてゐた事を我々は記憶すべきである。ボリシエヰキはその朝早く、軍事省を占領したけれども、そこの屋根裏に軍事電信のある事も知らず、又それと冬宮とを聯結してゐる秘密電話線のある事を知らなかつた。所が、その屋根裏に、一人の若い士官が終日殘つてゐて、政府の發する種々の訴文や宣言を全國各地に向つて續々と發電してゐた。そしていよ〳〵冬宮が陷つたと聞くと、彼は帽子をかぶつて悠々と其の建物から出て行つた。

五

今度は七日の夜に於ける、全露ソヴイエツト大會の様子を少し委しく聞いて見る。同じくジヨン・リードの本からあちこち抄録する。たまにはトロツキーの『ロシヤ革命の歷史』からも借用する。

ワイ〳〵云つて居る群集を押しわけて大集會場の中にはいると、白い枝型の電燈が天井や兩側の壁や演壇の隅などに輝いてゐる其の下に、ロシヤ全國の勞働者と兵士の代表者が、熱望の沈默、或は狂亂の歡聲の中に、議長のベルの鳴るのを待つてゐた。室内には暖爐もスチームもないが、汚れた人間の體の熱が蒸々してゐた。煙草の煙がきたない雲のやうに群集の間から舞ひ上つて、鬱積した空氣中の中にたゞよつてゐた。折々、世話役の人が演壇に登つて、同志諸君に煙草を吸はないやうに賴むと、すると皆が、吸つてる人も吸はない人も『タワリーシユ！禁煙々々』と呼びながら、それで矢張り盛んに吸つてゐた。オブコフエ工場の代議員で無政府主義者のペトロウスキーが、自分のそばへ私の席を拵へてくれた。彼は髭だらけ垢だらけで、軍事革命委員會に於ける三日三晩の働きつゞけの爲、フラフラ

するほど疲れてゐた。

プラットフオーム（演壇）には、元の『ツエー・エー・カー』（中央執行委員）の諸首領が着席してゐた。……其の中、最大の三人物は居なかつた。即ちケレンスキーは人目を忍んで戰線に走つてゐた。チユヘゼは鬱々として故郷のジョージヤの山中に其の肺病を養つてゐた。そしてツエレテリーは、これも致命的の打撃を痛感しながら、それでも今一度引返して其の雄辯を試みる元氣は持つてゐた。ゴッツ、ダン、リーベル、ボグダノフ、ブロイド、フイリボウスキー、それらは皆な血の氣のない顏に、憤怒の氣を示してゐた。

時は十時四十分であつた。おとなしい顏の、禿げ頭のダン（メンシエヰキの首領）が、クチヤ〳〵になつた軍醫の制服を着て、議長のベルを鳴らしてゐた。

『我々は今、我々の手の中に權力を握つてゐる。……多言する必要はない。……自分は中央執行委員の一人である。……自分の同僚は今、冬宮に於いて砲撃を蒙りつゝ我々の彼等に附與した其の任務を果してゐる。……（喧囂怒罵。）

『こゝに全露勞農ソヴイエット第二大會の第一日を宣言する。』

それから幹部の選擧があつた。ボリシエヰキと左翼社會革命黨とインタナショナリスト（ゴルキイ一派）との協定て、ボリエヰキ十四人、社會革命黨七人、メンシエヰキ三人、インタナショナリスト一人といふ比例が立てられた。所が、社會革命黨の右黨と中央派は參加を拒絶し、メンシエヰキも同じく拒絶しインタナショナリストも躊躇した。次いで怒罵と混亂との間に舊ツエー・エー・カーは壇を下り、それに代つて、トロツキー、カメネフ、ルナチヤルスキー、マダム・コロンタイ、ノギン其他が壇上に登つた。滿堂が破れるばかりにどよめいた。そしてカメネフが議長の席に着いた。

間もなく冬宮附近の銃聲が聞えだした。ペーテル・ボールからの砲聲もドシン・ドシンと響いて來た。群集は氣迷はしげに皆な窓の方を見やつた。一種の昂奮が滿場を襲つた。メンシエヰキ左翼のマルトフは憤然として壇に登つた。『諸君、内亂は既に始まつてゐる。此の危急を平和に解決するのが目下第一の急務である。』彼は、此の大會の開會前に於いて、一派の者が暴動に依つて權力を占めようとしてゐる事を極力非難し、此の際、全デモクラシーの承認する新權力を樹立する爲、社會主義の諸黨派諸團體に對して交渉すべく、大會の代表者を選擧しようと提案した。

大尉の肩章をつけたカラシユ、長い鳶色の山羊服を着た士官

のキンチュクなどは、軍隊の代表として盛んにボリシエヰキ派に對する攻撃を向けた。そして結局、キンチュクは、今日に於ける平和の解決の唯一の道は、假政府と談判して新内閣を作るに在ると主張し、メンシエヰキ派の宣言を高聲に朗讀した。

彼れの降壇と引きちがひに、一人の若い兵卒が目から焔を燃やしながら演壇に飛びあがつた。『タワリーシユー！俺の名はペーテルソンと云ふ。諸君は今、二人の軍隊代表者の意見を聞いた然し奴等は兵卒の代表ではない。』ペテルソンは、拳骨を振りちらしながら更に云つた。『俺達は疾つくにから皆んなソウ云つてる。決議なんぞ入らない。議論なんぞ入らない。只だ實行あるのみだ。…………………………あの腐せ物の軍隊代表を此の大會から追ひ出してしまへ！』

群集は歡呼した。之が本當の兵隊の聲だ。先程から稍や不安を抱き、躊躇を感じてゐた群集は、此の兵卒の目の光りは眞實を看取した。

次いでユデヤ社會民主黨（謂ゆるブンド派）のアブラモヰツチが立つた。彼は憤怒に震へながら語つた。『今ペトログラードに起つてゐる此の有様は、實に驚くべき大危難である。我々は此の大會を脱退する。我々は此の罪惡の責任を負はない。ペトログラードの市會は今、メンシエヰキと、社會革命黨と、農民ソヴイエツトの執行委員と共に、假政府の爲に死ぬる事を決定した。我々は彼等に與する。我々は此の暴力派の機關銃の前に、我々の此の胸を曝らしてやる。』

斯くて大喧囂、大混亂の間に、五十名の代議員が退席した。議長カメネフはベルを鳴らして叫んだ。『靜かに、靜かに。我々は議事を進める。』

すると、今度はトロツキーが、青ざめた酷薄な顏で立ちあがり、冷かな輕侮を浴せて斯う云つた。『彼等、謂ゆる妥協的社會主義者。彼等メンシエヰキ、社會革命黨、ブンド派。恐怖した彼等をして去らしめよ。彼等は歴史のゴミ溜に放りこまるべきゴミに過ぎない。』（リード）

× × × × ×

冬宮の占領が暇どるので、大會中の稍や弱い分子は幾分不安を起してゐた。右翼の連中は頻りに我々の失敗を豫言してゐた。總てが冬宮の消息を待ちあこがれてゐた。

斯くすると、冬宮攻撃の指揮者たるアントノフがやつて來た忽ちにして滿場が死の如く沈默した。冬宮は占領された。ケレンスキーは脱走した。他の諸大臣は捕縛されてペーテル・ポールに送られた。十一月革命の第一章が終りを告げた。

右翼社會革命黨及びメンシエヰキの約六十名、即ち大會の約

十分の一が抗議を提出して退場した。彼等は何事をも爲し得ないので、只だ全責任をボリシェヰキと左翼社會革命黨とに投げかけた。』（トロツキー）

× × × × × × ×

我々が（二度目に）大會の會場にはいつた時、カメネフは捕縛した諸大臣の名を讀みあげてゐた。テレスチエンコの名は雷の如き喝采と、滿足の叫びと、大笑ひとで迎へられた。ルーテンベルグもそれに負けぬ歡迎を受けた。次に總督パルチンスキーの名が出ると、大叫喚と、怒罵と喝采とが一時に爆發した。すると突然、髭むちやの大きな百姓男が演壇に飛びだして、幹部のテーブルに向つて拳こつを突出しながら、怒鳴り立てた。彼は社會革命黨として、冬宮で捕縛された社會主義諸大臣の釋放を要求するのであつた。

トロツキーは手を振つて場内の混雜を制しながら云つた。『ケレンスキーを助けてソヴイエツトの破壞を企てた彼等に對して何を假借するの理由があるか。七月以後、彼等は我々に對して餘り遠慮はしなかつたではないか。』トロツキーは更に得意の聲音を高めて云つた。『臆病な妥協者は既に去つた。…………………………。此の際、特に必要なものは、只だ活動である。活動である。我々は負けるよりは寧ろ死ぬる事を擇ぶ！。』

マルトフ派のカペリンスキーは、更に『内亂に對する平和の解決を見出だすべき特別委員の選擧』を提案した。『平和の解決といふものがあるか！』『戰爭の勝利が唯一の解決だ！』提案は大多數で否決された。マルトフ派も遂に嘲笑の罵聲を浴びながら退席した。

大會は總ての退席者を無視して、『勞働者、兵士、及び農民に訴ふ』の決議文を通過させた。

午前五時十七分、クリレンコは連日の疲勞にヨロつきながら演壇に上り、一通の電報を讀みあげた。『タワリーシユ！。北部戰線より。第十二師團はソヴイエツト大會を歡迎し、軍事革命委員の設立と、及びそれが北部戰線の指揮權を握つた事とを報告する。』忽ちにして歡喜の大混亂が場内に生じた。相抱いて泣く者もあつた。

六

七日の夜、ネヴスキの大通りで面白い一つの光景があつた。丁度エカテリナ運河の角の處で、四列になつて進行して來る一群の人々を、一隊の水兵が遮りとめてゐた。群集は約三四百人で、フロツクコートを着た人、美裝した婦人、陸軍士官など、種々の種類から成立つてゐた。其の中にはソヴイエツト大會を

退席した代議員（メンシエヰキ及び社會革命黨の首領達）も澤山ゐた。髯の赤い痩せた男のアヴクセンチエフ、ケレンスキーの代辯者たるサロキン、それからキンチユク、アブラモヰチなどの顏も見えた。最先にはペトログラードの市長なる白髯のシエライゼルと、假政府の糧食大臣（その朝一度捕へられて、後ち釋放された）プロコポヰツチとが立つてゐた。

彼等は『冬宮に死にに行く』と呼んでゐた。水兵は『一人たりとも冬宮には斷じて入れない』と頑張つた。『然らば其の鐵砲で我々の此の胸を擊て！。』水兵もさすがに躊躇した。『擊てないなら通せ！サア通せ！サア通せ！。』『ヨシ、強いて通ると云ふなら射殺する。サアもう歸つて呉れ、歸つて呉れ。』

群集は憤慨した。怒號した。プロコポヰツチは道ばたの箱の上に飛びあがつて、蝙蝠傘を振りながら演說した。『彼等は暴力を揮つてゐる！。我々は此の無智な人々の手に、我々の無辜の血を流すに忍びない。我々は寧ろ市會に歸つて、此の革命を救濟する最善の方法を講じよう。』

群集は又四列になつて、沈默の中にネヴスキーを登り、市會に歸つて行つた。市會はそれからボリシエヰキ反對の策源地になつた。

八日の朝、市街電車は矢張り運轉してゐた。商店も開かれてゐた。レストランも開かれてゐた。劇場も常の通りであつた。絵畫展覽會の廣告さへあつた。

然し市中一般、ケレンスキーが今にも大軍を率ゐて押寄せて來るといふ噂で持切りであつた。新聞紙と張紙とは、ボリシエヰキと反ボリシエヰキと、兩方面からの盛んな宣傳に充ちてゐた。

午後宏大なニコライ會堂に市會が開かれた。髮も髭も眞白な老市長シユライデルが、悲壯な態度で演說した。『ヂユマ（市會）は今、ペトログラードに於ける唯一の現存の合法的政府である我々は暴力の政府を承認しない。』すると、ボリシエヰキの議員等は『我々はこんな反革命の巢に止まる事を拒絕する。我々は市會の再選を要求する』と呼んで退場した。場内からは『獨逸の手先！』『反逆者を倒せ！』といふ罵聲が退場者の上に浴せられた。

別にアキレサンデル館では『革命救濟委員』の會合が開かれ、前社會主義大臣スコベレフが演說してゐた。『ロシヤ國家の存在が今日ほど脅かされた事は未だ曾て無い。』『我々は此の地步を讓るよりは寧ろ死を擇ぶ者である！。』そして鐵道從業員、郵便電信從業員等が皆それに加擔した。『ボリシエヰキが我々インテリゲンチヤ（組織階級）を指揮しようとする。今に見ろ！』と、

彼等は憤慨した。つまり政府の役人等は悉くサボタージユをやるのであつた。

此の會合と、ソヴイエツト大會とは、實に顯著なコントラストを成してゐた。あちらでは、貧相な兵卒、薄汚ない勞働者、百姓、貧乏人、總て慘憺たる生存競爭の傷痕を持つた人間ばかり。こちらでは、アヴクセンチエフ、ダン、リーベルなどのメンシエキキ及び社會革命黨首領、スコベレフチエルノフなどの前社會主義大臣、それにカデツトや、新聞記者や、學生や有らゆる種類の智識階級。つまり總てが善食善衣の人で、プロレタリヤは三人以上見つからなかつた。

× × × × ×

――（十一月七日）――

ソヴイエツト大會の第二回は午後一時に開かれる筈であつた會場はもう疾くにから一杯になつてゐた。それで七時になつてまだ幹部が着席しなかつた。ボリシエキキと左翼社會革命黨とは、各自の部室で會議を開いてゐた。其の日の晝から晩、レーニンとトロツキーは妥協に對する論鬪をやりつゞけてゐた。ボリシエキキの中でも、社會主義の聯合政府を作る事に讓歩しかけた者が、可なりの多數になつてゐた。『迚もこれでは遣りきれない。』『餘り敵が多過ぎる。』『我々は今に孤立に陷つて、萬事休する事になる。』カメネフ、リヤザノフ等の說がそれであつた

然るにレーニンは、傍らにトロツキーを控へて、岩の如く確立してゐた。『妥協者をして我々のプログラムを承認せしめよ。そうすれば仲間に入れてやる。我々の方では一インチも讓歩しない。若し我が同志の中、我々の敢てする所を敢てするだけの勇氣と意志とを缺く者があるならば、それは宜しく他の臆病者及び和解好と共に離れ去るべきである。勞働者と兵士とに擁護される以上我々は飽くまで前進すべきである。』

× × × × ×

私は或るアナキストの新聞記者に誘はれて、暫らく館内を歩きまわつた。廣いスモルニーの建物の中を、部屋から部屋へと覗きあるいた。ツエー・エー・カーの部屋には誰もゐなかつた。ペトログラード・ソヴイエツトの部屋も同じであつた。道々彼は私に話した。ボリシエキキは粗野な、無智な、美的感受性のない、俗人であると。彼は如何にも標本的な、ロシヤのインテリゲンチヤであつた。我々は遂に第十七室、軍事革命委員の部屋に來た。出入の頻繁な其の戸の外に立つてゐると、フト一人の背のくゞまつた、顏の平たい、徽章のない軍服を着た男が目についた。其の顏は笑つてゐるように見えたが、實は、極度の疲勞から生じた唇の緩みであつた。それはクリレンコであつた。

私の連れた遺憾たる青年であつたが、クリレンコを見つけ

と、忽ち喜びの叫びを發してツカ〳〵と近寄つた。

『ニコライ・ワシリキッチ！』彼は手を差出した『君は僕を覺えてますか。一緒に監獄に居た事がある。』

クリレンコは考へこんで、マジ〳〵と彼れの顔を見た。『オーそうだ！』クリレンコは非常に懷かしそうな態度で、彼を見あげ見おろしながら云つた。『君はS君だつたね。隨分しばらくだつた。』二人はキッスした。

『君は一體こゝで何をしてた？』『ナーニ、見物してたのさ。君達は大成功だね。』『そうだ、…………………。』『クリレンコは笑ひながら言ひ添へた。『だけど、だけど、——今に又監獄で會ふかも知れんよ。』

私の連れはクロポトキンの學徒であつた。彼に云はせると、此の革命は大失敗であつた。此の革命は民衆の愛國心を喚起してゐなかつた。勿論それは、人民の革命に對する用意が足りなかつた事を立證するものであつた。

×　×　×　×　×

八時四十分、雷のような拍手の響きが幹部の出席を知らせたレーニン——大レーニンも其の中にをつた。丈の低いズングリした體格で、大きな頭が肩の上にシッカリと据わり、額は禿げ、胴は丸々とふくらんでゐる。小さい目、平べつたい鼻、廣い大きな口、タップリした顎、いつもは短かい髭が一面にのびだしてゐるが、今日は綺麗に剃つてゐる。上衣は皺くちやで、ズボンは少し長すぎる。歴史上に比較のないほど敬愛される、モッブの偶像としては、如何にも非印象的である。單純に理智の力を以つて民衆を指導する、一種不思議な指導者である。色彩もなく、愛嬌もなく、非妥協的で、分離的で、少しも鑑賞的な特點特質がない。只、深遠な思想を單純な言葉で說明し、具體的の形勢を明晰に分解する力がある。そして彼の才氣に兼ねて最大な智力的剛太さを持つてゐる。

先づカメネフが軍事革命委員會の行動を報告した。軍隊に於ける死刑の廢止、宣傳の自由、權利の復舊、政治犯を以て捕縛された士官及び兵士の釋放、ケレンスキー捕縛の命令、及び私有倉庫に於ける食糧の沒收。……大喝采。

それから反對諸黨派の殘黨から微弱な氣焰が少しばかり擧げられた後、いよ〳〵レーニンが立ちあがつた。彼は演壇の端をつかんで、其の小さい目をしばたたきながら、ズット一わたり群集を見まわし、拍子のやむのを待つてゐた。漸く群集が靜まると、彼は飾りげもなく斯う云つた。『我々は之から社會主義制度の建設に向つて進むのである。』大喝采、大拍手が更に滿場に漲り起つた。

彼は第一に無併合、無賠償、及び人民自決權を基礎とする講和を説き、秘約條約の公開と破棄とを說き、續いて交戰各國の人民に告げる宣傳案を朗讀した。

彼が大きな口を開いて語る時には、恰も笑ふように見える。彼れの聲は嗄がれてゐるが、不愉快ではない。多年の演說の結果として、そういふ風に堅まつたものと聞かれる。話し方は單調だが、その代りいつまでも續く。力を籠める時には只だ少し前に俯向く。身振は少しもない。それで一千の素朴な顏が切實な崇敬を以て彼を見あげてゐる。

レーニンは結末に於いて斯う云つた。『十一月六七日の革命は實に社會革命の時代を開いた。……我が勞働運動は、平和と社會主義との名に於いて勝利を占め、能く其の運命を成就するであらう。』是等の言葉の中に、どこか知らん落ちついた力强い所があつて、それが人の心を動かすのであつた。

それから各派各團體の代表が、入れ代り入れ代り、十五分間づゝの演說をやつた後、十時三十五分、カメネフが採決すると滿場一致で可決した。只一人、反對の手を擧げかけた者があつたが、周圍の人々に怒鳴りつけられて、コソ〳〵と引込めた。

其の時、自然の共通の衝動から、皆が起立して『インテルナショナール』を合唱した。一人の白髮の老兵士は子供のように啜り泣をしてゐた。壇上のアレキサンドラ・コ
うしろに拭ひすてた。『戰爭がやんだ！戰爭がやんだ！』と、一人の若い勞働者は嬉しそうな顏をして、私の直ぐそばで叫んでゐた。すると誰かゞ後ろの方から、『タワリーシュ！自由の爲に死んだ人々を、今こゝで紀念しようぢやないか！』そこで今度は『弔ひの曲』が歌はれた。その緩やかな、物悲しい、それでゐて勝ちほこるような調子のある所が、如何にもロシヤ人の特質であつた。思へば數千人、數萬人が、牢獄に、追放に、シベリヤの鑛山に、死んだのであつた。革命は彼等が期待した通りに來なかつた。インテリゲンチヤが望んだ通りに來なかつた。けれども、それは遂に來た。粗野な、剛健な、性急な、現實的な形式を以て、センチメンタリズムを踏みにじつて來た。

× × × × ×

次にレーニンは土地法案を讀みあげた。其の第一條に曰く、『總ての土地私有は無賠償を以て即時廢止せらる。』

（其の時、農民議員の中から、前大臣サラズキン及マズロフを釋放する要求が提出された。トロツキーは起立して、軍事革命委員が、昨日既に、マズロフ、サラズキン、グヴオズドフ、マリアントキツチの四人を釋放する事を決定した旨を報告
た。）

「それから一時休憩の後、午後二時、土地法が農民議員大歡呼の中に可決された。

午後二時三十分、カメネフが憲法案を朗讀した。『憲法議會の開會まで、勞農假政府を組織し、それを『人民委員會』と稱する。…………』

群集は沈默してゐたが、『人民委員』の姓名を讀みあげると、その一人毎に大喝采が起つた。レーニンとトロツキーとの時は殊にそれが盛んであつた。

委員會長　ウラジミール・ウリヤノフ(レーニン)
內務部　A・E・リコフ
農務部　V・P・ミリユーチン
勞働部　A・G・シエリアプニコフ
陸海軍本部　V・A・アヴセーンコ(アントノフ)、N・V・クリレンコ、F・M・ヂベンコ
商工部　V・P・ノギン
教育部　A・V・ルナチャルスキー
財務部　E・E・スクヴオルツオフ(ステパノフ)
外務部　L・D・ブロンスタイン(トロツキー)
司法部　G・E・オツポコフ(ロモフ)
供給部　E・A・テオドロトヴイッチ
郵電部　N・P・アヴイロヴ(グリーボフ)
民族部　I・V・ジエウガシユヴイリ(スタリン)
鐵道部　追つて定める

(此の顔觸は勿論すべてボリシエヰキであつた。隨分大膽な押しの强い、圖太い遣方に相違なかつた。現にトロツキー自身が斯う云つてゐる。『我黨の中央委員は左翼社會黨との提携に努力した。彼等はソヴイエツト政府の組織に參加すべく勸誘された。けれども彼等は不決斷であつた。……我々は遂に一切の責任を自分等の肩に負ふべきだと考へた。從つて、人民委員の名簿はボリシエヰキばかりから作成された。之は疑ひもなく、幾分の政治的危險であつた。實際變化が餘りに急激であつた。考へて見れば、ボリシエヰキの首領等は、…………、…………………………、………………………………、けれども我々として、此の際それより外に仕方がなかつた。』)

七

所が、まだ二つの有力な反對演説者が現はれた。一つはゴルキーの『新生命』の記者アヴイロフ、彼は此の場所に不似合な、氣の利いたフロツクコートを着た、聰明な顔付の青年であつた。『假政府が倒れたのは左翼デモクラシーの力ではない。只、彼等が平和とパンとを人民に與へ得なかつたからである。』『然るに諸君は共パンを人民は與へ得るか。穀物は缺乏してゐる。農民の多數は諸君に味方せぬであらう。諸君は彼等に農具を與へ

得ないではないか。薪炭その他の日用品を得る事は、目下殆んど不可能ではないか。』『平和は一層困難である。聯合諸國は諸君の提議を受けつけぬであらう。諸君はロンドン、パリ、若しくばベルリンに於いて承認されぬであらう。』『我等は今聞いた聯合國の諸大使は引揚げつゝある。「革命救濟委員會」は全國の到る處に組織されつゝある。』『如何なる一黨派も是等の大困難を征服する事は出來ない。社會主義聯合政府を支持する、人民の大多數のみが、よく此の革命を成就し得るものである。』

さしもの群集も、アヴイロフの此の冷靜な論理に動かされないわけに行かなかつた。初は盛んに妨害を試みたが、最後には多少の拍手すらあつた。

次はカレニン。これは最後までボリシエヰキと行動を共にした。左翼社會革命黨（有名な女丈夫、マリヤ・スピリドノヴアの一派）に屬する。勇敢な青年で、其の誠實は何人も疑ふ者がなかつた。彼は論じて曰く、『我黨はボリシエヰキを他のデモクラシー諸團體との仲介者を以て任じてゐる。それが目下に於ける我黨の主要な任務である。我々は社會主義聯合政府以外の、如何なる政府をも支持する事が出來ない。』『ペトログラード市會は既に諸君と戰ふべく、強大な「革命救濟委員會」を組織しつつある。諸君は既に孤立してゐる。』

そこでトロツキーが登壇した。彼は確信あ
に答へた。『我々の孤立を非難するのは今に始まつた事ではない一擧以前、殆んど總ての黨派が我々に反對してゐた。然るに我々が殆んど流血を見ずして政府を仆し得たのは何故であるか。事實が、我々の孤立してゐない事を、最も明白に證明してゐるではないか。彼等は聯合の必要を説く。然し此の際に於いて可能なる唯一の聯合は、即ち勞働者と兵士と最貧農民との聯合である。』『若し夫れ平和の問題については、こゝに只だ一つの道がある。ロシヤ革命が全歐洲に革命運動を作り出すか、それとも歐洲諸強國がロシヤ革命を亡ぼすかである。』

群集は之で再び革命に對する自信を得たものの如く喝采した

然しまた一つの敵が現はれた。それは鐵道從業員組合の代表であつた。彼は十分の敵意を含んで爆彈を議場に投げた。『ロシヤに於ける最も強大な勞働團體の名に於いて、予は發言を要求する。予は諸君に告げる。我々の執行委員は斷々乎としてボリシエヰキを支持する事を拒絶する。今日の中央權力たる者は、革命的デモクラシーの有らゆる正當の團體に對して責任を有する社會主義的、及び革命的權力であらねばならぬ。そういふ權力の確立するまで、鐵道從業員組合は、反革命軍隊をペトログラードに輸送する事を拒絶すると同時に、又組合本部の承認を經

ざる如何なる命令の執行をも禁止する者である。』

彼れの演說の最後は、殆んど聞取れないほどの喝采を蒙つた。然し實際、これは大打撃であつた。壇上の幹部連の顏にもアリアリとそれが讀まれてゐた。

然しそれにも係はらず、憲法案と、人民委員の指名とは、大々多數を以て可決された。次いで全露ソヴィエット大會のチエー・エー・カー（即ち中央執行委員會、即ち又、ロシヤ共和國の新議會）の選擧が行はれた。トロツキーが其の結果を讀みあげた。全員一百名、内ボリシエキキ七十名。農民及び脫退諸黨派に對しては、猶ほ他に空席が保留されてゐた。『我々は、我々のプログラムを採用する、有らゆる諸黨派を政府に歡迎する者である。』トロツキーは此の言葉を以て報告を終つた。

斯くて第二回全露ソヴィエット大會は解散された。そして議員等は、此の大事件の詳細を全露國の四隅にまで傳達すべく、それぞれの故郷に急いた。

（終）

春日小品

室生犀星

INGRES の土耳古風呂

何處からか一匹の白い滑らかな、伸びちぢみの自由な蛆のやうなむしが這ふて來て、壁ぎしをあるいてゐる。だいぶちいさんの蛆であるらしくのろのろと、疊の目を拾ふてゐる。からだに光澤といふものがないかはりに、柔らかさは大へん柔らかい。あるいてゐるのか這ふてゐるのか解らない。もとより音などあらう筈がない。

壁の上にはどういふはづみか INGRES の土耳古風呂の縮額がかかつてゐる。十八人の白裸の女體がさまざまな肢體で、ぼんやりみんな疲れたやうなうつとりした氣もちで、横に臥つたり香料を乳房に塗つたり、扭捏したり頭髮に二つの腕をかけたりしてゐる。そして一人はうしろ向きになつて樂器を弄つてゐる。ぱつちりと桃の實の割れたやうな背すぢの兩側から盛れあがつた線が、すウと下へ消え、さうして無くなつてゐる。左の方から光線がさしてゐるせいか、それらの女の肩さきを殊さらに白くあざやかに露はしてゐるのである。遠くでは殆どかさなり合つたやうにぐつたりした女らが臥そべつてゐる。が、一人だけ立つて左へ少こし首をかたむけ舞踏をしてゐる。鮎がタテに跳つた時の線が出てゐる。いつたいに恐ろしく享樂的な畫幅である。いつたいに INGRES はあまり好まない。が、どうしたのか一枚かかつてゐるのだ。

さて蛆はだんだん這ひのぼり、壁の上にくつきりと印されてゐる。しまひには繪の中へ這入りこんでしまふかも知れない。それほど彼は美しくなよなよとしてゐるからである。が、そのときふしぎに蛆のからだも繪の中の女も、いちどき

にさつと紅くそまつたやうに思はれた。さういふ紅い光線がこの部屋へ射してくるわけはないのに、おかしなことだと思へた。蛆のからだは紅みでうつくしくなつてゐる。――氣がつくと庭で子供のちやんちやんを干してある。風にゆすられると、紅さがひるがへつてうつるのらしかつた。

部屋のなかはすこし溫かくなりすぎてゐるくらいの、そよ風をはらんでゐる。蛆のからだもかういふ空氣のなかでは、溫室の花のやうに弱々しげではあるが、どうやら育ちやすいやうに見える。何を考へてゐるのか、それが人間にわかるやうな氣もちもするが、非常に隔離があるやうな心持ちにもなつて見えるのである。

INGRES は美しい。ふしぎなつらなりを此蛆のからだにもつてゐる。すくなくとも共白さと生々しさを考へさせるには、この除行しつつある蛆の肉體を關聯させるに充分である。それ故、この綸額から脫け出した或る種類の感覺であると考へることが、やや誇張的であるが、大した間ちがひのない感じにちがひない。ゆるゆると歩き、柔らかいからだを動かしつゝあるのは、弛いだけなほ美しいのである。

時計

暖爐であたためられた畫室には、ときどき鳩が羽ばたく、そのたびに、もでるの膚が鳩の籠の上に落ちた、そして陰影がからだぢゆうにすこしづゝ動くのである。わりあひに足のながいのをくの字に組み、美しいYの字がたに大腿が兩側からぴつたりとくツついてゐる。それは一つのもののやうに密着してゐる。あるかないかのうすい、Yの字がたの、それは線ではなく、陰影がしづかにはかれ、呼吸づいてゐる。はじめ紅みをもつてゐたのが、しばらくすると伐り立ての大理石のやうに冷却えてしまつた。

もでるはまだ若い。十九ぐらいである。かの女は立つたきり、腰つきをして、すつきりした姿勢をしてゐる。からだは光らない。くすんだ黄色と白色とで、いくらか曇つてゐて、感じは柔らかい或る重みを壓してゐる。暖爐でよごれた室內の重い空氣へ、くつきりと肢體をおしこんでゐるのだ。花ではない。軟らかい果實のやうである。

そこから數歩隔れたもでる臺の上で、男の老人が蹈んで、前足を抱えてゐるやうな恰構をしてゐる
く、胸腹から煙　のヤニのやうな六骨が洗濯板のやうに、ごりごり覗いてゐて、その一つづつが暗く陰をつくつてゐる。老人はすこしも動かない。永い間さういふ職業をしてゐるもののせいでもあらうが、すこしも亂れない姿勢をしてゐる。眠つてゐるやうに見える。背中の肉が堅パンのやうに硬い。そして荒粗な寂しげな風がすさんでゐる。時計がその臺の上に、ちやうど老人の手のかげに、蟻のやうな虫針をうごかしてゐる。冷たい金屬が肌のわるい色とくらべるとかなり鋭どい——そこに若い助手がヒラをねん土の上にうごかし影を趁ふてゐる。北窓ばかりで影は決して動かないが、ふしぎに予にはそれを趁ふてゐるやうに思へる。

老人は、すぐ目の前に、ふたつのたまごのやうに、まるい形をした女の背後があるのを、じつと押しだまつてあるのかないのか解らないやうに凝乎としてゐる。が、ときどき懶げな目で、水水しいからだをすつと見上げたりしてゐた。すウと立つた姿は、ずつと長く、ずつと伸びて見えるが、また、それが映らないこともあるらしかつた。

教授はこれも默つて、濕つた粘土の上へ、まるめた小さい土で肉づけをしてゐる。視覺から頭へとほりぬけた或る感覺が女の大腿と腹部へかけ、すこしづゝ圓みをふくしらかてゆく、一粒の土ではあるがぴつたりと女の肉づけを内側から寫生してゆくのである。影はあかるく、うすい紫の場合が多い、そして若い肉體であるため、影はあぶらのやうに溜つて澄んで、盛りこぼれるやうにたらたらしてゐる。それを靜平とおさへるために、あらゆる陰影のまはりにある圓い柔軟らかい肉の堆積は、みんな卵なりの連なりであると言つていい。それらは手腹足といふ順序で組み立てられ、ばらばらになつても美しさはそこなはれない。くの字にあご肘きをした腕がひぢへ曲がつたところで垂れたふやふやした肉の纖妙さは、實際、影さへもうごいて生きてゐるのだ。

そしてこの老人と若い女の肢體とが、相ことなつた二つの像形をこさへ上げられてゆく間に、比較されてくる暗さと明るさが、私の目を考へさせるのである。かれらの孰れも默つてゐるし、助手も教授も默つてゐる。ひとつはますます若くしなやかに冷えてしまつた大理石のなかで、呼吸を吹きかへさうとしてゐるし、一つは時のまざまざした衰れを寫

刻にきざまれてゆくからである。――かりに、この老人の、れいのもの憂げな目付がしばしば彼女の肢體にうつりはするが、何の、そして少しの感動もなくむしろ、つき返されるやうにすぐ板の間に伏せられてしまふのである。もでる特有のおどおどした目付には、むしろ寒げな卑しいつやをもつてゐる外、とくに生きてゐるところさへない、死へ、さういふ陰影へ次第にずり落ちてゆくやうである。

彼女は立派である。ときとすると、ストオヴよりも眞紅に燃えてゐる。生きてゐる。肉づけは鉋をあてられた桐材のやうに柔らかく、そしてさつぱりした新鮮さを蹴き立てゝゐる上、たえずそれらが匂つてゐる。果實が樹にあるときのやうに、そうしてそれが熟れたときに最初にぷんとした發香をするやうに、靜まりきつて潑溂としてゐる。それでゐて毛や足や首すぢなぞがすぐ千斷つたら捲げさうな優美な脆さの間に、すつきりと悠かず立つてゐるのである。

彼女の着衣といふものは、それは一種の皮に過ぎない。手をかけると、すらりと最う脱ぎ棄てられ、そうして最初に肢體が光る美しさは、實にするどい。雲間を漏れる日光のやうに明るい。その素早さは小鳥の枝移りするより早い。

だが、予はかの老人がぐんずりと懶げに立ち上つて、そしてその着衣をぬいだとき、暗みある肌からブルブルとした或る顫えを感じた。その顔は陰氣で、濕つた方へ心をいざなつてゆくのだ。そしていつまで動かずにもでる臺にゐるときかれは死んでゐるやうになつてゐる。鈍い肉體のなかから時計があとゝどりするやうな音がする。うごかない。黒ずんでぴつたりと筐の裏に床へ死にをした蝙のやうに固い。寂しさはぞくぞく肌身をおそつてくる。それが私の目をしまひまで動かさずにゐる。ろく竹がくらい扇をもち、そして溝の上に跳つてゐるやうな危怪な氣もちにならせる。……がこの老人は煙草をふかす外は、めつたに口を動かさない顔面にある皺やよれ筋やヒダは、骨へまで到いてゐる深さで割られ、それはみな下の方へ垂れさがつてゐる。冬枯れの草はちぢれ發き上つてゐるが、人間にはさういふものが無いらしい、わけてもこの老人の皺は地に引摺られ、くらい影をひいてゐるのである。目も指も、そして耳さへうごか［illegible］い。ただ、若い女體が前にすらりと立つてゐるにかかはらず、目はそれにうつるには餘りに物憂［illegible］時々うつされる：けである。

はる

どうして其處に座つてゐたのか、いつの事だかもわからない、坂の上にある古い寫眞屋の二階で、そこから蒼い川の瀬がしらが見えてゐた。瀬裏にこもる石斑魚を狙つてゐるらしい小鴨が鼠色にぽつかり浮いて見え、磧にはすこし大きい石の北陰げに斑らに殘雪があつた。氣をつけてみると、磧の草場がすこしづつ狐色をしたかげから、蒼い芽ざしの氣はひが畑のやうに立ちこもり、そのため融けかけた雪が灰のやうに温かくちよんべりと皓い齒のやうに見えた。

青い繪の具をつけた管の葉づくりや紙製の草生の布が、あちこちにと云ふより、むしろ私の足もとを中心にして併べられた。もちやもぢやな草ツ葉で、本物によく似てゐるとわたしは考へたのである。假石もボール紙を墨で塗りこくつた上、あをい苔さへ叮嚀に塗つてある。——背景は、桃林の紅くそまつた野原の遠景で、日の丸の旗が出てゐた。その前に立たされた私は、長い棒のさきに紙を丸めた標的を見詰めたのである。そして時々ひやりした指さきが勝手にわたしの頬をねぢ向け、手をからだにくツつかせ、また、ふいに、腭さきをぐいと上へ向かされたりしたのである。

そこの寫眞屋の前かゞりの額のなかに、いつも眼のほそい優しい女の寫眞が出てゐて、それがここの家の人であることが、衝立のかげからひよいと出て、寫眞師と何か話してゐるので、始めて氣がついた。それゆゑ、わたしの目が動き、動いたために額の位置がすこしくずれた。寫眞師は左へ手を振つてみて、左へ顔を向けるやうに言つたが、はんたいに狼たへて動いたため、女のひとが來て、すうと私の頬をひだりへ向けるため、その内ふところへしまつてあつた白い手をとり出すと、私はあたたかい手で、かなり頑固に、左の方へ頬かねぢ向けられた。すぐ目のまへに女の人のかほがきちんと微笑ひもしないで、やさしげに渦卷いてゐた。わたしは喉の奥で、きらひな煙草を喫まされたやうな、けむつぽさと或る乾きとをかんじた。

かゝるとき女の人は、注文帳に、わたしの年齢と名前とをしるし、石の段々のある、そしてすぐ川水の見える通りへ送り出した。それから毎月通るごとに、その額の中の寫眞を見たことは云ふまでもない。瘠せたきちんと　た顔立ちであ

るそのきちんとした顔をみるたびに、れいの、頑固に、ねぢ向かされたことを思ひ出すのである。石の段々に苔が生え、溝橋に穴があき、雨あがりでは溝橋がはすかひになつてゐた。毎日通るのであるが、決つて寫眞が出てゐるだけで、その女のひとをあまり見かけなかつた。

どうしてあのとき寫眞を撮つたかとおぼえへない。ただ紙作りの、もぢやもぢやした草ツパとうしろの景色のバックとが、ひらひらいまの私にうつつてみえるのである。ばかに溫かく、そして青々と氣味のわるい紙製の草藥が、乾いたそよぎを音させて來るやうで耐らない。

川べりの住民

川べりに住んだことのあるものは、誰でも四季をりをりの移りかはりを水の色に見たり、魚の種類に依つて眺めたりするであらう。それと同じやうに私は川べりに住んで、水色四季に相異なることを感じた。

川べりの住民は、水の増減でその日の、ずつと山奥の模様さへわかる。底から膨れて增水して來るときは、ずつと上流に雨氣がある。夕方などにひよいと磧へ出ると、乾いた石の肌がはつきりと水が輪廓づけてゐる。水といふものは決して磧の石をぎりぎりに輪郭をハツキリと見せるものではない。ぼやけた凝つた色でじくじく濡らしてゐるものである。それ故、散在した石ころの白い肌を稍々盛り上げるやうにしてくる增水は、目にとまらぬ程の弛い歩みで、石垣や磧や磧の草の垂れたあたまを撫でてくるのである。犇々とした弛い眩暈をかんじるときのやうな、不思議の感じがするものである。一度に殖えてくる水は、何となく川底に一種の先き鳴りがし、それが次第に大きくなり、さあと寄せながれてくるのである。夕立や、ふいに暖かい雪解け日和などに、そういふ增水をみることが多い。

水泳ぎなぞしてゐて、ふいに冷たい一脈の水氣をかんじたりするのも、おもに共變ときである。四月末になるとちようど若鮎がもう上つて來る。寸にも足らない、はしこい、あぶらのすくない、何かの作用の一この鮎の子は、瀨といふ瀨すぢ、瀨裏潜りのあるところ、磧から裂けて

くる。せなかに黒いひれの紋章があつて、何かの若芽のやうな銀色をして、さよりのやうに縦く範
とより話し聲が水の上に辷つて行つても、かれらは花のやうに散りみだれ、そして又一瓣づつをつづり合せ、雁行する
のである。ちやうど春先きの一番目の芽を生きたまま飲みこむと、よく目藥になるさうである。のどもとをぴりぴりして
胃へ落ちて行く目高を私はどのくらゐ飲んだかも知れない。それと同じやうに此若鮎の一寸にもならぬやつは、喉を明
るくするといはれてゐる。

磧を裂いた小流れに、それはほんの一尺にも足りない流れであつても、深さへつくつてをけば、この神のやうなあど
けない小鮎は、容易に手ですくふことができる。やつと登れさうな砂利流れにかがみ込んで、この魚をすくふ心持ちは樂
しい。いちど捕へられると磧でも地上でも跳ねるだけ跳ね上る。まれな勇敢さをもつてゐるのも、この春さきの魚であ
る。川べりの住民はどういふときでも、まづ解禁にならない前にこの一番鮎を食べねばならない。かれらの子供、その
兄弟そういふはしこい輩はいちはやくその姿をみつけ、捕へるのである。ちやうど一枚の蕗の葉がかれら兄弟の兩手を
ひろげたほどに翠傘を擴げるころである。

鮎は動かない水の中では、五分と生きてゐない。わけてもこの若い鮎はすぐ死ぬ。すべての魚は口をあけるが、かれ
はあまり多くの場合口を閉さして死んでゐる。よく見ると蛇の顔に似てゐて、さきへゆくほど尖つてゐる。そのため、
わが川べりの住民は決してその頭を食べない。好味のあるあたまには、箸はつけられない。

予は五月はじめころの、山ざくらの散り出した上流の、どろんとした淵にゐる幾列かの鮎をみたことがあつた。その
靜かさは耐らなかつた。かれらはたゞ平和に泳いでゐる。樹は花をふらしてゐる。天上にも地界にもゆつたりしたのろ
い時が刻まれてゐるだけである。かういふ景情のなかには、ただ歩むものは鮎だけである。だが、下流になるに從つて
いまは汽車が通つても、鮎は平氣でおよいでゐる。ただ人語のみかれらの心を亂すらしいのである。そのほか、かれら
はどういふ時でも一疋きりでゐることはない。かならず幾疋か或ひは雁行してゐるものである

灰色の蟬

團子坂から左へ折れ曲ると、太田ケ原といふ原があつた。原といふより、誰かの屋敷跡の、廢園に近い雜林にかこまれた庭の外廓には、ただ疎らな垣を結つてあるだけだつた。予はすぐ近くのごみごみした裏町に宿をとつてゐたので、よくそこの破れた垣根からこつそりと廢園の中へはいつて行つたものである。まるで犬か何かのやうに、枯れ莖を頭にからませ、ひつそりした道路を見廻しながら、人通りのないときを見計つてもぐり込んだものである。

私のやうな下宿住ひをしてゐたものには、他人の庭であらうと廣場であらうと、凡そ莖の生えたところでさへあれば、ひと息つけるやうな氣持ちで腰をおろしたものである。しかもその廢園のなかには、誰一人居よう筈がない。まんなかに池があり、古びて蒼くよどんでゐた。水蓮のはびこり過ぎたやつが、或る夏など雪のやうに白く一つきり咲き輝いてゐた。白いだけなほ眞淋しく、しかもあたりは黑ずんだ樹でかこまれてゐるだけ、がさと云ふ音すらない。ときどき底泥になつてゐるせいか。ぷつぷつ泡を吹き、それが石鹸玉のやうに消えたり浮いたりしてゐた。私は物憂いだらけたからだをそこの土手の椿かげに靠らせ、ぼんやり池の面をながめてゐたりした。その時の心持ちは世に出ようとして勇ましい心ではない。若くして生活のあらゆるものを知りつくした銹だらけな心でゐたのである。その日その日を昨日の續きのやうに、ただむやみに蹲下んで鬪いだ心である。たへず頭にまつはる風鄕をのぞむ氣もちも、名なく、その上貧しくして歸へられない。じくじくした心であつた。私はさういふ境遇にゐても鄕里のところどころにある、私を索引する風景や人情にこがれてゐた。何んでもなく、くたびれた足を浸つたことのある藪婁の噴き上げの冷たい水を汚へたり、いまもそれが噴き出てゐるだらうかと思つたりするのである。

さういふときに、そこの池に添ふてながれる冷たい水で、手拭を浸したり足をひやしたりした。たはいのない。くだらないことをしてゐる私は、そこの土手の上にかならず、ひまさへあれば行つてゐた。私がそこで夏の初めの
た小ちやい蟬の啼くのをきき、その灰色の蟬がいかに人間の幼時を考へさせるもの

くる。せなかに黒いひれの紋章があつて、何かの若芽のやうな銀色をして、さよりのやうに纎く、神經深い。人音はもとより話し聲が水の上に走つて行つても、かれらは花のやうに散りみだれ、そして又一瓣づつをつづり合せ、雁行するのである。ちやうど春先きの一番目鮎を生きたまま飲みこむと、よく目藥になるさうである。のどもとをぴりぴりして胃へ落ちて行く目高を私はどのくらゐ飲んだかも知れない。それと同じやうに此若鮎の一寸にもならぬやつは、瞳を明るくするといはれてゐる。

磧を裂いた小流れに、それはほんの一尺にも足りない流れであつても、深さへつくつてをけば、この神のやうなあどけない小鮎は、容易に手ですくふことができる。やつと登れさうな砂利流れにかがみ込んで、この魚をすくふ心持ちは樂しい。いちど捕へられると磧でも地上でも跳ねるだけ跳ね上る。まれな勇敢さをもつてゐるのも、この春さきの魚である。川べりの住民はどういふときでも、まづ解禁にならない前にこの一番鮎を食べねばならない。かれらの子供、その兄弟そういふはしこい眼はいちはやくその姿をみつけ、捕へるのである。ちやうど一枚の蕗の葉がかれら兄弟の兩手をひろげたほどに翠傘を擴げるところである。

鮎は動かない水の中では、五分と生きてゐない。わけてもこの若い鮎はすぐ死ぬ。すべての魚は口をあけるが、かれはあまり多くの場合口を閉さして死んでゐる。よく見ると蛇の顏に似てゐて、さきへゆくほど尖つてゐる。そのため、わが川べりの住民は決してその頭を食べない。好味のあるあたまには、箸はつけられない。

予は五月はじめころの、山ざくらの散り出した上流の、どろんとした淵にゐる幾列かの鮎をみたことがあつた。その靜かさは耐らなかつた。かれらはたゞ平和に泳いでゐる。樹は花をふらしてゐる。天上にも地界にもゆつたりしたのろい時が刻まれてゐるだけである。かういふ景情のなかには、ただ歩むものは鮎だけである。だが、下流になるに從つていまは汽車が通つても、鮎は平氣でおよいでゐる。ただ人語のみかれらの心を亂すらしいのである。そのほか、かれらはどういふ時でも一疋きりでゐることはない。かならず幾疋か或ひは雁行してゐるものである

灰色の蟬

團子坂から左へ折れ曲ると、太田ケ原といふ原があつた。原といふより、誰かの屋敷跡の、廢園に近い雜林にかこまれた庭の外廓には、ただ疎らな垣を結つてあるだけだつた。予はすぐ近くのごみごみした裏町に宿をとつてゐたので、よくそこの破れた垣根からこつそりと廢園の中へはいつて行つたものである。まるで犬か何かのやうに、からませ、ひつそりした道路を見廻しながら、人通りのないときを見計つてもぐり込んだものである。

私のやうな下宿住ひをしてゐたものには、他人の庭であらうと廣場であらうと、凡そ草の生えたところでさへあれば、ひと息つけるやうな氣持ちで腰をおろしたものである。しかもその廢園のなかには、誰一人居よう筈がない。まんなかに池があり、古びて蒼くよどんでゐた。水蓮のはびこり過ぎたやつが、或る夏など雪のやうに白く一つきり咲き輝いてゐた。白いだけなほ眞淋しく、しかもあたりは黑ずんだ樹でかこまれてゐるだけ、がさと云ふ音すらない。ときどき泥になつてゐるせいか。ぶつぶつ泡を吹き、それが石鹼玉のやうに消えたり浮いたりしてゐた。私は物憂いだらけたからだをそこの土手の椿かげに靠らせ、ぼんやり池の面をながめてゐたりした。その時の心持ちは世に出ようとして勇ましい心ではない。若くして生活のあらゆるものを知りつくした錆だらけな心でゐたのである。たへず頭にまつはる風のやうに、ただむやみに鬱下んで蹲いだ心である。その日その日を昨日の續きして歸へられない。じくじくした心であつた。私はさういふ境遇にゐても郷里の景や人情にこがれてゐた。何んでもなく、くたびれた足を洗つたことのある藪の中の冷たい水を考へたり、いまもそれが噴き出てゐるだらうかと思つたりするのである。

さういふときに、そこの池に添ふてながれる冷たい水で、手拭を浸したり足をひやしたりした。たはいのない。くだらないことをしてゐる私は、そこの土手の上にかならず、ひまさへあれば行つてゐた。私がそこで夏の初めの…た小ちやい蟬の啼くのをきき、その灰色の蟬がいかに人間の幼時を考へさせるもの…

ゐた。愉しい家郷へかへつてしまつた下宿屋では、私だけがぽつんと一人きり傷だらけの机ととも[illegible]らなかつた。さういふ時私にとつてわづか卅分か一時間かをこの池のまはりで過ごすことが、特に時的でない意味で、いゝ氣晴らしになるのだつた。

私の懶怠な生活はしだひに深みへはまると私はよくこの池のそばにしやがみ、往來通りから見えないところで、がりがり固い食物をしやぶつてゐたりした。しまひにはどういふ下宿にもゐるやうに、私と同じい怠け者の所在ない、そして錆ついた友だちがいつの間にか私と同じやうに、この池のまはりへやつてきて、ぼんやり煙草をふかし、頭へはいらないノオトをひるがへしたりしてゐた。いちやうに灰色めいた蟬のやうに瘠せ、何一つ勇敢なところのない青年だちだつた。かれらはこの廢園にきてゐて、さきに來てゐる同じ青年を見ても何一つ言葉をかけない。おたがひが姿の見えないところに隱れ合ひ、お互ひが知らうとはせず、そして蒸ばんだ夕方になると、れいの、破れた垣根から犬のやうに白い道路へ消えてしまふのである。それらの人人はお互ひちらりと覗ひあふと、あはてて目をそらし、見て見ぬふりするが、いくらか自分の安逸な隱れ場所をあばかれた敵意ある目つきをするが、とにかく、ちよいとした、かなり陰氣な氣もちをその瞬間にとりかはすのであつた。

だが私は往々そこで變になつた頭で、よく椿の花の揉みついたのを眺め、それをみてゐるうち、なほ頭腦にぐらぐらするやうな惑亂を感じたりした。ふしぎにその眞紅の一片がきりきり舞つてゐるやうな氣もする、心の弱りを感じたりした。それから最つとふしぎなことは、さういふ明るい晝間にどうして輝り出したかわからないやうな星の幾つかを空に見いだしたりするのだつた。決してそれが實際に見えるのではなく、しかもそれが見へないわけではなく、ただちらちら目に映じてくるのである。疲れきつてゐる人間には、ふしぎに晴天に降雨を考へ出したりする時が屢々あるやうにそのときの私は白日の星をいつとなく頭にえがいてゐたのかも知れない。實際、私はぼんやり座つてゐると、白い、晒されたやうな星族を私は私の見つめてゐる空間に、たえ間なく映してゐたのである、私自身でさへ、さういふばかばかしいことがあるわけはないと考へながらも、やはりそれを空間に見いだしてゐたからである。

このごろその原近くへ用事があつて出かけると、もう新しく家並みがつゞき、暗い大きい樹木も伐られてしまつてゐた。ただ一本だけ道路の方に孤立したのが、れいの、むかしの灰色の蟬を考へさせただけだつた。

溫泉場

水が溫み出すと箒川の河原へ、毎日子供が群れて鮒をつかまへてゐる。石の裏にひそんでゐるのを兩手でその小石と一しよに掬ひ上げるのである。

紅葉の客がひとはたり濟むと、東京宇都宮地方へちらばつて消えて行つた賣春婦は、ぼつぼつ出稼ぎに出てくるのである。ちやうどその鮒のあたまにあぶらの乘るころ、木の芽が吹き出すころである。那須からの長い馬車の乘合ひで、彼女らは毎日二三人づつ、宇都宮あたりで買つてきたらしい女下駄や新聞包みを抱え、土地のものに手土産にする。そして田舍女らしいけばけばしした紅いものづくめで、寂しい乘合馬車の女王になるのである。ラツパが「橋渡し」や「鹽の湯」「門前」への道々で、それらの一人か二人づつを下しては、町ぢゆうにその寂しい音をひびかしては行く彼女らは去年の古巣へもどり、冬ぢゆう休めたからだを湯治客の呼んだり遊びにきたりするのにまかしてゐるのである。

それはまだよい方で「冬越え」をして借金で脱けきれなくて、この溫泉場の深い雪の中で一と冬〃送つた女らは、珍らしげに朋輩を迎え、すこしでも都會めいた半襟や着衣の模様なぞに悲しげに目をうつすのである。三四尺もつもるこの溫泉場の冬は、彼女らの肌や手足をすつかり雪燒けをさせてしまひ、深い龜の甲羅のやうな皹をきらせてゐるのである。それを痒がりながら朋輩の手土産にこころおどらせることが多かつた。身體(からだ)をおさへられた彼女らは、去年のやうに忙しい夏を稼ぎ通さなければならないのである。

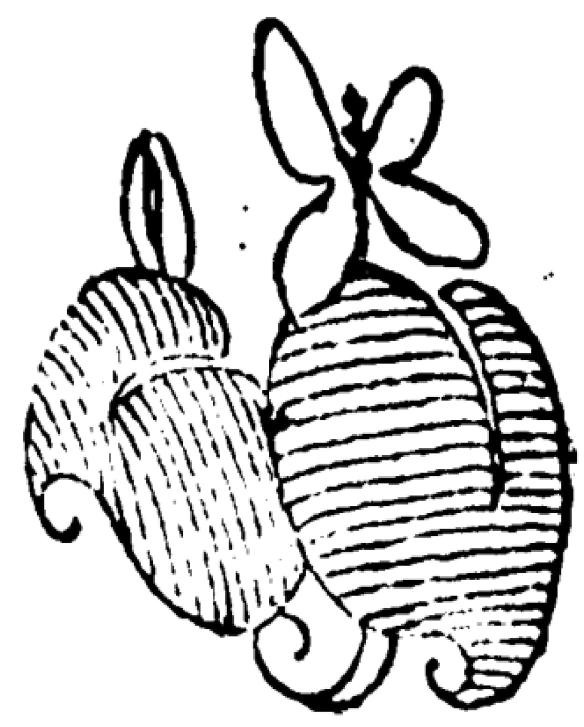
たまには東京から春と夏へかけ稼ぎに出てくる女は、素晴らしい勢でやつてくるが、それは夏にならなければ來ない、へいぜいは一見地味なつくりで、しもた屋の娘のやうな扮装をした彼女らは、冬越えの、退屈な炬燵にはめてばかりゐた足を拔いて、町の料理屋に出かけるのである。

断崖の中腹にたつた一軒きり建つてゐる小料理屋はほとんど人家とは四五町も隔つてゐて、晩なぞは物
らやみに、ただ一つきり灯れてゐるといふやうなのもあつた。そこの暗い山道を辿つてゆく客もあれば、車行してゆくの
もあつた。お白粉くさい女が、清烈な空氣のなかで、しかも唯一軒しかない山中で賣笑するのも、何となく心を惹いた。ど
ういふ呼びこえを上げても、どたばたやつても、谿流と松聲と閑寂とがすぐ揜み消してしまうのである。——あるひは、
まだ萌え出さない雑林の間を退屈さうに摘みものをしてゐるのなぞ．その白粉と派手な不自然な扮裝と一しよに、何か
しら哀愁を惹くことが多かつた。摘草といふあどけない、しほらしい遊戯の一端が、彼女らの職業とむすび合はされ、
予の心を或る興趣に引ずつてゆく。白粉の顔と雑林の緑と、それをとりかこむ荒れを春あさい風景との調和が、予の心
をたまたま春らしい氣分にさそつて行くのである。全體としては低級な詩的興趣ではあるが、しかし嚙みわけてみると、
その着物をよごすまいとしてゐるところや、さういふ摘草のときにまでしてゐる長いショールなぞがかなり冷笑にちか
い同感をかんじしめるからである。かれらは好きなほど大聲で話し合ひ、そして退屈な半日を送るのである。たまには
嗤ふべきすみれやばらの花かんざしを挿してゐるのも、しまひにはわけもなく微笑まれてくるのである。

予は一日、山間の淵碧に出て、そこに綸を垂れ、いはなを釣る里人を見てゐた。そこにも二人づれの例の女の群が佇
んで、その釣竿を凝視してゐるのを見た。岩魚といふものは、さうたやすく釣れるものではない。女らの眉宇には輕蔑
と冷笑と、戻かしさが苛立つてゐるにかかはらず、やはり熱心に水面の糸をながめてゐた。あたりは靜かすぎるくらゐで、
ときをり鶯が啼いてゐるのが水面に緩く響くくらゐだつた。里人は默つてゐる。女らも默つてゐる。もとより予は蹈ん
だなりでゐる。その外に何事の起らう筈もなければ、少しの變化さへない。もちろん岩魚の釣れるやうなこともない。

間もなく女らの低い聲で囁き合ひ、そしてこの淵碧をはなれ、山道をぬひながら行つた。しかも予はその後姿を見送
りながら、故もない或るふしぎな憂欝な明るい氣持ちにあるに拘はらず、ふさいだ氣持ちになつた。女をみるとのない
山中で感じたものに違ひないが、その他にべつな寂しい氣もちか働きかけてゐた。——予は、依然として釣人の糸と彼
女らのうしろ姿を見送つて飽くことがなかつた。が、いつまで經つても岩魚はつれないし一言も釣人はしやべらない。

この稿を起してゐる窓外の箒川には、れいの子供らの餌をとらへるために、石をめくつては投げる音が、石づたひに
ひびいてゐる。それが緣側までくる雪のやうなせきれいとともに、障子にかげうつすやうである。わけても對岸の雑林
は日増しに青くなつてゆく。



古き記憶より

中山啓

—とゝに發表する歌はわが七八年前の作なり—

淋しさに野邊に來りて樹をゆれど樹をゆすれども葉さへも散らず

○

春日あびて嫩芽（わかめ）をやさしく吹き出づる椚の林の靜かなるかな

音もなく椚の嫩芽の延ぶまゝに五月靜かに深みゆくかも

もの足らで野邊に來ればまたしても馬は淋しく芽をはみてをり

大なる瞳にじつとわれを見て馬はしきりに芽をば喰めるも

溫泉（ゆ）の庭に柿の靜かに咲くを見て誰れ待つとなく人の待たるゝ

湯にひたりうつとり空をながめゐるひとみに搖るゝ夏のみどり葉

ゆるとなく夏のみどり葉ゆれてゐて流るゝ湯の音かすかなるかな

○

麥の穗をわたる夕風肌を寒み雨雲ひくゝ垂れて淋しも

雨にぬれし亞鉛（トタン）の屋根のうす光りわびしく暗く暮れてゆくかも

川波の沫にぬれて光りたる岩を飛びつゝ犀川をのぼる

木洩れ陽は冷たく淵を照らしゐて崖高く樫の暗く繁れる

暗き崖の樫の繁みに鳥ひそみ木の實を淵にしきりに落す

崖高くお暗く樫は繁み生ひひつそりと影を淵にうつせり

崖高く樫の繁りて暗きところ谷をどよもし瀧ほとばしる

こんもりと樫の繁れる瀧壺に馬酔木まぢりて咲ける淋しさ

絶壁よりとゞろき落つる瀧水に谷風おこり馬酔木のゆらぐ

岩疊ほとばしる瀧を見上ぐれば峽空にたかく白雲うごけり

杉木立お暗き徑をひとりゆけば繁葉のなかにひよ啼くきこゆ

峰に立てば峽の樹間に見えかくれ靜かに湖の碧く見ゆかな

遠つかた暮雲しづかに赤みゐて峰の樹立の寂しくあるかな

○

丘のうへまで傾斜のゆるき草の原午後の陽あびてひとり草刈る

丘のうへまで傾斜のゆるき草の原刈りつゝ靜かにのぼりゆくかな

われは草を刈るひねもす原に草を刈るわが振る鎌の音の淋しさ

丘の傾斜に草刈りをれば秋の虫しづこゝろなくあたりに鳴くも

草原に腰をおろして鎌をとぐ砥石の音の靜か

なるかな

○

紅きダリアの燃ゆるが如き君の唇しかと接吻けしかと離たず

接吻けのときはほつそり眼をとぢてわがうなじ巻く美しき君はも

わが肩にもろ手を置きてそと見上げ接吻けてよと君の眼のいふ

たまきはる心おこればもの云はでひたと抱きよせ接吻けしかな

このまゝに死にてよと君はさゝやきぬしかりこのまゝともに死なむか

○

君逝きて姿をうつす人もなく鏡にしろく埃うけるも

姿見のうしろよりそと覗き込み道化顔してみせたるものを

あゝ三國・三國は君の墓どころ足ずり泣けば日も白むなり

君をみて抱かむとすれば影もなしまぼろしこそは悲しきものぞ

いとせめて夢になる君を抱かんと君のしたぎをいだき寝るかも

スヰッチをひねれば美しきかな金魚は灯の照るかたに泳ぎよるなり

君のまくらべに日毎をきたる金魚鉢つくづく見れば悲しさまさる

○

はらはらと柳の葉ちる石だたみ銀座の宵をしたしみゆくも

カーテンの陰より外を覗きゐしよき眸を忘れえぬかも

勞農ロシアの監獄

山川菊榮

一

本誌正月號に私の紹介した『勞農露西亞の監獄生活』といふ短かい記事を、今なほ記憶して居られる讀者もあらう。ところで『勞働運動』二月號には大杉氏が ロシアに於ける無政府主義者』の題下にその記事に言及せられ、『モスクワのアンドロフスキー監獄を觀察した米國記者ルイズ・ブライアント女史の云ふてとも信用できるが、しかし又それに全く反對の文献があることも知つて居る。そして其文献も信用できない事はないどころではない、或は其方が本當なのじやないかとも思はれる』と前置して、その『信用』のできる文献、即ち『昨年五月五日、モスクワの社會革命黨中央組織局から出た『檄文を紹介された。

私はブライアントの今まで書いたものから推して、彼女が故らに外國の同志を欺くやうな、無責任な出たらめを書いたものとは思はぬが、(實際彼女の今までの通信が、全然無關係な他の入獄者の手記によつて二重にも三重にも裏書された例を一再ならず目にしてゐる)、とにかくあの記事を裏書する、今一つの文献を紹介しておきたいと思ふ。然しそれより以前に、大杉氏の信任を博した社會革命黨の立場を一般の讀者の前に明かにしておく必要がある。

二

ロシアの社會革命黨と云へば例の『人民の中へ』の運動の基礎團體の後身で、昔は壯烈果敢な志士烈婦を數限りなく出し、虐げられたる露國農民の戰士として、實に内外の尊敬と畏怖の的となつたのである。所で今は此政黨が『自由』や『人道』や『社會主義』の名に於て共産黨に敵對してゐる。そしてお得意のテロリズムを使用して、ピストルや爆彈で共産黨員を暗殺した事件や、反革命的陰謀事件を頻發させてゐる。先年レニンを狙撃して危く死に瀕せしめたのも―其時の彈丸一發はまだレニンの體内に入つたきりださうである―社會革命黨の若い娘であつた。同じく社會主義を標榜する政黨同士、とうしてかうまで[illegible]

爭ふようになつたか。そこには主義や政策の相異に基く深い理由があるのである。

社會革命黨は一八六〇—七〇年代のポピュリストの思想を繼承し、原始共産村落の遺物であり、帝政時代の政府によつて農民の搾取と、その進歩を妨害することゝのために利用し保護されて居つたミールの制度を以て、スラヴ民族特有の制度と見、露西亞は資本主義を經ずにこの制度の上に直ちに社會主義的新社會を建設することが出來るといふ主張をもち、隨つてマルクス派の唯物史觀と階級闘爭とを否定する。

ボリセヰキは最初社會民主勞働黨中の急進分子の集團で、マルクス說を固執し、都會の工業に於けると同じく、農村に於ても土地資本の集中の結果として起る農民の無産階級化と階級闘爭とは避け難き事であると考へ、共産村落の遺物の上に直ちに新社會を打建てようとする社會革命黨の空想を受容れなかつた。此政黨は工場勞働者を中堅として居るが。貧農の中にも黨員は少くない。ボリセヰキがメンセヰキと別れたのは、ブルジョアの政黨との提携を排した點であつた。後に共産黨と改稱するに至つたのも、社會革命黨其他各國のブルジョア的社會主義、議會政策派と截然たる區別を立てんがためであつた。

社會革命黨は、大地主の土地沒收(賠償付きの)を主張したが、工業資本の公有には興味をもたなかつた。三月革命後償案は漸次に捨てたが、農民中の貧農と中産階級との利害の衝突を見ず、たゞ農民は農民として一致協調し得るものと云ふ假定の上に、政策を建てゝゐた。そこが階級闘爭說の上に農村問題を解決しようとしたボリセヰキとは反對であつた。

三月革命後成立した第一次假政府は、首相リウボフ公爵を始めとし、閣員十一名中十名迄は資本家大地主の利益を代表するブルジョアの政黨員で、殘る一個の椅子、即ち司法大臣のそれが社會革命黨の首領ケレンスキーに與へられた。此内閣はその性質上、舊制度の中から單に官僚軍閥的分子を除いて、露西亞を純然たる資本主義國に化することに革命の最大意義を認めてゐたので、即時講和、土地及び生産機關の即時國有を主張する民衆の輿望に添はず、五月に至つて一部改造の已むなきに至り、社會黨の閣員を新たに五名加へた。かようなブルジョアとの聯立内閣に最初から猛烈な反對の聲を擧げて『一切の權力をソヴィエットに』と叫んでゐたのは社會黨各派中、ひとりボリセヰキあるのみであつた。

六月に至つてリウボフ公爵の後を受けてケレンスキーが首相となり、社會黨四派とブルジョアの二政黨との聯立内閣を作つた。此内閣自己に反對するボリセヰキを迫害窮追して其首領連

を逮捕し機關紙を禁止し演說集會を行はしめなかつた。然し此內閣も亦、土地の國有を理想としては是認しながら、其實施を無限に延期し、一方民衆の平和に對する熱望あるにも拘らず無謀なる主戰的態度を擲たうとしなかつた爲めに、無產階級の不平は底止する所を知らず、ブルジョアの暗中飛躍は漸く露骨となつた。

『ケレンスキーの內閣には、社會革命黨が優勢を占めてゐたにも拘らず、根本に於いて聯合內閣であつた。即ちケレンスキーの內閣は、聯合國の戰爭繼續の要求と、民衆の平和の熱望との聯合を意味し、カデツトによつて代表せられる資本階級と、無產階級との聯合を意味し、大地主の利害と農民の利害との聯合を意味してゐた。然るに實際に起つてゐたことは、聯合ではなくて階級の間の死生の鬪爭であつた。而も勞働者と農民とに利益する最も穩健な政府の施設すらも、資本家と大地主との猛烈な反對と妨害とを蒙つた。到る所土地委員は、大地主の反抗運動の爲めに、或ひは投獄され或ひは殺戮されてゐた。階級鬪爭の事實に當面してゐる農民は、最早や社會革命黨の約束を待つてゐることは出來なかつた。そこで彼等は自己の行動によつて、其の欲するものを得ようとした。ケレンスキー內閣の末期に至つては、露國の農村は到る所、地主と農民との直接の鬪爭が行はれ、農民は貴族の邸宅を燒き、倉庫を破壞し、穀物と家畜を掠奪した。そして地方の土地委員會は、勝手に大地主の土地を沒收して農民に分配した。斯くてチエルノフは、自己の創設した土地委員の逮捕を命ずるが如き、皮肉な運命に陷ち入つたのである。』（社會主義研究、第三卷第四號『農民と無產階級革命』）

三

八月に至つてケレンスキーは、軍閥の獨裁を夢みてゐた反革命の頭目コルニロフの武力を藉りてペトログラードの勞働者を鎭壓しやうとした。陰謀は未然にして破れ、コルニロフは生命を以て罪を贖ひ、ケレンスキー內閣は改造の必要に迫られた。彼はブルジョア黨員を內閣より除外すべしといふ熱烈な要求を斥け、再びブルジョア、の聯立內閣を作つたので、社會革命黨內部の急進分子即ち即時講和、土地及び生產機械の即時國有を主張するスピリドノワらの左農一派は、ケレンスキー派と分裂して社會革命左黨と稱するに至つた。此後單に社會革命黨と稱するものは、普通に右黨として知られ、富有なる農民と小ブルジョア階級を代表し、ソヴイエツトに反對して專ら議會政治を主張する、最も保守的な名のみの社會主義者の集團となり終つた。（左黨は十一月革命以來、大抵の場合ボリセヰキと提携して來

『レーニンは一九一七年に公けにした『露西亞の諸政黨』と題する宣傳用の問答書のうちに、『農民は直ちに、地主の一切の土地を奪ふ可きか』といふ問に對する、カデット立憲民主黨と社會革命黨と、メンセヰキとの答を掲げて、ボリセヰキの態度を明らかにして居る。

『(カデット及び社會革命黨)斷じて不可である。吾々は憲法議會を待たねばならぬ。……………………………………農民が地主から土地を奪ひ去る場合には、それは暴虐であることは、既にシンガレフの指摘した通りである。地主と農民との同數の代表者から成る、整理委員を選任しなければならぬ。そして委員長は官吏——即ち同じ資本家や地主出身の人でなければならぬ。

『(メンセヰキ)憲法議會の召集を待つた方がよい。

『(ボリセヰキ)一切の土地は、直ちに沒收しなければならぬ。農民代表委員は嚴重に秩序を維持し、兵士に充分の食糧を支給しなければならぬ。パンと肉との生産を増加し、家畜や農具の破壞は許す可らざることである……』そこでボリセヰキは十一月七日に權力を掌握すると、翌八日の午前二時を以て、疾風迅雷的に『土地布告』を發布して、農民に對する約束を全うした。そして農民はボリセヰキに從つたのである。』(上に同じ)

平和に對する民衆の熱望も亦、ボリセヰキに依て滿たされた。十一月革命後、勞農政府は交戰諸國に向つて、無償無併合の即時講和を慫慂したが、聯合國の容るゝ所とならず、餘儀なく獨墺側と單獨講和を行ふた

四

十一月革命によつてソヴィエットのために政權を奪はれた社會革命黨は、ブルジョア諸政黨及び保守的な社會黨諸派と提携して『革命救濟委員會』なるものを作つた。その會合の光景をリードはから語つてゐる。

『此集會とソヴィエット大會(新政府の基礎たる)との間ほど、著しい對照を示したものはない。ソヴィエット大會には、みすぼらしい服裝の兵士、汚ない勞働者、農夫—謂はゞ生きんがための動物的な闘爭のために傷つき、折れ曲んだ貧乏人の大衆が集まつてゐる。所が此處ではメンセヰキや社會革命黨の首領—アフクセンティエフ、ダン、リーベーなどいふ連中や、前社會黨大臣スコベリエフ、チエルノフらが、脂ぎつたシヤツキーや狡さうなヴィナヴエールなどのカデット(立憲民主黨、即ち資本家黨)や、新聞記者、學生、其他ありとあらゆる種類のインテリゲンチヤと肩を比べてゐる。

私は彼等の中にたつと…彼等は營養が十分で、服

とが出來なかつた。』

九日の光景は次の如くであつた。

『もはや決議をしてゐる時は過ぎ去つた……………………………………………………

『革命を救ふか、然らずんば吾々をして死なしめよ……』

かうした叫びが聞こえると會堂はどよめいて、燃えるような眼の中に喝采が湧いた。見まはすと一名のプロレタリアもゐない。すると又一人が云つた。

『吾々は彼等を保たねばならぬ。そして輿論が革命救濟委員會の熱心な味方となるまで待たなければならぬ。その時吾々は防禦を擲つて攻撃に出よう！』

が、いつ迄經つても輿論―無産階級の輿論は彼等を助けに來る筈がなかつた、又彼等も亦それを待つ代りに、官僚財閥の遺見たるブルジョアの子弟より成る白衛軍の力に頼つた。かくてペトログラード、モスコー及び合衆國の無産者の血が惜しげもなく流されたのである。爾來け革命運動における社會革命黨の功績は枚擧するに遑がない。彼等の鄰ふておかぬ首領ケレンスキーが、內外のブルジョア政府及び資本家階級の間を巧みに運動して屢々反革命の資金を仰ぎ、殊にかのクロンスタツトの暴擾がそうした彼の裏面の活動に負ふ所の多かつたことは、世人の記憶に新たな所である。

五

社會革命黨までが蜚語流言を、信ずることも好きなら放つことは猶ほ好きな例證は、いくらでも擧げられる。本誌正月號に書いた白衛軍虐殺の虚報なども、社會革命黨が中堅になつてゐたペトログラード市會が責任を以て發表し、剰へ麗々しく氏名まで出したので、傳へ聞いた家族らが先を爭つて委員會へ馳けつけ、目も宛てられぬ悲劇の渦を捲き起した。そこでポリセキキの一婦人議員が、囂々たる反對論や妨害を押しのけて、飽くまで實地調査を要求して已まなかつたので、遂に各政黨の代表者より成る實地調査委員會と、別に米國赤十字に依頼して作つた一委員會との二つを設けてピーター・ポール要塞を視察させた處双方とも符節を合せたように、正月號記載のような報告を齎したのである。然も故ら人騒がせの虐殺の報告をした市長自ら調査委員となつて、事實無根の報告をするといふ皮肉な結果に終つたのである。やはり當時のこと、ツマノフ公家の惨死體がネヴ河に浮き上つたといふので、ソレ『過激派の暴虐』とばり、反對派の新聞は鬼の首でも取つたように書き立てた。と數時間後公爵の家族から、主人は無事であるといふことお登

表された。すると新聞側は此度はその屍體をデミソフ將軍の慘殺體に相異ないと報じた。が生憎將軍も生きてピンピンしてゐた。そこで外國の通信員が其時の事情を直接よくよく探査して見た處其問題の翌朝、ネヴ河に一つの屍體も浮き上つた事實のないことが確かめられた。こんな虚報を社會革命黨其他の反對黨が眞面目に取上げたり、針小棒大に吹聽したりした例を算へれば限りがない。新社會建設の歴史的使命に忙殺されてゐる勞農政府は、こんな虚報に取合つてゐる暇はない。彼等はたゞ何等かの事實なり報道なりに對する眞僞を確かめられ、又は説明を求められた場合には、親切に説明なり囘答なりを與へてゐるが、其他の場合は一切相手にせぬ。それは恰度全世界を騒がした婦人國有令が、一笑に附せられてゐたと同斷である。數へ立てればこんな例は切りがなく、外國に入り込んでゐるブルジョアの亡命家が、さうした反革命的宣傳のために、特に團體や機關紙まで設けて活動してゐることは周知の事實である。ロシアに就ては、今の處どうしても報道の不完全を免れぬ。たゞ吾々はロシアの無産者の辯明を一々聞かぬからこそ、

…………………………………………

…………彼等も人間であり、殊には全然前人未踏の境地に進み入る無經驗な先驅者の常として、多少の過誤を犯すことは已むを得ない。が、恥づべき無力のために、彼等の事業に一臂の力をも藉し得ぬ吾々として、あひ飢ゑ且つ傷つきつゝ孤獨の中に必死の戰ひを闘つてゐる他國の無産階級に對して、その多少の過誤—萬一有つたとして—を指摘する權利があるだらうか。

ロシアの社會革命黨は、ドイツの社會民主黨、英國の勞働黨あたりより、更に保守的であるとも進歩的な所はない。既に彼等がコムミユニストに加へつゝある非難や讒誣が、あらゆる國々のあらゆる保守反動派が、あらゆる急進主義者に加へる非難と全然同一なことに見てもそれは明かである。然も彼等のコムミユニス攻撃の定り文句は『あれは社會主義でない、無政府主義だ』といふにある。是をしも信頼すべき文獻として紹介されなかつたことは、社會革命黨の遺憾とする所であらう。とにもかくにも、吾々は此革命の裏切者、無産階級の叛逆者、に共鳴して自己の墓穴を堀る愚は戒めねばならぬ。

六

次に私はブライアントのあの文章より彼是一年以前に書いた佛人ピエール・パスカル氏の『ソヴ

ふ一篇を紹介したいと思ふ。これは佛國勞働組同盟の中の少數急進分子の集團たる革命的サンデイカリスト委員會（アナーキスト、コムミユニスト等を網羅しジユーオー等の漸進的、改良主義的多數派に對峙す）の機關『ラ・ヴイ・ウーブリエール』に出たもので、文中にもあるように一九二〇年二月の執筆に係る。

× × × × × × × × ×

『戰線と、戒嚴令の布かれてゐる不穩な地方との外は、露西亞にはもう死刑が存在しない。さういふ處でさへも、最高軍事評議會及び共和國最高裁判所の承認でない限り、軍法會議は死刑を執行する權能を與へられていない。惡夢のように外國人を脅かした非常委員會のことを、私はモウ一度言はなければならぬ。新聞記者的小說家、及び無氣味なことの好きな人々のあらゆる冗辯にも拘らず、此等の委員會は規定せられてある法規に遵つて、最も小心翼々として働く所の秩序的な機關である。またその數も、資本家の新聞が吾々に信じさせたがつてゐるように無限ではない。各縣にさういふ委員會が一つづゝ置かれてゐるので、シベリア委員會及び全露委員會をも加へて、全部で四十四ある。役員は總數で六千二百九十名そのうちかなりの部分は寫字生、分類係り、各事務所間の聯絡をとる使者といふような、全然平和的事務に携はつてゐる。のみならず、非常委員會と、帝政時代の警察制度との間には一として共通な點がない。委員會の成員は普通の警官のように服從的な、動物的な特徴はもたぬ。又諸君は、習慣に依て感受性を鈍らされ、理性を失はされた職業的警官の無神經でも、彼等の裡に見出すことは出來ぬ。

私は非常委員會のコミサル數名を個人的に知つてゐる。罪人として扱ふべき人々に對する彼等の態度は、他の人々に對する態度と少しも變らぬ。彼等は何の野蠻性をも示さず、何等の亂暴な言葉をも用ゐなかつた。彼等はすべてその義務　盡し、敵に對してさへも公正であらうし、且つ革命を擁護せんとする欲望に燃へてゐた。赤軍の外共和國内でこれほど規律の嚴守されてゐる處はない。久しい間非常委員會の役員の犯した權力の濫用や職務に對する不忠實は、死刑を以て罰せられた。今ではそれが終身懲役になつてゐる。

私はあの宏大な露西亞の中の何處かで、時には間違ひが起つたかも知れぬといふことを否みはせぬ。

…………………………………………………………

…………………………………………………………

……………………………………………………それに

も拘はらず、私は非常委員會が常によく運用されて居ることを

斷言するに足る丈け十分な經驗をもつてゐる。その裁判官には決して行き當りバッタリの所がない。何事も愼重に考慮された規則に基いて行はれ、權力の濫用と裁判の誤謬とを避けるために、幾人もの係員の審査捺印を經ねばならぬことは、幾度繰返しても足りぬように思ふ。

有罪と認められた人々の裁判は愼重に行はれる。總ての證據についての必要な記錄が保存されて居る。どこの監獄でも毎朝十一時に點呼を行ふて收容されてゐる人々の數を檢べる。公衆が囚人の樣子を何でも聞くことの出來る照會部がある。囚人は親戚の訪問を受けることが出來、食物は看守と同じものを食べてゐるが、その外に差入れものを食べることも出來る。

非常委員會の抑壓的職分はこんなものであるが、非常委員會には、これより遙かに重大な積極的職分がある。今や一九二〇年二月二十七日）共和國はその敵に打勝つたので抑壓的職分は漸く不必要になり始め、積極的職分の方が、次第に重大さを加へて來た。共和國は、資本主義の崩壞が總ての國民の上に課した、又は課せんとする問題に當面せねばならぬのである。

非常委員會の最も重要な事業は、經濟的復活を助けることである。委員會は國有の權利を斷行する。委員會は投機者や掠利取得者が蓄め込んだ貨物を沒收して、それを共同分配のための在庫品の中に加へる。例へば紙の缺乏のために非常に多くの[illegible]場が休業せねばならなかつた時、モスコーの非常委員會が一人の前所主の倉庫から四千ヤードも發見したことなどもある。

非常委員會が國の產業的復活に貢献する今一つの方法は、管理者技師及び勞働者の間に於ける勞働規律の勵行である。ソヴエット政府成立後暫くの間、高級傭員の中に組織的なサボタージュの行はれたことを忘れてはならぬ。今や彼等の大部分はソヴエット共和國のために、その専門的智識を傾倒してゐる。けれども總ての階級を通じて多少の監督は必要なので、これには非常委員會の一員たる監督者が任命されて居る。是等の人々は工場委員會の逮捕命令の外、拘引する權利をもたぬ。のみならず、拘引は極めて稀である。七千乃至八千の勞働者が傭はれてゐるソルモフの大工場で六ケ月を過した一同志は、その間に拘引された者が僅かに二三名にすぎなかつたことを語つた。監督者の仕事は、刑罰よりも豫防とが主となつてゐる。

かうした監督者の一隊が鐵道事務の能率を上げることにも携はつてゐる。現在の狀態の下に於ては、鐵道方面での仕事の方が、工場内の監督よりも更に重大である。鐵道の監督者は鐵道事務のあらゆる事情に通じた専門家である。

非常委員會のかような平和的な、

ヴイエツト政府の權力は、ロシアの宏大な全版圖に行き亘るようになつた。威嚇の組織（此名稱が不當なものであることは、私の指摘した通りである）は國内及び國外よりの反革命の攻撃によつて餘儀なくされた。然し新しい狀態の下に於ては、委員會は生産と運輸との組織に全力を注ぐことが出來る。

死刑が廢せられた今日、ソヴエツト政府が以前には死刑に價した危險な犯罪人をどう處分するかを、君は怪まれるであらう。私はさういふ人達が收容されてゐる勞働所を近頃視察した時のことを書いてそれの説明に代へようと思ふ。

共和國は、犯罪人は資本制度の犧牲者であり、隨つてこれを罰するよりも矯正すべきであるといふ思想に出發して、是等の不幸な人を勞働を教へるような環境の中に置くことゝした、其處では別に初歩の教育も授けられることになつてゐる。罪人は銘々に適した注意を受けることが出來るように種々の範疇に分類せられて居る。此罪人の選り分け方は有名なモスコーのブチイルキ監獄で行はれ、其處から彼等は適當と認められた場所へ送られそこで有用な市民となるように教育されるのである。

目下の處適當な建物が少いので、共和國はその計畫を十分に進行することが出來ない。けれどもとにかくその仕事の行はれてゐる限りでは、これは可なり[illegible]に一大革命を[illegible]したものであるといふことが出來る。

勞働所には拘束を伴ふ所、自由を拘束せざる所、婦人收容所、少年收容所、變態者收容所等の種類がある、資本主義の黑疫培養所たる舊式の監獄は面目を一變し、新しい空氣が監獄にまではいり込んで、其處を清潔に衛生的にした。古い監獄は到底改善の見込なしと認められたる職業的犯罪人のための養老院として保存されて居る。監獄の主たる目的は、罪人に能ふ限り健全な正常な、生活を許し、勞働や教育に依て彼等を矯正することに在る。

勞働所は模範的な機關である。内部の制度がどういふ風になつてゐるかを知つて貰ふために、私は一昨年（一九一九年）五月一日付の訓示の中の一節を引用しよう。『勞働所は各々浴場、洗濯所、及び清潔な部屋を備へ付くべきこと。一日の勞働は八時間以内たるべきこと、萬一時間外勞働の必要ある際には、其時間外勞働は嚴正に共和國の勞働法に遵うて行はるべきこと。賃金は當該地方における普通の職業に對して定められたものと同額なるべきこと。囚人は自分ら自身の中から代表者を選出し、その代表者が囚人と管理側との折衝に當る。熱心に勞働する者は[illegible]

[illegible]

深くどれほど巧みにそれが遂行せられて居るかを見て一驚を喫したのである。私に深い印象となつたのは、セント・ジュレの勞働所であつた。此處では囚人は（重罪犯なるがために）他所よりも厳重な取締を受けてゐた。例へば他の勞働所ではすべて附近の町へ働きに出掛けるといふことを許されてゐるが、此處ではそれが許されてゐない。私は此古い修道院に住んでゐる總ての囚人と實際に話をしてみた。それは恰度日曜だつたので、囚人は働いてゐなかつた。彼等は自分達の部屋で喋舌つたり、本を讀んだり、書き物をしたり、將棊やドミノをやつたり火の周りに集つたりしてゐた。その中一人として食物の不平を云ふ者はなかつた。實際彼等は戰線に出て居らぬ時の赤軍の食糧割當と平等の割當を待つて居り、パン、馬鈴薯、オートミール、キヤベツ、鮭、そら豆、脂肪（鹽、砂糖、煙草は云ふに及ばず）などを與へられて居るのである。

此勞働所には四百二十四人の囚人が居り、その中四十三人は婦人である。婦人は特に婦人宗を持つてゐる。典獄は皆に對して親切である。彼の態度は、厳格ではあるが優しくて、慈父的とでもいひたいやうである。彼の監督の下にある囚人達もさう云つてゐる。彼はいかにも親切に、そして誇らばしげに作業室や鍛冶場や、鑞著け場や、ブリキ工場や、建築工場や、製本工場や、裁縫工場を見せて呉れた。彼は囚人をして仕事に興味を感じさせ、特に好きな仕事に鋭々を振向けようと腐心してゐた。

私は浴場をも參觀した。身體檢査は毎日行はれる。一寸でも病氣の徴候が見えれば、患者は病院に移される。私は圖書館をも參觀したが、此處は囚人自身の責任の下におかれ書籍は教育省から供給される。囚人が演劇をする劇場がある。囚人の演劇團は勞働所の内部でも、町でも演出することを許されてゐる。勞働所内における囚人は絶對の自由を樂んで居る。無いものはたゞ看守ばかりである。勞働と自由との結合、これがソヴイエット政府がこれらの人たちを救はうとする道である。脫獄者は滅多にない。所罰室があるのは事實であるが、此處はいつでも空である。

セント・ジョン勞働所及び私の視察した他の總ての勞働所の狀態はこんなものである。セント・ジョンと他の勞働所との唯一の相異は他所の方がもつと自由なことだけである。他所では囚人は町へ出て働き、友人や親戚を訪問することも出來、食物の中に菓子とか果物とかいふものを添へて貰へる。共和國の監獄制度についてはまだ幾らでも話すことはあるが、他の總ての方向に於けると等しく、革命が此方面にどういふ影[illegible]といふことについては、[illegible]

思ふ。」

七

最近にモスコーの革命裁判所長スミノルフの發表した處によると、一九一八年から一九二一年にかけて七百五十件が公判に附せられた。內譯一九一八年には一二六件、一九一九には一九三件、一九二〇年には一三六件、一九二一年八月までに一六二件であつた。總數二千八百八十二名が告發され、內五百八十名は無罪となり、二千四百二名が有罪の宣告を受けた。

一九一八年は被告の中二四・二パーセントが反革命のために有罪となつたが、一九一九年には僅かに一四・四パーセントにすぎなかつた。

一九一八年には二九・八パーセントが投機及び暴利のために宣告を受け、一九二〇年には同じ犯罪者が、五三・七パーセントであつた。

四年間を通じて有罪者總數の七六・三パーセントが職權濫用反革命、及び投機のために宣告を受け、僅かに二三・七パーセントが贋造、强盜、詐欺及び使ひ込み等のために罰せられた。

被告の革命の社會的地位を檢めて見ると、僧侶十六名、商人及び旅團二百六十五名、家內工業者及び職人八十名、自由職業者二百四十九名、政府吏員及官吏人二百十一名、商工業に關する被傭者のうち、精神勞働者五百八十名、勞働者四百二十三名農民百八十三名、定職なきもの二百十一名であつた。これによると無產階級出身の被告は僅かに二九・四パーセントに過ぎぬ。

さて刑罰は、

銃殺……一七四七・四%　集中內收容所へ禁錮……二六六九・〇%　個人的自由を剝奪せる强制勞働……一〇三六四三・一個人的自由を保有する强制勞働一七七・七四條件つきの禁錮……四七六一九・八　他の刑罰……三一九　一三・三百七十八名の銃刑者の中、十名は反革命、四十六名は職權濫用(內三十名は收賄瀆職)、七十四名は强盜、十四名は投機及び殺人等の犯罪を犯した者であつた。被告の大部分は强制勞働に服せられた。『他の刑罰の中の大部分は公職に就く權利の剝奪、政治的權利の剝奪財產の沒收、ロシアの領土よりの追放等がある。

モスコー裁判所の死刑の宣告は全部執行せられた譯でなく、一九減刑せられた者は各種の犯罪を通じて八百八十七名に達し、一百三十名はそのまゝ釋放され、他はみな宣告よりも遙かに輕い刑罰を受けた。

八

ユンに頼まれてロシアの監獄のために囚人を募集しやうといふ　勞農政府すら是を最も苦痛として居るので、避け得られる限り

譯ではなし、これらの記事を讀む方々に『一々安心』したり『有　避けたかつてゐることは論を俟たない。それにも拘らず、かう

難』がつたりする義務を負はせるものでないことはお斷りする　した非常手段を棄て得ないのは、……

までもない。

要するに吾々は、階級鬪爭の存する限り、『勝てば官軍、負ければ賊軍』といふことは動かし難い眞理だと信ずるものである。……されば乙そ世界の無産階級は勝たう〳〵の一心で鬪つてゐるのではなからうか。勝利はどうしたら獲られるか、どうするのが勝利を獲る上に最も效果多き方法であるか、この一事こそは、世界の無産階級に共通の當面の問題である。……

……

……

セキキはこの一事を承認せなかつた、そこで彼等は國内のブルジョアの頤使に甘ずると同時に、他國のブルジョア政府の支持を受け得たのである。そしてそれがために國内の無產階級に依て支配者たるの地位を逐はれたのである。……社會革命黨やメンシエヴヰキ……勞農政府は、社會革命黨員やアナーキスは愚か、共產黨員でも、戰線で軍紀を遵守しなつかたり、革命的行動ある者は銃殺してゐる。吾々は決して是を望ましいこと、喜ばしいことゝは思はぬ、否當事者たる

脚本改作問題の意義

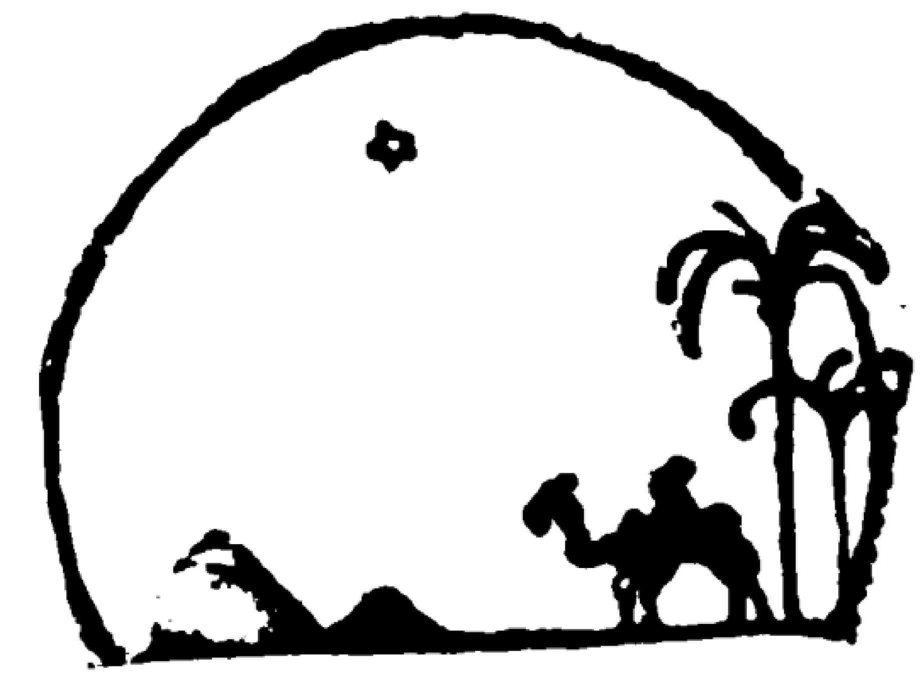
片上伸

帝國劇場株式會社對劇作家協會の脚本改作問題は、その事實もそれに對する批評乃至意見も、既に一と通り世間に知られてゐて、今更この問題の是非を說くにも及ぶまいと思ふが、改造記者への約束によつて、一二の感想を述べて見る。

劇作家協會側の中村吉藏氏が三月十三日の東京朝日紙上に書いたものによると、帝劇と劇作家協會との關係が斷たれるに至つたのは、事件の責任者たる帝劇が、新聞紙上で藝術冒瀆の罪を公けに謝するといふことを拒絕したゝめであるといふ。公衆に向つて自己の非違を謝することを拒絕した帝劇側にどういふ言ひ分があつたのかは知らないが、少くともこの問題を帝劇と劇作家協會との交渉だけで打ち切りにしようとし、公衆に對する責任を表示しようとしない帝劇の態度は、藝術の公共性を無視し、もしくはそれに對して、自分に都合の悪いときだけ鈍感になることの出來るものの態度であつて、帝劇の公衆に對する侮蔑の一表示と見られる。然しながら、この事實は、結局劇藝術が純然たる一個の營利事業としてわづかに成立せしめられてゐる今日の事情から考へると、その形と程度とを異にして、將來も到底完全に防止することの出來ない性質のものである。劇藝術が少數資本家の利得のため、もしくは、せい〴〵道樂半分な利得のために、その經濟上外部上の成立條件を得てゐるかぎり、即ち劇藝術がその藝術本來の性質から私有物としてでなく社會公衆のためのものとして營まれるやうな經濟上外部上の自由な公共的な成立條件を見出だすことの出來ないかぎり、劇藝術がその社會上經濟上の自由を獲得しないかぎり、この種の不安脅威から全く安全であるといふことは到底考へられない。劇作家協會の抗議はこの根本的の脅威を掃蕩する道へ一歩を向けたものと見れば見られる。少くともそこまで行くのでなければ、眞の藝術の自由、殊に劇藝術の如きものの自由は到底獲得しがたいといふことを暗示もしくは明示したところに、この問題の意義が濃厚にせられるといつてもよい。今の文壇で問題となつてゐる階

級爭鬪と藝術との關係の問題の有する半面の意義、即ち藝術を成立せしめる社會的經濟的條件と藝術との關係の意義は、この眼前の事實によつて一反證を得たといふべきである。

今一つは、この問題の爭議に於いて、團結の力が示されたといふことである。劇作家協會の會員のうちからも、いろ／＼の事情から脫退したものや除外例的の立ち場に立つものもあると傳へられてゐるが、とにかく個々人では今までいつも泣きね入りに終つたであらうこの種の爭議に於いて、團結の力が、恐らくははじめて一つの威力を示し得たといふことは愉快である。以上の觀かたを引きくるめて考へると、この脚本改作問題の爭議は藝術冒瀆のために爭つたといへばいへるやうなものの、その冒瀆せられたとする一つの藝術品の價値の如何によつて生じた問題ではなくして、どこまでもその眞意に於いては、一切のものを、藝術をも、殊に公共的性質を多分に有する劇藝術をも一つの私有物と見る資本主義的ブルヂョワジーの組織制度乃至その間から自然に生れてゐる道德感情に對する藝術の解放運動であり、抗爭であり、それのための武器として團結の力を示したものである。この意味でこの問題は藝術上社會上切實な意義を有するものとなつて來る。



肉體美

河東碧梧桐

○

どの國の大使館に往つても、陸海軍のアツタツシの事務所に往つても、物足らないどころか、隨分冷汗の出るやうな軸や掛け額が懸つてゐる――大方は横濱の輸出もので、日光、宮島、富士山と言つた有りふれた刺繍や寫眞、でなくば時代遅れの花鳥山水の板コで押したやうなもの、共鳴に住む人達は、さういふイカサマ物を部屋の裝飾にして、さうして二口目には「少くも日本を代表して　ますから」とこう氣取つていふ――例なのだが、このL大使館の大使の居間には、さういふ心細い物が先づ目にはいらないだけでも居心地がいゝ。L大使は私と同行したO伯をつかまへて「あなた達に會つたから、一つ平生から抱いてゐる疑問を提出しようかナ」と妙な居住居を直して、東洋と西洋の習慣の違ふ裸體觀を述べた。東洋では昔は男女混浴も平氣でやつてゐたやうに、お互がお互の赤裸々な肉體を觀ることを餘り恥かしいとは思はない、が、一旦それが寫眞になるとか、畫になるとかすると妙にこだわつて、何か見るべからざるものを觀ると言つた劇しい羞恥を感ずる――警視廳が美術展覧會の裸體畫をやかましくいふのも、かういふ一般的な感情にも支配されてゐないか――西洋はそれと全く反對で、夜會とか何とかいふ儀式張つた場合の外は、成るべく肉體を隱蔽するのを普通の道徳とする、けれども之れが繪畫となり彫刻となつてゐるものを見るのは、他の風景山水に異ならない、之はどういふ根據に立つ感情の相違だらう、といふのが其の裸體觀の大體だつた。變に曲りくねつた線のみで縫づけられ

てゐるし大使の顔面筋肉が、其の話の中に段々緩ひやかになつて行くのを見た、さうしてこの人にしては意外なことに往意してゐるものだと、酒の出るべき口から砂糖が出て來たやうな甘い感きを感じないわけに往かなかつた。畫伯は、無雜作に「ナニ西洋人だつて近頃は赤裸々な肉體を見たつて平氣ですよ、巴里の寄席にでも往つて御覽なさい、もう眞の八ダカと言つていゝ裸體美が盛んに、イナザラに出ます、西洋人が肉體を見ることを恥るなんテあてにはなりませんよ」と言つて、暗にソンナ舊道德はもう廢れてゐると言はん許りに、一語々々を大使の暢び〳〵した胸の上へ投げつけた。「ハヽアさういふ風に……それぢやア巴里に遊びに行くかナ」と畫伯の投げつけた言葉と心持よく融け合つた愉快さうな微笑を漏らして、この東西相違の裸體觀には兒かついてしまつた。

大使の疑問は、東西兩洋の相違など〻乙構に勿體づけるものでなく、日本に存在した入浴觀念と、繪畫などに對する美術觀念、それらの錯綜した内製に比して、西洋の裸體觀念及美術觀念の歴史的推移が稍方向を異にしてゐる、といふ邊に立脚してゐるのではないか。若し彼此習慣の相違を探求し考察しようとすれば、やがて風俗史の一冊を構成するかも知れぬ、左樣に簡單に片付けてしまふことは出來なくなる。それに就いて思ふ、異性の情交史にうき身をやつす人達は、少くも日本の裸體觀念史位は疾くに完成してをるべきだ。

○

○畫伯の言つた巴里の寄席では、普通フホーリー・ベルゼールとカシノー・ド・パリを双璧とする。共に單純な一幕物を――オーケストラの耳に訴へる音樂と、種々異樣な服裝の目に訴へる精巧的場面で組み立てたもの――一晩に十四五も殆んど幕なしに演じてゐる。中にはカルメンを借用し、アイダを模倣し、又はワグナーやヴエードベンなどの一端を切り取つたものもあり、又は甚しいのになると、男女の密會が同衾の瀬戸際にまで及ぶイカゞはしいものも交つてゐるが、主として女踊り子のダンスを骨子にして、たゞ見た目を變化させる程度のものである、さうして其のダンスの基調に、其の肉體美を露出せしめることを忘れてはゐない。

男裝した團體運動的のダンスを別として、一寸したつなぎに出て來る踊り子でも、腿から下て〻

—(肉體美)—

も穿いてゐない肉體のまゝであるのが普通だ。腕、肩を大袈裟に露出しても、腰部以下をつゝしまやかに包んでをるべき今日までの服裝上の道德は、全く打ち壊されてゐる。どのやうに上肢體を素裸體にしても、双の乳房だけは妙な裝飾を加へて、乳房といふ感じを薄らげるに努めてゐた其の垣一重も突破されて、甘い紅を潮した肉感の波うつ形を舞臺正面に押し進めることも、今では何の羞恥をも感ぜしめないやうだ、舞臺の背景として、書割で濟ませるべきものを、活人畫的に實物で見せる場合があるが、市中の廣場の噴水臺を模したものなどになると、其の裸體彫像そつくりの女を、贅澤にも四五人素裸體にして立たせたり坐らせたりする、何處一つ包み裝ふこともしない丸裸體の肉體が、紅綠白種々の光線によつて陰影を變化させる。

一佛蘭西人は、アノ噴水臺が舞臺の眞中に出て來て、噴水を人格化したダンスを踊るやうな技巧を知らない、と言つて、それら肉體美の單に靜止してゐるのに飽き足らない口吻を漏らしてゐた、實際極度の運動によつて發達した脚部の美を剝いで見せ、女としての節操の具體化とも見られた乳房の飽滿な肉感を開放して、さうして次ぎにどのやうな開旋があるかは、イヤ脚部や胸部の開放に馴れた人間の究極を知らない不滿足性か何を要求するかは、略ぼ想像のつくことだ、フォーリー・ベルゼールの今度の興行は五月頃にすつかり改題して以來もう半年も同じものを演じてゐる、私が巴里に入つた六月に見たものを、大陸を旅行して歸つた十一月まで打ちつゞけてゐるとの事だつた——之によつても其の興行がどれ程見物にうけてゐるかゞわかる——若しあれを改題して更らにより強く見物を惹きつけるものを仕組まうとする時、其の舞臺監督にどのやうな考案趣向が閃めくだらうか、一佛蘭西人の言ひ草は、少くも當事者の頭にはもういつの昔にか響いてゐると想像すべきだ。

言ふまでもなく、上肢體と下肢體の露出から全身の露出に至る距離は、階子の最下段と最上段と程にかけ離れたものではない、既に階子の半ば以上を昇つた頃に一歩の差に過ぎない、腿と乳房とさうして○○、この三つの非常特別に挑發力を包藏してゐると信じられてゐるものに果して挑發力の輕重を測定し得る區別があり得るだらうか、大きに來るものは全身裸體だ、何もオーケストラのすぐ前の椅子を高い値で買ふ必要もあるまい、全裸體の舞踊が舞臺一杯に跳ね

迺はる時期もさう遠い將來ではない、一體そんなに女を裸體にするといふことを問題にしたければならない理由は何處にあるのか、考へやうによれば、何でもない尋常一般の風俗史の一頁ぢやないのか、などゝエトランヂアの一團がカフエーで勝手な觀察や意見を述べたことも一再ではなかつた。

○

伊太利の寄席で私の知つてゐるのは羅馬だけであるが、總てが餘程單純な組織で、唄ひ女踊子も大方は一人づゝであり、其の間に力業や輕業の交る、日本の寄席と大差のないものだつた。其後大陸を旅行して、瑞西、獨逸、スカンヂナビア、丁抹、和蘭、白耳義邊をあさつても大方は舊態依然たるものらしかつた、たゞコツペーハーゲンに、巴里直輸入のものが少し許り交つてゐるに過ぎなかつた。一獨逸人は、南獨逸のミユンヘンあたりは、加特力教徒の巣窟であるから、女はものにならないと言つたこともある。伯林の寄席の中には七月といふ盛夏の頃に、氷を張り詰めらせて、其上でスケートの輕業式なダンスを交へたオペラなどをやるやうな贅澤な眞似をしてゐたにも關らず、肉體美の露出には丸るで沒交渉であるのを見た。

肉體暴露の傾向は、世界中で巴里が傑出してゐる、他との比例を無視して躍進的な進歩?を見せてゐる、藝術家の異口同音にいふ人間の花は、巴里の高根に咲き誇つてゐる、アトリエに於けるモデルの無味乾燥なものでなくて、耳に甘醉の誘惑を高潮する音樂美を加味した、飽滿と觀樂の渦紋を描きつゝ旋律的な運動美を燁々爛漫たらしめてゐるのである。

長く巴里にゐた人は、さる傾向を大戰後の特種な變化だと言つた、戰爭前には曾て見なかつた、早急な發達だと言つた。それに就いて、私は他の一話柄を想ひ出す。戰爭から歸つて來た巴里人の中には、殆んど一般にと言つてもいゝ位或る變態心理的の流行がある、それは各個の肌に觸れるシヤツ下着の類に、婦人用の華美なものや、柔かいものを着用することだ、といふのだ。

戰爭の痛苦に長く虐げられたものが、平和によつて一朝その痛苦から解放された心理的刺戟の境地、硝烟彈雨の下で

—(肉體美)—

久しく性慾の衝動を抑制して來たものが、異性の中に自由に投げ出された時の感情の劇變、それらを人間の先天の習慣性に結びつけて、考案し想像したものを前提として考へれば、朧氣ながらも、巴里の肉體露出的の傾向にも何等かの解釋がつかぬでもない、さうして又た其の傾向がどういふ方向を取つて行くかも畧は見當がつきさうである。

○

久米の仙人が女の白い脛を見て通力を失なつた、といふ童話が唯一のものとして傳はつてゐる東方の君子國と、晩餐夜會の席上では、總ての女性を半裸體にして、其の肉體美を享樂しようとする西方の淫靡國とには、其間自ら大きな差があるものと見ねばならない、けれども東方君子國の女性を、西方淫靡國の女性同樣、それを半裸體にして、果して享樂に値する肉體美があるや否や、先づ之からして問題にせねばならない。

西洋の肉體美體樂史が何時代に始まるのか、私はよくは知らない、併し十六七世紀頃の中世紀の服裝の置物や又は繪畫などによつて見ると、其の傾向は、近い一二世紀の前に始まつてゐると想像して大差はないやうだ。若し美術家が裸體を陳列する時の純美的な頭で、それらの半裸體に接するならば、寧ろ端的な肉體美は、薄暗いアトリエのモデルに比して遙かに生動的であり享樂味も亦遙かに豐かである。女性の肉體美は、其の晩餐夜會の儀禮が其の向上と發展を誘致したと言つてもいゝのではないか。

若し肉體美の體樂が、人間の性慾といふ本能性に萌して、所謂異性憧憬の發露であるといふならば、世界の人種は黑白を問はず、皆一樣に體樂に値する肉體美を持つてゐなければならないことになる、西方の肉體美享樂を直ちに野獸性と觀る早計には與みし難い。けれども等しく野獸性と言つても、そこに程度問題の遺留してゐることを閑却する事は出來ない東洋の弱く陰忍的であり、西洋の強く直動的であることは、或は其の計算の中に加へなければならないかも知れない。

現世體樂の基督教と來世觀樂の佛教とは、其の感化と浸潤の方向が違つてゐる、同じ基督教にしても、舊教と新教の間には心の持ち方の大きな差がある、同じ佛教にしても、大乘と小乘と、印度と日本の間には共に雲泥の如き相違があるけれども、それら宗教の信徒の生活を左右した力を等閑視しない限り、現世肯定と現世否定の信念が肉

一(肉體美)一

體觀の上にも波及してゐないと斷定することは出來ないのだ。

私達が一個の男子として、男尊女卑の國に生れたことを西洋に往つてどれ程感謝するであらうかと思つたことは、案外に事實が裏切つた、西洋の女尊男卑の傾向も、大戰後多少動搖してゐると言つた人がある、現に米國ですら、電車の中で婦人に席を讓ることをしないでもいゝ傾きを示したのは、最近戰爭の後の新らしい事實であつた。本來肉體美を享樂することは、他面に於て女を玩弄視することだ、個性のある一人格としては思ひもよらず、其の人間性をも認めない單なる花として取扱ふ嫌ひさへある、それは、果して女尊男卑の習慣に胚胎してゐるのか、それとも男尊女卑の傾向を助長してゐるのか、其の起因の動機と其の事實の成果とは、之を一直線の上に律することは容易くは出來ない。

生活樣式は同時に各個の肉體構成の基礎である、衣食住の樣式の相違は、即ち肉體構成の差違である、疊の上に坐つて香物で茶漬を食つてゐる者でも、それ自身を美しくする本能を消磨しない限り、そこに外容的な衣裳美を産まずには措かない、椅子に凭つて肉食に飽くものは、よしそれ自身を美しくする本能を自覺したくとも、そこに自らなる肉體美の自然所産がある肉體美の自然所産を玩賞する發明家の發見によつて、次第に保護を加へ、發展を誘致して、其の肉體美の理想的境地に至らしめようとするのは、丁度衣裳美に目覺めた者が、其の綺柄模樣の複雜な要求を滿たすのと同じだ、肉體露出の傾向も亦た其の玩賞と相待つ自然の推移でなければならないではないか。

○

私は巴里で某畫伯の下宿を訪れた時、丁度モデルが來てゐて、其の寫生を終つた時だつた、モデルは一二度同じ部屋で會つたことのある女であつた、私にどうか姑らく部屋の外に出てくれと言つた、さうして其のあとで畫伯に向つて、あの人は畫家ではないのだから私の肉體を見る必要はないのだ、と言つたさうだ。生活の爲めにモデルをしてゐる巴里女でも、其の肉體に對する自尊心はまだ全く消磨してゐないことを、この女に見出して、私は異樣の感想に打たれたのだ。

この女は巴里某座の踊子だつたが、姫は五六ケ月に及んで其座を休まねばならなかつた、舞臺で[illegible]ナリをして、衆人の前に立つてゐたのであらうが、さういふ經驗に慣らされてゐながら、尚ほ其肉體に對する隱蔽的な執着を持つてゐる的確な事實を見せつけられたことが、私を深く驚かせたのだ。總ての踊子や唄ひ女がこの女と同じ自尊心や執着を持つてゐるかどうかは疑問であるとしても、この一例は巴里の全身暴露的な肉體美玩賞の傾向と照らし合せて、アイロニー的な他の感興を喚ぶ材料とならないことはない、少くも肉體美玩賞の外的事實に他の内的深みを附與する一挿話として見る價値を持つてゐる。私は爾來一夜の歡樂を買ふが爲に巴里の寄席を覗くことの興味の大半を殺がれてしまつた。——大正一一、三、一〇——

「眞理の把持」とガンヂの運動

饒平名智太郎

一

ガンヂイの思想は、その「サチアグラハ」(眞理の把持)に於て、最もよく表明されて居る。「サチアグラハ」は、彼の全哲學であり、そして全人格である。彼は多年南亞に在て、白人の人種的侮辱とボア政廳の苛政とに憤激して、彼が國人を率ゐて抵抗するために、深く哲人的考察を試みて案出したる唯一の武器が、「サチアグラハ」であつた。それは又、實に莊嚴雄大なる理想であり、そして人間のあらゆる精心の結晶である、そして壓迫に抵抗する武器としては、實に此上なき屈強、最鋭のもので、幾億の敵に對しても敗北の經驗を必要とせぬ前代未聞の韜略である。

ガンヂイが、この「サチアグラハ」の教理にまで、到達するには、バガヴアド・ギタと印度教とに深刻なる印象を受けて居る。彼の乃父はポルバンダルの宰相でそして克明一徹の人であつた。旦暮ギタを愛誦して、その全卷を暗誦することが出來たといふから、彼の哲人的稟質も又偶然ではないことがわかる、彼の宗教的素質は又母の反映である。彼の母は、實に、熱烈な信仰をもつた印度型の賢い夫人と讃仰されてゐた、彼は少時、智育を主とせし爲懷疑に囚はれしも、母の感化は、よく彼を信仰へと取戻した。又彼が倫敦留學中、所謂荒野の試練に逢はされたときも、彼は、母に對する三つ――酒と肉と女――の禁戒があつたゝめに、救はれたのであつた。其後、彼の心は、生の永遠問題に捉はれて、日夜煩悶するに至つた。友人は、彼に勸むるに聖書の研究を以てしたが、それでも彼の心は癒やされなかつた、そして遂に彼はバガヴアド・ギタの研究に突入して玆に初めて、その透徹崇高なる哲理に心の髄までも、靈感を浴びせられ、全く新世界に導かれたのを見たのであつた。爾來彼は、その心の避難所をギタに見出して靜安を保つことが出來たのである。

ギタは、印度の文學史上に燦たる光

そは紀元前四世紀頃の著にかかり、著者は不明であるが、歴史に題材を取つた一詩の中に、大哲學が織り込まれてある。ウキリアム・ホン・ハンボルトは本書を、世界に比類のない哲學の貢獻だと言つて居る。そはまた、印度の思想家若くは革命家にとつては、唯一の聖典である。實に、愛と正義と平和との深い哲理を說いたものである。ガンヂイに依れば、『六宗敎的敎義』であり、『善と惡との間に行はれる、永遠の戰を取扱つたもので』あり、その『著者は、決して戰爭や暴力を辯護して居らぬ』ものであり又、それは『非暴力の說敎』である。そして『憤怒と激昂のない爭鬪のみが、精神的である』といふことを敎へるのである。

彼の思想、即『サチアグラハ』は實に、このギタの深い哲理に依つて、洗錬され內容附けられて居る。

彼は又、トルストイにも深い憧憬と共鳴を持つて居た。それで彼が南亞に居る頃、フイーニキスといふところに、土地を購ふて、愛と勞働との奉仕生活を原則とする新しい村を建設して、自身、餘暇の折は、他の村人と同じく耕作に從事した。そして眞に自由たらんには、無所有でなければならないといふので、收入の多い辯護士の業務をも放棄したのであつた。彼は、印度敎の金言を絕體に信じた。曰く『潔白、眞理、克己の執

境に徹し得ざる者、及その行する命令
るもいは奢陀怛羅の眞意を解し能はざるものである』と。

二

嘗て、彼は倫敦滯在中、エマーソン俱樂部及平和仲裁協會のハムステツド支部會員に、講演をしたことがあつた。その折、ドウハボル敎徒と南亞に於ける印度人の靈魂反抗に就て言及したのち、『もし全世界が靈魂の存在を信ずるならば、靈魂の力は、暴力に優るといふことを認めなければならない。これこそは實に山をも動かす愛の聖い力である。吾々にこそ、この聖い律を、どこまでも遵奉し通すといふ責任がある』と述べ、更に語を嗣いで、『今日の狂噪的大繁忙に反對を唱へた。そして現代の科學をして此狂噪的大繁忙を可能ならめた諸種の手段卽、鐵道、發動機、電信、電話、飛行機を祝福せずして、却つて、それ等の手段が人間の思想を、人生の主要目的から、脫線せしめつゝある』と絕叫し又、『肉體の安樂が、靈魂の生長を阻止して居る今日に於ては、人間は自己を知る餘裕すら持つて居ない。今日の人は沈思默考のため端座するよりか、新聞や雜誌などを好むと言つたやうな始末である』と述べた。

また、近代文明の繁劇に對するその抗辯中に、『ラスキン族

篤なり』と絕叫し曰、『物質科學のこの發達に、全然英國特有

のものではないが、印度に於けるその影響こそは、幾多の方面に害毒を流す』ものであると。彼は更に、印度に散在して居る聖地を涜すことに言及して曰く、『印度の聖地は、最早神聖ではない、それは、旅行法が、殆んど致命的と云つてもよい位、恐ろしく容易になつて來たゝめに、うぶな人々より物を騙取することを唯一の目的として居る人々が、例の聖地へ乘り込むやうになつて來た。そして巡禮と云へば、必ず煩はしい藪を辿りぬけ河を渡り　多くの危險に遭遇しなければ果されなかつた昔にあつては、かういふ人々はとても目的地にまで到着する氣力はなかつたのである。當時の巡禮は、社會の粹とも云ふべき最上級の人々に依つてのみ企てられ、そして彼等は相互に知己たらんがために、やつて來たものである。それに聖地の目的は、印度を神聖にすることにあつたのである。印度が、英國の統治を受けない以前に存在して居た疫病飢饉は、地方的のものであつたが、今日では交通が開けたゝめ、その地方的疫病飢饉は、一般的に蔓延するやうになつた』と。なほ、唯物主義を、益々旺盛ならしめる災禍を、防がんがためには『印度は、その昔の神聖に立ち歸らさるべからず。その昔の印度の神聖たるや、未だ全く、地を拂へるにはあらず』と力説した。

そして『西洋との接觸は、印度をして、その陥つて居た昏迷狀態から、覺醒させたのである。それで方向さへ誤らなけば、この新精神は、双方の關係――ひいては全世界――に幸福を齎らすに違ひない。もし、日本と同樣に、印度が、泰西の近代文化を採用したならば、英國と印度との間には、永久に、衝突爭鬪の絶え間がないであらう。それにひきかへて、もし印度の古代文化が、今日まで多くの襲撃に抵抗しおほせたように、この最近の襲撃にも抵抗し得て、昔と同樣に、宗教上の教師、精神上の案內者になり得るならば、この時こそ、東西兩洋間に越え難い離闘といふやうなものはなくなるであらう』と、ガンチイは述べた。彼は、更に語を續けて、『吾々の解らない事情もあるにはある、併しながら、人生の主要目的は、正しく生き、正しく考へ正しく行ふことである。併し吾々の思想を、すつかり、肉體に傾注して仕舞ふ時、靈魂は沮喪するであらう……』と述べた。

三

ガンチイは、工業主義に對しては、極端なる嫌惡を抱いて居る。故に、之を基調とする西洋文明に對しても、好意を寄せることは出來なかつた。この西洋文明即、物質文明を糺彈した者に、前世紀に於ては、トルストイ、ソロー、ラスキン等の如き思想家があつた。ガンヂイは、これらの人々

た、そして益々、その自分の信念を深うし堅くするところがあつた。

左に掲ぐるゝのは、彼がその一友人に宛てた書信の拔萃であるが、よく彼の文明觀が表白されて居る。

一、東西兩洋間には、決して越え難い境界はない。

二、純然たる物質的近代文明以外には、兩洋文明即、歐洲文明なるもの　ない。

三、近代文明に觸れない以前の歐洲人は、東洋人と多くの共通點を持つて居た。とにかく、印度の人々及近代文明に觸れて居ない現代歐洲人すら、該文明の子孫よりは、遙によく印度人と共鳴することが出來る。

四、印度を統治して居るのは、英國ではなく、鐵道電信電話其他文明の勝利と云はれる殆ど、全ての發明を通じての近代文明である。

五、ボンベイ、カルカツタ等の印度の主要都市は、本當の災害地域である。

六、もし明日にでも、近代的樣式に基礎を置く印度の自治が、英國の統治に代つたところで、少しも印度がよくなることはない。但英國に漸次と、持ち去られて行く富の幾分かを、印度が保留することは出來る。只、それだけはよくなる譯だ。併し、さうなると、印度は、單に歐米の後塵を拜するに過ぎないことゝなるばかりだ。

七、西洋が殆ど完全に、近代文明を投げ棄てた時にのみ、眞に東西兩洋の融和を見ることが出來る。又東洋が近代文明を採用したときも、西洋は外觀上の融合をすることが出來る。併しながら、その融合たるや、武裝的休戰であつて、云はゞ、獨逸對英國のやうなものだ。この兩國はお互に併存されることを避けんがために、死の神の殿堂に生息して居るのである。

八、如何なる個人、如何なる團體でも、全世界の改造に着手したり、又は、計劃したりすることは、僭越の極みである。甚し、人工的迅速な手段に依つて、この全世界の改造を企圖することは、取りも直さず、不可能事を企てることである。

九、概論すれば、物質的安樂の增加は、決して道德的生長を助成するのではない。

十、醫學は、惡魔使用魔術の精髓である。所謂醫學上の熟練よりも、藪醫者流儀が遙にましてである。

十一、病院といふものは、惡魔が其の管轄範圍を手離さないため、自分の目的のために使用し來つた道具に過ぎない。病院は、惡德、不幸、墮落、眞の奴隷狀態を永續せしめる。私は醫藥治療を受けねばならぬと考へたときは、全然其方に近寄らな

かつた。病院内で行れる忌はしさに參與することは、私にとつてはどうしても罪惡である。花柳病や肺病患者の病院がなかつたら、吾々の間に肺病や性慾上の罪惡は、却つて少くなるだらう。

十二、印度の救濟は、一に過去五十年間に學んだことを學び直すにある。鐵道、電信機、病院、辯護士、醫者などは片つ端から去るべしである。そして所謂上流社會は自覺して、信心深く、且熟慮して單純なる農民生活を送るやうにせねばならぬ。農民生活こそ、生命を與へる誠の幸福であることを自覺すべきである。

十三、印度人全體は、決して機械織りの衣類を着用してはならぬ、たとひ、それが歐洲工場の産物であらうと、印度工場の産物であらうと。

十四、英國は、印度のこの企てを援助することが出來る。それで初めて、英國は、印度を領有して居ることが正當となるであらう。さういふ考を抱いて居る者が、今日英國にも少くはないらしい。

十五、人間の物質狀態を制限するやうに、社會を調整した古代聖賢には、眞の智慧があつた。多分五千年前の粗末な鋤は、今日百姓の使用する鋤である。そこに救濟があるのだ。人々は、かういふ狀態の下では長生きをする現代的生活樣式が初まつて以來、歐羅巴が、未だ嘗て味つたことのない程、極めて大きな比較的平和な生活を人々は送ることが出來る……」

以上の確定的斷案に、彼を導いたものは、眞の『サチアグラハ』の精神であつた。即ち「サチアグラヒ」としての彼の見る文明は、單なる物質文明を意味せず、本當の文明卽、ラッセルの謂ふ『人生の外面的設備よりも、人の思想や感情の中に存する精神的智識的或物』の多重に惠まれる文明のことを指すのであつた。かくて彼は殆んど最近までも印度にあつた、單純なる田園生活への復歸を奬勵し、クロポトキンの說く農業と小工業との連結を企圖しつゝあるものである。

五

ガンヂイは、本當に彼政自身の言の如く、『政治家の假面を冠りたる宗教家』である。彼の功績は、政治を宗教化したところにある。此點に於て彼は、現代世界に於て無雙である。

彼は、××を提唱し印度のスワラジ（自治）を得んとして居るけれど、その手段に於て、決してレーニンの如く暴力に依るにあらず、靈魂の力卽「サチアグラハ」に依つて、その目的に到達せんとして居るのである。

彼に依れば、自由なるものは、

ことに依つて獲得されるものでなく自分を直くし、目眞の印度人となり切ることに依つて、初めて得られるものであるといふのである。暴力は暴力を生む。彼は、銃刀や流血に依つて得られる自由を、印度のために、欲しないと。そして戰場の兵士の勇氣は、瞬間の刺戟に過ぎないが、靈魂の勇氣は、繼續的であつて固執される、それこそ肉體の苦痛である。だから、戰場の勇氣よりもより以上の勇氣が要るといふのである。

彼は云つて居る、「何處の國でも、その勃興に當つては、苦難を經て淨められなかつた國はない。母は子供に生を與へるためには、陣痛の苦しみを受けねばならず、麥の生長には、種子粒は枯死せねばならない。生命は死より出て來るものである。この苦難を通つて淨めらるゝといふ永遠の法則に依らずして、印度はその奴隷狀態より勃興し能ふだらうか？」と、又「進歩の度は、その受ける苦難の度に依る。悩めば悩むほど、大なる進步が得られる」と云つて居る。即彼にとつての印度××はその人民の悩みであり牢獄であり死である。又それは、彼等の瀆罪を意味し洗滌を意味するものである。

かくて彼の精神主義、理想主義的××は、あくまでも徹底的である。彼はスワラジ即政治××と同時に否其先要條件としてスワデシ經濟××を説く、併かも彼の運命は、同時に精神の轉化を意味する。彼は「人々の内心の機を取去らす

ワラジはあり得ない」と云ひ「非協同は、（註ガンヂイの運動）單に、英人の精神のみならず、吾國人の精神の轉化に對する歎願である。實に私はその轉化が、先づ吾國人に起り、次いで當然英國人に起らんことを期待する。永年の機を一個年にして捨め得る國民若しくは、飲酒の習慣を、衣を脫ぎ棄てる如く棄て得る國民及びその固有の産業に復歸して、今まで空費して居た時間を利用して、一個年に六億ルーピーに相當する綿布を織り出すことの出來る國民は、輪廻の國民である、この輪廻は、世界に反應がなければならない。そしてそれは、嘲非者に對しても神の存在と恩寵との確証となるに違ひない、そして印度がこのように生れかはるものなら地上の何者たりとも、印度のスワラジを確立する權利を拒み得ない」と云つて居る。

彼の經濟運動即、スワデシ（國産品使用）は、農業の獎勵と家庭工業たる手紡織の復興と外貨排斥であつて、その爲には、自身、國産綿布の腰卷一枚にて無恥裸體の生活をして、大に國産綿布の使用を人民化せんと勉めて居る。是に依つて是を觀るに、彼は、如何にも機械工業を呪咀し野蠻時代への復歸を計るかのやうにも思はれるけれど、決してさうではない。彼は、「印度の國情に立脚して、本當の消費のための生産を確立し、西洋

を破壞と戰爭とに導きつゝある工業主義そのもの、、輸入を防止しやうと云ふのである。そして彼と云へども、機械其他の文明の利器を全然無視するのではない。たゞ、それが印度の物質的進歩に缺ぐべからざるものであるとして偏重せず、その使用を局限することを可として居るのである。

それは、全ての大思想家に共通のことであるが、彼も又、無政府主義的なところを多量に有つて居る。『全ての人は、革命××××政府の專制と無能率とが、餘りに酷くて耐えられないときは、政府××××××××××××權利がある』と云つたのは、ソローであつたが、ガンヂイの市民的不服の思想は、「サチアグラハ」の當然の歸結ではあるが、又、この言に多くの暗示を受けて居る。

けれども決して、彼は、虛無主義者ではない。宗教に於ては、印度教を信じ、神と一神教と再生と救ひと牝牛保護と社會的四階級區分とを信ずるものである。グールー（印度教の教師）と偶像をすらも彼は信ずるのである。全て印度教の本質に屬するものは信ずると、彼は自ら云つて居る。

また、政治に於ても、彼は現在の印度國民議會を以て、將來印度各階級の輿論の府たらしめ、村落に於ては、嘗てあつた自治的コムミユン即、パンチヤヤッツ（五人の執行者ありて社會政治經濟を管掌した）の制度を復活せしむるの理想を持つるのである。そして組織と强權とも彼は信ずる。然し乍ら、少數の特權どころか、××××××××××××××ない點に於て、彼は眞に自由の化身とも烽火とも云ふべきである。

五

ガンヂイは、二十餘年間南阿生活に於てその同胞が、白人の頤使、虐待を受くるを見るに忍びず、市民權の保留と、苛政の撤廢を求むるに、「サチアグラハ」を適用し、あらゆる危害を物ともせず、奮鬪一貫した。そして一九一四年、歸國以來も依然、英國の自由主義を信任し、協同を與へて、英國を支持することに依りて、印度の自由を贏ち得んと思つて居たので、彼の「サチアグラハ」は、たゞ英帝國の領土内に於ての問題のみに應用されて居た。然るに、英國の帝國主義と爲政者の×××××××××とは、遂にガンヂイをして全く絕望せしめる秋が來た。彼の「サチアグラハ」は、今や、英帝國其物を惡として、その解體に對つて振り翳されるに至つた。かくて從來英政府に與へた全ての協同を撤回するといふ意味に於て、非暴力的非協同運動の名を以て呼び、史上に帶て見ざる大規模の精神的組織運動となつて現はれたのである。

由來、印度の文

つたが、歐洲大戰の勃發するや、パンジヤブの一地方を除いては、一般に平靜であつた。そして人民は、英帝國參戰の主義に賛成して、人間に物資に公債に多大の犠牲を拂はせられた。彼等は溫和派と急進派の別なく、等しく印度のため、自治を獲得するに絶好の機會として、一意專心英帝國を支持したのである、然るに一面、積極的に自治運動をなす者があつた。ベサント夫人とチラクを以て其代表とする。彼等の宣傳の結果、自治を要求するの機運は、印度の政界に澎湃なるに至つた。當時戰爭に依ほ、印度の兵卒と物資とを搾取する必要に置かれて居た英帝國は、この勢を觀取し、一九一七年の八月二十二日、印度大臣モンタギユーをして遂に、適當なる時機に、印度に責任政府を設置する意のあることを宣明させた。この結果として、モンタギユーは、同年の冬印度を歷訪して政　を視察し、翌四月歸英の後、發表したのが所謂モンタギユー・チエルムスフオード改革案であつた。

この改革案の内容は、印度の民意を裏切つて、實に姑息的で國内の溫和派をさへも滿足せしむることが出來なかつた。

ところが、間もなく印度政府は、事務大臣の許可を得て、ロウラツト氏を主席とする五人の委員を任命した。その目的は、印度に於ける革命運動に關する調査報告と、さうした事件に關する難問を討究し、且取扱上の法規に關して政府の[illegible]かるのが主であつた。その委員の調査に係る印度の革命運動の起原、經過、分派の狀態其他革命對策としての防壓法案を添へた報告書が、一九一八年六月十九日に發表された。これを見た國内の急進派は、果して、一様に振ひ立つて政府攻擊を開始した、そしてカルカツタでは騷動が起つた。次いで、翌年の二月この法案は帝國立法會議に附せられたが、印度人側は一人も殘らず反對を聲明した。委員附託の結果、多少修正されたけれど、依然賛成者が少なかつた。

此時ガンヂイは、多くの同志と策應して、連名の公開狀を新聞紙上に寄せて、ロウラツド法案が、もしも、法律となるやうなことがあるならば、それに對して市民的抵抗を企てるだらう。尤もその鬪爭においては、決して人命なり、財產を侵すことなく、全然暴力から離脱して、眞理に從ふて行動するであら・といふ宣言を以てした。かくして、國内の反對氣勢は、彼に依[illegible]て代表されるに至つた。各方面よりかゝる猛烈なる反對が[illegible]たにも拘らず、三月十八日遂に該法律案は可決された。そ[illegible]後は、同志の先頭に立つて、三月三十日には、該法案通過に[illegible]する抗議として、各商店の一般罷業を行ふ準備をした。其[illegible]なつて四月の六日に、永久的ハータル（一般罷業）の[illegible]と[illegible]

變更された。此日卽三月三十日には、ハータルが實現され、デーリーにては、これに應じない者があつたゝめに、遂に暴力の爭鬪に化してしまつた。そしてそれを序曲として、他の都市でも市民が鼎沸し、騷動は止まなつた。ガンヂイは、デーリーに赴かんとしたが、官權のために、ボンベイに拘束されて其意を果すことが出來なかつた。彼の逮捕を聞いた、アーメダバドー—彼の根據地—にも暴動があつた。この法案の通過に對する「サチアグラヒ」の態度は、飽くまでも非暴力的で市民的抵抗を宣して、禁止的文書を出して民衆に頒布したが、暴動一味には加はらなかつた。更に四月六日には、ラホルに於てハータルが一般的に成功した。翌七日は業務が平常のとほり復活され、九日には印度教の祭日に當るので、演說會が各所に開かれ、回印兩教徒合同が强調され、十日にはガンヂイが、檢束された報に依つて、又、新たなるハータルが行はれ、晚方には英人街の襲撃を見た。その翌朝には回印兩教徒合同といふ前例のない演說會が開かれたが、閉會後、野次も加はつて秩序を亂し、群衆は市內を行進して擾亂化するに至つた。以上はロウラット法發表當時に於ける印度人民の反感の表徵であつた。ガンヂイは此時以來、彼の「サチアグラハ」を市民的抵抗に適用するに勉めた。

六

更に四月十三日、アムリザーに於て重大事變が發生した、それこそ英國官憲オドワイヤーに依る、××××××××であつて、實に文明人に行はれた恐るべき非人道であつた。それは「サチアグラハ」の同志たるが辯護士の放逐命令とロウラット法に因をなした屋外集會に對つて、機關銃を發砲し二千人近くの×××××したのであつた。この殘虐に憤激したる人民の感は、再び各所を暴動化せしめた。孟買にありしガンヂイは、痛くそを歎き、「サチアグラヒ」をして一時市民的抵抗を中止し、官憲と協力して秩序維持に勉め、彼等の立場を鮮明にするところがあつた。

英國政府が、印度回教徒の不安を惹起し、隨つて全印度の民心を失したる事件として、今一つカリフアト問題があつた。大戰の危機に際しては、英政府が印度の懷柔策として、幾多の誓言をなしたうちに、この問題は含まれて居た。ロイド・ジョルジは、曾て、土耳古の首府と領土を占領してその存在に對して挑戰するやうなことをしないと誓言したことがあつた。然るに彼は美事、それを裏切つた。そして英佛の聯合軍は、首府を占領して、バシヤと國民黨とを壓迫したのである。

こゝに於て、し、

して、ガンヂイは、ハータルを採用し、十二月に行はるべき平和祝祭のボイコットの準備に取掛つた。かくて彼の運動は着々と成功を收めたのである。

越へて一九二〇年には、非協同の宣傳が一般的となつた。印度に於ける政治的中心機關の、四十年の生長を經て來て居るのは、印度國民會である。此年の九月、同議會はラヂ・パト・ライ會長の下に、臨時會を開き、ガンヂイの提案したる「政府に對する非協同」の方策を討議の結果、絶對多數にて可決してその政綱としたのであつた。即、國民議會はロウラット法案の撤廢、パンジャブ虐殺事件及對土問題の救濟解決とそして、自治の施行を見るまでは、非暴力的非協同の政策を維持するといふ宣言をした。その決議としてのプログラムは、

一、爵位及名譽職の返上並に政府より任命された公職の辭退。
二、政府の發企に係る一切の會合への出席拒絶。
三、政府より補助を受け若くは直接政府經營に係る學校より學生を退學せしめ各地に國民學校を設立し收容すること。
四、漸次に辯護士及訴訟者に依つて法廷をボイコットし、私立の裁判所を備けて、私爭を判決すること。
五、軍職、官職の放棄及メソポタミアに從軍する義勇兵及軍夫募集に應ぜざること。
六、改革された立法會議の議員候補者たることを中止し、又選擧人側に於ても、投票をボイコット
七、外貨のボイコット

といふのであつた。

更に又、十二月の例會に於ては、愛蘭獨立運動に對する同情と××××××××ボイコット及び非協同を一層強行することに就ての決議を通過させた。

ガンヂイの運動が、その「サチアグラハ」の精神が、一旦印度國民議會の政綱となりて以來印度の政治運動は、全く彼に依りて統一され、指導されることゝなり、そして國民議會の會員も急激に增加した。彼は、手紡織の復興と義勇軍即、「サチアグラヒ」の募集に大車輪の活躍を見せた。チラック自治基金の募集に當つては、三ケ月にして五百萬弗を集め得て、全國に紡績車の配附をした。

かゝる間にも彼の精神を未だ十分體得しない人々の中には、暴力に訴ふるものもあつた。彼は、その度に、斷食と祈禱とを以て嚴かに暴力の靜止するのを待つのが常であつた。

去年の十二月に開かれた國民議會の例會に於ては、その全執行權を擧げてガンヂイに委托するの決議があつた。尚ほ、その當時の決議は自治を早速確立すること、異宗教徒間に於ける統一親善を計ること、手紡織の普及、國産綿布使用及宗教的禁酒の遵守其他土耳古とパシヤに對する援護を決議し更に、義勇軍

國の入國宣誓等をも決議した。その宣誓の中には全ての暴力を用ひざること、又宗教と國家の爲めには、禁錮放逐乃至は死をも甘受するといつたやうな個條があつた。

非協同運動のプログラムは、かくて歩一歩、進捗して、最近に於ては、その最後の階梯たる納稅の市民的拒絶をも、バルドリ地方にて開始するに至つた。然るにチョウライ地方に於ける暴動は、ガンヂイをして、未だ、市民的納稅拒絶を行ひ得るの雰圍氣にあらずと思はしめ、之を自發的に撤回し、彼自身は五日間の斷食を以て、この暴行を悼むところがあつた。

チェルムスフォード卿の抑壓政策に反して、現太守レヂング卿は、大に自由政策を標榜した、ガンヂイをも引見して、今日に到つたもので、印度の事態の急なるものがあるのを見て、英政府を慫慂して大にカリフアト問題に於て、讓歩をなし、事局を救はんとして居たのだが、突如、政府は統一黨の壓迫を受けて、モンタギューを罷免しガンヂイを逮捕せしめ來るべき巴里の近東會議に於て、對土政策に讓歩の意志なきを示して、故に對印政策の逆轉を見せた。

ガンヂイは、豫てより逮捕を覺悟し、「眞の非協同者は、勇氣があり聰明であるから、決して、私の逮捕に依り激昂して暴行を演ずることをしないであらう」、「私こそ逮捕されなければならない」と云つて居た。

ガンヂイの「サチアグラハ」の力が勝つか、英國の帝國主義が勝つか、ここに將來に向つて大きな謎が投げられた。

平凡語

サンガア夫人のこと

菊池寛

サンガア夫人の來朝に就いて、政府當局者の採つた態度も滅茶苦茶だつたが、新聞紙の態度なども自分に慊らなかつた。

ある新聞紙などは、サンガア夫人のことなどは、何うでもいゝ。どうせ大問題ぢやないのだからと云つたやうな口吻を洩してゐた。自分は、もつと避妊問題を眞面目に考へたい。避妊問題は、もつと眞面目に考へらるべき問題だと思ふ。

子供が、澤山あると云ふことは、ある人々に取つては、人生の最大不幸だ。自分の家のつひ、近所に一の勞働者の家族が、住んで居る。夫婦に子供が五人ある。夫は、鐵工所の職工らしいが、さう收入はないらしい。妻君と長男とが、夕刊を賣つたり、內職をしたりして、一家七人が漸く、口を糊して居る。夫婦は、長男が大きくなるのを、一日千秋の思で待つてゐた。所が、長男は去年の春やつと小學校を卒業して、會社の給仕に出たので、夫婦が愁眉を開いて居ると去年の夏、父と一所に荒川へ水泳に行つて、父の目の前で溺死した。父は、その死體を、二日がゝりで見付け、水膨れになつたのを、荒川から小石川まで、擔いで歸つて來た。二里以上の間を、水膨れのした重い屍體を、擔いで歸つた父としての愛と、一子の屍體を運ぶ車賃にさへ窮して居る貧乏とを合せて、考へた時、自分は胸がつまつた。役に立つ長男が、死んで幼いのが四人殘つた。下の子は、四つでやつと母親の手を離れたばかりである　それだのに、妻君はこの正月、更に新しい子供を產んだ。難產で、生死の境を通つて、まだ病床に居る。小作りのいつも、頭を撫で付けた人の好

い妻君のことを考へると、自分はいつも、心が暗くなる。

この妻君は、湯屋で自分の妻に會ふと、自分の妻が、一子を産んだまゝ、後を産まないのを、不思議がつて居るさうである。出産を、不可抗力として、それと苦戰惡鬪して居る、この悲慘な母親を思ふとき、私は多産を以て、人間の災害だと思はれずには居られない。

自分の實兄も、薄給の身で、五人の子供を持つて居る。そして、無資産だ。いづれも、幼少だ。さうした子供達の各自の前途のことを考へると心細くなる。

子供が、五人や六人あつても、平氣で居られる役人達や代議士達が、避姙や墮胎に關する法律や行政などをやつて居ることは、可笑しい。彼等に取つては、子供の多いことは、家門の繁榮であり、老後の樂しみであるかも知れないが、それらに取つては、子供の多いことは、地獄であり死である。

役人や貴族達に云はせると、避姙は國力の衰退を來たすと云つたやうなことを云ふ。それならば、國力の基本たるべき子供を、多産し惡戰苦鬪して、養育する勞働者や薄給者を、何故保護しないか。國力の基礎を産む人々に、極度の苦痛に堪えしめ、國力の隆盛から來る美果丈は、自分達丈で、食らうとする所謂權力階級なるものを、自分は呪ひたい。

社會主義者の口吻を眞似るのではないが、産兒制限を罪惡視し、サンガア夫人に講演させない處置位、馬鹿々々しく不當なことはないと思ふ。彼等の或者は云ふ。貧窮者には、避姙もある程度まで必要だらうが、避姙の宣傳は、却つて上流者や中流者に惡用せられると。が、避姙を惡用する位の人間は、豈拱手してサンガア夫人の講演を待たんやである。

社會主義者達は云ふかも知れない。産兒制限などは、枝葉の問題で、根本的の改造をしなければ駄目だと。私は、それがさうでないとは云はない。が然し資本主義の崩壞し、無資産者達が、浮び上ることは何年先のことか分らない。所が、私は避姙を貧窮者達に、宣傳することに依つて、現在の不幸の三分の一は、立所に救濟されると思ふ。例へば、私の近所に住んで居るかの勞働者の夫婦の子供が、多くとも二人位であれば、彼等も相當の貯へも出來、長男の屍骸、水や血の滴る屍骸を二里も擔いで歸るやうな悲慘事はしなくてもいゝと思ふ。

勞働者達の無智に乘じて、出來る丈、子供を産ましめ、彼等が苦闘して育て上げた子供達を、社會の下積
の上に安眠高臥しようとするやうな考へ方は、呪はれた惡魔の考へ方だ。サンガア夫人の講演よりも、さうした考へ方
が、どれほど國家に對して、怖しく有害であるか知れない。産兒制限は、勞働者達に對する、實際的な福音である。サ
ンガア夫人の講演などは、もつとも通俗な通譯を附し、巡査が貧民窟に引札を配り、聽講を勸誘すべきだと思ふ。
それだのに、役人だとか代議士などが、サンガア夫人の來朝に對して、地口を云つたり狂歌を作つたりして居る。そ
んなのを見ると、今に日本も亡びるなと云ふ氣がする。
私は、學者でないから、避姙に就ての理論は知らない。たゞ、私の直覺で、避姙は無産階級の苦痛を輕減し得る簡便な有
力な方法であることを信じて疑はない。

現代劇「女親」改作

帝劇對劇作家協會の紛爭に對する自分の意見は、他にて發表したから、茲ではこの事件を、冷靜に觀察して置きたい
と思ふ。
山本有三の「女親」を見て、大倉鶴彦翁が、イヤな顔をして、改作を命じた。これが、甚だ面白いことだと思ふ。英國の
戯曲家ゴルズワイジイが、劇作家の態度を三つに別けて居る。
第一。公衆の前に、公衆がそれに依つて生活し且つ信じつゝある人生觀や道德を明確に示すこと。
第二。公衆の前に、作家自身が、それに依つて生活し、且つ信じつゝある人生觀と道德とを明に示すこと。
第三に、ゴルスワアジイは、彼自身の態度を掲げて居るが、これは今の場合、必要がないから云はない。
第一の態度は、社會に現存する道德、例へば、大倉鶴彦翁などが、主張するやうな道德を擁護して、公衆に安價なる
慰安を與へる戯曲を作ることである。今まで、劇場關係の作者などに共通な態度である。花柳界の女達を、彼等の信奉
する義理人情道德で泣かし、金持自身や金持の妻君や令孃に對しては、彼等が歡びさうな封建主義道德を是認して彼等

の満足を買ふ態度である。

第二の態度は、近代劇作者に共通する態度である。イブセン。ショオ。ブリウ。多くの社會劇作者、自己の信ずる道徳を、舞臺上に呼號して、舊道徳に生きて居る公衆に挑戰した。そのために、イブセンもショオも、最初は彼等の周圍から、忌み嫌はれた。

「女親」に在る山本有三の道徳が、どんなものかは知らない。然しながら、狂歌に現はれた大倉鶴彦翁の道徳と一致しなかつた事丈け確かであらう 玆でも、日本でも、社會劇に對する舊道徳、舊思想の壓迫が、現はれて來たことを面白く可笑しく思ふ。これが、警視廳などの手を經て居ないところが面い。

近代劇は、何處の國に問はず、その精神に於て、現存せる慣習道徳に對する反抗であり、攻撃である。日本などは、まだ慣習道徳が、カサブタの如く社會生活に、附着して居る。

そのカサブタを剝がすことは、主として近代劇作家の仕事でなければならない。そのカサブタを、剝がすに連れて、そのカサブタの下に隠れて居る人々は、怒り罵り不平を云ふことも、宛も大倉鶴彦翁の「女親」に於けるが如くであらう

山本有三の「女親」は、戯曲として、どれ丈の價値があるかは知れない。が、然し今度の事件がヒントを示して居る戯曲「女親」改作は、立派な生きた現代劇である。若し、自分に暇があれば、脚本として、書き上げて見たいと思ふ。人物及び場割も腹案がある。人物は略々左の通りである

人物。

金谷平八郎。日本劇場の社長。男爵。大實業家。年八十餘歳。舊思想、舊道徳の權化 一生の内に、いろ〳〵惡いことをし、金を貯めて、後、僅に紳士たる體面を保たんとすることに、專心し、口先では尤もらしいことを云ひ、教訓めいた拙い狂歌などを作る。

本山新一郎。日本劇場支配人。年四十五六頃、頑冥なる株主と、藝術家との間に立ち、板挾みになる人。

本山省三。「女親」の作家。年三十五六の作家。氣むづかしい融通の利かぬ藝術家。

小田村勳
小村吉造
長岡末雄
岡村麗堂
遠藤非一
劇作家協會員。いづれも、理想的好藝術家肌の人、藝術家的名分論を說へて一歩も退かざる人々。

木村健吉　同じく會員。實際的な立場より主義として妥協を主張する男。

園枝完一
山野一郎
田村東藏
河野繁治
日本劇場員にして、劇作家協會員を兼ぬ。良心は、藝術家的主張に同感すれども、生活のために、その主張に殉じ得ざる人々。資本主義の世の中に於て。無産者は、その良心にも從ふとを得ざることを示すが如き典型的人物。

相良白村。同じく協會員。日本劇場側に買收せらるゝ人。(かゝる人は實在せざれども、芝居を面白くするために入れる)

大村浩一。侯爵。外交官。芝居好きの人。芝居の問題にはよく、顏を出したがる人。

その他、協會員。日本劇場雇員、新聞記者等多勢。

題目(テーマ)としては、(一)金倉男爵と作者との道德觀念の爭ひ(二)資本主義下に於ける俸給生活者の良心的苦悶(三)協會内に於ける理想家と實際家との爭ひ。このうちの一つだつて、現代劇の題目として、充分である。それに、人物として日本劇場男女優を拉し、株主の妻や令嬢を加へ、男女優の葛藤、株主間の勢力爭ひなどをも背景として描いたならば、更に大戲曲、大社會劇となるであらう。

死の生物學的考察

醫學博士　細谷雄太

一、生物學から觀た死の定義

死の問題について、あらゆる學問的の附議を爲さむに先づ逢着する難關がある。この難關たるや、總ての學問の議論をする場合必ずや出喰はすもので、第一着にそれを征服せねばなら無い。死の問題を討論するのに豫め最も狹義な死の概念が無ければなら無い、また豫備的に明快にして普遍的な死の定義を下さねばなら無い。換言すれば有機體のありとある型に常用して何等悖らざる底の定義を下し置くの必要がある。然らずんば斯の問題の解決は頗る困難なのである。然るに定義と言ふもの丶總ては、常に、一種の命辭に止まらず、その範圍を超脫して、猶ほより多くの意味を示さむとすれば、必ず假說の分子の僞多な、一箇の前提に過ぎぬものに爲る。

吾等は、死に就いて如何の定義を下すか、劈頭から這回に釋然たり得たとする。さすれば死の概念と生の概念とはつきり區別が出來、また同時に無生、即ち無機物の世界の概念とも斷然區別されるわけである。斯う見れば死の定義から人々の期待するところ、一にも二にも死と生との關係に持つて來る。故に、死とは唯だ生との關係を保つてのみ定義を下し得るものと謂ふて好い。

一瞥したるところ斯の見解を以て、死の定義に容れられる丶廣い〱際涯も無き可能性をば、すべて擧示するように見える。けれども是れは、吾等が死に就いての觀察をつゞけて、其の決着點まで一と飛びする底の定義としては、取扱つて居らない、先づ生物に就いて見るに、それ〱特有な化學的工程があるが、吾等は完全に之を一瞥ることは未だ出來ない。即ち生きて居る物質に於ける、個々の化學的な部分性工程でさへ、今日猶ほ無數の生化學的な想像說があつて、多くの學徒を惱ましてるんだ。されば今日吾等が、生々の物質に於ける工程に就いて、一般的生理學的の議論を鬪はして、現在獲たるところは何か、それを簡明に表現するは難い。

代謝に關する知識に外ならぬ。即ち一は多分子的化合物の水分解若しくば酸化分解と稱する所謂異化作用であり、一は自働的に之れに續行する同化作用そのものである。エワルド・ヘリングは四十年前既に實驗に據りて、生々の物質に於ける異化作用及び同化作用の關係を糺明しそれから直ちに、細胞の新陳代謝に適ふ、一般的生理學的の雛形を作らんとした。またウエルボルンは物理學—理論化學のうちから學理を借用して、生々物質の異化作用と同化作用との關係をば、物理化學的に理解せしむるよう努力した。かれこれ綜合すれば、生きて居る物質に於ける工程を、吾等は代謝機能として總括し、現代の理論生理學から之れを見て、既に統一的の觀察が出來て居り、物質代謝の部分は工程に關する生化學的の研究は悉く切つても切れぬ關係を保つ。先づ是れだけは言ひ得ると思ふ。

斯くの如くして生の定義を下すに、最も普遍的な形式は、生きて居る物質の異化作用及び同化作用なりとすれば、是に於て、死の定義の夫れと連絡する一點が標示せらるべきである。これより直ちに、生との關係を保ちて下さるる死の定義は、代謝機能の休止即ち生々の物質の異化作用及び同化作用を失ふもの、是れ死に外ならずてふ暗示を思はしむ。しかしウエルボルンが、代謝機能の休止する一點のみでは、死の定義を十分に表現し得ないと言へる、確に理由がある。ウエルボルンは更にクロウド、ベルナアルの『潜伏する生』と命名した事實を説示したのである。即ち有機體の代謝機能はその有機體の死なんでも長い間引きつゞいて休止したりする。そして條件が變れば、その有機體は潜伏の生より覺醒して、再び特徴ある代謝機能を示すものなんだ。因て死の定義には代謝機能の休止以外に猶ほ其他の箇條を附け加へることになる。それには既にウエルボルンが言明したるが如く、代謝機能の不還性休止と云ふのが妥當のやうだ。斯く觀ずれば、全般に通用して悖らざる底の、死の定義と云へば、生きて居る物質の代謝機能の不還性休止なりと謂ふて、死の特性をさらけ出すものでなければならぬ。

或は死の定義に近似せるもの、總て生活現象の不還性休止をして遂に死亡するを、眼前に確かめねば、猥りに之れを主張し得ぬと云ふべきである。而して最も普遍的な死の定義を下さむとすれば、先づ生の理論生理學的分析を必要としない。是れ生の直ちに生々の物質の異化作用及び同化作用として理解さるゝからである。然かし吾等が深く〳〵死の生理に立ち入らんと試むれば、畢竟、生の理論生理學的分析をば結論とすることゝなり、その結果死の定義の價値いよ〳〵大なることを判然する。吾等が生に對して死と命名するに

居る物質の演出し盡了する、變化の連續としての終局の一節である。その變化は遂に生の休止となり、生き〳〵した有機體が屍となることである。しかし死の科學的解説は猶ほ夥しく説明を要する。即ち死の來るべき條件の、あらゆる可能性を糺明せねばならぬ。生き〳〵した有機體の屍となる迄の變化の全圖を研究し盡さゝばならぬ。斯くて生と關連した死の定義が確立するのである。是に於て、生きて居る物質の諸變化を、總て分析する道が、坦々として開かれ、定義として學問的の價値が認めらるゝのだ。之れを換言すれば、吾等は死の定義として、生の理論生理學的な特性描寫と、切實に結合するものを要望するものである。何れの國にも判り切つた死の定義として、生の不還性休止と言ふては、權威甚だ鮮かなのである、之れに反して既に死の定義として釋明したる、生きて居る物質の代謝機能の不還性休止なりと言へば、面目更新、死の研究にも全然科學的のプログラムを提供するのである。曰く、生き〳〵した物質の代謝に見る變化を、總て自家藥籠中のものと做し、因りて終局は、物質代謝の不還性休止に陷る諸條件を悉く突き止めるのである。玆に吾等は死の定義を、生の理論生理學的な特性描寫と結び付けて仕舞ふのだが、復た死に就いても、理論生理學的の分析に努力することを言明して置く。斯の如く死を解説するは、それのみで既に、死に關するあらゆる議論の基礎となるほど、學問的の價値があるのだ。

二、老衰より死へ

死の問題を附議すれば、老衰の結果である、自然死の概念が通用さるゝのだが、此際何れも常套語として、自然死と云ひ、或は老衰死と云ふも、均しく、生き〳〵した物質が、格別な外界の條件とは無關係にて死に急ぐ、死様を理解するのである。夫等の格別な外界の條件と云へば、此の疾病の病因として數ひ上げらるゝ因子の總てゞある。畢竟するに老衰死とは何等疾病の基因せざる死そのものであらねばならぬ。斯の如く老衰死の定義を下す思想のうちには、この定義が老衰死の意義を、學問的則ち科學的に分析する手掛りと爲すの意があり、從て斯の常套的な老衰死の見解も、吾等は牢乎たる信念を以て、以下續ける觀察の出發點とするのだ。

外界の生の條件に見る、あらゆる變化を、ウエルボルンは刺戟と命名するが吾等も亦之れに賛意を表して置く、而して格別な外界條件として、疾病に因する死を招來するもの、亦刺戟である。是れに由りて、疾病に因せざる死と云へば、先づ簡單に定義を下し得る。即ち刺戟に依りて招來するもので無く、或對に外界の生活條件が全く不變なる

るのだ。さて死を廣く觀れば、疾病に基因するものであつても亦老衰に相繼ぐものであつても無關心なわけである。是れ均しく生きて居る物質の代謝機能に於て、見らるゝ變化の、長短ある連鎖の斷末魔であらねばならぬ。故に死因が老衰よりするものなれば、變化は確に、內界の生活條件に存すべく、這裡の內的生活條件と云へば、卽ち生にとゞめを刺す代謝機能の全積に外ならず。從て老衰死と云へば、內界の生活條件そのものより續發する死なりと定義して差支へ無い。

個體に於ける內界の生活條件の變化は饒多である。而して夫等は先づ外界の生活條件から續發して、成立するもので、一般に進化の命名がある。すべて發生學的の變化は內界の生活條件の變化となり、そして死は夫等進化の最後の位相たるに過ぎない。代謝機能の個々の部分性工程はだん／＼變化して、遂には過不及無く交涉し得ざるの狀態となる。此時が卽ち、內へ／＼交涉しつゝありし機能の連鎖が、一ケ所に於て中絕すること免れない。是れが進化しつゝある關係の死んだ時なのだ。故に老衰死の問題は、個體の發生死のうちの、一位相を表出する死の問題に外ならずと言ふべきである。

故に老衰死の定義を下せば、必然性を以て個體の內界の生活條件に基因して個體發生史の一位相を表現するものだと言ひ得る。また頽齡の變化と稱するに、[illegible]に到り、更にそれより老齡に達するまで、演用せられた、[illegible]ゆる變化の絕頂なのである。是れ明晰なる頭腦を以て、自然死と病死とを立派に差別したマイノオトの言であるが、吾等も亦之れに贊同するものだ。

すべて死に關する專門學的の附議は必ずや斯の定義と連携を保たねばならない。斯の定義に依り、老衰死の概念と病死卽ち疾病に基因する死と犀然差別するの可能性が生ずる。また病死は一箇獨自の題目であり、理論生理學の一領域に於て研究すべきもの、而して是れ病理生理學の理論に基いて論ぜられて居る。この定義を一面から觀れば、老衰死を個體の進化中の必然性なる一位相なりと解釋して居る。換言すれば內界の生活條件の全積を以てせる死なりと目做すのである。また一面から觀れば外界の格別な諸條件がすべて表現されて居るから、從て病的の刺戟として、老衰死の特性描寫を試みるに當りては、勿論有機體の死因とは爲るも先づ觀察より全然抹殺せらるべきものである。

三　人間死のメカニイズム

老衰死を釋明すれば、斯の問題に絞り込まるゝ生理的關係の全體が知されない。しかし此際未だ目的論的の觀點を採り一

即ち細菌の毒素か、腎臓の疾患の伴ふ病的の代謝産物等であり、是れに由りて心臓の筋肉細胞の機能が歇み、遂に心臓が休止するのである。けれども心臓の筋肉細胞は事實に於て未だ死なゝいのだ。リッペルトの曰く、心臓そのものが重症なる場合、例へば重篤なる瓣膜病や心筋炎などでは、約て心臓が、本來の意義の無生となつたが爲め、死の轉歸を取るのでは無い。寧ろ筋肉そのものゝ攣縮が不規則となり、一部分では往々その徑路を失ひ、また其他の心臓機能を不可能ならしむる、心臓の最早や規則立つた機能を、發揮することが出來ぬのだと指摘したのは、確に理由ありと思ふ。筋肉の纖維は此の際、大部分若しくは小部分に於て、機能の營爲不可能となるのである。

斯う見れば心臓の休止しても、大多數の場合は、心臓の筋肉細胞の未だ全く死せずと云ふべきである。蓋し心臓の筋肉細胞は多少とも變化し居らむ、然れども再び都合好き條件の下に來れば、クレアプコがロック液で洗滌した當時の如く、大なり小なり規則立つた心臓機能を促すのである。また全然健康な心臓でも、機能の休止する場合もあり得る。それに、吾輩も既に述べたことがあるが、ノートナゲルは多數の症例を調査して、是れ脳に於ける心臓の神經系統が一種の變化を蒙り、是れに由りて多分心臓麻痺が起ると考察して居る。かの頭部外傷の爲めに死するが如き所のカテゴリイに屬するものと思ふ。今心臓筋肉が全然健康にして頭部外傷で死ぬと云へば、當該迷走の……に就いて、解釋を定めむとすれば心臓へ行く中樞神經系統、……礙が一大原因であらねばならぬ。

この關係を研究して五十步百步の邁進したのはミュウルマンである。既に二十年も前に、ミュウルマンは多細胞の機能の病死が、延髓に於ける樞要な神經中樞の機能中止に因するの假説を述べて居る。即ち多數の病的材料を以て、神經中樞系統の色んな領域に於て、神經節細胞を研究し、就中迷走神經核の當該細胞で、第四腦室の正中線から較外側に在り、心臓機能制止神經とも做さるゝものが、殆んど常に顯著なる色素顆粒性萎縮を現することを發見した。當該の迷走神經細胞に於ける、此種の變化は心臓病にて、最も顯著に現ずるもので、爾他の病的材料に在りても出現すれど、心臓病の場合のように著明でない。是れに由りてミュウルマンは確實に調査した百三十三例の多くは、嚴正なる意味で、死因は心臓への神經中樞に在りとの、意見を抱くに至つたのである。

病死に關する一切の事實に相照らして、リッペルトは老衰死のメカニイズムの附議を試みて居る。リッペルトは[illegible]腦の大なる感受性を力說して居る。

試驗の際の態度で、最も切實に眼前に突きつけられるゝもので、從つて病死そのものゝ出發點が心臟に在るやうな場合でも、感受性の强い腦が先づ死することはなか〳〵多い。心臟の抵抗力は復た從來の經驗よりすれば甚だ大なるもので、殆んど比較にならないのだ。今以上の記述を綜合すれば、多くの病的の場合では死の第一次に腦より始まること疑無く、此際心臟の休止は第二次に起ると云ふのである。斯くの次第で、リッペルトは老衰死を腦死なりと解釋して居るのだ。勿論腦死と云ふけれども、腦の蒙る老齡の現象が直接死の原因となると云ふ意味では無い。否々、消し此の如く解釋すれば誤謬も亦甚だしと謂はねばならぬ。蓋し年齡的萎縮を蒙るものは、身體の臟器の總體なること既定の事實である。故に一二の臟器の機能歇止に死を持つて行く事は絕對に否定せねばならぬ、況んや身體の諸臟器の間には、最も緊密な相互關係があり、從て一二の臟器の系統に於ける頹齡の現象に就いて、孤立的の觀察を爲すはあまり隨意的なるを免かれ無い、故に如上の解釋は稍々不都合なのである。つまり腦又は廣義の中樞神經系統の變化が、著しく前景にさらけ出されて居るのだ。然るに吾等は專ら死のメカニイズムを闡明せむとして居るのである。換言すれば多細胞有機體の箇々の組織にたける、死亡の順序（こんな用語を許すならば）も解析せんとして居るに過ぎ[illegible]りては必ずや稠密な注意を拂はねばならぬ。然らずんば一臟器若くは一つの臟器系統だけが、老衰死の成立に貢獻の責任ありと結論するほどの誤りを敢てすることになるのである。老齡的の變化として、神經節細胞に獨有なりと見へたるものが、今や既に總ての臟器に於て證明し得ることは、適切な報告が甚だ多い。

腦に於ける年齡的變化は、特にその神經節細胞に最も顯著に現はるゝことは事實である。また頹齡と云へば精神的の能力がだん〳〵遞減して遂に亡失するの表徵なること周知の事柄である。この遞減的亡失の意味で、老齡期の精神的變化を記述に出りて表現せる者はロンゼを以て白眉とする。精神の變性は吾等も亦確に、老齡期のジムボールなりと思ふ。しかし精神の變性そのものは、何處までも進行するものだが、所詮生理的の死を誘ふものにあらざるは瞭然たりである。醫師から見れば、既に小兒の頃から早く、精神上極度の變性を相はして居るに拘らず、肉體は依然健康にして高齡に達するものがあるのだ。而してこれは又無理もなく理解することが出來る。要するに精神の變性は、專ら腦の實質に於て、部位の定まつた神經節細胞の群れの、一種の階段を想定せしむるに止まる。

ウトマンやツエリオニイ等の實行した大腦切除の實驗に徵しても明瞭なるが如く動物の大腦を完全に切除したる後も該動物の久しく生存する事を明示されてゐる。ゴルツの手術した犬は其後一年有半も生存して格別な研究目的の爲めに殺された。ツエリオニイの手術した犬の頭は手術の後ちも能く堪へて十六ケ月も生存したることを記載されてある。之れを要するに精神の年齢的變化に依りて生理的死のメカニイズムを理解し得ること甚大では無い。既に變化そのものが茲では專ら腦に關したるものを云々して居り色々の臟器のうち死亡順序に關して劈頭に屈指せらるべき當該の臟器を指摘しては居らぬ。故に吾等が一段と深く、生理的死のメカニイズムへ邁進しようとすれば勢い腦の內部に就いて、差別を視なければならぬ。嚮きに病死の例を考察した時に、心臟の機能を調節する神經中樞の機能休止に依り招來することを述べた。是れに由りて、亦生理的死のメカニイズムに關しても、延髓に局在する神經中樞の機能休止が、依然主因たるの假說をなすは敢て難事では無い。加之ならず此の假說を證明するの事相も鮮少では無いのだ。先づ病死の時の現象との比類である。病死の場合には嚮きに述べた如く、勿論死亡を意味する必要は無いとは云へ、延髓に於ける心臟の神經中樞の機能休止が顯はるゝのである。また次ぎの事實がある。彼の老齢期の精神能力は、その範圍の縮少を免かれざる、是れ我

的の原則なるが、往々老人の精神的活力の甚だ衰退せざるのみか、外觀からは、完全に活躍するの新らしさを失はざる類例は、實際に僅少では無い。こんな場合には必ず、其人は精神的に格別高級なる者である。從て高齢に達するまで徹頭徹尾精神の清新さを抱き、而して死するものと考へさせられるのだ。其期に臨んでは、老人は恰も、死の奇襲を受けるようなもので、心臟の機能休止に先だち、たゞ極めて短期の病臥を餘儀なくせらるゝばかりだ。是に於て這間の事相を考察すると、彼の呼吸中樞や循環中樞である延髓の神經節細胞は腦皮質に於ける神經節細胞よりも早期に機能の休止するのである。此等の事例に就いて、リツペルトは次ぎの關係を述べて居るが、先づ適切なりと思ふ。

人の多くは陷り易い弊竇なるが、然かしどんな場合にも現在する老衰の特性を看過してはならぬ。八十歲乃至九十歲の老人が尙ほ矍鑠として、精神的に活躍して居れば吾等の驚異を禁ぜぬところである。そして吾等が實際に觀察するところと、吾等が高齢の者に期待するところと、全然相反すれば、何人も老人の能力をば常に實際より以上に評價するのである。吾等が實際の眞相を一層合理的に判斷せすとすれば、

ろに、其の老齢にしては此れも彼れも不思議に消耗なりとするように言明すべきである。この文意を吟味して見れば、一方にまた精神的の能力の本質上既に減退しつゝあることと矢張り言外に現はれて居る。然れども精神的に高級なる老人及び其の精神的特性を觀察する吾等は、年齢が年齢だからと云ふ思考も失せて、彼れ此れの境遇にも精力絶倫の事實から、眼前の眩惑せられるのである。ゲーテは次ぎの數言に歌ふて、這間の消息を能罷にも表現して居る。

齢は慇懃な男だ。
一度は一度より門を叩く、
しかし誰も今『御這入り』と言はぬ、
それでも戸の外にも居らふとはせぬ、
錠を捩ぢあけて急いで這入る、
斯うなれば、あれば對人だとへは謂ふ。

脳皮質と延髄とにて、その神經節細胞が機能の休止するに遅速ありと云ふが、之れが根據となるの論點ありや。

リッベルトの提唱したるものから、要點である數項を述べて見る。神經節細胞は佳良なる輸血と豊富なる榮養と相俟つて、順調なれば、練習を繼續して、是れに異り原形質の流通盛となり、代謝物質の排出が良好となるのである。また榮養が佳良なれば、これだけで既に萎縮せる原形質で以て其の機

彼の精神能力の微弱な人間に觀るやうな比例でなく、切實なるものがある。能率の増進が萎縮とは反對に働くこと、吾等は人間の生理學から數千の經驗を得て、好くも知悉して居る。曩きにも既述したが、ミユウルマンは此の問題を追及して研究を進めた。そして頸膨大の左側と右側とで、色素性萎縮の差別ありや否やを對象として檢索した。その結果は、活動の激げしい右側ではあまり活動せぬ左側よりも、色素性萎縮の甚だ進歩せさることを發見せりと云ふ。ミユウルマンの研究した症例は、其數比較的に多い、即ち總數十八例で、その死亡の時の行年十八歳から四十六歳のものであつた。その當時ミユウルマンが實行した方法は顯微鏡下に連續切片を檢査して、運動神經の神經節細胞のうち色素豊富なものを數へるのであつた。而して細胞の斷面を見て、色素豊富のものと稱せるは色素顆粒著明にして、黒色斑として認めらるゝものを指摘したのである。十六例は右側の左側に比較して色素沈着僅微であつた。更らに十八例の所見を平均して、之れを觀れば、右側にては細胞總數の七四、八パアセントが色素豊富なる形勢を示し、左側にては之れと異なり、細胞總數の七七、二パアセントが色素顆粒豊富であつた。

ミユウルマンの此の實驗が意味すべき點無きや否や、是れ專

議論する必要は無い。吾等は多細胞有機體の死を以て、其の進化に於ける一箇の位相なりと解釋して居る。之れを詳言すれば、老衰死は多細胞有機體の細胞の萎縮に基因して來り、是れ細胞の代謝的產物を以て飽和する爲めである。厚虫研究の事實よりすれば、恰もリツペルトが組織學的の材料に據りたるが如く、全然確乎たる解説を爲す。

細胞の頽齡萎縮は總ての組織に於て時を同じうして起るもので無い。是れ屢々既述したところだ。格別注目するの價値あるは、腦の神經節細胞に於ける年齡的變化である。しかし腦に於ける箇々の部分にても亦年齡的變化の來る。その時期は同一でない。此等事實上の關係は、命數を確定する場合、意義の甚だ大なるものがある。卽ち彼のビユツテルが結論したるが如く、筆頭に死ぬる組織は、その共同作能の細胞圏內では掛け換ひ無いもので、因りて當該種別の命數の定まるも明瞭なるものである。更らに次の事相を忘れてはならぬ。一定の部分の組織が頽齡萎縮に依り甚だしく障礙を蒙り、爲めに該有機體の代謝機能に於て、和衷協同の進路の衰へる場合にも其の頽齡萎縮が左程進行の甚だしからざるに同一の細胞圏內に於ける他細胞の死を誘致するのである。

多細胞有機體の細胞及び組織の死亡順序は箇々の種別に依りて異るようである。之れに關する吾等の知識は今日猶ほ殆ど[illegible]閑に附せられて居る。それよりも人間に在りては、這間の關係の較々曙光を認めしめる。これより吾等は人間の自然死の關する、眼前の事實材料を提げて、澤山に多細胞動物體の死のメカニイズムに就いて、大略の[illegible]を摑むと試みるのだ。その際は又、多細胞動物の體內組織に於ける、死亡順序は、茲に比較生理學の材料の先づ儼存する限り、寧ろ個々の種別を通じて劃一なるべきを確信するに至らむ。

この問題を研究して重大なる補遺を世人に示したるものノートナアゲルやリツペルト等ありしが、近時またミユウルマン出で論文を發表した。

ノートナアゲルは病死のあらむ限りの種類に就いて分析を試み、而して是れに由り、患者の罹る疾病は種々あらふとも、死樣は種々ならず、依然心臟死の一つなるを確信するに至つた。卽ち心臟の本來の疾病を除外して論じても、ノートナアゲルの統計に依れば神經中樞系統の疾病でも、呼吸器の疾患でもまた腎臟の病氣でも、傳染病でも、其の死樣は心臟死であつたと云ふ。またノートナアゲルが臨床上の分析を試みたる處、結局心臟の休止に依りて死の現象來るを確めた。故に曰く、人間は殆んど常に心臟より死すと。症例

經中樞系統の疾患に於て(腦出血やら、頭部の外傷やら、縊介激動やら)死の基因は腦に於ける中樞神經のうち心臟へ行く神經を關係あるところが、麻痺するにあるのだ。しかし世人は斯かる場合、常に死の腦より來るを證認しようとする。それも精神の機能の曠廢せらるゝのがあまりに顯著だから無理もない。然るに斯の意識亡失(即ち失心)そのものは此の場合決して直接の死因では無いのだ。格別に明瞭なるは傳染病の場合の狀況である、次第々々に心臟衰弱の加はるや遂に醫師の治療方針は悉くこゝに集注することになる。此の場合は治療の方針はすべて心臟に因りて司配さるゝのである。どんな傳染病でも死んで仕舞へば箇々の臟器や臟器系統の局所變化は種々雜多で歸一せぬのであらう。然れども臨床上の分析を精密にすれば、終局は心臟の筋肉運動が徹底的に斷絕して死の現象の來るとが明瞭になる。即ち心臟の筋肉は當該の病毒の爲めに、その組織の造構に變化を起すことになるのだ。疾病の輕重やら、死の轉歸の近づく危險　察するに、傳染病では屢々解剖的變化の程度とは毫も平行せぬやうである。たゞ當該の傳染病の症狀は解剖的變化の程度で、それぞれ特徵を認めしめる。這間の消息を最も好く語るものと云へは、チフテリイの症例を回顧せねばならぬ。この疾病では、局所の症狀は毫も現はれざるか、或は甚だ顯著ならさる間に、心臟麻痺は案外早期的に起り得るのである。加之ならず、チフテリイの局所病勢の全く治癒して、正規の狀態に回復したる後ち、突然心臟麻痺が起り、取り止めようも無く、鬼籍に上るに餘儀無きものさへある。

されど吾等がノートナアゲルの試みたるが如く、臨床上の分析の結果を信賴し過ぎて、どんな病氣の場合も、心臟の筋肉の細胞が有機體の爾他細胞よりも逸早く死するの結論を下したならば、また間違なのである。之れを實際に徵するも、心臟の機能が歇んだとて、直ちに心臟の筋肉細胞の死亡を意味することは毛頭無いのだ、それはクルやブコの實驗成蹟も善く證明して居る。クルやブコはチフテリイや肺炎や腦膜炎や腹膜やらで死んだ小兒の心臟を、ロック液の三十七度に溫めた、そして酸素を十分に通じたもので、先づ洗滌し、心臟機能の回春を企圖したところ、その大多數に於て部分的回復の目的を達したのである。こんな場合には即ち、心臟の筋肉細胞の死が、共の有機體の死を誘ふと云ふが如きに、言及してはならぬのだ。たゞ漫然ノートナアゲルの臨床に於ける、分析の結果を觀れば、その口吻が恰も心臟機能の休止の常に人間の死を誘ふと云ふかに響くのである。たゞ吾等は色んな影響の爲めに、心臟の筋肉組織の機能の變ると云ふことだけは云ひ得る。その影響と云へば

顯微鏡の檢索を施行して見て決定すべき問題である。けれども先づ批難すべきものの無いと假定すれば、當該の神經節細胞群の機能の旺盛なればなる丈、色素委縮の僅々なりと結論せねばならぬ。さすれば先きにリツペルトの假説として、精神的に相繼いで活動する人間が、矢張り精神の清新さを保有する經過が永いとの條件を述べたが、このミュウルマンが研究の結果に依り、其の合理的なるの證明が出來たわけである。ミュウルマンまた其の研究の結果に就いて、全然リツペルトと同意味の言明をして居る即ち。細胞の活動が隆盛なれば、輪血の增進する爲め、その榮養は佳良となるのだ。また右脚神經を分布して活躍の盛なる脊髓右側が、容與せらるゝの僅少な左側に比較して、必ず代謝物質の遺殘する、その點の極めて尠き、這回の其因は如何、直ちに解釋せらるゝではないか。換言すればミュウルマンの實驗施行した色素の計算は、一見したところ斯の見解には適合せざるかに觀ぜらるゝ。ミュウルマンは即ち九例で以て、腰髓の一節に於て色素に富む細胞の算用を企て、そして脚膨大に於けると全然異る結果を得た。就中六例では左側よりも右側に於て多量の色素があり、三例にては左側に於て色素が多量なのであつた。更に又舌下神經核に於て、色素豐富な神經節細胞と色素貧弱な細胞とを計算したる結果九例のうち八例が右側の色素含有量僅少なるを見た。然るにミュウルマンは斯く外觀の矛盾した結果を、脊髓の腰膨大に於ける色素に關する所見と、過不及無く合致せしめた。そして特に次の如く論議して居る。實際に於て左右の兩脚は均等に運動はしない。ガウプが揭示した如く、脚に對しては恰も交叉する關係が存在して居るのだ。故に腰髓の部位では左側の前角細胞が右側のそれよりも色素貧弱たるに相違無いのである。舌下神經核に於ける關係ば問題として見れば、左側の大腦半球には言語中樞があつて、また腦皮質中樞より發する神經纖維は左右交叉して右側の舌下神經核に達するのである。それでミュウルマンの所說に從へば、發語運動には主として右側舌下神經核が凡て所望せらるゝわけなのである。是れに由りて之れを觀れば脊髓に於て觀るところと同一の關係があり、右利きは又右側發聲性と關係を斷ち得ぬ。斯く觀じ來れば、右側舌下神經核の左側と比較して色素含有量の僅少なるに斷釋明されるわけである。

ミュウルマンが如上の所見は、吾等も亦氏が抱懷と同意義にて適用すべきや否や、是れ組織學的研究を續行して創めて斷案を下すの唯一の方法たるは勿論である。然れども必ずや理論生理學の知見を顧慮して、ミュウルマンの結論の畢竟、適用し疑問無い趨勢になつて居る。

神經節細胞の機能の旺盛なるや該細胞に於ける色素性萎縮の進行遲々たること合理なるは、多數老人のうち清新の精神を失墜せざる特級に利用しても、亦專ら腦の神經節細胞のうちの一定したもののみに關係するであらふ。色素性萎縮は、精神的に不斷努力する人間では、常に大腦皮質の神經節細胞に於て比較的に遲く觀察されるが、之れに反して爾他の部位に在りては、該萎縮は精神的練習に依り影響も蒙らずに濟むのである。循環や呼吸の神經中樞に於ける神經節細胞の色素性萎縮は、全く精神力の不斷なる場合でも亦、正規の期間通りに進行して、遂には機能の歇止するのである。

斯うして老衰死が、精神力の全然新鮮なる老人を、奇襲する特別な場合を見るに、延髓に於ける呼吸及び循環の中樞の機能休止して生理的死を、誘ふものと認容するのが蓋し理論に適ふことを示して居る。

呼吸及び循環の神經中樞の機能休止に依り、死の招來するてふ解釋は、既述した如く、臨床上の經驗及び組織學的の調査材料に基くものである。然し生理學的の實驗も亦此の見地と略も矛盾するところが無い。フルウランの有名な實驗は、生理學的に呼吸中樞の境界を決め得ることを示して居る。較々之れを詳說すれば島嶼の尖端の兩側に在る神經節細胞即ち生命結節を破壞すれば突如として呼吸休止の起ると云ふのであ

胞動物の自然死に關する研究か、最初から實行の成功して、如上の見地が全然證明せられるのは、最も意義あることである。特にウエ、ハルムスの小管虫類ヒドロイデス、ペクチナタに就いて、その自然死を研究したるものがあり、有名なものだ。這間の事實で、極めて吾等の興味を喚起するは例の呼吸及び循環の神經中樞を表現する、それ〲神經節細胞に於て變化の最も顯著なることなのだ。更らに神經系統に現れるゝ變化は格別顯目の價がある。先づ勞頭から腦及び下咽神經節に破格のこと起り、次いで腦の上半及び後葉が指摘される、此處ではすばらしい神經節の陣を爲して居て、極度まで變化を示すのである。けれども此の動物の中には、物に感應するの極めて微弱な破格者があるのだ。然かしそれ〲の時期を經過して、研究していると從て完全に破壞したる神經節細胞や、現に破壞しかゝつたものに遭遇するとが出來る。恰も腦の該部は腎臟及び血管の機能を司配する神經の發祥地なることを忘却してはならぬ。前方正中に當りて、一對ある神經節細胞は、頭腮まで神經を送るのであるが、此處にも同種の變化が起る、そしてこれは極めて早期に來り、また變化の程度が激げしいのである。たゞ惜むらくは、斯のハルムスの所見の意義如何、殆んどこれを詳說するなく

が無い。

中樞神經系統の一定した部位に在る、神經節細胞の萎縮ありて、死のメカニイズムを演出する大立物たるは、纒々力說したところである。けれども是れに由りて、限りある命數の多細胞動物のすべてが、先づ神經系統の機能休止し、次いであらゆる細胞の團體としての、死を誘ふものなりと、結論したならば、是れ甚だ一方に偏したる方法と云ふべく、認容することは出來ぬ。げにや發達したる神經系統を具ふる種別なれば、神經系統から死ぬること事も無げに認容せねばならぬと思ふ。蓋し屢々架說したるが如く、死のメカニイズムは恆久に一であり又不易であらねばならぬ。彼のヘルトウイヒが命名の神經系統の散漫型なる種別であれば、恐らく無限の命數が有り得よう。實例を揭げて觀れば、海綿、珊瑚及び水母類などがそれである。また局限した神經系統の有る種別の、例令へば水母類や芒刺類では、恐らく、脊椎動物の處で述べた、死の定型とは、狀況が異るよう思はれる。然れども此等の種別は無限の命數のものなるが故に、問題は益々紛糾するのだ、之れに反してハルムスが所見と意義を同じうする昆蟲なれば、脊椎動物に見たる亦如き、自然死の定型を假說せねばならぬ。更らに節足蟲類でも同樣のことが言ひ得る。またホツチが蜂虻にて研究したる結果も、確に此の見解に適ふものである。彼の數知れぬ昆蟲類の數へなく死去る、殊に蜉蝣の如きは頗る著聞して居るものだが、それらは神經系統より死するとを認容されて、創めて理論生理學的に之れを說明し得るのである。吾等は嚮きに、神經細胞の色素性萎縮をば、代謝物質を以てする細胞の背斂なる負荷なりと解釋した。然るに又吾等は代謝物質にて神經系統の急性痲痺を惹起するを知悉して居る。故に一定した神經節細胞の群れが、其の色素性萎縮の爲め、機能の休止するは、神經節細胞の急性痲痺の際に、疲勞の爲め招來するものと、同一の機轉が慢性に永い間、作用するの結果なりと解釋するのだ。昆蟲類の多數は束の間に死んで仕舞ふが、これを直接に脊椎動物の死と對比されない、脊椎動物の死は徐頭的緩漫に發來する萎縮に基因するのである。この二つは程度に依りて差別される。即ち自然死は此れにありては迅速に開展したり、彼れにありては遲々として來る。因てこの二つの死のメカニイズムを觀察すれば、一見全違つて居るように見ゆるが、原則的には毫も差別ある必要も無ければ、また實際其の區別が無いのである。這箇の解釋は、多細胞有機體の發達したる神經系統を具有する以上、即ち自然死を統一的に觀察するを認容するのである。

神經節細胞の機能の旺盛なるや該細胞に於ける色素性萎縮の進行遲々たること合理なるは、多數老人のうち清新の精神を失墜せざる特級に利用しても、亦專ら腦の神經節細胞のうちの一定したもののみに關係するであらふ。色素性萎縮は、精神的に不斷努力する人間では、常に大腦皮質の神經節細胞に於て比較的に遲く觀察されるが、之れに反して爾他の部位に在りては、該萎縮は精神的練習に依り影響も蒙らずに濟むのである。循環や呼吸の神經中樞に於ける神經節細胞の色素性萎縮は、全く精神力の不斷なる場合でも亦、正規の期間通りに進行して、遂には機能の歇止するのである。

斯うして老衰死が、精神力の全然新鮮なる老人を、奇襲する特別な場合を見るに、延髓に於ける呼吸及び循環の中樞の機能休止して生理的死を、誘ふものと認容するのが蓋し理論に適ふことを示して居る。

呼吸及び循環の神經中樞の機能休止に依り、死の招來するてふ解釋は、既述した如く、臨床上の經驗及び組織學的の調査材料に基くものである。然し生理學的の實驗も亦此の見地と毫も矛盾するところが無い。フルウランの有名な實驗は、生理學的に呼吸中樞の境界を決め得ることを示して居る。較々之れを詳說すれば菱腦の尖端の兩側に在る神經節細胞即ち生命結節を破壞すれば突如として呼吸休止の起ると云ふのであ

胞動物の自然死に關する研究が、最初から實行の成功して、如上の見地が全然證明せられるのは、最も趣味あることである。特にウエ、ハルムスの小管虫類ヒドロイデス、ペクチナタに就いて、その自然死を研究したるものがあり、有名なものだ。這間の事實で、極めて吾等の興味を喚起するは例の呼吸及び循環の神經中樞を表現する、それ〴〵神經節細胞に於て變化の最も顯著なることなのだ。更らに神經系統に現れる丶變化は格別矚目の價がある。先づ劈頭から腦及び下咽神經節に破格のこと起り、次いで腦の上葉及び後葉が指摘される、此處ではすばらしい神經節の陣を爲して居て、極度までの變化を示すのである。けれども此の動物の中には、物に感應するの極めて微弱な破格者があるのだ。然かしそれ〴〵の時期を經過して、研究して見ると從て完全に破壞したる神經節細胞や、現に破壞しかゝつたものに遭遇することが出來る。恰も腦の該部は腎臟及び血管の機能を司配する神經の發祥地なることを忘却してはならぬ。前方正中に當りて、一對ある神經節細胞は、頭腮まで神經を送るのであるが、此處にも同種の變化が起る、そしてこれは極めて早期に來り、また變化の程度が激げしいのである。たゞ惜むらくは、斯のハルムスの所見の意義如何、殆んど之れを許價する

が無い。中樞神經系統の一定した部位に在る、神經節細胞の萎縮ありて、死のメカニイズムを演出する大立物たるは、縷々力說したところである。けれども是れに由りて、限りある命數の多細胞動物のすべてが、先づ神經系統の機能休止し、次いであらゆる細胞の闕徴としての、死を誘ふものなりと、結論したならば、是れ甚だ一方に偏したる方法と云ふべく、認容することは出來ぬ。げにや發達したる神經系統を具ふる種別なれば、神經系統から死ぬることも無げに認容せねばならぬと思ふ。蓋し屢々架說したるが如く、死のメカニイズムは恒久に一であり又不易であらねばならぬ。彼のヘルトウイヒが命名の神經系統の散漫型なる種別であれば、恐らく無限の命數が有り得よう。實例を揭げて觀れば、海綿、珊瑚及び水母類などがそれである。また局限した神經系統の有る種別の、例令へば水母類や芒刺類では、恐らく、脊椎動物の處で述べた、死の定型とは、狀況が異るよう思はれる。然れども此等の種別は無限の命數のものなるが故に、問題は益々紛糾するのだ、之れに反してハルムスが所見と意義を同じうする虫類なれば、脊椎動物に見たるが如き、自然死の定型を假說せねばならぬ。更らに節足虫類でも同樣のことが言ひ得る。またホッヂが蜂蛇にて研究したる結果も、確に此の見解に適ふものである。彼の數知れぬ昆虫類の敢へなく死去る、殊に蜉蝣の如きは頗る著聞して居るものだが、これらは神經系統より死するとを認容されて、創めて理論生理學的に之れを證明し得るのである。吾等は疾きに、神經細胞の色素性萎縮をば、代謝物質を以てする細胞の苛斂なる負荷なりと解釋した。然るに又吾等は代謝物質にて神經系統の慾性瘢痒を惹起するを知悉して居る。故に一定した神經節細胞の群れが、其の色素性萎縮の爲め、機能の休止するは、神經節細胞の慾性瘢痒の際に、疲勞の爲め招來するものと、同一の機能が慢性に永い間、作用するの結果なりと解釋するのだ。昆虫類の多數は束の間に死んで仕舞ふが、これを直接に脊椎動物の死と對比されない、脊椎動物の死は徐頭徐緩漫に發來する萎縮に基因するのである。この二つは程度に依りて差別される。即ち自然死は此れにありては迅速に開展したり、彼れにありては遲々として來る。因てこの二つの死のメカニイズムを觀察すれば、一見全く違つて居るように見ゆるが、原則的には毫も差別ある必要も無ければ、また實際些の區別が無いのである。這箇の解釋は、多細胞有機體の發達したる神經系統を共有する以上、即ち自然死を統一的に觀察するを認容するのである。

文藝管見（三）

里見弴

第二章　藝術の姉妹

第一節　藝術とは

この一篇は、標題の示す如く、文藝に對する私見であるが、そこにはいる前に、一般藝術に就いて考へてみなければならない。

藝術とは……？

この問題を前にして、古今東西、何億とも數知れぬ人々が、どんなに腦漿をしぼつたことだらう！　そのうちには、千古不朽の天才も何十人か含まれてゐる。而も、一と一と加へて、と云ふ問題に對して、二と答へるやうなそんな、はつきりした　答は、誰一人として遺してはゐないのだ。藝術とは、曰く何々、曰く何々、と世界中に遺されてゐる有名な言葉だけでも、數へ切れないほどあるに違ひないが、丁度、象がどんなものであるかを云ひ合つた群盲　評のやうに、そのどれもが本當であつて、同時にどれもが當つてゐないことも、また事實だらう。當つてゐない、と云ふよりもその全般を覆ひ盡すやうな一言が得られなかつたのだ。これは、得られないのが當然だらう。

神とは何ぞ、佛とは何ぞ。これに對して、一言で、ほかに動かしようのない答を與へてゐる者があるだらうか。基督でも、釋迦でも、それを幾何學の定義のやうに、ピシリと一言で云ひ盡して了つたとしたら、神も佛も、點とか線とか間とか云ふものと、さして變りのない死物として、人の心になんの感銘をも與へなかつたに相違ない。

神とは、――この答を、基督が躬で示した、一擧手一投足、片言隻語のうちに認めた、自覺してからの一生を云へ

通しに答へて、昇天によつて最後の言葉を結んだのだ。彼自身が、そつくり神になり切つて了つたのだ

佛とは、――この答を、釋迦が、同じく體で示したい、一擧手一投足、片言隻語のうちに籠めた、正覺(しやうがく)にはいつてからの一生を、答へ通しに答へて、涅槃によつて最後の言葉を結んだのだ。即身即佛を目のあたりに表したのだ。

藝術とは、――これに對する答も、全く同じ道理で、一流の一流たる藝術家ならば、體で示すところまで行つてゐたと信じる一擧手一投足、片言隻語、悉くそれ自身に藝術であり、一藝の眞髓に達してからの一生を、答へ通しに答へて死によつて最後の言葉を結んだ筈だ。それほどの人は、幾人と片手に數へるほどもあつたかどうか、讀書を億劫がる私はついぞさう云ふ人たちの傳記を讀んでみたこともないから、はつきりとは云へないが、若しそこまでに臻つた人があつたとすれば、何の必要あつて、ことさらに「藝術とは」との問ひを設け、それに斯々と答へようぞ。一流の一流たる藝術家ならば、決してそんな餘計な言葉を遺さなかつたらうと思ふ。若しまた歷史家が、誰はかう云つた、彼はかう云つたと片つぱしから偉大な藝術家の、定義めいた藝術觀を探し出して來るなら、私は、では世界開闢以來、未だ一人として、即身即藝術の境地に臻つた一流の一流たる藝術家は存在しなかつたのだ、と答へたい。さう考へた方が、私には嬉しく有難い。實際また基督釋迦と肩が並べられるほどの人間が、藝術の方面へばかりさうピョイ／＼出て來さうな筈もない。

そこで、その數段下に位するところの、――佛教で云つたなら、一宗の開祖とでも云ふやうな位置の、偉大な藝術家たちは、身を以つて、とまではいかないでも、悉く彼等の作品でもつて、一生を答へ通しに答へてゐる。然しこの程度ならば、群盲のやり方に相違ひないのだ。三十代で尻尾を撫で、四十代で足をさすり、五十代で腹に觸れ、と云つた具合に、廣大無邊な藝術の、あちらこちらで迷ひ歩かなければならなかつたらう。即身即佛の實相は、釋迦と雖も。ただ死によつてのみ示し得たのだ。この位の目の惡さは、人として當り前どころで、その片鱗を窺ひ得ただけでも、望外の歡びとしてなければならない。

このまた數段下に、――前の例に群盲を引つぱり出して了つたので具合が惡いが、所謂蛇で

盲も盲も大盲と云ふやうなのがある。仕事で答へるほどの力もないうちから。それをたゞの盲とすれば、これは

越とも云ひやうのない話だが、まるで、藝術を、頭から臨でもつけて從つてみたやうな

遜の意味でなく、私が、その群の一人だと云ふよりほかはない……。

大膽不敵にも、かうして「文藝管見」に筆をつけて了つた限りには、乘りかゝつた船で、せめて自分だけには本當と思へるところを、おめず臆せずさらけ出して了ふ。達人のもの笑ひの種にならうとも、それは甘んじてうける覺悟だ。

扨そこで、藝術とは……?

と、私が考へる。

——藝術とは、人の心の奥深く在るものを、引き出し、それに、目に見えたり耳に聞えたりするやうな形を與へる術だ。

まづこんな風に、私は「定義」しよう。で、「人の心の奥深く在るもの」とは何かと、云へば、靈魂だ、誕生の瞬間から既に存在するところの、さうしてその同じ瞬間から、既に多くの「他」をうけ、攝取して、ぢりぢりと肥え太つて行くところの「己」だ(第一章「人」の條參照)もう一つ平易に云ひ換へれば、まごゝろだ。(「天」の條參照)

凡そ人の仕事として、科學的研究だらうと、政治だらうと、實業工業農業などの方面への活動だらうと、一としてまごゝろなしでいける、と云ふものはないのだ。どれもこれも、大概似たりよつたりの人間の間に、甲と乙とを一番はつきり區別立てゝ示すものは、云はずとも「心の奥深くあるもの」で、即「靈魂」で、即「己」で、即「まごゝろ」だ。ことさらに功利的な云ひ表しを以てすれば、誰でもが、一番みづから恃んでいゝもの、優越(アードヴアンテエヂ)と感じていゝもの、お得意の手として十分利用していゝものは、この「己」よりほかにはないのだ、まごゝろよりほかにはないのだ。手先の器用で一身を建てようとする者、圖々しい押しで前途を拓かうとする者、腕力でのさばり出ようとする者、小才を弄して出世のぬけ道を求める者、金でひとの面を張らうとする者、貧乏を賣りものにする者、——すべてさう云ふ人たちは、自分から一番得意の手を封じて了つて、ことさらにはたにも似たりよつたりの力量をもつた人の澤山ゐる、何等獨特な優越(アードヴアンテエヂ)のない方面、——つまり競爭者の多い周圍へ態々はいつて行つて、汗水たらして己を顯出(ディスチングイシュ)しようとあせつてゐる大馬鹿者だ。現代語みたに、功利的に云つてもさう云ふことになる。まして、「まごゝろ」と云ふものは、「一番お得意の手」など

ゝ呼ぶさへも恐れて、さう云ふ氣持で「利用」しようとする瞬間には、もうそこには影も形も止めず消え失せて了ふところのものであることは知れきつた話だがたゞ私は、これほどに偉大な力を、今の世では、弊履の如くに捨て顧ないのを不思議に思つて、少しく皮肉に云つてみたまでだ。人生のどの方面へ持つて行つても一番大切なもの、これがどうして藝術の眞髓にならないでよいものか。——で、前述の「定義」に、「人の心の奥深く在るもの」と、それを第一に持ち出して來たのだ。

次に、それを「引き出し」とか、「目に見えたり耳に聞えたりするやうな形を與へる」とかの字句は、後の章に詳述することにして、こゝでは一應それだけの意味に解して置て頂かう。そこで、最後の「術」と云ふ言葉だが、これはつまり、劍術、手術などの「術」で、劍を使ふ方法とか、外科患部の取扱方とか、それくらゐの意味の「術」だ。然し、場合によつては、自雷也の蛇の妖術とか、天笠徳兵衛の蟇の忍術とか云つて、印を結んでドロ／＼となる、あの「術」の意味にまでも、昇騰することがあることをお斷りして置く。

既に、「人の心の奥深く在るものを、引き出し、それに目に見えたり耳に聞えたりする形を與へる術」であるとすればその「奥深」さは、深ければ深いほどがいゝにきまつてゐる。「他」の色を帶びない、純白の「己」であるほどがいゝ。どこにもかしこにも「まごころ」が動いてゐなければいけない。云ひ換へれば、さま／＼な後天の「他」——血統、約束、經驗が、それ自身の形に於て存在することは、「奥深」さを淺めることだ。だから、謂ふところの智識の如きは、こゝではあまり役立たない。寧ろ、知らずに戸の間に指でも挾んで、「痛ツ」と云ふやうな、直接のもの、——風呂場で地震にあつて飛び出して來たやうな、「まる裸の心」の方が、より「奥深」いところに在るものだ。もう一つ大ざつぱに云へば、藝術のことは、總て理智でなくて感情だ、腦でなくて心臟だ、と云へよう。更に一口に云へば、靈魂の動きだとも云へる。

で、藝術の別名を私に命名させれば、

現靈術。

とでも呼ばふか。幼稚極つた文學の取合だが、靈魂の動きをそとに現はす術、と云ふ意味

第二節　姉妹藝術に就て

文藝の姉妹藝術を擧げれば、云ふまでもなく、美術、音樂、演劇、舞踊、建築だ。次に簡單にそれらに就いて述べよう。

一、美術

まづ繪畫と彫塑とに大別されるだらう。繪畫にも、油繪、水彩畫、墨繪、木版畫、石版畫、銅版畫、蝕刻版畫(エッチング)、鉛筆畫、ペン畫、パステル畫、いろ〳〵ある。彫塑も、大理石、銅、土、木、それ〴〵の材料によつて名稱の異る場合もある。けれども、大體に於て、繪畫は、紙、布、木或は金屬の板、壁などの上に、さま〴〵の顏料その他を、各種の筆、へラ、小刀、針などで、撫でたり刷(は)いたり、なすくりつけたり、刻(ほ)つたり、引つ搔いたりすることによつて作者の「己」を「目に見えるやうに」描きだす「術」だ。

彫塑は、石や木を彫つたり、土をこね上げたりすることによつて、「己」を「目に見えるやうに」立體化する「術」だ。

繪畫には、大體、色(陰陽(かげひなた)即黑と白、を含む)と云ふ「傳統、約束」が課せられる。いかな名匠でも、人間の目に響かない色(光線の震動數が、いろ〳〵の色を網膜に傳達する、とか聞いたやうに思ふ)を以て、「己」を現はすによしないのだ。まして、黑白畫(ブラック・エンド・ホワイト)では、物體の輪郭を「線」でもつて現はすと云ふ「約束」を、どうすることも出來はしない。けれども、さう云ふ「傳統、約束」によつても、絶對の獨創である「己」を現はすことが出來る。さればこそ、その出來上つた品に、「創作」の名が許されるのだ。

彫塑に於ても同じ道理だから、重複を避けて次に移る。

二、音樂

これを大別すれば、創作的方面と、演出的方面とに分けられる。即、作曲する場合と、演奏する場合だ。

前者は、音と云ふ「傳統、約束」の組み合せによつて、絶對の獨創である「己」を現す「術」だ。緒論で云つた通り、いかな名匠でも、人間の耳に響かない音までを取り入れるわけにはいかない。さう云ふ意味では縛られてゐるが、その範圍内の、音のコンビネエションは、全く自由自在である。この場合、目的は「耳に聞えるやうに」だが、出來たもの、――樂譜それ自身は「目に見えるやうに」かゝれる。

後の場合は、そのコンビネエションまで、あらかじめ「約束」されてゐる。けれども、その「約束」の範圍内で、「己」を、音（肉聲或は樂器の）によつて現すこと、前の場合と、多少程度の差があるばかりで、理屈に變りはない。

三、演劇舞踊

便宜上、この二つは一緒に述べて了はふ。

こゝへ來ると、大分ことが面倒になる。まづ脚本としての文藝、背景としての繪畫、唄、下座、オーケストラなどの所謂「鳴もの」としての音樂、大道具としての建築、さう云ふ姉妹が、ドヤドヤと手傳にはひつて來る。さうして、役者の「演技」と云ふものが、主人公として、その眞中に座を占めるのだ。

ところがこの主人公も、近頃では大分その位置が怪しくなつて來てゐる。役者なんぞは脚本の人形だ、いや、活動する小道具だと思つて扱ふべきだ、などゝまるで息の通つてゐないものゝやうに云はれたりする。これに就いて、いま、とやかうと私の考を述べてゐる暇はないから、まづ從來の考に從つて、そつと主人公の座に控えて貰はう。さうすれば音樂の演出的方面で述べた理合で、そのまゝ押せる。即、脚本によつて約束された範圍内で、「己」を、言葉（臺詞廻し）音（臺詞廻し、及び鳴物の類）色（動作、顔の表情、衣裝その他）によつて「目に見え、耳に聞えるやうに」現す「術」だ、と云へる。

舞踊に就いては略す。

四、建築

こゝにも繪畫や、彫刻や、或る意味で音樂すらも手傳にはいる。そのうへ厄介なことには、殆ど總ての場合、實用的た目的が露骨に含まれる。月給七八十圓の人が住むやうな家、とか、銀行としての事務一切が、都合よく執れるやうな建もの、とか、ちよいと氣持よく腰かけられて海や川がすつかり見晴らせる四阿とか、なんかかんか實用を目的としない場合はない。ところで、この「實用」ほど「靈魂の動き」に縁遠いものはないのだ、靈魂にも糧が要る、と云ふ意味で基督の云つた「人はパンのみにて生くる者に非ず」の、あの「パン」によつて代表されたものが、即「實用」の祖だ。それほど昔から、靈魂とはすれ合つてゐる仲の「實用」が、この不幸な姉妹の上に課せられてゐる。

なかでまづ、それが露骨でないものを舉げると、日本で云ふなら、五重の塔、山門などだらう。五重の塔の實用の目的は、一山の僧徒が遙に望んで常に展轉の心を散じ得るがためだ、とか聞いてゐる。謂はゞ「この土平に登る可らず」の親玉のやうなものだが、有體に、建てた人の「まごゝろ」が出てゐるものには、とても他の姉妹たちには現せないやうな、壯大な感じが見られる。山門も、決して石川五右衛門の住居に建てたわけではない。莊嚴美に對する禮讚の心が明かに感じられるのがある。一番實用ばなれがしてゐることから云へば、宇治の鳳凰堂などが尤たるものだらう。兎に角これは大がゝりの材料で、大きな「巳」を「目に見えるやうに」大きく建て上げる「術」で、なんと云つても、姉妹たちの姉様株だが、それだけに「藝術」の名を許せるもの、甚だ稀だ。一口に建築と云つてゝ、銀座通りに轉がつてゐるやうなのまで、どれもこれも「藝術」なわけではない。それは、芝居にしたつて、音樂にしたつて、美術にしたつて文藝にしたつて、「藝術」の名の許せないのが澤山あるのと同じ理合だ。

さて、これで一通り姉妹藝術の紹介がすんだ。そこで、眼目たる文藝についての考察に移らう。

第三章　文藝

第一節　分類

文藝と云ふ言葉を、廣義に解釋すれば、論文も、感想文も、隨筆漫錄のやうなものまでも、含めて含められないことはない。然し玆では、詩歌、戯曲、小說、即、謂ふところの「創作」だけに止める。

また、散文と韻文との二つに、大別することも出來る。この場合には、韻文で書かれた戯曲とか、散文で書かれた詩とか、前の三つの區別とは、おのづから別になつて來る。然し、韻文、即、韻をふんだ文と云へば、取りも直さず詩のことだつたが、最近では、その詩も、だん〱に韻などにはこだはらなくなつて來てゐるから、この區別は、もう殆ど無意味なものとして、玆には捨置いてもよからう。

で、まづ詩歌だが、それらの歷史などに就いては、私は全く知るところがないし、詩は詩、歌は歌、讀んで字の如くで、別に說明を加へる必要もなからう。たゞ俳句も、このうちに含めて考へて置いて頂きたい。その特徴としては、文藝のなかでも、著しく心臟的な傾向の強いものだ。それの強さの順で云へば、俳句、短歌、詩、となるだらう。第一にすなほな感情の流露をもつて尊しとするのだ。その故に、理屈つぽく、パサ〱に乾いたやうな感じの人や、またはさう云ふ小說などに、「あの男には詩がない」とか「あの小說には詩がない」とか云ふ評語を以てするのだが、それだけに時には、悪い意味の殉情主義（センティメンタリズム）に陷り、隨つてさう云ふ感じの代表者に撰まれる。少し舊めかしい例だが、「詩人、星野菫」と云ふが如きだ。

次に、戯曲に就いては、私は可なり今の世の風と折合ひ惡い考へをもつてゐる。私のも、考と云ふより、疑義と云つた方がいゝ程度のものだし、玆でそれを長々論じてゐるわけにはいかないから、ごく簡單に述べて居かう。「對話」の形式なら別だが、戯曲と名がつく限り、舞臺上の効果をよそに作をやるわけにはい

しに云へば、戯曲には、「舞臺」と云ふ「傳統、約束」が、どこまでもうるさく附き纏つてゐる。その意も數倍の不自由を課せられると同時に、一旦上演となれば、小説を讀むのよりは、數倍の感銘を人に與へることが出來る。この特徴を考へたならば、讀みものとして、戯曲を公にすることは、——少しの差支もないが、大して賢い方法ではないと云へる。その意味で「讀む戯曲」など云ふ言葉は、どだい成立しないとすら考へる。戯曲は、その本來の使命として、どこまでも、舞臺に上せ看客席から「見る」べきもので、「讀まれ」るためには、不自由ばかり多くて、益するところが甚だ少ないのだ。或る劇場、或る役者などに隷屬する必要はないが、上演を離れては、極めて意味の薄くなることを覺悟しなければならない。——大體まづかう云ふ考だ。

けれども、さうかと云つて、それ自身獨立しては、文藝のなかに、席がない、と云ふのでは決してない。さればこそ今こゝの分類には擧げてゐるので、それ自身として、立派な文藝であり得ることに、一言半句の不賛成も稱へるものではないが、それには、多少とも讀者が撰まれなければならないと思ふ。つまり、それを、あたまのなかの舞臺に「上演」させながら、讀むだけの力をもつた讀者が必要になつて來る。この關係は、程度に於て大差こそあれ、樂譜を見て、お玉杓子の行列よりもつまらなく感じる人もあれば、素晴しい樂音を聞く思ひに、恍惚となる人もあるやうなものだ。一度も上演されない戯曲でも、だから、立派な文藝であり得るのだが、讀者が限られる意味での不便があることは決して間違ひのない事實だ。

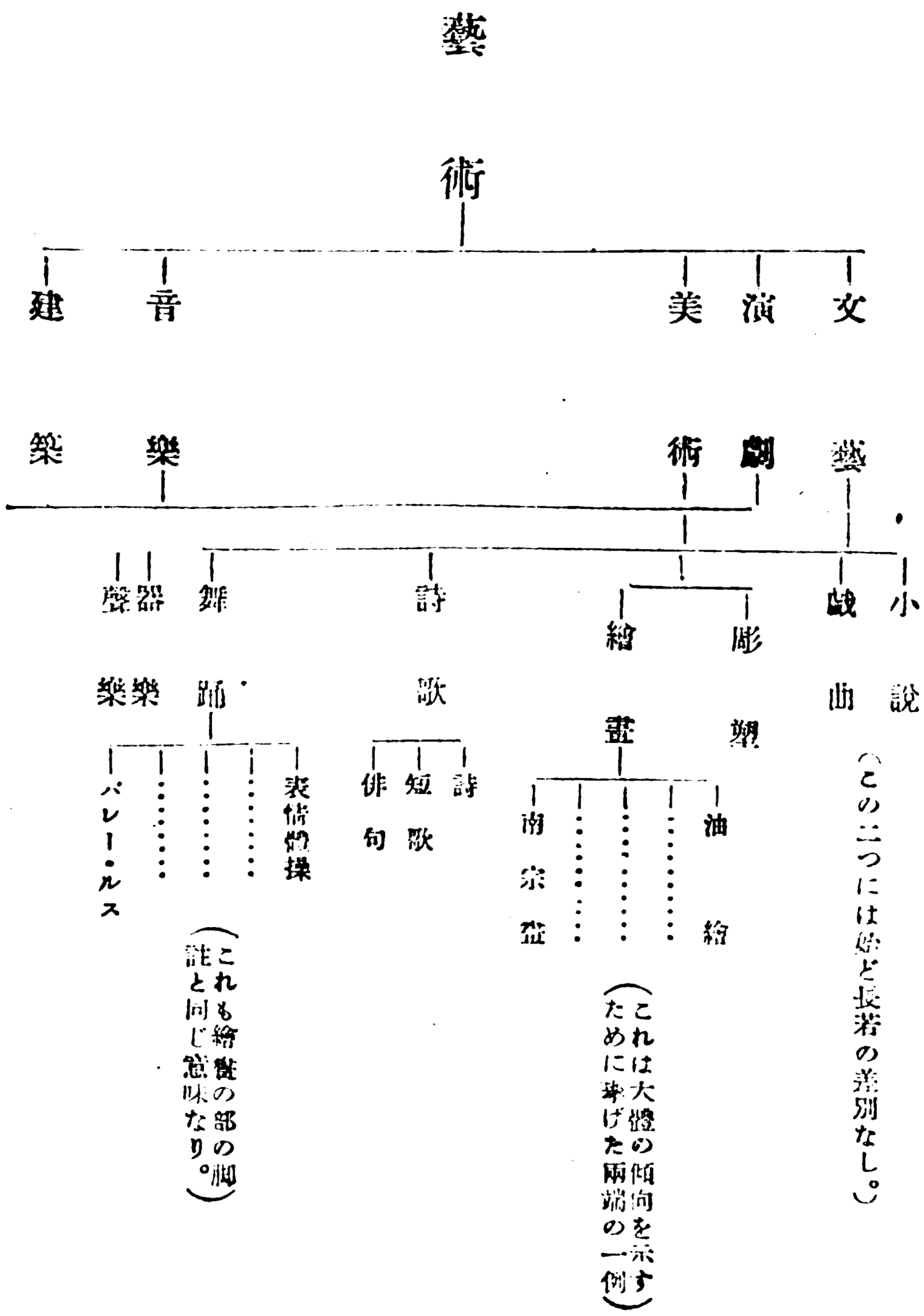
小説については、茲で別段云つて置かなければならないことはない。たゞ私が小説家であるが故に、この「文藝管見」一篇は、引例その他に於て、おのづから小説を大事に說く形によるだらうと思はれる。殊に「技巧論」の細いところへはいつて行く時分には、きつと「小説管見」になつて了ふこと受合だが、それは豫めこゝでお斷りして置く。

第二節　他藝との關係

これは大して重大なことではないが、藝術の分野で、文藝がどう云ふ位置にゐるかを述べてみよう。「綜合藝術」と云

ふ言葉に即いて云ふなら、この五人姉妹が、心靈的なものほどを年輩とし、實際的要素の多いものほどを妹分に見立てどう云ふ系圖を描くか、お慰み半分に次に掲げる。

次の表は、年若の方、つまり末の娘から始まつて、順に左へ／＼と、先に進むほどが姉にあたるものと御承知を願ひたい。



しに云へば、戯曲には「舞臺」と云ふ「係約、約束」が、どこまでもうるさく附き纏つてゐる。その代りにまた、小説より
も數倍の不自由を課せられると同時に、一旦上演となれば、小説を讀むのよりは、數倍の感銘を人に與へることが出來
る。この特徴を考へたならば、讀みものとして、戯曲を公にすることは、——少しの差支もないが、大して賢い方法では
ないと云へる。その意味で「讀む戯曲（レーゼ・ドラマ）」など云ふ言葉は、どだい成立しないとすら考へる。戯曲は、その本來の使命と
して、どこまでも、舞臺に上せ看客席から「見る」べきもので、「讀まれ」るためには、不自由ばかり多くて、益すると
ころが甚だ少ないのだ。或る劇場、或る役者などに隷屬する必要はないが、上演を離れては、極めて意味の薄くなるこ
とを覺悟しなければならない。——大體まづかう云ふ考だ。

けれども、さうかと云つて、それ自身獨立しては、文藝のなかに、席がない、と云ふのでは決してない。さればこそ
今ことの分類には掲げてゐるので、それ自身として、立派な文藝であり得ることに、一言半句の不贊成も称へるもので
はないが、それには、多少とも讀者が撰まれなければならないと思ふ。つまり、それを、あたまのなかの舞臺に「上演」さ
せながら、讀むだけの力をもつた讀者が必要になつて來る。この關係は、程度に於て大差こそあれ、樂譜を見て、お玉
杓子の行列よりもつまらなく感じる人もあれば、素晴しい樂音を聞く思ひに、恍惚となる人もあるやうなものだ。一度
も上演されない戯曲でも、だから、立派な文藝であり得るのだが、讀者が限られる意味での不便（アイステドアンチエヂ）があることは決して
間違ひのない事實だ。

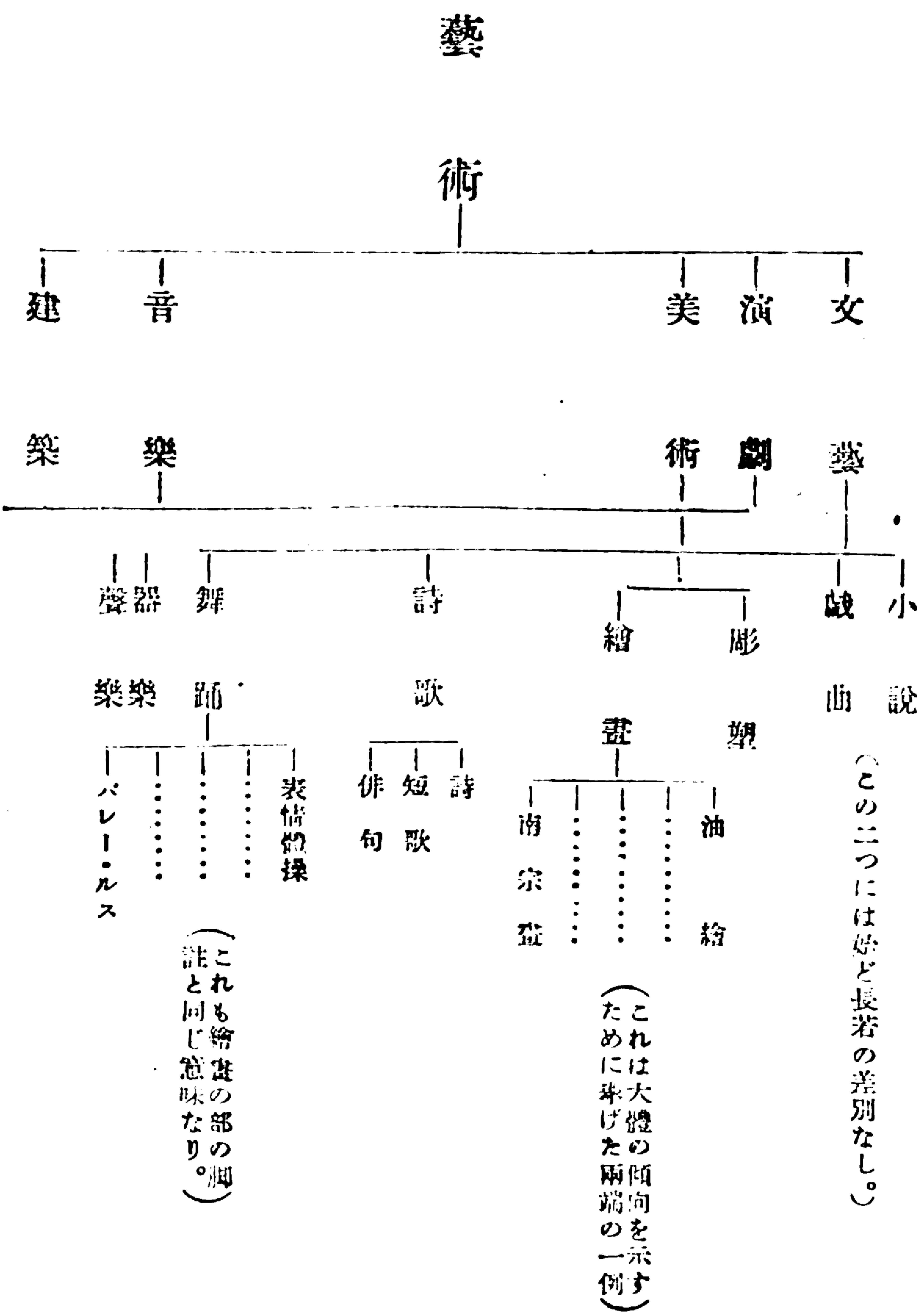
小説についてに、茲で別段云つて置かなければならないことはない。たゞ私が小説家であるが故に、この「文藝管見」
一篇は、引例その他に於て、おのづから小説を大專に說く形（かたち）…によるだらうと思はれる。殊に「技巧論」の細いところへ
はいつて行く時分には、きつと「小説管見」になつて了ふこと受合だが、それは豫めこゝでお斷りして置く。

第二節　他藝との關係

これは決して重大なことではないが、藝術の分野で、文藝がどう云ふ位置にゐるかを述べてみよう。「[illegible]」と云

ふ言葉に即いて云ふなら、この五人姉妹が、心靈的なものほどを年長とし、實際的要素の多いものほどを妹分に見立てどう云ふ系圖を描くか、お慰み半分に次に掲げる。

次の表は、年若の方、つまり末の娘から始まつて、順に左へ／＼と、先に進むほどが姉にあたるものと御承知を願ひたい。



愛の考察

愛に就て

武者小路實篤

神は愛なりと云ふ言葉がある。

人間の言葉の内、美と愛が最も美しい。そしてこの二つが人生を無味乾燥から救つてくれる。この二つのものに人間が無頓着につくられてゐたら我等が生れたと云ふことは、實に不幸なことであり。救ひのない世界に投り出されたことになる。幸ひ、我等は愛と美を感じることが出來る。このことはよろこぶべきことである。

愛するものをもたずにこの世に生ることは濕ひのないことである。生き甲斐のないことである。生きてゐるよろこびは愛からのみくると云つても誇張ではない。何かを愛せずには人は生きてはゆけないやうに出來てゐる。たゞ愛するものを持つことの出來ない人は不幸である。

そして賢い人になるに從つて愛するものが不滅なものになり、偶然の力を借りずにもすめるものになる。即ち賢きものは眞理や、神を愛する。美を愛する。彼は女を愛し、子供を愛し、友人を愛するかも知れない。しかし同時に自分の仕事を愛し、眞理を愛し、神を愛し美を愛する。

愛するものに逢へると云ふことは幸福なことであらう。愛し得る人間を持つことは幸福であらう。しかしそれ等のものは不滅なものでなく、又心のかはりやすいものであり、その愛を同一の力でつゞきうるかどうかはわからないものである。且つそれ等の人を有し得ると云ふことは偶然のことに屬す。しかも相手が自分より長生してくれるかどうかもわからないものである。又よし長生してもいつかはさうながくない未來に於て死ぬものである。それは我等の生命を肯定し得る力があるとは云へない。

それに反して隣人への愛とか、神への愛とか、眞理への愛とか、美への愛とか云ふものはこつちに資格さへ出來れば相手は無くならないと見る方が至當である。しかしその資格をつくることは容易ではない。そのかはり一たんその資格をつくれば、そのよろこびはその人の頭をこわさない限りつゞく。頭をこわしても人間はよろこべるものとは自分には思へない。しかし頭が自由に動く限り、人間の精神が自由に動く限り愛は常に對照を得て、其處に無理からくるよろこびを味はふであらう。

――(愛の考察)――

自分は自分の友人に、細君が他人を愛したために自殺した人がある。人間に與へられた嫉妬と云ふものには恐ろしい力があるのは事實だが、自分の愛人が他人を愛したからと云つて自殺するのでは心細い。個人に執着強い愛をもつことによつて人間は幸福になり得るものではあるが、それによつてのみ自己の生き甲斐を感じ得る人は不安である。

しかし隣人を愛するもの、神を愛するもの、眞理を愛するものは相手から背かれることはない。孔子は女を愛するやうに眞理(?)を愛する人に出逢ふことの困難なことを知らされてゐた。しかしそれ程執着強くないかも知れないが、それ等の愛こそ我等に安住の地を與へる。どう云ふ愛が安住の愛であり、どう云ふ愛が不安な愛であるか。それを本當に知る時愛の價値がきまる。

一時的の愛、偶然に支配される愛は強い力をもつが、我等はそれをよろこべるだけよろこぶのはいゝが、それに執着しすぎる人は愚な人である。不安な感を與へる。その時、その愛が、更に靜かなしかし永遠的で、偶然に支配されない愛にすなほならいゝが、それを邪魔する性質をもつてゐたら危險である。おちつきがない。

人間にはいろ〳〵の本能がある、人間は先づ生なければならない。それには生命を愛することが必要である。生命に執着しすぎる者は幸福になれないが、生命を愛しないものも幸福にはなれない。

次ぎに人間は種族保存の爲に子供を生み、それを育てなければならない。

その爲に戀愛と、親の愛が與へられてゐる。このことは人間にとつて幸福なことゝであるが、之に執着すぎるゝ不幸になる傾をもつてゐる。相手の人格を傷つけないことが必要である。同時に他の愛を生かすことが必要である。

次ぎに人間は兄弟姉妹と助けあつて生ることが必要であ…

その爲に隣人の愛が必要であ…

—愛の考察—

この愛は淡白である。しかし相手は人類のつきない限り亡びないものである。そしてこの愛は萬人の心を感動させる力をもつてゐる。この愛が純粹に生る時、天下に敵なしである。

次ぎに人間は人類の生長に役立つことが必要であるそれには仕事を愛し、道徳を愛し、正義を愛し、知識を愛さねばならぬ。

この愛は一生滿足されまい。そのかはりこの愛を生かせる時その人に權威が生れる。

次ぎに人間は、宇宙と調和することが必要である。その爲に人間は美を愛し、眞理を愛し、萬物を愛するやうにつくられてゐる。

之等すべての愛が、生る時、我等はよろこびを感じる。よろこびは單純な愛程刺激が强い。しかしそれは時間的には短かい。

我等はその愛をさける必要はないが、より高い、より深く廣い愛の生るのをさまたげてはならない。

このすべての愛を調和的に生かすことの出來るものは幸福である。

そして不滅の愛をうけ入れられるやう、常に用意の出來てゐるものには安心がある。

賢者や、聖人は後の方の愛を本當に生…方の愛は彼等には、不安すぎ、又偶然すぎ、又他人と衝突を起し易い恐れがあることを恐れる。しかし體肉をもつた我等にとつては前の方の愛も、否定する必要はない。分に應じて生ることを心得ればいゝ。

しかし後の方の愛さへ生きればそれで滿足出來る人のみ安心立命が出來る。前の喜びにくるものは拒まず、去るものは逐はずの覺悟が大事である。よし一時的には迷つても。

我等は愛を否定してこの世に生きやうとするものに組することは出來ない。

それは生きるよろこびを自己と他人の内に絶滅させるものである。

人間から生きるよろこびを少しでも奪ふな。

生きることは樂ではない。生きるよろこびを人に得させることのみが、その人を本當の意味で生かすことになる。

人間から生きるよろこびを奪つて合理的な社會がつくれると思ふな。それは人間を器械あつかいすることである。

生きるよろこびを人々から奪ふ傾向がある社會は憎むべき社會である。

人々に生きるよろこびを與へよ。

それには人々が愛するものをもち、そしてその愛の生かせる餘地をなるべく多く與へることとである。

子供を親の手から奪ひ、愛人を愛人の手から奪ひ、眞理を愛することを拒む社會は、いくら平等が公平に行はれても、要するに氷の世界である。

我等は愛のいきる社會を要求する。愛を尊重しない人間に人生はわからない。たゞ愛には實にいろ／＼ある。他人によつて支配される愛は、いくら價値が多くとも我等は他の半面をもつ。それは不安であり、嫉妬に燃えやすく、怒りに變じやすい。愛する故に憎むと云ふ言葉がある。しかし眞理や、美や、神を愛するものには愛するが故に憎むと云ふことは出來ない。

自分は個人的な愛　他人と衝突しやすく、不安な愛の價値を、否定しない。それ等がなかつたら人生は淋しすぎるだらう。人々はその愛を求めることによつて更に重い責任をよろこんで荷い、新しき生命　生み、それをよろこんで育てる。

だがその愛だけで我等は救はれない。

神は愛なりと云ふ言葉の意味は自分にははつ切りしないやうにも思ふが、しかし愛のみ我等の生命を更に大きなものにむすびつけ、永遠の一部に我等をむすびつけてくれる唯一のものである。之なしには我等の生命はやがて消えてゆくものにのみ支配されて、我等はこの世の生命にのみ執着して、利害打算の世界にとぢこめられ、益々窮屈になつてゆきつまるであらう。

我等け神の如き愛にふれる時に救はれる。神は愛でないにしろ、我等は神とつながる時愛のみを感じる。そしてその愛が我等をして自己の生命に超越させる。時間や空間に超越させる。自己が宇宙にとけこむ時のよろこびは又かく別であらう。たゞそのとけこむことが自然に出來る時にのみ、我等は最も深き愛を感じる。

愛の極致は死を遙かに超越する。

愛は執着にかはりやすい、我執になりやすい一面をもつてゐる。そしてさう云ふ愛は排他的になりやすい、少くも他にたいし冷淡になり無頓着になりやすい、それが目的ではないが一方に執着するので他方がお留守になり、義理人情を忘れやすくなる。それも一時的にはやむを得ないが、さう云ふ戀がながつゞきしないことは又當然なことである。戀に醉ふだけですごし得るには人生はもつと眞面目なものである。

戀がながつゞきしないことを嘆くものは、虫のいゝ人間である。更に高き愛、更におちついた愛をたのしめることによろこびを感じることが賢いのである。

愛する妻をもち、愛する子をもち、

兄弟姉妹をもち、しかも自分の仕事を愛し、眞理や、美を愛し、しかして人類や神をすなほに愛し得るものは幸福である。そして我等は愛し得るものをいたる所にもつことを感謝すべきである。

その愛の生きることをさまたげるものが地上に多いこと、ことに愛の價値を本當には知らない思想家の多いことは、はがゆいことである。

愛の價値を本當に知ることが、人類の求める世界を生みだす第一の條件である。それを知らぬものに暴力が組することは恐ろしいことである。（二二、三、八）

愛の哲理

杉森孝次郎

愛の衝動は根源的に創造であつた。愛の理想は、今後いよいよますますそれであるべきだ。性愛と母愛とは、愛といふ一語の公適用として見るべくあまりに別の性質と特徴を示す。マクツーガル氏なども多少注意した通り、ある意味の愛は母愛に於いて最も純眞にして完全だ。けれども、ある他の意味に於ては、愛の代表的場合は性愛だ。サンタヤナ氏が『社會に於ける理性』の首章に於いてややその立ち場を鮮明にしてゐる。

性愛と母愛とを識別する可能も必要も、客觀的及び主觀的に成り立つが、創造を本質とするといふ、及びすべきだといふ一點に於いては、性愛と母愛とは相互了解の出來る間柄だ。性愛は母愛の第一歩だ。母愛は性愛の第二歩だ。性愛の結果が子だ。母愛は子をえて始めて可能にされる。子を持つに至るまでの過程は創造だ。子を育てる過程も創造だ。けれども、子を持つことそのことは、新生命を有することであつて、明白に創造だ。出來た子に對する本質的自己成長的興味とも、自覺ともいふべき母愛は、性愛の一進展と見るべきだ。子は母の自己の延長である如くに、子に對する母の愛は夫に對する妻の愛の延長だ。夫妻を、ここでは性愛の指標として假定した。

名稱や文字は愛であつてもなくつても、實在と內容は創造であることが必要だ。口頭奉仕としての愛や、名目崇拜としての愛は、すなはち習俗的僞善としての愛や、偶像迷信としての愛は、概して創造の否定だ。創造なき同情、創造なき憐憫、これらはその例だ。科學と工藝は中世には與らなかつた。ペーガニズムの自己主張が創造的現代生活の基礎力であつた。愛ほど高い自己主張はない筈だ。さうではない愛は、亡びるに値ひするなにものかだ。今後の人類が信奉するに値する活原則としての愛が可能だとするならば、その愛は、自己主張の完全形式でなくてはならん。

子を産むことは創造だ。産まれた子を完成する努力も創造だ。性愛と母愛とは、かやうにして、愛の本質が創造にあることを露骨にかたる。産むことゝ、育てることとの間に、單なる産み育てが意味するよりも遙かに、遙かに複雜深大なる創造的可能と意義とが存する。産みと育ては、創造的全傾向の一、二の特殊發現にほかならない。

性愛と母愛、世にこれよりも奇しき可能も、實在も、現象もあるまい。性愛と母愛を底深く汲まずに、愛人類を論じ、愛世界を說くが如きは、粗大なる過失だ。不完全だ。無自覺だ。

性愛に於いては、人は夢の國を步む。戀愛に於ける人の心を想へ。人は、戀する瞬間に於いて、相手の新生を創造する。戀愛は過半主觀的だといへるのだ。さういへる一大眞實面がある。戀愛心理に於ける對人は、すなはち目的對象としての相手の人は、他の心理に於けると同一對人ではない。他人から見れば存在しない幾多の高級價値が、戀ひする人の目には、戀ひされる人の存在に附着されて映る。ジムメル氏が、他の人人、例へばサンタヤナ氏などと同樣に、この點を注意したことがある。

戀愛に、いひかへれば性愛は、三つの機會を利用する。異性の人の美を目擊對照する機會はその一だ。一層生理的な接觸がもたらすべき快を豫想する慾情の發動する機會はその二だ。交際が增進する機會はその四だ。この三つのうちで、どれが比較的に有勢だとか、主要だとかいふことはいはれない。古來の詩文に於いては、美が誇說された傾きがある。慾情が美以上の機會であつた場合は、從來とても、事實上すくなくなかつたらう。また、最初はなんとも思はなかつたり、却つて反對の方向に思つたりしたにかゝはらず、交際がかさなり進むにつれて、知らず識らずのうちに、相手が戀愛の對象に化して行く場合もすくなくない。戀愛神聖とは、なにを意味していはれたか、しらべて見たことはないが、神聖視すべきものは、恐らく戀愛のみに限らないことは別の問題としても、戀愛を無やみに

靈とか、道徳とかいふことばでいためることは、兎に角聰明な人を相手に、聰明な人がすべきことではない。戀愛の發動の機會には、事實上、美、欲情、交際といふやうな、特に道徳呼ばはりや、精神呼ばはり靈呼ばはりをするに及ばない性質のものが古來、すべての民族に於いて確實に存在したのだ。

右にのべた三様の機會は、大體に於いて、サンタヤナ氏が試みた識別だ。氏もいふ通り、これらの機會は、戀愛の本質でもなければ、種子でさへもない。しかし、土壌ではある。これらの三機會を、それの内外の本質關係、價値關係に從つて究明することは、戀愛を知るために有益だが、それはそれとして、兎に角、戀愛を自然人間の通性を通情から遠くかけ離れたものにして安全がり、あるひはありがたがる習慣は今後保存したくない。

いかなる戀愛神聖論者も、ことばと思想に於いてほど、内心と暗がりに於いては戀愛に於ける自然的、人間的要素に對して盲目でもなければ、不信でもない。勿論こゝでいふことばと思想は、不正直または無自覺を條件としてゐる。

機會に於いて淺明な戀愛が、それみづからの強さに於ては、殆んど絶大ともいふべき程度にしばしば達するところに、戀愛の、いはば不可思議的一特異質がある。また、子を産むとか育てるとか、種族保存とか、生物學的不死とかいふやう[illegible]單なる手段純に考へれば、單なる手段になつてしまふ戀愛が、單なる手段としてはあまりに高い目的價を、事實上、すなはち心理上及び行爲上、まれならず明示し、また暗示するところにも、戀愛の、さらにまたいはねば不可思議的一特異質が想見される。

機會を原因と見、結果を目的と見ることは、人間によつてしばしば犯される過誤だ。ある種類の視覺美、ある種類の感覺美それから親接、これとが戀愛の原因だとしたら、戀愛の質は淺少にして測り知るに困難しないといふ結論は避けがたい。子孫繁殖が戀愛の目的だとしたら、子孫繁殖の價値と、その方法とを知り、信ずるだけの知力と良心ある人には、すなはちある程度以上の思考力なり理性なりを確實に有する人には、戀愛は、その大部分をあげて不用の贅物となるかも知れん。理性と思の發達した人は、多少無味でも、あるひはまづくても、必要の營養とあり、藥餌とあれば、進んで怠らず服用する。戀愛は、單なる味つけであらうか。

子孫繁殖は、人生の偉大な營みであるに聊か疑ひをはさむ餘地はない。人の生存は、多少久しい期間にわたつては、子孫繁殖を待つて始めて可能にされる。いかに強[illegible]な、また[illegible]な[illegible]つけがこれを保護し、[illegible]

い。しかし、時間に於ける一瞬前は、一瞬後を目的としてのみ存在するといふ、またすべきだといふ見かたは、原則的に謬見だ。その假定のもとには、經驗の最後の一瞬間が唯一の目的でその一瞬間に達するまでの全歴史は、それ自身には何らの價値をも持たないといふ判斷が成り立つ。宇宙の進動の最終の一刹那、これのみが有意義であつて、その以前の全時代は、それ自身には無目的の存在と經驗であつたといふ判斷が成り立つのだ。けれども、この判斷は心理的不眞實だ。

渇して水を欲し、水を欲して水をえ、水をえて飲む。それだけの經驗は、それだけですでにある充足價値だ。健康を目的とし、その健康が更にまた或事業を目的とすることはありうる。しかし、これらは、前の充足價値と連結する他の充足價値ではあるが、前の充足價値を内含する充足價値ではない。一人格としては、それらの充足價値に統一的實現を與へべきだが、時間に於ける先件が後件の手段價以外及以上の價値を持たないといふ事理はない。抽象的結果論に對する具體的直覺論の優勝はこゝにもほのめく。全然夢の國を現實に步むが如き性愛心理は、それ自身に大いなる道德的意義を有する。性愛が、それの機會に於いては、兎も角も美に殊緣を有する一事が、すでに偶然ではないのだ。美は、ボンデルバンドなどもいふたやうに、それ自身目的だ。普通道德は結果に對する[illegible]豫想を條件とする。美は直覺だ、戀愛自身が、あげて一大美だ一大美、體驗だ。一大美の創造だ。低級生物からしてが、戀ひの發表をば華裝にし、美聲にし、芳香にし、美的態にすることに、戀愛の一大眞實面が指表される。

知識欲の存在は事實だ。プラグマシズムの一内容は、知るために知るといふ事實の再認でなく、知る以外の目的のために知るといふ事實の再認だ。しかし、治療を目的として病因を知る興味を持つといふ事實があると同時に、病因を知ることを目的として病因の研究に興味を持つといふ事實もある。知識には客觀本位、對象本位と見える一面があるのだ。愛も、母の子に對する場合に於いて、ある一人が異性のある一人または多人に對する場合に於いて、また多少眞實でありうるいはゆる愛人類、愛世界の場合に於いて、無我と見える一面を示す。けれども、知識も、愛も、それの最根抵の眞實相に於いては、無我ではない自己再生だ。自己擴張だ。世界を知ることは、眼界が世界大になることだ。世界を意識することは、自己の意識内容が世界大になることだ。他の一人を愛することは、自己のハートが、自己及びその一人を共通して動悸を打つことだ。自己のハートのそれだけの擴充だ。知識及び愛に於ける遠心的傾向は、[illegible]、

格の求心的傾向の方法だ。實をいふと、人格と限るのはけちだ。遠心的傾向ある知識または愛の出來るいかなる生物も、求心的傾向の方法だといへば精確だ。

愛は、いま述べたばかりの關係とはやゝ別方面の關係から見ても、眞實には自己的だ。戀愛は相手次第のやうだが、それは淺い現象だ。戀愛は自己の本質的必要だ。自己の本質的必要に屬する一大項目だ。その證據はありあまる。人は、他の多くの生物と共通に、及び不共通に、戀ひする必要を自己自身に持つてゐる、異性としての相手が澤山ゐれば、選擇も潤澤になるがその相手が小數に限られてゐれば、戀ひしかたが貧弱になるかといふに、さうではない。戀愛は一人の自己の必要だから、刺戟は弱くても、例へば客觀的または第三者的評價に從へば美でない人に遇うても、その刺戟以上の強い刺激が與へられない限り、すなはち例へば優等美の人に遇はないならば、戀愛はその弱い刺戟に對して依然として強く反應する。發動する。どんなに微弱な刺戟であらうとも、他の現實的及び可能的刺戟がその微弱な刺戟よりさへも一層微弱であるたらば、あるひはその微弱な刺戟のほかには刺戟がないならば、戀愛はどんなに強く明らかにも發動するのだ。戀ひされる人を見て戀ひする人がわかるといふ可能はあるが、これも選擇の自由が多大である場合に於いてだ。また選擇の自由は多大であつても、戀ひされる人は戀ひする人次第だ。同じ人でもその人を戀ひする人が異なれば、實は、その異なる戀ひする人人の意識內容としての、認識對象としての戀ひされる人は、その戀する人人が異なるだけに異なり。戀ひする人の氣質、年齡、それから經驗といつたやうな要素が、戀ひされる人を全然創造したいまでも形成する。戀ひされる人の客觀的存在としての材料に加工する。その加工した結果を、戀ひする人は觀照し、崇拜し、溺愛する。その加工の原則と方法は、しかるに戀ひする人自身の本質的所有だ。出產は自己再生だが、戀愛そのものが出產以上にも微妙なかたちに於いて、自己再生であるのだ 客觀的自己再生が戀愛であり、瞬間的自己再生が母愛だ。橫に自己を延ばす努力が戀愛だ。縱に自己を擴げる努力が母愛だ。遠心することによつて求心は可能にされ、分裂することによつて統一は可能にされる。宇宙の奧義、殊にも生物、なかんづく人生の最深原則は、普通に考へられるやうな無我では決してないが、普通に考へられるやうな貪慾や吝嗇ではなほさら決してない。

人は戀愛せずにはゐられない。戀愛せずにはゐられない。カントの範疇にも似て。戀愛は主觀の形式だからだ。單なる慾情と觀察でさへも。選擇可能のすくない場合に於いては、美くら

戀愛の一考察（一）

ゐをば創造して補足する。美ぐらゐといつては、美を補觀するやうだが、戀愛の内容的本質的價値から見れば、普通にはゆる美貌、美姿、美態といふが如きは、淺はかな價値だ。美がつまらないではない。戀愛そのものの價値が高いのだ。人は、戀愛せずには自分がすまない。戀愛が自己主張でないなら、自己主張とは絶對に無意義のことばだ。

藝術、科學、ひろく文化は創造的だ。藝術は性的衝動の變現だと見る人にある高い智力が認められる。性的衝動は、戀愛の形式にのみ誘導されべきではなからう。性的衝動自身が創造的傾向の一種實態にほかならないから。性的衝動の意義をば、創造的傾向に出發であることを目的として始めて正常に實現することができる。戀愛として機能し、作用しうる創造的傾向を、藝術、科學、ひろく文化にむかつて保護し、解放することが、すなはち供給することが、生の經濟の最高原則の一だ。創造的傾向に戀愛も汲むが文化も汲む。戀愛が汲むべきだけを戀愛に汲ませ、文化が汲むべき限り、汲みうる限りを文化に汲ませる學と、術と、意思が、健全人の特徴だ。

戀愛の一面の可能は嫉妬だ。戀愛に於いて、人は無我の傾向を示すと共に專制の傾向を示す。淺觀すれば矛盾かもしれませんが、深觀すれば矛盾ではない。戀愛に於いて、共産主義の特徴と、私有主義、專有主義の特徴とは、原始的の深さと強さと野明さとを具備して併發する。戀愛を知ることは、ほとんど社會制度、經濟組織を知ることだ。戀愛に於いて、獻身犠牲も、私有專制も、不可抗的自然力をもつて高絶の程度にさへも時あつてか、いなほとんど常に達する。高く達する運動には深い基礎がある。戀愛の奥に人性があり、人性の奥に宇宙性がある。所有なき創造は、戀ひをした人、觀た人には、滿たされざる戀ひの一側面を聯想させる。

戀愛は不聰明でありえない。戀ひする人は甚だしば〳〵不聰明だ。幻滅の悲哀は戀愛の次ぎの稱とほぼきまつてゐるほどだが、それは戀愛の過失ではなく、戀ひする人の責任だ。戀ひは貴い。強烈なる戀ひはいよ〳〵貴い。しかし、いかに強烈なる戀ひをも、なほかつ批判しうる人は戀ひ以上の戀ひの持ちぬしだワイルドが、ヤソを評して、全世界もかれの愛にとつては小さすぎたといふたが、ある意味に想像し、解釋したるヤソの生は、愛の學と術の一端をはのめかす。

戀愛の移動性と一夫一婦制の改造

本間久雄

○

戀愛感情は常に移動する。ある一人の男又は女が、その戀愛の對象である他の女又は男に、永久變らない愛を注ぐと云ふやうなことは、詩的な言葉ではあるが、決して多くの場合の事實とはかけ離れてゐる。ダンテの戀のやうに、肉感を交へないものが本當の戀愛だと假定したり、所謂プラトニック、ラブといふやうな靈的なものが戀愛の本體だと假定した場合はとに角として、吾々人間の地上の戀愛は對象から對象へと移動するのが通例であり、又事實である。そしてこの對象から對象へと移動するところに、自らにして性的淘汰が行はれるのである。

○

少し古い例だが、シエークスピヤがその『御氣に召すまゝ』の中で「互に思ひ思はれる男女といふ者は、大變詩を好むが、さもあるべきこと、詩の中で誓ふことは戀人の言葉と同じく皆嘘や詐りが多い」と云つてゐるが、これは實際の實情を穿つてゐる。

これまでの戀愛は、西洋では殊に、騎士物語のかずかずに見ることの出來る例の婦人を神聖視する婦人崇拜のロマンチックな觀念が基礎となつてゐることが多いために、その戀愛は、殊更果敢なく、頼みがたいものとなつてゐる。ロマンチック・ラブからの解放といふことが近代において新しく唱へ出されたのもこの弊から脱離するために外ならない。

それはとにかく、戀愛は多くの場合、それが詩のヴエールで包むが故に常に現實の姿を凝視することを妨げられ、その當事者は、從つて、その相手について本當の價値を認め誤ることが多い。同時に、その中で誓はれる言葉は、シエークスピヤの云つたやうに嘘と詐りとに充ちた場合が多い。從つて又彼等戀人等が本當の現實に眼醒めた場合、何れも彼等のその實際の狀態に恐ろしい不滿と懊惱とを感ずるのは當然のことである。そして又この場合、彼等が更に戀愛の他の對象を求めるのも當然起き

るほど當然のことである。

○

以上は、果敢ない、頼りない、ロマンチックな戀愛について云つたことであるが、十分に眞劍な、十分に責任を持つた戀愛についても同じことである。

云ふまでもなく、後者においてはその移動性が前者に比して甚だしく稀薄である。しかしいかに眞劍ないかに責任を持つた戀愛であるからと云つてそれが相互に取つて一生涯永久につゞくものであるとは限らない。無論、それは一生涯、永久につゞく場合もあるが、それは寧ろ例外である。この例外を以て男女關係の道徳律の基礎としてはならないことも亦無論であるが、現在の性道徳は、この明白な道理を裏切つてゐる。窮屈な一生涯的な一夫一婦制の如き明かにこれである。

○

尤も一夫一婦そのことは望ましい。社會學的意義は別として少くも戀愛進化の上から云へばエレン・ケイその他の先覺が云つてゐるやうに、一夫一婦は性的關係の基調であるべきである。しかし現在行はれてゐる一夫一婦制は明かに誤つた基礎の上に立てられてゐる。

現在の一夫一婦制は、一生涯的の一夫一婦制である。一度結婚關係を結んだ以上、それは一生涯つゞけ[illegible]と云ふのが普通に考へられてゐる一夫一婦制である。言葉を換へて云へば戀愛の移動性を無視して認めまいとしてゐる一夫一婦制である。かういふ舊式的な一夫一婦は當然新しい一夫一婦に處を替へなければならない。

そのためには、今日の一夫一婦制をば全く根柢から覆して、まづ、第一に戀愛の移動性を十分に承認し、それに何等の束縛をも加へないことが必要である。

かう云つたならば、世間には、そんなことをしては大變だ、それこそ自由放恣な性的關係を奬勵することになるのだ、と云つて反對する人があるであらうが、それは大抵の場合杞憂である。と云ふのは、人間は本當に自由を與へられた時、却つて不自由になるからである。

これは一見パラドクシカルな言葉ではあるが、そこには疑ふべからざる眞理が含まれてゐる。最近歐米で唱へられる試驗結婚と云ふものも、この眞理に基礎を置いてゐる。試驗結婚の提唱者の一人であるサラ・ベルナールが「ある男なり女なりが、他の女なり男なりに束縛されてゐると感じてゐる時には、大抵の場合その結合は厭はしいものとなるものです。相互の關係が自由である間は、彼等はその愛をつゞけようとするもので[illegible]

といふのは、互ひに愛し合つてゐるといふことが確かでない場合には、彼等はその愛し合つてゐるといふことを確めようとして一層注意するやうになるからです」と云つてゐるのはたしかに一面の眞理を把握した言葉である。

戀愛の移動性を承認して、結婚關係を結ぶことは、かようにして、實際においては、その反對者が恐れるようには何等の危險をも伴はない。却つてその反對に、新しい一夫一婦の基礎を固めることになるのである。

私の尊崇する思想家エドワアド・カアペンタアなども、力強く一生涯的な一夫一婦制を斥け、結婚には何等の束縛なかるべきことを主張してゐる。

「結婚にして何等の束縛なく、全く任意自由の關係となり、事業經營においても、趣味利害においても、或時は共通の目的を有するけれども、又或時は別々の目的を有しながら、常に互に他の一方をして遠く離れて遊ぶを許し、尚且つ純粹なる同情の綱を以て相結ばるゝことゝなるならば、その自由の多きだけその愛も亦極めて深く、その規模の大なるだけその關係も亦極めて重要なものとなり、かくてこそ眞に不壞不滅の結合となるであらう。たとへば其の二個の遊星が各々自己の軌道を運轉しながら、一方は[illegible]て相接近し、永く一個の復星として並び輝くが如き[illegible]（堺利彦氏譯借用）とこつてカアペンタアの言葉は、無論戀愛の問題からばかり云つて居るのではないが、今の場合、十分味ふに足る言葉である。

○

現代の所謂一夫一婦制が、性道德として誤つてゐることについては新しい思想家は一樣に指摘してゐる、エレン・ケイもさうである。カアペンタアもさうである。バアナアド・ショウもさうである。更にベーベルやバックス社會主義等の立場に立つ人が何れもさうである。就中バックスは現代の所謂一夫一婦制を以て、一種の賣淫制度であると極言してゐる。そしてたゞ一夫一婦制が賣淫制度と異なるのは、後者においては、女が男に雇はれるに比して、前者においては、女が男に買はれるだけの相違であつて、共に誤つた經濟原理に基いてゐると喝破してゐるが、卓見である。實際、吾々の周圍を振りかへつて見ても、事實においては賣淫でない一夫一婦の結婚がいかほどあるであらうか甚だ疑はしい。

パックスは更に、將來においては、性的刺戟の滿足は、男に取つても女にとつても、丁度他の慾望又は食欲のそれと[illegible]自由

に委せらるべき一私事となるべきこと、同時に結婚といふことは、何等法律的干渉を経ない私的契約であるべきこと等を述べてゐるが、これも亦たしかに卓見である。

○

結婚に[illegible]もそれは重要な一つの條件である。だから存在的一夫一婦制の改造には、戀愛そのものゝ、性質、少くもその移動性の一面をまづ十分に認めることの必要を忘れてはならない。

生物學より見たる愛の研究

永井潜

一

戀愛！戀愛！何んぞ夫れ戀愛を呼ぶ聲の高きや。

曠世の詩人ゴエーテは

命の玉冠、
休みなき幸福で、
戀愛よ、汝はある。

"Krone des Lebens,
Glück ohne Ruh',
Liebe, bist du,"

と稱えて居る。『戀愛は最も舊くして最も新しき唯1の世界の出來事である』Liebe ist die älteste neueste, einzige Weltbegebendenheit と。思索の詩人リユケールトは言つて居る。クリーメルの感情的言語を以てすれば、『夫れは神であり神は戀愛であり、戀愛は宇宙を導く。そうして戀愛は生命であり、憎惡は死滅である。』Es ist ein Gott, und Gott ist die Liebe, und die Liebe leitet das Weltall, die Liebe aber ist Leben, und Hass ist Tod.

『戀愛とは人をして歡樂せしむる止むに止まれぬもいであり、人の心の最も美はしい芽生へであり、而して青春の詩的惱みである。』Die Liebe ein berauschendes Müss' das schönste Knospenwunder des Menschenherzens und gleichzeitig der portsche Sennsucht der Jugend. とスタヂオンは言つて居る。アノ女嫌ひの六ケ敷い顔をしたショペンハウアーまでが戀の細か

分析を企つて居る。『二人の若い異性が始めて逢ふの時には、全く特殊の而して心の奥底に根ざせる無意識的の眞面目さを以て互に觀察する。何物かを求める樣な、浸入る樣な凝視を投げる。そうして細かにあらゆる樣子、あらゆる部分を見極はめる。此の檢楽と試驗とは、性の天賦が二つの個體二つの個性が果してよく相合一し得るか否かを考察するに外ならぬ。そうして其の結果からお互の氣に入る程度、相慕ふ程度が決定せられる。而かも斯れが、或る程度迄高まると、是れ迄嘗つて心附かれなかつた『或る者』の發見によつて、忽ち再び夫れが打ち消される。』斯れが即ち『意欲及び表象としての世界』の著書の中に叙述されてある、斯の八ケ間敷いお爺さんの戀愛觀である。

實際此のお爺さんの觀察は細かくて鋭い。戀愛の成立は實に瞬時的である。雲蒸霧騰、刻々に陽と陰との電氣が集まつて、其の電位の差が一定度に達すると、天地も碎けよとばかり迅雷はためき亘る樣に、戀愛は、徐々に胸と胸との奥底に忍び込んで來るが、一朝にして其の發露するや、實に迅雷耳を掩ふの暇なく、そして、あらゆるものは、太陽に對する燭光の樣に其の輝を失ひ、却火に燔かる丶枯草の樣に燃え盡くされて仕舞ふのである。

[illegible]

愛と著しい差別がある。友愛の建物が地上に竣功する迄には、随分と長い歳月と多大の努力とが必要である。忠實の礎、同情の柱、好意の梁、尊敬の棟、凡てが刻一刻堅固確實に構成せられて、始めて成就するものである。是に比べると戀愛は實に天上に於ける魔法の杖である。一度び揮へば忽焉として金殿玉樓が聳え立ち、一度び揮へば靈泉迸り酒地が涌くのである。而して地上の愛が、汗と膏とを以て眞面目に造り上げたあらゆるものは、天上の愛が一瞬にして現出せしめた者の爲に、無惨にも倏忽の間に其の色彩と光耀とを失はなければならないのである。

「戀愛の生理」の著者たる伊太利のマンデガッツァは、痛切に這般の消息を叙して居る。母が綺麗な子供を産む。玉の樣な乳房を啣ませる。二十年の長き間、彼の女は彼の娘と、共に眠り共に呼吸し、病める可憐の[illegible]の寢床には、幾夜か不眠の勞働をもつゆ厭はない。晴やかな祭、朝の美しい衣は、[illegible]も著る者よりも著さす者の悦である。げに母と娘一世紀の五分の一を通して共のこの心臟は一齊に搏ち、共の一の精神が分れて二つの[illegible]に宿つた。さて斯の二十歳の花の乙[illegible]が、共[illegible]生命の進み行く路[illegible]にて、一つの[illegible]

一千萬分時の仕事も、譯いなく踏み躙じる。哀々たる世か、二十年の歳月、手塩にかけて培ひ上げた愛の花は、忽にして黑い髭の生へる黑い眼睛の鄭く彼方の岸にとこしへに咲かんとするのである。

二

して見ると、戀愛は純然たる性愛であり、一すじに性慾の上から湧き出づる泉である。たとへ斯く言ふことが如何にも露骨であり、綺麗でないとしても、事實は確に事實である。『君によりて、ならひはじめぬ世の中の、人はこれをや、戀といふらむ』男は女によつて、女は男によつてでなければ、戀愛を知り、戀愛を行ひ、戀愛を完うすることは出來ない。陰と陽の電氣が相牽いて火花を發する樣に、陰と陽の「エレクトロン」が相迎へて分子を形ち造る樣に、異性の間に戀愛の起ることは、物と云ふ物の最も細い最も奧深い所に於て、既に兆して居るのである。戀愛の謎の「アルフア」より「オメガ」に至る迄を、悉く説明し得るものは、『男』に對しては女であり、女に向ひては男でなければならぬ。

私は玆に獨逸の詩人リッターハウスの次の句を引用したい。

『戀愛』とは何ですかと太陽に尋ねたら、
　彼は何とも答へないで、　唯金色の光を投げた。
『戀愛』とは何ですかと　花に尋ねたら、
　彼は馥郁たる香を放つたのみで默々として居た。
『戀愛』とは何ですか、快よい快感ですか、
　夫れとも、甘い陶酔ですか、と、神樣に伺つた所が、
神樣は一人の忠實なる可愛らしい女を下さつた。
夫れ以來私はスッカリ戀愛とは何ですかと問はなくなつた。

„Ich sprach zur Sonne: „Sprich, was ist die Liebe?"
Sie gab nicht Antwort, gab nur goldnes Licht.
Ich sprach zur Blume: „Sprich, was ist die Liebe?"
Sie gab mir Düfte, doch die Antwort nicht.
Ich sprach zum Ew'gen: „Sprich, was ist die Liebe?
Ist's heil'ger Ernst? Ist süsse Tändelei?
Da gab mir Gott ein Weib, ein treues, liebliches,
Und nimmer frag ich, was die Liebe sei!

確に左樣だ。男よ汝に戀愛を説明し得るものは、天上の星でもない。地上の花でもない。唯女あるのみである。

三

斯く考へ來ると、戀愛なるものは、其の他の愛情とは全く別種のものであるかと思はれる。又そう云ふ考を有つて居る人もある樣であるが、併し私は左樣は考へない。

共通普汎なものであつて、要するに、他人を見ること猶ほ自分の如くすることである。否な、寧ろ自他の差別を滅却することである。完全に自他の差別を超越した時、玆に始めて完全なる愛が成立するのである。戀愛然り。親子兄弟の愛然り。友人の愛然り。將た又大宇宙を抱懷する神の大慈愛亦然りである。

然らば即ち、何故に、獨り戀愛のみが、其の成立の迅さに於て、其の熱烈の强さに於て、他の凡ての愛に優越するのであるか。是れ全く性慾なる沃土があつて、斯の戀愛の花を培ふからである。

抑々生物の生物たる所以は、よく、自己生存と種族保續とを行ふ點にある。自己生存の爲に、生物は、此の世の中に、自分の生存を主張するに必要なあらゆる仕事をする。之を人類に考ふるも、小にしては、山に獵して鳥獸を捉らへ、海に入りて魚貝を取つた太古の原始的生活から、幾百千萬の財寶を積み、最高の位階や貴の名譽を喜ぶ現代人に見る樣な、有形無形の巨大なる所有欲は、畢竟するに自己生存の欲望の滿足に外ならぬ。一椀の食、一盞の水を熱求する心は、やがて幾多の名譽幾億の富を誓ふ心となるのである。而して自己生存は確實にすべく造物主は、鼓舞するに飢餓てふ欲望を以てした。[illegible]

り、第二の我より更に第三の我を造り、世々代々其の種性を傳積することであつて、斯くすることによつて、生活體は、絶えず舊くなりつゝ、而かも同時に絶えず新しくあり得るのであり生々たる勢力と、潑溂たる元氣とを以て、進化の歴程を上り、限定せられたる個體の壽命の束縛を脱却して、よく永遠に於き延ぶることを得るのである。而して斯の大なる使命を果たすべく、神は生物に性慾を惠んだ。

たとひ哲學者が何んと云はうとも、當分、戀と飢とで、浮世の狂言が行はれてゆく。

是れ哲學詩人シラーの卓言である。確に左樣である。下は蚤爾たる微生物より、上は萬物の靈長たる人間に至る迄、飢と戀との爲に、二六時中浮身を窶して居るのである。飢と戀、是れ程痛切な、是れ程辛悚な、是れ程現實的な而して是れ程理想的な大問題は外にないのである。

四

自己生存に必要なる飢餓が食欲によつて代表せられるゝ如く、種族保續に大切なる戀愛は性慾によつて其の根柢が培はれて居る。而して前者が利己主義 Egoismus と云ふべきなれば後者は即利他主義 Altruismus であらねばならぬ。而して斯の[illegible]

幅の複雜なる華麗なる人生の織物が織り出さる丶のである。而かも生活體が、其の永遠の生存を主張し、小さき自我を大なる自我に擴張する爲には、自己生存よりも、種族の保護が我に大切である。さればこそ、自己生存を犧牲にしても、種族の保續を確實にせんとするのである。多くの生物に於て、生殖の作用が個體の壽命を決定して居るのは、最も雄辯に此のことを吾等に説明するものである。亞米利加には、十七年蟬と云ふ者が居るが、是れは十七年の長日月を幼蟲の狀態で過ごして、やつと成蟲になつて交尾を終はると、短時日の後に死んで仕舞ふのである。短命の代表者として、いつも引き合に出さる丶蜉蝣は成蟲となつて交尾すれば、四五時もたゝない内に死ぬのであるが、而かも幼蟲として二三年も生活をつゞけて、やつと成蟲になるのである。多くの昆蟲類では、雌の壽命は遙に雄よりも長い。加之蜜蜂の場合に見る様に、雄は女王と交尾を終るや否や、直ちに刺し殺されて仕舞ふが如き極端な例もある。斯様な關係は、獨り昆蟲ばがりではない。其他の動物にも適用せられる。否な人間に於ても亦其の通りである。古往今來、戀の爲に惜げもなく生命を捧げた例は、果して數へ盡くせるであらうか。否な、獨り戀の悲劇の場合のみではない、哀々たる父母、我を生み、我を哺育し、我を撫養し、我が爲に劬勞し、而して第二の我が漸く他を[illegible]に至れば、第一の我[illegible]するの見る時、何れの人か、よく此の命運を逃れ得るものぞと云ふ[illegible]を起さずには居れないであらう。斯くて自己の生存が、惜げもなく種族の保續の爲に犧牲に供せられ、戀愛が飢餓を制御し、利他主義が利己主義に打ち克つ時、清新の氣が常に生物の間に充ち、久遠の命が限なき世代々々通じて流れ、恒久の進化の階段を生物は上り行くのである。

五

力強い戀愛は、力強い性慾の爲に惹き起さる丶のであるが、併し性慾即ち戀愛と思ふ人あらば、夫れは大なる誤である。性慾は土であり、戀愛は花である。穢い土から、アノ美はしい花が咲き出づる様に、性慾の精華を鍾めて、茲に始めて尊い戀愛の花が咲き出づるのである。吾等は斯の美はしき花に就いて語る前に、先づ此の土に於て知る處がなければならぬ。吾等を載せて居る大地が、最も根強い、最も力強い物の標像である様に、吾等の體内に燃えて居る性慾の炎は、最も根強い内的熱望（ドラング）であり、又最も力強い自然の情念（トリブ）である。發育成熟せる生殖腺より出づる内分泌物が、青春の血潮に入りて身體を循環する時、心に於て身に於て、男の男らしさ、女の女らしさが、始めて完成する。そうして彼等のうら若い腦髓の神經[illegible]

物の爲に絶えず刺戟せられて、茲に一種名狀すべからざる『或るもの』が胸の中に醸成される。例へば暮れてゆく春の夕の何んなくうら悲しきが如く。例へば獨り山路を行つて菫の何やら懷しきが如く。汲めども汲めども大地の岩清水が湧き出づる様に、拂へども拂へども春の大息吹が面を吹く様に、性慾の酒は吾等の五臟六腑に浸み亘り、吾等の腸を盪かし吾等の心を醉はしめる。

六

性慾の炎は、斯く内的の熱望、自然の情念であるが、併し此の内因に對して之を生起せしめ、之を挑發せしむるに有力なる外因、即ち外來の刺戟が、又大切なる意味を有して居る。斯く外來の刺戟は吾等の感覺器官を通じて浸入する。而して之によつて性慾が起り、之れが滿足される迄に、三期を區別することが出來る。第一期は感覺器官の自然の興奮であつて、遠隔のものを感知すべき聽覺、嗅覺、視覺等が働く。就中動物では嗅覺人間では視覺が重要なる役目をなすものである。即ち其の顏を視其の聲を聽く毎に、之に伴つて知らず識らず一種の快感同情が喚び起される。實際吾等の五官器就中眼は、無意識的に、絕えず淘汰と選擇を行ひつゝある。電車に乘つても安息に出て [illegible]

自から夫れに固着する。第二には、平凡なる大多數の者であつて、之れに對しては全く無頓著であり、第三には嫌ひな者で之れからは出來る丈け他に外れんとする。而して若し宴會なぞで其の好きな人から一瞥を與へられ、或は一會釋を受けた場合非常なる滿足と元氣と光榮とを感ずる。斯くして快よき感覺は軈がて思慕の情を生み、思慕の情は、望んで之を得る時の滿足と元氣とを感ずると同時に、之を得ざる時の失望と沮喪とを惹き起す物である。之を要するに第一期は愛の煩悶時代である。

忍ぶれど色にいでけり我が戀は、物やおもふと人の問ふまで

シラーは夫の不朽の傑作たる『鐘の歌』に、於てよく過般の消息を傳へて居る。

其時言ふべからざる思慕の情は、
若き人の心臓を捉へる。
彼れは獨りであてもなくうろつく。
彼れの眼には涙が湧く。

Da fasst ein namen-
los's Sehnen
Der Jünglingsherz,
irrt allein,
Aus seinen Augen
brechen Tränen.

次に第二期に進むと、[illegible]の感覺器官によつて[illegible]くる興奮[illegible]

む所のものの[illegible]て　其の[illegible]に[illegible]れんとする[illegible]
來る　握手、抱擁、或は接吻は即ち斯の熱望の現示である。斯の場合に於ては、接　せるもの﹅感覺器官たる皮膚粘膜が最も大切なる働をする。而して其の刺戟の効果は、一層強烈に、緊密に、切實になつて來る。相接着する刹那、全身は恰も電氣をかけられたる如く、且つ又反射的に循環系を宰せる神經の働に變動を起して、心臟の鼓動を亢進し、皮膚の血管は擴張して、顏面は潮紅し、全身は燃るが如く火照る　而して更に進みて第三期に入る時其の接着は更に緊密の度を加へ、茲に始め　性の滿足が實行せられる。即ち積り積つた電氣の高壓は遂に放電せらるゝのである。若し第一期を以て神經の戰慄と云ふならば第二期神經の激動である。若し第二期を以て愛の感稻時代と云ふならば、第三期は正さに愛の大歡喜である、戀愛詩人として古今に獨歩せるハイネは此の消息を次の如く歌つて居る。

あなたの頬が私の頬に着く時に、
涙が一緒に流れます。
あなたの胸を私の胸におしつける刹那、
焔が一緒に燃え立ちます。
そして其の大きい焔のたゞ中に、
吾等の涙の瀧が流れ込む時、
そ[illegible]
私は愛慕に死んで行く、

Lehn' deine Wang' an meine Wang',
Dann fliessen die Tränen zusammen!
Und an mein Herz drück' fest dein Herz,
Dann schlagen zusammen die Flammen!
Und wenn in die grosse Flamme fliesst
Der Strom von unsern Tränen,
Und wenn dich mein Arm gewaltig umschliesst,
Sterb' ich vor Liebessehnen!

七

性慾の發露は、男女に隨つて趣を異にする。男子に於ては性欲は常に能働性である。幼童の時期にすら、内から勃起を呼び起すことがある。殊に思春期に入りては、男女の性徴が完備されて、是れが相互に甚しい刺戟を及ぼす。久米の仙人ではないが、男が普通見ることの出來ない女の體の一部を見る時、例へば歐羅巴人では婦人の素足や脛、土耳古人では婦人の顏を見ることが、非常な刺戟となつて、性欲を呼び起す。加之ならず甚だしきに至つては、婦人の一筋の毛髮、婦人の襪や下着を見たり、婦人の體臭の移り香を嗅いだ丈けで、既に[illegible]

望を起す様になる。醫學者は之を「物體崇拜（フエチヒスム）」と云ふて居るのである。又た婦人の化粧、婦人の優しき音聲、婦人の淑やかな身振或は輕い程度の婦人の抵抗、斯等凡てが悉く男子の性慾を挑發する動機にならぬものはない。且又た男子の性慾は能働的である丈け夫れ丈け、一婦人を守らずして、動もすれば性慾の標的にして新たなる婦人を求めんとする傾向がある。而して其れが家庭生活並びに社會生活に於て、如何に多くの悲劇を演ずるかは言ふ迄もない。

斯く男子の性欲が能働的であるに反して、女子の性慾は寧ろ受働的である。男子の性欲の究極の目的が、性交其の物であるに反して、女子に於ては寧ろ性交の結果即ち産兒が其の翹望である。斯く婦人は、肉欲が一般に男子より微弱であるにも關らず、秋波を送つて異性を捕へんとする傾向は、婦人に於て一般に著しい。斯れ畢竟、婦人は力強き男子の保護の下に自分を置かんとするからである。隨つて婦人の好む男子は、男らしき男である。才能に於て、力量に於て、衆に拔んでたる男である。而して男子の性欲が、浮草の根を絶えて轉々求めて止まざらんとするに反して、婦人は之を一人に集中する。而して全てを捧げ、之に從屬せんとする。[illegible]

[illegible]び起す原因となる。男子は啻に精神的に眞の愛情を有つて居ない賣春婦に對しても、性交によりて遺憾なく彼の肉を滿足せしむることが出來る。併しながら、婦人は然らずして、眞に心より愛慕せる男子に對する時、始めて十分なる快を大に感ずるのである。隨つて甲に向つては性的に極めて冷膽であつた婦人が乙に對しては熱烈なる性欲を感ずる場合がある。隨つて又た男子は、結婚前已に性欲の爲に惱を感ずるが、婦人は性交によつて始めて性欲に目醒める場合が多い。夫れ丈け又一旦擡頭した性欲生活は、非常に旺盛で、處女時代に童貞堅固であつた夫人が、結婚後殊に寡婦となつた後に於て、性的道德の危期に瀕することが罕でない。

八

以上は、性の異なるにつれて性慾の發露する方式を異にすることに關して述べたのであるが、此の後一面には又た、性欲の強弱、即ち程度上の差に就いても、見逃すことの出來ないものがある。而して是も亦、一般から云へば、能働的なる男子の方が、受働的の女子よりも強いのであるが、併し此點に就いては殊に個人差が重要なる意義を有する。即ち各個人の先天的の體質就中其の内分泌系統と生殖腺との機能が、性欲の強弱を決定すべ[illegible]

の勢力旺盛なる人では、一般に性慾が强い。長壽者が高齡に達しても、猶ほよく其の性慾を維持し、加之生殖能力を保つて居た例は、非常に多くある。瑞典の人ガルゲン・ドウグラスは、百二十歲で死んだが、八十五歲の時結婚し、爾來八人の子を儲けた。最後の子供は彼れが百〇三歲の時に出來たのである。又た百二十三歲迄活きたペーター・アルブレヒトは之れも八十五歲の時に結婚して、七人の子を擧げた。伊太利のブランビキノ男爵は、四人の婦人と婚した。第一の婦人とは、彼れが十四歲の時に擧式し、第四の婦人とは、八十四歲の時に結婚した。而して七人の子を産み、彼れが死せし時、彼れの婦人は懷姙して居たと云はれて居る。獨り斯樣な特殊の場合ばかりでなく、一般に亘れる多數の統計的事實から結論しても、長壽する兩親は必ず産兒數が多く、又其の子供の死率も少ない。卽ち生殖腺の機能と壽命との間に密接なる關係があることが分かる。

更に又、性慾の働く方向換言すれば其の好惡の標的を決定することに關しては、最近のフロイドの精神分析法に基ける研究から、サツジヤーの如きは、幼兒に於ける無意識的の經驗が專ら其の根柢をなすと言つて居る。例へば自由の選擇によつて成立した夫婦間には狀貌や其の他種々なる點に於て、相互によく肖て居ることが多い。是れは決して偶然でなく、又長年月一緒に生活して居ると云ふことからでもなく、初めから斯る類似を起すべき理由がある。何んとなれば、子供が、幼時、彼れの母や、彼れの姉妹の心身から受けた愛の印象が心の奧底に深く刻さみ込まれて居て、妻を選擇するに當つて、夫れが無意識的に作用することによつて立派に說明が附くと言はれて居る。

九

斯く、先天的に將た後天的に、性欲の吾等の心身に根柢を占むることは實に深く、吾等の心身を支配することの實に力强きは、明白であるが、併し其の性慾の力が强ければ强いだけ、理性の生物たる吾等人間は、之れに眩惑されない樣に、毅然として立ち、恬然として考ふる所がなくてはならぬ　已に述べたる如く、戀愛と性欲とは離るべからざる密接なる關係を有するものであるが、併しながら性欲卽ち戀愛ではない。戀愛は性慾の土に培はれ、其の精粹を鍾めて咲き出でたる美はしい花である。生物が下級に位すれば位する程、性的關係は、殆んど全く性慾によつて支配されるが、高等になればなる程、純然たる性慾を離れて、戀愛によつて兩性が結び付けられるやうになる。換言すれば、原始の肉的關係より、高尙なる靈的方面に進むのである。

念ふに性別のなき最下級の生物では、生活の殆んど凡ては、自己生存の仕事である。又假令兩性の區別があつても、下級の生物

では、種族保續の仕事は比較的簡單で、雌雄の生殖細胞が合一すれば、夫れで其の目的の殆んど全部は達成せられる。隨つて單に本能的に性慾の滿足を求めて居れば、夫れで種族の保續が出來る。夫れであるから、雌雄の結び附は瞬時的で、殆んど無意識的、反射的である。

然るに高等なる生物、殊に人類に在りては、其の關係は全く一變する。動物では下級に位すれば位する程其の一生を通じて益々本能が重要なる働をするが、人間では左樣でない。動物は、生れながらにして、彼れが天賦の本能によつて生存するに十分であるが、併し靈智の動物たる人間は、最も賴りない狀態で生れて來て、歩一歩向上の路を辿つて、最も完全なる者に迄發達する。恰も最も低い土の上に居る告天子が、軈て最も高い天上に其の凱歌を奏する樣に、人間は最大たり得る素因を具有しつつ、而かも極小の狀態で此の世の光を見る。そうして彼の努力によつて、後天的に其の極大を出現せしめる。斯れが即ち人間生活の全部である。而して其の努力とは、即ち廣い意味に於ける敎育である。人間は實に文化を有する動物である。否な文化を富ます動物である。人間は文化を祖先より讓り受け、更にこれを豐富にし、潤澤にして、子孫に讓り渡たすことによつて、世を重ね代を經る毎に、向上進歩して、萬物の靈長となつたのである。而かも此の受授は決して一個體の遺傳によつ……のでない。原始時代の赤ン坊も、二十世紀の赤ン坊も、……たる所以に於て些の相違もない。若し文化が個體の遺傳によつて授與せらるゝならば現代人の赤坊は、生れながらにして非常に偉らい者であらねばならぬ筈であるが、事實は正に之を裏切つて居る。斯く人間は個體の遺傳によつては文化を受授することが出來ないが、併し社會生活によつて之を遺傳することを知つて居る。由來人間は、團體生活を爲すべく運命づけられて居ることは、彼の體が明白に之を語つてゐる。裸一貫の人間は、猛獸鷙鳥に見る樣な、何等有力なる武器を有つて居ない。茲に於てか、彼れは、團體的協同生活を行ふことによつて始めて敵に當り敵を防ぐべく成功した。試みに動物界を見渡しても、強い者は孤獨の生活をやつて居るが、弱い者は自から群居して居る。此れは必然の勢である。而して群居はやがて自由なる意志の交換を必要とし、其の爲の器官が發達する。強い鷲や鷹は、殆んど囀ることが出來ないが、弱い小さい隨つて群居して居る鳴鳥は囀轉自在の妙を極めて居る。吾等の祖先は、其の體制が平和的であつたが故を以て、群居をして居た。而して群居は軈て意志の交通機關たる言語の發達を促し、軈て又た文字を作り、斯くて人間は、時間を永遠に、果た又た永遠を瞬間にすることが出來

る様になつて、動物が獨り現在にのみ活くるに反して、人間は過去にも未來にも活る様になつた。言語を有することより、文字を使用することによりて、人間は、完全に祖先の遺せる文化を讓り受け、之を改善革新して、更に之を子孫に讓り渡たすことが可能になつた。此れが人間の人間たる偉大なる所以である而して此の受授を媒介するもの、是れ實に廣義に於ける教育である。斯くて現在の小學生徒は、二千年の昔、世界が見た最も智識ある人であつたアリストテレースよりも、尚ほ多くの知識を有つて居るのである。

斯く考へ來たれば、人間をして人間たらしむる所以の大本は即ち其の社會生活にあるのである。過去然り、現在然り、未來は益々然りと斷言するに躊躇せぬ。而して其の社會生活の第一歩は、即ち夫婦の結合に始まるのである。只單に本能に活き現在に活きる動物では、種族保護の仕事は極めて簡單であつて、最も力強き本能たる性欲の導くまゝに、之れが滿足を求むれば、己に夫で十分である。併しながら、文化に活き、過去にも未來にも活きなければならぬ人間では、第一の我より第二の我を造ることは、決して爾かく簡節でない。茲に於てか、動物に於ける兩性の結合が全然本能的であり、瞬時的であるに反して、人間に於ける兩性の結合は、斷じて本能的瞬間的であつてはならない。必ずや肉より靈に、物質より理想に、瞬間より永遠に進み行かなければならない。斯くて始めて眞に大始なるものが出來る。而して其の鞏固なる結び附き、然り、肉體的のみならず精神的の結び附きによつて、始めて眞の第二の我を造ることが出來る。斯くて一家が出來、一部落が出來、一國が出來、大なる人間世界が出來るのである。

十

靈肉の一致せる眞の夫婦が出來る其の時こそ、性慾の土から美い戀愛の花が咲き出づる其の時である。二の半球が相寄つて圓滿具足の理想界を現實する其の時である。人間の生活が限りある自己の生存を超越して、限なき永遠の繁榮をこと祝ぐ其の時である。利他主義が利已主義を壓伏して、動物的生活より、神明の祭壇に歩を進んとする其の時である。同情・博愛・信頼・勇氣・從順・忍耐・勤勉・協力、凡て此等道德の清い源泉は、兩性の永久的の鞏固なる結合によつて出來た礎の間から湧いて來る。而して社會生活の偉大なる建物は、凡て此の堅牢なる礎の上に建てられて居る。リハルド・ワーグナーが『戀愛はあらゆる創造物に向いて、生命の法則たるべきものである』Die Liebe sei das Gesetz des Lebens für alles Erschaffene [illegible] 居るのは、即ち此の意味に外なら[illegible]

は又た戀愛の眞相を敍べて『二つの靈魂で一つの思考、二つの心臟で一つの搏動』Zwei Seelen und ein Gedanke, Zwei Herzen und ein Schlag. と云つて居るのも、よく吾等の意を得て居る。就中シルラーが鐘の歌によつて、人間の一生を祝福せる中に、

だから永遠に結び附くべき人は、
心と心とがしつくり合うかどうかを問ふて見よ。
迷は短かく悔や長し。

(中略)

嗚呼人生の最も花やかな式典と共に、
人生の春の帷は閉ぢられるのである。
帶や面衣ともろ共に、
美はしい迷想は二つに裂かれるのである。
熱情は去つて、
戀愛が殘らねばならぬ。
花は散り失せて、
果實が結ばれねばならぬ。

Drum prüfe, wer sich ewig bindet,
Ob sich das Herz zum Herzen findt!
Wahn ist kurz, die Reu'ist lang.

Ach! des Lebens schönste Feier
Endigt auch Lebensmai.
Mit dem Gürtel, mit dem Schleier
Reisst der schöne Wahn entzwei.
Die Leidenschaft flieht,
Die Liebe muss bleiben;
Die Blumen verblüt,
Die Frucht muss treiben.

と云つて居るのは眞に結婚生活の眞相を描き出して、餘蘊なからしめて居る。私は此の句を讀む毎に、眞に感激の淚を堰き止めることが出來ないのである。同じ詩人は同じ歌の中に、又た次の敎訓を垂れて居る。

若しも人間がそれを制御し監護するならば、
火の力は實に惠み深いものである、
人の製造するもの、人の創作するもの、
凡ては此の天與の力の賜である。
けれども、恐るべきかな。此の天與の力、
若しも、夫れが羈絆を脫却して、

一朝自が欲する儘に歩みまはるならば、此の自然の自由の娘よ。

Wehltatig ist des Feuers Macht,
Wenn sie der Mensch Dbeizahmt, bewacht,
Und was er bildet, was er schafft,
Das dankt er dieser Himmelskraft;
Doch furchtbar wird die Himmelskraft,
Wenn sie der Fessel entrafft,
Einhertritt auf eigenen Spur,
Die freier Tochter der Natur.

—（愛の考察）—

私は法悦に浸つた心持で、常に此の句を愛誦して居る。人よ、汝の竈に燃ゆる火を制御し、警護すると共に、更により大なる努力と注意とを以て、汝の胸に燃えつゝある性欲の火を制御し警護することを忘るゝ勿れ。是れが即ち人間の理性の最も大なる勝利であり、最も大なる誇である。若し之を疎にして、性欲の醇化を怠る時、人間の文化は根柢より焼き盡くされるのである。肉の性的生活のみを知つて、靈の性的生活を忘れたるものは、手段と目的とを顛倒せる大痴愚者である。本能の満足を說いて、貞操の本義を疑ふものは確に人間を畜生道に陥れんとする反逆者である、而して私は、近代の懐疑思想や享楽主義の中に、此の反逆者が臆面なく跳梁するのを見て、「人間」の爲に悲まざるを得ない。性欲の穢土より真純の戀愛の花に淨化すること、是れ人間の文化を一貫せる向上の大道である。（終）

時評

過激社會運動取締法案に就て

福田德三

(一)

旣に各方面から完膚なく批判された過激社會運動法案に就て今更彼是云ふのは無駄な様な感じもする。殊に此文を載せた『改造』が世に出るころには、貴族院で否決し終つて居るか、乃至は內閣が交迭して居るか、兎に角此法案は到底物にならぬものと多少安心もして居る次第であるが、然し一度ある事は二度ないとは限らぬ、又た他の內閣が此んな愚劣な法案を案出する虞は決して無いとは云へない。內務省や司法省には、此頃は大分物の分つた若手の官吏も居るやうだからとて、決して安心はならぬ。官場ではグレシアム法則が遺憾なく行はれて、頑迷固陋な人々の方が兎角に跋扈する事であるから、二度と再び此案の様な惡法案が世上の問題となることもあらうと思つて、簡單に卑見を陳述して置くことゝする。

(二)

此案と同じ様な取締を勵行した例は此度の戰時中外國には若干あつた。就中其國柄から見又其勵行の猛烈さから見て、此案の藍本とも云ふ可きは、千九百十四年十一月二十七日の英國の國防法 (An Act to consolidate and amend the Defence of the Realm Acts. 5. Ges. 5. C. 8. 27th Nov. 1914 但し略して Defence of the Realm Act 1914 と云ふ)(これには其後幾多の追加、修正並に施行細則が加はつて居る)と、千九百十七年六月十五日の米國の敵國間諜』取締法 (Espionage Act) であらう。兩者共何れも名は戰時非常法として制定せられたもので、我過激社會運動取締法の如く何事も無い平常時に突然天降り來つて平地に波瀾を起すものとは成立の事情は全く違つては居るが、其實施の跡に就て見たら、殆んど同樣の作用を有する

ものであつて、就中、社會主義者を目の敵とする點に於て甚だ似寄つたものである。此等に比べると千八百七十八年の獨逸社會黨鎭壓法は此法案とは寧ろ縁の遠いもので、彼法は却て現行の治安警察法の方に縁の近いものと見るが適當であらう。獨逸の鎭壓法の集會、結社、出版の鎭壓は粗ぼ同程度に於て、既に我が現行の治安警察法に含まれて居るので彼法が却つて社會民主黨を繁榮せしめた作用は、同じ程度に於て我治安警察法に就て云はる可きと思ふ。牧野博士は東京日々に寄せた論法鋭利な論文に於て、主として此の鎭壓法を引照して居られる。博士の論ぜらるゝ所は私も全然同感であるが、其は寧ろ治安警察法排斥にこそ好き論據を與ふるものではないかと私は考へる。過激取締法案若し顯あらば獨逸の鎭壓法と比べられるのは余り名譽過ぎるを嘆ずるであらう。何となれば此案は獨逸の彼法に比して遙かに其固陋さ其頑迷さに於て數等の上に出るものであるからである。牧野博士は右の論文に於て『曾てはドイツで社會民主々義者鎭壓法といふものがあつた、それで私は我邦でもそれに類似のことが實現されるに違ひないと待ち設けて居たのである』と云はれて居るが、實は其は待設けるまでもなく、チヤンと我治安警察法、新聞紙法、出版法に於て實現せられて居ると云つても過言ではあるまいかと思ふ。

（三）

私は寧ろモツト非道い事が起るであらうと思つて居た。其は明治四十年頃の事である。當時(四十一年四月)私は『獨逸社會黨鎭壓法の始終』と云ふ論文を當時創刊早々の『國民經濟雜誌』にのせて、識者參考の便に供して置いた。(後に拙著『續經濟學研究』に收錄して置いた) 彼時既に治安警察法以上の反動的頑迷法律が出て來さうであつたからである。處が幸にも其れは治安警察法、新聞紙法、出版法程度に止まつて、其後頑迷立法熱は暫らく鳴を靜めて居た。然るに此度の大戰爭中、世界の最自由國として知られて居る英米二國共右に云ふ極端に反動的な社會主義者取締をやつたのを見て、私は此れは物騷千萬な事が始まつたものだなと思つて居た。幸ひ我邦では戰時中は何事もなくて濟んだが、今茲大正十一年になつて、單に近藤某事件一つがあつたと云ふことを口實として愈々スペクトルが其正體を現はして來た。唯一つの幸は此化物案は支離滅裂な頭の惡いの惡いのを超越したチヨン髷案である丈け、早くも其正體を見顯はされた事是れである。恐らく此法案位無茶苦茶な法案はあるまい。其れ丈け之を退治するに骨が折れなくて濟むわけである。

（四）

英國の國防法は、口[illegible]なき人々が其名を正しく

唯だ『ドーラ』ハ『Dora』と、呼ぶ、ソラ『ドーラ』が暴れ出し、ぞを開けろと云つて勞働組合員や社會主義者は警戒を加へる。ドーラ」と云ふのは法律の名が法性寺入道的に長いから其頭字丈を取つて一語としたのである D (efence) O (f) (the) R(ealm) A(ct) デーリ、メール、イーアブルクすら其の千九百十九年版に云つて居る『英國現行の諸法律中此法律位徹底的にして廣汎な權力を有するものは他にない。『ドーラ』は戰時中英國民の最貴最重の自由を凡て蹂躙した。少しでも疑はしい人物は容赦なく收監又は追放され、徴兵反對の言論は一切鎭壓せられ少しでも軍事に妨げありと認められたものは直ちに長期の懲役に處せられ、商業取引の多くは嚴重に取締られる。事實に於て我々は、現英國に於て一體如何なる種類の行爲丈けが此法に觸れずして濟むかを知ることが出來ないのである』と。

（五）

米國の『敵國間諜取締法』に就ては、ヒルクヰットがスコットニアリング(社會主義平和主義を奉ずる一壯年經濟學者)裁判顛末 The trial of Scott Nearing 1919 の序文に於て、『偵探を取締る目的の爲めに作られたと云ふ所謂『間諜取締法』の條項に依つて罪に問はれた外探は實は一人もないのである。其反對に此法に觸れたものは全部社會主義者並に平和主義者計り一千名もある。大抵の社會主義者は何れも此法によつて極刑に處せられた。我ニアリングが無罪の宣告を受けたのは誠に稀有の僥倖と云ふ可きである』と。パークマンやゴードマンも亦此法によつて米國から追放せられたのである。其後も主としてボルシエヴヰズムの宣傳者や Federation of the Union of Russian Workers と I.W.W. の會員は續々として此法によつて處罰せられて居るのである。スコット・ニアリングを告發した時の檢事總長グレゴリーと云ふ人は最も徹底的に社會主義者狩りを實行す可く此法を縱橫無盡に振廻した人で、惡魔の如く看做されて居る一人である。流石に彼の後任者パーマーは、此の如き法の曲解を正しからずとし、A bill defining sedition, the promotion thereof, providing punishment therefor, and for other purposes (誘惑其の促進の意義の限定並に其處罰及其他に關する案)を新たに制定す可きことを主張し、政府は其議を容れて案を議會に提出したとか云ふ。我過激法案の『其他』は此れからでも考へ付いたのではないかと思ふと、自ら失笑を禁じ能はぬ。

（六）

思ふに我政府は、英米二國すら既に然り、況んや後進の我邦をやとでも言ふて、彼の復古的法案を辯護するであらう。然し少し頭を冷靜にして考へて頂き度い。英米二國には治安警察法の

ような憲法は存して居らぬのである。平時は集會、結社、出版を甚だ自由に取扱つて居るのである。其れが戰時非常の場合と、ボルシエヴキズムの脅威（と多くは速斷盲信するもの）に出會つたから、彼の如き立法を敢てしたのであるが、其は米國に於ては、檢事總長が先になつて、廢止を主張し、英國に於ては決して長い生命を保つことなかる可き暫行の法律である。獨逸の社會黨鎭壓法も政府の原案には期限が付けてなかつたが、議會では三年限りと云ふ期限を付けてやつと通過したので、我過激法の如き無期限の永久法ではないのである。

（七）

茲で刑法の事に迄論及する積はないが、牧野博士が屢々我々に敎へられた如く、朝憲紊亂其他の公けの安寧を害する處爲に對しては、我刑法は十二分に取締つて居る。殊に大逆罪に就ては『危害を加へんとしたる者』も『加へたる者』と全く同一に取扱ふ程に徹底的嚴重なものである。其外に治安警察法あり、新聞紙法あり、出版法あり、我々は既に此種の取締の十分以上なることに驚嘆し盡して居るのではないか。千八百七十八年の獨逸とも大分事情が違ふ。況んや今日の英米二國とをや。英米二國、例は決して例とすることは出來ないのである。其れでも英米の識者は囂々として其不當なる取締を指彈しつゝあるのである。戰時非常と云ふ特別の事情があつたからこそ斯んな法律が通つたので、今日なれば決して想像だも出來ないのである。然るに近藤某唯一件の爲めに、何等の危險もない此地に俄かに雲を呼び風を起す底のクーデタ的法律を提案するとは。實に驚いて物が云へないのである。

（八）

此く云ふと、政府者は云ふであらう、成程朝憲紊亂、暴動、暴行、脅迫其他の不法手段に對しては現行法に於て取締つてある。然し（一）其は宣傳をも含むか含まぬか十分明瞭でなく（二）罰が輕過る（三）外國人から宣傳用として金品の供給を受くる者を取締る可き法規がないと。先づ最後の項から答へよう。成程金品の供給云々の取締規程はない。英國では『或る學說又は主義の宣傳。例へば智識、道德の發達を含む保守主義の宣傳、社會主義の宣傳、非ヴイヴイセクション主義の宣傳等の爲めにする醵金は之を慈善行爲と看做す、但し此等の學說主義が道德を破壞し其他有害なるときは、慈善行爲と認めず、然る場合には、其學說、主義の內容を吟味するを要す（ラツセル對ジヤツクソン事件）主として問ふ所は其目的たる可し』としてある。(Earl of Halsbury, The laws of England Vl. IV. 1908, pp. 116 & 123.)。我邦の現行法規では、其

て何等の規定のないことは、事實である。然し(A)單に近藤某事件丈けで慌てゝ此法案の様に行きがけの駄賃的に一掃的鎮壓令を布くことは愚であるは勿論、國の體面としても見苦しい限りである。近藤某が何千何萬貫つたか知らないが、其れ位の事で恐慌を感ずる様なケチな國では日本は斷じて無い。(B)近藤某事件の如きを取締る法規が欲しいなら、刑法に一箇條を加へれば其れで濟む。(C)然し其手數も實は無用である。次に(二)に答へよう。罰の輕過るか重過るかは刑法の問題である。輕過ると思つたら刑法なり其他の現行法を改正すれば濟む。別に特法を布く必要は毛頭もない。然し我々の素人考には、罰は寧ろ重過ぐるとも輕過ぎるとは思はれない。逸獨の鎮壓法の罰は遥かに輕いことは牧野博士が既に十分に説明して下さつた。

(九)

最後に(一)に答へよう。宣傳を含むか含まぬかは、一々の場合で決せられる。直に朝憲を紊亂するとき、暴動、暴行、脅迫其他不法手段を行ふとき、之を罰すれば其れで取締の目的は十二分に達せられる。宣傳を取締るとそれは必竟言論、思想の自由を抑壓することになる。更らに、宣傳せんとしたる者を制するに至つては、實に言語道斷である。これは牧野博士の詳示せられた如く、大道理に就てのみ實設

し得るとしても、決して其[illegible]例である。現に危害を加へたる者と、單に加へんと[illegible]を同一に取扱ふことは、常識上、健全な理性の判斷上、決して安當とは思はれない。唯事極無事に關するが故に今日迄問題にせられなかつたので、其延長は他の如何なる場合にも斷じて不可なるは言ふ迄もない。然るを單に宣傳せんとしたる者に之を延長せんとするは、實に驚く可き事である。此法案中私が最も反對する處は、實に此點に係る。此くの如きは法理も常識も一切蹂躙せられる次第である。

(十)

此く考へて來ると殘る所、自首者に對する刑の減輕又は免除の一事あるのみ。而して私は恐らく此が立案者の事實上最も重きを置く點ではないかと想像する者である。近藤某事件も中々眞相が得られなかつた。「おめでたいこと」の筆者、頒布者は二年近く經つた今日未だに分らない。日本の警察は一體何をして居るのであらうか、社會主義者や勞働運動者に對しては常に見當違ひの檢擧騒ぎ斗りを繰返して居る。人として極て穩健な人でも社會主義の巨頭なりてふ噂丈けで尾行を附ける、家宅搜索をやる。然る間に他方では一國の首相が首都の大玄關で白晝兇[illegible]の爲に刺されて如何とも出來ない。警察と云ふものは、[illegible]

代表者かとも思はれる。ソコデ自首奬勵が大に必要となる。警察は自己の無能を十分に知つて居つてとても自分では過激主義者を一擧し得ないから、七年とか五年とかで懲して置いて、さて可成自首を奬勵する。ソレデ幾分か責任が輕くなる、とでも考へて居るものではなからうか。さりとは意氣地のないにも程があつたもので文明國の大恥辱と斷ずる外はないのである。

（十一）

法案の第一條には無政府主義、共產主義其他に關し朝憲を紊亂する事項云々とある。政府委員の貴族院に於ける說明によると、無政府主義は必ず朝憲を紊亂す、共產主義は必ずしも然らずと云つて居る。恐らく是れは後から付いた下司の智慧であらう。立案當時は、ソンナ區別等は少しも考へて居なかつた事と思ふ。

政府は一體無政府主義とは何、共產主義とは何を云ふかを知つて居るのであらうか如何か。朝憲紊亂と云ふ事は甚だ漠然たる語でこれは漢學者の口吻を生寫にしたものと思ふが、兎に角文字の表では甚だ惡いことであるから其れは七年でも五年でも懲役にするは宜しからう。然り其れで十分ではないか。何故特に無政府主義共產主義其他に關しとしたのか。モット明瞭簡單に單に其他に關し朝憲を紊亂する事項』とする方が勝であるがソレハ如何に無茶苦茶な人でも可笑しいと思ふだらうからモツト簡單に『凡て』と改正したらよからう。否『凡て』も要らない唯だ『朝憲紊亂する事項』で澤山である。無政府主義、共產主義丈けを茲に引用した理由は、理論上にも實際上にも一つもないのである。假りに現行刑法の第百九十九條を『味噌漉し擂子木其他を以て人を殺したる者は死刑又は無期若くは三年以上の懲役に處す』としたり、第二百九條を『鬼ゴツコ・隱れん坊其他に關し過失に因り人を傷害したる者は五百圓以下の罰金又は科料に處す』としたら如何なものだと思ふか。

（十二）

反對に立案者の頭を常人並と前提して、コレハ無政府主義、共產主義の宣傳又は其豫備行爲を罰せんとするものと解釋すれば朝憲紊亂云々は冗語である。單に『無政府主義又は共產主義を宣傳し又は宣傳せんとしたる者は』とすれば、兎に角理窟は通る。然し左樣すると此法案は更らに無用のものとなる。共產主義の宣傳又は其豫備行爲が惡いと云ふのは、社會全體に就て云ふか、個々の場合に就て云ふか。個々の場合なら、現に共產主義を實行して居るものあるを如何せんや。飛彈の白川の人民は續々此法に問はれることになり、白川視察記を公けにした藤森氏以下私まで悉く皆宣傳したる

ればなるまい。甚だ物騒な次第である。否日本の古代には、共產主義は隨處に行はれて居た事は歴史上の儼然たる事實ではないか。否獨逸法の翻譯たる現行の民法にさへ「入會權」と云ふ共產主義時代の遺物をチャント認めてあるではないか。民法こそ共產主義宣傳者のチャムピオンと云ふ可きである。

(十三)

更らに、社會、國、全體をあげての共產主義實現と云ふ意とすれば、其れは宣傳位で行はれるものでないのは分り切つた話である。共產主義者自らと雖も先づ社會主義を實現し、長い經過の後に共產主義になると云つて居ることは、獨逸の社會黨もレニン、トロツキーも全く同じである。左樣な大仕掛な而も遠い將來の事を宣傳するのが何の害になるか。其爲に朝憲を紊亂すれば、其れは無論惡い事で罰す可きであるが、然る場合は、朝憲紊亂として罰すれば濟むではないか。

無政府主義は、其れとは訳が無論違ふ。然し普通云ふ無政府主義は實は『テロリズム』であつて、正當の無政府主義を唱ふるものは其れとは同一視す可きではない。クロポトキン斗りを無政府主義者などと考へる馬鹿は已めて貰ひたい。無政府主義者中には無論理論上でも今日から明日へと直ちに理想を實現せんとするものもあるが。然し其れは主義其物のエツセンアルではない。單に方法上の一
中には、共產主義者同樣極めて遠き將來の實現を
あるのである。今日から明日へと實現しようと云ふ方法論を取るものは、成穏政府委員の云ふ如く必ず朝憲を紊亂すとも云へよう。殊に『テロリスト』に至つては然るのである。然し其即時實現論者と雖も、必ず理論上不法手段による可しと主張するわけではない。否、一切の合法性を嚴守して其實現を期す可しと主張するものもあるのである。否々無政府主義の學理上の開祖たる英國のウヰリアム、ゴドウヰンは三の『システム』換言すれば三階段を説いて順次に之を經過するものとして詳しく敍へて居るではないか。又徹底的最純の無政府主義の唱首たるスチルネルは實現の方法を少しも説いて居らぬので、現に其書の邦譯『自我經』は辻潤氏の手によつて刊行せられて居るのである。

(十四)

ゴドウヰンの書は少し進んで經濟學を研究せんとする者は必ず讀まねばならぬものであるのである。無政府主義が一切朝憲を紊亂するものなら、ゴドウヰンやスチルネルの書は其頒布、翻譯を禁示す可きではないか。然しマサカ左樣な暴擧は出來まい。私共は學理上無政府主義の誤謬を指摘することとなしには社會政策の根本理論を云々することに[illegible]のである。

カラ私は近著『社會政策と階級鬭爭』の序論に於て、少し論じて置いた）。然るに以上論者たる無政府主義者に一切言論を禁じて仕舞つたら、學問の研究は不具になる外はない。口を押へ付けられて居るものに議論を吹かけたとて何にもならぬ、ソレデ事が濟めば宜しとするか、決して事は濟まぬ。言論を杜絶される者は必ず他の方法で其思想を發現するに相違ない。其れこそ危險千萬である。敵にも十分口を開かせて、扨此方からそれに應戰するのが一番穩當で有効な方法である。所謂『思想は思想を以て』とは實に此謂である。政府委員の答辯は、誠に一知半解噴飯に堪へない耳學問を實證するものである。

（十五）

次には第三條の社會根本組織の變革云々が來る。此點は政府も多少物が分つたことを云つて居る。即ち二月十九日時事新報掲載の內務當局者談なるものに左の通りあつた。

> 暴動、暴行、脅迫等の不法手段を以て、社會の根本組織を變革せんとする者をも嚴罰に處さんとしたるは、之亦適當なる措置なりと云ふ可し。社會の組織は云ふ迄もなく歷史と時代とを基礎とせる最も健全なるものならざる可からざるに拘らず、不法手段即ち前記暴動、暴行、脅迫等の不法手段を以て其組織を變革するが如きは、國家的反逆なりと云ふも過言にあらず。而して根本組織の變革は必ずしも悪き問題にあらざるのみならず、實際變革を必要とせば、之を斷行するも敢て差支なき事なるが只其の場合は適法の手段を必要とす。即ち議會に對し……法律の範圍を出でゝ活動せんとするものを取締るにあれば、決して過酷なる法律とは云ふ可からず。

これは當然至極の事であるが、此れ丈け物の分る頭を持ち乍ら本法制定の必要を認めるのみか大いに其必要を力說して居るのは、如何に官人たりとは云へ情けないにも程がある、否我々は爲すまじきものは宮仕への感を深くするの外はない。

（十六）

大化の改新、明治の維新何れも社會の根本組織を變革したものなる事は、外國の歷史を知らずとも日本の歷史だけ知つて居れば、之を否定することは出來ない。否社會は絶へず間斷なく其組織を徐々に進化の過程を經て變革して行くからこそ活き且つ發達して行くので、變革一日止むれば即ち社會は死んで仕舞ふこと、我々の肉體の組織が時々刻々新陳代謝して變化しつゝあるのと同じてある。一日でも便通がなければ、心地が悪い、三日も便通が止れば病氣になる。社會も亦然りである。內務當局某氏には是れ丈けの事は能く分つて居る。誠に結構である。

（十七）

然らば其變革を期する事の内何が取締らる可きかと云へ……
動暴行脅迫其他不法手段による場合……

全く其通りである。然し暴動暴行脅迫其他の不法手段は——不法手段と云ふ丈けで其れが惡い事と云ふ事は分つて居るではないか——社會組織の變革を目的とするもせざるも何れもいけないのである。ダカラ此第三條を少し道理の通つたものとしようとなれば

『暴動暴行脅迫其他の不法手段に依つて社會の根本組織を變革する事項並にせざる事項を宣傳し又は宣傳せんとしたるものは五年以下の懲役又は禁錮に處す』

としたら可からう。然し左樣すると滑稽なものになる。此滑稽を免れんとすれば

『暴動、暴行、脅迫其他の不法手段を宣傳し又は宣傳せんとしたるものは』

としなければならぬ。即ち社會の根本組織云々は全くの冗語となるのである。

（十八）

從つて殘る所は（一）宣傳し又はせんとするものを（二）特に重く罰し（三）金品の供給を受くる者を取締り（四）可成自首させて警察官の無能免責をする。と云ふ事丈けに結局なつて仕舞ふ。而して此四點に於ては前に其の不當を論じて置いた通りである。かくて全文六ケ條一字と殘して置き得る文字はないことになる。乃ち私は、此くの如き無用冗長なる法案に…ものであることを言へば其れで足りると思ふ、況んや此位頑迷固陋な反動思想を臆面もなくサラケ出したものはなく、其通過は普選——其實現は單に時の問題たる——の否決などの到底日を同うして談り難き時代錯誤たるをや。（三月七日認む）

（附言）社會政策學會會員有志は昨三月六日左の決議をして之を世上に公表した參考の爲め附記して置く。

『今回政府が貴族院に提出したる過激社會運動取締法案なるものは、文明國社會政策の理論的並に實際的根柢を顚覆せんとする矯激なる反動思想を表現するものにして、其取締の主なる對象とする朝憲を紊亂する事項、若くは社會根本組織の變革を目的とする暴動、暴行、脅迫其他の不法手段に對しては、帝國の現行諸法規之れが處罰の規定を具備して些の遺憾を止めざるにも拘らず、更に複の法律を新たに制定し特に單に宣傳し又は宣傳せんとしたる者を極刑に問はんとするが如きは頑迷固陋なる偏見に囚はれて、不知不識法制の統一を害するの過に陷れるものに外ならず。況んや外國人より金品の供給を受くる者に對する取締法規の不備に藉口して、漫に人民の自首に俟ちて以て當路者の無能を掩はんとするは、法治國の威嚴を損ずる甚しきものあるを悟らず、延て國民の健全なる社會思想の發展を阻礙す可き、極端にして理路錯繆せる復古的法律を設くるは、文化國家の本義に背反する亦大なるに於てをや。吾人は玆に學理研究者としての見地より、斷じて本法の制定に反對するものなり。

右決議す

大正十一年三月

石川博士の「停年に際して私が急に職を辭せざる理由」を讀みて

福田徳三

（一）

理學博士石川千代松先生から表題の如き小冊子の惠送を忝した。私は先年戸水博士問題の起つたときも、大學教授の身分の不安定なるを窃かに痛嘆した、京都大學に於て澤柳總長對諸教授事件のあつたときも痛憤した、早稻田大學で大山郁夫教授外數氏の退職の事あつたときは、畏友にして同學の重鎭たる鹽澤、田中兩博士へ電報を打つて大學教授の身分を輕々しく取扱ふの不可なることを申上げたが、一向利目はなかつたようである。其他同志社騷動（其れは近頃も繰返されたさうである）に就ては、眞相は能く分らなかつたが、年來憤つて居たものである。而して私自身としては、一度は高商校から追放せられ、二度慶應義塾を出入した辛い經驗を持つて居るものである。併し私は自分の事を彼是云ふ自信は些も持つて居らぬし、他の大學の事件に就いても、陰乍ら最も憤慨する一人であり乍ら、公けに論議することは、今日までは憚つて居た。然るに今、日本動物學の耆宿として外國に於ても其業績の十分に認められて居る石川老博士其件の顛末を聞くに及んで、積年の感慨一時に發せざるを得ない。依つて茲に簡單に卑見を陳述することにした。

（二）

大學教授の本分は、石川博士が其小冊子に記して居られる様に「學び、究め、而して教ゆる」にあるとは言ふまでもない。他の點に於て如何に卓越した人であつても、此三者を忘るものは、大學教授たる可き資格のないものであると共に、此三者に於て其本分を盡くして居るものは、決して職を本人の意志に反して奪はるべきものではないと云ふ事は、世界公認の事實である。石川博士の記して居られるリヒアード・ゼーモン教授の自殺の如きは、實に壯烈な眞學者の一例である、[illegible]

其んな事にならない前に病死する[illegible]

殺とは極端であるが、大學教授が自ら能力の衰へて、到底『學び、究め、致ゆる』てふ本分を十分に盡せないと自ら認めたなら、其瞬間に職を抛つ可きは勿論である、これと共に其の本分を十分に盡して居るとの確信ある以上は、石川博士の如く斷じて職を去らないと主張することそ、職に忠なる所以と云はなければならぬ。單に杓子定規的に年齢が六十歳に達したなどゝ云ふ廉丈けで、大學教授の職を左右する事は、甚だ間違つた事である。東京帝國大學では、內部の申合せとして、其樣な取極めをなしたとか云ふが、私は、其れは學者に似合はぬ、沒理的申合せであると、其當時から思つて居た。私は自分の大學で其樣な決議をする事があつたら、極力反對する考であるが、幸に其んな事を言ひ出す人は今日までにはなかつた。又た私の仄聞する處では他の多くの大學（商科大學でも）に於ては後任者を定めずに、主任教授を退職せしめろと云ふ樣た事例はない樣である。更らに又石川博士が佐々木博士の場合に就て記して居られる樣に、後任者を一時講師で凌ぐに當り、（其は或は已むを得まいが）之を教授會の議に經せず、部長の獨斷で講師を任命すると云ふような、專制政治は行はれて居ない。否、助手の任免でさへも、必ず教授會の多數決によつて、之を實行して居る。而して其事に就ては別に規程も何もあるのでなく、大學の本質上當然の事として姑

は東京帝大農學部以外の他の大學に於て恐く同樣

ふ。否、然ある可き筈である。川瀬君が新聞紙上で云はれ、又た石川博士の云はれることが、事實に相違ないものとせば、駒場農學部は、日本學界に於て甚だ好ましからざる一除外例を爲すものと云ふ可きである。

（三）

何故に、日本の學者は六十歳に達すると學び、究め、教へられなくなるのか、實に不思議千萬な事である。無論此の停年制とか云ふものは、陸海軍や裁判官の例を猿の人眞似をしたものであるまい、十二分の論據ありと認められて定められた事と思ふが、近くは醫學部の佐藤老博士の如き、誰人が見ても、大學になかる可からざる碩學が、此制度の爲めに大學から奪ひ去られた。而して今は石川博士問題を惹き起すこととなつた。此れは單に一古在君一川瀬君の責任ではない、停年制と云ふ馬鹿々々しい惡制が其責任者である。一人々々としては、日本の學界中他に類のない卓越した學者を集めて居る東京帝大でも、多數の議となると此くまで、常識から云つても、論理から云つても一向筋の立たない決議をする。これは、タルド先生に云はせれば L'opinion de la foule の弱點の一例と云ふ可きである

う。他の學部の事は私は知らないが、少くとも法學部にはたしか既に六十歳を越へられた宮崎道三郎先生が居られる。若しも石川博士の場合と同じ筆法で行くとすれば、遠からず宮崎先生は職を退かれねばならぬこととならう。而して其れは帝大法學部に取つて、最重大な損失であることは、私の喋々するを毫も要しない所である。文學部には、たしか六十歳以上で始めて講師から教授に任ぜられた人がある筈である、其老教授は確かに文學部の爲めに重きをなして居る。六十歳以上のものが、大學教授になれぬとは、實際の事實が有力に其恐さを反駁して居るのである。

停年制規定の理由は、老境に入つて、何等の新研究なきものを淘汰するにありと云ふか、然らば、六十歳に達せざる前、否抑も大學教授となつた其日から一回も新研究を發表したことなき、數々の若朽教授を如何するつもりか。一々審査會を開いて(行政裁判所で由布某其他の無能者の退職を決議した時のある様に)其追放を決定するのか。若し其れが出來るなら、年齢の老少に拘らず、ドシドシ實行すれば宜いではないか。恐らく其れが出來ないから、六十歳などゝ云ふ拘子定規を設けて、面倒を回避するつもりであらう。さりとは、卑怯千萬な話である。而も其卑怯の爲めに、見す見す學問上の大損失を醸すと云ふ、馬鹿々々しいにも程があつたものである。六十歳退職者は恩給と稱する『ビッタンス』しか貰へないで、其日から生活に苦しまねばならぬ、慘酷千萬な話である。強て六十歳退職を實行しようとなれば、授業、講義を罷させる丈けで、大學教授の身分は保有させ、現職給に同じきか又は其れに近き俸給を與へるなら、多少意味を爲す。何故停年制を定めるときに、其れと同時に其れ丈けの用意をしなかつたか。文部省が其れを許さないとなれば、肝要な前提の缺けた内規制定は、其の許されるまで實行を延して貰ふのでなければならない、單に停年に達したと云ふ丈けで、有爲な學者を其意に反してまでも退職させ、他方には多數の若朽教授が、單に年が若いと云ふ丈けで、何も學ばず、何も研究せずして居ても、晏然として大學教授たり得ると云ふは、世界中殆んど比類なき「アノマリー」と云はねばならぬのである。其『アノマリー』は大學に取つて、一の自殺的行爲である。何となれば、其れは(一)大學が自ら無能なる教授を多數に有することを告白することであり(二)而も其を淘汰する力を自ら有せざる自己無能の告白であり(三)日本人は六十歳に達すると學問研究者たり得なくなると云ふ國民的劣性の公言であるからである。(一)と(二)は帝大丈けの話として、假りに默視するとしても、(三)に至つては、我々

抗議せねばならぬのである。

（四）

我國に於いては、大學教授斗りでなく、一般に俸給生活者の地位は、勞働者の其れと同樣に、甚だ不安定、不確實なものである。例へば、銀行、會社員の如きは、信州の製糸工女に就て、我々が常に憤慨すると、殆んど同樣な雇傭關係に於てある。一々身元保證人（而かも大抵は二名）を立てねばならず、而して其誓約書なるものは、實に亂暴千萬な片務的のもので、タトヘ、本人に過失なくとも、御社に損失をかけた場合は、擔者等本人に代り一切の責に任ず可く候也と云ふやうな文句が書いてある。少し眞面目に考へると、迚も身元保證人になどなられたものではない。幸ひ常識上其亂暴な條項は實行せられないだらうけれども、雇主の人柄によつては、如何な請求をされるかも知れない、實に物騷千萬な次第である。學校教師も殆んど其れに異ならない、少し校長の機嫌を損ずると、直ぐに、本月限り退職を命ずなどとやられる、否、突然書留郵便で、休職を命ずなど〻言渡されても、抗議する餘地は一も與へられてはないのである。これは決して官公立學校に限つた事でない、否私立學校の方が却つて官公立學校よりは甚しいやうである。早稻田大學教授問題の如きも、左樣であつたし、慶應義塾でも左樣云ふ事は數へ切れない程……る小泉鐵氏の『一教員の失敗』は、恐らく慶……ルとしたものと思ふが、若し其れならば、徹頭徹尾事實に立……の誤りがないだらうと想像され得る。何となれば、私の實驗上其れは、獨り小泉君が一人に限らず、其れより十年も十五年も前から、同樣の事は屢々見聞した所であるから。但し小泉君は慶應義塾の凡ての人と凡ての事とを必ずしも知悉して居ない樣である、慶應義塾には、同君の書かれたやうな醜い事は數々ある、否、未だモツト澤山あると共に、又た他方には、官學に見られない美點長所が澤山あるし、小泉君を取卷いて居た人々の外に、人格としても、研究者としても、友人としても實に敬服す可き人が尠からずあるのである。同君が其等の人々を知るに及ぶまで忍耐せられなかつた事は、同君の爲めには兎に角、慶應義塾の爲めに甚だ遺憾に堪へない所である。其れは兎に角として、小泉君の主題としたやうな事は、實は決して慶應義塾特有の醜い事ではない、殆んど日本の一切の學校に共通な醜事である。早大では不敬事件のとき木村久一君を甚だ慘酷に取扱つた。恐らく木村君が慶應豫科教授たること小泉君の如くであつたならば、彼の樣に無慘な取扱は受けなかつたであらうと、私は竊かに信じて居るものである。唯だ早大は慶大に比して遙か

に勝れりと思はるゝことは、自校出身者の學閥が殆んど無いと云ふことであらう、尤もこれは一向早大の自慢にはならない、何故なれば、其れは學閥を作る可き丈けの有爲な人が出身教授中にないからである。(曾ては可成あつた、が騷動の爲め殆んど全滅した。)之れに反し慶大は臥榻の下に他人の酣睡を容れざる底まで、少くとも其大學部(醫科は別)は、出身者を以て充されて居るからで、此れは弊もあるには相違ないが、實に慶大が日本の私學中獨得の地歩を占むる大なる強味である。而して其學閥は必ずしも外來者を外道扱に斗りはしない、少くとも私一人は、其樣な取扱は餘り受けなく、否、却つて、出身人諸君よりも、遙かに多くの自由を與へられた、否、思ふ存分の我儘も最後の破裂を除いては許された。小泉君は少しも我儘をしたのでなく、正しい事を絶えず一貫主張して、終に私と同樣に追放せられたのは、誠に御氣の毒の事である。然し慶大の學閥は實に牢乎として拔く可からざるもので、而も近年は其れが更らに政友會臭を強く帶びて來た事は、獨立の學府としては、實に醜い事で、小泉君によつて鎗玉に擧られた普選尙早論の筆者、近頃に、頑迷論に若返つたとを以つて我々の驚畏たるW君は其の政友化の絶好の標本である、然し其の他方に自由放任の金融學者堀江博士が近來右と正反對に著しい左傾的社會論に若返つて、全く別人の觀あることを忘れてはなるまい。此く極端から極端までの異分子を包含して居る事は、確かに慶大の寛大を物語ること、小泉君に繰返して某なる主任者が云つた通りと思ふ。

(五)

石川博士の場合に學閥が屢々云々せられる。此れは事實如何であるか私は少しも知らない事であるが、冷靜に石川博士の冊子を讀んで察すると、矢張其嫌は否認出來ないやうである。少くとも三宅博士や草野博士が未だに助教授であるなどは、馬鹿々々しいにも程のあつた事と思ふ。然し古在博士は私の獨逸留學時代を同して居た友人で、其後も時々伯林會等で會飮して、粗ぼ其爲人を知つて居るが、其樣なケチな根性を有する人とは思はない、川瀨君は慶大の鎌田先生と同郷の紀州人で余程似た點のある人と思ふ丈けで其他の事は知らない。其外の人は余り知らないが、學閥は必ずしも個々の人の責任事ではなく、矢張多數愚の一事例ではあるまいかと思ふ。駒場出身の人が出身校を愛すること他人に勝るのは決して惡い事ではない、否、其あればこそ農學校の昔から今日の堂々たる學部に進んで來得たのであらう。又學生の立場として、何となく出身教授に親しみの深いのは決して咎む可き事ではない。其れは何れの事で、弊もあることは無

のものと思ふ。其れがなければ、一學校一工場たりとも、不斷の進步をするは六ケ敷しい。此頃八釜しい昇格運動でも必竟は自分の學校を他に劣らぬものとしたいと云ふ熱心から出て來るので、其爲め知らず識らず道理を踏違へることもあるが、其熱心は決して惡い事ではない。唯其熱心に伴ふに努力勤勉を以てしないのがいけないのである。其熱心の爲めに、他來の良きものを凡て受け入れざらんとする偏狹心の起るのが惡いのである。農學部に於て此熱心の爲めに、外來の學者を繼子扱にしたり、名を停年制に借りて排擊を加へたりするものとせば、其は實に學問の賊である、教育の敵である。

（六）

更らに轉じて他の點を考へて見る。石川博士は（一七頁）「何も私は死ぬまで自ら辭職せぬと云ふのではない、私も既に停年に達して居るから、適當なる後任者があれば、必ず悅んで職を辭する者である、然らば、如何なる人が私の後任者たるべきであるか學部長に於ては前述の如く、更らに之を考へ居られず、之は私が最も不安に思ふ所で、佐々木君の時と同樣、一時、間に合せの者をして、私に代はらしむるのであらう。……斯くては學問と大學の爲め甚だ憂慮に堪へない」と言つて居られる。此れは又重要な問題である。私は先づ博士に伺ひ度い。何故に博士は其永き在職中、其門に集り來れる[illegible]拔して、適當なる後繼者を作つて置かれなかつたのであるかと。學問圈内の者たりとも、何れ一度は退職の時が來るに相違ない、從つて其用意として、平生勉めて後繼學者を澤山に作つて置く可き義務と責任とを有する。タトへ學閥外の教授たりとて、其教ゆる學生は其母校の卒業生たる可き人々ではないか其學閥の眞正中へ飛込んで優秀な者を引拔いて其れを奬勵し誘拔して他日自分が學問の爲めに追はれても、其れは自分の身柄が追はれる丈けで、自分の學問、自分の研究、自分の學風は、永く其大學に活きて承繼せられて居る樣にさへして置けば、其れで學者として十二分の滿足を得られ、教授として最高の義務を盡くした事となる可きではないか。博士は（一六頁）「我大學教授の仕事としては、憚りながら數人の敬服する諸氏を除きては如何であらうか、殊に我農學部に於ける多數の方々に劣るとは思はれない」と云はれて居る、如何にも左樣と思ふが、其れ丈けはでは十分でない樣に思ふ。博士の云はるゝ「學生に教ゆる處のものは單に知識其物のみではない、實に學術に對する尊重であつて、學生をして眞理を眞理として知らしむるの道を教へ、其れに依つて人間たるものゝ精神上最高の目的に達し得せし[illegible]にある」と。誠に然り、唯だ講義し、唯だ實驗室研究室に[illegible]

で指導する丈けが大學教授の本分ではない。實に『人を作る』ことが最高の本分である。博士は何故此の『人』を作つて置いて、何時退職されても直ちに、博士、學と業とを繼ぎ得可き新進の學者に、學に與へなかつたか。例へば博士の推薦して居られ、増井博士、丸毛博士の如き人を澤山作つて置かれたら、（兩博士とも駒場出身であると想像する）其内誰れでも、直ちに明日から博士の業を繼ぐことが出來る、然ればタトへ博士自らは學閥の暗打に會つて放たれるとしても、其れは何の苦痛とはならない。唯だ博士の身柄が追はれる丈けで、博士の學問、博士の『人間たるべきもの、精神』、博士の人格は、依然として活きて駒場に傳へられるのである。されば何の心配もなく、佐々木博士の場合の様に、間に合せ教師の爲めに、博士の學問が跡を駒場に絶つと云ふ懸念なく、博士は泰然として暗打者の爲すが儘に、追はれるが儘に追はれても、學者として、大學教授として一の後顧の慮なく何の疚しい所なくて濟む譯ではないか。

私の如き迚も博士に比べて彼是申す可き者ではないが、一例として記すとを許されるならば、私は慶大に在ること前後十四年、平生から早晩私の身柄が追放される時ある可きを深く覺悟して居たから（其は私が無能であるは勿論、我儘放題であるから）、全力を圖書館の充實と、（研究室設置も極力爭つたが其れは私の在る間には實現されなかつた）後繼者の敎導とに盡く、幸ひ私の様なツマラヌ者でも、學生に優秀な者が多かつた爲めに私より遥かに勝つた後繼者を少くとも六七人慶大に殘して來た。而して其の人々は今實に慶大の生命となつて働いて居る。私の甚乏しい且つ淺い學問たりとも、其は依然として今慶大に留つて居るのである。私は追放されたときも、其後今日に至るまで一も後顧の心配を殘して居ない。私は是れが學閥圏内に飛込んだ外道者として爲す可き最要の仕事であると確く信じて居るものであるから、自分の事を書いて甚だ不遜ではあるが、博士に質したいと思ふものである。

（七）

然し、實際の事情を少しも知らぬ門外漢の私に到底想像し得られない複雑な事情が農大に存するのかも知れない。博士は私如き者が彼是申上ぐる迄もなく後繼者養成の必要を十分認めて其爲めに力を盡されたものと思ふ。然し其れが具體的の結果を現はす事をすら妨ぐる事情が農大の天地に蟠まつて居るのかも知れない。若し左様だとすると、農大の學問は慶大の學閥などとは到底日を同ふして語ることの出來ないほど甚しいもので あるのかとも思はれる。左様なれば其は、學閥處の小事では

の本義に關るゝ處の大問題である。凡そ學者としては自分一身の進退榮辱の如きは一小事である、唯己れの學問、己れの研究さへ活きて傳はれば學者としては瞑す可きである。然るに駒場に於ける石川博士は數十年の永き教授生活に於て、此の可能を全く奪はれて居られたものであるならば、其れこそ學問の重大事であつて、駒場農大は如何なる意味に於ても、之を學理研究所、學問の本源地と認むることは斷じて許す可からざることとなる外はない。慶大に如何に弊害あり、如何に學閥が蟠るとても、少くとも私一人は、私如きツマラヌ者にさへ、己れの學問を永く傳へ殘して行くことに對しては寸毫の妨害も加へられず微少の干渉も受けなかつた。而も私は外道の一人であつたから、決して全級に亘る科目を擔任させらるゝことはなかつた、其れは何れも出身教授のみが擔任して居て、私は極少數の有志學生のみを相手にして而も原則としては甚だ人氣のない科目を受持つて居たので、石川博士が『私受持の學科が不幸にして獨立して居らないが故に專門に研究する者少く』云々(一六頁)と言つて居られることは、正さに慶大に於ける私の場合と同一であるのである。學閥の強大に於て殆んど海内第一と云はれる慶大に於てですら與へられた自由が、農大に於て與へられて居ないと云ふ事なれば、其れこそ重大な問題であつて、石川博士一身の進退問題は、此問題に比すれば却つて遙かに

々博士事件あるによりて、此點が明示せられたものであるとしたら、博士事件は單に教授身分の安定を將來に確保するに與つて有効なるのみならず、農大の學問を死地から救ひ出す爲に、實に絶好の機會が與へられたものと云ふ可きと思ふ。妄言多罪。

(三月九日草す)

四月特大號創作

性慾の觸手　武林無想庵

或る男　武者小路實篤

狂亂　近松秋江

錢屋五兵衞父子　中村吉藏



性慾の觸手

武林無想庵

とう〳〵時が來た。

いよ〳〵食へなくなつたら、その時こそは文章を賣つて糊口を維がうと、甚だ横着かもしれないが、二十年前からマキシマムの高を括つてゐた。その時が來たのだ。

極めて僅かばかりだが、その上り高、——地代、——即ち剩餘價値から、人一人は一生どうにか衣食してゆかれるほどの地所、その親讓りの地所を賣つて、親不孝にも叩き賣つて、何がしかの金を懷に入れると、忽ち女房を持つて、忽ち新婚旅行なるものに出かけたものだ。その旅が終つたのだ。云ひかへれば、金がなくなつて了つただけだ。

人生は或は必ずしも金ばかりでは解決のつかないところかも知れぬが、學者先生の七むづかしい論議は別として、何がさて、人間がその日〳〵の飯を食ひ、雨露風雪を凌ぐ家に住み、季節日毎の衣服を纏ふにつけては、何よりもまづ金が第一だ。金さへあれば、たゞもう金さへあれば、結局一切合財の埒がサラリとあくやうに、不思議な事には、世の中といふところは、誰が造つたとはなしに、さう造りあげられてある。いよ〳〵一文なしの、にっちもさっちもゆかぬ身の上となつてから、今

[illegible]新婚旅行を終つた位だから、勿論女房がある。その上旅行中に子供まで生まれた。要するに親子三人だ。その親子三人の衣食住だ。その衣食住に對して支拂ふべき金だ。どうあつてもその金を捻き出さなければならぬ。

——一體いくらあつたら生活が出來るものか知らん。と、私は女房に訊いて見た。

——どうしても二百圓はなくてはねえ。と、女房は平氣な顔して答へた。

二百圓！　二百圓と云ふと、一日十圓だ。一枚四百字詰の原稿が、必ず一圓宛に賣れるものとして、一日十圓の金を稼がうとすると、いやでも應でも日に十枚の原稿は書かなくてはならぬ。

——あなたに毎日十枚宛の原稿が書けるか知らん。と云つて女房はニヤリと笑つた。

——一日作さゞれば一日食はず。よし、その覺悟で一番書いて見よう。と、私は少し向になつて云つた。

——危ないものねえ。と、女房はもう一度ニヤリとした。

まづこの女房を持つた事からはじめよう。

その時分私は鵠沼にゐた。鵠沼で宿屋住ひしてゐた。なぜ私が特に鵠沼にゐたか、なぜ宿屋住ひしてゐたか、それも私が女房を持つやうになつた重大なる原因の一つだが、これは女房自身とは直接の關係がないから、茲では暫くアンダスッドして置くだけの事にする。

とにかく私は鵠沼の宿屋にゐたのだ。詳しく云へば、その宿屋の九號室で、鯉の澤山ゐる池や茶室や亭を適當に配置した、松や砂がその白緑のニュアンスを心地よく漂はしあつた大きな庭園、その庭園を前景としたノンビリした海が、江の島が、恰も[illegible]の殘塊のやうに、朝ノウイスキイの角壜を載せた私の机の上へ、飄渺と訪れて來ると云つた二階の八疊間だ。

私はそこで何してゐたか。勿論、なす事もなく、終日チビリチビリとウヰスキイばかり飲んでゐた。さうして胴に一

二度訪ねてくれる舞妓の妙さんへあてゝ、作にも慊らず、徒らに感情を誇張した、甚しくセンチメンタルな手紙などは、セッセと書いてゐた。その合間にはしきりに諸方から金の前借をしては、たま／＼その稿料でも這入ると、すぐ飛出して東京へ出懸け、待合から遊廓、いかなる下等な魔淫窟のどんぞこでも、ゆき當りバッタリに、そこで出來得るかぎりの泥醉と淫慾との耽溺に漬るのが、その頃の私の仕事になつてゐた。それほど私の生活はデスペレートな状態に陷つてゐたものだ。

デスペレートと云へば、隣室に北國生の若い學生がゐた。早稲田の哲學科に籍を置いて、專攻は認識論だといふ事であつた。その青年は殆んど毎晩のやうに話しに來て、時には一緒に食事をする事もあり、また夜をふかす時は、二三時間時までにも及んで、倦む事を知らず、ボソボソと語り合つた。はじめのうちは、しきりにゾルレンだザインだといふやうな言葉を並べあつて、まるで哲學概論の復習見たいな談話ばかり多かつたが、お互ひの話題が一旦戀愛や性慾の直接經驗に集中されるやうになると、二人の交情は俄に親密の度を增して、それからが頻繁に徹夜してまで意中を吐露し合ふ事になつたものだ。尤もこの青年と私との間には年齢に於いて十五六年の距離があつた。それゆゑ青年の眼に映ずる私といふものは恐らく十五六年がたの未知數を含んでゐたであらう。けれどもお互ひの思想が、生命の根本問題――たとへば生死と云つたやうな――にカチリと觸れあつた刹那には、これんばかりの未知數は、恰も旭光に逢つた魑魅魍魎のやうに、かき消す如く雲散霧消して了つたものであらう。そこにはたゞ生々しい一箇の生命の血凝ばかりがあつた。一極微の刺戟にも刹下に白熱光を放射する潑剌たる何物かゞあつた。

――僕は二度喀血しました。今度喀血したら、恐らくもう駄目でせう。三十まで生きられたら儲物の積りです。と、眉宇をも動かさずに、青年は冷然と云つた。北國生まれだけにクッキリと色の白い、美しく眼の輝く、[illegible]、きやしやな青年の顔は、そんな不吉な事を云ふ時には、殆んど痛々しく見えた。

[illegible]

——（手紙の慾性）——

その[illegible]
痛です。そのたび毎に生命を削られるやうな思ひをします。この時ぐらゐ命の惜しくなる時はありません。同時に[illegible]たすして、僕は必ず死ぬにきまつてゐます。併し死ぬのはいやです。どうしても死にたくはありません。

青年の聲は別に顫へもしなかつた。却つてその聲をきく私の方が、身を切らるゝよりもつらい、何とも云ひやうのない思ひをした。

——その女の夫は僕等のしてゐる事をよく知つてゐます。併し決してそれを色にも表はしません。僕に對する態度などは、それは非常に鄭重を極めたものです。なぜでせう？僕は時々それが不思議に思はれてたまらなくなる事があります。名前を云へばすぐ分る兜町で有名な仲買です。仲買なんてものはみんなあんなに冷酷なものなのでせうか。あゝいふ人の結婚は全々利害關係の外に何もないものでせうか。その女の里は、これも名前を云へばすぐ分る、山の手で有數な基督教徒で、同時に一門の廣い有力な富豪です。僕はこの女の妹聟になる事にきまつてゐるのです。こいつは又た基督教の女子大學へ通つてゐます。社會なんて奇妙なところですよ。資本と資本とを結びつける爲には、僞善といふ凡ゆる僞善を拵ちあげて、このコンクリートで嚴重に取繞した土塀の中で、夜も日も足らず、この上塗りをしつゞけて生活しなければならぬのです。マルクスのいふところはウソぢやありません。僕は實際この通りの事實を毎日のやうに見てゐます。見てゐるどころか、自分も平氣な顔して、その惡臭の中へ浸り、彼等と全く同様な僞善ばかりやつてゐるぢやありませんか。自分で自分を嘲るより外に仕様はありません。これだけの事で死ぬのです。僕にはさういふ社會を脱却するだけの健康と餘命がないのです。全く慘めなものですよ。

が、この青年からかういふ、悲壯な言葉をきゝ得るのは、これはたゞ深夜だけに限られてゐた。日中はまるで別人のやうに快活な顔を輝かして、氣のきいた配色の編みシャツなどを一着に及び、頗るハイカラな洋裝に納まつて、同宿のお孃さん方と一緒になり、いかにも嬉しげに、樂しげに、青春の希望に充ち溢れたピンポン臺に向ひなどしてゐた。

この宿屋で、その前後に私の知り合ひになつた人は、この隣室の哲學生と、これからこの哲學生に紹介された[illegible]

學生と、その二人きりであつた。哲學生とは反對に、これは南國の青年で、中肉中背の、いかにも優しやかな、漆黑の髮の毛をばいつも見事な總髮に梳きあげた、角のない、上品な美男子であつた。この人は勿論理財科の學生だが、それが頗る新しい詩の方面に通じてゐて、新刊書の出るのを待ちかねるほどに、しきりとさうした作物にのみ目を曝してゐた。從つて自分自身の創作も相當に試みつゝあるものと見えて、時々そんなやうな紙片をば哲學生に示してはニッコリしてゐる事もあつた。

――何人も一度は詩人になる時代がある。と誰やらが云つたが、なるほど其通りだ。と私は思つた。二十年前には、私もたしかにさうした意味の詩人であつた。壁にキーツやシエリイの肖像を貼りつけたり、同好の友人等とエンディミオンの輪講をしたり、お互ひの創作を朗讀しあつたり、『パンがなければお互ひの戀で生きよう。』といふやうな言葉に涙を流して嬉しがつたりした時代があつたものだ。その時代の事を思ふと、凡てがたゞたゞ非常にノンビリと可愛らしく見える。同樣にこの詩の別天地に浮身を窶してゐる優しい學生の姿を見てゐると、いかにも可愛らしくてたまらなくなつた。

この學生の部屋は、私達のゐる二階からは大分隔つた、下は廊下續きではあるが、全く別棟の、そこへゆくには、いく度も廊下を曲りくねつて、中々覺えられぬやうなところにある階段を上つた舊館の二階にあつた。學生はそこにもう三箇月から滯在してゐるといふ事であつた。醫者に勸められて、出來るだけ早く轉地をしたのだが、爰へ來ると間もなく、ヤツぱり略血して了つたのださうである。

――血を見た時は氣が遠くなりましたが、死ぬ事は一向怖くも何ともありませんでした。却つて重荷が下りたやうな心持がして、樂々した位です。けれども血がとまつて、まだ死なぬ事がわかり、意識が死といふ事から離れると、急に國の母親や妹の事を想ひ出して、それから無性に死ぬのが怖ろしくなりました。生きたくて、生きたくてたまらなくなりました。と、學生は落ちついた聲で、もの靜かに云つた。

[illegible]

無双の勇士と云はなければならぬ。」など丶下らぬ事ばかり思つた。さうしてこれ等のいぢらしい青年達は……して充分に慰めてやりたいと努めて見たが、口に出しては全く何とも云ひやうはなかつた。

デスペレートな、或は寧ろデゼスペレな、頭のいゝ早稲田の認識論専攻生が、例の盛んに性慾の滿足を要求すると云つた三十恰好の案外野暮くさい女に迎へられて、滿開の紅梅や、白い李の花が、スッキリと澄み返つた青空や松林に、ほのぼのと匂ひ漾ふ朝、いそ〳〵とこの宿屋を引拂つて、いづくともなく、立ち去つて了つた日の、恰もその午後であつた。入口の襖が音もなくスーと開いて、

――いらつしやいました。と、きこえぬほどに云つたかと思ふ間に、女中はニッコリ逃げるやうにトントン階段を下りて行つた。と、ヘリオトロープの薫香が俄に室内に漲つて、その薫香と共に、静に襖を閉めながら這入つて來たのは奥さんであつた。さうしてイキナリ火鉢の向側に坐つて、

――寒いわ。冷たいでせう？と、火鉢越しに私の手を握つた。その血の氣の少ない細ッそりした手は、なるほど大理石のやうに冷たかつた。

――私は暖かい。

――きまつてゐるわ。相變らずそんなものを飲んでるんだもの。と、奥さんはジロリと机の上のウヰスキイを橫目で見て微笑した。

――君のくれたのがなくなると、隣の哲學者が氣をきかして一本買つて來てくれたわけサ。但しこれはあまり上等ぢやない。と、私は飲みさしのコップをグッと乾した。

――あなたには到るところ親切なお友達がゐて羨ましいわ。こんな事と知つたら、私なんぞが女だてらにわざ〳〵こんなものを買つて來てあげるにも及ばなかつたわよ。と、憎らしさうな眼をして、奥さんは一寸私を睨みつけ、さうして

風呂敷をほどいて、その中から取出したブラックをば、哲學生の角帽と並べて机の上に置いた。

――これは豐年だ。かうなくちやウソだ。ウヰスキイでもくれる人でなけりや、今のところ私にや全く用はない。

――それぢやア、けふだけは私もあなたに用のある人間の一人になれたわけね。

――まア、そんなものでせう。

二人は罪もなく笑つた。

この奧さんは勿論私の女房ぢやない。他人の妻君だ。十年來ある大きな商人の其相續人の嫁さんになつてゐる。二人の子まである。さうしたブルジョアシイの世界では、理想的に貞淑な令夫人として甚だ評判が高い。夫が自分の妹に手をつけても、藝者の家へ入浸りになつても、まるで女今川の貞女のやうに、ジッと辛抱しつゞけて、冷然と子供達の守ばかりしてゐる。のみならず、謠自慢の夫の爲に、熱心に鼓の稽古にまで通ふ暇をぬすんでは私の宿屋へ訪ねてくれるわけだ。甚だ光榮なわけだ。が、さういふ×××××でも何でも、かうやつて、引寄せれば引寄せられてくれ、抱きしめれば向ふでも犇と×××ついてくれ、接吻をすればウツトリと眼をつむつてそれに應じてくれて見れば、私にとつてはこの世に於ける最も愛すべき女に相違ない。少くともこの奧さんが側にゐてくれる間だけは私は無上の幸福を感ずる。さうして決してデスペレートな氣分などは毛頭起らない。

『かういふ女がなぜ私と朝夕を伴にしてくれないのか。』と、ふとさう思ふと、私は矢も楯もたまらず、人生に對する憤怒と復讐の念が、ムラムラと心の底から湧上つて來て、これを怺へる爲には、どうしてもウヰスキイの魔力を借りなければ一刻もゐられなくなる。考へて見れば、私は極端な幸福の追隨者だつたわけだ。

――けふはどうだね、夕飯でもたべてから歸つたら。………女がイヤにソワソワし出したので私はソロソロ不快を感じはじめて、さう云つた。

――駄目よ。四時には東京からやつて來るから………

私はウヰスキイを酌いで一ト息にのんだ。

――大家の奥さんに可愛がられるのは私に[illegible]

――何と思はれても仕方がないわ。どうせ私が意久地なしなんだから……

――いッそこのまゝ愛へ來てしまつたらどうだね……

――さうしたくてたまらないんだけれど……

――だけれど？

――だけれど、駄目よ。今はまだ駄目よ。どうしても駄目なの。

――ひどく駄目なんだね。と、私は立てつゞけに一二杯グイグイ引きかけた。まアいゝサ。それぢや駄目でよくなる時機まで待つとするサ。

――すまないけれど免して頂戴……私が一ト思ひに死ねるといゝんだわねえ……

――ばかばかしい！　これから本當に生きる道を求めようとしてゐる人間が、死にたいなんて全く間違つてる。

――間違つてゝも、死にたいの。本當よ。

――それぢや舊式に心中しようか。と云つて、私はカラカラと笑つた。さうして、「心中する人間なら、俺はとうの昔一度も二度も心中をすましてゐた筈だ。」と心の底で思つた。

――心中はいやよ。私は一人で死ぬの。この上あなたに御迷惑はかけたかないわ。

――ばかに水臭いんだね。

――水臭いんぢやない、たゞ氣が小さいの……本當に私は意久地なしね。

――その小さい氣をウンと大きくしてあげようか。

――どうぞ……

私は…………………瑞々しい丸髷の匂ひと肉の香に浸潤したヘリオトロープの芳香とが、しみとほるやうにからだ中を刺戟して、それでなくても[illegible]

り返つた全身の血をば、忽ち獰猛に奔騰させた。

…………………………………………………。

…………………………………………………。

我に返ると、私は何となく一種の誇りを感じた。さうしてノビノビした氣持になつた。同時に酒の醉もあらかたさめた。

青ざめた顔して、奥さんは起き上ると、すぐ襖をあけ放したまゝ下へ行つた。暫くして再び上つて來ると、今度は鏡臺の前へ座つて、亂れた丸髷をなほしはじめた。丸髷は女今川のサンボルだ。

——どうだね、ちツとは氣が大きくなつたかね。と、また飲み始めた私は火鉢の側で大胡座をかきながら云つた。

——知りません。と、奥さんは見向きもせずに答へた。が、その聲は少しばかり恨めしさうに私の耳へ響いた。

——憤つたのかい？

——いゝえ。

奥さんは忽ち髮をなほす手を顔の上へ押しあて、鏡へ向つたまゝ、忍び音によゝと泣きだした。

——なにが悲しいの。と、私は聲を和らげて訊いた。

——なにも悲しかありません。

——ぢや、なぜ泣くの。

——いゝのよ。何でもないのよ。と、涙を拭いて、手ばやく姿かたちを直しをはると、奥さんは立上つて、

——歸ります。と云つた。

——さう、もう四時すぎたね。

私はこの上強ひて引き留める氣にもなれなかつた。

——ぢや、送つて行つて上げませう。

――送らなくてもいゝわ。

――まア、送つてつて上げようよ。

――ぢや、一緒にいらつしやい。と、コートを着ながら、奥さんは寂しく微笑んだ。

玄關は人がうるさいので、二人は人影の見えぬ庭口から、池の裏へまはり、あき屋の貸別莊を一周して、砂濱へ、通ずる木戸口から外へ出た。

――どうせ遅くなりついでに、片瀨まで歩かないか？

――歩きませう。と云つて、奥さんはまた寂しい笑顏を見せた。

丁度その笑顏のやうに、江の島までが何となくうら淋しげに見えた。いつのまにか空も灰色に塗すられて、冷たい風がザクザクと砂濱を踏む二人の裳裾をば折々ヒイヤリと翻がへした。

渡し場まではかなりに長い路程であつたが、その間二人の口からは一言も言葉は洩れなかつた。二度三度手はつなぎ合つた。砂山の陰で一度は唇も觸れあつた。けれども全く物は云はなかつた。さうしてその都度奥さんは一杯涙をためた眼で氣の毒さうにニコリとした。氣の毒さうに！さう、或は憐みを乞ふやうに！いづれにしても、自然に湧くべき感情をば努めて裏切つた微笑であつた。が、「無理もない。」と私は思つた。「可哀さうに。」と私は思つた。

瀨の早い川口の小さな渡舟に乘つて向側へ越えると、そこに出入口のある長い／＼棧橋から、江の島がへりの人達がゾロゾロと溢れ出てゐた。

――すぐ片瀨から乘る？

――どうでもいゝわ。

――ぢや、もう少し歩かう。

――えゝ。

二人は人込みを避けて、たま／＼電車の通る外、人通りの少ない七里ケ濱へ出た。

――くたびれたらう！

――え丶、少し。

――今度電車が來たら乘らうか？

――え丶。

二人とも默々と山を脊負つて海を脚下にした畔ある停留場で佇んだ。さうしてやがて來た電車に乘つて、大町で降りた。

――歩いてゆく？

――俥でゆきます。

――ぢや、爰で別れよう。

――え丶。

奥さんは人目を惧れるやうに足早に俥屋へ馳け込んだ。さうして一層青ざめた顏をチョイとふり向けて、物をも云はず、「左様なら。」といふ表情をした。私はいそいで俥屋の前を通りすぎた。跡をも見かへらず、そのまゝ大股でドシドシと歩いた。一散に長谷の方へ向つて歩いた。

パラパラと雨が降りだした。………

宿へかへると、ガツカリした。恰も過度の勞働でもした後のやうに、からだ中が、一時にコワはつて、とても起きてはゐられぬほど疲れた。私は蒲団を引ずり出して横になつた。さうしてグツスリ眠らうとした。が、よつぽど神經が昂奮してゐたものと見えて、眠らうとすればするほど益々眼はさえ切つた。と、見ゐる種々の[illegible]

心頭へ殺到して、[illegible]

女の[illegible]

したら俺は死ぬ事が出來るか?

それほどまでに俺は眞劍にあの女一人のみによつて自己の生活の完成を求めてゐるのか!

——いや、俺は決して眞劍に繋などの出來る人間ぢやない。

——が、若しあの女が今夜にも、家から夫から二人の子供から、一切の束縛から脱却して、不意と俺へとび込んで來たらどうだ?

——そんな事は斷じてない!

——あの女はまだプラトニック・ラヴの空想から覺めきらない。本當にあの女を愛しつゞける氣なら、その空想を破らずにソツとして置いてやるべきだつたのだ。

——馬鹿な事を思ふナ。プラトニック・ラヴなんてものはブルジョアジイの産物だ。あの女の眼を開いてやるつもりなら、まづさうしたものから破壞してかゝらなくてはならぬ。

——あの女にブルジョジイの脫却が出來るか?

——出來さうもない。

——そんな女になぜいつまでも戀々としてゐるのだ! それだけ俺自身がやつぱりブルジョアジイから脫却の出來きらぬ證據ぢやないか。

——俺は家財道具の一切を賣拂つて、僕の着更と原稿紙ばかり預めた鞄一つの境涯となつた。即ち天下無住の身となつたわけだ。即ちブルジョアジイから脫却した證據ぢやないか。

——愚かな事を云ふナ。ブルジョアジイの形式を破壞したところで、それが直ちにプロレタリヤになつたものと思ふか。俺は一度でも額に汗して働いた事があるか。現に家財道具を賣つた金で、かうやつて友禪縮緬の腰卷にくるまつてゐるのぢやないか。

――……これは破壊の途中だ。刻々破壊しつゝあるところだ。

――誤魔化すナ。聖フランシスはどうした？

――俺は聖フランシスぢやない。俺は聖人ぢやない。聖人なんてものを俺は信じない。俺の前にはたゞ凡人ばかりがある。五慾煩惱の凡人ばかりがある。

――そんなに凡人がるなら、なぜ天下無住の身となつたのだ？ 凡人で甘んじてはゐられないからだらう？

――それが凡人だからなのだ。子供の時分から俺はエライ人間になりたかつた。さうしてエライ人間なんてあるものぢやない事がわかつたのだ。人間は皆凡人だ。凡人だからエラクなりたがるのだ。エラクなりたがらぬ人間が一人だつてこの世の中にあるか？

――だから人間は昔から階級を拵へて、その秩序を破るまいとしてゐる。佛教でさへ鐵輪銅輪銀輪金輪摩尼輪など、信仰の程度にまで階級を造つてゐる。エラクなりたければ秩序を踏め。

――ものさしの表では俺自身は計られぬ。

――そんならものさしの裏で計れ。

――裏でも表でも既う駄目だ。ものさしでは駄目だ。俺はもうとうの昔凡ゆるものさしをへし折つて了つたのだ。

――それがどうしたのだ？

――だから破壊だ。破壊の外にはもう何もない。一切ない。

――勝手にしろ！

――破壊しろ、破壊しろ、手當り放題破壊しろ、盲滅法に破壊しろ、無二無三に破壊しろ………破壊だ…………破壊だ……

……」

私はギヨツとした。

俺は氣が狂ふのぢやないか知らん？」ふとこう思ふと、急に怖ろしくなつて、ガバとはね起きた。…氣がつくと、い

つの間にか身内の疲れは安まつてゐた。昂つた神経も落ちついてゐた。

『やつぱりいくらか睡つたものと見える。』と思つて、私はホツと息をついた。

夕飯をすますと、散歩に出た。

あたりはもう暗くなつてゐた。濕氣を含んで棚引いた淡霧が、そこら中に介めいて、ところ〴〵に立つ電燈の光りまでホンノリと花の咲いたやうに見えた。雨はやんでゐた。ポチャリと池の鯉の跳ねあがる音をきゝながら、私は其間近つた小徑を廻つて砂濱へ出た。砂濱は暗かつた。その眞暗な砂地の上を、あてどもなくブラリブラリと、彷徨ひながら、私はまた思ふともなくさま〴〵な事を思つた。が、いくら思つて見ても、結局は同じ事であつた。

『人間はたえず何かを持つて暮してゐるのだ。さうしてその何かはいつまで待つたところで、決して來る氣遣ひはない何かなのだ。これが人生だ。それだけが人生なのだ。要するに人生はXだ。どこまで行つてもXだ。Xの答はだXだ。Xの答はXだ。年々にダツシの數が殖えてゆくだけで、一生Xから離れる事は出來ない。全く不可能だ。

『人間は意志で生まれて來たものだから、やつぱり意志で死ぬ方が自然だ、といふ自殺論者がある。一應は道理なやうにきこえる。けれども人間が果して意志で生まれて來たものかどうかゞ先づ第一の疑問だ。が、かりに意志で生まれて來たものとする。併しそれにしたところで、意志で死ぬ事は決して自然とは云はれない。或はその方が論理的かも知れぬ。けれども論理は必ずしも自然ではない。$(X=X', X'=X'' \therefore X=X'')$これが論理だ。さうして自然は常にXだ。俺には自殺は出來ない、』

『が、俺はこの上生きてゐたくないのだ。俺にはもう澤山だ。こんな人生と知つたら、決して生まれてなンぞ來るのぢやなかつたとさへ思ふ。食慾に釣られ、性慾に釣られ、狗の枯骨を嚙むやうな八萬四千の煩惱慾に釣られ釣られて、欠乏の上にも欠乏を想ふる人生には全くあき〳〵した。死ぬ方がましだ。が、死にきれない。このまゝではどうしても死にきれない。なぜのだ？なぜなのだ？』

ザブンザブンと波はしきりに何事をか答へてゐた。が、私にはそれが何の意味だか勿論わかる筈もなかつた。亭の下の松林を潜つてチラホラと燈りの見える江の島の方へ後ろを向けて、私はそこから出て來た木戸口へ戻つた。來た時とは反對に築山を半ば廻ると、枯蒲などのカサコソと殘つた廣やかな池の前へ出る。池を隔てゝ恰も美しい芝居の背景のやうに二棟四棟と押並んで、間毎に燈の這入つた、二階建の宏大なこの宿屋は、私は思はず見惚れて佇んだ。と、どこかの部屋からコロリンと琴の音が起つた。續いて尺八の調べもそれに作つた。嬉しさが私の心の底の方からコミ上つて來た。氣に入つたシーンの幕があいたやうな心持がして、私は思はず見惚れて佇んだ。

『人生はやつぱり佳い。清心の死にきれないのは道理だ。』と、私は思つた。

——（" La premiere vert c'est la joie de virre "）

『さうだ、その通りだ。』と、私は思つた。

『千鳥』か、『江の島』か、曲は私にはよく分らなかつたけれど、その十三絃と竹洞の音とが、虚空に縺れて、花のやうに散つて、珊々と落下し來るシムフォニイを浴びて立つ間、私の心はその瞬間だけ須磨山頂の伎藝天部にあつた。さうして生も死も思はなかつた。

すぐ部屋に歸るのも惜しいやうな氣がしたので、私は途中の廊下から外れて、飄然と三田の學生を訪づれた。

——何となく春らしくなりましたね。と、私はいつになく世間並な事を云つた。

學生はニツコリした。さうしていかにも物やはらかな手つきで茶を淹れながら、

——實は今晩一寸お邪魔に上らうかと思つてゐたところでした。と云つた。

——さうですか。それぢや、これからすぐに來ませんか。

——えゝ、……なあに、どうせお出で下さつたのだから。爰でお話しゝてもいゝんですけれど……さあ、どうぞ番茶でも召上つて、御ゆつくりして下さい。

――あゝ、有難う。ぢや、その御用といふのを、早速で伺はうぢやありませんか？

――いえ、何でもない事なんですが、實は私も頼まれたものですから、それで一寸あなたに伺つて見ようかと思つてゐたんです。

――どういふ事ですか？

――實は……と、學生は妙に聲を低くしながら、――あなたは山村とか山中とかいふ女の小説家を御存じですか？

――山村？　山中？　さういふ女の小説家？　知りませんね。

――ぢや、そんなに有名なんぢやないんですね。

――いや、有名かも知りません？　恐らく私が知らないんでせう。私はこの頃の新しい人の名前をちつとも知らないんだから……雜誌も新聞も一向氣をつけて見ないんでね……で、その女の小説家がどうかしたんですか？

――えゝ、その女がきのふからこの隣りへ來て泊つてゐるんです。と、學生はいよいよ聲を低くした。

――別嬪ですか？　と、私は笑ひながら訊いた。

――さあ、どうでせう？　私にやよく分りませんが……と、學生もニツコリして、――とにかく顔に白粉を塗つて、それは頗るハイカラなものです。

――いくつ位です？

――さあ、それもよく分りませんが、二十五六でせうか……

――なるほど？　そこでその女流小説家がどうしたのです？

――それがあなたにお目にかゝつてお話しを伺ひたいと云ふのです……實はその紹介を頼まれましたので……お逢ひ下さいますか？

私は何の事だと思つた。

――えゝ、えゝ、おやすい御用です……逢つて下さるといふお方なら、

よ。どうぞ、さうお傳へ下さい。そりやどうも有難うございました。それぢや後程一緒にお伺ひする事に致しませう。と、學生は

――さうですか？

重荷を卸したやうな顏つきをして云つた。

と、さすがに少しくすぐつたいやうな心持がし出したので、

――そんな事なら、どうです？　さういふ面倒な手續きを踏まずに、これからすぐ隣りへ押しかけて行つては……――

と、私はわざとらしい輕薄な調子で云つた。

――それでもかまひませんが、………と、學生は眞面目な顏をして、氣遣はしさうに隣りへ聽耳を立てながら、多分まだ歸つてゐないでせうと思ひます。あなたのお出でになる少し前に、どこかへ出かけたらしいやうですから……そしてまだ一向戻つたやうな樣子もなさゝうです。と、何か云ひ譯でもしてゐるやうな、いやに重苦しい口つきで答へた。

私はいよ〳〵そこら中がムヅ痒くなつて來たので、

――ぢや、部屋でお待ちしてゐますから……失敬。と云つて立上つた。さうして來た時と同じやうなに悄然と廊下へ出た。

『この俺に會ひたい女……女の小說家……頗るハイカラな女……お話を伺ひたい……』さう思ふと、たまらなく賑アな氣持になつたので、大急ぎで自分の部屋へ歸ると、大急ぎでウヰスキイに取着いた。

いゝほどに醉がまはつて、やゝ陶然となつたところへ、約束どほりに三田の學生がやつて來た。と、その後ろからスルスルと小柄の女がすべり出た。

私はソロソロまた朦朧としかけて來た醉眼を瞬いて、やがて二人の座の定まるのを待つた。

――こちらが……と、不自然にかしこまつた學生が、片苦しく紹介の辭を述べたが……ここ、

——私が山極です。と、小柄の女は器用に引取つて、スンナリと兩方の手をつかへた。
——あゝ、あなたが山極道子さん！と、私は瞬間に名前だけ思ひ出したので、愛相よくさう答へた。
——はい、その世間をお騷がせしたアバレ者でムいます。と、女は卵形の派手な顏を動かして、さはやかにホヽと笑つた。

——世間を騷がしたかどうか知らないが、山極道子といふ名前だけはきいた事がありますよ、……こちらが山村とか、山中とかいふ女の小說家だなンて云はれるものだから、どうしても思ひ出せなかつた……と云ひながら、私は心の中で、『名前はたしかに覺えがあるが、全體何事を仕出かした女の名前だつたらう？　さう、本莊幽蘭——下山京子——丹稻子——山極道子……そんな類推の下に出て來る名前だから、何でも新聞とか、雜誌とかに關係のある女には相違ないのだが………』と、色々に考へて見たけれど、結局どうしても見當はつかなかつた。恐らくどこかでその名前の端くれだけを散見した事がある位に留まつてゐて、さうした名前が齎らす事實の內容は、あまり世間とは交涉のない迂濶な私の耳へも目へも、全々這入つてはゐなかつたものであらう。

が、その內容を熟知してゐる人間の一人だと早合點したものかどうか、女は得たりと附込むやうに、

——どこへまゐつても、本名を申しますと、世間がすぐ面白がつて、ある事ない事、いろ〳〵さま〴〵な評判を立てますので、それが爲に私はどの位迷惑を致したかわかりません……ですから、もう近頃は、どんなところへまゐりましても、それがうるさうムいますから、決して本名は名乘らない事に致して居ります……それで、山村だの、山中だのと、その時その場合出まかせに、出鱈目勝手放題な名前をつけて置くのでムいます。と、一生懸命辯明に力めたものだ。

學生は少しく煙に卷かれた形ちで、喋り立てる女の顏をば、呆れたやうな目つきをして、橫からチョイチョイ窺視てゐた。

『鎌倉の奧さんとは大分ちがふ。』と、私は思つた。さうして白兎のやうに落ちつきのない女の一擧一動をば、見るとも

なく見やりながら、

――あなたはいくつになります？ と、だしぬけに訊いた。

――私？ 私はもうお婆アさん！ と女は怯まず答へて、またホヽと笑つた。

――こちらは二十五六だと仰しやつたが、私は三十一二だらうと思ふ。

――あなたの眼はお高いわ。仰しやるとほりです。

――仰しやるとほりとは？ 一ですか？ 二ですか？ 三ですか？ 四ですか？

――まあ、いゝぢやムいませんか、その邊のところで……もう慥かにお婆さんには相違ないんですから……

――ぢや、ハツキリ三十一といふ事にして置きませう。

――あなたは非常にキチョウメンなお方なのね。と、女はさも感心したやうな、人を馬鹿にしたやうな、胡散くさゝうな、一種異樣な眼つきをした。

『三十一は奥さんの年だ。』と、私は思つた。さうしてその奥さんの憐みを乞ふやうな、濕みを帶びた、殊勝らしい眼つきをば、まざまざと心の中に思ひ浮べて、何となく物悲しくなつた。私はぐつとウヰスキイを呷つた。大分醉がまはつて來た。

――どうです？ あなたにも若き燕がありますか？

――どう致しまして！ 私は雷馬さんのやうなエライ方とはまるッきりちがひます……評判ほどにもない、實際はこれで、本當に氣の小さい、意氣地のない、それは平凡な女なんです。ですから、いくら氣に入つても、年下の方なンぞには、とても頼りなくて、どうしても戀する氣にはなれませんのよ……と云ひながら、心あり氣に學生の方を見て、浮々と無邪氣に笑つた。

――さうすると、君はとにかく落第だね。と、私も學生の方を見た。

學生もニツコリ笑つたが、かうした返事には困つたと見えて、たゞ頭を掻いてゐた。

――僕は及第だ。僕はズッと年上だ。どうですゝ僕にならば戀が出來ますか？

――さア、と云つて、女は一寸眞面目な眼つきをして、ジロリと私の顏を見た。――さア、どうでせう？ ひよつとすると出來るかも知れませんわね？ あなたはこれで一寸頼れさうなお方だから……

――おや、早速とりかゝつたらどうです？

――なんぼ何でも、さうはゆきませんわ。今はじめてお目にかゝつたばかりのお方ですもの。と、女は打消すやうに手を振つた。

學生は聲を立てゝ笑つた。

――一目見たばかりで陥るやうな戀でなけりや本當の戀ぢやない。遠慮せずにドシドシおやんなさい……さあ、手でも握りませうか？ 面倒くさいから、すぐ抱合つてキッスでもしませうか？ と、すぐにも飛びつきさうな調子で、私は云つた。が、女は平然としてそれには取合はなかつた。さうして巧みに話頭を轉ずるやうに、

――戀にもこれで色々ムいますわね。と、淀みのない聲で、サラサラと述べはじめた。――その色々ある戀を私は大別して、黄金の戀、ダイヤモンドの戀、さう二つに分けて考へて居りますのよ。

――いやにピカピカした戀ばかりですね。と、私はまぜッ返した。が、女は動ぜず、

――まあ、お聞き下さい……ダイヤモンドの戀と云ふのは、今あなたの仰しやつた、お互ひに一目見たばかりで陥るやうな、ロミオ・ジュリエットの戀を申すのです。さう云つた詩的な戀はこの實世間には決してありさうな筈はムいません。實世間の戀はきつと利害關係を伴つたものです。

――そこで黄金の戀ですか。君も中々感心な事を云ふね。そりやそれに相違ない。そこで？

――ですから、私は頼れる人でなければ、どうしても戀する氣にはなれないのです。

――さうすると、その頼れる人といふのは、金でもある人の事を云ふのですか？ 黄金の戀なぞ……

――さういふわけぢやムいません。お金ばかりあつたつて、頼れない人……

――……

――ぢや、どういふ人です？　學者ですか？　政治家ですか？　宗教家ですか？　實業家ですか、

…喋つてゐるうちに、私は忽に自分自身が馬鹿らしくなつた。さうして心の底で、『何だつて俺はかういふ氣になつて、こんな愚にもつかぬ下らない問答に係りあつてゐるんだらう？』と思つた。けれども、だんだん醉がまはつて來た唇は、何と思はうと心には一切お構ひなく、たゞ唇それ自身だけで、ペラペラと氣隨氣儘に滑つて行つた。

――さういふ意味ぢやムいませんのよ。職業とは全く關係がないの。と、女はまだ提供した黃金の戀を講究しつゞけてゐた。

――さア、わからなくなつた？　どういふ種類の人か知らん？

――つまり、みんなから靠れかゝれるやうな人なのよ。

――みんなから靠れかゝれるやうな人？　恐ろしく大力な人だね……が、要するに大人物を云ふのでせう？

――それが强ち大人物には限りませんの。さア、何と申したら宜しいでせうね？　と、女は一寸困つたと云ふやうに、仔細らしく小首を傾けた。と、暫く間を置いてから、やがてさも巧い言葉にでも思ひ當つたやうに、嬉しげに續けた。――世の中にはかういふお方が厶いますでせう？　たとへば私なら私といふ一人の女が、かりにあなたならあなたといふ一人の男を本當に戀してるとします……勿論かりにですのよ……と云ひさして、チラリと秋波を見せ、――

――ところが、爰にまたもう一人の女があつて、その女の方も全く私と同じやうに、やツぱり心からあなたを戀してゐるとするのです。さうしてそれをお互ひの女同志が十分に諒解し合つてる、わけなのです。ようござんすか？　それでゐて、双方とも決して嫉妬がましい念などは、つゆ起らないばかりでなく、それが爲に却つてますます親しみを增す事になり、姉妹のやうに睦じく往來をし合つて、どこまでもあなたの爲に盡さうといふ氣になる……と、まア、さう云つたやうな人ですのよ。と、女はしたり顏に言葉を切つた。

――そんな男はないね。それは寧ろダイヤモンドの方の口だね。丁度本妻と妾との間を往來して、途中で夜が明けた、といふ昔話と同じ事だ。男ばかりぢやない。こんな女はこの世の中に註文してない。女性といふものは、嫉妬を

れては決して成立するものぢゃない……あなたはそんな御伽噺を信じようとしてるのかねえ　と、私は向になつて反駁した。

女は笑つた。さうして中々負けてゐずに、

――ところが、ありますのよ。私はあなたのやうな學問こそ厶いませんが、長い間いろんな世間を渡り歩いた御蔭で、さまざまな男の方を見てまゐりましたわ。その經驗から、さういふ人はあると信じますの……女性は嫉妬だなンて、それこそ學者の空想ですわ。男次第で女はどうにでもなるものですわよ。さうした男に對したら、女は必ず嫉妬なンぞ起すものぢゃ厶いませんのよ。と、云ひ返した。

私は少しばかり小癪に觸つたので、

――はゝア、さうすると、なんだね、現在あなたが世話になつてる人間は、つまり、さう云つた人物なんですね？

と、殘酷に突込んだ。

女はやゝ面くらつた體であつた。が、いかにもスパシこく立直つて、

――御冗談ですわ……私に若しそんな人が厶います位なら、何を苦しんで、一人でこんな田舍へまで來て、食べる爲の小說なンぞ書かうとしてゐるものですか？と、ケロリとして答へた。

――大きにね……で、どうです？その小說はちつとは書けましたか？

――それが書けないんで、本當に困つてゐるので厶いますの。と、さも〳〵困つたやうに、女はそのしなやかな撫肩を搖ぶつた。

――そりや、お困りでせう？ちッと手傳つてあげませうか？と、私はからかひ面に云つた。

すると、女は、俄に膝を進めて、

――どうぞ、どうぞ、本當にお願ひ致します。私、學問といふものをしなかつた訓で、それはちッ
すの……材料は山のやうにあるのですけれど、それをどう取捨したらいゝもの

んですの……――と、本氣に哀願するやうな調子で答へた。

今度は私の方が面くらふ番であつた。

――そりや、お手傳ひしてあげてもいゝがね……但し僕は專門の小說家ぢやないからね、お手傳ひしたら、それこそ却つて變なものにして了ふのでせうよ。

――變でも何でもかまひませんの。お手傳ひして戴けさへしたら、それだけで結構ですの……本當に私困つてゐるんですから……

私は少々片腹痛くなつた。そこで、

――そんな思ひまでして、小說なンぞ書かなくたつていゝぢやありませんか？と、眞顏になつて云つた。

と、女はいかにも途方にくれたやうに、

――さうすると、私、毎日の御飯が滿足に戴けなくなるんですもの……

私はカラカラと笑つた。

――まア、そんなに心配したものでもないでせう……さしづめ私が養つてあげますよ。さう、さう、幸ひこの隣りの部屋が明いてるから、早速今晩から引越したらどうです？……ねえ、さうなさいよ。小說なンぞ潔くやめてサ。その代り……と、私はもうよほど醉つて來た。――その代り、毎晩私に××××××んですよ。よござんすか……なに、かまふ事があるもんですか？　あなたも一人身だし、私も一人身だ！　さうしてお互ひに肉體の發達しきつた男と女だ！抱擁し合はない方が、寧ろよつぽど不自然だ、よつぽど不合理だ……

學生は責任を感じて立上つた。

――今晩はもうよほど遲いやうですから、これで失禮いたしませう。と、さう云つて、不安な目顏で女を促した。

――それでは、と、輕く頷いた女は裾を䌓へて、しとやかに一禮すると、――いろいろお話を伺つて、ほんとに有難うムいました。と、朗らかな聲で繰りつゝ、自ら襖の外へ出て、階段を趣せ下つた。その調子がいゝトンーン

トンといふ足音をきゝながら、

――逃げるのかね、卑怯だね、君は………などゝ、もうよく廻らなくなつた口の内で、クドクドと私は呟いた。さう
してそのまゝそこへ倒れてしまつた。

ふと眼がさめて見ると、私はふはふはした厚い敷蒲團の上へチャンと横たはつて、いつもの通り、炎え立つやうに眞紅な、甚だ、氣のひけるほど、ひどく艶めかしい友禪縮緬の搔巻にくるまつて、その上へ綠色の郡内の夜具など蔽ひかけて、若殿様のやうに穏しく寢てゐた。糟糠の妻のやうにやゝ口やかましいが、中々親切でよく行屆く女中のお鹿さんが、ゆふべは恐らく非常に難儀な思ひをして、二十貫もあるこの重たい私のからだをたすけ起し、さうして多分やう〳〵の事で、この蒲團の中へ臥かしつけてくれたものであらう。

外はよほど好い天氣だと見えて、もうかなりに高さうな日光が、パッとまぶしいほど濶達に、白い障子の紙を耀かしてゐた。が、私はおいそれとすぐには起上らなかつた。長々と仰向けに臥そべつたまゝ、時々目をパチクリ開閉させるばかりで、身動きもせずジッとしてゐた。

廊下では二三の女中達が、せつせとそこらの拭掃除に忙しさうな様子であつた。この二階には客は今私一人なので、さうしてその私をばまだ熟睡の最中だと高を括つてゐたものか、彼等は大びらでしきりに客の噂をしてゐた。私は知らず〳〵聽耳をそばだてた。

――ほんとにいゝ了見だよ。朝から晩まで、白粉ばかり眞白に塗り立てゝゐながら、『どうもこの部屋は騒々しくて書きものが出來やしない。』だとさ、ばかにしてゐるぢやないか。

――でも、あすこは全くうるさいよ。下の私達の騒ぎが筒抜だからネ。」

――それにしてもサ。

――お花さん、小説つてむづかしいもの？

――それや、書くものはむづかしいやネ。

——いつぞや、この九番にいらつした谷崎さんなんぞは、それこそ大變な騷ぎだつたわ

らしつてね、それで何枚も何枚も書き潰しばかりなさつてね、一日かゝつて、それはホンの僅かしきやお出來にならな

いやうだつたわ……だから、大したものよ、小説を書くなんて……

——そんなむづかしいものが、あの人に書けるのかしら？

——そりや、書けるんだらうよ、あんなハイカラさんなんだから……

——どうだかわかるものかね。おほかたそんな事を看板にして、金持の坊ちやんでも引かける氣でゐるんだらうよ。

——まさか。

——お梅さん、お梅さん、おきゝよ。さういやね、私にそれとなくこんな事を云つてたよ。『あゝあ、小説なんぞ書くのはつくづく厭になつた。誰か私に一萬圓ばかりくれる人はないかしら。若しさういふ篤志家があつたら、たとへそれがどんないやらしい爺さんでも、びツこでも、めツかちでも、何だつてかまやしない、わたしや小説なンぞよしてすぐ飛んでゆく。』ツてよ。

いゝ了見だ。

私は大きな聲でアクビをした。彼等はパタリと鳴りをひそめた。さうしてコソコソと階段を下りて行つた。

——『下郎は口のさがなきもの。』かと、私は可笑しく心の中で呟きながら、やがてノソノソと起支度をした。

手拭をブラ下げて、私は風呂場へ赴いた。風呂場には誰もゐなかつた。私がゆくとすぐ出て來て、いつも背中を流してくれる風呂番の爺さんまで、どうしたのかけふは姿も見せなかつた。と、隣りの別風呂で、ボチヤボチヤと湯を使ふ物音がした。

『はゝアけふは珍しく隣りの風呂も立つてゐるのか。』と、私は思つた。と、さう思ふと殆んど同時に、忽ち隣りからヒソヒソと男女の話聲が洩れた。私は思はず耳をすました

——私はほんとに、それはそれはお風呂がすきでね、かうして一日お風呂ある家だと、日に三度でも四度でも這入りたくなるのよ。と、きゝ覺えのある聲が云つた。

きゝ覺えがあるもないもない——それは飽きるほどきいた、ゆうべの女であつた。私はムラムラとその女の裸體が見たくなつた。と、男の聲がした。

——どうぞ御遠慮なく何遍でもお這入り下さいませ。

と、ザアと脊中へ湯をかける音がした。

『なアんだ。風呂番か。』と、私は一寸輕い失望を感じた。同時に、立騰る湯氣と共に、萬遍なく暖かい雫の這ひまはる、大理石の彫刻のやうな、滑らかに白い女の脊中を想像した。さうしてすぐ立上つて、よッぽど隣りへ押しかけて行つてやらうかと考へた。けれども、さすがに氣がとがめて、それだけは思ひとまつた。

風呂から歸ると、早速朝飯の膳に向つた。給仕に來たのはお鹿さんではなくて、女中頭のお冬さんであつた。

——けさは大分御ゆッくり……でと、お冬さんは物靜かないかにもアカぬけた聲で云つた。聲ばかりではない。顏から、姿から、表情から、起居振舞まで、お冬さんの一切は心持よくアカぬけてゐた。

が、勿論その筈であつた。去年の春まで、お冬さんは大阪の南地に住んで、永らく宗右衛門町の大きな席から出てゐた姉さん藝者の一人だつたさうである。それがいろ〳〵例の『込入つた』事情の下に、きれいサッパリ商賣の方の足を洗ひ、同時に男といふものにも一切の念を斷ち、今度こそ本當に一本立の女となり、もと〳〵好きな道ゆゑ、東京へ出て、一生歌澤の師匠で終る考になつたものだといふ。さうしてその芝派の家元から出る許しとやらを待つ間、幸ひこの宿屋が近い親戚の一つであるにまかせ、しばらく愛で若い女中達の監督がてら、かく手傳ひをしてゐる身の上だと、いつだつたか、私の部屋へ手紙かなンか書いてもらひに來たやうな時、お冬さんは、しめやかに

——昨晩は何ですか大さうお美しいお客様だつたさうで……

――いや、お美しいのは結構だつたが、『ダイヤモンドの戀』には

――へえ？『ダイヤモンドの戀』？　何ですか活動のやうなお話でムいますね？　で、どうしてそれ

たのでムいます？　あなたでもお弱りになるやうな事がお有りになるのでムいますかねえ？と、お冬さんは茶碗を受取

つた盆を引きながら、冷やかすやうに輕く目で笑つた。

――そりや僕だつて弱るサ。あゝ臆面もなく滔々と喋り立てられちやね……とにかく雄辯なものだ。

――でも、中々御愛嬌のいゝ方でムいますねえ？あのお方は……と、再び盆を差出しながら、お冬さんは眞顔で云

つた。

――さうかね？　と、私は飯を裝つた茶碗を受取つて、疑はしさうに答へると、

――そりやとても晝間お出でになつたお方とは比べものにはなりませんけれど……と、お冬さんは思はせぶりに附

加へた。

――冗談ぢやない。と、私は飯を掻込みながら苦笑した。

――いえ、全くでムいますよ……内のお神さんも、お越しになるたび、帳場からよそながらお見かけ申して、『ほん

とにお立派なお方だ。ほんとにお立派なお方だ。』と、つくづく感心して、しきりに首を振つては、さう申してをります

、、、あゝいふお方に可愛がられていらつしやるあなたは、何といふお仕合はせな人だらう？……なんてね……い

え、本當でムいますよ……と、お冬さんは澄まして人の敷島を一本拔きとつて吸ひつけた。

私は默つて茶碗を差出した。と、お冬さんは吸ひつけた莨を捨てゝ灰の中へ挿し込み、

――相すみません。と、恐縮しながら盆を出した。が、恐縮したのは勿論そのサービスの態度ばかりで、眼はいよい

よ明瞭にその冷笑と揶揄とを裏切つてゐた。

――あなたといふ方はほんとに、罪作りでムいますよ。あゝいふお美しい方々に、あちらでも、こちらでも、やいの

やいのと氣をもませてゐらつしやるんですからねえ……實にあなた、けさ程もねえ……と、袂の中から引出した莨

に火をつけて、忙しさうに一二服吸ひ、——山村さんが起きぬけにお神さんとこへ押しかけてらしつたと思召せ。で、何を仰しやるかと思ふと、まア、かうぢやムいませんか……あなた、よつぽどお斉りにならなくちやいけませんよ……ほんとですよ………と、出すぎた煩を器用な手つきでうるさゝうに拂ひのけながら、——『お神さん、お神さん、私ね、仕事の上でいろ〳〵先生に伺ひたい事や敎はりたい事がありますからね、後生ですから、あの隣りのお部屋へ引越さして頂戴よ。』どんなもんでムいます？　お斉りになる値打は十分にムいますでせう？………と、お冬さんは湯呑に出花を注いで、それをお膳の横手へ置きながら、『いかがでムる？』といふやうな顔つきして云つた。

私は思はず釣込まれて、

——お神さんは何と云つたね？　と、湯呑の茶を茶碗の中へ移しながら訊いた。

——お神さんも弱りましたね……何しろどちらもお客様の事でムいますからねえ？お斷りするわけにもゆかず……

……と云つて、若しさうなれば、あなたの御迷惑はわかりきつてゐるし……

——いや、僕は決して迷惑どころか……

——えゝ、無論、そりや、あなたの事ですから、さう仰しやるにはきまつてゐますけれど……それにしても、あの樫しい奥さまに對して、そんな事を致しては、まことに、義理の立たないわけだから……と、あとでお神さんはしきりに申してをりましたよ。

——さうかね？　そりや殘念だね？併しお神さんは中々エライね……僕なんぞの事について、そんなところまで心配してゐてくれるのかね？

——そりや、あなた、大切なお客様の事でムいますもの……

——なるほど、さうしたものかね？……いや、御馳走。と云つて、私は爪楊子を使ひながら、膳の前から離れた。

お粗末さま。と、例のサーヴィスだけはよそ行きに、恰もその大切なお客様に對するものゝ如く、膳の上へ額までつけた甚だ丁重なる一禮を終ると、お冬さんは膳部を片附けはじめた。

時計を見ると、十二時すぎてゐた。

のどかに肱枕でもして、ゴロリと日向ぼつこしながら、氣に入つた小説か隨筆を讀みたいやうな日だ。けれども本はもう家財道具と共に一册殘らず賣拂つて了つた。

三四枚ある奥さんの寫眞を出して見る。急に又手紙が書きたくなる。すぐ机へ向ふ。机の上には雜誌社と約束した隨筆の原稿が十枚ばかり書きかけたまゝ載つてゐる。と、その原稿を續けようかと思ふ。さうして一行ほど書いて見る。すぐ厭になる。やツぱり手紙にしようと思ひ返す。が、それも既う厭になる。

結局、ウヰスキイだ。ウヰスキイだけは厭にならない。奇體に厭にならない……三馬に出て來るケチ助の要領で、私は一人チビリチビリと飲む。

フラフラと私は立上つた。無意味に立上つた。つまり、座つてはゐられなくなつたからだ。勿論、强烈なアルコールの化學作用が、筋肉の運動を支配する神經細胞を刺戟した結果には相違なからう。が、なぜ殊更に座つてはゐられなくなつたものか、それはわからない。なぜ無意味に立上らなければならなかつたものか、それもわからない。たとへ、それが自分自身の動作でも、無意識だから分らないのだ。人間の動作は大抵無意識だ。

私は障子をあけて、廊下へ出た。ばかにいゝ天氣だ。と、散歩がしたくなる。引返して、マッチと敷島の袋を袂の中へ抛り込む。手ついでに、意地ぎたなくもう一杯ひツかける。ぬすみ酒でもするやうに。さうして不必要ないそぎ足で、あたふた階段を驅け下りたものだ。

上下に二間づゝあるこの一棟は、左翼に於けるこの宿屋の最盡頭に位してゐるので、一旦階段を下つた者は、戻つて便所へ赴かないかぎり、否でも應でも、歩けば自然と中央なる玄關へ、爪先の向くやうに、棟毎に異つた各棟の廊下が、目まぐろしく曲折してゐる。

私は二つばかり廊下の角をまがつた後、何の氣なしに階段の下で立留まつた。同時に、『いろく先生に伺ひたい事や教はりたい事が……』といふ聲がきこえたやうに思つた。さうしてそれはさつき聞いたお冬さんの聲色ではなかつた。

私は薄暗い階段を見上げた。が、『まア、やめて置かう。』と、さう思つて、二三步階段の下を通りすぎた。通りすぎたと思ふと、私の足は突然引返した。引返して階段を上つて了つた。

女の部屋は階段のすぐ側にあつた。天井が低くて、日當りのわるい、いやに狹苦しく感じられる廊下に立つて、私は障子の隙間からオツオツ覗込むやうに、

――お出でゞすか？ と、よそゆきの聲をかけて見た。心の底では、しきりに、『ばかばかしいから止せ。ばか／＼しいから止せ。』と、力なく叫びながら……

が、一向に返事はしなかつた。ゐないのか知らんと思つて、氣がついて足元を見ると、果せる哉、あるべき筈の場所に草履の影もなかつた。私は安心したやうにホツと溜息をついた。さうして、序でだから、隣はと見ると、草履は同じくそこにもなかつた。

『なアんだ、馬鹿にしてゐる。お揃ひでお出かけか……』と思ふと、どういふわけだか、忽ち今度は妬ましいやうな一種の妄念が、ムラムラと心の底から炎え上つて來た。

私は散歩をやめて、そのまゝすぐ部屋へ歸つて了つた。

夕飯の給仕にはお鹿さんが來た。

――あなた、いけませんよ。あゝいふお方があるのに。いゝ氣になつて浮氣なんぞ……

り、お鹿さんは攻撃をはじめた。

――僕が浮氣？　どうしてね？

――どうしてもないもんです。そんなにおとぼけなさつたつて駄目です。チヤンともうみんなに見られて了つてるんですよ。

――をかしいね、何を僕が見られたんだらう？

――しら〳〵しいよ。まだあんな事を云つてらしやる！　のめ〳〵と……

――驚いたね。一體まア、どうしたわけなんだ？　と、私があんまり眞面目なので、

――ぢや、やツぱりあなたぢやなかつたのかしら………と、お鹿さんの鋒先は忽ち鈍つて了つた。

――僕ぢやなかつたとは？

――いゝえね、さつきみんなで大騒ぎしたんですよ………何でもね、ドテラを着た、丁度あなた位の丈恰好をした男の方と、それはそれは山村さんソツクリの後姿をしたハイカラさんとが、いかにも睦じさうに手をつなぎ合つて、向ふの砂濱の上を歩いてるぢやありませんか………あたし達はテツキリあなたと山村さんとに違ひないと思つたんです………やツぱり、あなたなんでせう？　と、急にまた疑はしくなつたらしく、お鹿さんは私を睨みつけた。

――冗談云つちや困る。僕はけふ一日どこへも出やしない。

――さうですかしら？　でも浦上さんが双眼鏡で見て、たしかにさうだつて、仰しやつてましたがねえ？

浦上さんとは三田の學生の事だ。

――そりや浦上君の見そこないだ。馬鹿にしてゐるぜ、一日この室内へ閉籠つてゐた人間が、どうしてあんな砂濱の上なぞが歩きまはれると思ふね？　つもつても見るがいゝ。と、極力辯明に努めながら、私は心の中で、「はゝア、して見ると、別段浦上君と一緒に出かけたわけでもなかつたのか」と、思つて、自分では氣がつかなかつた今迄の屈托が、急に跡方もなく消失せたやうな心持がした。

——君はどうも怪しからんね……ドテラを着た男なんぞ[illegible]をイチヤツキ歩いたりして……と、夕飯後、今度は堂々と女の部屋へ乗込むや、私はエライ勢ひで浴びせかけた。

女は妾宅の猫のやうに、チヨコナンと火鉢の前に座つてゐた。さうして私の不作法な語氣には一向辟易した樣子もなく、

——オヤ、それは耳よりなお話でムいますこと……と、ニコニコして答へた。

——そのドテラは何者です？　と、私は遠慮なく引寄せた座布團の上へドシリと大胡座をかきながら疊みかけた。さうして酒くさい息と共にふうツと敷島の煙を吐いた。

と、そのとたんであつた。とても堪ろ怺へきれなくなつたと云つたやうな、厭殺した男女の笑聲が、襖を隔てた隣室からクスクスと起つた。

ギヨツとして私は顧向いた。さうして、

——浦上君、ゐるのかい？　なアんだ？　とテレ隱しに云つて、ガラリ襖をあけた。

見ると、そこには、ニヤニヤした浦上君と食卓を取圍んで、各自にトランプの札を持つた三人の女中がゐた。

——あけなくてもよござんすよ。と、そのうちの一人が忽ち叱りつけた。それはお鹿さんであつた。

——まア、いゝサ……浦上君、トランプは跡廻しにして、これから二人がかりで、緊急なるドテラ問題を解決しようぢやありませんか？　と、私が云ふと、

——浦上さん、行くんぢやありません！　と、今度は離れて來さうにする浦上君を頭から高飛車にキメつけて置いて、お鹿さんはそれだけではまだ溜飲が下らぬやうに、ツカツカと席を立つて來て、ピツシヤリと襖をしめて了つた。さうして、

——そツちはそツちでお樂しミなさい。こツちはこツちで勝手に遊びますから……と、金切り聲を振り立てゝ叫んだ。

――お鹿さんがやきまアす！――と、誰かゞ囃すと、一同はドツト笑つた。

――さア、それぢや、こツちはこツちでお樂しみだ。と、私は向き直つて、度胸を据ゑたやうに云つた。さうしてそれとなく女の顔色を窺つて見た。が、女は不關焉と同様に座つたまゝ、相變らずたゞニコニコしてゐた。

――そこでドテラだ。と、私は火鉢の方へ手を出して莨に火をつけた。と、

――ドテラは寃罪でムいますよ……と、女は小さな唇をしほらしく動かしながら、――私、今日は、一日齋藤美代子さんのお宅で、まるつきり暮らして了つたんでムいますもの……と云つて、――あなた、齋藤美代子さん、御存じ？と、媚びるやうな目にシナをつくつて訊いた。

――齋藤美代子さん？ さう、きいた事がありますナ……丁度、あなたの名前をきいた事があると同じやうに……と、ドテラの事なンぞは忽ち忘れて、私は答へた。

――私も今日はじめてお目にかゝりましたの……さうしてスツカリお話が合つちやつて、もうまるで十年もおつき合ひしたやうなお友達になつて了ひましたのよ……

――へえ？ それは結構でしたね……で、どんな人です？ その齋藤美代子さんといふ方は……やつぱり、あなたのやうな別嬪ですか？

――あら、御冗談ばツかし……何で私が別嬪なものでせうか？……と、否定するやうに手を振りながら、しかしまた嬉しげにホヽと笑つて、――私なンぞとはまるで異つて、美代子さんは、それは美人でゐらつしやるわ。と、急に眞顔になり、――お書きになつたものとは全々正反對な、羨やましいほど落ちついた、非常に口數の少ない、それはドツシリした方ですの……

――鵠沼にゐるんですか？ その人は……

――えゝ、えゝ、もう十年からゐらつしやるさうです……つひこの御近所なのよ、お家は……

――誰かの奥さんですか？

——いゝえ。

——ぢや、お妾さんですか?

——まさか。

——そんなら、何です?

——何でもムいませんわ。お母さんとからだのわるい妹さんとお三人きりで水入らずに暮らしてお出でになつてるだけですの。

——さうして靜かに小說を書いてね……羨やましいなア……一つさういふところへ聟にでも這入りたいもんだね。

——喜んでお聟さんになさるでせうよ……あなたのやうなお方なら、二つ返事でね……早速、御紹介いたしませうか?

——どうぞ願ひます……と、それでその方の片はついたと……そこで今度はあなたの番だ。と、私は女の撫肩のあたりから人形のやうにチンマリした胸の邊へかけて、ジツと視線をそゝぎながら云つた。潔く白狀する。私はこの女と差向ひで話してゐると、どういふわけだか、自然に××××して來る。痩ぎすで小柄な女だから、打見たところ、どことして肉感的な箇所はない。外形的には、寧ろそれとはオー・コントレエルだ。それにも拘らず、しきりにさういふ氣がして來るのが、自分ながら不思議でたまらぬやうな思ひをした。

そんな怪しからん考など起してゐるものとは、機敏な女もさすがに直感は出來なかつたと見えて、

——え? 私の番?と、極めて無邪氣に訊き返した。

——つまり、あなたの身の上話がきゝたいのです。

——私の身の上話? まア! と、女はニツコリした。さうして俄に眞意は測りがたいと云つたやうな胡散くさい眼の底をチラリと輝かしながら、——私の身の上話なンぞ……と、投げ出すやうに云つたかと思ふと、すぐそばから、

——それはお話しろとあればしない事もムいませんけれど……と、大いに色氣のあるところを附け足した。

——さア、して下さい……この通り謹聽してゐます。と、私は剽輕に目をつぶつた。

——する事はしますけれど……と、女はさも當惑したやうに、——でもね、それはとても一ト晩や二タ晩ぢやお話しきれませんのよ……と、ジラスやうにコロコロ笑つた。

——千一夜かゝつたつてかまひません。昔圓朝の鹽原多助をきゝに一日も欠かさず九段の上席へ通つた要領で拝聽します。

——まア、大變な御執心でムいますこと……それにしたところで、さア、どこからお話したものでせうネ　あんまり色々な事がゴチャゴチャと澤山あつて……

——『最近の御感想』から伺ひませう。と、私は出來るだけ巫山戯た調子で促がした。が、さすがに懐から手帳を出す眞似まではしきれなかつた。

やがて女は語り出した。はじめのうちはやゝ、話しにくさうに時々ポツリポツリ途切れたが、話してるうちに、だんだん氣が置けなくなつたものと見えて、一言ごとに人なつこい調子が加はり、打ちとけ〳〵隔意なく物語つて行つた。

二人の子供を殘して、最初嫁入した家を出て以來、新聞記者になつて、その所謂『お目見え日記』を書く爲に、或時は待合の女中となり、或時は吉原のお針女に住込み、千變萬化の假裝生活が成功して、非常にその新聞の社長に可愛がられた事から、その結果社員等の反感を買ひ、自然退社して暫く京阪地方を流浪した揚句、尼になる氣で嵯峨の天龍寺へ驅込んだ事や、ところが、そんなナマやさしい事位では、中々前世の宿業はつきなかつたものと見えて、忽ちそこに修養してゐた哲學青年と出來合ひ、再び結婚して東京へ歸ると、さしあたり衣食に窮したところから、少し氣の變なその青年に突ツつかれて、やがて書きあげたのが、例の世間を騒がした、もとの社長と自分との關係をば忌憚なくスッパぬいた文章であつた事や、それからその文章の反響が凡ゆる社會の反感となつて自分一身へ集まつて來た苦痛と、さうして爲す事もなく唯〳〵かぼそい女の筆先に縋つてのみ衣食しようと企てる、あまりに無能な、同時に又蛇のやうに執拗な、考へてもゾッとする青年の追窮とから、どうにかして身を免かれやうとして、或は[illegible]の山の中へ遁れ、或は[illegible]

を越えて遠く上海まで落ちのびた事や、さうしてその青年ときれいサッパリ手のきれる迄では、隠して[illegible]踏まぬ覺悟で、それから少しばかりの化粧品や人形などを拵いでは、上海、天津、大連、奉天、京城、の間を股にかけて、ゆく先々でバザアを開いたり、時には音樂會を催したりして、とにかく今日まで誤魔化して來た事まで、厭味なくスラスラと物語つた。

『案外に正直な女だ。』と、私は思つた。

――それでその青年との關係はどうなりました？

――去年漸く籍を返してくれましたの。

――へえ？　法律上の手續まで踏んであつたんですか？

――えゝ。ですから、向ふでも意地になつて、あゝ執念ぶかく追蒐けまはしたものなんでせう。下の關で警察へ引張つて行かれた時などは、本當にもう殺されるかと思ひましたわ。

――警察へね？　何だつてまた……

――船へ乘るところを見つかつて、警察へ訴へられたんですの……その時は私も既う一生懸命ですから、死物狂ひになつて署長さんへ泣きついたものです。さうして漸く虎口から逃してもらひましたの……よくわけのわかつた署長さんだつたのでね……

私もとうとう憮然として耳を傾けざるを得なくなつた。が、それにも拘らず、例の怪しからん考へが、場所柄をも辨へず、遠慮會釋なくヒョイヒョイと頭をもたげるには弱つた。

『この女にかぎつて、なぜまた特にこんな氣が起つて來るのか知らん？』と、私は自分ながら愛想のつきたあまりに要領を得ぬ自分自身の肉體を疑つた。

――さうして人形賣はなぜやめたんです？……小說なんぞ書くよりやその方がよツぽど面白いぢやありませんか……

――そりや面白うムいますわ……面白いにや面白うムいますけれど、やツぱり……

――やツぱり？

――やツぱり、何かにつけて、女一人ぢや心細うムいましてね……それに不圖、表面こそワイワイ云つて、面白をかしくバザアなど開いてゐる時でも、不圖自分自身といふものを考へ出すと、さア、不安で不安でたまらなくなりますのよ……たとへこんな私のやうな淺薄な女でもね……

――なるほど、大きにね……そりやさうあるべき筈です。そこで小説を書く氣になつたんですか？

――まア、そんなわけなんですの……ですけれど、不安はどうしてもなくなりませんの。却つてだん〳〵不安になるばかりなので、私、どうしたらいゝものか、全くわからなくなつてゐますのよ。

――そりや當然ですよ。自分自身といふものを考へ出したら、人は誰だつて不安でたまらなくなるものです。

――どうしたらいゝものでせう？

――さア、どうしたらいゝものでせうね？……二祖の慧可が、七日七夜も雪の中へ立ち通して、命懸けで達磨にきいたのも、つまり、そこなんでせうがね……

――で、達磨さんは何とお答へになりましたの？

――『そんなに不安な心なら、その心を爰へ持つて來い。さうしたら不安を取除いてやらう。』と云つたさうです。

――慧可といふ方はどうなさいましたでせう？

――忽ち腕を切落して達磨の前へ持つてつたものださうです……どういふ了見ですかねえ……

――まア！　それから？

――すると、達磨は大喝一聲して、『心はどこにある？』と怒鳴りつけたものです。と、その刹那に、慧可はガラリと悟つたんだといふ話ですよ。

――何を悟つたんでせう？

――何を悟つたんですかね。
――分りませんわ。
――誰にも分りツこはないでせう。
――默可といふ方は本當にお分りになつたんでせうか？
――そりや分つたんでせう。分つたからこそ禪宗の衣鉢が繼げたんでせう。
――どうして分つたんでせうか？
――勿論、達磨が怒鳴つてくれたからですね。
――さうですかねえ……と云つて、女は溜息をついた。さうして、
――私も達磨さんに怒鳴つてもらひたいわね。といかにも思ひせまつたやうに呟いた。
私は怒鳴つてやりたくなつた。が、殘念ながら、私は達磨ではなかつた。
二人の間には暫く沈默が續いた。隣ではバサリバサリとトランプの札を打つ音がして、時々ガヤガヤとお互ひに何か云ひかはす聲とがきこえてゐた。が、かう押し默つてゐると、どうもこの、例の邪念が一層ヘルプレスにモゾモゾし出すやうな氣がしていけないので、別に云ひたい事もないのだが、私は强ひて、
――そりや、何ですよ……と、口を切つた。さうして出まかせに、――つまり、まあア、要するに、どこかの專門道場へ出かけて行つて、公案の一つも貰つて來て見るんですね……そりや、どうせ、今時、達磨さんのやうな一代名僧智識はゐる筈もありますまいがね……と、つぎ足した。が、女は、
――さうも思ふんですけれど……と、それには大して興味もなさゝうに答へた。
――それでなけりや、やツぱり適當な男を一人つかまへて、この際思ひきつて結婚して了ふんですね……私は寧ろその方が贊成だ……その方が生きた公案だからね……
――それは私もさう思つてゐるんですの……と、女は極めて眞面目に云つた。さうして、――でもねえ……と、

ニッコリ砕けて、― その適當な相手が中々思ふやうに捉まつてくれないんですもの……と、肩をゆすぶつた。

――さうぢやないでせう？　捉まる男はいくらでもあるんだけれど、あなたの方があんまり贅澤に撰り好みをしてゐるんでせう？……例の黄金の戀など丶云つて丶ね

――あら、そんな事はムいませんわ……いくら私でも自分の價打ぐらゐよく存じてをりますの……でもねえ、これでもまさかまだ電車の車掌さんの女房にはなりたくムいませんのよ……

――電車の車掌ぢやなぜいけないんです？……あなたの所謂『みんなから靠れかゝれるやうな人』は、將來大きにさういふ方面から出るかも知れないぢやありませんか？

――そりやさうかも分りませんけれど……と、女は社會問題などはどうでもよさゝうに生返事したが、何を思ひ出したのか、急に悲しさうな顔をして、――私ね、今、本當にどうしたものかと、それはいろ／＼に迷つてゐるのでムいますのよ。と、さも術なさゝうに云つた。

何事か一寸見當はつきかねたが、そのいかにも術なげな調子に乘せられて、私は何となく或る責任のやうなものを感じたので、とりあへず、

――迷つちやいけないね。迷つちや……何にかぎらず、迷ふのが一番わるい……私は迷ふのが大きらひだ、と、何か意見がましく云つた。

――ぢや、どうしたら宜しいのでムいませう？

――何をですか？　たゞどうしたらぢや分らないが……まア、仰しやつて御覽なさい……ザックバランにね……

――申上げて了ひませうか……思ひ切つて……と、女は暫く躊躇つてゐたが、やがて決心したやうに、――申上げて了ひますわね……どうせもう何もかもお話しちやつたんだから……實はね、と、暫く本題に這入つたやうな顔つきして云ひ出した。――實は只今ね、私の生活と關聯して……と申したところで、別に何も例の干係があるわけぢやムいませんが……私の一身上について、これは親切に相談相手になつて下さる方が一人こさいますのよ……

——肉の干係があつたつていゝぢやありませんか？　と、私はすぐ嘴を入れた。

と、いさゝかヤケ加減に心中で呟きながら。

——ところが、その人は、肉にはもうスツカリ飽きゝつてる方なんですの……まア、福澤桃介さんと云つたやうな、新橋では誰一人知らぬ者もない位な遊びやさんでしてね、その方にかけては、中々スゴイ腕を持つてるんだとか云ふ話です。その新橋の藝者を一人引かしてお妾さんにしてゐます。もう四つ位になる坊ちやんもあります。えゝ、無論その藝者にです。それから帝劇の笠間路子……御存じでせう？……あの人の旦那にもなつてゐるのです。それからもう一人、これはある待合の娘分になつてた女ですが、まだ年も非常に若うムいますし、見るからいかにも水々とした、それこそ全く肉の爲に出來てるやうな女でしてね、それがまア、つまり支那流に申せば、第四夫人になるのでムいますわ……

——さうしてあなたが第五夫人といふわけですかね？

——冷やかさずに、まア、お聞き下さいましよ……さういふやうに、肉には十分に飽いてるわけなんでムいませう？　ですから、その上にまだ、さういふ方面には全く取柄のない、私のやうなこんなお婆さんを、ウソにもお世話して下さらうといふのは、勿論、肉の爲ではないのでムいますわ。

——へえ？　それぢや何の爲でせう……

——つまり、肉の女にはもう飽々したから、今度は方面をかへて、肉とは全く干係のない、精神的……と云つちや少し大袈裟ですけれど、まア、新聞記者でもした女とは始終話がして見たくなつたものなんでせう。

——そこで、今、あなたはその男の世話になつてるわけですか？

——どう致しまして！　鐚一文だつて世話になぞなつた事はムいません……私、これでもまだ、少しばかり人形を賣つたお金を持つてをりますから、當分は人樣のお世話にならなくても、どうにか斯うにか一人でやつてゆけない事はないのでムいますの……たとへば只今住まつてゐる家にしたところで……無論そりやキリギリスの籠見たいな家で

すけれど、自分一人の力で借りてる家には相違ムいませんの……ですから、私、その方の世話になる必要は全くないのでムいますわ。

――さア、少しわからなくなつたやうだね？　さうすると、どういふ事になるのです？　その男があなたの世話をしたい、それをあなたは世話になりたくない、と、さういふ状態にあるわけなんですか？

――いえ、なりたくないわけぢやないのですのよ……ですけれど、第五夫人になる事は眞平なんでムいますの。

――をかしいね……世話になるのがいやでないとすれば、自然、第五夫人の地位に納まる事になるでせうがね……

――それがいやなんですの。

――妙だね……はゝア、わかつた！　つまり、かうなんでせう……第五夫人ぢや御免蒙る。第一夫人なら御話に乘らう……と、さう云つたわけでせう……

と、女はホヽと笑つた。

――さう…仰しやられると、さういふ事になるかも分りませんわね……ですけれど、いくら圖々しい私だつて、そこまで考へてるわけぢやムいませんの……

――中々むづかしいね……併し、まア、その男の要求に對するあなたの心持は大抵わかりました……そこで、その男といふのはどんな人間です？

――そりや教育のある立派な紳士でムいますわ……そして氣味のわるい位緻密な頭を持つてる方ですの……始終家へ入らしつても、それは本當に厳格なものよ。膝一つ崩さないでね……で、しきりに、『勉強しろ、勉強しろ。』と鞭撻して下さいますの…アメリカの大學を出た人ですから、英語がよくお出來になるので、私、この節はその方に『エヴンジエリン』を教へて戴いてますのよ……

――『エヴンジエリン』？　ロングフエローの詩ですか？

――えゝ、あなたお讀みになつて？

——二十年前から名前はよく知つてゐますが、まだつひ驅けながつて一度も讀んだ事は……

——何ですか、私にやたゞむづかしいばかりでね……

——むづかしい事もなからうが……と、私は少々デイスイリユージヨンを感じた形ちで、同時にさう云つた男に對する嫌惡の情と嫉妬の念まで手傳つて、——さういふ高尙な人だとわかつて見れば、そりや無論その人の世話になつた方がいゝね……いゝねどころぢやない、進んで世話になるべきだね……第五夫人だらうが、第六夫人だらうが、もうさうなりや、何だつてかまやしない……どうせそのうち、人形の金なんぞ、またゝく失つて了ふでせうからね……

……と、ツケツケと云つたものだ。

が、そのイロニイには、女は一向感じた樣子もなく、

——でも、さうまで負けて了つては、それぢやあんまり、自分といふものが、今迄苦勞して來た自分といふものが、あんまり可哀さうなやうな氣も致しますのよ……と云つて、——それに……と、何やらまだ云ひたさうな口を不圖氣がついたやうに閉ぢた。

——それに？と、私は賺さず訊いた。

——それに、何でムいますよ……私もね、これで今迄、歷とした奧さんのある方にはさんざん苦勞しぬいて、しみじみもう懲りてる身でムいますからねえ……

——へえ？そんな事が今迄にもあつたんですか？

——えゝ。無論、年下の方には戀の出來ない、私のやうなお婆さんに捉まる方は、どうしたつてもう奧さんやお子さん方のあるお人にきまつてゐますわ……ですから……

——それを一つ伺はうぢやありませんか？序でに、と云つちや失禮だが……參考の爲にね……

——えゝ。お話し致しますわ……實はこれは取つて置きのお話なんですけれど……と、女は嬉しさうにニツコリして、——もう、かうなりや、ありツたけお話して了ひますわねえ……同じこつですから……でも、愛憎がおつき

になるでせう？　大變な女だとお思ひになつて……と、氣の毒さうに云つた。

――どう致しまして……だん〳〵あなたといふものが明瞭になつて來るので、それが私にとつては非常な學問になります……愛憎なんぞは決してつきません……つきるどころですか……

――さう仰しやつて下さると、本當に張合ひがあつて、何でもかんでも、いゝ氣になつてみんなお話がして了ひたくなりますのよ……あなたも併し隨分罪なお方ね……

――まア、いゝからお話しなさい……そりやどういふ人です？

――その人ですか？　その人はズツと遠いところにゐる人ですの……

――ズツと遠いところといふと？

――爰からは、さうですね、多分五百里もあるでせう。

――五百里？　朝鮮ですか滿洲ですか？

――まア、いゝわよ、五百里ぐらなところで……

――さうですか。ぢや、その五百里さんは何をしてる人です？

――その五百里さんは……と、ウツカリ釣込まれたので、女は思はず笑ひながら、――その人の名前を五百里さんといふ事にして置きませうね………

――さうして、さツきの、その、例の『エヴンジエリン』氏は、さしづめ新橋さんですか……

――えゝ、それがいゝ事よ……その五百里さんは建築やさんですの………

――工學士ですか？

――さうなんでせう？　多分……

――さうしてやつぱり新橋さんのやうな人ですか？

――いいえ、まるつきり反對なの……それはボーツとした、影のうすい、新橋さんのそれに比べると顏の艶がな

い、さうですねえ、まア、全體が斯うどこまでも灰色な人ですの……それは[illegible]……ホテルで私が音樂會を催した時……と云ひかけて、女は罪もなく想出し笑をしながら、――その音樂會には私が狂言の『ふなふな』を出して、その太郎冠者になつたんですから度胸のいゝもんでせう？……何しろあゝいふ殺風景きはまる土地ですから、皆さんが非常に珍しがつて、それは大變な成功でしたの……その音樂會の發起人連が、あとで慰勞會を開いた時、その席上で、誰だつたか一寸忘れましたが、その人にはじめて紹介されたのが、つまりその五百里さんだつたのです……まるでゐるかゐないか分らないやうな人でね、その時は一向氣にもとめず、例によつて忘れて了つたものなんです……と、それから間もなくでした。その忘れられた人が、或日ヒヨツコリ私を訪ねて來たのですの、さうして云ふには、『自分は今度太平洋商會といふ一事業を計畫して、大いに日米の貿易界に活動して見る考だ。就いては、その事業發展の爲に、是非一つあなたのやうな婦人の手を借りたいと思ふ。若しお差支がなかつたら、どうか今後商會の一員となつて働いてはくれまいか。』といふやうな、事だつたのです。非常に眞面目な態度なのです。私も考へました。これで人形の行商と云つたところで、もと〳〵深い考があつてやり出したわけではなく、ホンの一時の思ひつきにすぎないのですから、どうせさう長くは續ける氣もなかつたのです。それに重なる土地はもう大抵行きつくして、これからは商賣もだん〳〵骨が折れてゆくにきまつてゐるので、自分としてはソロソロ厭氣のさしはじめて來た矢先でもあつたのです。そこで決心して、快く五百里さんの勸誘に從つたわけですの……

――ウム、中々面白い……それから？

――それから、その五百里さんの秘書役といふ名義で、毎日太平洋商會の事務所へ出勤する身の上となりましたの……やり出すと何でもすぐ一生懸命になる性質ですから、それは非常な熱心さで働いたものです……五百里さんも大さう重寶がつてくれました……が、それだけなら無事だつたんです……

――そりやさうでせう……ところが、人生は中々さううまくは出來てゐないからね……

――えゝ。今考へると、やツぱり私の修業が足りなかつたんですね……見す〳〵苦勞する……[illegible]つてゐる境遇へ、恐か

にもウカウカと陥り込んで行つて了ひましたの……——……氣がついた時にはもう駄目でした……ニッチもサッチも行かな[illegible]い身の上になつて了つてゐたのでね……と、女は思ひ出してもゾットすると云つたやうに、ホット溜息をついた。

——孕んだんですか？と、私は殘忍に指摘した。が、女は悪怯れず、明瞭に、

——えゝ。と答へた。さうして恰もその時の苦悶から一刻も早く逃がれたいやうに、忙いでそのあとの言葉を續けた。

——五百里さんの奥さんは基督教出のお方だつたので、私等の關係を御承知になると、人一倍の御苦勞をなさつた御様子でした。結局、非常なヒステリイに御罹りになつて、五百里さんの御家庭は、それからと云ふものは、全く暗の夜に包まれてお了ひになつたのです……私はます／＼苦しみました……苦しんで、苦しんで、苦しんだ揚句、死ぬ覺悟で飛び出しました。さうして金剛山へまゐりました。

——金剛山？　朝鮮のね……

——えゝ。と、女は首を垂れて、苦しげに口を閉ぢた。

——さうして、その孕んだ子はどうしました？　と、自分でも少々殘酷すぎるとは思つたが、私は尚意地悪く訊いて見た。

——幸ひそれは流産して了ひましたけれど……

——幸ひね？

——えゝ。

『女にとつて、流産が幸福となる位、それほどその女の不幸はない。』と、私は心の中でさう叫んだ。さうしてさういふ不幸の女の非常に多い人生がます／＼呪はしくなつた。

——まア、その話はもうそれ位でいゝでせう……妻子のある人を戀する事がどの位苦しいものであるか[illegible]分りました……そこで現在へ戻りませう……例の新婚問題へね……と、私は出來るだけ言葉の調子を和らげ[illegible]

た。その所謂新橋問題が、まだ女の唇の上に漾つてゐた時まで[illegible]想な怪しからん考が、ふと氣がつくと、いつのまにかもう跡かたもなく私の肉體から消滅してゐた。私は再び自分の肉體の不可思議きはまる作用を疑つた。

バタバタと廊下に足音がした。ガヤガヤいふ人聲もそれに伴つた。それが話に夢中になつてゐた私の耳には、クワンと響いた。いかにも突然であつたやうに……

――もう一時すぎましたよ。今晩はこちらへおやすみですか？　と、入口の障子を二つ三つ小突きながら、憎らしさうに呶鳴つて、その儘階段を下りて行つたのはお鹿さんの聲であつた。

私は思はず苦笑した。さうしてすぐ立上つた。

――それぢや、新橋問題はまた明日伺ふ事にしませう……ねむかつたでせう……おやすみ。

――おやすみなさい……失禮いたしました……

そのションボリした哀切な女の聲が、部屋へ戻つても、床の中へもぐり込んででも、中々私の鼓膜から消失せてゆかなかつた。さうしていつまでもいつまでも寢つかれなかつた。

あくる日、朝飯の膳に向つてゐる間、お鹿さんは器械的に給仕の任務に當る以外、全く一言も口をきかず、盆を横たへて、ブウとそツぽうを向いたまゝ、安本龜八の出來のわるい人形のやうに、身じろぎもせず、苦蟲をかみつぶしてゐた。

『女護の島の住民には困つたものだ。』と、私は少々ばからしくなつて、同じやうに物をも云はず、食ひたくもない飯を止む事を得ず、强ひて默々と嚥下してゐた。

やがて食事もすんで、ガタピシとお鹿さんの立去つた後、けふこそは久しぶりで[illegible]の原稿を續けようと思ひながら、やをら机に向つた時、再び階段に足音がして、勢よく襖をあけたのは、ちゞれツ毛の、まる顔の、ひどく愛嬌のある、

お蔦さんといふ年若な女中であつた。

――ゆふべはお樂しみ……でも、もうおよしなさいよ……このお方にお氣の毒だから……と、お蔦さんはコロコロ笑つて、一通の西洋封筒を出した。――これ、あの方からでせう？　何にも書いてなくても、私には、チヤンと分るわ……千里眼でせう？　私は……そこで私には何を奢つてくれるの？……今度東京へいらしつたらね、木村屋のパンを買つて來て頂戴よ、……よう、きつとよ！…忘れちや駄目よ……

などゝいふ、罪のない、勝手放題の熱をガラガラ吹きちらして、お蔦さんはその外二三通の手紙を置くと、サツサと出て行つた。

原稿なンぞはすぐ忘れて、私はガツガツと奧さんの封筒にとツついた。と、手紙には至極簡單にかうあつた。『あなたがあんな事を書いて下さつたばつかりで、私はもう身動きも出來なくなりました。もう多分お目にはかゝれないでせう。』と、それツきりだ。

『何んな事を書いた』とは、今月の或雜誌へ出た、小說のやうな、隨筆のやうな、至極曖昧な、下らぬ私の文章の事だ。文章は下らなくても、事實は別莊社會の問題になつたと見える。そこで監視が嚴重になつたわけだ。但し、『もう多分お目にかゝれないでせう』は、少々意久地のなさすぎた弱音だ。或は……さう、或は……

『若しかしたら、自殺でもするつもりではないかしらん？』と、ふとさう思ふと、私の心は忽ち緊張した。さうして、もう一度、ジツと手紙の文面を凝視した。が、文面だけでは、インキの色だけでは、字並ひだけでは、さうした豫感はどの隅からも嗅ぎ出せなかつた。

私は瞑目して考へて見た。二人の愛兒を左右にした、五人の女中を侍んべらした、數奇を凝らした檜づくりの別莊に起臥しする、一度棄てゝは二度と得難い奧さんの境遇を考へて見た。夫はたゞ我儘なだけで、世間普通の極めて善良な坊ちやんにすぎぬ。舅父はやかましいが、そのうちには死んでゆく人だ。呉服を主とした大商店の主人だから、着たいキモノはいくらでも着てあるける。有數な家作の持主だから、固定財産は五百萬圓を越えてゐやう。さうしてこれ迄

十年もたてば殆んど全く自分一人の掌中に落ちるのだ……それを棄てゝ自殺する？……奥さんはそれほど烈しい情熱を持つてゐるだらうか？……

『波の音でもきゝながら、松の梢でも眺めながら、乳呑兒でも犇と抱きしめて、恐らく世の味氣なさを泣く位が關の山だらう……自殺なンぞするものか！』と、私は奥さんの自殺を否定した。と、同時に、それとは全く正反對な考が、俄に私の胸の中に浮んだ。

『はゝア！ 女今川の貞女は、丁度いゝ潮時を見すまして、體よく緣切り狀をよこしたわけか？……』さう思ふと、今度はぐツと小癪にさはつて來た。若しさうだとすると、即ち感情を弄ばれたのは私であつた。男のくせに、私であつた。四十面さげた私であつた。

『だから文士はいやになる……ありもしない事を想像して、出鱈目に誇張して書きちらすから……知らない者は本當だと思ふ……』と、さう云つて置きさへすれば、それで貞女の一分は立つのだ。一分なるものが立ちさへしたら、それで貞女は貞女のまゝで通るのだ。どこの國のブルジョア社會でも、さういふ貞女が、どうしても必要なのだ。その社會を維持する爲に必要なのだ。

『どうして復讐してやらう？……』と、私はウヰスキイを引寄せて、頭の中に短銃だの匕首だのを閃めかした。かと思ふと、考は、またすぐ逆戻りして、『だから、私はいつでも死ねるやうに、簞笥の抽出しへ劇藥をしまつてあるのよ……』と云つた奥さんの言葉を想出した。さう云つて涙を一杯ためた奥さんの眼を想出した。私の頭は混亂した。

私はつゞけさまにウイスキイをガブリガブリ飮んだ。

『なんだ、下らない！ 死なうと生きやうと、それは向ふの自由ぢやないか？ 他人の自由意志には立入る權能はないのだ……感情を弄ばうと弄ぶまいと、それも向ふの勝手ぢやないか？ 弄ばれて腹が立つたら復讐してやるがいゝ。復讐なぞするのが子供らしいと思つたら、冷然として取合はぬがいゝ。さうだ、取合はぬがいゝのだ……さうだ、今日にもあの女が潔く自分の境遇をぬけ出してくれればよし、さもなくば、そのまゝに放つて置くがいゝのだ……

「あなたと私とはグラウンドが全く異ふ……あの女の口癖だ……グラウンドは何方ルぢやあるまいし……五百萬圓の相續者を養育する役目が、それほど深いグラウンドに立つてゐると思ふのだ。本當に若しさうあの女が確信してゐるとすれば、俺とあの女とは思想上の敵味方だ。従つて生存上の敵味方だ……グラウンドが異ふ？全く異ふ？……地面を叩き賣つて、その金を撒きちらして、裸一貫の放浪生活へ這入つてやらうと企てゝゐる人間と、あのまゝのあの女の身の上とは、そりやグラウンドの異ふのが當前だ……あの女が自分の立つグラウンドを棄てゝ、俺の生活と同化する氣にならないかぎり、そりやての戀愛の成立たない事は分りきつてゐる……それでも俺はあの女を見ると、すぐ……たくなるのだ。あの女も俺が……………つくのだ……汝の敵を愛せよか。路加はうまい事を云つてゐる……さう云へば、あの女は基督教學校の出だつたけ……『えゝ、放ツて置け、放ツて置け……何がどうならうと構はない筈だつたのだ……これツきりあの女と永遠に別れて了つたらそれがどうなのだ？　それが俺自身の生活と何の關係があるのだ？　俺はたゞ俺だけの生活しきや持つてゐない筈だつたぢやないか？　さうだ。俺は俺だけなのだ。俺一人きりの生活なのだ……それだけなのだ……』

などゝ、葡萄が酸ぱいやうな、負惜しみに似た、結局は僻んで萎けた考へをば、ものほしさうにあちらこちらと持ちまはりながら、私は封をきつたまゝ讀みもせぬその外の手紙の上へ、徒らに明盲のやうな眼を走らしてゐた。その手紙は二通あつた。さうしてそのうちの一通は書留であつた。

書留は氣がついて、俄然として正氣づいて、と、見ると、膝の上には二百圓の郵便爲替が乘つてゐた。さうしてそれに添へた故郷の實父の克明な手紙が眼に這入つた。走り讀みすると、手紙には賣れた地所の手附金が月末には受取れるとあつた。又金の這入る事を安心してあまり諸方へ前借はせぬやうにとも注意してあつた。

『フン、大きにお世話だ……人の地所を賣つて、その金の一部分から、ひそかに自分の家庭の安全を計らうとしてゐるくせに……』と、私は思つた。さうしてどこまでも私有財產制度といふものに執着して、この外には人間に生きる道はないやうに考へてゐる實父の了見が情なくなつた。尤もそれは實父に限つた考ではなかつたけれど……

『おやじのやうな貧乏人はじめ、先に立つてそんな了見でゐるからこそ、所謂資本階級の連中が、いゝ氣になつて、時を得顔に、飽く事を知らず、無資産階級を蹂躪してやまぬのだ……貧乏人が善良で正直である事はプロレタリアにとつては非常なる損失だ……』と、私はそんな事まで思つた。實父こそいゝ面の皮だ。

もう一通の手紙は私の文集を出せといふ或書肆の勸誘狀であつた。夫から最後の一通は流感で死んだ友人の父親から四十九日の法會に出席して呉といふ案內狀であつた。考へて見ると友人の四十九日は丁度養母の祥月命日に當つてゐた。『さうだ。友人の法會をすましたら、その足で母の墓詣りでもして來やう。』と八年前に死んだ懷しい養母の顏がさま／＼と心に浮んで來た。養母とはいへ、四五才の頃から眼の中へすり込むほどに可愛がつて可愛があつて育てゝ來てくれた母親だから、私にとつてはそれが本當の母親であつた。母に死なれてから私の心は一層荒んだやうに考へられる若し母親がいつまでも生きてゐてくれたら、それは時々喧嘩もしたであらうが、私の心は恐らくかうまでデスペレートにはならなかつたであらう。そんな事を考へると、私に何だか子供のやうに聲をあげて泣きたくなつた。

くさ／＼して來たので、莨を啣へながら表廊下へ出た。と、パツとまぶしいやうに日は明るかつた。けふもきのふのやうな上天氣だつた。相變らず江の島は夢のやうに微笑んでゐた。相變らず、砂濱が、松林が、別莊が、池が、鯉が藤棚が、やんはりと視線に絡みついてニツコリした。

──お早やう。いゝお天氣ですわねえ……と、下から誰やら聲をかけた。

私は覗いて見た。

──あゝ、あなたですか……どうです？

上つて來ませんか？　そして昨晚の續きをきかして下さいよ……

──お仕事してらつしやるんでせう？

──なアに、仕事なンぞ出來るもんですか……こんないゝ天氣の日は、あなたのやうな別嬪さんとお話でもするより外に、何一つ手につきやしませんよ……さア、上つていらつしやいよ。

—あら〳〵いやだ……でも、本當にお邪魔ぢやなくて?……さつきからお伺ひし

ど、お仕事のやうでしたから、さし控へてをりましたのよ……と、口を受けて眼を細くした顏を快活に振上げた

ら、淀みのない聲で女は喋つた。

—まア、さう遠慮しないで、早く上つてらつしやい。

—ぢや、伺ひますことよ。

やがて女は私の前にあつた。森閑と松風の音を立てる火鉢を隔てゝ、女はいつも奥さんが來て座る位置と、丁度全く同じ位置へ、同じ角度をなして、同じ要領で、無意識に私と差對つたものだ。私は一寸變な心持がした。

—どうです?小説は進行しますかね?と、口を切りながら、私は心の中でそれとなく奥さんとこの女とを比較して見た。

—とても書けやしませんの……何しろ期日が切迫してますので、たゞ氣ばかりわく〳〵致しますんでね……

—へえ?雜誌の原稿なんですか?

—それがもうあと五日しきやないのですもの……

何枚位書けばいゝのです?

—一部はもう向ふへ行つてるんですけれど、まだ百枚ほど書かないと纏らないんですの……

—そりや大作だ……併し五日間に百枚は少々無理らしい……靜彦君なら一ト晩でも書けるだらうが……

—ですから、爰のところ、すツかりもう閉口頓首してますの……と、いかにも思案投首と云つたやうに、女は頸に肖やからだを揺ぶつた。

『奥さんに比べると、この女の方がよほど線が柔らかい。』と、私は思つた

—まア、いゝでせう、そんなに閉口頓首などしなくたつて……出版者の云ふとほりになつてた日にや、とても女士の命は續きませんよ。

——でも、お金はもう先へ貰つてあるんですから、全く絶體絶命なのよ……

——そんな事はかまふもんですか。……露伴先生がね、昔、僕等にこんな事を云つてたつけ……本屋の二三十軒も潰す了見でなくちや、とても一人前の文士になれつこないなんてね……

——まア！ でも、私達にや中々そんなわけにや參りませんわ……

——自然主義のTさん……えゝ、よく知つてゐます……あゝ、さう／＼、あなたはTさん御存じ？

——Tさんは私の先生ですの……二年このかた、滅多に遇つた事はないけれど……それが？

忽ち私の心にT氏の『蒲團』が閃めいた。

——へえ？ さうでしたか？ それはいゝ先生を捉まへたものだね……Tさんの眞劍な態度には僕も昔から敬服してゐますよ……あの態度でゆきさへしたら間違ひはない。

もう十二時になつたものと見えて、

——御免下さいまし。と云ひながら、お冬さんが膳部を捧げて這入つて來た。

何んだ、もう飯かね？……いかゞです？ あなたも爰で一緒に召上つちや……

——オヤ、もうさうなりますの？……それぢや失禮いたしませう……いゝえ、有難うムいますけれど、私、いつもお晝は戴きませんの……それに、午後からはまた齋藤美代さんのお宅へ上るお約束がしてムいますから……と、女はさうさう立上つた。

さうですか？ それぢやまた晩にお目にかゝりませう……さうだ、かうしたまへ……晩にね、齋藤美代さんを爰へ引張つて來ませんか？ 鳥でも御馳走しますよ……あなたより美人だといふその方に一遍お目にかゝりたいからね……ねえ、さうおしなさい。。、どうしたわけだか、私は無性にこの女を引きつけて置きたくなつたものだ。

——ほんと？ ほんとなら、遠慮なく上りますよ。美代子さんもしきりにあなたにお逢ひしたがつてお出でよ、どんなにお喜びになるでせう？……ぢや、左樣なら。と女はいそ／＼と出て行つ

――案外、あなたも外交家でゐらつしやるのね……恐入りましたよ……全く
つきを拵へて、徐ろに餉臺の向側へ直ると、お冬さんは給仕盆をシヤに構へて嘲いた。

晩には約束どほり鳥鍋を用意して待つてゐた。馬鹿な顔して待つてゐた。と、女も約束どほりやつて來た約束どほり相棒まで引張つてやつて來たさうしてお冬さんとお松さんとがいやに改まつたサーヰス振りを發揮して、鞠躬如とそこらあたりを周旋した。お松さんは女の方の部屋附女中だが、この宿屋中で一番別嬪だ。かうして四人の女をヅラリと眼の前へ並べて見ると、さうして君はこの中のどれを取るかと訊かれたとすると、……………ら、私はきつとお松さんを擇ぶに相違ない。それほどお松さんばかりが頭拔けて美しいわけではないのだが、その點に關しては、何としても肉體の潑剌清新が最喫緊の要件として、動き易い私の性慾の觸手に感じて來る……そこが恐らく天命耳順の齡にも愧ぢず、前後不覺の大金を投じてまで、愚にもつかないお酌の尻に武者振りつく所以であらう……お松さんに比べると、あとの三人は、要するに皆それ〴〵のデカタン趣味をば、それ〴〵の姿態に應じて、僅に發散させつゝあると云ふにすぎなくなる。但し、齋藤美代子さんだけは、その中の一人としては、まだよツぽどデカタン程度の微弱な方で、睫毛の濃い、伏目勝のその大きい眼や、赤味を帶びた豐頬、盛上つた肩の肉の締り加減、それから力強い腰の邊の太い線などが、正に發達の絶頂に立つ年増女の健康を思はせた。さうして美代子さんの唇は、その厚く重くるしい唇は、凝結した血のやうな色をして、堅く結ばれたまゝ非常に堅く結ばれたまゝ、滅多には開きさうに見えなかつた。

――御免を蒙つて、僕は遠慮なく酒をのみますから、あなた方は勝手に飯でも何でもたべて下さい。と云つて、私は早速猪口をとり上げた。が、側に侍してお酌をしてくれる人は、お生憎樣ながらデカダン組のお冬さんであつた。さうしてお松さんは美代子さんの横手にひどくかしこまつて、牝鹿のやうな眼をパチクリと睜らきつゝ、傍目もならず、フツフツと煮え立つ鍋の中をば、恐る〴〵杉箸で突ついてゐた。

――あなた方はお二人で一日何を話してゐたのです？ と、私は先づ道子女史の貞白な顔を見せ一、それから美代子

さんの出来のわるい銀杏返へ眼を移し、最後にチラリと赃かしさうなお松さんの横顔を瞥見て、グルリと顔の位置を尋ずると、お冬さんへ猪口をさしつけながら、僕は話の糸口を見つけた。

——それはいろんなお話よ。と、道子女史がすぐ引取つた。お冬さんは一寸顔をさげて、

——私へでムいますか？ 恐入りますねえ……と、器用な手つきで猪口を受けた。と、その猪口へ徳利の口を持つてゆきながら、

——いろんなお話ぢやわからないね……内容を話してくれなくちや……と、私は人に物を食はせる時の吶しい倿越性を聊か感じながら、

——あなたはお人が悪いからいやよ。馬鹿殿様のやうな顔して云つた。

「いらつしやるのよ……鎌をかけちやア、人に何でもかんでも吐き出させてお了ひなさるんですもの。と、お冬さんの方を向いて、——ねえ、さうですわねえ、お冬さん。と贊成を求めた。

——そりや、あなた、こちらにかゝつちや敵ひませんよ……何しろ海山千年といふ札つきのお方ですもの。と、お冬さんは猪口を返しながら合槌を打つた。と、それをきいて、お松さんはそツと私の顔を見て、罪もなくニツコリした。その笑顔が私の心にひどくこたへた。

——海山千年は残酷だ。そりやお冬さんの事サ。

——どう致しまして、あなた……あなたが、若し千年と致せば、私なぞはまだやツと五十年か百年位になつたばかりの、それはホンの雛つ子でムいますよ……まア、あなたゞけにお人が悪くならうとするには、そりやどうしてよツぽどの修業がいりますよ。

みんなは聲をあげて一齊に笑つた。

——怪しからんもんだね……それぐ人の悪口にばかり熱中してるから、その通り鳥が煮つまつて了

雨の日く、——『食ふばかりの口なりしなり』サ……ちツト食ひけの方に精を出しち。

來た唇をペロリと舐めて、私が云ふと、お松さんは慌てゝ鍋の中をいぢりはじめた。

——へえ？　それはどういふ事でムいます？　その、『食ふばかりの口なりしなり』といふ言葉の意味は？　と、質問して置いて、女史は、——私達は御遠慮なく御飯を戴かうぢやないこと？　と、美代子さんを促がして茶碗を出させた。お松さんは急に忙しくなつた。そうしてまめまめしく飯櫃を引寄せたりお盆を出したりした。

——それは絲雨がまだ子供の頃、叔父さんに叱られて、『食ふばかりの口ぢやないぞ。』と云はれた事があつたんださうです。併し年をとつてから、その言葉を想出して見ると、『今にして思へば、食ふばかりの口なりしなり。』といふわけです……眞理でせうがね……と、私はソロソロ管を卷き出した。

——全くでムいますわねえ。と、お冬さんは感じ入つたやうに首を掉つた。

——眞理かも分りませんが、少し皮肉すぎるやうですわねえ。と、女史はサヽミを狹んで口の方へ持つてゆきながら不服さうに云つた。

——あなた皮肉はお嫌ひかね？　眞理はすべて皮肉ですよ……眞理の嫌ひなものは、從つて皮肉が嫌ひだ。さうして女は大抵皮肉が嫌ひですよ。それ故に女は大抵眞理が嫌ひです……どうです？　齋藤さんあなたもその組ですか？

——私？　私はさうでもムいません。と、白瀧を狹みかけた箸を引込めて、美代子さんは低い調子で答へた。

——フム、さうでもない？　『でもない』は少々氣にくはぬが、とにかく『食ふばかりの口』へ好意を表してるだけはたしかだ。さすがは絲雨と名字を同じうしてるだけの事はある……そこでだ……そこで、齋藤さん、あなたは今迄讀んだ小説のうちで、何が一番あなたの御氣に入りました？　と、私はいゝ氣になつて畳みかけた。

——さア……と、美代子さんは茶碗と箸とを勿體らしく左右の手へ持つたまゝ、小首を傾けて、ジッと考へ込んだ。さうしてよほど間を置いてから、——私には分りません。と、道子女史の方を向いて、いかにも應援がしてもらひたさうな顔して云つた。

——そりや、あなた、少々御無理な御質問でムいますわ。と、女史は早速心得て援兵に出かけて來た。

――なぜ無理ですか？

――なぜッて、あなた、第一讀む本讀む本をさう一々覺えてゐられるものでもムいませんし、それから、そのそばから忘れてゆく澤山な本のうちから、どれが一番氣に入つたものか、それを探び出せと仰しやつたつて、それは御無理でムいますわ。さうぢやムいませんか？

――いや、僕はそばから忘れるやうな本の事などきいてやしない。面白くて忘れられない本のうちで、どれが一番氣に入つたかときいてゐるんです。

――そんな本はムいませんわ。讀んでるうちはそれ〴〵皆相手に面白うムいますけれど、讀で了へば大抵そばから忘れて了ひますわ……少くとも私はさうですの……齋藤さん、あなたはどう？

――さア……と、聊か援兵に裏切られたやうな姿で、美代子さんはまたジッと考へ込んだ。

――なるほど、そりや一理ある。作者は必ずしも讀者ぢやないからね。さうしてあなた方は作者なんだからね……さう、そりや大きにさうかも知れない……さう云や、ある日本畫家が僕にこんな事を云つてましたよ。『他人の畫ばかり氣をつけてた日にやア、いつまでたつたつて自分の畫なンぞがかけるものぢやない。』ツてね……そりや、なるほど、さうに違ひない……して見ると、一本まゐつたことになるかね。と、私はそら〴〵しくアハハと笑つた。その笑聲をきくと、自分ながら馬鹿らしくなつた。『なぜ俺はこんなにしまりがないのか知らん！』と、情なくてたまらなくなつた。

ひとしきり話が杜絶えて、兩女史は食事の終りを急ぐやうに、茶漬などセツセツとかつこんでゐた。

――なんです、あなた方はもうおしまひかね？　今はじめたばかりぢやありませんか？　なんぼなんでも、あんまり飽氣ないね……と、興さめ顔に私が云ふと、

――もう澤山頂きましたのよ……と、女史が答へて、――私は元來非常な少食でムいまして……宅に居ります時は、毎朝きまつてパン一トきれに玉子をお一つ、それでお午はヌキ、さうして晩ほどは大抵お饂飩を一つ、それに御茶

來た唇をペロりと舐めて、私が云ふと、お松さんは慌てゝ鍋の中をいぢりはじめた。

——へえ？ それはどういふ事でムいます？ その、『食ふばかりの口なりしなり』といふ言葉の意味に（質）問して置いて、女史は、——私達は御遠慮なく御飯を戴かうぢやないこと？ と、美代子さんを促がして茶碗を出させた、お松さんは急に忙しくなつた。そうしてまめまめしく飯櫃を引寄せたりお盆を出したりした。

——それは綵雨がまだ子供の頃、叔父さんに叱られて、『食ふばかりの口ぢやないぞ。』と云はれた事があつたんださうです。併し年をとつてから、その言葉を想出して見ると、『今にして思へば、食ふばかりの口なりしなり。』といふわけです……眞理でせうがね……と、私はソロソロ管を卷き出した。

——全くでムいますわねえ。と、お冬さんは感じ入つたやうに首を掉つた。

——眞理かも分りませんが、少し皮肉すぎるやうですわねえ。と、女史はサヽミを狹んで口の方へ持つてゆきながら不服さうに云つた。

——あなた皮肉はお嫌ひかね？ 眞理はすべて皮肉ですよ……眞理の嫌ひなものは、從つて皮肉が嫌ひだ。さうして女は大抵皮肉が嫌ひですよ。それ故に女は大抵眞理が嫌ひです……どうです？ 齋藤さんあなたもその組ですか？

——私？ 私はさうでもムいません。と、白瀧を狹ミかけた箸を引込めて、美代子さんは低い調子で答へた。

——フム、さうでもない？ 『でもない』は少々氣にくはぬが、とにかく『食ふばかりの口』へ好意を表してるだけはたしかだ。さすがは綵雨と名字を同じうしてるだけの事はある……そこでだ……そこで、齋藤さん、あなたは今迄讀んだ小說のうちで、何が一番あなたの御氣に入りました？ と、私はいゝ氣になつて嚙ミかけた。

——さア……と、美代子さんは茶碗と箸とを勿體らしく左右の手へ持つたまゝ、小首を傾けて、ジツと考へ込んだ。さうしてよほど間を置いてから、——私には分りません。と、道子女史の方を向いて、いかにも應援がしてもらひたさうな顏して云つた。

——そりや、あなた、少々御無理な御質問でムいますわ。と、女史は早速心得て援兵に出かけて來た。

――なぜ無理ですか？

――なぜッて、あなた、第一讀む本讀む本をさう一々覺えてゐられるものでもムいませんし、それから、そのそばから忘れてゆく澤山な本のうちから、どれが一番氣に入つたものか、それを擇び出せと仰しやつたつて、それは御無理でムいますわ。

――いや、僕はそばから忘れるやうな本の事などきいてやしない。面白くて忘れられない本のうちで、どれが一番氣に入つたかときいてゐるんです。

――そんな本はムいませんわ。讀んでるうちはそれぐ＼皆相手に面白うムいますけれど、讀で了へば大抵そばから忘れて了ひますわ……少くとも私はさうですの……齋藤さん、あなたはどう？

――さア……と、聊か援兵に裏切られたやうな姿で、美代子さんはまたジッと考へ込んだ。

――なるほど、そりや一理ある。作者は必ずしも讀者ぢやないからね。さうしてあなた方は作者なんだからね……さう、そりや大きにさうかも知れない……さう云や、ある日本畫家が僕にこんな事を云つてましたよ。『他人の畫ばかり氣をつけてた日にやア、いつまでたつたつて自分の畫なンぞがかけるものぢやない。』ツてね……そりや、なるほど、さうに違ひない……して見ると、一本まゐつたことになるかね。と、私はそらぐ＼しくアハハと笑つた。その笑聲をきくと、自分ながら馬鹿らしくなつた。『なぜ俺はこんなにしまりがないのか知らん？』と、情なくてたまらなくなつた。

ひとしきり話が杜絶えて、兩女史は食事の終りを急ぐやうに、茶漬などセツセツと

――なんです、あなた方はもうおしまひかね？　今はじめたばかりぢやありませ
飽氣ないね……と、興さめ顏に私が云ふと、

――もう澤山頂きましたのよ……と、女史が答へて、――私は元來非常な少食は、毎朝きまつてパン一トきれに玉子をお一つ、それでお午はヌキ、さう

漬を、さうでムいますねえ、これよりもう少し小さいお茶碗にかるうく一膳いたゞくだけですの………ですから、今晩はお調子にのつてよつぽど余計に戴いてゐますのよ。と、香の物をカリカリ云はせて、旨さうに番茶をのんだ。

――はゝア、だからあなたはそんなに痩せてゐるんですね？　パンに、饂飩に、茶漬一杯か………さうしてキリギリスの籠に住んでりや世話はない………まるで仙人だ………それでよくからだが續くもんだね？　と、私はまたアハヽと笑つた。さうして腹の中では、時たま氣がふれたやうに東京から逃亡して、糖粥ばかり啜つたり、生味噌だけですましたり、まるで下手に穿きちがへた赤脚行者(ジムノソフイスト)の猿眞似に浮身を窶しつゝあつた、酔興な、愚蒙な、さうして淺墓な自分自身の叡山生活をば、苦々しく、また呪はしく想出してゐた。と、女史はひどく眞面目くさつた顔つきをして、

――人間はどう致しても菜食主義の方がお宜しいやうでムいますね。どうもその方が人間の靈性に適つてゐるやうな氣が致しますわ。私の知つたお方のうちに、左近さんといふ余程變つた歐洲航路の船長さんが一人ムいますが、そのお方は船の中でも何でも必ず菜食ばかりしていらつしやいました。さうしてそのお方の仰しやいますには、菜食のうちでも、三度々々胡桃ばかり食べてゐるのが、一番人間のからだにいゝさうでムいます………などゝ流暢に演說しはじめた。みんなは謹んで耳を傾けた。が、私は少々くすぐツたくなつたので、

――へえ？　山雀のやうな人ですね？………角兵衛獅子は子供のうちから酢ばかりのまされるといふ話だが、その船長さんもやツぱり宙返りが巧いですか？　と、意地わるく半疊を入れた。みんなはドツと笑つた。と、女史はやゝムツとして、

――なるほど、あなたはお口が悪いのね………それだけが玉に疵ですわ。と、たしなめた。

――や、これは恐縮………そこで、その船長さんには奥さんがお出でゞすか？

――えゝ、えゝ、それはもう、左近さんは有名な奥様孝行でいらつしやいます。が、お氣の毒な事には、始終奥様が御病氣なのでね！………

――どんな御病氣です？

——さうですねえ、まア、やッぱり神經衰弱なんでムいませうねえ……

——神經衰弱？　さうら、云はないこつちやない。それが即ち胡桃の祟りだ。

——なぜでムいます？

——なぜッて、そりやきまつてますサ……毎年引續き四月五月といふ長い航海にばかり出かけて、たま〳〵歸りやア、その通りの山雀仙人だ。普通の女なら恐らくヒステリイになる方が當り前でせう……進んで姦通でも行はないかぎりはね……白樂天の樂府にこんなのがありましたよ。文句は忘れたが、何でもね、或る酔興な男があつて、そいつが親類縁者の意見などいッかなきゝ入れず、家藏まで叩き賣つて、事もあらうに、大それた仙人修行をはじめたもんですナ……お定まりの霞をくらひ露をすひですよ。さうしてつぶさに長年の辛酸刻苦を嘗めた後、もういゝ加減、虚空の一哩位は飛べるやうになつたらうと思つて、一日、崖の緣を滑走した勢ひで、スワヤと谷の中へ飛込んで見たところが、殘念ながら忽ち腰骨を碎いて、命だけはどうやら取止めたが、とう〳〵一生不具の身となつて、前に意見された親類緣者の食ひ潰しで終つたといふ話です……白樂天曰く、『哀しい哉、夢仙の人、一夢一生を誤まる。』は、どんなもんです？……左近船長、バベルマンデブあたりで盛んに噓をしてやしませんか？……と、私は頗る得意然と喋つて、さて冷たくなつた猪口をチユウと吸つた。

——いかゞでムいます？　ソロソロ御飯になさいましては……お銚子はもうおツモリでムいますが……と、橫合からお冬さんが注意した。

——さう……と、私はふと氣がついて、と見ると、もうとうに箸を納めた兩女史が、葱や白瀧や臓物の、きたならじく鳶色にいりついた鍋の前で、いかにも手持不沙汰さうに座つてゐたので、——いや、飯はよさう……一向食ひたくない……その代り、と、……その代り、なんだ、爰を一つきれいに取片附けて戴かう……それから……さア、水菓子でも持つて來てもらはうか……さうして、スッカリ六根清淨になつて、そこで改めて仙人話を續ける事……しませう……仙人話は大好きだ……と云ひながら、私は顧向きさまに、机の上から

—どうです？　僕の仙人ぶりはかうした要領です……飯なぞは斷々乎として食ひませんよ。大
り飲んでゐる。アハヽ……と、例の馬鹿笑ひを吐きちらしたものだ。

やがてそこらが片附いて、火鉢のそばへ兩女史が席を移して、そのうちに水菓子も來て、海山百年のお冬さんが、大切な私の掌中から、お松さんといふ寶珠の玉を奪取つて、遠慮なく階下へ拉し去つて了つた後、道子女史は早速蜜柑を、一つ抓んで、皮をむきながら、——あなたはどうもお話しが下手でいらつしやいますのね。と、

——私が考へますには……と、だしぬけに私の演説ぶりを攻撃した。

私は頭を掻いた。さうして、

——さうかね？　そいつア困つたね……自分ではこれで中々話上手のつもりでゐるんだがなア……と、わざとらしく小首を振つて見せた。

——なぜかと申しますと……と、女史は蜜柑の實から白い纖維をむしり取りつゝ、——あなたは學者でいらつしやいますから、大變いろ〳〵な事を御存じのやうではムいますけれど、それが私達の頭へは、そのいろ〳〵な事柄が、一遍にゴチャゴチャと聯絡なくとび込んでまゐりますばかりで、その間に一向前後の筋道といふものが立ちませんから、私達のやうな無學な者には、お話しになる事が、どうもハツキリ捉まへられませんの……たとへば、只今の仙人修行のお話に致しましても、それがどういふわけで左近さんの胡桃と特別の關係があるものやら、つまり、さう云つたところが非常に分りにくいんでムいますの……私が思ひますには、お話しのなさり方がお惡い爲に、多分さういふ結果になるんだらうと存じますわ。と、待ちかねたやうに蜜柑の袋をヒョイと口の中へ拋り込んだ。

——中々あなたは批評家だね。さう指摘されて見ると、なるほどその通りだ。全く一言もない……さう……胡桃が飛行機に乘つて、紅海を出るや否や、忽ち[illegible]をした。——ぢやア、一寸分りにくい。云つてる私自身にも、やツぱり分らないやうだ……僕がイリツプなら、そこんところを何とか巧く一工夫して、宜しく[illegible]と結びつけ

で了ふ場合なんだらうが………

――まア、負けて置きますわ。あなたの事ですから、分らなくても………と、女史は矢繼早に蜜柑を頬張りながら、さんも漸く蜜柑へ手を出して、もつとお話して頂戴………と、眼を細くして、ネダるやうに云つた。と美代子の顔を見て、分らぬほどにからだを揺つた。同じやうにネダルやうな視線を向けながら、チラリと私

――さア……さういふお許しが出たとすると、一つ大いにお話しなくてはならない事になりますね………と、私はウヰスキイをチビリチビリ舐めながら、――何のお話をしませう？………と云ふ刹那に、忽ち私の心の中へ、フオルベルグの『戀愛科學』中にある Tribadie の芳烈極まる實例が、連續して紛々と浮んで來たが、いくら醉つても、さすがに口へ出してはいひ出す勇氣はなかつた。

――胡桃がミニコイ女人島に漂泊したかただから、やッぱり仙人話の續きをやりませうか？

――何ですか、サッパリ分りませんけれど、どうぞ願ひます。

――三宅雪嶺の說によると、仙人とは谷の人なる俗人に對して元來山にかぎつた人なんださうです………これならよく分るでせう？チャンと筋道が立つてゐるから………

――え〻。それから？

――そこで胡桃さんがいよ〳〵リヤンカ島なるカンデイ山中へ着陸して、そこへ歡喜踴躍して出迎へた八大龍王の哀願切願を容れると、忽ち太古の釋迦牟尼如來が小頸に觸つて來て、滔々として一大說法を試みたのが、大佛魔梵頂川楞伽經といふ、アナンガ・ランガヤカアマ・シユウトランと並稱された珍本の一つださうです………こりや分らないでせう？

――分りません。何の事やら………

――分らなくてもい〻のです………その本に仙人の事が出てゐるのです………胡桃

は印度の天人がまだキンチンガに雪原の生じなかつた頃、須彌山を一足飛びにしたものだ
——お話しの中ですが、その須彌山といふのは何の事でムいますい？
——須彌山ですか？ 須彌山は印度の山の名ですよ。希臘のパルナソス、日本の久布遡留獄、支那の崑崙山、元來は
みんな同じものです。『藐たる姑射の山、淖約たる仙子多し』などゝいふ、その姑射山も同じです……つまり、カント
やラプラスの考へてゐた宇宙は、それ等と全く正體を同じうしたものなんです……印度人はまづ第一淸に空輪といふ
途方もない大きな圓を一つ考へて見たものですね。その圓の上と風輪といふ第二の圓を層ねます。その上へ水輪といふ
第三の圓を層ねます。第四の圓は即ち金輪です。例の金輪奈落といふ奴ですナ……奈落とは梵語のナーラカで、地獄
と譯してゐます……要するに、宇宙の土臺は、空風水三輪の層なり合つた無限大圓の上へもつて行つて、恰も齊天大
聖孫悟空の頭のやうに、黄金製の箍を象眼してあるものと、スツカリもうきめ込んで了つたわけなんですよ……印度
人は馬鹿なもんですな。尤も印度人が馬鹿なら、カントやラプラスも馬鹿に相違ありません。ネビュラ・システムの假
說が即ち馬鹿の證據です……どうです中々學者でせう？
——へえ？夢見たいなお話しでムいますこと……それが須彌山なんでムいますか？
——いや、まだ、もう少し……そこでその金輪際から、四箇の大海洋が湧き出てゐて、同時にその海洋の中心から、
蘇鐵のやうにニヨキニヨキと虚空に屹立したものが、即ち九峰をなした須彌山です。須彌は又蘇迷盧と書いて、梵語のス
メーロです。妙高と譯してゐます。高サ八萬四千由旬、一由旬は二十哩足らずだから、とても想像の出來ぬ高さですし
……ニューヨークのスカイスクレーパアなンぞは、まるで芥子粒見たいなものです……須彌山を環つた四大海洋中
に、それ〴〵一箇宛の四大洲があります。東西南北にあるのです。我々の眼耳鼻意識に觸れ得る世界は、そのうちの東
勝神洲に屬する一小部分にすぎないので、纔かに限られた娑婆國土だけなんださうです……娑婆もサハといふ梵語で
耐忍と譯してゐます。つまり、耐忍するより外に生きる方法のないところ、といふ意味でせう……滑稽な事には、日
月が須彌山の左右に恰も提灯の如くブラ下つてゐます。コペルニクスの考へ方とは大變なちがひですナ……で、[illegible]

須彌山を中心とした一組のグロテスクな太陽系をば、名づけて一小千世界の器世間と申します。器世間とは多分マテリアと云つた位のところでせう。さうしてその一小千世界を千箇併せて中千世界と申します。そのまた中千世界を千箇併せて大千世界と申します。所謂大中小を併せた三千大千世界ですよ……どうです？　退屈しましたか？……

――いゝえ……でも、あなたは本當に博學でいらつしやるからねえ……と、力のない聲でお世辭を云つた咎をば、慌てゝ兩手で押隱しながら、道子女史は小さなアクビをした。さうしてそのアクビを誤魔化すつもりらしく、そのまゝ兩手を頬の上まで延長して、のぼせたやうにゴシゴシとこすつた。

――御質問の須彌山が片附いたから、いよ〳〵本題の仙人話へ戻りますかね？……

――えゝ、どうぞ……と、女史は止む事を得ず生返事したが、忽ち何か重大な發見でもしたやうな顔つきして、――

――私、さき程から、お話を伺ひながら、かうしてジッとあなたのお顔を見てをりますと、しきりに誰やらのお顔が目先にチラックやうに思はれてなりませんでしたの……今、ふと氣がつくと、それが大谷光瑞さんだつたのです……あなたは非常によく光瑞さんに似てお出で遊ばすのねえ……と、大して冷かすつもりでもなさゝうに云つた。と、美代子さんも同感のやうに輕く頷づいて、さて改めて私の顔を凝視した。

――へえ？　私がね？……と、私は不意に自分の顔の造作などへ肉迫されたので、思はず度を失つたが、――それは光瑞ぢやなくて、光榮の至りですね……と、駄洒落で食ひとめて置いて、――尤もね、やはり或女の方が僕の顔を評して、徳川家達公に似てゐると云つた事がありますよ。どちらにしても、甚だ貴族的な顔だと見えますナ……但し、或る藝者に云はせると、僕の顔は六代目ソックリださうです。藝者だけに大分品位が下ります……ところがまた、或る寫眞師の評によると、僕には頗る徳富蘆花さんの面影があるとも申します。どれもこれも、すべて『もつたいやな祖師は紙子の』至りですが、そのうちにも、僕にとつては、寫眞師の評が一番氣に入つてゐます……併し顔だけ似たんぢやつまらない……どうせ似るなら、僕の文章が殘らず蘆花さんのやうに賣れ出してくれなくちや……

……と、オヒヤラかして了つたものだ。女史もさすがに二の句はつげなかつ……

じめた。さうして二人でまた目くばせを交換すると、

――私、ウッカリしてをりましたが、もうよほど遲くなつたんでムいませうね？　と、女史が云つた。

私は顧向いて時計を見た。

――十時五十七分九秒……十秒……ですか。まだ宵の口でサ。

――アラ！　と、美代子さんは喫驚したやうに云つて、――どうも色々……と、慌てゝ席をすべつた。

――そんなに騒ぎ立てるほどの時間でもありませんがネ……と、私は不興氣に又ウヰスキイの瓶を引寄せると、

――いゝえね、私は夜明しでも驚きませんけれど、齋藤さんはお内でお母アさんが御心配遊ばしますから……と、

女史は取做した。

――さうですか？　さういふ事なら致し方がない……然らば今晚はこれでエマンシペートしてあげませう。と、ウヰスキイはやめにして、私も立上つた。さうして、――どうれ、西洋流にお宅まで送つてつて上げるかね……やゝ送り狼の感もあるが……と、屈んで莨に火をつけた。

――えゝ、どうぞ。と、二人はもう部屋の外へ出てゐた。

眞暗な松林へ這入ると、私は俄に口がきけなくなつた。一時に醉もさめたやうな氣がした。耳元でボソボソと兩女史の話聲はきこえてゐるのだが、私の目の前へは蒼白な奥さんの顏が朦朧と現はれて、一杯涙を湛へた眼で、恨めしさうにジツと私の顏を見つめてゐるのだ……

――齋藤さんのお宅には羊がゐるんですの……と、女史は私に話しかけた。

――へえ？……と、私は器械的に答へた。

やがて美代子さんを送り屆けて、その歸りみち、勿論、歸りみちは二人きりだつたので、女史はくらい闇に甘へたやうに、歩くたび手首の觸れ合ふほど、ヒタヒタと私のからだに寄添つた。さうして、

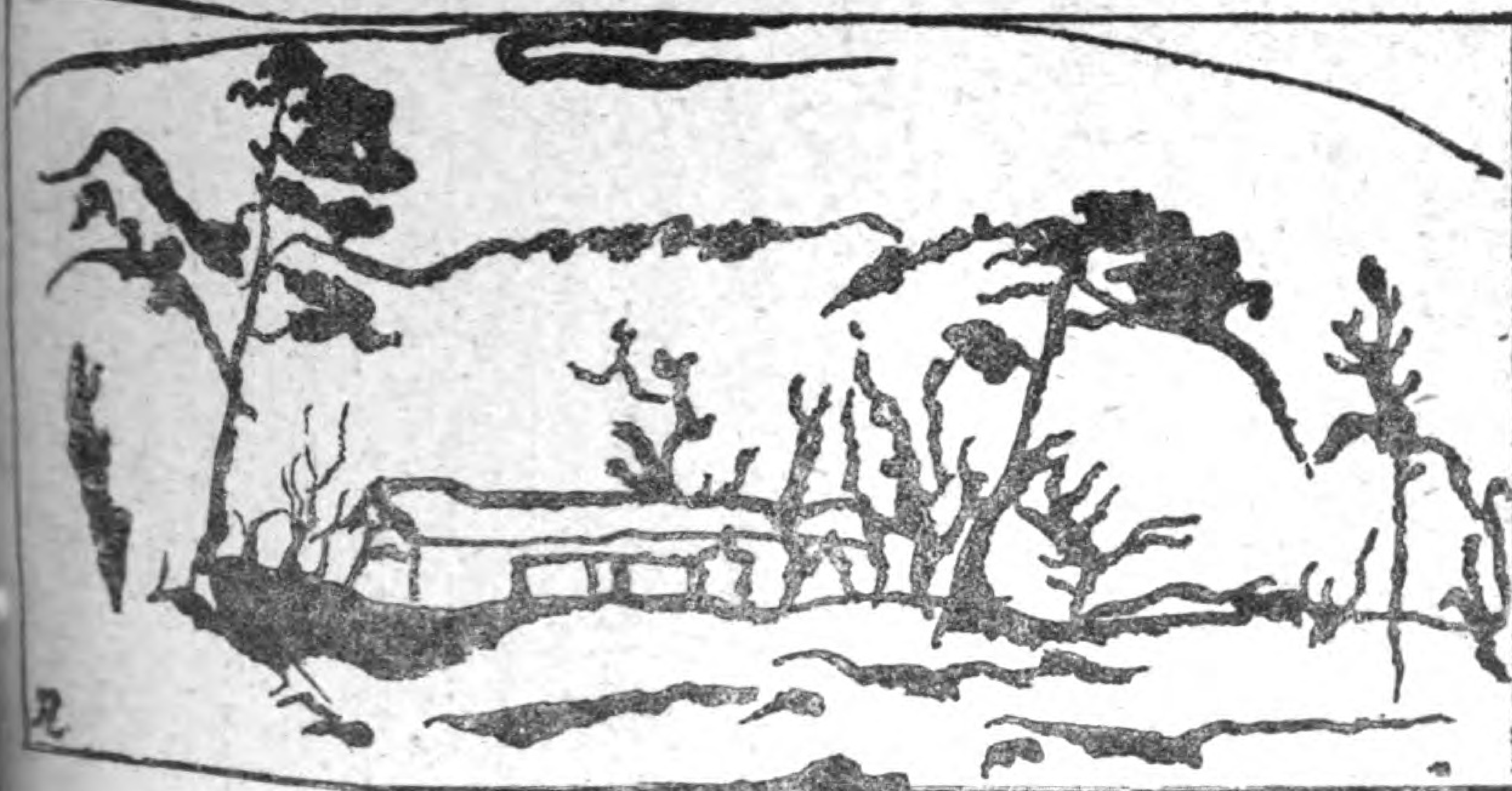
──嬉いわね……と、私語くやうに云つて、ホツと熱い溜息をついた。女の髮の毛の息を感ずると、私のからだはブルブルと慄へた。危く猿臂を伸ばして、女の首を抱へさうになつた。女の髮の毛が私の頰に觸れさうになつた。そのとたん……奧さんの眼が燐のやうにキラリと光つた。大きな別莊の門の前で、思はず抱き緊めた奧さんの脣の上へ、熱鐵のやうに濺いだはじめての接吻が、忽ち私の心頭へ閃めいた。と、私の足は我知らず大股に動き出して、女の先へ立つと、一散に燈光の射す四つかどを目がけて、大急きでくら闇の中から逃れた。

宿へ歸ると、二人は例の階段の下で別れた。その時まで、お互に一言も口はきかなかつた。

──有難うムいました……

──おやすみ……

ガランとして古寺のやうな深夜の建物へ、二人の聲は薄氣味わるく反響した。



或る男

武者小路實篤

二

蘆花生（德富健次郎を彼はさう呼びなれてゐる）を彼はいゝ方だと思つてゐる。彼が始めて蘆花生をたづねてまもなく、蘆花生は郊外に轉居して半農の生活を始めた。彼は其處へも屢々訪ねた、そしてその生活を美しく思つた。

蘆花生はいつも氣持ちよく彼を迎へてくれ、又街道筋まで道をまちがへるといけないと云つて送つてもらつたりした。彼はそれを喜び又感謝した。

しかし彼は蘆花生と話して大いに得る處があるとは思はなかつた。トルストイは彼等にとつては同じく先生である。又當時の宗教熱は彼等を同じ思想にした。彼は蘆花生の武士道的な考へに不服はあつても、それは大したことではなかつた。大事な處で彼等は同感を感じて話しが出來た。たゞ内心の要求に年齡のちがいがあらはれてゐた。

彼は蘆花生を先輩として尊敬した調子で話してゐた。しかし思想的には同格のやうに思つてゐた。そしてものゝ考へ方には時代の差があることを一方知らずにゐたが、經驗のつんでゐる點で尊敬もしてゐた。自分の戀もうちあけて、或は蘆花

生に厚意をもたれてゐるやうに獨りぎめしてゐた。

彼は蘆花生の處に多くの人が出入してゐて、それ等の人が彼と同じくいろ〳〵のことをもちこんでゐることを知つてはゐたが、しかし自分に特に厚意をもたれ、自分の事件を苦にしてもらつてゐるつもりでゐた。處がある日彼は蘆花生に自分のことを話した時、知つてゐるはづの蘆花生が彼のことにまるで無頓着だつたことに氣がついた。彼はそれも無理はないと思つた。しかし同時に蘆花生にとつては自分が零の人間に等しいと云ふことを知らされた。もうその話は蘆花生にはしないでよさうと彼は思つた。その後志賀の事件で相談に出掛けた時、蘆花生は三十分程沈默してゐた。それで彼は蘆花生から隨分いゝ眞理をきかさせることを期待してゐた。處が沈默がやぶられた時、三十分の間蘆花生は他のことを考へてゐたか、或は何にも考へてゐなかつたことがはつ切りして、彼は失望を感じた。その上、蘆花生はあることを志賀にすゝめて、そして自分もさうしたいと思ふが、自分は家の都合で出來ないのだと云つた。彼はそれを聞いた時志賀の方だつて家の都合がある。自分に要求出來ないことを他人に要求する人間かも知れないんだと思つた。

さう思つてから、彼は蘆花生の話を聞くとよくさう云ふ事實にぶつかつた。彼はだん〳〵蘆花生からはなれる氣持になつてゐた。

此處に彼の荒野が出た。それを蘆花生は若々しい青葉のやうな感じがするお坊ちやんの作であつて、荒野の感じはしないと云つた。

そのお坊ちやんあつかいが彼をよろこばさなかつた。その後少しこだはつた氣持で出かけた時、彼は蘆花生から「自分達のやうに食ふことに困つたことのないものには文學の仕事は出來ない」と云ふやうな話をきかされた。

當時さう云ふ考をもつ人は少くなかつた。そして彼は此處に引け目を感じてゐた、處が今蘆花生から、その意味をもつとも簡單に、決定的に聞かされた。さう思つた彼は、その歸途もう蘆花生はたづねないでよさうと思つた。それ

ゲーテやトルストイやマーテルリングはどうなのだ。馬鹿々々しい。頭の單純な奴だと思つた。彼は歸途憤慨した。

もし餓えなければ人間が駄目になるなら、悲慘な境遇にすべての人をおとす社會が一番いゝ社會になる。單純頭！

或）——

る

——（男

彼はさう致命傷を自分に與へやうとするものに腹をたてた。

その後彼は蘆花生とは絶交することに一人できめた。

彼はその時分よく文壇の先輩を憎惡した。彼の前途を呪ひ彼の生活を邪魔するやうな感想をかくものはすべて彼は敵のやうに思つた。そして蘆花生もその一人になつた。

自分はものになつて見せる。自分のものにならないことを豫言する者をよろこばすわけにはゆかない。當時の彼はさう思つた。

三

彼はその後まもなく、ドイツの畫家のクリンゲルを愛した。トルストイ、マーテルリング、その次ぎに彼に影響したのはクリンゲルであつた。今では彼はクリンゲルをあまり尊敬してゐない。しかし當時彼はクリンゲルを愛した。

それはよき種が、よき土地におち、そしてよき滋養分をとつて生長したゾンターグス　キンド（日曜の子）としてゞあつた。

食ふに困らない人間だつて大藝術家になれる、彼は此處にもその例を見出してよろこんだ。

食ふに困つて、しかも大天才になつた人々を彼は元より尊敬する。しかし食ふに困らずに大天才になつた人々を尊敬する。彼は今クリンゲルを大天才とは思はない、しかし當時の彼はさう思つた。そして肉を肯定しながらしかも靈の世界の住民となれた人として彼を尊敬した。彼は段々肉慾をも肯定したい氣持になつて來た。やがて來るべき第三王國を彼はまちのぞんだ。

其處では肉體を人間がもつことが誇りでなければならない。靈の價値は益々高められてそして肉もその光によつて輝き出なければならない。

彼はトルストイによつて教へられた理想の價値、權威は否定しなかつた。それ處かます／＼それを見上げやうとした。

[illegible]うとした。[illegible]生みやすいものではなかつた、[illegible]

ない。人生にとつて一つの大事なものである。そして肉體の支配を無理にうけないものと彼等は思はなかつた。[illegible]そ
れは靈を傷つけないものだらうか。

彼はクリンゲルの畫の内に、肉慾を罪惡としてあつかはずに自然としてあつかひ、抱擁を賤しいものとせずに、美しいものとしてあつかつてあるのに同感した。それは罪を超越して自然であつた。

そしてクリンゲルのオリンピヤにあらはれたキリストに第二の王國を認め、ベートベンに第三の王國を認めた。それは肉が靈を否定せず、むしろ靈をなほ生かすことの出來る力をもつことを暗示してゐるやうに思つた。

彼は自然から與へられたものを全部的に肯定したい活力をうちに感じてゐた。

自然主義は彼には冷たく、はがゆかつた、彼の生長力をさまたげたがる主義として彼は好まなかつた。彼はまづ自分を生長さゝなければならなかつた。

しかし彼は自然主義の御利益はうけた。言文一致の運動は、彼にも筆をとる自由を與へた。彼は嘘のことを書かないでいゝ、又感じないことは書かないでいゝ。又皮膚のやうに内裏とぴつたりした文章をかき得るやうになつたことを彼はよろこんだ。

嘗つて作文を一番嫌つた彼は、今や筆をとる仕事を自分の仕事にきめた。たゞ自分にその資格があるかないかゞ大問題であつた。

一一三

彼等は今度は回覽雜誌をつくつた。矢張り四人だつた。雜誌の名は白樺であつた。

月に二度、原稿をもち集ることにした。そして其處で雜談しながら、それをとぢて、そして順番をきめて回覽した。そしてお互に遠慮のない批評をしあつた。勿論、お互に議論もし、腹も立てあつた。しかしお互にいゝものが出來る時はよろこびあつた。そして惡評する時でも相手のよくなることを望む本氣さがあつた。だから友情は少しも傷つけられなかつた。お互に得る所が多かつた。

彼は一番悪口を云はれると議論をした、露骨にいやな顔をした。しかし彼は反省して直ほさないやうな顔してなほしてゐた。

彼は最初の號に三幕物を出した。志賀は隨分よろこんでくれたが、彼はその内のある個處があまり幼稚なのでその後發表する氣になれなかつた。彼は小説よりは脚本の方に自信があつた。彼は小説では地の文章に困つた。そしてものを考へたり、あるシーンを空想したりする時はいつも會話で、そして其處にあらはれてくる人々に彼はなりすますことが出來た。

「武者はものになるかね」

「なるだらう」

「どうして」

「一生懸命だから」

「だが才能は零のやうだぜ」

「だが馬鹿ぢやないやうだ」

彼はこんな風にものを考へる。

又、エロチックな空想や、その他、自分が感情をあらゆる方面に生かさうとする時、彼は會話を撰んだ。其處には、甲乙の男があらはれたり、男と子供があらはれたり、男と女があらはれたりした。そして彼を勇氣づけたり、娛しましたり、時間つぶしをさせたり、いましめたりした。下等な空想も上等な空想も彼には會話であらはれた。それは子供の時からの癖だつた。そして地の文の處はその出てくる人々の心のうごき方に従つて各自の姿をとつてあらはれた。その場の景色も幻影として顯はれた。しかしそれは出てくる人間の心の動き方に必要な範圍にすぎなかつた。そして出てくる人間はこれを觀察する暇はなく會話をつゞけた。

こんな風に[illegible]やうに思つた。しかし彼は殆んど芝居は見なかつた。たゞ彼は自分の頭の

しかし彼の頭のなかの芝居は斷片的であつた。そして彼はまだ脚本をかく呼吸をのみこめなかつた。

白樺は期日をまちがへずに出ていつた。それが彼等の單調な生活の中心になつた。三號か四號に志賀が「網走迄で」と云ふ短篇を出した。それは皆に賞められた。その時から志賀のかくものはものになりだした。

一人の人がものになるのは實に面白いことである。一寸した處で呼吸をのみこむともうあともどりはしない。

彼等は回覽雜誌を出すことによつて段々ものになり出した。

彼等の仲間は段々大學がいやになつた。そして創作許りをやりたくなつた。彼についで正親町が學校をやめた。

（旅行中でおちついて書けないので今度は心ならずこれでやめる。次號あたりからまとめて書きたく思つてゐる）。

彼は一番悪口を云はれると議論をした、露骨にいやな顔をした。しかし彼は反省して、自分のわるいと思ふ所は、なほさないやうな顔してなほしてゐた。

彼は最初の號に三幕物を出した。志賀は随分よろこんでくれたが、彼はその内のある個處があまり幼稚なのでその後發表する氣になれなかつた。彼は小説よりは脚本の方に自信があつた。彼は小説では地の文章に困つた。そしてものを考へたり、あるシーンを空想したりする時はいつも會話で、そして其處にあらはれてくる人々に彼はなりすますことが出來た。

「武者はものになるかね」

「なるだらう」

「どうして」

「一生懸命だから」

「だが才能は零のやうだぜ」

「だが馬鹿ぢやないやうだ」

彼はこんな風にものを考へる。

又、エロチックな空想や、その他、自分が感情をあらゆる方面に生かさうとする時、彼は會話を撰んだ。

其處には、甲乙の男があらはれたり、男と子供があらはれたり、男と女があらはれたりした。そして彼を勇氣づけたり、擬しましたり、時間つぶしをさせたり、いましめたりした。下等な空想も上等な空想も彼には會話であらはれた。それは子供の時からの癖だつた。そして地の文の處はその出てくる人々の心のうごき方に従つて各目の姿をとつてあらはれた。その場の景色も幻影として顯はれた。しかしそれは出てくる人間の心の動き方に必要な範圍にすぎなかつた。そして出てくる人間はこれを觀察する暇はなく會話をつゞけた。これで彼は會話か、脚本の方にひかれるやうになつた。しかし彼は殆んど芝居は見なかつた。たゞ彼は自分の讀む

なかの芝居をよく見た

しかし彼の頭のなかの芝居は斷片的であつた。そして彼はまだ脚本をかく呼吸をのみこめなかつた。

白樺は期日をまちがへずに出ていつた。それが彼等の單調な生活の中心になつた。三號か四號に志賀が「網走まで」と云ふ短篇を出した。それは皆に賞められた。その時から志賀のかくものはものになりだした。

一人の人がものになるのは實に面白いことである。一寸した處で呼吸をのみこむともうあともどりはしない。

彼等は回覽雜誌を出すことによつて段々ものになり出した。

彼等の仲間は段々大學がいやになつた。そして創作許りをやりたくなつた。彼についで正親町が學校をやめた。

（旅行中でおちついて書けないので今度は心ならずこれでやめる。次號あたりからまとめて書きたく思つてゐる）。

彼は一番悪口を云はれると議論をした、露骨にいやな顔をした。しかし彼は反省して自分

ほさないやうな顔してなほしてゐた。

彼は最初の號に三幕物を出した。志賀は随分よろこんでくれたが、彼はその内のある個處があまり幼稚なのでその彼

發表する氣になれなかつた。彼は小説よりは脚本の方に自信があつた。彼は小説では地の文章に困つた。そしてものを

考へたり、あるシーンを空想したりする時はいつも會話で、そして其處にあらはれてくる人々に彼はなりすますことが

出來た。

「武者はものになるかね」

「なるだらう」

「どうして」

「一生懸命だから」

「だが才能は零のやうだぜ」

「だが馬鹿ぢやないやうだ」

彼はこんな風にものを考へる。

又、エロチックな空想や、その他、自分が感情をあらゆる方面に生かさうとする時、彼は會話を撰んだ。

其處には、甲乙の男があらはれたり、男と子供があらはれたり、男と女があらはれたりした。そして彼を勇氣づけたり、娯しましたり、時間つぶしをさせたり、いましめたりした。下等な空想も上等な空想も彼には會話であらはれた。それは子供の時からの癖だつた。そして地の文の處はその出てくる人々の心いうごき方に從つて各目の姿をとつてあらはれた。その場の景色も幻影として頭に浮んだ。しかしそれは出てくる人間の心の動き方に必要な範圍にすぎなかつた。そし[illegible]出てくる人間はこれを觀察する彼ではなく會話をつゞけた。

[illegible]になつた。しかし彼に何んと云ふ景色も見なかつた。たゞ彼に自分の頭の

[illegible]「[illegible]」

なかの芝居をよく見た。

しかし彼の頭のなかの芝居は斷片的であつた。そして彼はまだ脚本をかく呼吸をのみこめなかつた。

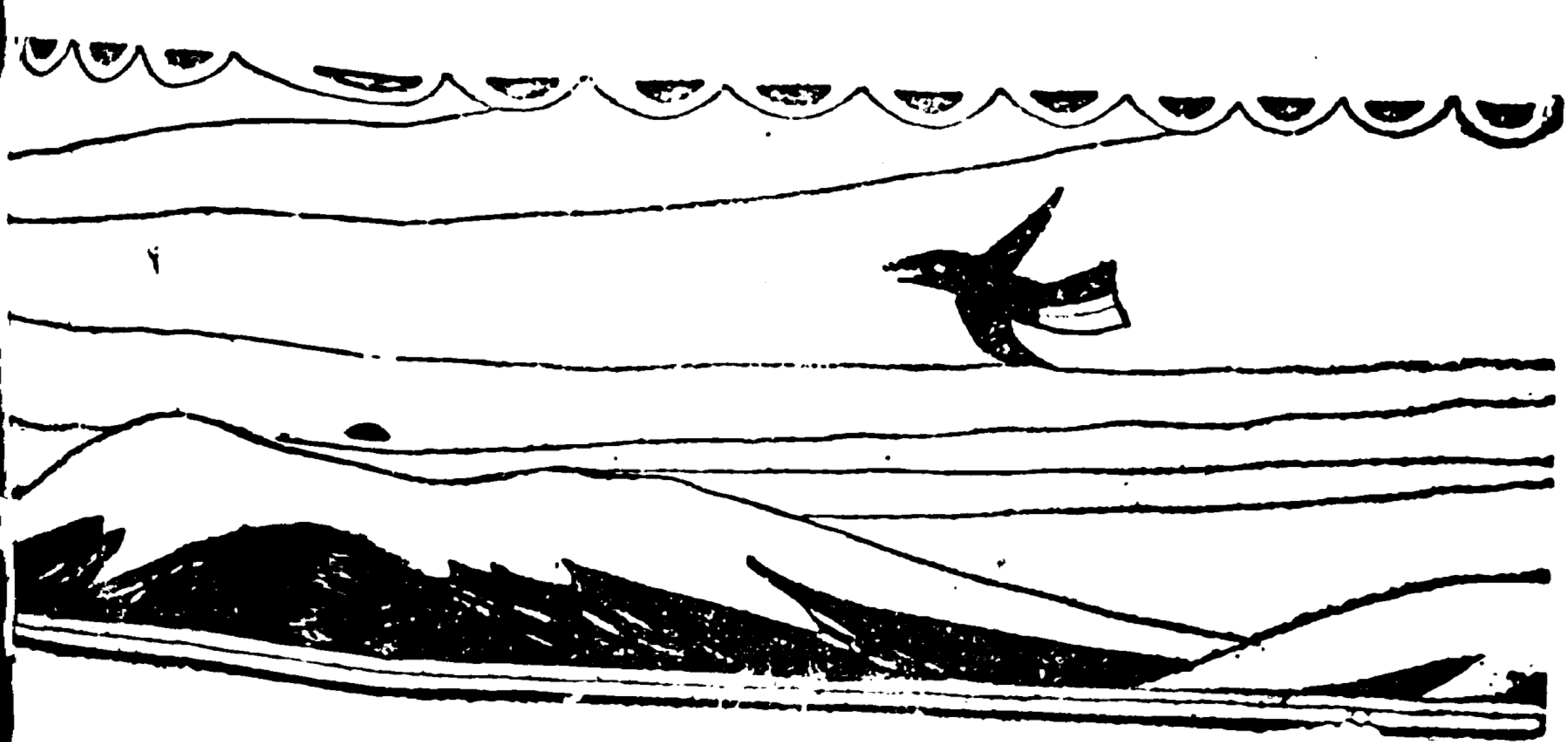
白樺は期日をまちがへずに出ていつた。それが彼等の單調な生活の中心になつた。三號か四號に志賀が「網走まで」と云ふ短篇を出した。それは皆に賞められた。その時から志賀のかくものはものになりだした。

一人の人がものになるのは實に面白いことである。一寸した處で呼吸をのみこむともうあともどりはしない。

彼等は回覧雜誌を出すことによつて段々ものになり出した。

彼等の仲間は段々大學がいやになつた。そして創作許りをやりたくなつた。彼について正親町が學校をやめた。

(旅行中でおちついて書けないので今度は心ならずこれでやめる。次號あたりからまとめて書きたく思つてゐる)。



狂亂

近松秋江

一

二人の男の寫眞は佛壇の中から發見されたのである。それが、もう現世に居ない人間であることは、ひとりでに分つてゐるのだが、かうして、死んだ後までも彼等が永へに、彼女の胸に思出の多い影像(イメージ)となつて留まつてゐると思へば、私は、やつぱり捕捉することの出來ないやうな、淡い嫉妬を感じずにはゐられなかつた。そして今、何人にも妨げられない、彼女を自分ひとりの所有にして樂んでゐる限りなき歡びが、その爲に忽ち索然として、生命にも換へ難い大切な寶がつまらない物のやうな氣持ちになつた。しかし、また思ひなほすと、彼等はどのくらゐ女に思はれてゐたか、私自分よりは深く思はれてゐたか、さうでなかつたか、わからぬにしても寫眞を佛壇に祀られるやうになつたのでは、結局私自分よりもあの男達は不幸な人間であつた。さう思ふと、死んだ人間が氣の毒にもなつた。

「そんなに隱さないで、ちよつと見せたつていゝぢやないか。それは好きな人の寫眞だらう。どうせ此處へ祀つてあるくらゐだから、死んだ人に相違ない。生きてゐる中世話になつた人なら、祀つて上げるのが當りまへだ。」さばけた氣持でさう云つて、私は寫眞の面影を何に追ふやうな心持ちになつ[illegible]

どこかそこらの箪笥の小抽斗にそれを隠してしまつた。

羽織袴を着けてゐる三十恰好の男は、二重瞼のくりくりした、鼻の下の髭を短く刈つて、ゐたりするのが、も一人の四十年配の洋装の男よりも安つぽく思はれた。そして、それが、ずつと前から、ちよいちよい私の耳に入つてゐた、女と大分深い關係であつたといふ男のやうに直感された。ある日本畫の畫家で女と噂の高かつた男が去年の夏頃死んだといふことを聞いてゐたので、それを思ひうかべた。

「和服を着てゐる人間は、何だか活動の辯士のやうぢやないか。」私は幾らか胸苦しい反感を以つてさういふと、

「何でも構ひまへん。あの人達が生きてたら、私、もう疾うにこんな商賣してゐまへん。」

女は向うをむいて、せつせと、取り擴げた着物を疊みながら、こちらの言葉にわざと反抗するやうに、さう云つてゐる。私は、そんな言葉を聽かされると、又、あまり好い心地はしなかつた。そして腹の中で

「それぢや、四五年も前から、自分ばかりに、身體の始末を附けてもらひたいやうにいつて頼んでゐたのは、みんな嘘であつたかも知れぬ。」と思つたが、女の厭がるやうなことを、くどく追窮して訊くのは却つて好くないと思つて、默つて置いた。

けれども、もう此間から訊かう〱と思つて、幾度もいひ出しかけては、差控へてゐた、女の借金が今どうなつてゐるか、又自分が長い間仕送つた金が、その借金を減らす爲めに、どういふ具合に有効に使用せられてゐるか否かを明細に訊きたいと思つた。女は、その事を突込んで訊かれるが、痛い處へ觸られるやうで、なるたけ訊かれずに、そうつとして置きたい風があるのは、今年のまだ正月時分から、その金の使途について、殊にやかましく、私から訊ねてよこした再三再四の手紙に對する返事で一向要領を得なかつたのでも、それがわかつてゐるし、今度京都に來て、先日から、祇園町の茶屋で久し振りに逢つた時にも、それを云ふと、妙に話を脇へそらすやうにするし、さうかといつて、女のいふまゝに下河原の旅館の方にいつて要領を得た話を訊かうとしても、そこでも成るべくそんな話は言ひ出さないやうにして、一寸逃れに逃れて居りたいのが見えてゐた。そして、あの晩たうとう自分を此の二階に伴れて來たのであつたが

かうして、暫くでも女と一緒にゐて、母親にもともに大事にせられてゐると、長い間自分の望んでゐた願ひが叶つたやうなものであるが、女の身體が今におき、やつぱり借金の爲に廓に繋がつてゐるのであつては、目前の歡樂はうたかたの如く果敢ない。

「着物がそんなに出來たのも好いことだが、あんたの借金の方は一體どうなつてゐるの？、着物は、あんたの身が自由になつた後に、ぼつ〳〵出來る。それよりも急ぐのは今の商賣を廢して、綺麗に脚を洗ふことぢやないか。」

暫くしてから私はなんども訊いてみた。すると女も母親も默つてゐたが、私が繰返して、

「ねえ、どうなつてゐるのと、」いふので、女は、

「借金はまだ大分あります。」といふ。

「大分ありますて、どのくらゐあるの？、」

「さあ、まだ千圓ちかくありますやろ。」

彼女は、わざと陽に反抗の意を表はして、誠意の籠らないやうな口吻で、さういふ。それで私は又勃然となり、

「千圓？、」自分の耳を疑ふやうに重ねて、言葉を強くして訊いた。

けれども女は默りこくつてゐる。

「まだそんなにあるの？、」私の聲は、自然に上ずつてきた。「そんなにある筈がないぢやないか。私があんたを初めて知つた、四五年前にそのくらゐあると云つてゐた。そしてそれだけの物は私から、一度に纏めてゞはないが確に來てゐる。あれから四五年も稼いでゐて、このうへそれだけの金も手に入つてゐて、今になつても矢張り四五年前と少しも借金が減つてゐないといふやうなことで、それで、あんた、どうするつもりなの？、」私は、次の間の長火鉢の處にゐる母親にも聞えるやうに、畳掛けて訊ひつめた。

すると女は又棄鉢のやうに、

「そんな[illegible]

とくれやす。」

私は呆れた顔をして、そんなことをいふ女の顔を暫くじつと見てゐた。

「もうあんたはんのお世話になりまへんて、それぢやお前、今までどんな考で私にいろんな事を頼んでゐたの？、あんたの體の解決をする爲めに、私も出來るだけのことをしたのぢやないか。今になつてそんな事をいつては、何のことはない、まるで私を騙つてゐたやうなものぢやないか。」

さういふと、女は返答に窮したやうに默つて焦れ〳〵しながら、肩て大きな息をしてゐるばかりである。

「ねえ、私の送つて上げた金は一體何に使つたの？……そりや、こんな着類をこしらへるにも入つたらうが、私自身にも欲しい物や買ひたいものが幾らもあるのを、そんな物より何より私には、唯々お前と云ふ者が欲しい爲めに、出來ぬ中から私の力に能ふ限りのことをさして來たのぢやないか。まとまつてゐないといつても、貳百圓參百圓と纏つた金を送つたこともある。それは、あんたも覺えてゐる筈だ。私にとつては血の出るやうなその金を、これと云つて使ひ途のわからぬやうなことに使つて、今になつてもまだそんなに借金がある。……私はかうしてあんたに逢ふのも、何度もいふとほり、去年の一月から丁度一年と半歳ぶりだ。始終この京都の土地に居付いてゐるわけぢやないから委しいことは知らぬが、あんたが私から貰ふ金をほかの人間に貢いでゐるといふ噂を、ちら〳〵耳にしたこともあつたけれど、私はそれを眞實とは思はないが、どうも、借金が尙ほそんなにある筈はないと思ふ。もつと私の納得するやうに本當のことをいつて聽かしてもらひたい。私が今までお前に盡してゐる眞心がお前に解つてゐるなら、もつと本當のことを打明けて聽かしてくれてもいゝと思ふ」私は、それでも成るべく女の氣に障らぬやうに、言葉のはし〳〵を注意しながらさういつた。

すると彼女は愈々云ふことに詰つたと思はれて、疊んでしまつた着物をそこに積み重ねたまゝ、簞笥の前に凭れかゝつて靜としてゐたが、ヒステリックに、黑い大きな眼を白眼ばかりのやうに赫と瞬開ひて、

「わたし別に、引いてからあんたはんところへ行く約束した覺えありまへん。」と疾詰した。

かうして、暫くでも女と一緒にゐて、母親にもともに大事にせられてゐると、長い間自分の望んでゐた願ひが叶つたや[illegible]うなものであるが、女の身體が今におき、やつぱり借金の爲に郭に繫がつてゐるのであつては、目前の歡樂はうたかたの如く果敢ない。

「着物がそんなに出來たのも好いことだが、あんたの借金の方は一體どうなつてゐるの?、着物は、あんたの身が自由になつた後に、ぼつぼつ出來る。それよりも急ぐのは今の商賣を廢して、綺麗に脚を洗ふことぢやないか。」

暫くしてから私はなんども訊いてみた。すると女も母親も默つてゐたが、私が繰返して、

「ねえ、どうなつてゐるのと、」いふので、女は、

「借金はまだ大分あります。」といふ。

「大分ありますて、どのくらゐあるの?、」

「さあ、まだ千圓ちかくありますやろ。」

彼女は、わざと陽に反抗の意を表はして、誠意の籠らないやうな口吻で、さういふ。それで私は又勃然となり、

「千圓?」自分の耳を疑ふやうに重ねて、言葉を強くして訊いた。

けれども女は默りこくつてゐる。

「まだそんなにあるの?」私の聲は、自然に上ずつてきた。「そんなにある筈がないぢやないか。私があんたを初めて知つた、四五年前にそのくらゐあると云つてゐた。そしてそれだけの物は私から、一度に纏めてゞはないが確に來てゐる。あれから四五年も稼いでゐて、そのうへそれだけの金も手に入つてゐて、今になつても矢張り四五年前と少しも借金が減つてゐないといふやうなことで、それで、あんた、どうするつもりなの?」私は、次の間の長火鉢の處にゐる母親にも聞えるやうに、[illegible]掛けて訊ひつめた。

すると女は[illegible]のやうに、

「[illegible]

とくれやす。」

私は呆れた顏をして、そんなことをいふ女の顏を暫くじつと見てゐた。

「もうあんたはんのお世話になりまへんて、それぢやお前、今までどんな考で私にいろんな事を頼んでゐたの？、あんたの體の解決をする爲めに、私も出來るだけのことをしたのぢやないか。今になつてそんな事をいつては、何のことはない、まるで私を騙つてゐたやうなものぢやないか。」

さういふと、女は返答に窮したやうに默つて焦れ〱しながら、肩で大きな息をしてゐるばかりである。

「ねえ、私の送つて上げた金は一體何に使つたの？……そりや、こんな着類をこしらへるにも入つたらうが、私自身にも欲しい物や買ひたいものが幾らもあるのを、そんな物より何より私には、唯々お前と云ふ者が欲しい爲めに、出來ぬ中から私の力に能ふ限りのことをさして來たのぢやないか。まとまつてゐないといつても、貳百圓參百圓と纒つた金を送つたこともある。それは、あんたも覺えてゐる筈だ。私にとつては血の出るやうなその金を、これと云つて使ひ途のわからぬやうなことに使つて、今になつてもまだそんなに借金がある。……私はかうしてあんたに逢ふのも、何度もいふとほり、去年の一月から丁度一年と半歳ぶりだ。始終この京都の土地に居付いてゐるわけぢやないから委しいことは知らぬが、あんたが私から貰ふ金をほかの人間に貢いでゐるといふ噂を、ちら〱耳にしたこともあつたけれど、私はそれが眞實とは思はないが、どうも、借金が尙ほそんなにある筈はないと思ふ。もつと私の納得するやうに本當のことをいつて聽かしてもらひたい。私が今までお前に盡してゐる眞心がお前に解つてゐるなら、もつと本當のことを打明けて聽かしてくれてもいゝと思ふ。」私は、それでも成るべく女の氣に障らぬやうに、言葉のはし〱を注意しながらさういつた。

すると彼女は愈々云ふことに詰つたと思はれて、疊んでしまつた着物をそこに積み重ねたまゝ、簞笥の前に凭れかゝつて靜としてゐたが、ヒステリックに、黑い大きな眼を白眼ばかりのやうに赫と瞬開ひて、

「わたし別に、引いてからあんたはんところへ行く約束した覺えありまへん。」と抗辯した。

そのあまりに凄まじい形相に私は吃驚して、そのまゝやゝ暫く口を噤んでゐたが、女もすぐ靜かな調子になつて、
「今になつてそんなことを云つてゐる。」と、言葉を和げていふと、
「あんたはんが、たゞ自分ひとりでさうお思ひやしたのどすやろ。」
「私が自分ひとりでさう思つた？……あんたの體を解決することを。」
「えゝ、さうどす。」
「私が自分ひとりでさう思つたつて、あんたの方でも依頼したから送る物を送つてゐたのぢやないか。いくら私がお前を好いてゐたつて、そつちでも頼まないものを、何うして、自分の身を詰めてまで仕送る道理がない。」
「そやけど、あんたはん、初めの時分は、私にさうおいひやしたやおへんか、自分はお前を可哀さうや思ふて恵んでやるさかい、後になつて私の處にお前が來る氣があつたら來てもえゝと、その氣がなかつたら來てもらはいでもえゝ。……私そのつもりでゐました。」彼女は靜かな調子ですこし人を戯弄ふやうにさういふ。

なるほどさう云へば、ぼんやりしてゐるやうでも女がよく記憶してゐるとほりに、彼女に、ずつと初に金品などを送れてやつた時分には、そんなことを云つたやうに思ふ。それは、女にどんな深い關係の人間があるかわからない爲の、此方の遠慮であると同時に。又自分の方へ彼女を引着けやうとする手も混つてゐたのであつた。けれども女の方でも後には、みんな考でのみ此方の扶助を甘じて受けてゐなかつたことは、長い間の契約で否應なしに承知してゐる筈であつた。

「うむ、それは、あんたのいふとほり、初はそんなことを云つてゐたことも覺えてゐるけれどもお前も段々、そんなつもりばかりで　に長い間依頼してゐたのではなかつたらう。」
さういふと、女はそれに何といつて應へたらいゝかとちよつと考へてゐるやうであつたが、
「そんない金々て、お金のことをいはんとおいとくれやす。」と、また疾語する。
[illegible]ゐた自分に又感情が激してきて、

「金のことをいはんと置いてくれて、私は好んで金のことをいひたくはない。けれども出來ぬ中から無理をして出來る限りの事をして上げたといふのは、そこに、とても一口では言ひ盡すことのできぬ私の眞心が籠つてゐるからぢやないか。何も金が惜しいのでいふのぢやない。」

女はやつぱり箪笥に凭りかゝりながら、

「それはよう解つてます。……そやからお金をお返しゝますといふてます。何ぼお返しゝまよ？」

「いや、私が金が返してほしいのぢやない。今お前がいふやうに、私がこれまで爲たことが、より解つてゐるなら、少しも早くその商賣を止めてもらいたい。」

女はそれに對して確答を與へようとはしないで、

「お金をお返し、さへすりや、あんたはんにそんなに心配してもらはんかてよろしいやろ。」

私の靜まりかけてゐる心は又しても女の云ひやうで激してくるのであつた。

「お前は、お金をどれだけか私に戻しさへすれば、それで私と今までの事が濟むと思つてゐるのか？」

私は金を返さうと主張する女の心の奥に潜んでゐる何物かを凝乎と疑つてみた。そしてさうなれば、どんなに金を山ほど積んでも倍々、金では濟まされないといふことになる。けれども、そんな者が、若しあつては、彼女が私に對してとかく誠實のある返答を避けようとするのもその筈である。可笑、それなら此方にもそのつもりがある。

「私は金が取り戻したいなどゝは少しも思つてゐない。けれどもあんたが實意を打ち明けて私の處に來てくれようといふ心が全く無いものなら、私も有り餘る金ではないから、それで濟ますといふ譯には行かぬ。金でも返してもらふより爲方がない。」

「ほんなら何ぼお返しゝまよ。」

女は本當に金を返す氣らしい。

さうなると、やつぱり。自分は元々金よりも女の方に飽くまでも未練があるので、口の中で云ひ澱んでゐると、女は

重ねて、
「なんぼでよろしい？」と、いつて、此方の意向を測りかねたやうに私の顔を見守りながら、
「私もさうたんのことは出來まへんけど、何ぼくらいか、云ふてみとくれやす。」
女が金で濟まさうとするらしい意向が見えればみえるほど自分は、この女は金錢などには替へられない、自分にとつては何物にも優さる、欲しい物品であるのだ。さう思ふと、どんなにしても自分の所有にしたい。
「私は金は返して欲しいとは思はない。けれどもあんたが金を返へして私との約束を止めようといふのなら、私は初から上げた金を全部返へしてもらふ。」
「初から金て。どのくらゐどす？」
「それは、あんた自分でも知つてゐる筈だ。いつかの手紙にも書いたくらゐはあるだらう。」
すると、女は勃然として、
「わたし、そんなに貰ふてえしまへん。」と白々しさうに云ふ。
「いや、たしかにそれくらゐは來てゐるけれども幾度もいふとほり私は金は一文も返してほしくはないのだ。たゞ、あんたが私の處に來てくれぬといふたらそれを皆な戻してもらはねばならぬ。」
女は自棄て鉢のやうになつて、
「もうあんたはんの心はよう解りましたから、ほんなら返します。私も御覽のとほりどすよつて一度にはよう返しまへんけど追々お返しします。……おかあさん、これ、あそこへ持つていとくれやす。」と、ぷりぷりしながら、突如起ち上つてやけに箪笥の抽斗をあけて、中から唐草模様の五布風呂敷を取り出してそこに積み重ねてゐた衣類をそれに包んだうへに、まだがちや／＼箪笥を引き出して、ほかの品物まで入れ添えようとする。どこかへ持つて往つて直ぐ金を融通しようといふのであらう。
私はすこしも金など欲しいとは思はないので、縺んだ事になつたと、はら／＼しながら、眉に皺を寄せて、宥めるや

うに、
「これ、何をするの？そんなことはしないが可い。さうして折角出來てゐる物をそんなことをしないでもいゝぢやないか。私はお前から金を戻してもらいたくはないのだ。」
と、手を差出して女の手を捉らんばかりにしていふと、彼女はそれには答へず、
「おかあさん、これ直ぐ持つていとくれやす。」と、荒々しく風呂敷を包んでゐる。
私は、母親はどんな心持でゐるのかと、そつちを振顧つてみると、母親は次の間の火鉢の傍で人の好ささうな顏をして、たゞ莞爾して娘のすることを默つて遠くから見てゐるばかりである。そして、女が幾度ゝ急き立てるやうに、
「持つていとくれやす。さあ今すぐ持つてとくれやす。」といふのを、母親は「えゝ〳〵」とばかりいつて、起たうとはしない。
私は母親の火鉢の前に立つていつて、
「おかあさん、どうぞ持つていかないやうにして下さい。」
といふと、母親はうなづきながら、
「えゝ、心配せんと置いとくれやす。又あとであの娘によういひますよつて。」と、事もなげに笑つてゐる。
彼女はまるで母親と私と二人に向つて駄々を捏るやうに、それから暫くの間、
「はやう持つて往とくれやす。」と、幾度も母親を催促してゐた。
女の機嫌を傷けてしまつたので、どうか、そんな衣類の入つた大風呂敷などを外に持ち出すやうな淺間しいことをしてくれなければよい。此處へ初めて來た夜彼女がいつたやうに、長いことあんたはんにもお世話かけましたお陰で私もちよつと樂になつたことどす。といふのが本當ならば、折角いくらか幸福になりかけてゐる彼女の境遇を、そんなことをして又氣まづい思ひをさせたくない。それにしても、自分から少しは樂になつたといつてゐるのだから、もう借金もさう多くある筈がない。何故この女は私に眞實の心を明かさないのであらう？

そこで、私は暫くそこにゐない方が女の焦立つた氣分を和げるによからうと思つて、重ねて、母親に風呂敷
を持ち出さぬやうにいひ置いて、そのまゝ外に出ていき、東山の方をぶらりと一とまはりして歸つて來た。

二

唐草模様の五つ布の風呂敷はそのまゝ簞笥の上に載せてその後二四日は目についてゐたが、私の知らぬ間に外に持出したのか、それとも中の物を又簞笥に藏つたのか、やがていつもの處に見えなくなつた。そして、それに懲りて私は、彼女の體の解決の事については、幾ら心に思つてゐても口には出さなくしてゐた。母子の間ではどんな話をしてゐたか知れぬが、女の氣持ちもすぐ又もとのとほりになつた。それのみならず、そのことがあつた夜、母親が長く外に出ていつて歸らなかつたので、風呂敷包みを持ち出したのかと思つて氣を付けると、それは無事にあるので、さうでもないなと思つて安心してゐた。すると、その翌日母親は、娘がちよつと主人の處へ歸つてくると出ていつて留守になつてゐる間に、

「昨日はえらい、お氣の毒でした。」と、次の間の長火鉢の處から聲をかけた。私は、

「お氣の毒て、何のことです？」と、そちらを振向くと、母親は莞爾としながら、

「あの娘があんな我儘いふて、あんたはんに、えらい濟まんことどした。」

「なに、そんなことは、ちつとも心配いりません。機嫌さへ直ればいゝです。」

母親は腹から憂はしげな顏して、

「わたし、もう心配で。あの娘があのとほりあんまり我儘いふてあんたはんに後で愛憎盡かされるやうなことがありまへんか思ふて、心配でならんもんどすさかい、昨夜あとで主人のところへ相談に往つて來ましたのどつせ。そやけど、あちらの姐さんのおいひやすには、お母はん、なんもそないに心配することはない、そんなこといふて、あんたはんに甘えるんやさかい、備はんと聞きやすいふてくりやはりましたけど、私それが心配になつて、ゆうべもよう寝られしまへんのどす。ほんでお前はん一遍本人を寄越します。[illegible]

ちよつと屋形へいとります。又姐さんから、あんじやう云ふて聴かしとくれやすやろ思ふてます。けど」

私は、母親が正直さうにさういつて心配してゐるのを聴くと、一入打解けた好い氣持になつて、

「どうぞ、そんなに心配しないで下さい。だゞを捏ねてゐるのはよく解つてゐるんです。」

といつて、自分も一緒に輕く笑つてゐたが、そのついでに前日女に向つて訊いたやうなことを重ねて母親に話しかけてみたけれど、

「さあ、どないなつてゐますことどすが、私はかうしてあの娘に養ふてもらふてる身どすさかい、何も斯もあの娘がひとりで承知してるのどすよつて。あんたはんから、又機をお見やして、よう聴いとくれやす。といつて、彼女自分では金錢の出入のことなど委しく知らぬやうな口振であつたが、

「屋形の主人さんもあんたはんの事を昨夜もさういふてはりました。おかあはん、その方大事にしておたげやす、自分で來ずと、金だけ長い間送つて越すといふのは余程量見が廣うないと出來んことやさかい。そない云ふてはりました。」

母親はさういつて、私を喜ばすやうなことをいつてゐた。私もそのとほりに聴いてゐた。

今日はついでに花にでも行くのかと思つてゐたら、女はその晩屋形から早く戻つてきたが、昨日から、何となく、沈んで眉根を顰めたやうにしてゐたのが、歸つてくると、遽に打つて變つて好い機嫌でゐた。

私も、二人が大事にしてくれるからといつて、餘り好い氣になつて、何時までも其處にゐては外聞もわるし母子の者が迷惑するであらうとは思ひながらも、居心が好いので、すつかり心が落着いてゐた。女も打融けて、私が居つてゐる机の傍に來て坐はつて、自分もそこで樂書きなどをしたりしてよく話してゐた。そして、そこが居心地の好いことを私が又しても繰返していふと、

「そんなによかつたら、こゝをあんたはんのまあにしときまへうか。」

「まあとは。？……あゝ間か、あゝどうぞ居間にして置いてもらひたい。」

などゝいつてゐたが、日は瞬く間に立つて、そこに來てから半月ばかりして私は六月の中何物く中國の方の鄕里に、

つてゐた。けれど、梅雨の頃の田舎は鬱陶くつて、とても長くは辛抱してゐられな
八疊の間が、廣い世界にそこぐらゐ住み好い處はないやうな氣がするので、一週間ばかりして、又其處へ歸つ
た。尤ももう夏が近いので、京都からすぐ紀州の方の山の上に往くつもりではあつたが。

その日は鬱陶しい五月雨の滋々と降りしぶいてゐる日であつた。ステーションから直ぐ俥で女の家に歸つて來て、薄暗い入口をはいつて、玄關から音なうと、階下の家主の老女はもとよりみんな留守と思はれるほど秘そりとしてゐる幾ら何んでも默つて上がつて往くのは厚皮しいやうで、二三度大きな聲を掛けると、やがて階段を下りて來る足音がして、外から開かぬやうにぴたりと閉めた中の潜戸の彼方で、

「どなたはんです？」といふ、母親の聲がする。

「私、わたしです。」といふと、

潜戸をそつと半ほど開けながら、母親が胡散さうに外を覗くやうに顏を出した。そして

その瞬間、先達て中の待遇から推して期待してゐたやうな、あまり好い顏をして私の顏を見なかつた。

「私です。今歸りました。」といふと、

「あゝ、あんたはんですか。」といつたが、「さあお上りやす。」といふかと思つてゐると、「一寸待つてとくれやす。今ちよつとお客さんですよつて。」

といつて、丁度留守で居ない階下の家主の老婆の表の六疊の座敷に案內して、「どうぞ一寸こゝでお待ちしてとくれやす。」といつて、私をそこに置いといて、間の襖をぴしやりと閉めて、自分は二階に上がつて行つた。

すると、暫く待つ間もなく母親と入れちがひに女がそこへ入つて來て、笑顏を作りながら、

「おかへりやす。」と懷しさうにいつて、私の膝の前に近く寄つてぺつたり坐つた。そして二言三語いをきゝ交はしてゐるうちに、客といふのが襖の外の茶の間を通つて、內庭から歸つてゆくと思はれて、母親も後から入口まで送つて出たらしい。私は、何の氣もなく、どんな人間が歸つてゆくのかと思つて、一寸起ち上つて縁側の障子を開いて[illegible]

を玄關口の方の庭とを仕切つた袖垣の上越しに人の[illegible]の[illegible]る。娘が[illegible]黒[illegible]のセルの夏外套を着た後姿が、ほんの肩から頭の方の一部分だけ僅かに見えてゐたばかりであつた。

そこへ母親も入つて來て、

「お歸りやす。」と、今度はいつかのとほりの愛想のよい調子で、更めて挨拶をしながら、「今一寸知つた呉服屋さんが來てましたので、あんたはん又顏がさすと惡い思ふて、ちよつと此處で待つてもらひましたんどす。……階下のお婆さんも今日は用やはりましてお留守です。さあ、どうぞ二階にお上がりやして。」

と、母親は、先刻私が入つて來た時、潜戸の中から覗いた時の樣子とは、まるで違つた調子でいふ。

私は、たゞ何といふこともなく、先刻のその顏色が氣になりながら、

「へえ、有難う。上がります。……何もこんな雨の降る日に戻つて來なくとも好いのですけれど……」といひかけると、母親は、妙に感づいたか、

「あんたはんのお留守の間に誰れか來てゐる思ひやして？」と、笑顏しながら云ふ。

「いや。そんな事はちつとも思つてやしませんけれど、こんな雨の降る日に戻らなくつても可いのですけれど、用今は何としても蚊がゐる、蠅がゐる、とても辛抱出來ませんから……」

母親とさうして口を利き交はしはじめると、娘はそれきり默つてしまつた。それから私は二階の八疊に上がつて來て母親が今云つたことから妙に氣が差したのでそれとなく、注意してよく見ると座敷の中央に今まで人の坐はつてゐた夏座蒲團が、女もそこにゐたらしく二つ火鉢の傍に出てゐて、火鉢の中には敷島の吹殻が澤山灰の中に挿してあつた。私は腹の中で、たゞ呉服物の用ばかりで來てゐた客かどうかと自然に疑つてみる氣になつた。が、勿論そんなことを口には出さなかつた。

そして、又こゝへ舞ひ戻つて來て暫く厄介を掛けることのさぞ迷惑であらうといふことを繰返して詫びて、女には、私には少しも構はず、主人の思惑もあるから店に歸つて勤めの方を大事にするやうにいつた。

自分が田舎に往つたあとは、氣を使つたゝめに疲れ盡極で、あれからずつと休んでゐたので
「今日久し振りに店へかへります。ほんなら一寸いてきます。」
といつて、出て往つたが、女は、その晩からかけて翌日の晩も戻つて來なかつた。それから半月ばかりして、私が出の方に出立ちするまで彼女は多く主人の方にいつてゐたが立つ前には又二三日休んで、私の爲に別れを惜んでくれたのであつた。

三

あれほど、母子二人して歡待して置きながら、今度居所を變つたのに、何故知らしてくれないであらうと、少からず淋しい氣持ちになつて、せめてこの騒いだ心を慰めるには、光るく溫い感じのする行きとゞいた旅館に往つて泊るのが何よりよいと思つて、その家へ投宿した。

すると丁度古い馴染の、氣の利いた女中が出て來て、氣持ちよく世話をしてくれた。私は先刻ステーションに着いてから欝陶しい容模様と同じやうに殆ど泣き出したいばかりに悲しくなつてゐたのがやつとその爲にいくらか心を紛らすことができた。そして心地の好い風呂に入つて柔かい蒲團の中に横はつて、都會的情趣に浸りながら早くから寢に就いた。七月の初から殆ど三ケ月に近い、高い山の上の枯淡な僧房生活の心と體の飢渇から、すつかり蘇生したやうな氣持になつた。外では夜に入るとゝもに暴雨にひどい嵐が吹き添つて來たと思はれて、徹宵暴れ狂ふてゐたが、私はそれとは反對に却つて安らかな眠に陷ちた。

翌日は午前はまだ暴風雨の名殘りがつゞいてゐたが、午過ぎから風も次第に歇み、雨も晴れた。女のことは始終念頭にあつたけれど、實は餘りにそのことばかり長い間思ひ續けて、思ひに疲れてゐるので、偶にはほかのことで氣を晴したく、その頃丁度東京から京都に來てゐた知人の寓を訪ねたりしてその日は一日消した。

その翌日は、昨日の暴風の名殘りは痕跡もなく、蒼空に拭ひ取つたやうな朗かな晴天になつた。新秋の空は高く澄み渡つて、一昨日の夜雨に洗ひ淨められた凡ての物に、暑くも寒くもない新秋の太陽の光が、一杯に[illegible]ゐるので、[illegible]

でさへ美しいその街の眺めは今日は恰も硝子細工の中の物のやうに明瞭であつた。

今日は一つ女の先に居た家の樣子を見て來よう。―――無論女からの手紙を信じてもう其處にはゐないのと思つてゐたから―――と思つて、私は午少し前に衣服を更めて、旅館からは直ぐ近い處に在る、電車通りを向うに渡つた横丁にある露地の中に入つて往つてみた。すると、その日は好い鹽梅に階下の家主の老婆が内にゐたので、私は玄關の上り框に腰を掛けながら、老婆と久し振りの挨拶を交はして、暫く話してゐた。すると、そこへ女の母親が、寺詣りでもするらしい巾着をさげて入つてきた。

「あゝ、おかあさんお久しう。私、一昨日の晩紀州の方から歸つて來ました。この頃はもう此處にゐない人ですつて?」といつて、訊くと、

母親もそれに腰を掛けながら、最う先月の末から其處の世帶を疊んでしまつて、自分は上京の方の親類の家に厄介になつてゐるやうに云つてゐた。私は、そこでも、そんな親類の家に厄介になつてゐるよりも、何とかして私が自分で適當な家を一軒借りて京都に住みたいから、そしたら、おかあさんに、そこへ來てもらひたいといふやうな意向を洩すと、家主の老婆は傍から、

「さうおしやしたら、ほん宜しいがな。」といつて、口を添えてゐたが、母親はいつも愛憎よくにこ〳〵とはしてゐたが「そのこともあの娘がどない云ひますか、あの娘の腹一つにきまることゝすさかい。」と、いつて、毎時のとほりに何も斯も自分では要領を得た返事しなかつた。

それでも、私は、一昨日雨模樣の鬱陶しい晩方の此の街にかへつて來て、こゝの露地を覗いて見た時とちがひ、もう此處にはゐないと思つてゐた母親に偶然また會つたので、さながら女自身に會つたと同じやうな喜びを感じたのであつた。

「今日は死んだ息子の命日どすよつて、ちよつとお墓詣りに來たついでにこのお婆さんとこへもお寄りましたのです。」といつてゐる。

「さうですか、今日はちやうどお寺詣りに好い彼岸びよりだ。私も一緒にまゐつてもいゝな。」と、私はひとりごとのや

うにいつたが、母親には又會つて話す機會もあるだらうと思つて、その時はそのまゝ家主の老婦

そして女に、會はうと思へば、どこかへ行つて知らしさへすれば會へるのだが、それではやつぱり詰らないので[illegible]れから一二度旅館から電話で話したことがあつたが、紀州の方の山から歸つてきた。この間おかあはんにも先の家で一寸逢つた。此處へ來てもらひたい、來ないか、と云つたけれど、そのうち都合して行きますと云つたきり、向うから電話を掛けてくるやうなこともなく、毎時こちらの云ふことを柳に風のやうに受け流してゐるやうであつた。後には、帳場に近い處で、女中や番頭などの耳に入るのが厭で、外の自働電話にいつて呼び出したりしたこともあつたが、いつも返事は同じことで少しも要領を得なかつた。何だか、池の水の中にでも泳いでゐる美しい金魚が何ぞのやうに、餘り遠くへ逃げもせず、すぐにも手に捕まりさうで、さう容易に捉まらないやうな心地のするのがその女であつた。

どちらにしても纏つた金を幾らか調べてからでなければ、たとひ會つてみたところで、今までのとほりであると思つて、格別逢はうともせず、たゞ、籠の中に飼はれてゐる鳥のやうに、滅多に、番をしてゐないからとて、居なくなることあるまいと、常に心には闘りながら強ゐて安心して、せめて同じ土地の、しかも女のゐる處とは目と鼻との近い處にゐるといふのが滿足であつた。そして、夏の前居た、女の家の露地の中が何となく戀しくつて、宿からは近い處ではあるしするので、時折り階下の深切さうな老婦人の許を訪ねて往つて、玄關先きで話して歸ることがあつた。家主の老婦人は、

「あれから姉さんにお會ひいたしまへんのどすか？」といつて訊いてくれるのであつた。

「えゝ、まだ逢ひません。」といふと、

「さうどすか。」と、老婦人は呆れるやうにいつて、「何であんたはんに會はんのどつしやろよあ。こゝで、私の處で一寸お會ひやしたら宜しいがな。」と、同情するやうにいつてくれるので、私は、その老婦人には、夏の前その二階がりの女の處に一ケ月あまり居る時分にも話したことのなかつた、女との長い間の入譯を打開けて愚痴まじりに若い[illegible]ともあつた。[illegible]一二度出會つたこと[illegible]あつた。彼女は、一寸ここまで[illegible]たのに[illegible]に立寄つた[illegible]

ふやうな樣子であつた。私は母子の言葉を信じて、無論もうその二階には八月以來ゐないのだが、娘の奉公してゐる處がそこから近いので、そんなにして、すぐ隣家へでも行くやうにして會いに來た足ついでに、以前厄介になつてゐた此の老婦人の處へも立寄るのだと思つてゐた。

「あんたはんの此の間おいひやしたこと、あの娘に話してみましたら、あの娘のいふのには、あんたはんが又上京の方へおいでやしたが、一遍はなしに寄せてもらひます云ふてゐました。」母親は、私が家を持つから、そこへ來てもらひたいといふ話を、顏を見るたびに云ふと、そんな返事をしてゐた。

その間に月が變つて十月になり長い間降りつゞいてゐた秋雨が霽れると、古都の風物は日に〳〵色を增して美しく錆びてゆくのが冴かに眼に見えた。それとゝもに。街の灯の色は夜每〳〵に明麗になつてきて、まして瀟洒とした邸町の宵などを歩いてゐると、暑くも寒くもない快適な夜氣の肌觸りは、そゞろに人の心を唆つて、丁度近松の中の、戀と小袖は一模樣、身に引締めて抱いて寢てこそなつかしいといふことが思はれて、どうかして一と目なりとも姿が見たいと思つて、私は折々女の勤めてゐる家の前を、宵暗にまぎれてそつと通つてみることもあつたが、一度も途中で出會はなかつた。

そして、秋は次第に闌けて旅寢の夜の衾を洩れる風が冷たく身にしむやうになつてくるに作れて、いつになつたら果てしの着くとも思はれない愛欲の滿たされない物足りなさに私は、ちやうど移りゆく秋の自然と同じやうに沈んだ心持に胸を鎖されてゐた。さうして一と月ばかり詰らない日を過してゐるうちに高い山に圍まれた京都の周圍には冬の襲ふてくるのも早かつた。旅館の二階の緣側に立つて遠くの西山の方を眺めると、つい此間まで麗かに秋の光の輝いてゐたそちらの方の空には、もういつしかわびしい時雨雲が夕陽古綿を千切つたやうに夕陽の蔭にじつと懸つてゐる。陰氣な冬そこから湧いてくるのである。この四五年來その事のみを思ひつゞけて、ほと〳〵思ひ疲れてしまつた私は、どうかしては女のことをなるべく思ふまいとして、いくら搔き消すやうにしても又綿々として思ひかゝつてくる女のことを胸から追ひ拂ふやうにして街の内外を歩いて、人氣のない古い寺院などに入つていつて、疲れ爛れた腦を休めるやうにしてゐ

た。

四

十月の末から私はまた一と月ばかり中國の方の田舍に歸つてゐた。心に浮かぬことがあるので田舍は少しも面白いこともなかつたが——尤も面白からうと思つて往つたのでもなかつたけれど——ことに、その年は始めて惡性の世界的流行感冒が流行つた秋のことで、自分もお多分に洩れずその風邪に罹つたが、幸ひにして四五日の輕い風で濟んだ。けれども、その年はそんな惡性の風邪が流行するほどで、例年ならば美しい小春日の續く頃に、毎日しめ〲とした冷い雨ばかり降りつゞいてゐたので、私は、京の女のことが毎日氣に懸りながらも、暫く故鄕の生まれた家に滯留してゐた。田舍でも四圍の山々が日々に紅に色づいて、そして散り落ちていつた。私は何となく、氣忙はしくなつた。その年の梅雨の頃、女の家にゐたあと、暫く田舍に往つてゐた時分にもさうであつたが、自分には、彼女と一緒にゐる處のほかは自分の滿足して住むべき世界はないやうな氣がするのであつた。

私は冷たい冬雨の降りそぼつ中をも厭はず、又田舍から京都に出て來た。そして今度は　にゐた旅館には行かず、ずつと上京の方の、氣の張らない、以前から馴染のある家に往つて滯泊することにした。そこは、先の下河原の方の意氣た都雅な家と打つて變り、堅氣一方の、陰氣な宿で、さうなくてさへヒポコンデリイのやうに常に氣の鬱いでゐる自分の症狀に對しては倍々好くないと思つたけれど、先達つて田舍に往く前に一寸女と自働電話で話した時にも、

「上京の方の氣の張らん宿にお變りやしたら、私一ぺん寄せてもらひます。」

と、女が云つてゐたので、女を宿に訪ねて來さしたいばつかりに、そこへ宿を定めたのであつた。欲しい女が思ふやうに自分の所有にならぬために、そんなに氣が鬱いでゐるせいか、その頃私は一寸したことにも直ぐ感傷的になり易くなつてゐた。田舍から出て來て宿に着いたその晩も、さうして京都に出て來てみると、暫く滯留してゐた田舍の事などが、胸に喰ひ入るやうに哀れに感じられたりして、私は、どうすることも出來ないやうな滯泊の悲哀と寂寞とに包まれながら、やうやくの事でその宿で第一の夜を明かしたのであつた。

そして明けても暮れても女の事ばかり一圖に思ひ詰めてゐると氣が苦しくなつて爲方がないので、かねてから此の秋は、見頃の時分をはづさず高雄の紅葉を見に往きたいと思つてゐると、幸ひ翌日はめづらしい朗らかな晩秋の好晴であつたので、宿にそれといひ置いて、午少し前からそつちへ遊散に出掛けていつた。時は十一月の二十四日であつた。電車のきく北野の終點まで行つて、そこから俥で洛西の郊外の方に出ると、そこらの別莊づくりの庭に立つてゐる楓葉が、美しい秋の日を浴びて眞紅に燃えてゐるのなどが目に付いた。それから仁和寺の前を通つて、古い若狹街道に沿いてさき／＼に斷續する村里を通り過ぎて、次第に深い溪に入つてゆくと、景はいろ／＼に變つて、高雄の紅葉は少し盛りを過ぎてゐたが、見物の群衆は、京から三里も離れた山の中でも雜踏してゐた。私は、高い石磴を登つて神護寺の淸洒なる境内に行き、そこの掛け茶屋に入つて食事をしたりなどして暫く休息してゐたが、碧く晴れた空には寒く澄んだ風が吹きわたつて、茶褐色にうら枯れた木々の村が、丁度小鳥の翔るやうに高い峰と峰との峽を舞ひ上がつてゆく。愛宕の山蔭に短い秋の日は次第にかげつて、そこらの茶見世から茶見世の前を、破れ三味線を彈きながら、哀れな聲を絞つて流行唄を歌ひ物を乞ふて歩く盲目婦の音調が惡く腸を斷つ。佗しい心には何處に行つても明るく樂しい處がなかつた。

五

田舍へ往つてからも二三度手紙を出して、今、惡い風邪が流行つてゐるが、變りはないかと訊ねて越したりしたが、無論何とも云つて來なかつた。京都に出てくると、その晩すぐ手紙を出して、今度はかういふ處にゐるから、一度訊ねて來てもらひたいと云つてやつたけれど、例によつて何ともいつて來ないとは思つてゐた。そして、今度の宿は、先の處とちがひ氣の張らないだけに、土地柄からいつても、何からいつても陰氣で、氣が晴れ／＼としないところから、私は部屋の中に凝乎としてゐるのが居堪らなくつて、高雄の紅葉を見にいつた翌晩祇園町の方に出て往き、夜にまぎれて女の勤めてゐる家の前をそうつと通つてみた。

と、不思議ではないか。入口の格子戶の上の處に、家に置いてゐる妓の名札が墨黑く書いて揚げてゐるのに、しかもその女の札は、もう七八年もそこに住み古してゐるので、七八人も並んで札の揚つてゐる一番筆頭であるのに、何故か、

そこの處だけ、丁度齒の脱けたやうになつてゐるではないか。察するところ、札を外してからまだ幾日も日を經ぬので、まだ名札を外すだけはづして後を揃へず、そのまゝにしてゐるのらしい。私は寒い夜風の中に釘付けにされたやうな氣持で、そこへ突立つたまゝ、

「はて、不思議だ。どうしたのだらう？」と、思つた。彼女を知つてから五年の長い間、不安に思ふ段になれば、隨分不安な譯であつた。日夜數知れぬ多くの男に名を呼ばれてゐる境涯の身であれば、商賣を廢めるからとて、一々馴染の客に斷はつて往くわけのものでもない。けれども私は、初から好い覺悟を定めて、女は私に默つて、そこから姿を消して往かないと信じてゐた。百に一つ、そんな場合がありはせぬだらうかと、遠く離れてゐて、ふと不安に襲はれることがあつても、何となく、そんなことは滅多になさゝうに思はれたのであつた。しかるに、今、まぎれる方もなく、明かに彼女の名札が取れてゐるのを見ると、近いうち此處にゐなくなつたに相違ない。籠に飼はれた小鳥と同じく容易に逃げて居なくなる氣づかひはないと思つてゐたのは、もとより此方の不覺であつた。そんなことがありはせぬか、せぬかと不安に思ひながら、今まで無かつたから、あるまいと思つてゐたら、とうとう籠の鳥はいつの間にか逃げてしまつた。

私は、そこに棒立ちになつたまゝ、幾度か自分の眼を疑つて、札の取れてゐるのが、どうぞ惡い夢であれかしと念じたが、たしかに札は取れてゐる。餘程思ひ切つて、そのまゝそこの家へ入つて行つて訊ねてみようかと思つた。彼女に自分といふ者が附いてゐるのは、此處の家でもよく知つてゐる筈である。構ひはしないだらうと思つたが、自分は、彼女と關係の出來た最初から、何處までも蔭の者になつて、そつと自分の所有にしてしまうつもりであつたので、今更、女がゐなくなつたといつて、そこの家へ訊ねて往き、自分のほかに、もつと深いふかい男があつて、その男に落籍されたのに、此方が、男は自分ひとりのやうな顔をしてゐて、裏にうらのある、そんな稼業の眞唯中に飛んだ恥を曝らすやうなことがあつてはならぬ。自分は、彼女をこそ、生命から二番めに愛してゐたけれど、それとゝもに自分の外聞をも遠慮しなければならぬ。

と、さう焦燥く歩をじつと抑へながら、急いでそこの小路を表の通りに出て來て、そこから近い、とある自働電話の中

に入つて、そこの家の番號を呼び出して訊ねてみた。いつも、その女の[illegible]
出た女衆らしい女に、こちらの名をいはず、それとなく、
「もし／＼、あなたは松井さんですか。藤村さんはお出ですか。」といつてきくと、いつでも、その松井の家の定まつた返事のやうに、女衆は、
「藤村さんは今留守です。」
といふ。これまでとても、彼女が家にゐてさへ一應はそんな返事をするのが癖なのであつたが、札が取れてゐるのでは、留守であるとは問はずとも知れてゐる。それでも、女がそこの家にゐる時分と同じやうに、いつもの「留守です。」で、返事を濟ませてゐる。勿論此方が誰であるか、知つてゐる筈もないのだが、もし知れてゐたならば、一層不愛相な返事をしたかも知れぬ。私は、ひたすら紙よりも薄い人情の冷たさを夜の冷氣とゝもに身に沁みて感じながら、重ねて委しいことを訊かうとする氣力も何も拔けてしまひ、胸の中が空洞になつたやうな心持ちで、足の踏み度も覺えず、そのまゝ悄然として電車に乘り、上京の方の宿に戻つてきた。とてもその勢ひで取つて返へし、その家に訪ねていつて、名札の取れて、もう居なくなつてしまつた事情を訪ねてみる力は失くなつてしまつたのである。そして足掛け五年の間事實死ぬほど思ひ詰めた揚句が、こんなことになつてしまつたと思ふと、何より自分といふ者が可哀さうになつて來て冬の夜の寒い電車の中にじつと腰を掛けてゐてさへ、ひとりでに悲憤の涙が湧き上がつてきた。
名札が取れて女が居なくなつたにしても、もとより何處を當てに訊ねる譯にも行かず、況してそれが他の男に落籍されてしまつたのであつたとすれば、今頃は、こちらを――もし知つてゐるとすれば――「阿呆め！」とでもいつて、好い心持になつてゐるであらう。それを思ひこれをおもひ、此の冬の寒い夜風の中を氣狂ひになつて飛び舞はつても爲方がない。今夜はこのまゝ宿に歸り、哀れな自分を勞はりながら、どうかして凝乎と寢ながら熟く考へやう。
さう思つて、宿にかへり、自分の部屋に通つて、火鉢の傍に一旦坐つて、心を落着けやうとしてみたが、とても、もつと委しい事情を訊き糺さねばそのまゝ寢られどころではない。それでその宿には電話がないので、いつも借り付けに

なつてゐる、近隣の家まで出ていつて、又彼女のゐた家へ電話を掛けてみた。すると、初はやつぱり先刻と同じことをいつてゐたが、こちらの名を明かして、實は、先刻そちらの前[illegible]て、ふと見ると、藤村の名札が取れてゐるのを見てはじめて氣がついたのであるといつて、

「留守ぢやない、もうあんたの家にはゐないんだらう。」と訊ねると、向うの女衆は、

「ほんなら一寸待つとくれやす。」といつて、暫くして今度は變つたすこし年とつた女の聲で、

「藤村さんは、もう内にゐやはりやしまへんのどつせ。」といふ。

「どうしてゐなくなつたの？だれかお客さんに引かされたの？」

「さあ。わたし、そんな事、どや、よう知りまへんけど、病氣でもう退うに引かはりましたんどつせ。」

「それで病氣で廢めて、藤村さんのおかあはんが連れて去つたの？」

「ちがひます。小父さんが來て連れていかはりました。」といふ。

小父さんが來て連れて往つた。どんな小父さんか知れたものぢやないと、思つたがそれ以上、電話で、そんな女衆などに訊いても委しいことの知られようわけもなく、又眞實の事をいつて明かす筈もないと思つて、私はそれで電話を切つてしまつた。そして、假し嘘にしても……嘘に違ひないと思ふが……病氣で廢めたといふだけのことに、せめて幾らか頼みの綱が繋がつてゐるやうな氣がして、それに心に少し勢ひが付いて、宿にとつて返へし、夜の寒さに風邪を恐れて思ひ切つて厚着になり、又祇園町へと出掛けていつた。今から二た月前の九月の末、紀州の方の旅から京都に歸つて來て、久し振りに會つたばかりの多年東京で懇親にしてゐた米雛がつい二十日ばかり前、自分も田舎に往つて流行風で臥せつてゐる時に流行感冒で敢えなく死んだことが強く胸に刻み付けられてゐるので、不幸なる自分が今又風邪にでも罹つてこのまゝ死にでもしたら、どんなに悲慘であらう。執念が殘つて、とても死にきれはせぬ。

そんなことまで考へながら又祇園町まで出て來ると、十一月末の夜に更けてゐても、廓の内はさすがにまだ宵の口のやうに明るく、多勢の[illegible]を[illegible]てゐるうへに、お茶屋を兼ねてゐる囲井の[illegible]

である。

小父さんといつても、何だか分りはせぬ。ほかの男に引かされたものを、よく耻し氣もなく、商賣してゐた女の厭めた後を探ねて來る阿呆な男と笑はれはせぬかといふ氣が先きに立つて、心が後れるのを、そんなことを耻かしいと思つてゐるやうでは、倍々自分の身一つを苦めるばかりであると思ひ直しながら、松井の入口に立つて、その夏の初、女の家にゐた頃ちよつと顏を見て、言葉も交はしたことのある、お繁といふ婆さんにお目にかゝりたいと、そこに出て來た女衆に取次ぎを賴むと、お繁といふ婆さんは、すぐ奥から出て來た。

それはもう五十を少し過ぎた女であつたが、何でも聞くところによると、もと此家の女あるじと同じく今から二三十年前にやつぱり祇園町で商賣に出てゐたことのある女で、松井の主人が運の好いのに反して、この方は運が惡かつた。そして以前朋輩であつた人間の内へ女中頭のやうな相談對手のやうにして住込んでゐるのであつた。松井の女あるじの今尙ほ一見二三十年前の此の土地で全盛を歌はれたことを偲ばしめるに反して、お繁婆さんの方は縹緻もわるく、見るから標本的い花車(やりて)のやうな顏をしてゐた。それでも話してみると、譯は割合によく解る方で、笑顏で、

「おこしやすえらいお久し振りどす。」といつて、打ち融けて挨拶をして、

「えらい端の方でお氣の毒さんどすが、今ちよつと奥が取込んでゐますよつて、こゝで失禮いたします。」と、いつて、女衆に坐蒲團を持つて來さして、私にすゝめる。

「えゝ、もう、どうぞ構はないで下さい。」と、私は小さくなつて、そこの二疊の間に差向つた。

そこで、先刻電話で聽いた女の事を改めて訊ひ糺すと、お繁は、卒直な調子で、

「お園さんはもう半月ばかり前にひどい病氣になりまして、それで引きました。」

「はあ、ひどい病氣で……」私は、さういつて、心の中ではすぐ纖細い彼女の美しく病み疲れた容姿を思ひ描きながら「この土地に長くゐると、そんな事になるだらうと思つてゐたのだ。」と、ひとり言のやうにいつて、もう、自分ながら眼には淚がにじんで來るのがわかつた。

「そして、どんな病氣でした?」靜かに訊ねた。私は、彼女のあの體質や容姿から想像て
のではあるまいかと思つた。そして、もしさうであつたならば、一入可憐で堪らないやうな氣が早まつてくるの
た。

するとお繁は默つて意味ありげに笑ひながら、私の顏を見るだけで、その病氣が何であるかと云はうとしない。それで、之は眞實は病氣ではない。病氣といふのは僞で、やつぱり旦那にでも引かされて、今頃はどこか其處らに好い氣持で納まつてゐるのだなと感疑りながら、こちらも、わざと心を取り亂さぬやうに笑ひにまぎらして、

「嘘でせう、病氣といふのは。」重ねて訊くと、

いえ、病氣はほんまどす。」といつてまだ笑つて眞相を語らうとせぬ。

「どんな病氣です?」私は、今度は、商賣柄恥しい、ひどい病氣であるのかとも思つた。

すると、お繁婆さんは笑ひながら、

「お關さん、氣狂ひになつた。」と卒直にいふ。

「へえ、氣狂ひになつた!」私は、暫らく呆然として對手の顏をじつと見詰めてゐた。

「一體どうして、そんなことになつたのですか。」

と訊くと、お繁婆さんがそれから話して聽かすところによると、先月の末か今月の初頃、彼女も、瞬く間に流行してきた流行感冒に襲はれて一時は三十九度から四十度近い發熱で心配するほどであつたが、熱は間もなく下がり、風邪も一週間くらゐで癒るにはなほつたが、すつかり熱が除れて、やうやう起き上がることが出來るやうになつた時分に、ふつと間違つたことを口に言ひ出した。初は皆なも、平常から、あんな温順しいに似ず、どうかすると、よく輕い戯談などを云つたりすることもあるので、「お關さん何にいふてはるのや。」と、笑つて、いつもの戯談かと思つてゐると、本人は飽くまでも眞劍でゐるので、これは、どうも尋常と少し様子が違つて變だなと思つてゐると、彼女は段々妙な違つたことをいふやうになつた。そうし

眼はきつと据はつたやうになつて、さらなくてさへ、やゝもすると陰鬱になりがちの顔が一層陰い顔になつた。家にゐる他の妓達は又それを面白がつて、對手になつて戯弄ふと、彼女は生眞面目な顔をしてそれに受け應へをしてゐるといふ有様である。

おしげもお可笑しさうに笑ひながら。

「そんな具合で氣の毒で見てゐられしまへんがな。ほて、もう、わたし、あんたハ、そんな詰らんことといふてお關さん戯弄らんと置いとくれやすいふて小言いふてました。」

私は、それを聽いて身に滲むやうな悲慘を感じて、じつと涙を飲み込みながら、

「ま、飛んだことになつてしまつたものですなあ。」と、あとの言葉も出ずに默つて太息を吐いてゐた。

「もう、どだい、いふことが成つてへんのどすもの。」おしげ婆さんは變なハイカラの語で言葉を顰めていふ。

そんな有様で、とてもこの先續けて商賣など出來さうにないところから、母親のほかに西京の方にゐるといふ母方の叔父にも來てもらつて、話を着けお繁さんが附添ふて管轄の警察署へ行つて、廢業の鑑札を收納して來たといふのである。

「警察へいても、お關さん眞面目な顔をして役人に怒鳴り付けるやうなことをいふもんやから、わたし、はら〳〵してました。」

私も思はず寂しい笑ひを洩らしながら

「なるほどさういふ譯ぢやあ爲様がありませんな。そして、今何處にゐるでせう。」といつて訊くと、

「さあ、その時叔父さんに伴れられて歸つたきり、何處に居るのかそれなりで一寸も音信がないさうにおす。わたしもそれから用事で大阪の方に往つてまして、昨日歸つたばかりのとこどすよつて。今日も、あんたはんから訊かれる前に、お關さん、ちよつとも音信がないなあ、どないしてはるやろいふて噂してましたのどす。」

成程叔父のあることは前から知つてゐたけれど私は何ほも、その叔父さんといふのは果して眞實の叔父さんに違ひあ

るまいかと、疑つたので念を押すやうに

「叔父さんといつて、その會旦那ぢやありませんか。こんな土地ぢや、から申しちや、何ですが、裏にうらがあるのが習はしですからな。」と、捌けた、調子で、對手の口うらを引いてみたが、お繁は言下に、

「あの人旦那ありやしません。そりや本當の叔父さんどす。」といふ。

「その叔父のゐる處は何處で、あんた知つてはゐませんか。」と訊くと、小頸を傾けるやうにして「何でも三條とか、油の小路とか聽いたやうに思ふけど、委しいことは、よう知りまへん。」と、眞實知つてゐるさうである。

「さあ、それも、わたし何處や、よう知りまへんけど。」と、小頸を傾けるやうにして「何でも三條とか、油の小路とか

私は尙ほ、もつと委しい事を、あゝもからもと訊ねたいと思つたが、家の内が急がしさうにしてゐるのと、向うが果して誠意を以つて話してくれてゐるのか、どうか半信半疑なのでいゝ加減にして出て戻らうとして、まだ立ちにくさうにしながら

「いろ〳〵有難うございました。あなたにお眼にかゝつて、樣子が一と通り分りました。」

私は、この上にも尙ほ向うの誠意を哀求するやうな心持で鄭寧にお禮をいつた。幾たび思つてみても、全く自分の生命にも換へ難い女である。その女の故ならば、いかなる屈辱を敢てしても決して厭はないと思つてゐたのである。

おしげ婆さんは、

「あゝそれからあんたはんのお手紙が來てゐるのかも知つてます。たしか二度來てたかと思つてます。前のはお園さんが自分で受取つてたしか見てゐました。後のはこゝに居らんやうになつてから來ましたよつて、私が預つて置きやした。」

といつて、彼女は奥に立つて往き、三四本の、女にあてゝ來てゐる封書を、私から越したのと一緒に持つて出てきたそれを見ると、中の一つは自分のちよつと知つてゐるある男からの文であつた。私は、これを一目みると何とも云へない嫌な氣持になつて、「ええあの人間が！」と、丁度ウロンスキイが自分の熱愛してゐるアンナの夫のカレニンの風貌を見て、

様らしい心持になつたと同じやうな氣がして、その瞬間急に、自分が長い年月をかけて寶玉の如く、
又々終生いかんともすべからざる傷物になつたやうに思はれて、がつかり失望してしまつた。そんな次第で女が居なくなつたことが自分には生命を斷たれたと同じ心地がしてゐるのに一面識のある人間とも知つてゐたのかと思ふと、私はあまりに運命の神の冷酷やら皮肉やらを悲み且つ歎かずにはゐられなかつた。しかし、それも、皆な自分の愚かゆゑである。かうした賣笑の女に戀するからは、それは有りがちの事である。西鶴も遠の昔にそれを云つてゐる。こんな事があると、知つたのを好い思ひ切り時に、いつそ此處で、之れつきり女を奇麗さつぱりと思ひ斷てしまはうか、さうすると、此の心の惱ましさを解脱することが出來てどんなに胸が透くであらう。そして直ぐにも東京へ歸つて行つて、多年女故に怠つてゐる自分の天職に親しまう。どうかしてさうなりたい。と思ひながら、私は、前に置かれたその男からの手紙を凝乎と見つめながら、封の中にどんなことを書いてあるのか、出來ることならば、封を切つて中を讀んでみたいと思つた。差出した處を見ると、何處か地方に行つてゐて、その旅先から出したものらしいから、その男も、女が氣が變になつて商賣を廢めて、この土地から消え失せたことは知らずにゐるのであらう。……私がさうして、それ等の封書に見入つてゐるので、おしげはどう思つたか、

「この人はほんの五六度知つてるだけです。私も一寸顏を見て知つてます。あれは何處のお客やつたか。」と考へるやうにして、

「たしか、お政の客やつた思ふ。去年の春からのお客どした。……かうして人さんの手紙やから、中を讀んで見るわけにもいきまへんなあ。」と、私を慰め顏に云ふ。

「いえ〳〵、なに此の手紙を見たいと思つてるわけぢやありません。……たゞお園が、叔父さんに連れられていつたきりで今何處に居るのか、私も、あなたも御存じのとほり、もう長い間心配してゐた、あの女の事ですから、是非一遍會つて、病氣の様子を見たいと思つて……」と、私は、どこへ取りつく島もないやうな氣がする。

おしげ婆さんも、さすがに同情のある調子でうなづきながら、

「えゝ〳〵、あんたはんの事は、皆なもう、よう知つてます。何處に居やはるか、此處に居らんやうになつてから、でもう半月くらゐになりますよつて。」

私は尙繰返へして、そのうちにも自然居處が知れるやうなことがあつたら、是非知らしてほしいと賴んで置いて其處を出て來た。

六

外に出ると、もう午二時を過ぎてゐるので、お茶屋へ往來う者のほかは人脚も疎らになつて、冷たい夜風の中に、通りの方を步く下駄の足音ばかりが、凍り付いた地のうへに高くひゞいてゐるばかりであつた。

そして、氣が狂つて叔父に連れられて、何處へ往つたとも分らなくなつた女の身の上が、今は可哀い、いぢらしいといふよりも、その可哀い、自分にとつては、自分が此の世に生存してゐる唯一の理由でもあり樂みであると思つてゐた女が、自分が一二度會つたことのある男と西鶴のいふ假染めの語らひをしてゐたのであつたことのみが、胸の中一杯に思ひ蔓つて、これ程愚かしいことはない。何の因果で、あの女が思ひ切れぬのであらうと自分の愚かしさを咎めつゝも、やつぱり思ひ切ることを出來ずその愚かしい苦痛に責め苛まれる思ひをしながら、迂濶〳〵とぼ〳〵と道を步いてゐた。

してそこから、祇園町の一廓をちよつと出はづれると女の先にゐた處までは直ぐなので、たとひ今はもう其處にゐなくなつたにしても、その階下の家主の老婦人は性格の美しい女性であるから、その人に會つて訊ねたならば、もしや知つてゐるかも知れないと思つて、一旦戾りかけた足を又そちらへ向きかえて、そこの暗い露路の中に入つてみたが、門は堅く締つてゐて、四邊はいづこももう寢靜まつてゐる。

「あゝ、われながら愚かしい。今時分この邊に起きてゐる家もない筈であつた。」と、心付いて、「ともかく今晩は歸つて寢て考へよう。氣が狂つたといふうへに、今晩になつて、はじめて氣が付いた譯でもない、が、知らぬうちに濟ただお、段々あとからあとからと〳〵た[illegible]つてくると、この先まだ〳〵色々な思ひをしなければならぬ、自分に[illegible]

なら、今晩といふ今晩こそ、彼女を深く思ひ切つて、彼女をはじめて知つて以來足かけ五年の間[illegible]かつた苦患を免かれて、快い睡眠を得ることが出來るのだが。……今、あんな人間から來てゐる手紙を見たのは、冷酷で皮肉と思はれる運命の神がその實深切に、自分に誡告してくれたのかも知れぬ。……それにしても、運命は餘りに皮肉で悪戯な事を爲る。」と、私は、氣ちがいになつた、憐れな彼女を愛しようとしても愛することを皮肉な手段で妨げられてゐるやうな、千萬無量の辛い思ひに胸を碎かれながら。やつと終ひ際の電車に乘つて、上京の方の宿に戻つて來た。

その夜は殆ど微睡もせずに苦しみのうちに明かして、翌日は幸ひ氣候も暖かであつたので、ゆうべ一と夜寢ずにあゝかうと考へてゐた順序に從つて、朝飯の箸を置くとそのまゝ出て往き、どこよりも先づ祇園町の裏つゞきの、例の、女が先にゐた家にいつて、階下の家主の老婦人の許を訪ねてみたが、今朝は宅にゐる筈だと思つてゐたのに、昨夜遲くのとほりやつぱり門に錠がおりてゐる。爲方なく露路の入口の、店屋で訊くと、

「お婆さんは、上京の方の親類とかに病人があるとかいふて、一週間ほど歸らんいふてお往きやして、さうどんなあ、それがもう二三日前のことどす。」といつてくれる。

私は、そこに突立ちながら三四日前。それなら何といふ殘念なことをしたであらう。京都に戻つたあの翌日高雄へ紅葉を見に行かずに、此處へ來たら、何とか女の樣子も分つたらうに。と、思つたが爲方がない。それにもう此處には三月も前から居なくなつてゐるのだから、家主のお婆さんが居たとて委しい事は分らないかも知れぬ。昨夜松井の内のおしげ婆さんの顏の端に、叔父さんといふのは、油の小路とか三條とか云つてゐた。それに、ずつと以前に女から一人の叔父は油の小路とかで悉皆屋とか糊屋とかをしてゐると聞いてゐたやうに思ふ。母親が上京の方の親類に同居して厄介になつてゐるといつたのも、其處か知らぬ。姓も彼女の姓とは異つてゐる、名も知らないが、何とかしたら分るすべもないこともあるまい。これから油の小路に往つて、悉皆屋と糊屋を一軒々々探ねて歩いてみよう。

さう決心して、そこから直ぐ油の小路に廻はつていつた。そして三條四條を中心にして、その上下を幾囘となく往き

つ戻りつして一々兩側を歩いてみたが、もとより、雲を摑むやうな話で、悉皆屋と糊屋とはないことはないが、手がゝりのあらう筈もない。そして殆ど半日以上も一つところをお百度を踏むやうにして、歩き疲れて、屈托しながら到頭一とまづ宿まで引揚げて來た。

その又翌日、無暗に探ね歩いても爲方がない。何とか好い思案はあるまいかと一日外へ出ずに考へてゐたが、暮れ方になつて、やつぱりあの先にゐた露地の中の家主の處に行つてみるのが可いやうに思はれるので、一日内にとぢ籠つてゐるよりもと思つて運動かたぐ出掛けていつたが、一週間ほど不在といひ置いていつて、まだ三四日にしかならぬのであるから老婦人はまだ歸つて居ない。相變らず門の扉には錠がおろしてある。するとその露路の中に立つてゐると、そこへ露路の入口の米屋の女房が共用水道の水を汲みに出てきたので、そのおかみは東京者で、一度も口をきいたことはなかつたが、夏の初以來、顏だけ見知つてゐたので、勿論先きでは、これが、あそこの二階にゐる女の男とでも思つてこちらよりも一層注意して見てゐたかも知　ぬ、それで、そのおかみに、

「こゝのお婆さんはお留守でせうか。」と、昨日もほかの人間に訊いてゐるのだ不在と知りつゝも、さう云つて訊ねると、おかみは、バケツを提げたまゝ、

「あの、あそこの二階にゐたお婆さんですか。」と、門の外から女のゐた二階の方を指しながら、訊き返へした。それで私は腹の中で、階下のお婆さんのことを訊ねたのだが、それを訊くのも、やつぱり階上にゐた女の母親の事を訊ねようとてゞあるから、これは、巧い具合だと思つて、

「えゝさうです。」と、いふと、

「あのお婆さんは、つい五六日前に、すぐそこの、安井の金比羅樣のあちら側にお越しになりました。」といふ。

私は、心の中で肯いて、それぢや、八月の末に此處の所帶を疊んで越つて母親も居なくなつたと云つたのは、皆なこしらへ事であつたのかと、合點しながら、さあらぬ風に、

「あゝさうですか。五六日前に變りましたか。―

「えゝ、つい此の間です。澤山に荷物を持つて、お婆さん私にも挨拶して……たけれど、今度は自分で一軒借りました。氣兼がなくなりましたからどうぞ遊びに來て下さいといふて行かれましたけれど、私もわざ〳〵行く用もありませんから、まだ往つては見ませんが、なんでもすぐ其處の横丁の通りから一寸入つた、やつぱり露路の中ださうです。」

私は、はつと胸を刺すやうに思ひ當つて、自分でも、顏から血の氣が一時に失せたかと思つた。今までは二階借りであつたけれど、今度は一軒借りきりで、氣兼がない。假ひ病氣といふに嘘はないにしても、背後に誰れか金を出す者が附いてゐるに定つてゐる。………心の中ではそんな事が驚梭の如く往來する。それを凝乎と堪えて、

「はあ、一軒借りて。………」と、私は思はずその一事に滿身の猜察力を集中しながら、獨言のやうにいつてゐると、委しい譯を知らぬおかみは、多分夏の初そこに私の姿を時々見てゐた以來、私達の關係に變りのないことゝ思つたのであらう。

「もしお出になるなら、あそこの俥屋でお訊きになると、直ぐ分ります。あそこの俥屋が荷物を運んでゆきましたから、よく知つてゐます。」

と、深切に敎へてくれたので、私は幾度も禮を繰返へしながら、露路を出て、横丁の廻り角の俥屋にいつて訊ねると、俥屋の女房がゐて、自分は行かないが、そこをどう行つて、かういつてと、委しく敎へてくれた。きけば、なるほど直ぐ近い處である。

私は、心に勇みがついて、その足で直ぐ金比羅樣の境内を北から南に突き拔けて、繪馬堂に沿ふたそこの横丁を、少し往つて更に石疊みにした小綺麗な露地の中に入つて行つて見ると、俥屋の女房は小さい家だと敎へたが、三四軒並んだ二階建の家のほかには、なるほど三軒つゞきの、小さい平家があるけれど、入口の名札に藤村といふ女の姓も名も出てゐない。それで又引返してもう一度俥屋にいつてもつと委しく訊くと、その三軒の平家の中央の家がそれだといふ。」

「あゝ、さうですか?」と、いつて、俥屋の女房には、逆らはずそのまゝ又もとの露地の方に引返へしたが、今の先き

見たところでは、その中央の家には、なるほど、まだ白木のまゝの眞新しい名札が出てゐたが、それには飯田とのみ誌じてあつた。私は不審さに小頸を傾げながらもう一度露路に入つて來てその飯田といふ名札の掲つてゐる中央の家の前に立つて、暫く考へてゐた。

あゝ讀めた！……飯田といふのは旦那の姓であらう。かうして、この旦那は、可哀さうな私とは正反對に好きな女をうまく〳〵と自分の持ち物にし了ふせて、この新らしい表札を打つたのであらう。」と、向うのその嬉しい氣の内を想像するだけ、自分は恐ろしい修羅に身を燃しながら、もう生命懸けで飽くまでも自分の惡運に突撃してゆかうとする涙ぐむやうな意地になつて來た三尺を又半分にした、やう〳〵體の這入られるだけの小さい潜戸は、まだ日も暮れぬのに、緊く閉切つて、留守かと思ふほどひつそりとしてゐる。

「もし〳〵、御免なさい。」と、二三度聲をかけると、やがて、内から、

「どなたはんどす？」といふ聲がする。たしかに母親の聲である。ぢや、此の家がそれにちがいなかつたと思ひながら、

「私です、わたしです。」と自分の名をいふと、母親はそうつと、五六寸潜戸を開けて、内から胡散さうに戸の外を覗いて見たが、そこには私が突立つてゐるので、

「あゝ、あんたはんどすか。」と、氣まづい顔をしていひながら、がらりと潜戸を開けて外に出るや否や身體で入口に立塞がるやうな恰好をして、後手にぴしやりと潜戸を閉めてしまつた。

そして五歩六歩入口を遠ざかりながら、

「あんたはん、私がこゝに來てゐるのがよう分りました。どなたにお訊きやした？……こゝは人さんのお家どすよつて。私一寸雇はれて來てゐますのどす。」といふやうなことを、辯解がましくいひつゝ、なるたけ私を家の前から遠ざけるやうに、露路を歩いて出やうとする。」

私は、つい一と月ばかり前時々會つてゐた時と打つて變つたやうなその、あまりに餘處々々しい態度に、[illegible]

さへ失望のあまり、[illegible]

「お母はん、お義さんが飛んでもない病氣になつたどし[illegible]をかけた。

するど母親ももう鼻聲になつて、

「私、あの娘にあんな病氣しられて、もう、どないしようか思ふてます。同じ病氣かて、癆咳(ロウガイ)の世話をするくらゐどうしたら、わたし何ぼか嬉しいか知れしまへん。あの娘の病氣の世話やつたら、どないに私骨が折れたかて、ちよつとも厭やしまへん。私もあの娘と一緒に死んだかて本望どすけど、あんたはん、何の因果であんな病氣になりましたか思ふて私、もう此處半月ほどの間といふもの、夜も碌に寢られやしまへんのどす。ちよつと油斷してる間にどんなことをするか知れまへんよつて。」母親は悲しい聲で立てつゞけに泣きごとをいふ。さういふ顏をよく見ると、成程娘の病氣に心痛すると思はれて、顏に血の氣は失せて眞靑である。

私は一々うなづきながら、一昨日の夜から、病氣といふことをはじめて聽いて、居處が知れないために殆ど京都中を探し歩るいてゐたことを怨みまじりに話して、

「そして、今少しは良い方なのですか、どんなです？　私も一遍樣子を見たいです。」と、いふと、母親は、それを遮ぎるやうな口吻で、

「今もう誰れにも會はしてならんとお醫者さんがいはゝりますので、何方にも會はせんようにしてゐます。仲の好い友達が氣の毒がつて、見舞ひに行きたいいふてくりやはりますのでも、みんな斷りいふてるくらゐどすよつて。あの病氣は藥も何も入らんさかい、たゞじつと靜かにしてさへ置けばえゝのやさうにおす。この二三日やつとすこし落着いて來たとこどす。」

「あゝさうですか。何にしても心配です。……そして、今ひとりで靜かに寢てゐますか。」私は、どうかして、餘處ながらにでも、そうつと樣子を見たさうにいふと、母親は、又一生懸命に捲くし立てるやうな調子で、

「ほて、今、京都に居らしまへんのどす。」

「えツ、あそこに寢てゐるんぢやないんですか。そして、何處にゐるんです?」

「違ひます。あそこは、あんたはん、餘處の金持のお婆さんがひとりで隱居しておゐやす處どす。もうお年寄りのことどすさかい、此の間からえらい病氣で六ケシい云ふて息子はん達心配してはります處へ、知つた人さんから賴まれて私が付添ひに來てますのどす。そしてあの娘は遠い處の親類に預けてしまひました。」母親がおろ〳〵聲で誠しやかにさういふので、私は心の中で、道理で、取つても付かぬ飯田といふ表札が出てゐるのである。そして、そんな精神に異狀のある、たつた一人きりの娘の傍に附き添ふてゐないで、他人の年寄りの病人に附き添ふてゐるのを不思議に思ひながら、

「遠い親類に預けた!……あんた、そして又何故傍に附いて介抱してやらないのです?」

「あんたはん、私が傍に附いて介抱してやりたうても、あの娘がそんな病氣で、たんとお金がかゝりますよつて、私が人さんの家へ雇はれていてでも少しくらゐのお錢を儲けんことにはどもならしまへんがな。」母親は泣くやうにいふ。

私はつく〳〵と彼等母子の者の世にも薄命の者であることを思ひながら、眉を顰めるやうにして、

「あんた、錢を儲けなければならないなんて、それは何とか出來るぢやありませんか。あんた唯だ一人きりの大切な娘がそんな一通りならぬ病氣をしてゐるのに、傍に附いてゐて介抱してやらないといふことがありますか。」と小言をいふやうにいふと、

母親は、少し顏を和げて、

「えゝ、私も附いてゐてやりたいは山々どすけど、今いふとほり、もう醫者に見せることも入らん、藥も飮まいでもえゝ、たゞ靜かにして居りさへすりや好えのやさうにおすさかい、親類のおかみさんが、お母はん、もうちよつとも心配することはない、確かに癒してあげますよつて、安心しといでやすいふてくりやはりますので、そこへ委せてあります。」

「遠い親類で、どこです?」

さういつて訊ねても、母親ははつきり何處といふことをいはずに、たゞ、

「ずつと遠いとこどす。田舍の方どす。」といふ。

「田舍て、どこの田舍です？お母はん、あなたにも、あんなにいふて居つたぢやありませんか、私と一所に家を持つて、お幾さんが勤めるまで待つてゐませうつて。そんな病氣をなぜ私に知らしてくれなかつたのです。」

私が、怨言まじりに心配して訊くので、母親も返事を否む譯にも行かず、折り〱考へるやうにしながら、「あんたはんにも一遍相談したい思ひましたけど、さうして居られしまへんがな、そんな病氣どすよつて、田舍といふのは京から二三里離れたお百姓の家どす。私の弟の家どすさかい、そこの嫁はんが、ほん親切にしてくりやはりますよつて。」

「二三里の田舍ぢや、あんまり遠い家でもありません。」

「私も、二三日前に一寸行つて來たきり、此方の御隱居さんが病院に入らうかどうしようかいふてはりますくらゐで、少しも手が引けませんよつて、一遍あとの樣子を見に行かんならん思ふてもまだ、あんたはんよう往かれしまへんがな。私も、あんたはんがお出でやしたんで、今家を默つて出て來ましたよつて、早う去なんと、年寄りの病人さんが、用事があるといけまへんさかい……」

母親は鼻聲で、あつちも此方も心のせくやうに云ふ。私は一層同情に堪えない心持で、

「いくら、あんた、親類に預けて安心だといつて、一人の親が一人の娘の病氣の世話をしないで、餘處の他人の介抱に雇はれてゐるといふことがあるものですか。まあ、今此處で委しい話も出來ませんから、何とか繰合して暇ができたら、お母はん一遍今度の私の宿まで來て下さい。そして、もつとくわしい病氣の樣子も訊きたいし、色々な御相談もしませう。」

さういつて、宿の名と處とをくわしく敎へると、母親は少し考へるやうにして、明日はちよつと都合が惡くてゆけないから明後日はきつと訪ねて行きますといふ。その約束を堅めて、

「あんたはんも又風邪ひかんやうに早う往んでお休みやす。」

「お母はんも餘り心配せんと。そのうへ自分が又患つたら困りますよ。」

挨拶を交はして、そのまゝそこで立ち別れた。日はもう、とつぷり暮れて、寒い〳〵乾いた夕風が[illegible]
く吹いてゐた。

七

母親の居處が知れて、まづ一と安心はしたものゝ、露地の出口の女房のはなしでは、つい五六日前に先の二階借りの處から引移つて行つたといふ。それを母子の者は何故私に對して隠してゐたか、考へて見ると水臭い爲打ちである。それに先刻飯田と表札を打つた家の潜り戸を開けて母親が中から出て來ながら、丁度此方が押入つてゆかうとするのを先括りをして入れまいとでもするやうな樣子をしたのが疑つてみればみるほど變である。まあ、しかし、そんなことを悪強く根問ひせぬ方が美しくつていゝ、委細は明後日宿へ訪ねて來た時に、よく解るやうに、なんなりと話してみよう。と、それからそれへと、疑つてみたり、又思ひなほして安心してみたりしながら宿へ歸つて來た。

それから中一日置いて、約束の明後日になつて、今に來るかくるかと一日どこへも出ず晩まで待つてゐたけれど母親は訪ねて來ないので、たうとう待ちあぐねて、日暮れ方に又此方からそこまで出掛けて往つてみた。と、一昨日見た飯田と誌した表札は取りはづしてしまつて、相變らず潜戸は寂然と閉まつてゐる。やゝ暫くそのまゝそこに佇んで思案をしてゐると、すぐ左隣りの二十七八のおかみさんが、入口から顔を出して、

「お隣りはもうお留守どつせ。」といふ。

「あゝ、さうですか。もうお留守で、誰れもゐないのですか。」と重ねて訊くと、

「えゝ、私どや、よう知りまへんけど、何でも病人さんが、えらい惡うて入院しやはりますとかいふて、お婆さんも昨日附いて行かはりまして、今何方もゐやはりやしまへん。何や知らん、お婆さん此の二三日えらい忙しさうにいふてはりました。」といふ。

私は、何だか狐につまゝれたやうで、茫然としてゐたが、さういへば、母親が一昨日話してゐた隠居のお婆さんが入院したといふのか[illegible]と思ひながら、[illegible]そこを立ち去りかねて、一二度表から潜り戸を引張つてみたり、暫く[illegible]

硝子の障子の隙から家の中を窺いてみようとしたけれど、隣家の女房が見てゐるので、そのまゝ引返へして露地を出て來た。そして群疑は叉雲の如く湧き上つた。けれども、母親のいつたやうに附き添ふてゐる隱居の婆さんと、自分の娘と二人の病人を持つてゐるのが眞實ならば、急しい道理である。今日は私を訪ねるといふ約束が一日二日延びても無理はないと、また思ひ直して、悄然として宿の方に戻つてきた。

　その翌日、たしかに當てにはならぬが、もしか今日は來はせぬかと、又一日外へ出ぬやうにして心待ち待ちにながら、不安と疑ひとに惱まされて籠込んでゐると、三時頃になつて、宿の者が、お年寄りの御婦人の方がお見えになりましたと知らして來たので、たうとう來たなと、すぐ通してくれるやうにいつて待つてゐると、表の方から、長い廊下を傳ふて部屋に入つて來たのは、母親の外に今一人、嘗て見も知らぬ、人相の甚だ好くない五十餘りの、脊のひよろ高い、瘠ぎすの男である。見ると、蒼白い顔色に薄い痘斑がある。

　私はその男の様子を見ると同時に、はつとした感じが頭に閃めいた。それで、じいつと心を落着けて、態度を崩さぬやうにしながら、平らやかな顔をしてわざと鄭寧に一應の挨拶を交はしてゐると、その男は懷中から一枚の名刺を取出して私の前に差出しながら、

「私はかういふ者です。」といふ。

「あゝさうですか。」といひつゝ、それを手に取り上げて讀んでみると、「京都市何々法律事務所事務員小村何某」と仰山に書いてゐる。私は、

「あゝさうですか。」と重ねてうなづいて見せたがこんな男が二人や三人組んで來たくらゐで、びくともするのぢやないが、それにしても一昨々日の晩、母親と立ち話をして別れた時にも、自分は何處までも人情づくで、眞實母子二人の者の身を哀れに思つたのであつた。そして、哀れに思へばこそ一人愛しんで長い間盡してゐたのでもある。それゆゑ假ひ精神に異狀を來して居ようが氣狂ひであらうが、あんな纖美しい女が狂人になつてゐるとすれば、そんな病人になつたからといつて、今更棄てるどころか、一層可愛い。いかなる困難を排しても女を自分の手中の物にして、病氣をも癒

してやらねばならぬと思つてゐるのに、もし、自分の此の體たらくを見知つてゐる者があつて、自分を痴愚とも醉狂ともいはヾ云へ、自分ながら感心するほどの眞實を傾け盡して女の事を思つてゐるのに、斯樣な男を同伴して來る母親の心が怨めしい。何故自分のこの胸の内が母親には分らぬのであらう。自分一人で來て打融けた談合をしようとせずに、慘めに訊くまでもなくもう底意は明かに見えてゐる。その母親の心が、もうすつかり私と絶縁してゐるといふことが、私の胸に打擊を與へた。

それを思ひながら、私は默り込んでゐると、その男は、

「僕は、此の藤村の親類の者に依賴せられて今日來たのだが、君がこの藤村の娘を大變脅迫したゝめに、精神に異狀を來したといつて、ひどく立腹をして居る。それで、君がどうしても女が欲しいなら、錢を五百何十圓出してもらはねばならん。」と、横柄な調子でいふ。

私は、それを聽くと、もう、むら〳〵となつた。そして、腹の中で、「何を吐かしやあがる。盜人猛々しいとは、その言ひ分である。」と、思つたが、それは凝乎と抑へて口には出さず、

「はあ、私が藤村の娘を脅迫したゝめに精神に異狀を來したといふのですか。………尙ほ、女が欲しいようなら、錢を五百何十圓出せ？私にはよく合點がゆかぬ。」と、言葉は、なるべく靜にしながら、屹となつて問ひ返した。

するとその男は、

「自分はたヾ賴まれたので、委しい譯は知らんが、君が當人をひどく嚇かしたのが原因で氣が狂つたさうぢやないか。その爲めに親類一同の者が大變君を怨んでゐる。」と、頭から押被せようとする。

それを聽いて私は、餘りの腹立たしさに顏が痙攣するかと思ふほど硬くなつたのを、強ゐて笑いながら、

「戲談をいつてゐる！」と、語氣を強めて吐き出すやうに云つた。「なるほど今年の一月以來、……これまで、もう何年といふ長い年月の間、私の方から散々盡して心配してゐることが、いつまで經つても少しも埒があかぬので、一層と[illegible]たつてゐるかと、自分[illegible]

勿論、あんな商賣をしてゐる女に此ほど錢を入れ揚げた[illegible]業の女にしても、たゞ無闇に男を騙して金を捲上げさへすれば可いといふ譯のものでもありますまい。私がこの[illegible]村の娘に對して爲たことを最初からずつとお話をすると斯うなのです。まあ聽いて下さい。」

と、いつて、對手が妙に生嚙りの法律口調で話しかけてくるのを、此方は、わざと捌けた傳法な口の利き様になつて、四五年前からの女との經緯を、その男には、口を挿入れる隙もないくらゐに、一時間ばかり、まるで小說の筋でも話して聽かすやうに、ところ〴〵惚氣まで交へて、立てつゞけに話してきかせた。私の顏は熱して、頰には紅が潮してきた。

するとその男は、段々私の話に釣込まれてしまひ、初めの變に四角張つてゐた樣子はいつか次第に打ち融けて、私の話が惚氣ばなしのやうになつて來ると、堪らず噴き出しながら、

「君は女に甘い。君は下手だ。そんな君、女にたゞ遠方から金を送るといふことがあるものか。さういふ時には君が自分で金を持つて京都に來て、さあ、金はこゝに用意して有る、廢めて自分の方に來るかどうするかと向うの腹を確めて、此方のいふ事を聽くなら、金を出して遣らうといふ調子で行かにや駄目ぢや。」と意見をするやうにいつて、笑つてゐる。

私は又、半ばはわざとさうして見せるところもあつたが、男が笑つてゐるのを見て、怫然となり、飽くまでも眞劍な調子で、

「いや、笑ひ事ぢやありません。又惚氣を云ふつもりでもありません。他人から見れば馬鹿と見えるくらゐ、凡そそれほどまでには私は、相手を信じ切つて盡して來たことをお話しするのです。惚氣を聽かすやうですが、それも私達の間がそれほどまでに打ち融けて居つたことを說明してゐるのです。それにも係はらず、……」

と、尙ほ後を繼がうとすると、その男は、一層笑ひ出して、

「いや、君は馬鹿だ。はゝゝ君、出てゐる女は君、君、一人だけが客ぢやない、ほかにも多勢そんな男があるもの……」

と笑ひ消してしまふ。

母親も傍から口を出して、

「世話になつた人はあんたはんばかりやおへん。まだ〳〵もつと他に、いふに云へんお世話になつたお人がありますのどす。」と、その男にも聽いてくれといふやうにいふ。

「うむ、そりやさうやろとも。」その男は尤もといふやうにうなづいてゐる。

私は、それを不快に思ひながら聞いてゐたが、

「そりや、私のほかに、もつと世話になつてゐた男があるかも知れない。何も自分一人が色男のつもりでゐた譯じやないが、自分も此の年になつて、女に引掛つたのは、これが初めてぢやない。隨分女の苦勞は東京にゐて度々して來てゐるんだ。しかし今度のやうな御念の入つた騙され方をしたのは初めてだ。それに何ぞや、私が蕩かしたゝめに氣が狂つたなぞと、聞いて呆れる。それどころぢやない、私の方で彼の女の事を思ひ詰めて患はぬが不思議なくらゐに自分でも思つてゐるのです。私が蕩かしたゝめにそんな病氣になつたといふ苦情があるなら私の方で悅んで引取つて癒してやりませう。しかし、先刻のお話で錢を五百圓出せといふのはどういふ譯です？」

などと、その男は又うなづいて、妙な東京辯を交へながら、

「うむ、それや君の心持も私にはよう解つてゐる。だから、病氣になつた事については、情狀を酌量して、どうしてくれとは云はぬから、女の事は諦めてもらひたい。それでも、どうしても君の方で自分の方へ連れて來たいといふなら、五百五十圓か、それだけの金を君の方から出してもらはねばならん。その錢が出來るか。」

きつぱり、さういふと、その男は又うなづいて、

人を馬鹿扱ひにして宥めるやうな、又足許を見透して輕蔑したやうなことをいふ。私は、情狀を酌量するもあつたものではないと心の中でその淺薄な言ひ草を腹を立てるよりも笑ひながら、

「へえ、五百何十圓！それはどうした金です？」と訊き返しながら、今まで散々人を騙して金を搾れるだけ搾つて置きながら――尤も本人は何にも知らずにゐるのかも知れぬが――何處まで蟲の好いことを云ふと思つた。

すると、母親は又昂奮した調子で傍から口を出して、

「その金はどうした金で、あんたはん、まだ松井さんにあの娘の借金がおすおな。あんたはん京都におゐやした時に、何度もあの娘に訊いておゐやしたやおへんか、まだたんとの借金 した。その金を返さんことには、あんたはん松井さん て、あの娘を廢めさしてくりやはりやしまへんがな。」眞顔でいふ。

「その借金を五百五十圓今度親類から出してもらつたのだ。」傍の男が後を受取つて云ふ。

私には、どうも、はつきり腑に落ちぬ。

「へえ？……しかし、此の間私が松井へ行つて、おしげさんに會つて訊いた時には、そんなに借金はもうなさゝうな口振りであつたが。」

「あの人何も知らはりやしまへん。無いどころか、まだ仰山あつて、あの娘はそんな病氣になる……親一人、子ひとりの私の身になつたら、あんたはん、泣くに泣かりやしまへんがな。それで南山城の舊い親類に頼んで、證文書いて、それだけの金を今度貸してもらうたのどす。母親は、傍の男にも訴へ顔にいふ。」

私は、默つてそれを聽いてゐたが、成程彼女達の先祖はもと府下の南山城の大河原といふ處であつたとは、自分が女を知つて間もない時分から聞いてゐることであつた。その大河原といふは關西線の木津川の溪流に臨んだ、山間の一驛で、その邊の山水は私の夙に最も好んでゐる處で、自分の愛する女の先祖の地が、あんな景色の好い處であるかと思ふと、一層その邊の風景が懷しい物に思はれてゐたのであつた。そして女の祖父に當る人間が、彼女の父親の弟分にして、も一人他人の子を養子にしてゐたが、祖父が死に、今からざつと三十年も前に父親が一家を擧げて京都に移つて來る時分に、所有してゐた山林田畑をその義弟の保監に任して置くと、彼はその財産を全部失くしてしまひ、自分に伊賀の上野在の農家に養子に行つて、尚ほ存命である。ほかに兄弟とてなかつた父方の親類といへば云はれるのは其處きりで、血こそ繋がつてゐないが今でも親類づき合ひをしてゐるのであつた。……それだけの事は度々母子の者から聽かされて自分も知つてゐるが、その他に南山城に、不斷親しい往來をしないでゐて、突然金を貸してくれるやうな處が[illegible]うに思へぬ。

「へえ?……そんな親類があるのですか。伊賀の上野にはあると、あなた方から私もかねて聞いてゐたが。」と私
しさうにいふと、母親は、引つ手繰るやうな調子で、
「あんたはん、そんな委しい事知らはりやしまへん。そんな親類ありますがな。」といふ。
「へえ?何といふ親類です?やつぱり大河原の?」と重ねて訊くと、傍の男は、又それを受取つて、
「自分で、藤村の親類で、やつぱり藤村利平だといふ者だといふとつた。その人間がわざわざ私の處に來て依頼して歸つた。」
「あんたはん、あんな遠い處からその事で出て來てくれたのどす。」二人は調子の合つたことをいつてゐる。

私も、心の中で、あゝいふのだから、そんな親類があるのかも知れぬと思つた。
「ぢや、私がその藤村利平といふ人に一應會つて話しませう。」
「いや、もう此の間一寸來て、すぐ歸つてしまうた。」といつてしまふ。

總は、どちらのいひ分も要領を得ずにそんな取り留めのない話になつたが、私の心は、どうあつても女を思ひ絕たない、女に會はなければ承知しないが腹一ぱいで、たとひ此の天地が摧けるとも女を見なければ氣が濟まぬのである。それで、たうとう三四時間も話込んでゐる内に暗くなつてしまつたので、その男は、忙しいといつて立ちさうにするのを、私は何處までも一度女に會つて、差向ひで納得するやうな話をしなければ何といつても此のまゝに濟ます譯にはゆかぬといひ張つた。

すると、母親もその男も遲くなつて心が急くの兩方で、
「そやから、病氣さへ良うなつたら、あんたはんにも會はせますいふてるやおまへんか。」
「きつと會はせますな。」
といふことにして、二人は歸つた。

此の間母親と一緒に來た小村といふ男が、十日か十五日經つたら會はせませうと受合つたので、自分もそれで幾らか安心して、なるべく他の事に氣をまぎらすやうに努めながら、その十日間の早く立つのを待つてゐた。そして約束の十日が過ぎると、もうそのことばかりが考へられて心が急くので、宿から餘り遠くない處と聞いてゐた、その小村の家を訪ねて往つて、此の間母親と一緒に來た時に聽き殘した、もつと委しい事をあれ是れと訊ねてみた。そして、金を出したのはやつぱり南山城の大河原字童仙房といふ處の藤村利平といふ人間であつて、その人間が、自分の事務に携はつてゐる室町竹屋町の法律事務所にわざ／＼訪ねて來て、親戚關係の藤村の娘の事を依賴していつたのである。大河原の童仙房といふ處にさういふ人間があるか、どうか自分は委しいことは知らぬが、事務所の方には四五年前に他の事件を依賴して來たことがあるので、今度のその緣故で來たのであると、いふ。

私は、それを、此の間はじめて聽いた時からもう幾度となく疑つてみた。そんな親類があつて、此度それだけの金を出してくれるくらゐならば、そも／＼あんな卑しい境涯に身を沈めない前に泣き付いて行く筈である。けれども、さういふ親類があるといふから、或はさうかも知れぬ。そして、

「もう、あれから暫く經つたから、病氣も大分良くなつたでせう。私自分で一遍往つて樣子を見て來たいと思ふんですが。」といふと、小村は口をきくよりも先きに頭振りをふつて、

「いや／＼まだなか／＼そんな處でない。母親の話ではどうも良くないらしい。」といふ。

「とにかく、それでは私が自分で往つてみませう。」といつて、女の靜養してゐるといふ山科の方の在所へ往く道順や向うの處を委しく訊ねると、小村は、君が獨りで往つたのではとても分らない、ひどく分りにくい處だといつてゐたが、それでも強ゐて此方が訊くので、山科は字小山といふ處で、大津ゆき電車の毘沙門前といふ停留場で降りて五六町いつた百姓家だといふ。姓はときくと、さあ姓は、自分も一度母親に連れられて一度行つたきりでつい氣が附かなかつたが、やつぱり藤村といつたかも知れぬといふ。

まるで雲を捉むやうな當てのないことであるが、私はそれから小村方を出て、寒い夜

つて、女に食べさすために可馴染の祇園のいづ字の壽しなどをわざ〱買ひとゝのへて三條から大津行きの電
た。小村のいつた毘沙門前の停車場といふのは大津街道の追分からすこし行くと直ぐなので、そこで電車を降りて、踏切番をしてゐる女に小山といふ處へ行くのはどう往つたらよいかと訊ねると、女は、合點のいかぬやうに、

「小山はこゝから五六町やきゝまへんなあ。あこに見えるのが小山どすよつて、一里もつとおすやろ。」といつて指す方を見ると、田圃の向うの方の逢阪山の峰つゞきにあたる高い山の麓の方に冬の日を浴びて人家の散ばつてゐる村里がある。私は、あそこまでは大變だと思ひながら、

「さうですか、毘沙門前の停留場を降りてすぐ五六町ときいたのですが。」と、私は繰返して獨言を云つてみたが、踏切り番の女は、たゞ

「ちがひますやろ。」

とばかりで爲方がない。そして、自分ながら阿呆な訊ね樣だと思つたが、もし京都から斯々の風體の者で病氣の靜養に來てゐる者が此の邊の農家に見當らないであらうかと問ふてみたが、それもやつぱり、

「さあ、氣が付きまへんなあ。」で、どうすることも出來ない。

爲方がないから、私はそこから大津往來街道の方に出て、京都から携へてきた壽しの折詰と水菓子の籠とを持ち扱ひながら、雲を捉むやうなことを云つては、折々立ち止まつてそこらの人間に心當りをいつて問ひ〱元氣を出して向うの山裾の小山の字まで探ねて往つた。十二月の初旬の頃でところ〴〵薄陽の射してゐる陰氣な空から、ちらり〱雪花が落ちて來た。それでも私は兩手に重い物を下げてゐるのでじつとり肌に汗をかきながら道を急いで、寂れた街道を通りぬけて、菜圃の間を横切つたり、藪垣の脇を通つたりして、遠くから見えてゐた、山裾の小山の部落まで來て、そこから中の人家について訊ねたが、さういふ心當りは何處にもなかつた。それでも俄に諦めないで、こゝから又引返へして、殆ど、山科の部落といふ部落を、ちら〱粉雪の降つてゐるにもかゝはらず私は身體中汗になつて、足が棒のやうになるまで探ね廻はつたが、もとより住所番地姓名を明確に知つてゐる譯でもないので遂に何處にもそんな心當りはな

く、在所の村々が暗くなりかけてから爲方なく、斷念して、失望しながら歸路についた。
あとで小村といふ男に會つてそのことを話すと、彼は「一人往つたのでは、とても分らん。」といつてゐたが、母親が近いうちに又その話で來ることになつてゐるから來てくれといふので、少しは好い話をするかと思つて、樂んでその日に往くと、母親の調子は此の前會つた時より一層險惡になつて、此方が、女に未練があるので、どこまでも下手に優しくして物をいふと、彼女は、理詰めになつて來ると、終には私に向つて散々ばら惡態を吐いた。

そして、山科に娘を預けたといふのは、嘘であらうといふと、もう、そんな處に居るものか、遠くの親類が引取つたとか、又かういへば、私が東京へ歸つて行くとでも思つたか、世話をする人が家内にするといつて東京へ連れていつたなどといろんなことをいつてゐた。たしかに南山城に行つてゐるとも思へないが、母親が、毎時よくいふとほりだとすれば、或はさうかも知れぬ。あの女が、自分の索り求めえられる世界から外へ身を隱した、もう、とても何うしても會ふことも見ることも出來ぬと思へば、自分は生きてゐる心地はせぬ。そんな思ひをして毎日じつとして踠いでばかりゐるよりは、當てのないことでも、往つて探してみる方がいくらか氣を慰めると思つて、私は、十二月のもう二十九日といふ日に、わざ〳〵そちらの方へ出掛けていつた。木津で、名古屋行きに汽車を乘換へると、車内は何となく年末らしい氣分のする旅行者が多勢乘つてゐる。一體木津川の溪谷に沿ふた、そこら邊の汽車からの眺望は夙に私の好きな處なので、私は、人に話すことの出來ないが、しかし、自分の生きてゐる殆ど唯一の事情の縺れから、堪えがたい憂ひを胸に包みながら、其等の旅客に交つて腰を掛けながら、せめても自分の好める窓外の冬景色に眼を慰めてゐた。車室がスチームに暖められてゐるせいか、冬枯れた窓外の山も野も見るから暖さうな靜かな冬の陽に浴して、溪流に臨んだ雜木林の山には茜色の日影が澱んで、美しく澄んだ空の表にその山の姿が、はつきり浮いてゐる。間もなく志す大河原驛に來て私は下車した。

かねて南山城は大河原村の字童仙房といふ處の親類に引取られてゐると聽いてゐたので、大河原の驛に下車すると、そこから村里まで歩いて、村役場に就いて、先づ親類といふ人間の姓名をいつて、戸籍簿を調べてもらつたが、村役

は、「そんな名前の人は心當りがありませんが。」といつて、帳簿を私に見せてくれた[illegible]
大河原村の内であつても、こゝから車馬も通はぬ險惡な山路を二三里も奥へ入つて行かねばならぬといふ[illegible]込んだ[illegible]
山路を入つていつても童仙房といふ處にそんな人間がないならば無益なことである。
そして、そんな姓名は此の大河原村にはない。それと同じ姓は、此の隣村の何がし村の聞き違へではないか その村
には藤村といふ姓が多いといふ。しかしその村もやつぱり鷲峰山といふ高い山の麓になつてゐるので、そこまで入つて
行くには、どちらからいつても困難であるが、まだ此處から行くよりも、こゝから三つめの停車場の加茂から入つて行
つた方がいゝが、それでも五六里の道である。そちらからならば伸が通ふかも知れぬといつて教へてくれた。
大河原といふことは、今度の場合に限らずこれまでも度々母親の口から聞いてゐるので、そんな人間が實存するなら
大河原にちがひはなからうと思つたが、あの連中の云ふことには、どんな虚構があるかも知れぬ、もしや、その隣村で
はあるまいかと思案して、こゝまで乘り掛つたついでに、何處までも追究せずにはゐられない氣がするので、私はそこ
まで探ね入つて行く決心をした。南山城の相樂郡といへば殆ど山ばかりの村である。そこに峙つてゐる鷲峰山は高標は
やうやく三千尺に過ぎないが、岩絶壁を以つて削り立つてゐるので、昔、役の小角が開創したといはれてゐる近畿の靈
場の一つである。その麓を繞つて、殆ど外界と交通を絶つたやうな別天地が開けてゐるのである。
私は此の寒空にそこまで入つて行くことの容易ならぬことを思つて、幾度か躊躇して、長い太息を吐いたが、女がも
しその深い山の中に行つてゐるとしたら、自分もそこまで入つてゆかねば會ふことも見ることも出來ぬのであると思ふ
と、それを中止するのも何だか心殘りである。さう思つて、大河原驛から又笠置、加茂と三つ手前の驛まで引返へして
戻つた。そして、加茂驛に下車して停車場の出口でそこに客待ちをしながら正月のお飾りをこしらへてゐた二三人の車
夫に、「[illegible]まで、これから行つてくれぬかといふと、彼等は、呆れた顔をして、笑ひながら、
と、一口いつたきりで、頭を横に振つて對手にならうとせぬ。猶ほよく訊ねると、[illegible]分
[illegible]かない[illegible]ならば行くといふ。

私は、思案に暮れて暫くそこに突立つて考へてゐたがさうかといつて、斷念する氣にはならぬので、必ず行くといふ決心はなかつたが爲方なく驛路の、長い街つゞきを向うへ〳〵と何處までも歩いて行つた。やがて小道を行くと、街道はひとりでに高い米津川の堤に上がつていつた。米津川も先きの大河原驛あたりから、こゝまで下つて來ると、汪洋とした趣を備へて、川幅が廣くなつてゐる。鷲峰山下に通ふ街道は、そこに架した長い板橋を彼方に渡つてゆくのである。私は、ゆかうかゆくまいかと思ふよりも行けるか、どうか、を氣づかひながら、ともかくその長い板橋を向うに渡つていつた。それでも、なか〳〵交通が頻繁だと思はれて、相應に人が往來してゐる。私は長い橋の中ほどに佇んで川の行方を眺めると、かなり嶮岨な峰と峰とが襟を重ねたやうに重疊してゐる。時によつては好い景色とも見られるであ[illegible]午后から何だか、寒さが増して陰氣な空模樣に變つたと思つてゐたら、雪花がちら〳〵散つて來た。私は、長[illegible]になつて空を見上げながら、「この空模樣で、膝を沒する泥濘道では、とても覺束ない。」と又思案をしたが、と[illegible]に沿つて尚ほ歩いてゐると、そこへ後からがら〳〵空車を挽いた若い男の荷馬車がやつて來た。私はそ[illegible]そして[illegible]行く[illegible]何がしの村まで行かぬか。」[illegible]頼むのだといふ。[illegible]頼むと、[illegible]いひながら、[illegible]と思はれて、彼はずん〳〵行く。[illegible]行くと、粗雜な板箱の中は汚くよごれてゐる。私はそれを見て心を決しかねて、[illegible]馬を停めて置いて、道傍に有り合はした藁塚から藁を拔き取つて來て、そ[illegible]さすがにその荷車に乘り兼ねた。

「や[illegible]

してゐ」

にゐたので

貴重な腦神經[illegible]

それから二三日[illegible]

その露地に入つて行つ[illegible]

思はれて聞かない。

「ご免なさい。」

と、聲を掛けてみた。すると、ス[illegible]

調子でいふと、母親は、それでもまだ剛情を張つ[illegible]

と、飽までも白ばくれようとする。

「おかあはん、やつぱり此處にゐるんぢや[illegible]

は、「そんな名前の人は心當りがありませんが。」といつて、帳簿を私に見せてくれた。そし大河原村の内であつても、こゝから車馬も通はぬ險惡な山路を二三里も奥へ入つて行かねばならぬといふ。そんな遠い山路を入つていつても童仙房といふ處にそんな人間がないならば無益なことである。

そして、そんな姓名は此の大河原村にはない。それと同じ姓は、此の隣村の何がし村の聞き違へではないか その村には滕村といふ姓が多いといふ。しかしその村もやつぱり鷲峰山といふ高い山の麓になつてゐるので、そこまで入つて行くには、どちらからいつても困難であるが、まだ此處から行くよりも、こゝから三つめの停車場の加茂から入つて行つた方がいゝが、それでも五六里の道である。そちらからならば伜が通ふかも知れぬといつて教へてくれた。

大河原といふことは、今度の場合に限らずこれまでも度々母親の口から聞いてゐるので、そんな人間が實存するなら大河原にちがひはなからうと思つたが、あの連中の云ふことには、どんな虚構があるかも知れぬ、もしや、その隣村ではあるまいかと思案して、こゝまで乘り掛つたついでに、何處までも追究せずにはゐられない氣がするので、私はそこ

私は、思案に暮れて暫くそこに突立つて考へてゐたがさうかといつて、斷念する氣にはならぬので、必ず行くといふ決心はなかつたが爲方なく驛路の、長い街つゞきを向うへ〳〵と何處までも歩いて行つた。やがて半道も行くと、街道はひとりでに高い木津川の堤に上がつていつた。米津川も先きの大河原驛あたりから、こゝまで下つて來ると、汪洋とした趣を備へて、川幅が廣くなつてゐる。鷲峰山下に通ふ街道は、そこに架した長い板橋を彼方に渡つてゆくのである。私は、ゆかうかゆくまいかと思ふよりも行けるか、どうか、を氣づかひながら、ともかくその長い [illegible]

[illegible]

暗に昂ぶつて、胸の動悸が早鐘を撞くやうにひゞく [illegible]

やうにしてそつと拭きながら、私は心の中で、

「やつぱり初から彼處にゐたのだ。それを、あの母親の云ふことにうま〳〵と騙されて、ありもせぬ遠くの方ばかし探してゐた。今の處に變つて來る前先の時もあの露地にはもうゐないといふから、さうかと思つてゐると、やつぱり彼處にゐたのであつた。今度も亦さうであつた。一度ならず二度までも輕々と、あの母親のいふことを眞實に受けて、この貴重な腦神經を、どんなに無駄に浪費したか知れぬ。」と、口悔しさと憤りとで頭が赫となるやうである。

それから二三日の間はつとめて心をほかの事に外らして氣を慰め、神經を休めてから今度は餘程の強い決心をして又その露地に入つて行つた。そして入口の潛戸の處に立つて引張つてみたがやつぱり晝間でも中から錠を下ろしてゐると思はれて開かない。

「ご免なさい。」

と、聲を掛けてみた。すると、入口の脇の櫺子窓をそつと開けて、母親が顏を出した。

「おかあはん、やつぱり此處にゐるんぢやありませんか。」と、私は、何處までも好き女の母親に物をいふやうに優しい調子でいふと、母親は、それでもまだ剛情を張つて、「こゝは私の家と違ひます。先から、さういふてるやうな事と、飽までも白ばくれようとする。

ぬのであらう。と感慨に迫りながら行く手の方を見ると、灰色空の下に深い山又山が重疊し
「いや、もう、止さうか。」と、若い馬子にいつて、私は到頭斷念して引返へした。そして又木津川の長い板橋を渡つて
くると、雪を含んだ冷い川風が頬を斬るやうに水の面から吹いて來た。

九

それから又懊惱と失望とに毎日鬱ぎ込みながら爲すこともなく日を過してゐたが、もし京都の地にもう女がゐないとすれば、去年の春以來歸らぬ東京に一度歸つてみようかなど丶思ひながら、それもならず日を送る内一月の中旬を過ぎたある日のことであつた。陰氣に曇つた冷い空つ風の吹いてゐる日の午前、内にばかり閉籠つてゐると氣が鬱いで堪えられないので、又外に出て何の當てもなく街を歩いてゐたが、やつぱり例の、女のもとゐたあたりに何となく心が惹かれるのでそちらへ廻つて行つて、横町を歩いてゐると、向うの建仁寺の裏門の處を、母親が、こんな寒い朝早くから何處へ行つたのか深い襟卷をして此方へ歩いて來るのが遠くから眼に付いた。私はそれを一目見ると、心にうなづいて、

「この機會を何時から待つてゐたか知れぬ。」と心の中に小躍りしながら、そこの廻り角の處で何方に行くであらうかと、ほかに人通りのない寂しい裏町なので此方の板塀の陰にそつと身を忍ばせて、待つてゐると、母親はそれとは氣が付かぬらしく、その廻り角の處に來て、左に折れた。…………そこを左に折れると、先々月の末に探しあて丶行つた例の露地裏の方へ行く道順である。私は、母親をやり過して置いて、七八間も後れながら忍び〳〵蹤いてゆくと、幾つもある廻り角を曲つては段々此の間の家の方へ近づいて行く。そして、たうたう、やつぱりその露地を入つていつた。母親の姿が露地の曲り角を廻はつて見えなくなると、私は、小走りに急いで後を追ふてゆくと、母親は、やつぱり過日の三軒並んだ中央の家の潜戸を開けて入つてゆく丶ところであつた。そして入つたあとをぴたりと閉めてしまつた。

私はこちらの露地の入口の處に佇立まつて「はゝあ。」とばかりその樣子を見ながら、心の中で、「今まで言つてゐたことは何も皆な噓ばかりであつた。やつぱり女も此の家にゐるにちがひない。」と獨りでうなづいて、

「もう斯うして居處を突留めた以上は大丈夫である。これから一と思ひに踏込んでやらうか」と思つたが、いや〳〵長い

間の氣の紛れに今は精神が疲勞し切つてゐる。今すぐ、あの戸を叩いては、又仕損じることがあつては可けない。あの家の中に女が潜んでゐると知つたら安心である。敢て急ぐには及ばぬ。ゆつくり心を落着けて、精神の疲勞を回復した上で話に取り掛つても遲しとせぬ。さう思案をして、そのまゝ靜つと露地を引返へして表の通りの方へ出て來た。そして早く一應宿へ歸つて、昔日の心苦を寛ろげようと思つて電車の方に歩いてくると、去年の十二月の初から、空漠とした女の居處を探す爲めにひよつとしたら煩悶の極喪失して病死しはせぬだらうかと自分で思つてゐた、その居處を突留めた悦びやら悲しみやらが一緒に逆み上げて來て、熱い玉のやうな涙がはら／＼と兩頬に流れ落ちた。そして神經が無暗に昂ぶつて、胸の動悸が早鐘を撞くやうにひゞく。寒い外氣に觸れて頬のまはりに乾き付く涙を、道を行く人に憚るやうにしてそつと拭きながら、私は心の中で、

「やつぱり初から彼處にゐたのだ。それを、あの母親の云ふことにうま／＼と騙されて、ありもせぬ遠くの方ばかし探してゐた。今の處に變つて來る前先の時もあの露地にはもうゐないといふから、さうかと思つてゐると、やつぱり彼處にゐたのであつた。今度も亦さうであつた。一度ならず二度までも輕々と、あの母親のいふことを眞實に受けて、この貴重な腦神經を、どんなに無駄に浪費したか知れぬ。」と、口悔しさと憤りとで頭が赫となるやうである。

それから二三日の間はつとめて心をほかの事に外らして氣を慰め、神經を休めてから今度は餘程の强い決心をして又その露地に入つて行つた。そして入口の潜戸の處に立つて引張つてみたがやつぱり晝間でも中から錠を下ろしてゐると思はれて開かない。

「ご免なさい。」

と、聲を掛けてみた。すると、入口の脇の櫺子窓をそつと開けて、母親が顏を出した。

「おかあはん、やつぱり此處にゐるんぢやありませんか。」と、私は、何處までも好き女の母親に物をいふやうに優しい調子でいふと、母親は、それでもまだ剛情を張つて、「こゝは私の家と違ひます。先から、さうへ、」

と、飽までも白ばくれようとする。

私も心で勃然としながら、

「いや、もう、そんなに隱さない方が可いです。あなた方は初から此處に居たのは分つてゐるんだ。お幾さんはどうしてゐます？」

さういふと、母親もさすがに包みかねて、聲を柔げながら

「今まだ病氣が本當にようありまへんさかい。ようなつたら、あんたはんにも會はせますいふてるやおへんか。どうぞ今度また會うてやつとくれやす。」

と調子のいゝことをいふ。

「そこに居るんなら、今會つたつていゝぢやありませんか。」

「今一寸留守どすさかい。又加減がようなつたら、私の方から、あんたはんにお知らせします。もう暫くの間待つてとくれやす。」

窓の内と外とで立ちながら、そんな話をしたが、母親は入口を開けて私を家の中へ入れようとせぬ。そして終には、呆れて應答も出來ないやうな野卑な口をきいて毒づくのである。そもそも女に逢ひ初めた時分、それからつい去年の五月の頃、女の家に逗留してゐた時分に見て思つてゐた母親とは、まるで打つて變つた惡婆らしい本性を露出して來た。

それにつけても、まだ女の家にゐた頃、女が、私と二人ばかりの時、

「内のお母はん、一寸慾の深い人どすさかい。」と、一と口いつたことのあつたのを、ふと想ひ起した。それを質樸な姿さんと見たのが此方の誤りであつたか……そんなことを思つた。

私の心の中を正直に思つてみれば、もう、女の顏を見たいが一心である。ともかくも一度どうかして本人の顏が見たい。振顧つてみると、母親にこそ近頃度々會つてゐるが、本人の顏を見たのは、もう、去年の七月の初彼女の處から山の方に立つていつた、あの時見たきり七八ケ月といふもの見ないのである。流行感冒から精神に異狀を來たし一一長い間患つてゐたといふから、どんな容姿をしてゐるか、さぞ病み細つてゐるであらう。どうかして一度顏を見たいものである

る。そして出來ることなら母親に内證で、此方の胸をそつと向うに通する術もないものかと、いろ〳〵に心を砕いたが、好い方法も考へ付かぬ。毎日そこの露地口にいつて立つてゐたなら、風呂に行く時にでも會はれぬはせぬかと思つてみたが、一月から二月にかけて寒い最中のことゝて、あまりに無分別なことをして病氣にでもなつたら此の上に何ほど詫らぬ目に會はねばならぬと思ふと、そんなことも出來ぬ。そして時々露地に入つていつて入口の所に立つて家の中の様子に耳を澄ましてみるが、人がゐるのか、ゐないのか、ことりといふ音もせねば話聲も洩れぬ。そつと音のせぬやうに潜戸を引張つてみても、相變らず閉め切つてゐて動かない。入口の左手が一間の欞子窓になつてゐて、自由に手の入るだけの荒い出格子の奥に硝子戸が立つてゐて、下の方だけ擦り硝子をはめてある。そこから、手を挿入れて、試みにそうつとその硝子戸を押してみると五六寸何の事もなくすうつと開きかけたが、ふつとそれから先戸が動かなくなつたのが、どうやら誰れか内側からそれを抑へてゐるらしく思はれたので此度は二枚立つてゐる硝子戸の左手の方を反對に右手に引かうとすると、それも又抑へたらしく開かない。どうしようかと思つて一寸考へたが、一旦押す手を止めて置いて、その出窓が一尺ほどの幅になつてゐるので、此度は隣りの家の入口の方に廻つて、その横手の方から、一と押しに力を入れて、ぐつと押すと、此方の力が勝つて、硝子戸は一尺ほどすつと開いた。そして内側をふつと見ると、向うの窓の下の處に、嬉しや、彼女が纖細い手でまだ硝子戸に指を押しあてたまゝ私の方を見て、默つてにつこりとしてゐる。その顏は病人らしく蒼白いが、思つたよりも肥へて頰などが圓々としてゐる。近いころ髮を洗つたと思はれて、ばさ〳〵した髮を束ねて櫛卷にしてゐる。小綺麗なメレンスの掛蒲團をかけて置炬燵にあたりながら氣慰みに紡刺しをしてゐた處と見えて、右手にそれを持つてゐる。私は窓の横から覗きながら、

「おいくさん。」と低い調子で深い心の籠つた聲をかけた。

と、そこへ、その物音を聽き付けて、次の間から母親が襖をあけて出て來て、

「なんで、そない端の處に出てゐるのや、早うこつちお入りんか。そな處にゐるからや。」と、ひそ〳〵小言を ら、力なげに起ち上つた彼女の背後に手を添えて奥の間の方へ推し隠してしまつた。

閉めてしまつた。折角好い鹽梅に顏を見ることが出來たのに、一と口も口を利く間もなかつた。

けれども、長い間戀い焦れて、たつた一と目でもいゝから見たい／＼と思つてゐた女の顏を見ることができたので、ちやうど、長い間冬威にうら枯れてゐた灰色の草原に綠の春草が芽ぐんだやうに一點の潤ひが私の胸に蘇つてきた。將後の血色こそ好くないが、腫んだやうに圓々と肥つて、につと此方を見て笑つてゐた容姿には、決して心から私といふ者を厭ふてはゐないらしい、毒氣のないところが表はれてゐた。あゝして小綺麗なメレンス友禪の掛け布團の置炬燵にあたりながら紹刺しをしてゐた容姿が、明瞭と眼の底に膠着いて、いつまでも離れない。それにしても、あれは、何人が、あゝさして置くのであらう？よもや背後に誰れも附いてゐないで、氣樂さうにあゝしてゐられる筈がない。

そんなことを思ふと、身を煎られるやうな惱ましさに胸の動悸が跳つて、殆ど居ても起つてもゐられないほど女のことが思はれる。

そして、もう、惡性の流行感冒に罹つても構はない。もし、そんな事にでもなつたら、却つて身を棄て鉢に思ひ切つたことが出來る。生半に身を厭へばこそ心が後れるのだ。誰れか男が背後に附いてゐるにちがいないとすれば大抵夜の八時九時々分には女の家に來てゐるであらうと、その頃を見計らつて、殆ど毎夜のやうに上京の方から遠い道を電車に乘つて出て來ては露地の中に忍んで、女の櫺子の窓の下に密つと立つてゐた。そして、家の中から男の話し聲が洩れはせぬか、その男の聲が聽きたいどんなことを話してゐるであらう？と冷い黑闇の夜氣の中に暫く凝乎と佇んでゐても、家の中からは、ことりの音もせぬ。そつと例の硝子戸に觸はつてみるけれど、重い硝子戸は容易に動かない。誰れも居ない留守なのかと思つてゐると、居るにはゐると思はれて、疊の上を人の歩く足音がする。それが母親であつたら勝手が惡いと思つたが、試みに、誰れとも分らないほどに低い聲で

「今晩は／＼。……ご免なさい／＼。」

と聲をかけてみると、すつと内から硝子戸が一尺ばかり開いてそうと、白い顏を出したのは、中の電燈を後に背負つて、闇がりではあるが、たしかに彼女である。そして、凝つと外の闇の中を透かし見るやうにしてゐる。

「お幾さん。」

と、私は思はず櫺子窓に寄り添ふやうにして力の籠つた低聲で呼び掛けながら手に物を云はせて、おいで／＼をして見せると、彼女は、聲の正體が分つたので、そのまゝ默つて、急いで硝子戸を閉めてしまつた。どうすることも出來ない私はちやうど猿が樹から落ちたやうな心持になつた。向うで幾らかその氣があるから、何とか合圖くらゐのことはしてくれさうなものであるのに、少しもそんな樣子のなかつたのは、すつかり心が離れてしまつてゐるからである。さう思ふともう心に勢が脱けて、その上つゞけて寒い闇の中に佇んでゐる力がなくなり、落膽と悲憤とに呼吸も絶え／＼になりさうな胸をそつと掻き抱きながら空しく引返して戻つてくるのであつた。

それ以來硝子戸を固く釘付けにでもしたと思はれて、夜にまぎれて幾ら押してみても引いてみても開かなくなつてしまつた。相變らず出掛けていつて窓の下に佇んで家の中の物音に身體中の神經を集めて耳を澄ましても母子の話す聲さへせぬ。何とか家の中を窺いて見る方法はないかと思つて、硝子戸を仰いで見ると、下の方は磨き硝子になつてゐるが上の方は普通の硝子になつてゐるので、露地の中に闇にまぎれて、人の通るのを恐る／＼そこらに足を踏み掛けて密つと櫺子格子に取り付いて身を伸び上つて内を窺くと、表の四疊半と中の茶の間と兩用の小さい電燈を茶の間の方に引張つていつて、その下の長火鉢によりかゝりながら彼女が獨りきりで、いつかの紹刺しをしてゐるのが見える。そして身體が三分の一ばかり手前の襖に隱れてゐるので、その蔭に母親もゐるのか分らない。とにかく靜かで、たゞ紹刺しの針を運ぶ指先が動いてゐるだけである。こちらが窓に伸び上つてゐる物音でも聞えたら、つひと振向きさうであるが、それも聞えぬのか、まるで石像のやうに靜かにしてゐる。ついでに内の中の樣子を見ると、此の間は氣が附かなかつたが、すぐ取付の表の間には壁の隅に二枚折りの銀屛風を立て、上り口に向いた處には又金地の衝立などを置いてゐる。

『あんな、いろんな家具などを買込んでゐる。』と、それに何となく嫉妬を感じながら、心急き／＼尙よく見ると、内は三間と思はれて茶の間のも一つ奧が一枚襖を閉いたところから、そちらは明るく見えてゐる。そして

いてあるのが半分程見えてゐる。

私は神經が凝結したやうになつてそちらを、

ゐるが、ふかふかと綿の入つた敷布團を二三枚も重ねて敷き、そのうへに襟の處に眞白い[illegible]
布團を二枚重ねて、それをまん中からはね返して、もう寝さへすればよいやうにしてある。そちらの座敷が明るいの
で、よく見える。私はもう身體中の血が沸き返るやうである。

『旦那が來てゐるのだらうか？』と、小頸を傾けてみた。

旦那らしい者があると思つて見るさへ、何とも云へない不快な氣持がするが、いかに欲目でそんなものは無いと思はうとしても、家の中の樣子では、それがあることは確かである。果して自分の他にまだそんな者があつて、今その世話でこうなつてゐるとすれば、どう、自分の身びいきといふ立場を離れて考へても不埒である。たとひ賣女にしても、容易にそんな事が出來る譯のものではない。しかし、それは彼女の自分の意思でさうなつたものか？本人の心底をよく訊いてみなければならぬが、二三日前の夜一寸顔を覗けた時、素氣なく硝子戸を閉めたことゝ云ひ、そののちかうして硝子戸を開かなくしたことなどを思ひ合しても女には私の事にぶつゝり氣がなくなつてしまつたのでなからうか？何とかして此方の懊惱してゐる胸の中を立ち割つたやうにして見せたいものだ。母親の言つた詐りごとを眞に受けて、あの十二月の初の寒い日に、山科の在所といふ在所を、一日重い土産物などを兩手にさげて探し廻はつたこと、それから去年の暮のしかも二十九日に押迫まつて、それも母親のいふ通りを信じて、わざわざ汽車に乘つて南山城の山の中に入つて行かうとしたこと、又京都中を探し歩いたこと、そんな心勞を數へ立てゝいふ段になつたら幾らいつても盡きない。…女は硝子戸一枚隔てたすぐ眼の前にゐながら、此の心の中を通ずる術もない。

私は欄子格子からやつと手を放して地におり立ちながら、「旦那が來てゐるので、あゝして寝床までちやんと用意してあるのだらうか。それとも自分の寝床かしらぬ？」

そんな者が來てゐるなら、あゝして自分獨り默つて紹糾しをさしてゐる筈もない、すると、あれは、これから自分の寝る床であらうか。どうかして旦那が來てゐる處を突留めたい。それが、どんな人間であつても自分はこれに追隨して手を引くのではない。自分より以上深い關係の人間がほかにあらうとは思へない。……

さうして心の中は瞋恚の焔に燃えたり、又堪え難い失望のどん底に沈んでしまつたやうた心持になつたりしたにも又ふと思ひ返してみると、女は長い間の苦界から今漸く脱け出でて、あゝして靜に落着かうとしてゐるところである。それを無慘に突き崩さうとするのはみじめのやうでもある。さうかと思ふと、又自分と云ふ者を振返つてみると、どうであらう。この眞冬の夜半に寒風に身を曝して女の家の窓の下に佇みながら家へ入つて行くこともならぬ。しかも此方は彼女の爲に、長い間殆ど自分の凡ての欲求を犧牲にして出來る限りのことを仕盡して來てゐるのではないか。あゝして溫々とした寢床などをしてゐるのに、自分はどうかといへば、これから宿に歸つて冷い夜具の中に入つて寂しく寢なければならぬのである。するど、又どう考へても道理に合はない母子の勝手至極を憤らずには居られない。

「よし。どうあつても、これは此のまゝには棄てゝ置かないぞ。」と思つたが、あまりに心が疲勞してゐるので、その晩はそのまゝ悄然として宿に戻つた。

+

でも、どうかして女だけに此方の心を通じたい。亂暴なことをして、女の心が、もし、自分から離れてゐなかつたとしたならば、その爲めに却つて、自分を遠ざかつてゆくやうなことがあつてはならぬと思ひ、胸はいろんな思ひで一杯になりながらやつぱり思ひ切つたことを爲得ないでゐたが、もうさうしてゐるのに耐らなくなつて、二三日過ぎた晩同じやうに窓の下に立つてみたが、相變らず靜寂としてゐる。男が來てゐるかゐないか分らないが、來てゐれば、かうすれば聞くであらう。その女には、こんな者が附いてゐるぞと思はせようと思つて、潜戸の傍に寄つて、臆せず、二つ三つ、

「今晩は！」と高い聲を掛けた。

すると、

「どなたはんどす？」といひながら、母親が硝子戸を開けて顏を出した。

「今晩は。私です。」

た。「あゝ、あんたはんどすか。あなたはんには、もう用はない。」と、いつて、そのまゝぴしやりと硝子戸を閉めてしまつた。

さうなると、もう、耐えにこらえぬいてゐる憤怒が赫と頭に逆み上げて抑へることが出來ない。私は、わざと夜遅く近處合壁に聞えるやうに、潜戸をどん〳〵打ち叩いて、

「今晩は〳〵〳〵。」とやけに呼んだ。

すると、家の中でも默つてゐるわけにゆかず母親は又硝子戸を開けて顏を出して、少し先よりも低い聲で、

「何か用どすか」といふ。

「何か用どすかもないもんだ。用があるから呼んでゐるのです。話があるからこゝを開けて下さい。」

「開けられまへん。こゝは私の家と違ひます。」

あゝ、もう、そんな何時までも白ばくれたことをいひなさんな。幾ら口から出まかせをいつて、人を騙さうとしても、此方が正直なもんだから、一應は騙されてゐるが、騙されたと知つたゞけ餘計腹が立つ。私を一體何と思つてゐるんだ。お前さん達に、いつまでもいゝやうにされてゐる子供ぢやないんだぞ。東京でもう散々ばら膽を嘗めて來てゐる私だ。今までこゝの女に焦れてゐればこそ馬鹿にされ放題馬鹿になつてゐたが、かう見えても丹波や丹後の山の中から出て來た人間とは人が違ふんだ。」私は、自分ながら少し下品だと思つたが眞暗な夜のことではあり、人の往來もない、深く入り込んだ露路の中とて、母子に聽かすよりも、もし男でも來てゐたら、それに聽かすつもりで、そんなことを疳高い調子でいひ續けた。そしても し、男が來合せてゐるならそこへ顏を出せば丁度いゝと思つた。

すると、母親は、いつもに似ず私の劍幕が凄じいのと、近處隣りへ氣を兼ねるので、いつもの不良腐れをいひ得ないで、私をそつと宥めるやうに、

「まあ、あんたはんもこんな大きい聲たせんと置いとくれやす。あんたはんも身分のある方やおへんか。あんたはんの心は私にもよう解つてますよつて、あの娘が狂氣がなほうなつたら又會はせます。」

「病氣が好くなつたら什はせますつて、もう好くなつてゐるぢやありませんか。」私も少し聲を低くした。「私が、どんなに、あなた方二人の身の事を長い間思つて上げてゐるか、——決して恩に被せるのではないが——その事を少し思つてみたなら、假ひ今までのやうな商賣をしてゐた者でも、私に嘘が吐かれる筈がない。……いや山科のお百姓の家に出養生をさしてゐるの、いや南山城の親類が引取つたのといつて、みんな眞赤な嘘ぢやありませんか。あなたはよく金神様を信心してゐるが、何を信心してゐるのです。」私の言葉は段々優しい怨み言になつて來た。

母親がそれについて何かいはうとするのを、押被せるやうにして言ひ捲つた。

「えゝ、よう解つてますよつて、今夜はもう還らうおすさかい。又出直して來とおくれやす。あんたはんの氣の濟むやうにお話しますよつて。」

「あゝ、さうですか。それぢや又近いうちに來ますから此度、又、もう話すことはないなどと云つては承知しませんよ。」さういつて、私は、音無しく振返つて歸らうとすると、母親は、さういつた口の下から、すぐ、

「勝手にせい。此度來たら寄付けへん。」と、棄てぜりふを、私の背後に浴びせかけながら、びしやりと硝子戸を閉めた。

私は、「そら又、あのとほりの惡垂れ婆だから始末に可けない。」と心の中で慨歎しながら、後戻りをして、も一度戸を叩いて、近處へ恥しい思ひをさしてやらうかと思つたが、いつものとほり失望と悲憤との餘り息切れがするまで精神が消耗してゐるので、靜つと胸の動悸を抑へるやうにしてそのまゝ露地を出て來た。

しかし、もう、さうなると、今までのやうに、女の氣を測りかねて、差控へてばかりゐられなくなつた。何とかして家の中へ這入り込んでゆく方法はないものかと樣々に心を碎きながら、好い機の來るのを待つてゐた。すると、いつものとほり夜九時頃になつて櫺子窓の下に立つて聽くと、めづらしいゝ人が來てゐると思はれて男の話聲がする。はつと、私は胸を躍らしながら、じつと耳を澄ますと、來てゐるのは一人だけでないと思はれて女の話聲も交つてゐる。どんなことを話すかと尙ほ聽いてゐると、

「ほんならもう歸りまへうか。」と四五十ばかりの女の聲がして、

「あゝ歸りまへう。」と、それに應ずる男の聲がする。その晩は家の中も明るい。それで急いで又そつと立て伸び上がつて、ちらと家の内を覗うと、一番奥の、たしか六疊の座敷に二三人の客が丁度今立ち上がつて歸らうとするところである。私は急いで格子を滑り下りて、すぐ左手の隣の家ではまだ潜戸を閉めずにあつたので、それを幸ひと、そこの入口に身を忍ばせて上り框に腰を掛けながら、女の家から人の出てゆくのを遣り過してゐると、

「えらい御馳走さんどした。」と口々に禮をいつて、何か斯か陽氣な調子で話しながらぞろ〳〵出て來た。こちらは堅くなつて息を詰め、兩方の家の中から幽かに洩れてくる灯の明に、露地の敷石をから〳〵踏み鳴しながら歸つてゆく人影を見張つてゐると、闇がりでよく分らぬが、女はお茶屋のおかみらしく、中央に行くのが男で、背が高い。はてな、旦那ならばかうして一緒に歸つてゆく筈もなからうと思つてゐると、一番後の女と並んで、何か密々と話しながらゆくのは母親である。私は、

「あゝ、母親のやつめ、出てゆく。そこの露地の出口まで客を送り出すのであらう。きつと、すぐ歸つてくるので、潜戸を開けたまゝにしてゐるかも知れぬ。」

と、早速氣が付いて、それ等が闇がりに露地の角を曲つたのを見濟まして置いて、入口の處に來てみると、果して潜戸を開け放しにしてゐる。

私は、巧く仕て遣つたりと心にうなづきながら、つゝと内へ入りながら、中から潜戸を閉めて置いて狹い通り庭をずつと奥へ進むと、茶の間と表の間との境になつてゐる薄暗い中戸の處に、そこまで客を送り出したものと見えて女がひとりで立つてゐる。

そして、出し抜けに私が這入つて來たのを見て、

「あゝ！」と怯えたやうに中聲を發して、そのまゝそこに立ち縮んだ。

私は、いゝ氣味だといふやうに强ゐて笑ひながら、

「お愛さん、一週[illegible]に會ひたいと思つて[illegible]たのだ。」と、つとめて優しくいひつゝ、私はそのまゝ表の間へ上がつ

て、火鉢の手前にどつかと坐はつてしまつた。

女はそこらを形付けてゐたらしかつたが、もう、おづ〳〵しながら為方なく自分も上にあがつて、向うの方に膝を突きながら、

「あんたはんが今此處へ來ておくれやしたんでは、私、どない云ふてえゝかわかりまへん。」と、全く悄然としてふるえ聲にいふ。その眼は何ともいへない悲痛な色をして私を見てゐる。

私は、氣味がいゝやら、可愛いやらである。

そこへ、がら〳〵と表の潜戸の開く音がして、母親が戻つて來た。

一月號「黒髪」續篇——

（をはり）



戯曲

錢屋五兵衛父子

中村吉藏

登場人物

錢屋五兵衛
喜太郎
佐八郎
要藏
大番頭　市兵衛
人夫世話役　孫兵衛
工事頭　理兵衛
漁師頭　彦兵衛
改作方奉行　篠原監物
五兵衛妻　おまき
喜太郎妻　おきわ
娘　お千賀
佐八郎妻　おてい
要藏妻　おてつ

一、其他、番頭、丁稚、女中、人夫、漁師、牢役人、等大勢、

場處　加賀宮の腰及その附近

時　嘉永六年夏から冬

第一幕

宮の腰の錢屋本家喜太郎方の奥庭の廣場、幾棟立列んだ小錢の紋章の附いた白壁塗の倉庫の一部分が下手に見える、上手には材木小屋の一部、軒へ高い梯子をかけて、屋根の上の物見臺へ昇降する通路にしてある、伐出して運び入れた許りの栂の材木などが片隅の棕梠の樹の根元に轉がしてある。正面には遠く塀が見え、裏門が鎖されてある。その廣場の下手寄には、物干竿の間に細い繩を張り渡して、猩々緋や、紫や、青地に白く刺繍したのや、いろんな大小の形の羅紗、毛氈類、和蘭風の衣服などが虫干してある。喜太郎の娘お千賀、十八歳の、色の小白い、怜悧さうなパッチリした眼色、艶やかな黒髪を晒の手拭で塵除して、紅だすき甲斐々々しくブラッシュを片手に、羅紗の塵を掃いてゐる、二十歳前後の女中のおはな、おつたの二人も手傳うてゐる、

おはな。もうお日樣も大分かげりましたし今時分になると何時も海から善い風が吹いて來るので、日中のうだるやうな暑さは何處へ行つたかと思う位でございます。

お千賀。眞に今日も暑かつたこと、お晝寢みしても汗でべつとりだもの、でもおはなの頰邊にはちやんと疊の跡が附いてるよ、余つ程よく寢たものと見える、ホヽヽヽ、

おはな。アラ、お嬢さま、忌でございますよ、……私それ程寢像が惡くはございませんもの。（掴べたるを除する）

お千賀。（笑ひながら）自分の寢像が自分で分るか知ら。

おはな。まアお口の惡い……（話を外らせて）でも眞箇にお見事な物許りでござい……

[illegible]

おつた。（和蘭鏡を手に取つて見入りながら）まア何んて綺麗でせう、この細い手の込んだ

なるやうに思ひます、矢ツ張和蘭渡りとかいふのでございませうか？

お千賀。こゝらの物はお祖父様が長崎から仕入れておいでなさつたんだよ、隱居所の明かずの庫には、もつともつと珍らしい物が一ぱい入つてゐるさうだ、私もまだ見た事はないの……世間ではいろんなかげ口を云つて錢屋へケチを附けたがる者があるから、こんな唐物類はめつたな人には見せられないで、お父様がこゝの藏の隅へ仕舞ひ込んだ限り風に當てんのだから、ちよい／＼蟲が喰ふの、この毛氈の縁にも小い穴がいくつも明いてゐる、惜しい事ぢやアないか？

おはな。ヘエ、これを蟲に喰はせてはつまりません、余つ程價の高い物でございませうに（ブラッシュを使ひながら）世間はうるさいものでございますが、かげ口つて、何んな事を云ふのでございます？

おつた。（お千賀の方を見ながら）矢ツ張、あの、切支丹だなんて云ふのでございませう、浦の者がいつか私にそんな事を聞きますから怒り附けてやりました。

お千賀。眞に世間は恐ろしい……汝等は私と仲よしだから、こんな事を手傳うて貰ふのだよ、いろんな事を云ひふらさんやうに頼みます。

おはな。何ういたしまして……お大切な品だからお嬢様が斯うして手づからお仕末なさるのでございますもの、私共風情に手傳はせて下さるのが有難いと思ひます。

おつた。御前田家の御寶物見たやうなものでございませう。

五兵衛。（出て來る八十二歳の老人、鼈甲縁の眼鏡をかけ白髪髷の額は赤銅色に艶々してゐる、何處かに老衰の影は見えるが、歳よりはずつと若い元氣が鋭い眼の光にも見える、薩摩上布に夏羽織を引かけてゐる）ア、誰かと思つたらお前等だつたか？若い者は皆美しいの（おはな等は周章てゝ襷をはづして叩頭する）イヤ、イヤ、構はんでも善い、構はんでも善い、內輪同士だへ、、、。

お千賀。祖父様はよく御戯談許り仰つやる（一寸と甘まへながら）祖父様、これは皆貴方が長崎から仕入れてお來なされたのでございませう？珍らしい物許りだからおはなや、おつたは眼のお正月だつて云つて居ります。

五兵衛。ハヽヽヽそんなものは別に珍らしくも何んともない。海を一つ、ひよいと飛び越したら何んぼでも途端へ落ちてゐるよ、勝手放題に拾へるんだ。

お千賀。忌なお祖父様。私等が知らないからと思うてあんな事を仰るんだもの。

五兵衛。（ニコ／＼笑ひながら）私が何んで嘘を云ふもんか。……だが汝等は可愛さうなもんだな、今の若さでこれから先の長い一生をこの掌（てのひら）ほどの小島の中へちゞこまつて、何んにも知らずに死なねばならんからな、……イヤ何時でもこんな事はあるまい。その中（うち）、時世も變つて來やう。

お千賀。時世が變るつて、何うなるのでございませう？

五兵衛。（苦笑）こんな事は汝等に云うても分らんわい、女が知らんでも善い事だ。

お千賀。でも祖父さまが然う仰ると、猶更知り度うございますわ。

五兵衛。ウム、汝はなか／＼勝氣だから、男子に産れてゐたら五兵衛の立派な後繼ぎになれたか知れんが、いかな切支丹ばてれんでも、女の子を男の子にかへる事は出來ないさうだへヽヽヽ。

お千賀。（醉を舐め）祖父さまの事を切支丹だなんて、世間でかげ口を利くものがあるさうでございますよ。私、口惜しくて。

五兵衛。（頷いて）フム、そんな事も私の耳に入つて居らん事もないが、そこがこの小島一つを自分の天地だと思ふて暮らして居る世間不見共の情け無さで、自分等の智慧の届かぬ事をするものは、皆切支丹にして片附けるんだ、イヤ私もこのまゝ殷闘々々して樂隱居樣で納まつてゐたら根性骨まで世間並にちゞこまりさうだ、歳は老つてもまだ若い者のつもりだからの。

五兵衛。ところが樂隱居といふものはなか〲窮屈なものだよ、俳句や謡曲や、茶の湯……

と馬鹿々々しくなつてな、この頃は何うして一日暮らさうか待あぐんで來た、矢ツ張、私は長年、海の上で暮して寢ても醒

ても浪と一緒に動いて動いて動き通して來た體だから、何うも動くのが私の性分だと見える、何かに生きてる間は動

けん事はないぞ。

おてつ。（入來る、高島田に結つて、綺麗に扮裝した十七八歳の娘）。あの、お孃様、そろ〲刻限になりますから、お風呂に

召して、お客様をお迎へなさる支度をなされませいとの事でございます。

お千賀。キア、おてつさん、大さうなおめかし・・・私は今夜のお客様の御接伴は忌だから出やしませんよ、お風呂へは

今こゝを片附けてから行きますから、お母様でも誰でも先へ入つて下さいつて、さう云つておくれな。

おてつ。もう何方様もお濟ましになつたのでございます、こゝは私でも片附けますから、何卒行つてお入りなされませ。

お千賀。こゝは私でなければ分らないんだよ、それに今夜のお客様は私忌だからつてさう云つておくれ、お母様にもさう申上げて置いたんだもの。

五兵衛。今夜は城下から篠原様がわざ〲見えるのだ、汝が俳句を作るのが氣乘りせんのなら、それは何うでも善いだらう、御接伴役が忌だつていふのは我儘だ、それはいけないよ。

お千賀。でも私は、あの篠原様といふ方は忌らしうございますもの。

五兵衛。フム、あの男子も洒落は善くない、見堺なく女の子にしなだれかゝる、困つたもんだが、あれも私の道具の一つだ、兎に角向ふは武士で、此方は何を云うても町人だから、善い加減に交際はしとかんと、一寸とでも出る事にせい。

お千賀。では今に行くから・・・・汝はお風呂に濟んだの？

おてつ。ハイ、私は隠居所の方で戴いて參りました‥‥それからあの大旦那様、茶席のかけ軸は何にしませうか、聴いて來るやうに、旦那様が仰りましたが‥‥。

五兵衛、そんな事は私より喜太郎の方が萬事心得てゐる筈だ、私は骨董いぢくりも厭いたから、善いやうにやれと云うてくれ、オヽ、栗藏は隠居所にゐたかい?

おてつ。ハイ、少しお頭が痛いとか云つて、寝んでゐられました。

五兵衛。(憂はしげに) フーン、この頃、彼もぶら〳〵して氣分がすぐれぬ勝だが、困つたもんだの、大した事がなければ善いが。

おてつ。大した事はございますまい‥‥では旦那様へは左様申上げます。(と退場)

(女三人はその後姿をヂッと目送する)

お千賀。(小聲で) 何處のお嬢様かと思ふやうな風をして。

おはな。(嘲るやうに)、大さうお上品でございますこと。

おつた。目違へるやうに綺麗になりました、花賣娘だつたとは思へません。

おはな、若旦那様のお部屋様だから、此方とは御身分が違ひますよ。

(五兵衛この時梯子段を上りかけてゐる)

お千賀。アラお祖父様、お危うはございませんか?

五兵衛。大丈夫だ、もつと高い檣の上へでも上れるぞ、心配するな。

お千賀。何をしにお上りでございますか?

五兵衛。川口の船を見るのだ、今月中に二三艘歸つて來る筈だから‥‥何しろ海の顔さへ見てりや私は歳を忘れる。壽命の藥だ‥‥(云ひ〳〵上つて行く)

おはな。大旦那様は大丈夫でございませうか? 若し一つお轉びでもなさつた

おつた。誰か男衆にさう云うて、附添ひに行つて貰ひませうか？
お千賀。祖父様は傍から老人扱ひにせらるゝと御機嫌が悪いから困つて了ふ……大丈夫か知ら？
おはな。ア、よい所へ大番頭さんが見えました。
お千賀。エ、何處に？　ア、市兵衞か？
市兵衞。（倉庫の合鍵板をぢやらつかせながら出て來る、四十歳餘りの、色の黒い、眼の大きな、骨組のガッシリした男）お嬢様、もうそろ／＼こゝらの書物を片附けて了ひませう、天日に晒らしたのだから刷毛はザツト當てゝをいたらよございますよ
お千賀。藏の中へは私が仕舞ふから鍵丈貸しといておくれ……それはさうと、お祖父様が物見臺へお上りなさつたのだよ、若しお怪我でもなされたら大變だから、汝、附添ひにお傍へ行つておくれよ。
市兵衞。大旦那様が……（云ひ／＼上を見て）望遠鏡で一心に沖の方を見てゐらつしやるが腰がしやつきりして、根でも生えてるやうに、少つとも危い氣はないぢやアございませんか？　あのお元氣のおかげで、錢屋の土臺も持つてゐるのでございますよ。
お千賀。（不平さうに）汝までそんなことを云うて平氣でゐる、若し足でもひよろついてお轉びなされたら、それきりになるまいものでもない、早く上つて行つて、何うかしておくれよ。
市兵衞。イヤ、めつたに上つて行つたら、それこそお目玉を頂戴する位が落ちでございますよ、あのお歳で、濱の船見櫓へ上らうとなさるから、それはあんまり向不見でございませうと、いろ／＼御宥めして、やつと御聽入下された位だから、偶にこゝの物見櫓へ御上りなさるのまでお足留は出來かねます、何アに傍から心配する程のものでもございません、お體が鍛え込んでありますからな。
五兵衞。（櫓の上から）ア、市兵衞か。慶安丸が見えるぞ、荷揚の仕度をしとけ。
市兵衞。（大聲で）へエ、見えますか？

五兵衛。（大聲で）。ウム、あの帆影は慥かにさうだ、濱櫓からはまだ相圖の旗も振らんぢやアないか？ 間の抜けた奴等だへ、、、。

市兵衛。まだよく見分けが附かないのでございませう、船貝濟にはまだ大旦那様ほど、眼端が利きませんから。

五兵衛。へ、、、若衆等にはあれがまだ見分けられんかのう、荷揚人足等に然う云つてをけ。

市兵衛。へイ、ではさう申附けませう……大旦那樣御氣をお附けなされませい。

五兵衛。イヤ、大丈夫だ、高い處へ上ると船へでも乘つたやうで、善い氣持だ、この櫓も大分朽ちかゝつてゐるが、船ほどには揺れんぞ。へ、、、、。

市兵衛。では一寸濱へ知らせてやりませう。

五兵衛。ウム、さうしてくれ。

お千賀。（市兵衛が行きかけるのを呼び留め）その鍵を貸しといておくれな。

市兵衛。鍵でございますか？ これは手前が預つて居るので、御主人のお許しがなけれや誰方樣にも御貸し申されません。何アにすぐ歸つて參りますから、その間にそこを片附けて置いて下さいませ。（云ひつゝ小走りに駈け行く）

お千賀。六ツかしい番頭さんだ、（苦笑）、さアそろ／＼仕舞ひませう、藏の中は私が仕末するから、汝等は後から持つて來ておくれ。（云ひ／＼倉庫の中へ入る、おはな、おつたは片ッ端から唐物類を藏へ持運ぶ）

お千賀。（倉庫の中で） もう汝等は善いから、母屋へ歸つてあちらの手傳をしておくれ、こゝは私がちやんとして置きます。私でなけや分らないから。

（女中等は倉庫から出て、母家の方へ走つて行く）

要藏。（三十歳前後、色の蒼白い、眼のきつく光る男子、所在なげにぶら／＼歩いて來る、後からおてつが追ひすがる。）何をしに來たんだ？ 汝はお座敷の方が忙しいんぢやアないか？ 早く行つてゐろ、

おてつ。もう御仕度はちやんと出來てゐます。お客樣は金澤の御城下から見え

せう。

要藏。私はお父さんに用事を思ひ出して、隱居所からやつて來たのだ、汝に用はない、早く彼方へ行つてゐろてい・

おてつ。（泣目立つて）そんなに邪慳に仰らんでも宜いでございませう…若旦那は此頃、何うかなされたやうだ、隱居所でも一日默り込んでロク／＼ものも仰つて下さいませんし、夜寢てからも、ため息許りついてゐらつしやるぢやあございませんか？…半歳立つか立たないかに、もう私に愛想をお盡かしなさつたのでございませう。

要藏。私は今、それどころぢやない、胸がムシヤクシヤしてゐるんだ、汝の相手になつちやゐられんから早く彼方へ行け。

おてつ。何んでそんなにムシヤクシヤなさるのでございます、打明けて仰つて下さいませな、若旦那の爲めなら…私は生命でも惜みはしません。

要藏（冷やかに）汝の生命を貰つたつて、三文にもなるもんか？

おてつ。エ、（怨めしさうに）…まア、あんまりな事を仰います…では分りました、私がお厭になつたのでせう。

要藏。おてつさんて、彼方で呼んでるぢやアないか、ソレ…聞えんかい？

（おてつさんと呼ぶ聲がする）

おてつ。（默つて佇立つてゐる）

要藏。（調子を和らげ）おてつ、今夜のお客の篠原つて人を善く侍遇（もてなし）て上げてくれ…實はな、行々はあゝ云ふ人等（たち）の力を藉りる事があらうも知れんからな。

おてつ。（にじみ出る涙を拭いて）エ、それは何うした御用事でございます？

要藏。（狡さうに笑つて）イヤ、まだ形のある事ぢやアない、（頭をさして）こゝ丈けの考へだ、もつと先になつて見なけや、海のものとも、山のものとも分らない。

おてつ　でも一言位、云つて聞かせて下さつてもよてさいませう。

要藏。（うるさげに）呼んでるよ、行け……早く行け。

おてつ。ハーイ、（と高聲で答へ）……若旦那の仰り付けなら、私は何んでもいたします……では行きますから。（小走りに去る）

要藏。（倉庫の方を振向いて）、誰れだい？　今、クス〳〵笑つたのは？（中をのぞいて見て）ア、お千賀か？（と扉口に立塞がる）

お千賀。（倉庫の中から）、要藏叔父さん、お久しぶりでございます。

要藏（苦笑）　要藏叔父さんはチと耳障りだな、……何してたんだい？

お千賀。唐物を仕舞つてゐましたの……そこをどいて下さい、出ますから。

要藏。（四邊を顧みながら、戯談口調で）いゝ、めつたに出すもんかい……そうして暗い中に眞白な顔の浮上つてゐるところは、滅法美しいぞ。

お千賀。まア忌らしい事を云ふ叔父さんだ。

要藏。叔父さん丈は止めてくれ……お千賀……お千賀汝に一寸話がある。（倉庫の中へ入りかける）

お千賀。忌だよ。（出やうとする、強いて中へ押入れる）アレー、お祖父さま……お父さま……（叫ぶ聲、物のこわれる音、何か投げつける音、暫らく騒がしい、やがてお千賀は亂れ髪になつて、倉庫の中から飛び出る、要藏は後から追ひすがり、兩手を取つて引ずり込まうとする）アレー――……お祖父さま……お父さま……要藏さんが……早く來て下さい。

要藏。何を騒ぐんだい、このお茶ツぴーめが……（眞赤になつて二つ三つ毆打りつける。）

（バタ〳〵と足音、喜太郎が小走りに驅け出る、四十七八歳の瘦せぎすな、眼の大きな男子、周章した顔色で、聲も激してゐる）

喜太郎。何うしたんだ、何うしたんだ……コレ要藏汝はこの娘を何うするんだ、氣でも狂つたか？

要藏（手を放して、俯向きながら）　然うかも知れません……お千賀の顔を見るとカツと……

も強情で私等の云ふ事を聽かんから、こんな目にも逢ふんだ、早く行けといふに

お千賀。（泣きながら）私は藏の中で唐物の仕末をして居つたのでございます、そこへこの人が入つて來て手荒な眞似をしますもの。

喜太郎、あんな大聲を張つて、座敷まで筒拔だ、御客さまの見えん中でまだよかつた、早く行つて支度をせい。

お千賀。でも私、御接待役は只でございますもの。

喜太郎。そんな我儘を云ふものではない、早く行けツ、まだお湯へも入らんではないか？（お千賀默つて入つて行く）

喜太郎。要藏、私は何も云ひたくはないが、男子も廿歳を越したら少しは物を考へるもんだぞ、この身代だつて、降つて湧いたものではない、お父さまが大道賣の三文菓子屋から稼ぎ上げて、五十何年といふ長い月日、荒海の上を往つたり、來たり、何度も生死の苦みをして、生命を資本におこさへなさつたんだ、その子供に産れたおかげで、私等は斯うして安閑と坐つて樂に暮らせて行けるのだ、その有難さを思はんで、仕たい三昧放埒ノ眞似をして濟むと思ふのか、末ツ子の汝はお父さまが殊更可愛がられるので、圖に乘つて増長したら今に罰が當ろうぞ、少しは人らしくしてくれ、それが汝の身の爲めだらうぢやないか？

要藏。（嘯いて）そりや兄さんに聞かんでも分つてゐる、私のする事位が放埒三昧だと見えるのなら、そんな眞似をせんでも濟むやうにして貰ひませうか？私は一生親爺や兄貴の脛かぢりで、ぶら〱遊んで暮らしたくはありません、……親爺の子に生れたのだから親爺に負けぬ仕事がしたい、そして出世がしたい、その望が適はなけりや生きてるも死んでるも、同じ事ぢやありませんか？

五兵衛。（物見臺から）要藏と喜太郎か、何を言合してゐるのだ？

喜太郎。ア、お父さま、そこに上つてお居でなされたか？……足許をお氣附けなされませ。

五兵衛。（下りて來る）大丈夫だ……これ位のところ（徐々梯子段から下りる、下り口で一寸と蹌踉とする）

喜太郎。アツ、お危い。

五兵衛。(扶けの手をふり切り)。チヨツと踵が引つつたよ、(そこを探り〴〵、傍の材木の上へ腰を卸ろす)豐安丸が入つて來た、まア無事な航海だつたので一安心だ

喜太郎。左樣でございます、風運が善かつたと見えて、一日二日、早う入りましたな。

五兵衛。喜太郎は要藏に何か小言でも云つてたらしいな。

喜太郎。(一寸と云澁りながら)……お父さまは御氣が附かれなかつたかも知れませんが、私の口から云ふのも耻かしい……今、こゝでお千賀にからかひまして な、お千賀大聲を上げて騷ぐぢやありませんか？第一外聞にもかゝります、家名に疵が附きます。

五兵衛。まア二人とも、もつと此方へ寄れツ……私は知つてゐたとも……あそこから樣子は大抵見てゐたが、要藏め、まんまと失敗りよつたなハヽヽヽ。

要藏。(極り惡げに)お父さまは見てゐらつしやつたのでございますか？

喜太郎。(不服さうに)お父さまはそれを見ながら默つてゐらつしやつたのでございますか？はいへ、それは又あんまりでございます、だから愈々附け上つて、手にをへぬ代物になつて了ふのでございます。當人の爲にもなりますまい、末始終、お歎きをかける種をお蒔きなさるやうなものではございませんか？

五兵衛。(領いて)いかにも末つ子の要藏が私には一番可愛いんだ、何處か、私の氣象に似たところがあつて、自分の若盛りを二度見るやうな氣がするでな、出來る事なら身の皮を剝いでもやり度いやうに思ふてゐるが、その要藏がお千賀に惚れ込んで、夫婦にしてくれとあれ程死身になつて賴んでも、汝が一つかな承知してくれて、お千賀も逃げ叫つて許りゐる、それが一倍、要藏を可愛さうに思はせるんだ。

喜太郎。(意外の樣子で)お父さま、その事なら疾うに話は濟んでるではございませんか？

さいませんか？　もう〳〵この事は二度と仰りなされますな。

五兵衛。云ふなと云へば云ひますまいが、眞實の戀といふものは一生に一度、それも若い血氣盛りに限るのだ、それこそ大海の眞ン中のつむじ風のやうに、向不見に、千石船でも捲き上げなけや納まらない、相手が肉身の親や兄弟だとそりやア少と考へものだが、歳もあまり違はん叔父と姪と位なら、構つた事はない、假りに二人で離れ島へでも漂流して見ろ、叔父も姪もありやせん、唯男と女とぢやアないか？　ヤレ、義理の、世間體のつて、横合から茶々を入れて、後で當人の胸に一生癒えぬ深い疵口をあけさせるのは、此上もない不幸だ、……現に私が若い時にもさうした覺えがある、木谷の娘のおふぢさんの事は、今でも忘れずにゐる、金が出來ても、仕事が運んでも、その穴丈は埋まらない、要藏にもさうした不幸な目に逢はせ度うないと思つて、私は皆が不承知と云うても逆つて勸めたのだ。

喜太郎。（ため息）お父さまの仰る事なら何んでも悖き度うはございませんし、又悖きもいたしませんが、これ許りは何度仰つても御免蒙るより外には致方ございません。

要藏。（元氣よく）。イヤ、お千賀めに喚かれてすつかり、何も戀も一時に醒めて了ひました、もうふつつり思切りました。少しも未練はございません、これからは眞實に、叔父、姪といふ氣持になれませう。御安心下さい。

喜太郎。それが當り前だ、それでこそ眞人間だ。

五兵衛。（憐むやうに）何しろ、どちらへ向いても　を突く膝の上の事だからな、要藏があきらめも悧巧だらう、これからは一倍、おてつを可愛がつてやれ。

要藏。（決心の顔色で）その代り、私に一生のお願がございます、それ丈は何卒聞屆けて下さいませ、お父さまにも、喜太郎兄さんにもお願ひいたします。

五兵衛（頷いて）ウム、若い者だ、戀が屆かんからつて、何も氣済する事はない、他に心願があるなら云うて見い、何んでも聞いてやる。

要藏。私はお父さまに負けない大仕事がしたうございます。それを適へて下さいませ。

五兵衛。（笑顔で）フム、面白い、それでこそ汝だ、してその大仕事といふのは？

要藏。もうずつと前から考へ附いてたのでございますが、折々こゝの物見櫓へ上つて見ると前には青澄んだ海が果てもなく擴がつてゐるし後には鈍く光る潟が見えます、あの海は父さまが踏み荒されたが、あの潟にはまだ誰も手を附けた者がない、よし、あそこを青田にしてやらう、人間の力で海は埋まらんが、あの周り七里の河北潟なら雜作なく埋められる、そして鯉鮒の代りに何千石の米が作れたら、お國の爲めにもなる、下方の爲めにもなる、そしてこの要藏も十村格にはお出世が出來やうかと思ひます、恰度改作方の篠原樣も見えるといふから顔をおす手筋も聞いて貰へる、今日こそ云出すに善い機會だと、心に決めて來たのでございます。

五兵衛。フム……河北潟を埋立てるといふのは、なか〳〵の大仕事だな。

要藏。（熱心に）胸算用もいろ〳〵立てゝあります、何アに、錢屋の金の力と、私の力が一つになつたらやつてやれぬ事はありません、乾度やつてお目にかけます。

五兵衛。（笑顔で）それ程の元氣があつたら、あの潟一つ、埋まらん事もあるまい。……見積に拔目のないやうにするのが一番大切だ……

要藏。（勇氣づいて）それは承知して居ります、ではやつても善うございますな。

五兵衛。（頷いて）やれ、やれ……やつて見い、物は試めしだ……喜太郎、汝もこれなら異存は云へまい。

喜太郎。（眼を瞠って）河北潟を埋立てるといふのでございますか？　あの周圍七里もある大沼を？……

要藏。あれを埋立てたらザツと四千石の米が取れます、これなら少しはやり甲斐のある男子の仕事と云へるぢやありませんか？

五兵衛。ウム、やれツ……要藏、やつて見い、歌、俳偕や謠曲やお茶で、のらくらして暮してゐるのは天道樣にも濟まん事つた、潟が田地に變つて水泡が白米になりや切支丹ばてれんの妙法にも負は取らぬ、やれツ……やれツ。

喜太郎。（愛嬌に）でも他の事とは違ひ、莫大な費用がかゝるで[illegible]もなつたら、世間の物笑ひになる許りか、不吉の事は云ひたくありませんが、折角、お父さまが辛抱してこれ程までに仕上げなさつた錢屋の根太石にゆるみが來やうも知れません、今のまゝなら、金に不自由はせず、衣ても食うてもありあまる結構な身分でございます、何んでも人間は地道にやつて行くに越した事はありません、少々の物入なら兎も角、これは又あんまり向不見が酷過ぎます。

要藏。喜太郎兄さんは金の上へ寢轉んでゐるのを地道だと仰るが、何アに、使へばこそ金も活きるのではありませんか？お父さまは長年かゝつて死金を溜める爲めに働きなさつたのではございますまい？

五兵衛。要藏の云ふ通りだ、溜め込んで見ると金つて奴ア體も元氣も腐らせる、魂まで腐らせる、何アに、河北潟一つ錢屋のあり金を投げ出して埋め立てる氣なら埋まらん事があるもんか、要藏の胸の中に仕事のつむじ風が起つたのだ。錢屋の身代を捲き上げられても仕方がない、これまで抑へ付ける譯にはゆかん、早速仕事に取かゝる支度をせい、喜太郎、この費用はいか程かゝろうと一切引受けて出すんだぞ、私が云附けた。

喜太郎。左樣でございますか？……お父さまがお稼ぎなされた金だから、出せと仰れば私は何も申せませんが……何しろ仕事があまり大きいから一應、皆ともよく相談して見ての上としたら何うでございませう、靑天井の下で立談してきめるのもチと輕はづみのやうに思はれますが？

五兵衛。（苦笑）私がこれまでの仕事は皆、靑天井の下で思附いたんだ、盤の上の考へ事は、尻が腐つても決まらない、私がやらうと云ふのだから誰が異存を云へるかい？

喜太郎。異存は川せませんが、要藏可愛さに取返しの附かん事をなされてはと思ひまして。

五兵衛。（首を振つて）イヤ、私のこの頃ののらくらした暮しには、つくゞく愛相が盡き果てた、要藏が仕事をする途を私に敎へてくれたやうなもんだ、何アに、萬一やり損つたら、元の三文菓子屋になる氣なら後悔する事はない、うまく行たら、勳業が出來るのだ、人間の力試めし運試めし、生きてる中はやつて見なけや、生き甲斐はないていふもんだ。

りだ……アヽ、これで私も浮き返りました、ため息なんかもう吐きやしないぞ。

（竹法螺が鳴る）

五兵衞。フム、慶安丸が着いたらしいぞ。

要藏。（樹に駈け上る）ア、着きました、着きました、船が蟻のやうにたかつて行きます。

五兵衞。然うかい、荷足が重さうかい？

要藏。ヘイ、船が傾く程積んで居ます。

市兵衞。（荷揚帳、片手に駈け來る）船が無事に着きましてございます、濱庫へは積み切れなさゝうでございますから、裏門を開けてこゝの倉庫へも運び込ませます……旦那様大さう御思案顔で、何うなされました？

喜太郎。オヽ、汝にも聞いて見たい、私一存ではいかん事が出來した……要藏がとんでもない事を云出したんだ。

市兵衞。何事でございます？

五兵衞。イヤ、何んでもない、私ももう先が永くないから、この世への置土産にあの河北潟を埋めて青田にせうといふのだ、自分助けなり、人助けなり、善い仕事が見附かつたんだ、市兵衞、汝も一肌ぬいで、工事の監督方を引受けてくれ、頼んだぞ。

市兵衞。ヘエ……それは初耳でございますな。

五兵衞。否應は云ふな、汝は昔から五兵衞の手足になつて、働いてくれた男子だ、私のする事なす事に、一つも批を打つた事はないぢやアないか？

市兵衞。ヘエ、それはもう仰る通りでございますが……大旦那様なり、錢家御一家なりに、死なば一緒の覺悟でございますが……

五兵衞。それ丈聞けばもう澤山だ、後は云ふな、聞くな、委細の相談はゆつくりせう。

喜太郎。（焦々しながら）。ア、もう御客さまが見える刻限だ、斯してはゐられん、父さま御一緒に母屋へ歸りませうか？

五兵衛　汝が主人役だ、先へ行つてゐてくれ、私はもう俳偕なんか讀みたくないぞハ、、、、、

（喜太郎、思案しながら入る）

市兵衛。（は倉庫の中をのぞいて見て、扉を鎖し）ではチョツと裏門を明けて、あそこから人夫を出入りさせます。（駈行く）

五兵衛。（梢を見上げ）要藏、汝は一心、何を見てゐるんだ？

要藏。（聲高く）河北潟が錫の盆のやうに光つてゐます、あの光る處が今に青疊のやうになる……何千石の白い米が出來る……それ丈、人間の餌さが殖える……さう思ふと、私も神業をするのでございますな。

五兵衛。コレ〳〵大きな聲をするな、また大口をたゝくのは早い……若い者は矢張思慮が足らん（云つて、チツと考へ込む）

要藏。ア、何んだらう？……河岸で大勢が騒いでゐるが？

五兵衛。（耳傾け）。ウム、大分ガヤ〳〵云つてるやうだ。

要藏。たぐり合でも始めたらしい……行つて見ませう。（急ぎ足に、下りて來る）

五兵衛。仲仕同士の喧嘩だらう、ほつとけ。

要藏。でもなか〳〵ひどくやつてるやうに見えますから。

（市兵衛が、せか〳〵裏門の方から駈けて來る）

五兵衛。何の喧嘩だ？　何うしたんだ？

市兵衛。（ひそ〳〵聲で）ついぞ見知らぬ人足が交つて來て、米俵をこゝの裏門口から擔ぎ込まうとします、それを見附けて騒いでるのでございますが、何うも怪しい……隱密ちやアないかといふものも居ります。

五兵衛。（眉を動かし）隱密？……加賀の御用金方を勤めてる私に、加賀藩からそんなものをよこす筈がないが？

市兵衛。江戸から來たのぢやアないかといふものも居ります、[illegible]か何か分りませんお江戸[illegible]

ます、[illegible]

五兵衛。イヤ〳〵、よし〳〵！悪い、乾度報がある……放してやれ、逃がしてやれ、屋敷内へ入込んだのでもないからな。

市兵衛。左樣でございますか、では放してやりませう……（駈け行く）

五兵衛。要藏、汝の肝ッ玉の太いとこは、私譲りで、心丈夫だが、假りにも他人の生命を粗末にするやうな亂暴な眞似をするなよ……私の今日までになつたのは、私の爲めに何人かが海の上で死んでくれたそのお蔭を蒙つてゐるのだから、私は何時も回向して拜んでゐる、この心掛を忘れるなよ。

要藏。ハイ……でも穏密なんかする奴は人間の屑ぢやございませんか？

五兵衛。三文菓子屋をやつてた頃は、私も人間の屑だと云はれたかも知れん……汝は矢張苦勞が足らん、こん度は一つ苦勞をして見ろ。

要藏。ヘイ、喜んでやります。

市兵衛。（駈戻つて）、放してやりましたら、飛ぶやうに何處かへ逃げて行きました、怪しい奴でございます。

（人足等をふり返つて見て）御苦勞、御苦勞、さアこちらの倉庫へ運んでくれ（と、先導する）

（人足等の群は米俵を肩にして運びゆく）

要藏。（耳語するやうに）河北潟の新田から取れた米のやうな氣がします。

五兵衛。（頷いて）フム、……さうなつてくれると善いがな？

（米俵はしきりに運ばれる、父子は佇立つてそれを見てゐる、黄昏の光がさしかゝる）

幕

第貳幕

河北潟の沿岸、上手に檜皮葺の作事小屋、その内部には正面に潟を見晴らす窓があつて、一部は板敷、一部は土間、そこに脚高の卓、腰

掛などが置いてある、小屋の後横手にこんもり茂つた森が見え、下手には末枯の楊柳などが疎らに立つて岸一帯に穂の白く出た蘆むらが茂り背景には遠く潟が、廣がつて、波除工事の杭の大分沖まで打込まれたのが見える、小屋の邊りには土砂や材木や、粗朶などが亂雑に取散らかされてゐる、近處で、懸聲をしてコツ〳〵と杭を打込む音、呼び交ふ聲、その中に交つて、微かに鴫の鳴く聲も聞えて來る。

○

作事小屋では、五十歳餘りの、痲痘のある工事頭の理兵衛が卓の上に繪圖を擴げて朱でしるしを附けて見せてゐる。要藏と市兵衛、それに、四十歳餘りの色の黒い、眼の鋭く光る小男子の世話役孫兵衛、何彼と話し合つてゐる。暫らくして要藏は頷きながら起上る。

要藏。それで善い、それで善い、この分で行けや月内に八田村の地先きまですつかり埋まつて了ふぞ、何アに仕事さへ捗取りや少々物の入り過ぎる位は構はない、案じるより産むが安いつて嘘はないぜ（云ひ〳〵戸外へ出て、潟の方を眺めながら、快活に）ア、善いお天氣だ、これぢやアまだ急に寒さは來まい、天道様も私等の味方だ、市兵衛、まア來て見い。

市兵衛。（理兵衛等と何か心配さうにひそ〳〵話し込んでゐたのが）ヘエ、唯今行きます。

（此時、孫兵衛は默つて上手へ入つて行く）

要藏。大分、沖の方までズラリと杭を打込んだぞ、もう何萬本つて數になるだらうな、土俵を積込んだ舟があんな遠い所まで往來してゐる、今にこの潟一面が青田になるぞ……今になるぞ。

市兵衛。（小屋の中から出て來て、要藏の傍に近寄る）お天氣は善いが、矢ツ張西風が立つて居りますな、この風が立つと潟内は浪が荒れますから折角打込んだ杭が倒れねばよございますが……

要藏。何アに、これしきの風は何んでもない、汝は取越苦勞がひど過ぎるよ。

市兵衛。陸はこうでも、沖はなか〳〵強く當てゝゐますよ。

要藏。知れたもんだ、別に波がしらゝ立つて居らんぢアないか？　イナ、波といへば何時か輪島から歸り途に、この[illegible]
[illegible]小僧で渡りかけるとゝしけを食うてひどい目に遭つたぞ、人間つてのきらん者ぞと。あの時は[illegible]

市兵衛。（新〔illegible〕）も足りませんでな、これから先が骨でございますよ。

要藏。何アに、千分一埋め立てたら百分一埋め立てる見込は附いたんだ、百分一埋め立てたら十分一は埋め立てたも同じ事だからな、この先何んな事が起ろうと、この仕事を遣り了せずに置くもんか、汝もその氣になつてやつてくれ、これさへ出來上つたら、錢屋一軒潰れても構はん、親爺もさう云つてゐるからな……だが、世間では私の事を氣が狂れたとか噂してるさうだな、馬鹿もの奴が……

市兵衛。イヤ、世間で何んと云はうと、それを氣にかけるには及びませんが、お若いせいで、兎角一徹な遣り氣はお止め.されたが粹ございます。……貴方様は毎夜、毎夜、あの八田村や大場村の地先の工事の杭が取れたり、粗朶が流れたり、土俵が何處かへ浚はれて行つたりするのを一體、何んとお考へなされますか？

要藏。（一すと顔を曇らせ）。あそこらは水戸寄りだから潟の魚の群が寄りたかつて、さうするのだと、あの孫兵衛が云つたではないか？

市兵衛。（考へ深さうに）私も始めはさうかと思ひましたが、いかに魚の數が寄ればとて、あゝした力は出せませぬ、これは何うも髮毛の附いた魚どもが寄つてたかつてする悪戯だと睨んで居ります。

要藏。（顔色をかへ）エ……では村の漁師どもの仕事といふのか？……フーン……（腕叉をする）

孫兵衛。（周章しく歸つて來て）。又大事が出來しました。

市兵衛。何事かな？

孫兵衛。今八田村の地先を見廻りますと、工事場五六十間の間、杭も粗朶も、跡方もなくつき崩されて居ります、これぢや日一日と損害が目に見えて大きくなつて行きます、困・た事でございますた。

要藏。（唸るやうに）五六十間……フーム、では漁師共の仕業に決つた。……憎い奴だ、何うしてくれやう。

市兵衛。孫兵衛今までのちよい〱した破損も、魚の仕業か、人間の仕業か、漁師渡世をした汝に分らん筈はない、仲間内を庇ばふ爲めに汝はしらを切つてゐたな？

孫兵衛。イヤ、何うしまして、さうした譯ではございません…全く、始めの中は、夥しい魚の群が、粗朶に附くのだと許り思ひましたが、だん〱大袈裟になりましたので、これはてつきり漁師仲間の仕業だと勘附きました。

要藏。（憤激の色）取りかゝつてからもう百日餘りにもなるに、目論見通りに抄んのが内々もどかしくもあり、可怪しいとは思つてゐたが、業腹だから口へ出しては云はなかつた、よし、漁師仲間の惡戯なら、其の儘には捨て置けぬ、滿百分一の御許可を受け、莫大な金銀を注ぎ込んで、益にも立たぬ水溜りを米の實る田地に作りかへやうとするんだ、鯉や鮒にも劣る人の榮耀ぢやアない、世助け、人助けの仕事をやつてるのに、横合からコソ〱邪魔するとは汝れッ、捕つた下人め、片ツ端から念珠繋ぎにして奉行所へつき出してくれやう、市兵衛、その手續ぎをせいッ。

市兵衛。（宥めるやうに）御立腹も一應御尤ではございますが、斯うした成行を心配して、仕事にかゝる時に私がいろ〱貴方樣に云つたのでございますよ、この潟を埋め立てるのは行々は世助け、人助けになるに相違ございませんが、潟の魚を取つてその日、その日の暮らしを立てゝ居る貧乏な漁師どもには、潟の水が乾上れば自分等の妻子眷族の血が乾上るやうに思うて、生命がけで邪魔するのも萬更無理とは云へませぬ、そこは漁師どもの安心するやうに、一應渡りを附けて置くのが當前でございませう、今からでも手遅れではありませんから、さうした處置を取りましては？

孫兵衛。（頷いて）、大番頭樣の仰る通りでございます、心當りもありますから何んなら手前が村方へ行つて、よく渡りを附けて來ませうか？

要藏。（同情に）漁師どもの困るのは眞の一時だ、開いた新田は、それ相當に村方へ分け前をやるのだから、網を捨てゝ銀を掘る丈の事だ、その方が何んだけ結構に暮らしが出來るか知れぬ、漁師に生れ付いたと云つて、何も一生涯漁師で

此方の味方に附けては何うでございます、千、二千の土方許りを力にしても、鼠や……き物の漁師共まで敵方へ廻しては、この大仕事の行末が案じられます。

孫兵衛。御尤でございます、旦那樣、こゝは御思案のなされ所でございませう、いろんな物騒な噂もちよい〳〵私の耳へ入つて居らんでもございません、このまゝ打捨てゝ置いたら大變な事になりませう。

五兵衛。（苦笑。）それ程眼先の見えん馬鹿者共を私は相手にし度ない、盗を剝いで衣物を宛飼うてやらうとするに、恩を仇で返す乞食めらに……私は知らん市兵衛に考があれば、勝手にやれ。（云捨てゝ作事小屋へ入り、繪圖を指して理兵衛と話してゐる）

市兵衛。では孫兵衛どん、兎に角、村方へ渡りを附けに行つて貰はふ、萬事賴んだぞ。

孫兵衛。ヘイ、委細承知いたしました、濱村の彥兵衛といふのがこゝらの漁師頭をやつて居ます、なか〳〵利かん氣の奴で、一寸と手に合ひかねますが兎に角これから行つて渡りを附けて見ませう。

市兵衛。何卒さうして貰はふ。金の事なら如何樣にも工面は出來るからそこを一つ吞み込んでな。

孫兵衛。ヘイ、よろしうございます、では早速行つて參ります。（入る）

市兵衛。（後を見送つて、思案しながら佇立つてゐる、粗朶を擔いた人夫が五六人、下手から出て來て前を横切る、）、御苦勞さん……御苦勞さん（と一々、聲をかけ、それから作事小屋へ入る）

理兵衛。大番頭さん、何うもとんだ事が出來ましたな。

市兵衛。（ため息を吐き）困つた事だ、大旦那の耳へ入れたくはないが、隱して濟ける事でもないしな。

理兵衛。（頷いて）。左樣でござますとも、今日位は御見廻りにお出なさる日取りでございますな。

五兵衛。（苦笑）親爺も始めの中は、毎日毎日、出かけてよく世話をやきよつたが、歲のせいで、もう草臥たか、氣は若くても、體まで若くは持てんからな……オ、市兵衛、雜魚どもがくづした堤はすぐ手を廻はして、今日中に元通り直

して了はふ、人夫ももつと増して、日傭は一割でも三割でも余分に取らせてやりや、それ丈拂がゆく筈だ、さうして

は何うだ？

市兵衞。まだまだ先の永い大仕事でございますから焦いてはなりません、今から向不見な眞似をしてかゝつたらいかな

錢屋の大身上でも潟の水泡になつて了ひます、金は水程には湧きませんでな。

理兵衞。（向を見入つて）。ア、大旦那が見えました……大御新造様も御一緒だ。

（市兵衞と理兵衞とは向ひになる。五兵衞は痩せ形の、眼の大きな五十歳餘りの妻おまきを連れ、おてつと、手代庄七を供に、ぶら〳〵

と來かゝる）

（人夫が五六人、粗朶を擔いで前を横切る、中には挨拶して行くのもある）

五兵衞。ア、毎日よく働いてくれる……御苦勞だな……御苦勞だな……」

市兵衞。（挨拶して）大旦那様お待ちして居りました、大御新造様も善うこそ御出かけなされましたな。

五兵衞。お天氣が善いで、ぶら〳〵歩いて來たがチト疲れたやうだ。……二三日見ぬ間　蘆の花が眞白になつたな、綺

麗だ。（云ひ〳〵潟を眺める

おまき。御無理をなさらんやうに云うても、一日〳〵と仰つたら何處までも步かねば承知なさらんでな、この二三日お

風邪の氣味もあるし倚では皆氣遣うて居りますよ。

五兵衞。でも步いたお蔭でチト汗が出たやうだ……要藏は何うしてゐる？

市兵衞。そこの作事小屋に居られます、さア何卒（五兵衞夫婦等は小屋へ入つて行く）

要藏。（立迎へて）。ア、今日は……御覧の通り、仕事はだん〳〵捗取つて行きます、もう見當は附きました、……お母

さまも善うこそ御出かけなされたな。

五兵衞。（苦笑）家の小い婆さんたちの家でくよ〳〵して詰り居るより今に富でも出して上げ度い、是に再一度現場を見せ

[illegible]

要藏。イヤ、人夫等は私の手足のやうになつて働いてくれます、そんな心配は要りません。
おまき。(五兵衞に) この海のやうなものが眞質埋まりますかな? あんまり大がゝりな仕事だから、私は一寸と見ても眼先が眩みさうな氣がします。
要藏。まア一休みして、あちらの人夫等の大勢働いてる處へ行つて見なさるが善い、潟がドシ〱陸になつて行きよります、それこそ神業が眼に見えますからな、舟で一廻りなされるも面白かろう、ア、おてつ、そこに湯が沸いてゐやう、お茶一つ上げてくれ、汝もよく來た。
おてつ。旦那様のお仕事を見せて戴くのが樂みでお供を願ひました、大した事でございます、(云ひ〱お茶の世話に立働く)
おまき。(室内を見廻はして)、要藏はこの小屋に寢泊りしてゐるのかい?……さぞ不自由だろうな。
要藏。此の小屋へも寢たり、向ふの小屋へも泊つたりします、武士が戰場へ出たも同じ事だから、樂は出來ませんよ。
五兵衞。市兵衞も理兵衞もいろ〱骨折だな、何うだ、仕事の足は?
市兵衞。何しろ風や波を相手の仕事でございますから、人間の思ふ通りにならぬ事もございます。
理兵衞。これで私共の力限り、根限りやれる丈はやつて居ます。
要藏。何んにも屈托はありません、もう餘口が立つたから今月の内に二百石分や三百石分の新開は請合つてやつて御目にかけます。
五兵衞。(快活に) ハヽヽヽ、要藏はいつも元氣が善いな、その元氣でなけや、やれるものもやれんわい、だが、此仕事はまだ先きが永いぞ。
要藏。それは市兵衞からも度々やかましく云はれて居ります、それ程の目端の利かぬ私でもございません。
五兵衞。(頷いて) ウム、それはさうだらう……だが市兵衞、汝は何うかしたか? 浮かん顏色をしてゐるやうだぜ?

市兵衛。否え、別に何うもいたしませんが、あの大旦那様に一寸と……（と閉の方へ行つて、ヒソ〳〵耳打する）

五兵衛。フン……然うか……成る程……（と眉を動かして聞いてゐる）

おまき。何事でございます？……何うしたのでございます？

五兵衛。（制して）汝に聞かせる程の事ではない、默つてゐろ。

おまき。（むつとした調子で）女はいつでも除外物にされる、ア、つまらない、……おてつあちらへでも行つて見やうか？

おてつ。お供をいたしませう。

要藏。それが善い、氣晴らしになりませう。

おまき。氣晴らしやら、氣苦勞やら分るもんか？

理兵衛。私が御案内いたしませう、こちらの假山を越しても行かれますが、そこの堀割を船で廻つた方がお樂でございませう。

五兵衛。ウム、兎に角、行つて見て來い、可愛い要藏の仕事だ、この子が男子になるか、たらんの堺目だからの。

要藏。お母さま、よく眼をあけて見て下さい、貴方の乳を呑んだ要藏が、これほどの事をやるかと思つて。

（おまき默つて起上る、おてつと手代庄七が附添ふ）

理兵衛。（庭の中へ向いて）オーイ、船頭、ゐるかい？

船頭の聲。オーイ、ゐるぞ。

理兵衛　帆を上げる用意をしといてくれ……大切なお客さまだ……さア何卒、……足場が悪いから御氣をつけなされませ。（先へ立つて、茂の間へ入る）

五兵衛。（頷きながら）成る程、これですつかり呑込めた、何も可怪しい事だと思うてゐたが、矢ツ張然うだつたかす

市兵衛。何しろ八尺埋めれば二尺はくづれる、十間運めば三間は流れるのでございますもの、これでは鬼で餓鬼しの涸

へ金儲 [illegible]

五兵衛。その事は始めからよく云つて聞かせて……

要藏。村方に得の附く仕事を始めてやるのに、此方から頭を下げて頼みに行く筋はありません、錢一文出せと云ふではなし、當前なら土塊一荷でも粗朶一束でも、手助けするのが人情ではございませんか？

五兵衛。フム、要藏の云分にも一理ない事はないが、世間といふものは一體に眼先の見えん馬鹿者揃ひだ。恰悧ぶつたお役人が、大海の上へ法度の網を張つて、異國から來る寶を堰かうとする、漁師共が雜魚の代りに、米の取れる仕事の邪魔するものは笑はれた義理ではない、今の時世で世間の眼を醒ますやうな仕事をするには、表通りを歩かんで、拔裏から行くより他に手はない、そこは苦勞の味を知り拔いた市兵衛の云ふ事をよく聞いてやれ、それは私からも改めてよく云つて置くぞ。

要藏。それは心得て居りますが、癪に障る事をせられると、ついムラ〳〵としてヂツとしちや居られませんでな。

五兵衛。一寸そこの帳面を見せてくれい。

市兵衛。ヘイ(と卓の上の帳簿を手渡する)御本家からのと、隱居所から出ましたのと。ザツとこれに控へてあります。

五兵衛。(くりひろげて見ながら)フーム……フーム……チヨツと十露盤をかしてくれ……(市兵衛のさし出すのを取つて、彈いて見て)……五十萬兩は疾に越したな……それで今までにまだ百石分に足らん新開地か……フーン……。

要藏。(辯解するやうに)これまでは費用が入過ぎたかも知れませんが、これから先はズツト割前は減りませう、何しろ一年二年に資本の戻る仕事ではありませんからな、一體、取かゝる時、お父さまは錢屋の屋臺骨をつむじ風に捲き上げられた氣でやれと仰つたのをお忘れではございますまいな？

五兵衛。(笑つて)私は何も金が吝しいと云ひはせん、大船を造るにも小い鋲が利いてゐなければバラ〳〵に毀れるでな、仕事は凡てじみにやらんと無駄な費用が流れるやうに出るもんだ、漁師等の邪魔も手傳つてはゐやうが、作事小屋に檜板などは贅澤だ。杭も栗材許りに限らんでも善い、締める處は締めてかゝらんと、仕事が遊びになるぞ。

市兵衛。仰る通りでございます、これ程の大仕事は、殊更、そのコツを呑込んでかゝらねばなりません。

要藏。（嘲笑的に）父様までが、今から弱氣を出しちや困ります、何んのそれしきの費用が……。

五兵衛。（快活に）ハ……馬鹿を云ふな、私が何んで弱氣なんか出すもんか、この仕事を首尾よく成就させたいと思へばこそ、小い鎹の打ち處を外づすなといふんだ……何アに、一度手を附けたら後へ退く私か、この骨が潟の底の舍利になるまでやるぞ。

要藏。それでこそ私のお父さまだ、海の上を飛び歩いた貴方がこれしきの水溜りで往生しちや浮ばれますまい。

（杭を打込む音、人夫のかけ聲などが賑かに聞えて來る）

（錢屋喜太郎とお千賀が駕籠で乘り附ける）

市兵衛。（それと見て）ア、本家の旦那様、お孃様揃ら入らつしやいました。

五兵衛。オ、喜太郎か……お千賀も附いて來たのか？　波除の見物かい？

喜太郎。（焦々した表情で）イヤ、それどころではございません、急な御相談事でございます、お千賀は見物したいとか云つて來ましたが……

五兵衛。（頷いて）フーン、然うか……まア上れ……お千賀も上れ。

要藏。父さまの御用で、わざ／＼御出なされたか？……お千賀も暫くだな、さア、まア此方へ……こゝの窓から波除の千本杭が一目に見晴らせるぞ。

喜太郎。（五兵衛の傍へ歩つて）先刻、隠居所へ行つて見ますと工事場へ御出かけなされたといふので、直ぐさま駕籠を立たせて飛んで参りました、……母上もこちらへ御出のやうに聞きましたが？

五兵衛。彼は人夫等の働いてゐる處を見に行つた、家にゐても愚痴ばかりこぼしぬくので氣晴らしに連れ出したが、こゝでも矢つ張り愚痴だ、アゝした老体は困りますわい。

[illegible]

もう大抵それで苦しいかと思ひます……
日々毎日、吸ひ取られるやうに金が出る、お上からもこれ幸ひに搾り上られる、今日までの物入も莫大なに、これから先き何うなる事と、苦勞性の私は居ても起つても居られぬやうでございます、弟の佐八郎も意見は私と異りません、聞けば新開の仕事も見込通り行かないさうではございませんか？

お千賀。（五兵衞に訴へるやうな眼付で）お父さまはこの頃おち〳〵夜が寢られぬと仰ります、何んとか一つ御考へなさつて下さいませ。りお痩せなさつたのが目に立ちます、今朝も俄かに目が霸れさうだと仰るので何んなに心配したか知れません、それで此方へも私が附添うて參りました、食物が進まんから顏もげつそ

叔父さんにもお願いたします。

五兵衞。（苦笑）それでワザ〳〵父子連れでやつて來たのか？

喜太郎。（神經の尖つた調子で）ハイ、私や佐八郎は御存じの通り、お祖父さま、何卒お父さまの御安心なさるやうにして上げて下さいませ、要藏

五兵衞。お父さまや要藏とは違つて氣が小うございます、此ま喜太郎は母親似で、矢々張氣が小さいのう。

喜太郎。〳〵アズル〳〵と深味へ陥つて行くと、いかな錢屋でも今に立つ瀨がなくなるのは目に見えて居ます、落魄れてその日の糧に困つても、乞食する途も知りますまい、斯うした事を押して云へた義理でもありますまいが、お父さま、皆が可愛さうだとお思ひなされるなら、お考直しを願ひます、……世間では要藏の事を氣が狂れたと云うて物笑ひにしてゐるさうなが、要藏も些か本性を失うては居るまい、自分一人が出世したさに、親兄弟に襤褸を下げさせてまで、身勝手を通さうとは思ふまい……市兵衞、汝もマサカ錢屋一家を沒落させたさに、此仕事に身を入れて居る譯でもあるまい、善う考へて返事をしてくれ

五兵衞。（落着いた調子で）三百貫文の上納金がそれ程氣に病めるのか？　六十餘州の津々浦々に三十四ヶ所の支店も持つてゐる假にも錢屋の當主の汝が、それしきの目腐れ金にビクついては世間の物笑ひだ、いつも云ふ通り、金は溜めて置くべきものではない、使へばこその金だ、この工事の物入が莫大だとはいへ家の身代から見れば山から土を運んだ

程にも應へはすまい、それも酒や女にたわけを盡すのぢやないもと〳〵私は裸一貫から仕上げた男子だから、好き好んでやる仕事の爲めなら、もとの裸一貫になつても悔みはせんぞ、それは始めから云つてある。

喜太郎。(悶々して)、酒や女なら法圖がございますがこの仕事には法圖がございません、お父さまの物をお父さまが使ひ果たされるといふのなら、それまででございますが、ある物には限りがあります、甑へ盛る水には限りがありません好きな仕事さへなされば、皆が宿無しになつても、お父さまはお構ひなされませんか？ 要藏、汝もそれで善いといふのか？

要藏。(銀烟管を燻らしながら)。何アに、そんな取越苦勞は要りません、今にこの潟一面が青田になります、米の中で餓死する者は居りません。

喜太郎。(情なさゝうな調子で)要藏は世間の噂通り、チと氣が狂れてゐるのだ、晝日中、眼をあいて夢を見つゞけてりやそうした囈言も平氣で云へる、お父さま、要藏可愛さに貴方まで何うかなされのではございませんか？ 見据の附かん仕事を何處までもやり通す氣でございますか？ 妻子眷族を日干にしても、この潟を埋めねばたりませんか？

五兵衛。(冷靜に)何うせ仕事となりや一か八かだ、一旦取りかゝつたら、家の土臺骨の割れるまでやるのが、若い時からの私の流儀だからな。

喜太郎。(焦立たしく)市兵衛、汝は先刻から默つてゐるが、眞實に錢家一家の爲めを思ふならお父さまに今一度、御考直しなさるやう、勸めて見てくれるが善い、それとも汝は見込があるとでも思ふのか？

市兵衛。イヤ、私は見込がある、無いとは申上られません、止めいとの仰せなら、今の中、止めたが得かとも思ひますが、それも大旦那さまの御了見次第で、唯、御指圖通りに動くより外はございません。

喜太郎。(頷いて)フン、では汝も今の中に止めたが善いと思うてゐるのだな？

市兵衛。(ため息し)仰しやる、仕事が仕事でございますでな。

（箱の上に白刃お見え、おまきは……）

おまき。（周章てた調子）ア、喜太郎もお千賀も來たのか。……大變な事を聞きました、謎除を作つてもく緑起くつれるといふではありませんか？　渴の寸の仕業でございませう、もう止めて下さい、止めて下さい、今にどんな災難が起るか知れません。

五兵衞。（輕く笑つて）とう〳〵婆さんまで嗅ぎ附けたな、……四ノ八ノから村微か、だがこの胸には南蠻鐵の筋金が入つてゐるぞハヽヽヽ

おまき。眞實に、この先何うなるか？

要藏。（嘲笑氣味で）お父さまが荒んだのだ、賴んで座んで貰つた譯でもないが、汝は錢屋を潰しに産れたのだ。

をしなけやゐられません、今に貴方も、日本一のお母さまだと云はれる時が來ませうよ、私も唯の町人ぢやない、二

おまき。（悲しさうに）ア、汝のやうな子を持つたのは何んといふ因果だらう、

お千賀。（眼を拭き〳〵）皆私が悪いのでございます……私が自分の我儘を張り通したので、要藏叔父さんも男の意地から斯うした途方もない仕事を御始めなさる、祖父さまが又その尻押をなさる、家が二つに斷れて今までのやうに面白く行かなくなつたのでございませう。お父さまも御氣の毒で、傍で見てゐられません、私はもう何んなに世間から惡口云はれやうと構ひませんから祖父さま、何卒貴方のお思ひ通りになさつて下さいませ……そして錢屋一家の圓く治まりますやうに……。

五兵衞。（意外の顔色で）、お千賀、本氣で云つてゐるのかい？

喜太郎。（叱るやうに）コレ、馬鹿を云ふな、日頃孝行な汝だから私思ひでそんな事を云だしたのだらうが、いけない、

それは止めとけ。

お千賀。否ゑ……あの要藏叔父さんを怒らせたのは矢張私が悪かつたのでございます、之までの我儘を許してさへ下されば……

五兵衛。フーン、今まであれ丈忌がつた汝が、要藏の嫁にならうといふのかい？

お千賀。（照れながら）ハイ、……それで家さへ圓く治まりましたら……

要藏。（鼻で笑つて）フン、お千賀が私の嫁になれば、私がこの仕事を止めるとでも思ふのだな、成る程、考へたな、ハゝゝゝ

お千賀。（眞赤に興奮しながら）さうさへなれば、私は何う云はれても構ひません、今まであんまり世間體を氣にし過ぎたと思ひます……お父さまも、さうなれば否やは仰いますまい。

喜太郎。（むせび泣を抑へて）……汝の心は察しる……私に附添うて來たのはそれを云はう爲めだつたか……心は察しる……

要藏。（狡さうに眼で笑ひ）。だがお千賀、折角だが私はその手は食はんよ、眞實は汝こそ一杯食はされてたんだぜ、私があゝして汝に執念く附纒うたのは、彈ねつけられるのを見越しての事だ考へても見るが善い、現在の叔父と姪とで本氣に夫婦になれるもんか、無理難題を持出して、それがいけなけやこの仕事と、だゝをこねる算段で、始めからかゝつた事さ、今更馬鹿を云つちやいかんよ。

お千賀。ヱ……ま、口惜しい、私何うしませう〳〵（と坐の片隅へ泣倒れる、おまきは寄つて宥めてゐる）

喜太郎。この人で無しめッ（と立かゝりさうにするのを、市兵衛、留める）

五兵衛。（笑つて）何アに、氣にかけるな、要藏めの負惜みだ、こ奴眞から惚れ込んでゐやがつた癖に今更嫁にならうと云はれりや白らばくれてお高く留まるんだ、色氣にまで[illegible]は禁物だ、要藏、何うだい、眞實を云へッ。

要藏。[illegible]この仕事で、[illegible]、これに[illegible]られませんしな。

[illegible]

お千賀、(悶えながら) 私は死んで了ひたい。

おまき。さういへば汝より、私の方が先に死んで了ひたい (涙を拭いてゐる)

五兵衛。安い生命だ、私はいつまでも生きてゐて、思ふ存分の仕事をやり貫かなけや、成佛出來さうもない二度と來られぬ此世だからな。

おまき。然ういふ貴方も折々お念佛を唱へなさるではありませんか？ 八十といへば先きが見えてゐる。口ばかり強う仰っても、歳といふものに、嘘は云へません。

五兵衛。ハヽヽヽこれぢやア宛で父子夫婦の喧嘩を見せつけに來たやうなもんだのう、鴉が笑ふだらう、見つともない、止めてくれい。

喜太郎。(充血した眼色で) 私は何うあってもお考直しを願はねば歸りません。

五兵衛 くどい事は云はんもんだぞ。

(孫兵衛、周章たゞしく駈け戻る)

孫兵衛。とんだ事だ〳〵。

おてつ。何事でございます。

庄七。津浪でも來ますかいな？

孫兵衛。今にやって來る……大嘯やって來よる、逃げ支度するが善い (云ひ〳〵作業小屋をのぞいて) 大變でございます……や、大旦那様始め本家の旦那様まで皆こゝへお越しでございましたか、これは何うもお生憎だとんだ事になりました。

五兵衛。何うしたんだ？ 大さう周章てゝゐるな。

市兵衛。村方に何か云分でもあるといふのか？

要藏。(起上って) 一體何うしたんだ？

孫兵衛。(息を切らせながら) 彦兵衛の宅へ行きますと、向ふでは村方の漁師等が寄合をやつて居りました……いろ〳〵談しても、頼み込んでも、いつかな受附けてくれません、執着く云ふと擲り殺すと嚇かしましてな、今に大勢でこゝへやつて來て、直接に談をきめると云ひます、蜂の巣をつゝきに行つたやうなものでございました、……もうアレ、あそこの土手まで押かけて來て居ります。あちらへお逃げなさつたら何うでございませう。

五兵衛。何に、村方の漁師共が押かけて來る？ (と戸外に出る)

要藏 (も立ち出て) 圖太い奴等だ、もう容赦はならん、土方人足共を呼び集めい、あべこべにやつ　けて、根性骨に應へさせてやらう。

喜太郎。(蒼ざめた顔色) 村方にまで憎まれちや錢屋ももう末でございますな。

五兵衛。あの土手の上を黑いものが浪のやうにうねつて來る、あれがそれだな……(暫らく見つめて) やつて來たら道理を云ふて聞かせてやらう、耳がありや分る筈だ……要藏騒ぐな、皆はあちらの小屋へ逃げて行け。

おまき。(涙聲で) 私はもう足が立ちません。

お千賀。お祖母さま、私が傍にお附添して居ります。

要藏。孫兵衛、非常の竹法螺を吹いて、土方人足共をこゝへ集めてくれ。

孫兵衛。へイ、さうどもせねば一大事でございます。

五兵衛。マア〳〵それはやめてをけ、却つて事が大きくなる。

要藏。孫はん、吹け〳〵……相圖の竹法螺を吹けツ。

五兵衛。さう周章てずとも善い。

(孫兵衛は海の方に向いて、竹法螺を吹立てる)

おまき。何うなるのであらう、こゝで殺されるのか？

おちか　皆一つ處に寄つて居りませう、何う成らうと構ひません。

おてつ。御心配なされますな、今に土方衆が寄つて參ります。

（向ふから漁師頭の、色の黒い手足の頑丈な眼の鋭く光る漁村の彦兵衛を先頭に、ガヤ〳〵云つて、漁師共が竹槍を持つたり、天秤棒を片手にしたりして、大勢押寄せて來る、蘆の間から土方人足が三人五人ずつ手に獲物を提げ、追々に出て來る、見る間にそれが多人數になつて、理兵衛、彌兵衛に率ゐられ漁師群と對抗して立留まる）

五兵衛。（聲をかけ）亂暴な事はしてくれるな、村方からは大人しく談をしに來た筈だ、然うだらうな？

彦兵衛。ウム、大人しく談して分りやこれに越した事はないんだが、いかに錢屋でも、お上でも、此方等を餓死させる奴は仇だ、容赦せんぞ……だが土方衆、汝等とは何も諍ひする事アない、兄弟喧嘩ア止めやうぜ。

土方の甲。何も喧嘩したくはねえが己等ア金で雇はれて仕事をしてゐるんだ、その仕事の邪魔許りされちや此方等だつて餓死の目に逢はアな。

土方の乙。さうだ〳〵、己等が折角打込んだ杭や粗朶をつゝき流しやがつて、無駄骨を折らせやがるぢやアねいか？

土方の丙。太い奴等だ。

漁師の甲。何んだい、奴等こそ人の漁場を荒らすんだ。

漁師の乙。先祖代々、傳つた稼業を取止られて堪るもんか、やつつけろ。

漁師等。やつつけろ（と動搖する）

彦兵衛。（制して）まア、まア待つてくれ、逸まるな、……オイ、土方衆、そりや汝等の云分が違つてるぜ、成る程汝等のやつた仕事を毀してる者が居るか知れんが、築いてはくづれ〳〵してたら仕事は何十年でも何百年でも續いて行かアな、汝等の飯の種が切れやせん、それは誰のお庇だ、禮を云ふても善い勘定だぜ。

土方の甲。（合點して）フーン、成る程な……

土方の乙。然う云やア然うだ。

土方の丙。三百や四百で生命を賣つちや引合んぜ。

彦兵衛。だから兄弟喧嘩はやめやう、早う行つて仕事に精を出しな、そしたら、今夜の中に又誰かくつして……

八・……。

（土方等は顔き合ひ、耳語き合ひ、三人、五人づゝ蔵の間へ消え散る）

理兵衛。コレ、何うしたんだく。（と叱るが手應えもない）

孫兵衛。オイ……何うした……腰拔け……逃げるつて法はない。（焦き立ても一人も、引返さない）

要藏。（興奮して）金で傭うた奴ア賴みにならん、私が相手になつてやる（飛出やうとするのを五兵衛や市兵衛が引留める）

五兵衛。負傷でもしてはならん、汝は大切な體だ……私が談をつけるから扣へて居れッ。

要藏。でも年老のお父さまにこそ負傷でもさせてはなりません、何アに、雜魚らが……

五兵衛。（叱るやうに）扣へいといふに……彦兵衛どんとやら、私が五兵衛だ、こん度の波除工事で村方一統へいろく心配をかけて濟まないな、十分に渡りが附いてゐなかつたのは、此方の手落で幾重にも謝ろうが、莫大の金をかけてこの水溜りを新田にするのは、此方の欲得づく一方ぢやない、皆にもそれぐ分け前が廻るんだから、そこをよく吞込んでゐて貰ふたら、大人しく話が附かうぢやアないかな何うだろう？

漁師の甲。分け前なんか當になるもんか。

漁師の丙。猫の額ほどの田地なんか貰つてもつまるもんか、此方には漁場が要るんだ。

漁師の聲。然うだ然うだ、漁場が要るんだ。

彦兵衛。（大聲に）まア、靜かにしろ、……そりや御大家のなさる仕事だ、五年十年先の事を考へりや村方の爲にもなるかも知れんが、此方等のやうな貧乏漁師は、右の手で捕つた魚を左の手で米にしなけや、妻子眷族の生命が繋げませんでな、漁場を出地にせられちや堪りません、お手當なんさ貰かうとも思ひませんから、埋立を止めて貰ふか？　それとも何うあつても止められんか、二つに一つの返事を聞かせて貰ひませう？

要藏。汝等に弁かされて、止めるやうな仕事なら始めからやるもんか。

漁師等。何んだッ？　止めんていふの（と氣色ばむ）

五兵衛。要藏、默つて居れッ

要藏。殺されても止めるもんかッ

漁師等。（激昂）殺せ、殺せ……皆殺しにしろッ。

彦兵衛、まア騒ぐな……私が手を上げん中は、貧乏搔きもすなと云つてあるぢやないか。

五兵衛。要藏、扣へて居れッ、……（小首を傾けながら）……フーム、では若し潟の中に、魚一疋もゐなかつたら、田地にしても苦情はない筈だな？

彦兵衛。（嘲笑的に）ところが生憎魚が居りますのでな、それが漁師共の飯の種になりますので、埋められちや皆が干乾になるて勘定でございますよ。

五兵衛。フーン、成る程……魚が苦情の種だな。

彦兵衛。（強い語氣で）だから思ひ切つて埋立を止めて貰ひませう、それが忌なら、力づくでも止めさせて見せる、皆がその爲めに生命がけで出て來ました。

漁師等。何ちか返事しろッ、水杯までして出かけたんだ。

五兵衛。話はよく分つたが、些と考へて見やう、四五日の間猶豫して貰ひたい。

彦兵衛。この場で否應の返事を聞かせて貰ひませう？

五兵衛。何しろこれまでに何十萬の金銀をこの潟へ流し込んだのだ、お上からも許可の出た仕事だし、この場で善い返事の出來んのは分つてゐさうなもんだな。

漁師等。直ぐ返事をしろ……ごまかすない……

彦兵衛。ちやア四五日待つたら、はつきり否應の返事を聞かれませうな、その期になつて又待てと云うても、こんどは承知しませんぜ。

五兵衛。(キッパリした口調で)イヤ、私も五兵衛だ、決して胡麻化しの返答はせぬ、今日はこれで返つて貰ひたい。

要藏。(五兵衛に)それから工事の邪魔をせぬやうに念をおしておをきなされ。

彦兵衛。(鼻であしらひ)、魚のする事は仕方がございませんでな。

要藏。(ムツとして)、先刻汝はなんと云つた、問はず語りに白状したくせに……

五兵衛。まア、汝は默つて居れッ。

要藏。よし、ぢやア今夜から、髪毛の附いた魚は見つけ次第、銛で突刺してやらう。

漁師等。何に云やがる……たわけめ……氣狂ひめ……

要藏。(奮然として)何んだ(刀に手をかけ突進する、皆が留める)

五兵衛。コレ〳〵血氣に逸るではない、おてつ、あちらへ連れて行け。

おてつ。若旦那あちらへ參りませう。

要藏。イヤ、お父さまの體に指でもあてさせてはならん、こゝは動くもんか。

五兵衛。今日は皆、大人しく歸つて貰ひたい。

彦兵衛。ぢやア四五日中に、乾度、返答を聞きに來ますぜ、

五兵衛。(頷いて)堅く約束した。

彦兵衛。皆も聞いた通りだ。今日は靜かに引上げやう……己が承知してゐる……引上げやう〳〵。

(不平を呟くもの、亂暴したがるもの、ガヤ〳〵ザワ〳〵して一同は引上げて行く)

要藏。(後を睨んで)明盲め、脅かされてこの仕事を止める私だと思つてるか? お父さま、貴方もまさか、あれ位な事で怯氣は附きますまいな。

五兵衛。萬事はこの胸にある、まア小屋に入ろう、皆もさぞ心配したろうな。

要藏。止めるのは私は何處までも不承知だ、そんな意氣地無しになるよりまだ奴等に殺されたがましだ。

市兵衛。まア〳〵皆が無事に引上げましたのでホッとしました。
理兵衛。(額の汗を拭き〳〵)何んな事になるかと思ひました。
孫兵衛。何しろ一人や二人なら叩き合ひもやりますが、アゝ大勢ぢや敵ひません、土方共も一向頼になりませんでな
(冷汗を拭いてゐる)
五兵衛。土方衆も恰悧だから生命の安賣はせんのだハ………(小屋へ入って)皆、恐かつたゞろうな。おまきは何うした?
おまき。私はお念佛許り唱へて居りました……恐い事悲い事……もうこんな處には一刻も居られゃせん、歸ります。
お千賀。私等は皆殺しにされるのかと思ひました……覺悟はしてゐても、體の慄が止みませんでした。
五兵衛 (考へながら)、何しろ皆生命がけでやつて來たので恐ろしく殺氣立つてゐたな、千石船を呑む大波に面と向いても驚かん私だが、土手の上をうねつて來たあの人波はチョットもの凄かつた、胸が冷りとした漁師等も馬鹿にはならん、それでも私は弱味は見せなかつたが……
喜太郎。(蒼青めた顔色で)お父さま、まア無事で何よりでございましたが、この仕事一つの爲に家族の者も皆氣許り揉んで居りますし、外からは又あゝして打つの、殺すと騒ぎ立てますし、これぢやいかに世助け、人助けと御力みなさつても、力み甲斐がないぢやアございませんか? 今のやうに手詰の談になつたら、曖昧な事で引延しも出來ますまい家族の爲めなり、村方の爲めなり、キッパリ止める御決心をなさるやうに御願ひします。
五兵衛。私は始めて恐ろしい者に出逢せたやうな氣がするが。こゝで負けて何うなるもんか萬事は私の胸にある
おまき。(諫めくやうに)剛情な貴方のお産れ附きでも生命が無うなつてはそれ限りでございますよ。
五兵衛。それ丈は眞實だ、だから生きてる中にやれる丈はやるんだ。
(使の丁稚が状箱を片手に走つて來る)
丁稚。旦那樣江戸の支店からお　脚が參りました。

五兵衛。（キッパリした口調で）イヤ、私も五兵衛だ、決して胡魔化しの返答はせぬ、今日はこれで返つて下さ

要藏。（五兵衛に）それから仕事の邪魔をせぬやうに念をおしておきなされ。

彦兵衛。（鼻であしらひ）、魚のする事は仕方がございませんでな。

要藏。（ムッとして）、先刻汝はなんと云つた、問はず語りに白狀したくせに……

五兵衛。まア、汝は默つて居れッ。

要藏。よし、ぢやア今夜から、髪毛の附いた魚は見つけ次第、銛で突刺してやらう。

漁師等。何に云やがる……たわけめ……氣狂ひめ……

要藏。（奮然として）何んだ（刀に手をかけ突進する、皆が留める）

五兵衛。コレ〳〵血氣に逸るではない、おてつ、あちらへ連れて行け。

おてつ。若旦那あちらへ參りませう。

要藏。イヤ、お父さまの體に指でもあてさせてはならん、こゝは動くもんか。

五兵衛。今日は皆、大人しく歸つて貰ひたい。

彦兵衛。ぢやア四五日中に、乾度、返答を聞きに來ますぜ、

五兵衛。（頷いて）堅く約束した。

彦兵衛。皆も聞いた通りだ、今日は靜かに引上げやう……己が承知してゐる……引上げやう〳〵。

（不平を呟くもの、亂暴したがるもの、ガヤ〳〵ザワ〳〵して一同は引上げて行く）

要藏。（後を睨んで）明盲め、脅かされてこの仕事を止める私だと思つてるか？　お父さま、貴方もまさか、あれ位な事で怯氣は附きますまいな。

五兵衛。萬事はこの胸にある、まア小屋に入ろう、皆もさぞ心配したろうな。

要藏。止めるのは私は何處までも不承知だ、そんな意久地無しになるよりまだ奴等に殺されたがましだ。

市兵衛。まア〳〵皆が無事に引上げましたのでホットしました。

理兵衛。(額の汗を拭き〳〵)何んな事になるかと思ひました。

孫兵衛。何しろ一人や二人なら叩き合ひもやりますが、アゝ大勢ぢや敵ひません。土方共も一向頼になりませんでな

(冷汗を拭いてゐる)

五兵衛。土方業も怜悧だから生命の安賣はせんのだハ………(小屋へ入って)皆、恐かつたゞろうな。おまきは何う
した?

おまき。私はお念佛許り唱へて居りました……恐い事悲い事……もうこんな處には一刻も居られません、歸ります。

お千賀。私等は皆殺しにされるのかと思ひました……覺悟はしてゐても。體の慄が止みませんでした。

五兵衛(考へながら)、何しろ皆生命がけでやつて來たので恐ろしく殺氣立つてゐたな、千石船を呑む大波に面と向い
ても驚かん私だが、土手の上をうねつて來たあの人波はチョットもの凄かつた、胸が冷りとした漁師等も馬鹿にはな
らん、それでも私は弱味は見せなかつたが……

喜太郎。(蒼青めた顔色で)お父さま。まア無事で何よりでございましたが、この仕事一つの爲に家族の者も皆氣許り揉
んで居りますし、外からは又あゝして打つの、殺すと騒ぎ立てますし、これぢやいかに世助け、人助けと御力みなさ
つても、力み甲斐がないぢやアございませんか? 今のやうに手詰の談になつたら、曖昧な事で引延しも出來ますま
い家族の爲めなり、村方の爲めなり、キッパリ止める御決心をなさるやうに御願ひします。

五兵衛。私は始めて恐ろしい者に出逢せたやうな氣がするが。こゝで負けて何うなるもんか萬事は私の胸にある

おまき。(諫めるやうに)剛情な貴方のお生れ附きでも生命が無うなつてはそれ限りでございますよ。

五兵衛。それ丈は眞斯だ、だから生きてる巾にやれる丈はやるんだ。

(使の丁稚が状箱を片手に走つて來る)

丁稚。旦那樣江戸の支店からお脚が參りました。

五兵衛。（キッパリした口調で）イヤ、私も五兵衛だ、決して胡魔化しの返答はせぬ、今日はこれで返つて貰ひたい
要藏。（五兵衛に）それから工事の邪魔をせぬやうに念をおしておきなされ。
彦兵衛。（鼻であしらひ）、魚のする事は仕方がございませんでな。
要藏。（ムツとして）、先刻汝はなんと云つた、問はず語りに白状したくせに……
五兵衛。まア、汝は默つて居れッ。
要藏。よし、ぢやア今夜から、髮毛の附いた魚は見つけ次第、銛で突刺してやろう。
漁師等。何に云やがる……たわけめ……氣狂ひめ……
要藏。（昂然として）何んだ（刀に手をかけ突進する、皆が留める）
五兵衛。コレ〳〵血氣に逸るではない、おてつ、あちらへ連れて行け。
おてつ。若旦那あちらへ參りませう。
要藏。イヤ、お父さまの體に指でもあてさせてはならん、こゝは動くもんか。
五兵衛。今日は皆、大人しく歸つて貰ひたい。
彦兵衛。ぢやア四五日中に、乾坤、返答を聞きに來ますぜ、
五兵衛。（頷いて）堅く約束した。
彦兵衛。皆も聞いた通りだ。今日は靜かに引上げやう……已が承知してゐる……引上げやう〳〵。
（不平を呟くもの、亂暴したがるもの、ガヤ〳〵ザワ〳〵して一同は引上げて行く）
要藏。（後を睨んで）明盲め、脅かされてこの仕事を止める私だと思つてるか？　お父さま、貴方もまさか、あれ位な事で怯氣は附きますまいな。
五兵衛。萬事はこの胸にある、まア小屋に入ろう、皆もさぞ心配したろうな。
要藏。止めるのは私は何處までも不承知だ、そんな意久地無しになるよりまだ奴等に殺されたがましだ。

市兵衛。まア〱皆が無事に引上げましたのでホツトしました。

理兵衛。(額の汗を拭き〱)何んな事になるかと思ひました。

孫兵衛。何しろ一人や二人なら叩き合ひもやりますが、アゝ大勢ぢや敵ひません、土方共も一向殺になりませんでな

(冷汗を拭いてゐる)

五兵衛。土方衆も怜悧だから生命の安賣はせんのだハ…………(小屋へ入って)皆、怖かつたどろうな。おまきは何うした？

おまき。私はお念佛許り唱へて居りました……恐い事悲い事……もうこんな處には一刻も居られゃせん、歸ります。

お千賀。私等は皆殺しにされるのかと思ひました……覺悟はしてゐても、體の慄が止みませんでした。

五兵衛(考へながら)、何しろ皆生命がげでやつて來たので恐ろしく殺氣立つてゐたな、千石船を呑む大波に面と向いても驚かん私だが、土手の上をうねつて來たあの人波はチョットもの凄かつた、胸が冷りとした漁師等も馬鹿にはならん、それでも私は弱味は見せなかつたが……

喜太郎。(蒼青めた顔色で)お父さま、まア無事で何よりでございましたが、この仕事一つの爲に家族の者も皆氣許り揉んで居りますし、外からは又あゝして打つの、殺すと騷ゞ立てますし、これぢやいかに世助け、人助けと御力みなさつても、力み甲斐がないぢやアございませんか？今のやうに手詰の談になつたら、曖昧な事で引延しも出來ますまい家族の爲めなり、村方の爲めなり、キッパリ止める御決心をなさるやうに御願ひします。

五兵衛。私は始めて恐ろしい者に出逢せたやうな氣がするが。こゝで負けて何うなるもんか萬事は私の胸にある

おまき。(諫めくやうに)剛情な貴方のお離れ附きでも生命が無うなつてはそれ限りでございますよ。

五兵衛。それ丈は眞平だ、だから生きてる中にやれる丈はやるんだ。

(使の丁稚が兆衛を引手に走つて來る)

丁稚。旦那様江戸の支店からお脚が參りました。

喜太郎。ア、御苦勞……途で一揆に逢はなかつたかい？　店には變つた事はなかつたかい？
丁稚。否え、漁師等には逢ひましたが他に何も變つた事はございません唯早くお戻りなされるやうに、番頭さんが申されました。
（五兵衛は横合から狀箱を取上げて、中を披いて讀む）
喜太郎。江戸から何を云ふて來ましたか？
おまき。（眉をひそめ）又何か心配事でも出來ましたか？
五兵衛。（莞爾）江戸の市中が大火といふ急の報知だ……全燒になりさうだと云つて來てゐる……ソレ見ろ、又一時にどかりと大儲けが來た。
喜太郎。エ、……江戸市中が全燒でございますか？
おまき。困る人が澤山出來ませう、支店も燒出されでございませうな、ア、心配の種許り殖える、澤山は忌だ……
お千賀。眞に恐ろしい事許りでございますな。
五　衛　（チット考へながら）フム、そう云やア金儲けて奴はとかく人の難儀を見込むやうで、何處か心に疼い刺がさゝるが、その儲けた金を斯うした大仕事へ注ぎ込むのなら罪も功德になる、喜太郎かねて買占めて置いた津輕の檜山の檜が、一本一本金の延棒位の高價になるぞ、この工事の費用なんか、もう些とも心配はいらんぞ。
市兵衛。（晴れ〴〵しく）では……まだ福の神がお見離されませんな……
喜太郎。でもそれまで潟の中へ注ぎ込んだのぢやア家の、たゝにはなりません。
おまき。（心細さうに）私はもう歸ろう、……頭がふら〳〵する。
お千賀　私の乘つて來た鶴舸をお祖母さまへ上げませう、鶴亟屋は何處へ行きましたか？
孫兵衛。何處へ行つたのでございますか。呼んで來ませう……
喜太郎。（何案じながら）店も氣がかりだから、私も御一緒に戻りませう、お千賀も行かう、途中大丈夫だなア

丁稚。何も別條はございません。

孫兵衛。（歸つて來る）、手なぐさみで夢中だ、早く來てくれ……駕籠やも一つ、見附かるとよございますか？

喜太郎。イヤ、私は村外れまでぶら〱歩かう、もう一挺も居らんやうだから。

五兵衛、さうか、皆歸るか、それもよかろう、私は殘つて相談だ。

おまき。（疳高い調子で）止めて下さいよ、要藏、汝も親兄弟をのろひ殺す氣でなけや、早う止めてくれ止めてくれ、……

（云ひ〱、お千賀に扶けられて駕籠に乘る、今一つのはお千賀が乘る、喜太郎は手代庄七や、丁稚を連れて力なげにとぼ〱歸つて行く）

五兵衛。皆のあゝして心配するのも無理ではないが、遊んで樂に暮らされゝば彼等は幸福だと思うてゐる、私は何んなに苦んでも仕事をするのが樂みだ、世界が違ふなア、、、、。

要藏。あの人等が皆歸つてくれて、こゝは私等の世界らしくなりましたな、せい〱する。

五兵衛。杭をたゝき込む音がやつと耳につき出した、あちらからも。こちらからも、あれは、土地が産れる聲だな（愉快さうに聞入る）

市兵衛。それにしましても。四五日の中に漁師等へ返答をすると仰つたのは、何ういふお腹でございますか？

理兵衛。まさかこのまゝお中止なさる譯はございますまいな？

孫兵衛。でも皆殺しにされては堪らんからな。

五兵衛。ウム、理兵衛や孫兵衛へは後から相談する、まア市兵衛と要藏へ先に話さう。

市兵衛。では汝さん等は、その間に仕事場を見廻つて貰はふか？

（二人はヘイ〱と云つて、立去る）

五兵衛。おてつには茶でも入れかへさせうか。

おてつ。（戸外の粗朶に腰かけてゐたが）。ハイ、唯今……（と入つて來る）

五兵衛。茶が濟んだら戸外へ出てゐてくれ。

おてつ。承知いたしました、もう出殼になつて居ますからとりかへませう。

要藏。早くして外づしてくれ、大切な相談事だ。

五兵衛。そこらへ立つてゐて、誰も寄附かぬやうに見張つてゐてくれ、汝は内輪同志だ。

おてつ。(茶を運んで)承知いたしました、誰も近寄らせはいたしません。(やがて戸外に立出る)

五兵衛。まアずつと近くへ寄れ、……汝等には何か善い思案があるかい？

要藏。(決意の色)もう斯うなれば仕方がございません、改作奉行のお力を藉りて、亂暴な漁師共を片ツ端から引縛るより他に手はありますまい。そしたら邪魔する者は無くなります。

市兵衛。(腕叉しながら)何うしてもこの仕事をやり貫かうとすれば、それより外に手はないかも知れませんが、それも少と無慈悲な仕方かとも思はれますでな。

五兵衛。人を立てるか、自分を立てるか、二つ一つの場合だが、漁師等の云分を通せば、私等の事業は挫ける、私等の事業が仕了されたら漁師等の身も立つて行く、だから、此仕事は止められんが、先刻の漁師共の一揆が人波をうねらせて押寄せたのを見た時、私は何んだか頭が下るやうな氣がした、あの一本氣な生命がけの切尖には何んでも粉微塵になるとさへ思つた、土方等が散り〳〵ばら〳〵に逃げたのも、一つはその氣合が分つたからだらう、お上の力にすがつてそれを縛つたり、牢へ入れたりしては、濟まん事だ、それで無うても之まで私の仕事を助けて海の上で死んでくれた者等の恩を折々夢に見る、それが氣になつてならんからな。

要藏。縛つて牢に入れても、彼等の生命に別條はありませぬ、その留守の間に、水潟を田地に作りかへてやつたら、皆つて見て今までの愚さを後悔するにきまつて居ります。

五兵衛。イヤ、漁場は共有(もやひ)だが、田地となるとめい〳〵分持だから漁師等がそこにも氣を廻はしてゐるのだ、そりや尤だ……そこでちと思ひ切つた逆手だが、潟の魚をさて一疋殘らず無くしたら、彼等もあきらめを附けやう、否でも應

でも米を作る事に自づと頭が向直るに違ひない。

要藏。（五兵衛の顔を見入って）さ、一疋殘らず取り盡す方法でもございますか？

五兵衛。（笑って）、それが切支丹ばてれんだ……そして漁師等には當分食ひつなげるやうな手當をする、そこは市兵衛の才覺があろう、心得の慥な者は土方人夫に使つてやれば善い。そしたら私等の神業もすら〳〵と運んで行かう。

市兵衛。（頷きながら）成る程潟の魚が根絶しになれば苦情の種も根絶しになる筈でございますが、何うしてそれが出來ますか？

五兵衛。（小聲に）石灰だ……濱庫には石灰が何百俵も積んである筈だ。あれに、それ、アメリカ渡りのアイゴ油を交ぜて、潟の中に沈める……こつそり、誰にも悟られんやうにな。

要藏。（膝を拍って）成る程……親父は親父だ。

市兵衛。それで潟の魚はそつくり死にませうか？

五兵衛。まアやつて見い……屹度死ぬ……何萬といふ魚が白い腹をかへして、潟一面に浮上るだろう？（顔面神經がピリ〳〵動いて來る）あんまり後生はよくない……生物の生命を取るのは少い時から私は嫌だ……だが。魚は漁師等の身代りだ……致方がない……。

要藏。善い思附だ、やりませう。

市兵衛。物は試しでございます、やつて見ませう。

五兵衛（潟を見返って）私の一言で、何百萬の魚が死ぬのか？　南無阿彌陀佛。……

要藏。お父さま矢つ張信心氣が、出ますかな？

五兵衛。ウム……前から思立つてた事だ、これを機會に私は善光寺へお詣りする……その留守に市兵衛。うまく切盛してくれ。

要藏。善光寺へ？……矢つ張お藏だ。

五兵衛。そゝでこの仕事が首尾よく成就したら私は老後の思出に、又船へ乗つて大海の上へ出て行から。陸の上ではいろんな面倒な事が多くてうるさい。矢ツ張、私は海で生きて海で死ぬのが性に合ふらしい。

要藏。（眼を瞠つて）、本氣で仰りますか？

市兵衛。大旦那様、もうお歳を考へなさらんといけません。

五兵衛。歳を考へると、先がだん〳〵詰まつて來るから一日も早く大海へ出たいのだ……まア、それはそれだ。一つ潟内を見廻つて來やう。

要藏。御案内しませう、そこに船が來てる筈でございます。（三人起上つて戸外へ出る）

おてつ。誰も近寄る者はございませんでした…… ア、若旦那様おほころびが……

要藏。何アに構ふもんか。

五兵衛。（笑つて）まア縫うて貰へ、私等は一足先へ行く、市兵衛、來い（と土間へ入る）

おてつ。（媚びるやうに）お千賀様のお話を皆聞いて居りました、憎らしい（と抓める）

要藏。……イタタ……でも皆、汝に心中立てだよ、嬉しいか？

おてつ。存じません……殿方の御心は何が何やら分りませんもの。

要藏。（笑ひながら）疑ふなら一緒に死んでゞもやる。

おてつ。エ？ （顔を見入つて）ではこのお仕事が御止めにでもなりますか？ さうでございますか？……それでそんな事を仰るのではございませんか？

要藏。仕事が止めになりや生きてゐるもんか、そしたら汝とこの潟で心中だ。

おてつ。では矢ツ張仕事と御心中なさるのではございませんか？……つまらない。

要藏。だが安心せい、……當分生命は入用だ。

おてつ。では又御散財仰つたの？ 憎らしい。

要藏。(抱きよせて)私は可愛いよ。

おてつ。……ア、お綻びを縫ひませう。

要藏。縫はんでも善い。

おてつ。……ア、雁がもう來ました。

要藏、(空を仰いて)フム、あそこを渡つてゐやがらア……見ろ、見ろ、大分大きな群だ、潟が埋りや今に彼等も宿無しだ。

幕

第三幕

寺中村の五兵衛隱居所の奥坐敷、上手一間の床の間には長ケ崎の開港場の風俗畫を軸にして架けてある、その前に、銀盆に載せた地球儀の置物、九谷燒の花瓶には白菊など薫り、違ひ棚には八角水晶に珊瑚の粒の揃つたのを一つ置に嵌め込んだ置時計など飾つてある、横手の丸窓のギヤマンの障子には羅紗がかゝり、正面は印度更紗模樣の襖、三本マストの帆前船の油畫の掛額、下手は濃緑のギヤマンの障子に矢張羅紗がかゝつてゐる、坐敷一面に燃えるやうな緋の毛氈を敷きつめ、熊の毛皮がひろげてある。

○

幕明くと舞臺暫く空虚やがてドヤ〳〵と足音が聞えて、今、旅から歸つた許りの被布姿で五兵衛が入つて來る、後から要藏、おてつが茶を運んで來た

おてつ、嘸御疲れでございませう。……大新造樣もお臥りになつてゐるお居室を變へやうと仰いますが、まだお動きになつては惡うございますで……

五兵衛。イヤ、此室、廣くて善い、隨分草疲れたぞ早駕籠で揺られ通しだから、腰ツ骨が痛くなつた。

要藏。(のびをして)一風呂浴びんと體が元へ戻つて來んよ。

おてつ。お風呂も今直きに沸くでございませう。お留守の間にとんだ事が降つて湧きまして、大御新造樣始め皆さ

許りして居ります、旦那様方のお歸りを何れほどお待ちしたか知れません。

五兵衞。（苦笑）ウン、とんだ災難だ……こんな大事になろうとは思ひがけなかつた。

要藏。（吐き出す樣に）何しろ下らん事が起つたもんだな、これも畢竟漁師共が馬鹿過るからた

おてつ。死んだ魚を取つて食べずともの事だと家では皆申して居りますが、不向見にそれを食べた村方の漁師や女房子供は一夜の中に死ぬやら、ひどい吐瀉をやるやら大騷ぎでございますさうな、金澤の御城下まで賣に行つたものも居るさうで、そこでも大さう病人が出來てゐると申す事でございます。

五兵衞。（顏を曇らせて）ウム……左樣ださうだな。

要藏。御城下へまで飛火か……こ奴許りは弱つたな。

市兵衞。（沈んだ顏色で入つて來る）ヘイ、お歸りなされませ、お疲れさまでございませう。差立てました飛脚とは東岩瀬の驛で御逢なされたさうで、思つたより御早いお着でございました……おてつさん御風呂はまだかい？

おてつ。ハイ、行つて見て參りませう。（入る）

五兵衞。後生願ひに善光寺樣へ參詣した留守中に大勢の人死を出すほどの大騷動が持上ろうとは夢にも思ひがけなかつた。これで佛の功德も帳消しか？ 五兵衞、一生の不覺だつたな。（考へ込む）

市兵衞。（力なげに）ヘイ、誠に何うも困つた事で。

要藏。一體、何んな樣子だ。いろんな噂が立つてゐるやうだが？

市兵衞。世間の口といふものはうるさいもので、尾に鰭附けてさまざまの事を申ふらせますが、有りやうは斯うでございます、……あの夜中に石灰俵を投込みましてから二三日立つと潟の水の色がイヤに濁りましてな、魚が白い腹を返してヒクヒク浮上ります、その數が日に増し殖えて終には潟一面寝雪でも溶かし込んだやうに眞白に見えて來ました。ので皆が前代未聞の珍事だと云つて、薄氣味惡がつて騷ぎ立てるのでございます。

要藏。（嘲るやうに）フーン、あの時一揆騷ぎをやつた漁師等も呆れて腰を拔かしやがつたろうな、それ丈けは腹が癒える。

市兵衛。あの方はこれ〳〵手を廻して、はめられる丈は金轡もはめましたし、何しろ潟の魚が死んで浮出すといふのでアッ氣に取られましてな、一揆騒ぎ處ではなくなつたのでございます、始めの中は、潟の中に大蛇が落込んで死んだのでその毒に中つて魚が死ぬなどといふ噂も立ちました、皆が恐れて魚を取つて食ふ者も居りませんでしたが、矢ツ張手間入らずで、眼の下三尺もある大鯉やら、珍らしい大鯰などが拾へるのを漁師も唯見ては居られなかつたのでございませう、そこは慾で一人が手を出すと、他から競り合ひになる、終には金澤の城下へまで賣りに行く、すると魚毒に中つて死人や病人があちらにもこちらにもバタ〳〵出來ましてな、引つ繰り返すやうな大騒動になりました、あの濱村の漁師頭の彦兵衛も矢ツ張、それで二三日の病ひで沒くなつたさうにございます。

五兵衛。打たれたやうに)あの元氣な男までが……ヤレ〳〵……

市兵衛。他にも今までに、二十何人か魚毒に中つて死にましたさうで、病人は數限りもないといふ事でございます、何しろとんだ事になりました。

五兵衛。(ため息)魚の生命丈取れば濟む事だと思つたのに、それ丈大勢の人間の生命を取つたのかな? 矢ツ張私も目先の見えん人間だつたな。

要藏。漁師等が目先の見えん事をするのが悪いんだ。

市兵衛。そうした騒ぎでございますから、お上でも捨て置けん事になりまして、潟の中へさぐりを入れますと、水の底から例の石灰俵が續々揚つて來ます、それを證據に嚴しい御詮索が始まつて、あの孫兵衛も理兵衛もとう〳〵、昨夜お召捕になりました、この先何うなります事か?

五兵衛。二人とも召捕られたのか?……あの潟を埋めにかゝつて、此方が潟に埋められるのか? これ許りは私が生涯の誤りだつたな。

要藏。(平氣らしく)おとさまともあろう者が、何んの、これしきの事で悄げたり、肌したりしちや日頃の箔が落ちますぜ。もつと元氣を御出しなさい、潟の工事を濟ませたら又大海の上へ乘り出すとまで勢込んで居なさつ

りませんか？

市兵衞。（勵ますやうに）こん度の事も成程大事には相違ありませんが、日頃お上との御緣故も深い當家の事でございますから、この先何うなろうと、そこは何んとか錢が附いて大した仕置にもならず落着もしませうが、斷うなればあの埋立工事は世間への遠慮一つでも、止めねばなるまいと思ひます。

要藏。イヤ、魚が皆死ん了へば苦情の種は無くなつたのだから、もうあの仕事にケチをつける者は居らん筈だ、私は何處迄も遣り通す氣だ。

五兵衞。（首を掉つて）イヤ〳〵、こん度の人死で、この仕事にケチが附いた、假令お上からのお咎が大した事でないにもせよ、何十人の人殺しをした者がぬけ〳〵と平氣な顏を晒らして暮らされる筈がない、數へといふものは皆一つで聞いて見ると切支丹でも善光寺様でも、神佛の前に人間は皆同じ價値だといふのだ、それは眞實だ、人間が人間を殺して、唯で濟まされる譯はない、屹とその報があるぞ……私はその應報を受けやう（懷から取出した水晶の念珠繰つてゐる）

要藏。（冷笑の調で）ハ……たつた、一度善光寺詣りをしたお庇で、お父さんは馬鹿に抹香臭い事を云ひ出しなさる戲談ぢやアない、世扶け人扶けの神業をやる人間は、世間並みの三文奴とは初めから出來が違つてゐますよ、あれ丈の大仕事をやるに、二十人三十人の人死が何んだ、死んだ者はそれこそ前世の約束だ、遺族が困りや金でもやつたら濟みますよ、お父さん何うしても歲は爭はれませんな。

五兵衞。金なら金で拂へるが、人間の生命は、矢張人間の生命で拂はなけりや勘定が濟まない。

要藏。私はそんな事は御免だ。

おてつ。（出て來る）あの篠原の旦那様がお裏門から御微行で見えましたが、……それから御風呂はもう立つて居ります。

五兵衞。篠原様が……風呂は後にせう、市兵衞、一寸と御迎ひに……。

市兵衞。ヘイ、畏りました……裏門からだな？

おてつ。ハイ、左様でございます……私が御案内いたしませうか⁉

市兵衛。イヤ、私が行く……（入る、おてつもつゞく）

要藏。篠原様に伺ふたら、この處置は何うなる御見込か、大抵分りませうな？

五兵衛。フム、篠原様の微行ぢやヤ、何うせ碌な事はあるまいな。

要藏。（輕蔑するやうに）あの人は來る度びに、何んぼうかづゝ強請つて行きますが、今日も亦御冥加金の催促でございませうな。

五兵衛。然うかも知れん、そのお庇で、武士が町人の手先になつて働いてくれるのだ、イヤ加賀百萬石の大藩が錢屋の指圖一つで働いてゐるのも、元はといへば矢張金沙汰だからな、考へて見ると淺ましいもんだ。

要藏。それ丈の器量が此方にあるのだから淺ましいどころか、威張れたもんではありませんか

五兵衛。（沈んだ顔色で）私は今までは然う思つてゐたが、金の味方は便にはならん、そこは日稼ぎの土方業も百萬石の大名も差別はない、あの一揆騷ぎで押寄せた漁師等ほどの生命がけで働く者が揃つたら何んのあの小い潟一つ埋まらん筈はないのだが、此方は稼業の氣でゐても矢ッ張、金業だつたのだ、そこへ早く氣が附いたらあゝした無理をして人死はなさなかつたらうにな。

要藏。ハ……又しても愚痴つぽい事を……ア、見えたやうだ、（二人は下手で迎へる）

篠原監物。（四十左右の、色の青白い男子、羽織袴で、市兵衛の案内につれて入り來る、ソワ〳〵した落着かぬ様子）、突然にやつて來ました、チと急に御話したい事が出來てな。

五兵衛。善うこそ……實は父子共まだ旅から歸りました許りで衣服も改めて居りません、御覧下されませ。

篠原。（頷いて）左様ださうな、それはさぞ御疲れであらうが、……實は一大事が出來したのでな、（云ひ〳〵坐を見廻し）何時もながらこのお座敷へ入ると、どちらを見ても珍らしい物づくめで何んだか話に聞いた異國へでも渡つたゃ氣持がする、我々の住居とはまるで別天地だ、五兵衛さんのする事なす事が世間並外づれてゐるの

はれますなハヽヽヽ。

五兵衛。ヘイ、物奇のやうには見えませうが斯うした飾り附をして居ますと少しは異國にでも居る氣持になれます

だがこれは眞、眞似事でございますよ。ハヽヽ。

（おてつお茶を運ぶ）

要藏。一大事と仰るのは河北潟の一件でございませうな？

篠原。（頷いて）、それもある、潟の底から俵詰の石灰が揚つたといふので嚴しい詮議が始まつてゐるが、その犯人の見當も何うやら附いたらしい。（ヂロヂロ二人を見る）

要藏。（平氣な口調で）だが、それしきの事は高の知れた罪狀ではございませんか？故意（わざ）と人を殺さう爲めに毒を盛つた譯ではあるまいし、大ぴらに藩の御許可を受けて取かゝつた國益になる大仕事でございますから、少々の誤ちが出來したつて、大目に見て貰ふのが當り前だと思ひます。

篠原。そう云へば然うかも知れぬ、だがそれ許りではない、惡い時には惡いもので實は津輕の檜山買占の一件で、藩から藩へ掛け合ひが來てな、これが一大事になりかけてゐるのだ。

五兵衛。（顏色を動かし）エ、……檜山の買占めの一件が？實は今度の江戸の大火で、あの檜山の價が何層倍にも騰り上つたのを福の神が舞ひ込んだと許り思ひましたが、それが何うしたのでございます？。

篠原。さ、その大火で江戸の將軍家から津輕藩へ檜山伐り出しの掛合ひが行つたのだ、そこで津輕藩では早速、檜山の伐り出しに取りかゝろうとすると、加賀藩の名でそれを一手に買占めてある事が知れて來た、これが表沙汰になると御法度破りの罪が加賀藩にかゝつて來る、輕くて減地、重ければお國替へだ、そこで重役の横山、本多方々が日夜額を突合せて御相談最中だ。困つた事になつたもんだで。（ため息を吐く）

五兵衛。ヘエ、それは〳〵……思ひがけない事ばかりでございます、五兵衛も愈々年貢の納め時が來ましたかな。（と考へ込む）

要藏。（憮然した顔色）イヤ、それは加賀藩があんまり勝手過ぎる。檜山貨占の時も、藩へは何彼の名目で莫大な上納金かしてある筈ではございませんか？　自分等が得の行く時は默つて得をして置いて、損の罪が廻つて來るとそれを人に塗り附けるなんさ　畾か善過ぎてお詁になりません、一體、今の武家なんて者は。町人程の意地も張りもない、唯、損得の勘定づく一點張で動くものと見えますな。呆れ返る許りだ。

五兵衞。（宥めるやうに）コレ〱篠原樣の前で、そんな口を利くぢやアない、通り相場だ、……だが斯う風向が變つて來ちや、泣く子と地頭つて、日本では昔からの金が魂を腐らせるとは、かねて氣附ては居りましたが、生命まで捲ぎ取るとは。

篠原。（調子をかへ）ところが、こゝに今、金の拾萬兩もあれば　江戸の大老方へそれ〲賄を遣つて、又何んとか、この場の始末が附かぬ事もあるまいかと思はれる。そこでその御相談に上つたので……。

要藏。（吐出すやうに）おいて下さい、もりその手に乗る馬鹿者ではございません。貴方はいつも何の彼のと口實を附けて、この家の金を搾り取つてゐるではありませんか？

篠原。（苔青になつて）無禮者！も一言云つて見ろ（と、刀の柄に手をかける）

要藏。ハイ、何度でも云ひますよ、少たア耻をお知んなさい。

五兵衞。（一喝）要藏、默れッ、……篠原樣、決して御氣にかけ下さるな。金で濟む事ならばそれはいか程でも差上げます、決して吝みはいたしません。

篠原。（刀を離さず）でも折角、私が厚意づくで云つてゐるのを、あゝし無禮な口を利かれては容赦が出來んではないか？

要藏。（小聲に）フン、町人だつて、眼は二つ明いてゐまさア。

市兵衞。（次の間から駈け出て）御免下さいませ、若旦那御風呂へお召しなされま

ませ。（云ひ〳〵その場を繕ふて、強ゐて引立てゝ行く）

五兵衛。若輩の云ふ事を決してお氣にかけられますな、長年のお交際の仲で、ついお心安立てに格式も何も忘れて了ひまして、相濟みません、五兵衛が謝ります。何卒御勘辨下さいませ。

篠原。イヤ、それ程に云はれゝば私も別に氣には留めぬ、唯、此方は親切づくで云ふ事を、まるで逆に取られては心外だからな。

市兵衛。（入つて來る）、要藏様からも、唯今のはつひ取逆上せて申上げたので、重々詫び入つてくれとの事でございますから何卒御勘辨遊ばして下さいませ。

篠原。（何氣なげに）イヤ、もうよい、もうそれは云はんでも善い……それよりも、今一つ重ね〳〵の心配事がある、例の密貿易の一件が薄々江戸の方へ知れてゐる様子だ、當地へ隠密が入込んで、何かの手證を押へて行つたといふ噂もあるでな。

五兵衛。（相手の顔を見て）へエー……密貿易の事まで江戸へ知れましたとな？

市兵衛。では何時かの人足も矢ッ張隠密でございましたかな？

篠原。何しろ加賀藩の御用船の旗を立てゝ海の上を四方八方に乘廻りして居られたので、密貿易の祟りが、自然、藩へまで及びさうな様子だ、二千五百石積の船も、矢つ張禁制を犯して造つた事になるでな。

五兵衛。（笑顔で）一體、異國と貿易するのが、何んで惡いのでございませうな？

篠原。それは嚴しい御法度ではないか？

五兵衛。イヤ、それが何故御法度だか私には合點がゆきせん。日本一國の内の商賣では親子兄弟が品物を遣り取りするのだから親が減つて子が殖し、兄が殖して弟が減らす丈でございます、馬鹿な遊び事ではありませんか、異國には日本に無い珍らしい寶が澤山あります、日本人の猿智慧の届かぬ機械發明がドシ〳〵出來て行きます、それには一々之までに見も聞かぬ不思議な生命がこもつて居りますでなそれを續々此の國へ運んで來て、古びた土地に生命の新芽を吹

かけさうとするのが何故御法度でございませうなア

篠崎。（困つた顔色）何しろ三代将軍この方の御法度だから致方がないではないか？

五兵衛。御法度だから御法度でございますかへ、、、、まアそんなものでございませうな、だがそれは永つゞきはすますまい、今に浮世が變りませう、私は命がけでその御法度を破つたお庇でいろんな智慧も授かるしいろんな珍らしい世界も見ました、南は椰子の樹の茂つた珊瑚島から、北は膃肭獸の群の泳いでゐる北の島へも船を着けましたし、六十一歳の時に出羽沖で大しけを食つてアメリカ三界へまで漂流しましたからな、大海とふものはいかにも廣々として、氣の暢やかなものでございます、嵐や雨や大浪に出合せると頭の大邊から足の指先まで魂の絲が張り切つてビン／＼鳴り出します一つ船に乗つたものは生きるも死ぬも一緒だといふ覺悟だから、他人同志が血よりも濃い親兄弟になつて了ひます、陸の上では人間は自分勝手で皆狡くなる……ア、あの不思議に生命のこもつた物産が、外から私を呼んでゐるやうだ、又海へ出やうかな？（憧憬的な眼付になる）

篠崎。（周章てた様子）コレ、もうそんな事は云はれぬが善い、何しろ厳しい御法度だから。それを破つたと云つた丈でも一族が滅びて了ひますぞ。

市兵衛。（氣を揉んで）眞實に大旦様、大きな聲では云はれん事でございます。

五兵衛。（眼前に幻を見る如く）あゝ、アメリカの、あの赤い石で積んだ大きな城のやうな家が眼の前に見えて來る。あそこでは武士も町人も皆一つだ……あそこでは土塊をこねて人間を作る職業も出來さうだ。イヤ、私が行けば、あの物産に一々羽根が生えて飛びますからそれが職業になるのだ。死ぬまでにも一度行つて見たい。……も一度職業か行いたい。（我不知手の水晶の念珠を切る）

篠原。五兵衛どの、もうそれは云はれるな。聞く丈でも恐ろしい。

五兵衛。（興奮して）政府は馬鹿でございますな、あの大海の上へ法度が布けると思つてゐるア 今にアメリカからもすロシヤからもあの黒船が隊を作つて押寄せるのは眼に見えてゐますそれを向不見に追拂はう

方が粉微塵に砕かれて了ひまさア。

篠原。(耳へ手を當てゝ)、コレ〳〵、もうそれは云はぬ事聞かぬ事にせう、私も實は忙しい、そこでその、今の御用金も十萬兩の中から、少々前渡しを願つて行きたいが?

五兵衛。(氣輕に)ヘエ〳〵金なんか塵芥も同前でございます、大海の上の事を思ふと、そんなものに少つとも未練はありません、御入用丈持つて行つて下さい。市兵衛、善いやうにして上げてくれ。

市兵衛。はつ……では私が御談を承りまう。

(篠原が耳語する)

市兵衛。(頷いて)ヘエ……では此方へ持參いたしませう。

篠原。イヤ、歸りがけにあちらで戴かう……若しなれで萬事旨く行けばよし。行かなかつたら私も或は腹を切る事になろうも知れぬ……五兵衛どの、まア御機嫌善う。

五兵衛。貴方もあの腹を……ヘエ、それは何うもとんだ事になりましたがまア何卒そうした不吉な事のないやうに祈ります。

篠原。(苦笑)私もあまりと死度はないでなハヽヽヽ、では左樣なら。(市兵衛に案内されて入る)

要藏。(入れ違ひに來る)あれは逃げる氣かも知れません、行きがけの駄賃をねだりに來たに相違ありません、膓れ武士!

五兵衛。然うかも知れぬ。こちらでは香典と思へばよい、何アに金なんかもう用はない……私はもう一度海へ行きたい。

要藏。エ、海へ行きたいと仰いますか?　ア、念珠を切りましたな?

五兵衛。いつまで日本には居られない……日本に居たら生命が無い。

要藏。(眼を睜つて)エ。そんなにまで事が迫つて來ましたか?

五兵衛。ウム、もう切羽詰つて來た、少しも猶豫はして居られん。その覺悟をせい……兎に角一風呂浴ひて來やう。(入る)

要藏。覺悟をせいつと親父は云つたな……では愈々危いかな(とチット考へ込む)

おてつ。(そつと入つて來る)若旦那、何を一人で御思案なさつてるのでございます？

要藏。(ため息)ウム……錢屋も愈々沒落らしい、折角やりかけた潟の工事も、あのまゝ中途で止めるのかと思ふとこれが一番殘念だ、死んでも死切れないぞ。

おてつ。(意外な顔で)エ、ではもうそんな一大事になつたのでございますか？　眞實に？

要藏。(悲痛な顔色で)ウム、何も彼も一切合切ばれて了ふたらしい、高い木の上へかけられて大身槍でこの脇腹を突かれて死ぬのかと思ふと、口惜いよりもあんまりみじめだ。

おてつ。(色も蒼ざめ)まア、そんな恐ろしい事になるのでございますか？　何もそれ程の惡い事をなさつた覺えはないではございませんか？

要藏、何んにも惡い事なぞしてゐるもんか？　イヤ、世助け人助けの善い事をしてゐながらそれが掟破り、法度破りといふのだから笑はかせる、得手勝手の役人め、ムザく縛られやせんぞ、彼奴等の鼻をあかせてやりたいな。

おてつ。では今の中に、何處かへ御一緒に逃げて行きませう……五郎島のしがない花賣娘が旦那のお情を受けて斯うした身分になれたのでございますもの、勿體ないと許りぶうて暮しました、この九、何んな難儀な目を見やうが、乞食に落ぶれやうが、しも厭ひはしません、何處へでもお供をさせて下さいませ。

要藏。(自ら嘲るやうに)だが、その逃げて行く場處がないんだ、……日本六十余州に、五尺の體の置き處が無くなつてゐるんだから情ない。

おてつ。では死ぬより外はないではございませんか？　御一緒に死ぬのなら私は少つとも殘惜しい事はございません、……

要藏。(考へながら)フム、河北潟へでも行つて心中するか？　そしたらあの埋め殘した潟に私等の名丈は殘る譯だな。

おてつ。嬉しうございます……これからでも直ぐ參りませう。

要藏。だが、それでは私は河北潟めに二度馬鹿にされる勘定だ、負け死するのは癪に障るて。

おてつ。私は何處で死んでも構ひません……何んなら海の中へでも。

要藏。海か？……フム、海なら善さゝうだな。（と考へる）

（喜太郎と佐八郎兄弟が市兵衛の案内で入つて來る）

市兵衛。今に風呂からお上りなされませう、さア、何卒……

要藏。（わざと笑を作つて）ア、喜太郎兄さんに佐八郎兄さん、お父さまのお供をして無事には歸りましたが、こん度の事にはチと弱りましたな。

（おてつは挨拶して殘惜しげに入る）

喜太郎。（不機嫌な調子）お父さまのお歸りになつた事は知つて居るが、本家も何んだかゴタ／＼して、手が拔かれなかつた、……こん度許りは汝も精根に應へたらう。

佐八郎。（疳のやうに少し口を曲げて）要藏、汝のせいだよ、こんな大事が持上つたのは……。

要藏。（市兵衛に）何も彼もぶちまけたのか？

市兵衛。（眼で知らせ）忌な事はあまりお聞かせしてはありません、篠原の旦那様がいろ／＼御心配なさつて下さる事はお話しましたが……。

要藏。（輕蔑口調で）篠原の奴は又金をゆすつて歸つたんだな

喜太郎。（カッとして）奴呼ばゝりは何事だ？　假にもお奉行様を馬鹿にするやうな心がけだからこうした大事を引き起すんだ、少まだとも性懲りせんとは情ない、汝の不心得の爲めに錢屋一家が傾きかけてゐるのに、まだ氣が附かんか？

要藏。何時も云ふ事だが、兄さん等のやうにチッと大人しくして、兩手を膝にあてゝ納まつてゐたらこんな事にならなかつたのは請合ひだ、だが親爺も私も、こうした眞似は性に合はんから仕方がない。

佐八郎。（慄え聲で）呆れた奴、まだ減らず口をたゝいてゐやがる、一家一門が汝一人の極道のためにえらい難儀な目に逢うても、それを平氣で、洒々してゐやがる、その心は鬼だ……汝、その頬桁をねち曲げてやりたい（立かゝる）

市太郎。(押止めて)まア〳〵佐八郎様、落着いてゐらつしやいませ、今、兄弟喧嘩をなさつても始まりません、これも皆成行でございますよ。

佐八郎。成行きだと云つて、それで濟まされる事ぢやアない、斯んな大事を仕出かした奴を懲らしめてやらなけや腹が癒えんわ。

要藏。(ムツとした調子)手出しをするなら、兄貴だつて負けちや居らんぞ、乍憚私の腕には覺えがある、算盤だこで固まつた手とは違はアな、來るなら來いツ。

喜太郎。(眼頭霑ませ)情けない、それ處の騷ぎか、錢屋が浮くか沈むか、一大事の潮に際ぢやないか、佐八郎も抑へて居れツ。……日頃病身な體で喧嘩買ひもないもんだ、……要藏、汝といふ人間は自分の我が通りさへすれば、親兄弟が何うならうと、他人が生きやうが死なうが、鼻唄唄つて見過しに出來る性分らしい、羨ましうもあるが面憎くもなる、だがこの兄はさうもたるまいぜ、今にこれまでの天罰が一時に當つて來るから然う思へツ。

佐八郎。こ奴に天罰が當らんで、他に當る者があるもんか。(と男泣きに泣く)

要藏。(負けん氣で)天罰が當る位な人間でなけや駄目の皮だ。

市兵衛。(齒がみをして)何處までも圖太い奴め。

五兵衛。(宥めて)あれが要藏様の日頃からの癖だから我慢して聞いてお居でなされませ。

(衣を更めて入來る、湯上りの顔色がつや〳〵してゐる)オヽ皆、來たかい、留守中はさぞ心配したらう?

喜太郎。無事に御歸りなされまして、一安心はいたしましたが、何しろ、とんだ事になりましたのでこの二三日は夜の目も合さず心配のしつゞけでございます。

佐八郎。お父様、要藏めの心得方が惡い許りに、こんな事になつて了ひました、要藏を縛つて突き出したら、後は何うにか始末が附かん事もございますまい。

五兵衛。イヤ要藏一人が惡いといふ譯はない、誰が惡いとも云へない、一つは時世だ、一つは……

大勢の人死が出來たのはいかにも濟まん事だから、その咎は私が一身に引受ける、皆に難儀をかけたくはない、イヽ私ももう歳だから極樂往生してもよい時だらうてハ……………。

要藏。（驚き顏で）エ、お父樣、では貴方は自首でもなさる氣でございますか？

喜八郎。お父樣一人に、罪を被せて濟みますものか。

佐八郎。要藏のした事だから要藏がお仕置を受けるのが當り前だ。

五兵衛。（落着いた口調で）イヤその要藏にはこれから早速、船へ乗つて、海の上へ出て貰はう、そしたら何處へでも高飛が出來る、恰當慶安丸が着いてゐるから、市兵衛、あれに直ぐ出船の用意をさせてくれ…今宵の中に…善いかい？

市兵衛。ハツ…今宵の中にでございますな。

要藏。（父の顏を見て）私に、船へ乗れと仰いますか？

五兵衛。然うだ、……實は私も行き度いのだ、日本ばかりに日は照らない、帆さへ上げて大海へ乗り出したら、權柄づくのお上なんてものもありやせん、法度や掟ての網は波の上に張つちやない、それこそ千里でも一目に見通せるが陸の上では、私の眼端も利かん、神業だと自惚れても、人間業に負かされる、見えぬ暗礁を乗切る私が、眼に見ゆる暗礁で船底を破つて了つちやもうお終ひだ、私は矢ツ張海で育つて、海で朽ちるが性分に合ふと思つてゐる、…（寂しい顏色で）だが今、風呂の中で、この助骨が一枚一枚數へられるのでガツカリした、それにあの大勢の人を死なせた罪は、何處へ逃げても隱れても、この胸の上に血の燒印で殘つてゐるからな、私は男子らしくその應報を受けやう、その代りに可愛い要藏を無事に海の上へ送り出して、私の後つぎの仕事をさせたい、私の一心を貫かせたい、さう觀念したのだ、要藏、行けツ、市兵衛が海の上は萬事心得てゐるから附添うてくれゝば少しも心配はない、船の用意は卽刻云附けてくれ。

喜太郎。（眼を瞬つて）エ、……要藏をお逃がしなさるつもりでございますか？…でも長崎くんだりへ行つた處でお上の手は直ぐにかゝりませう。

五兵衛。ハヽヽ、長崎が海の果てゞはない、南蠻國もあれば、アメリカもある、汝等は井の底の蛙だ。

佐八郎。（怪訝さうに）お父さまはその異國を御存じでございますか？

五兵衛。（床の間の地球儀を持出して來て）この通り地球は圓いものだ、船へさへ乘つたら南蠻へでも、アメリカへでも自由勝手に行けるのだ、私は長年、この地球の上をあつちからこつちへ往來してゐたのだ、汝等は初耳だらう。

（喜太郎と佐八郎とは不思議顔見合せて呆氣に取られる）

喜太郎。（唇も慄えて）では密貿易は眞實でございましたか？

五兵衛。（莞爾して）ウム、眞實だ、それが錢屋の今日の身上の資本だ、兄が博奕とは違つて私は異人相手の博奕を打つて來たのさハヽヽヽヽヽ。

要藏。（頷いて）ア、萬事腹に入りました、お父さまの仰る通り、私は船へ乘つて異國へ渡りませう。

市兵衛。では早速、出船の用意に取かからせませう。

五兵衛。（焦々しく）一刻も早いが勝だ、荷物なんかは船足の重り丈積めば善い、今宵の中に錨を捲くんだぜ…一刻も早いが善い。

市兵衛。はツ、では大急ぎて、海邊へ、出かけて參ります（入る）

五兵衛。では要藏の鹿島立を祝うて親子兄弟別れの杯をせう…ウム、今日こそ開かずの扉を明けてアメリカ仕込の椅子、卓をこの座敷に運ばせやう和蘭陀渡りの、私が秘藏の道具もこゝへ飾らせやう…本家の者も支店の者も皆呼びにやつてくれ。

喜太郎。お千賀はお祖母樣の病氣を見舞に此方へ來て居ります。

五兵衛。然うか？おまきも起きて來られると善いがな…まア一寸見舞つてやらう、要藏は長崎へ行くのだと云ふからな。

喜太郎。私もまだ今日はお目に掛りません、一寸御見舞しませう。

（佐八郎も二人に連れ立つて入る）

要藏。(窓を明けて)空が水淺黄色になつた、ソロ〳〵暮れるか？…あの檣は慶安丸だな、…あれへ乘込んだら、もう役人奴等の手は屆かない、渴相手には負けもしたが、今度は親爺の二代目で、大海を相手に荒れ廻るか、それも面白いな。

(おてつが女中おまつ、おとき等を差圖して、唐木の高脚の卓を運んで來る)おてつ。こうした珍らしい物は、めつたに見られませんよ、日常は開かずの庫に仕舞ひ込んであるから私だつて始めて見るの……こゝは私がしますから椅子を運んで下さい

(女中等が彼方へ退がると、要藏の傍へ寄つて)若旦那様、お話はそつと聞きました、…私もお供をいたします。

要藏。(快活に)ウム、親爺に教へられて、海の上へ途が附いた、一緒に死なんでも善い、生きに行くんだぜ。

おてつ。(心からの笑顔)こんな嬉しい事はございません。

要藏。(笑つて)でもしけを喰つたら弱るだらうぜ。

おてつ。でも若旦那様の傍ならどんなしけでも恐ろしくはございません。

要藏。フムでは行つて徐々、身仕度をするが善いぜ、一刻延びても危いらしいからな。

おてつ。今こちらのお坐敷の支度を云附かりましたので。

要藏。(促き立てるやうに)それは女中等に任せたら善い…もう直ぐに暮れるからな、風向は何うか ？

おてつ。西風が強く吹いて居ります…私の身支度と云つて、大した事はございませんが……。

要藏。(戯談らしく)臙脂お白粉を忘れるなよ、船の中でも身だしみは要るからな、此方へ向いて御覽、…アヽ汝の髪は房々して何時見ても善いな。

おてつ。(すねて)髮丈はお千賀さまに似てゐると仰いましたツけ………兎に角身支度をいたしませう(入る)

(女中等は椅子を列べ卓掛を飾りいろいろ道具を運んで來たりして、忙しく働いてゐる、お千賀は鼈甲の烟臺を片手に入つて來て、それを指圖してゐる

お千賀(女中等が入つて行くと、要藏の方を見て)要藏叔父さん貴方は船に乘つて、急に何處い遠か國へお出かけなさるさうでございますな。斯うした事になろうとは思ひもそめませんでしたが、世の中の事は分らないもんでございます。

（要藏は默つてヂットお千賀の顏を見入つてゐる）

お千賀。（感情的に）もう仲直りしませう……お別れだと思ふと、私、何んだか悲しくなりますもの。

要藏。（喉にかゝるやうな聲で）ウム、仲直せうな。

お千賀。そうして下されば私嬉しい……眞實にもう何んにもなかつた事にして下さい、切つても切れぬ叔父と姪とでございますもの。

要藏。（四邊を窺ひ、いきなり手を握つて）、お千賀、一緒に異國へ渡ろう……異國へ渡つたら叔父も姪もありやせん、誰も何とも云ひはせんのだ。

お千賀。（吃驚して、身を退いて）マア、又あんな事を云出して……それはもう止めて下さいませ。

要藏。（燃ゆるやうな眼色で）私は矢つ張汝が戀しい……心の底の底にこびり附いてゐるんだ、何うしても消えない……何うしても忘られない……。

お千賀。アレ……聲を立てますよ。

要藏。（訴へるやうに）何うしても忌だといふのか？

お千賀。（涙聲で）人が笑ひます……畜生の親類だと云つて……。

要藏。何んと云はれても私は構はん、一緒に行つてくれ、……一緒に……そうしたら私は何處の空でのたれ死んでも本望だ。

お千賀。私には何うしても叔父さんだとしか思はれませんもの……。

おてつ。（聲を立てながら駈けて來る）若旦那様……若旦那様……大旦那様がお呼びでゐらつしやいます。

要藏。（夢から醒めたやうに）エ…何用だ？

おてつ。早う入らつしやいませ（押遣るやうにして、臂を抓める）

要藏。まア、痛いひ、どい事をしやがる（心殘しながら入る）。

お千賀。(後影を見送つて)眞實に心から私を思つてらつしやるのか?‥可愛さうだ。(と涙を拭いてゐる)

女中おまつ(綾緞物を半ば擴げながら入つて來る)、お孃さま、この觀音樣の繪像の織物は何處へ掛けたら善いのでございませう?

お千賀。(ふり向いて)觀音樣?…ア、マリア觀音の像か?それまで持出せと仰つたのかい?。

おまつ。大旦那樣のお指圖でございます。

お千賀。そこの壁へかけたら善いだろう。

おとき。お孃樣、この赤天鵞絨の蒲團は何處へ敷くのでございませう?

お千賀。それは祖父さまのおかけなさる椅子へ敷くのだろうと思ふよ

五兵衛。もう大抵で善い(云ひ〳〵入り來り)私もも一度異國へ渡りたかつたが、とう〳〵駄目になつたな(寂しい笑顔で、懷かしさうに室内の飾り附を見廻はしてゐる)

(おまきは窶れた姿で、喜太郎の妻おきわ、佐八郎の妻おさだに兩方から扶けられて入つて來る、喜太郎佐八郎もつゞく)

おきわ。(淑やかな中年增の女房)お母さま、大丈夫でございますか?

おさだ。(利かぬ氣の顏色の女房だが、聲は優さしく)お頭がふら〳〵しませんか?

おまき。イヤもう大した事はない。(よろけた足取で歩く一坐は高脚の卓を圍んでそれ〴〵椅子に寄る)

五兵衛。(滿足さうに、ズツと見廻はし、)汝等は日常かけ附けんものに腰をかけて嘸、尻のすわりが惡かろう。窮屈だろうが私への お交際だと思ふて我慢してくれ。私はもう一度、異國へ渡りたかつたのを、やつと思ひ留つたから、せめて暫時でも異國へ渡つた氣持になりたいのだ、それでかねて開かずの庫へ藏ひ込んであつた異國の家具、道具類を持ち出させて、家内中寄つて一世一代の酒盛をするのだ、私の八十の賀は濟んだが、米の祝ひの取越しと云つても善い、要藏が船出の見送りもかねて、今宵は目出度く飲まう、佛蘭西仕入の葡萄酒も穴庫から取出させたから、皆、一寸味ふて見い。佳い香りだ。

（女中等はギヤマンの杯に赤色の酒をついで廻る）

おまき、（弱々しい聲で）要藏は何うしても長崎へ行かなけやなりませんのかな？…心配許りかけた子だ、矢ツ張手離すと
なると可哀さうで……。

五兵衛。（氣強く）それはもう云ふな…今まであれ程云つて聞かせたから、汝にも分つてゐる筈だ、五兵衛の女房が然う
愚痴つぽくては困る…そりや親子兄弟が別れ〱になるのはいかにも名殘惜しいに相違ない、なろう事なら一生一つ
處で暮らしたいのは人情だ、一家一門が皆船へ乘つて海を越へて行く氣なら、二千五百石積の慶安丸へ手を繋いで乘
るが善い、まだ遲くはない、だがそれ程の勇氣はあるまいな？

喜太郎。（首を掉って）假令死んでも、私等は宮の腰の土になり度うございます。

佐八郎。（癇走つた調子で）今にお上のお咎めが來るのが恐ろしいからと云つても、海の上で恐ろしい目を見るよりは増
しでございます。

おまき。私等は此所で死に度い、他國の空でのたれ死するよりはましだ……。

五兵衛。（頷いて）ウム、汝等はこの宮の腰が世界だ、それより他に世界はないと思つてゐる、だから私は汝等に船へ乘
込んで逃げいとは勸めない、だが要藏丈けは異つてゐるな、あれはこゝの、土の鉢に植えるのは惜い、根が張り過ぎる。
私もそれでとう〱鉢を破つたんだハヽヽヽ……飲んで見い、この葡萄酒は二百年も經つた上等品だ。

おまき。（顏をしかめ）急な事……ア、腰が痛い……

（皆はチビ〱杯を嘗めてゐる）

要藏。（氣の利いた船乘支度で入つて來る、おてつも身輕に扮裝つて、ついて出る）お父さまの、船乘支度の古とんびだ、似合ひ
ますか？

五兵衛。（笑顏）ウム、私の若い時の姿そつくりだ…確りやれ…ウンと働け……老木は枯れても、若木がズン〱伸びて
くれゝばそれで滿足だ、ア、葡萄酒を酌いでやれ。

（おてつが酌をする）

要藏。（杯を上げて）大丈夫だ、海の上へ出たら傍から邪魔をする人間なんか居ませんから存分に荒ばれ廻つてやります、まア嵐と浪とが喧嘩の相手位なもんでさア。

おまき。（氣遣はしさうに）それが一番恐ろしい相手だよ……氣をお附け、私はもう何んにも云ひません。

要藏。（頷いて）エ、分つてゐます…この葡萄酒は馬鹿に旨い、堪らん程佳い匂がする、異國へ渡つたら…イヤ長崎へ渡つたら、これが朝晩飲まれませうな。

五兵衞。（笑顔で）もつともつと旨い酒もある賽切つた肉もある、そして、そこのマリヤ觀音のやうな、鼻の高い、眼の綠な、色の透通る程眞白い美女が、活きて歩いてゐる……おてつ、顏色が變つたな、心配するな、向へ行つたら眞珠の首飾りでもねだつて買つて貰ふんだバ……。

おきわ。（不思議さうに）私等にはお父さまの仰つしやる事がよく分りません。

おさだ。私にも何が何やら、さつぱり通じません。

五兵衞。（相不變笑つて）ちんぷんかんぷんかい、さうかも知れんなハヽヽヽヽ葡萄酒がいけなけや日本酒をやるが善い、遠慮はいらん、…日本海の魚は矢つ張味が善いな……。

市兵衞。（船乘支度で現れる）船の用意はスツカリ出來ました。若旦那のお供をいたしませう。

五兵衞。（滿足さうに）オヽ、それは早かつたな、まア一つ葡萄酒を飲め、

市兵衞。難有うございます（ギヤマンの杯を上げて）…風向も善うございますし、恰度潮時でございます。

五兵衞。さうか…では一刻も愚圖々々してはゐられん…早く立つが善かろう。

要藏。（起上つて）ではこれから直ぐ出かけませう。

おまき。まるで隣へでも行くやうな事を云ふの（と泣く）

五兵衛。（強い調子で）何アに長崎は隣りのやうなもんだ……要藏、よく躰へ氣を附けい……お父さまの魂が慶安丸の船玉大明神に乘り移つてると思へツ、善いか？

要藏。ヘイ……お父さま……今度は屹とやります

五兵衛。市兵衛、よろしく頼んだぞ…萬事氣を附けてやつてくれツ。

市兵衛。（鼻にかゝつた聲で）承知いたしました……大旦那樣、御安心なされませ。

五兵衛。おてつ…汝にもよく頼んだぜ。

おてつ。ヘイ……（涙を拭いてゐる）

お千賀。要藏叔父さん、何卒御氣を附けなさいませ…叔父さんの事は私一生忘れません。

要藏。（ヂッと見て）ウム……夢に見るぜ……お母さま、御達者に…

おまき。氣を附けてくれ…（後は言葉も消える）

五兵衛。早く行け…刻が移つては氣にかゝる…早く行けツ…後には私が居る、心殘りはない。

要藏。（決然として）では兄さんも姉さん等も……皆さま左樣なら。（おてつ、市兵衛もそれぐ挨拶して入る）

（皆起上つて見送る、おまきは蹌踉するのを二人の娘に支へられる）

五兵衛。何處迄も見送つても同じだ……行かんでも善い、行かんでも善い。

喜太郎。（鼻へかゝつた聲で）、アして行つて見ると可愛さうでございます。

おきわ。少とも屈托のない人でございますな。

おさだ。矢ツ張、男子らしい男子だ、

五兵衛。（ホッとして）イヤ、先づ一安心だ……（丸窓をあけ）慶安丸は檣頭に燈を上げてゐる、……あの燈が搖れ出したらもういかな追手も捕手も追附かない（云ひく座に返り）皆も覺悟してゐるであろうが、萬一の事があつても周章てるな…騷ぐな、罪は私一人が被る、汝等は始めから何んにも知らんのだからな。

喜太郎。（聲を慄はせながら）河北潟の一件丈でお咎めを受けるのではないのでございますか？

五兵衛。イヤ、人間一度躓くと悪運は逆さ落しにやつて來る、密貿易の一件も粕買占の一件も皆一時に公儀へばれて了ふんだ、今までは加賀百萬石が錢屋を金藏にして防火の神にもなつてくれたが、こん度はその百萬石へ火が附きさうなので、錢屋一軒燒いて、自分は無事に免れやうといふ了見らしい、どさくさ紛れに金藏も拔める氣でな…、、、、（寂寞な笑）

佐八郎。（憤激した口調で）あんまり蟲が善過るではありませんか？それぢや錢屋は加賀藩に使はれた鵜見たやうなものでございます

五兵衛。（苦笑）ウム、然う云やア金を漁る鵜が、鵜使ひにしてやられたのだ……だが私は武家に負けたとは思はん、百萬石に負けはせん氣だ。

喜太郎。（悲痛な顔色で）御法度をお破りなさつたのが悪いのだ？

五兵衛。法度なんか馬鹿な役人の手細工だ、私は萬人の見ぬものを見た、萬人の行けぬ處へ行つた、さうした果報な人間は、疊の上では死ぬ運を持つて生れたといへばそれまでだ。

おまき。（そろ〳〵聲で）矢ッ張河北潟の主の所業だ。

五兵衛。（傾いて）フム、河北潟の主？漁師等があの潟の主なら、成程私はその主に負けたのだ、イヤ、私が眼先が見えんで多勢の人を殺した、その人等にこん度は私が殺されるのだ、もう觀念してゐる。長生をし過ぎたからな。

（一座沈默、すゝり泣の聲も聞える）

おてつ。（髪ふり亂して、周章し、駈込む、泣きながら）大變でございます〳〵……要藏さんも、市兵衛さんもあの濱の松林の處で召捕られなさいました、何うしませう何うしませう……

五兵衛。（不思議上つて）エ召捕られた？（丸窓をあけてのぞき込む）

（一同ガヤ〳〵と立騷ぐ）

おてつ。私、お役人方へお願ひしましたが、突き飛されたのでございます。何うかして下さい、〳〵（泣く）

五兵衛。（悄然として）ア、間に合はなかつた？……殘念だツ。

喜太郎。とう〳〵召捕られましたか？（とウロ〳〵する）

おてつ。何うかして下さい、〳〵……。

（忽ち騒がしい物音、捕手が十數名バラ〳〵と亂入する）

捕手の役人。御用、御用。……五兵衛、御用だ、神妙にしろ。

五兵衛。（周章て騒ぐ皆を制して）何事でございます？

捕手の役人。御用だ……この座敷の様子を見ても御法度破りの切支丹に定つてゐる、御用だ。

五兵衛。（冷かに笑つて）何卒靜かになさつて下さい、何處へでも參ります、併し罪人は私一人でございますからな。

（喜太郎佐八郎も早縄にかゝつてゐる、女達は周章て騒いで泣く）

五兵衛。（強い口調で）他の者は何んにも存じません私一人が罪を犯しました、罪と仰るなら……。

捕手の役人。云ひたい事は奉行所で申上げろ、さア立て。

お千賀。（進んで出て）お役人様、父の代りに私をお召取り下さいませ、父は日頃病身でございますし、牢なんかへ入れられると十日も生命がございませんから、何卒お願ひします……身代りにお立て下さいませ。身代りに……。

捕手の役人。エ、邪魔するな（と突きのけ）さア立て、立て、

（五兵衛、喜太郎、佐八郎は後手に縛らて引立てられる、女等は泣いてゐる、お千賀は追ひすがるのを突きのけられる）

第四幕

第一場

暗い舞台がだん〳〵明るくなると、蒼波の上に浮んだ慶安丸の船體が半ば見える、檣は淺黄の帆、青い船燈が揭げてある、[illegible]上に

は一閃の燈光、空一面に月光が青白く滿ちてゐる、船舶では大勢で陰氣に船唄を唱つてゐるのが聞える、船頭姿の五兵衞と要藏とが舳に近く佇立つて見張つてゐる、

五兵衞。やつとアメリカへ着いたぞ、隨分長い航海だつたな、幾年ぶりかで[illegible]しい。

要藏。ギラ〳〵青く光つてゐて何んだか鬼火のやうぢやアありませんか？　薄ツ氣味が悪いッ

五兵衞。馬鹿な事を云な、月の光がさしかゝつてるからそんな氣がするんだ、あの鼻を曲つて行くと紅い火や、[illegible]火が南京球のやうに入亂れて點つてゐる美しい異國の大きな港町が見えて來るんだ、日本なんかぢや夢にも浮ばない

それこそ眼のさめるやうな、繁華な盛り場だぜ。

要藏。異國の役人は私等を縛りはしませんか？　陸へ上つても大丈夫でせうか？

五兵衞。イヤに氣の弱い事を云出したぢやアないか？　縛る處か、手を取つたり、頰邊を嘗めたりして、遠方から海を越をして遙々よく來てくれたと、下にも置かぬ珍客扱ひをしてくれる、それもその筈ぢやないか此國には無い珍らしいものを日本から持つて來てやるのだから、神業だと云つても善い、そして又日本に無い珍らしいものを此國から持つて踊るのだから。日本の爲めにも神業だ、それを德川幕府は大罪人だと云つて、木にかけて磔にする。馬鹿な事だ

要藏。何うしてそんな馬鹿な事をするのでせう？　何時までもこれが續きませうか？

五兵衞。永くは續くまい。異國から來る物産には、一々毒があると思つてるんだ、破裂する火藥が交ぜてあるやうに考へてるんだ。役人つて馬鹿な物怯ぢをする、だが用心深いと云へんでもない、うつかり、それに觸ると觸つた者が即座に死んだり、粉微塵に碎けたりするからな、併し、扱ひ方を心得たものには、一々それが不思議な生命の根になるんだ、今までに無かつた強い力が湧き上つて來るんだからな。

要藏。では一つ物が相手次第で藥にも毒にもなりますな、不思議な事だ、それこそ神業だ……だが毒といへばこの海には毒が一ぱい入れてあるぢやアありませんか？　アレ、魚が白い腹を返してウヨ〳〵浮上つて來ます、白い波頭だと思つたのはあれに皆魚の屍體だ……そこにも、こゝにも、何千……何萬……何十萬、あれ〳〵、何れ程浮上るか分りま

せん……逆鱗にぬら〳〵青光がして、どろ〳〵に粘つた泡と泡とが何處までも〳〵つながり合つて、ぴつたり行手を塞いで居ります、それでこの船が動かんのだ、港は見えても、船は一寸とも進まんのだ。

五兵衛。魚の屍體？何アに、あれは白い波頭だ……成る程、さう云へばこの船は動かんな、風が無いからだ、港へ入るのだからもう帆を上げかへよう。

要藏。帆をかへたら動きませうか？

五兵衛。錢屋の印の帆にかへて威勢よく港へ入るんだ……オーイ、皆出て來い、出て來い、

（船艙から、色の蒼ざめた水夫等十數名上つて來る、經帷子を着けてゐる）

五兵衛。帆を卷きかへよう、船はもう港へ入るんだから。

（水夫頭默々として指圖する、淺黃の帆は下ろされ、錢屋の印の附いた白帆が揚がる）

五兵衛（一心に向を見つめ）、不思議な事だ、……あの燈臺の光と思つたのは、木谷のお藤さんが、あそこに立つて、片手で高く捧し上げてゐるんだ　莞爾笑つて此方を見てゐる。……

要藏。船は少つとも動かん、何千何萬の魚の屍體で海がぎつしり埋まつてゐるからだ。

五兵衛。お藤さんの手が疲れる、早く船を港へ附けやう……一寸も動いて居らんな、何うしたのだらう？

水夫頭。何うしましたのかな？

要藏。チツとも動いて居らん、夥しい魚の屍體が船足を止めてるんだ。

五兵衛。そんな事はない、……これは船の積荷が重過ぎるのだらう？　ア、お藤さんはあんなに招いてゐる。片手に光を捧し上げて早く港へ入れつて必死になつて招いてゐる、……ア、お藤さん今行くぞ……何うかして動かんかな？

水夫頭。（凄い聲で）矢ツ張船は積荷が重うございますでな？

五兵衛。何うしても動かなけや積荷を捨てるんだ？

水夫頭。金目の品物でございますよ、捨てゝもよございますかな？

五兵衞。生命には代へられん、捨てろ、……捨てろ、……

要藏。魚の屍體と屍體が重り合つて油が凍つたやうに海が粘り切つてゐるから、積荷を捨てゝも駄目だろう。

五兵衞。魚の屍體ぢやアない、そこらの白いのは波頭だ、波頭に月の光が映つてゐるのだ、……ア、お藤さんの手は疲れたのだらう、燈臺の光がだん／＼薄闇くなる……もう顏がぼんやりして來た、早く積荷を捨てろ、船足が輕くなつて動き出すまで捨てろ。ア、お藤さんの笑顏は消えかゝつて來る、早く荷を捨てろ。お藤さん、今行くぞ……

（水夫等は重い積荷を捨て始める）

五兵衞。チツとも動かない……片ツ端から捨てろ／＼

水夫頭。後に殘つたのは金箱丈でございますが、あれも捨てませうか？

五兵衞。生命には代へられん……殘らず捨てゝ船足を輕くしろ……ア、燈臺の光が消えさうだ、お藤さんは待ち倦んだのだろう、早く港へ入れいツ。早く船足を輕くしろ！ お藤さん、今行くぞツ……

要藏。魚の屍體がそこにも、こゝにも、白い暗礁のやうに固まつて來た、この船を取卷いて今に押し潰すだろう、この船は動きやせん。

五兵衞。そんな事はない、……船足は余つ程輕くなつた筈だが、何うして一寸も動かんのだろう、不思議だな？

要藏。魚の怨靈が、この船に憑いてるんだ、

五兵衞。そんな馬鹿な事はない……もう捨てる荷はないのか？

水夫頭。捨てるものは不殘捨てゝ了ひました。

五兵衞。髮の毛ほども動かん……ア、燈明臺の光がふつつり消えた、お藤さんの姿ももうまるで見えん、唯一點の赤い薄明りが殘つてゐる丈だ、あれも無くなつたら港の入口が分らん事になる。もつと船足は輕くはならんか。……

水夫頭。（淋く笑つて）もつと船足を輕くしますのか？

五兵衞。ウム、さうしてくれ、早く船足を輕くしてくれ、

水夫頭。ちやアこん度は乘つた人間を捨てる番だ？

五兵衛。乘つた人間を海へ捨てるといふのか？誰を捨てるんだ？

水夫頭。(要藏を指す)

要藏。何を云つてゐる、私を海へ捨てる！馬鹿もの、それより前に、水夫どもを海へ捨てりや善い。

五兵衛。海の上ぢや皆が親兄弟だ、生きるも死ぬも一緒にせうぢやないか？誰も海へ捨てんでも善からう。

水夫頭。イヤそれでは船足が輕くならん、さア、こん度はあの男子から先へ海へ捨てるのが順番だ、捨てゝやらう(と近づく)

要藏。(水夫頭の顏を見る)ア、汝はあの濱村の彦兵衛だ！

水夫頭。さうだ、さア魚の屍體の中へ捨てゝやる。(水夫等は寄りたかつて、爭ひもなく要藏を海中へ投捨てる)

五兵衛。(體が硬化したやうに、唯ヂッと立つて見てゐる)待て、待て、亂暴するな……ア、體が動かない……お藤さん……

要藏……私はこゝに居るぞ……

水夫頭。(近寄る)こん度は汝の番だ！

五兵衛。(叫ぶ)ア、成る程汝はあの彦兵衛だな！

水夫頭、さうだ、汝を海の中へ捨てたら船足が輕くなる……覺悟しろッ！

(皆で五兵衛を擔つぎ上げる、五兵衛は悶え苦む)

第二場　(廻轉)

上手下手は牢格子、牢内の板の間に、五兵衛は打臥つて、ウン〳〵呻いてゐる。

牢番。(格子戸の外から覗いて)コレ、コレ……何うしたんだ何うしたんだ？

五兵衛。生命には代へられん、捨てろ、……捨てろ、……

要藏。魚の屍體と屍體が重り合つて油が凍つたやうに海が粘り切つてゐるから、積荷を捨てゝも駄目だろう。

五兵衛。魚の屍體ぢやアない、そこらの白いのは波頭だ、波頭に月の光が映つてゐるのだ、……ア、お藤さんの手は疲れたのだらう、燈臺の光がだん／＼薄闇くなる……もう顏がぼんやりして來た、早く積荷を捨てろ、船足が輕くなつて動き出すまで捨てろ。ア、お藤さんの笑顏は消えかゝつて來る、早く荷を捨てろ。お藤さん、今行くぞ……

（水夫等は重い積荷を捨て始める）

五兵衛。チツとも動かない……片ツ端から捨てろ／＼

水夫頭。後に殘つたのは金箱丈でございますが、あれも捨てませうか？

五兵衛。生命には代へられん……殘らず捨てゝ船足を輕くしろ……ア、燈臺の光が消えさうだ、お藤さんは待ち倦んだのだろう、早く港へ入れいツ。早く船足を輕くしろ！ お藤さん、今行くぞツ……

要藏。魚の屍體がそこにも、こゝにも、白い暗礁のやうに固まつて來た、この船を取卷いて今に押し潰すだろう、この船は動きやせん。

五兵衛。そんな事はない、……船足は余つ程輕くなつた筈だが、何うして一寸も動かんのだろう、不思議だな？

要藏。魚の怨靈が、この船に憑いてるんだ。

五兵衛。そんな馬鹿な事はない……もう捨てる荷はないのか？

水夫頭。捨てるものは不殘捨てゝ了ひました。

五兵衛。髮の毛ほども動かん……ア、燈明臺の光がふつつり消えた、お藤さんの姿ももうまるで見えん、唯一點の赤い薄明りが殘つてゐる丈だ、あれも無くなつたら港の入口が分らん事になる、もつと船足は輕くはならんか。……

水夫頭。（穢く笑つて）もつと船足を輕くしますのか？

五兵衛。ウム、さうしてくれ、早く船足を輕くしてくれ、

水夫頭、ちやアこん度は乘つた人間を捨てる番だ？

五兵衛。乘つた人間を海へ捨てるといふのか？誰を捨てるんだ？

水夫頭。（要藏を指す）

要藏。何を云つてゐる、私を海へ捨てる！馬鹿もの、それより前に、水夫どもを海へ捨てりや善い。

五兵衛。海い上ちや皆が親兄弟だ、生きるも死ぬも一緒にせうぢやないか？誰も海へ捨てんでも善からう。

水夫頭。イヤそれでは船足が輕くならん、さア、こん度はあの男子から先へ海へ捨てるのが順番だ、捨てゝやらう（と近づく）

要藏。（水夫頭の顏を見る）ア、汝はあの濱村の彦兵衛だ！

水夫頭。さうだ、さア魚の屍體の中へ捨てゝやる。（水夫等は寄りたかつて、爭ひもなく要藏を海中へ投捨てる）

五兵衛。（體が硬化したやうに、唯ヂツと立つて見てゐる）待て、待て、亂暴するな…ア、體が動かない…お藤さん…

要藏。…私はこゝに居るぞ…

水夫頭。（近寄る）こん度は汝の番だ！

五兵衛。（叫ぶ）ア、成る程汝はあの彦兵衛だな！

水夫頭、さうだ、汝を海の中へ捨てたら船足が輕くなる…覺悟しろッ！

（皆で五兵衛を擔ぎ上げる、五兵衛は悶え苦む）

第二場 （廻轉）

上手下手は牢格子、牢内の板の間に、五兵衛は打倒つて、ウンウン呻いてゐる、

牢番。（格子戸の外から覗いて）コレ、コレ…何うしたんだ何うしたんだ？

五兵衞。（目さめて。キヨト〳〵四邊を見廻はしながら）アア、矢ツ張、牢の中だつた？

牢番。五兵衞さん、何うかしましたか？

五兵衞。イヤ、何うもしません‥‥唯少し胸が悶へるやうに思ひます、‥‥お晝の食物が中つたのかな？

牢番。唸されてお居だから何事かと思ひました。體に故障がなけりや善うござんすが、何しろ寒くなりましたでな、ア白いものがちらつきます。

（格子外には雪がチラホラ閃めいて降る）

五兵衞。成る程、とう〳〵北國名物の雪がやつて來ましたな、‥‥ア、頭がふら〳〵する、（漸く起上つて）何んだが酔つたやうた、酒も飲まんのに、何うしたのか知ら、ハヽヽ（寂しく笑ふ）

牢番。氣分が惡うございますか？

五兵衞。お願ひだ‥‥内證で水一杯、貰へますまいか？

牢番。水を？よございます。（氣輕に立去る）

（五兵衞、胸先を押へて、格子際によりかゝる）

牢番。（歸つて來て、水を汲んだ柄杓をさしだす）さア、お飲んなさい。

五兵衞、難有う（甘露でも飲むやうに喉を鳴らす）

牢番。眞にお氣の毒だ（涙ぐんで）錢屋さんが私風情に水一杯くれとお頼みなさるなんて‥‥世は逆さまになりましたな

五兵衞。（水を飲み終り）世は逆さま‥‥成程然う云へば然うだな。

牢番。大きな聲では云へませんが、お上が惡い、錢屋さんが高い聲で口を利くと、百萬石がけし飛ぶから些少な罪で牢へ打込まれた、そして一族が重いお仕置になる、何うもお氣の毒だといふ者も居りますでな。

五兵衞。（寂しい笑顔で）さういふ者も居りませうな、それにも嘘はありません‥‥ア、何うも頭がふら〳〵する、‥‥體が重い。

牢番。牢破れが出ましたのかな？　五兵衛さん程の豪傑も牢へ入れられちや手も足も出ませんな誰かゞ監へ追込まれた
獅子のやうなもんだつて、云つて居ましたよ。

五兵衛。(引釣るやうな笑ひ)へ、、、獅子も斯う老耄ちや駄目だ……ア、胸先が苦しいゝ……(悶えて吐する)。

牢番。何うしました？　……何うしました？

五兵衛。(喘ぎながら)……一杯盛られたのかな？

牢番。吐きましたか？ぢやア矢ッ張毒の食中りだ……。

五兵衛。(苦しさを抑へながら)……何アに、役人等に毒を盛られても死はせん……死は、せん……私が死んだらずつと前
から髄に毒が廻つてゐたんだ。

牢番、お氣の毒だ、もう囈言らしい、

兵衛。……ア、氣が遠くなる……死ぬやうに眠い。

牢番。(呼ぶやうに)錢屋さん、何うかしましたか？……何うかしましたか？

五兵衛。(眼を瞬って)……五兵衛は我手で毒を盛つて死んだ……さうへ……さゝ云つてくれ……役人等に負けは
せん……百萬石に負けはせん……將軍家に負けはせん……ア、善光寺様の御來迎だ、眼先に後光がさして來た。
(合掌瞑目する)

牢番、ア、もういけないのかな、お氣の毒だ。

牢役人(雪のふる中庭へ現れる、牢の内をのぞいて)とう〳〵行きついたか？……鼠のやうに死んでゐるな。
(牢番が合掌念佛を唱へる、牢役人も合掌する雪は降りしきる)

―幕―

編輯を了へて

□本月のリツケルト教授の寄稿は流石に精彩に富む大論文だ。アインスタイン教授もいよいよ寄稿して下さることゝなつた、そしてリツケルト教授の日本に於ける飜刻出版權は今回本社に讓り受けた。

□サンガー女史は本社の招聘にて來朝した、湧き立つやうな人氣を一身に集めたが、しかし、產兒調節論はその筋から講演まかりならぬとの嚴命が下つた。喜び勇んで我國に來て見れば、横濱埠頭では普通船客より五時間後れて上陸を許された、女史の胸中はさこそと思はれたが、かくすることが我國のためであらうか。

□そして女史は、名古屋、京都、大阪、神戸を講演し、上海から北京、天津、香港と一ケ月を費し、印度に約一ケ月滯在して倫敦に向ふ筈。尤も二十名内外の特別談話（例へば醫師團體の如き專門家のみの集合）にては產兒調節論をやつても宜しいとのこと。

□印度の大立物、サチアグラハの提唱者ガンヂイは遂に捕縛された。英國も印度に對して愈々度胸をきめたらしい。

□曾つて獨逸協會の法制講師であつたゲオルグ・ミハエリスは歸國後、普魯西の藏相となり、首相となつた人だが來る五月には日本觀光に來る。今昔の感果して奈何。

□高明も山縣が死んでからいよいよ動き出したらしい、山縣は權兵衛の爲めには一番の敵役であつた、權兵衛もソロソロ蠢動するかな。何れにしても我々とは夥しく。縁が遠い。

□現代知名の政客はかゞしとしの有名に過ぎない、大節なく、無經綸驚くべき代物のみである、別けて中橋だとか、鳩山だとか行儀の惡いものが官立大學出であることは一考を要する。

□創作は今後出來るだけ、力作のみを發表したいと思つてゐる、幅員より奥行に向つて突き進みたい。

□社員秋田はいよいよ三月廿三日神戸解纜の香取丸で渡獨する、一路平安を祈る。そして尾崎士郎も三月渡支した。

□社員もだんだん多勢になつて、いつも賑々しくイキイキしてゐる、本社は永の大懸案を解決すべき日が一日、一日と迫まつて來たことを喜ぶ。

□社友ラッセル氏より「未開國に於ける社會主義」なる長編力作が本日送つて來た。五月號に一大偉彩を放つことゝ信ずる、因に同氏は倫敦にありて著述に多忙を極めつゝある。健康も漸く快復したらしい。ウエルズ氏はジブラルタルにて目下大雄篇を起稿中だ。

□雨ぐもり博覽會日和にて上野は忙しく、博覽會に附きもののゴタゴタが今回は一層酷いやうだ。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	增大號共郵稅不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	增大號共郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▼外國よりの御注文は壹部につき郵稅金拾錢を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾壹年三月廿日印刷納本
大正拾壹年四月一日發行

四月號壹圓五拾錢

編輯發行兼印刷者　東京市芝區伊皿子町四拾番地　平田貫一郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番地　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町一ノ一　改造社

電話芝（長）一六三八　芝二八五四　芝四三〇三
振替東京八四〇二